

波志江中野面遺跡(2)

— 縄 文 時 代 編 —

北関東自動車道（高崎～伊勢崎）地域
埋蔵文化財発掘調査報告書 第14集

2 0 0 2

日 本 道 路 公 団
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第296集

波志江中野面遺跡(2)

— 縄 文 時 代 編 —

北関東自動車道（高崎～伊勢崎）地域
埋蔵文化財発掘調査報告書 第14集

2 0 0 2

日 本 道 路 公 団
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



波志江中野面遺跡（調査終了時）



波志江中野面遺跡出土 縄文土器

序

北関東自動車道は、本県高崎市において関越自動車道から分岐し、茨城県那珂湊にいたる延長約150キロメートルの高速自動車国道であります。その間、群馬・栃木・茨城各県の主要都市および東北自動車道・常磐自動車道を結び、地域社会の発展に大きな役割を果たすものと期待されております。

この北関東自動車道の高崎、伊勢崎間約15キロメートルの建設に先立って、平成7年6月から36の遺跡で発掘調査が行われましたが、当事業団ではそのうち、31の遺跡の発掘調査を担当しました。また、それらの遺跡の整理事業は平成10年度から実施しており、本書『波志江中野面遺跡(2)―縄文時代編―』は、その発掘調査報告書第14集として刊行するものです。

本遺跡は、伊勢崎市波志江町内に所在し、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世にわたる各時代の遺構が発見された遺跡です。本書は、その中の縄文時代の遺構・遺物を「縄文時代編」としてまとめたものです。

この中で注目されるのは、縄文時代中期後半の住居跡が多くの遺物とともに検出されたことです。今回調査された遺構と遺物は、群馬県平野部の縄文時代を考える上で貴重な資料となっています。

本書は、考古学研究者はもちろん、郷土の歴史に関心をお持ちの県民の皆様の研究にも大いに役立つものと確信しております。

最後になりますが、日本道路公団東京建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、伊勢崎市教育委員会、地元関係者の皆様には、発掘調査から本報告書刊行まで終始ご協力を賜り、心から感謝の意を表すとともに、発掘調査に携わった担当者、作業員の方々の労をねぎらい序といたします。

平成14年3月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小野 宇三郎

例 言

1. 本書は、北関東自動車道建設に伴い、事前調査された波志江中野面遺跡^{はしえなかのめん}（KT-190）の発掘調査報告書である。本書における報告は、波志江中野面遺跡（伊勢崎市の愛宕、中野面遺跡を含む）から検出された遺構・遺物を対象とする。波志江中野面遺跡は縄文時代から近世までの複合遺跡である。報告書は全2分冊で構成した。昨年度、古墳時代から近世までの遺構・遺物については『波志江中野面遺跡(1)―古墳時代以降編一』として刊行した。本書は縄文時代の遺構・遺物を報告する。

2. 本遺跡は、群馬県伊勢崎市波志江町地内に所在する。地番は下記の通りである。

伊勢崎市波志江町263-1 263-2 264-1 264-3 265 272 298 299 300 301 303 305
306-1 455-2 468-2 470-1 470-4 473-1 473-3 473-5 474 477-1
477-2 478-2 479-1 479-2 480 488 498-1 498-2 498-3 499-1
499-2 500 501 507 509-1 509-2 509-3 510-1 510-2 511-1
511-2 513-1 513-2 515 517-1 517-2 517-3 517-4

3. 波志江中野面遺跡は、伊勢崎市教育委員会が命名した遺跡名である。本書もこの遺跡名をそのまま使用する。

4. 事業主体 日本道路公団・伊勢崎市土木部

5. 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・伊勢崎市教育委員会

6. 調査期間 平成9年度調査 平成9年7月4日から平成10年3月31日
平成10年度調査 平成10年4月1日から平成11年3月31日
平成11年度調査 平成11年8月17日から平成11年9月21日

7. 調査組織

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

事務担当 菅野 清 赤山容造 原田恒弘 渡辺 健 神保侑史 小淵 淳 坂本敏夫 佐藤明人
真下高幸 笠原秀樹 井上 剛 小山建夫 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏 岡嶋伸昌
宮崎忠司 大澤友治 吉田恵子 並木綾子 今井もと子 内山佳子 若田 誠 佐藤美佐子
本間久美子 北原かおり 安藤友美 狩野真子 羽鳥京子 星野美智子 本地友美
松下次男 浅見宜記 吉田 茂

調査担当 平成9年度調査 佐藤明人 中束耕志 中沢 悟 角田芳昭
平成10年度調査 中沢 悟 角田芳昭 高井佳弘 小室綾子 前田和昭

伊勢崎市教育委員会

事務担当 田島國明 細谷清三 中澤貞治 村田喜久夫 須永泰一 矢島克彦

調査担当 平成11年度調査 早川隆弘 高木善行

8. 整理主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

9. 整理期間 平成13年4月1日から平成14年3月31日

10. 整理組織

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

事務担当 小野宇三郎 赤山容造 吉田 豊 住谷 進 能登 健 大島信夫 西田健彦

笠原秀樹 小山建夫 須田朋子 吉田有光 森下弘美 片岡徳雄 吉田恵子
今井もと子 内山佳子 若田 誠 佐藤美佐子 本間久美子 北原かおり 狩野真子
松下次男 吉田 茂 蘓原正義

整理担当 平成13年度 角田芳昭

11. 報告書作成関係者

編 集 角田芳昭

本文執筆 第1章(1) 佐藤明人、前記以外は角田芳昭

遺構写真撮影 各発掘担当者

遺物写真撮影 佐藤元彦

保存処理 関 邦一 土橋まり子 小材浩一 高橋初美

整理作業 長沼久美子 安藤三枝子 牧野裕美 市田武子 狩野なつ子 小林町子 鈴木春美

12. 石材鑑定は、群馬県地質研究会の飯島静男氏にお願いした。

13. 本遺跡の出土遺物及び図面、写真等の資料は群馬県埋蔵文化財調査センターと伊勢崎市教育委員会で保管している。

14. 発掘調査及び本書の作成にあたり、以下の方々にご指導、ご助言を戴いた。記して感謝の意を表したい。

(順不同・敬称略)

伊勢崎市教育委員会 三郷文化財史蹟研究会 (川村傳一郎 他) 鈴木徳雄 寺崎裕助 綿田弘美
戸田哲也 渋谷昌彦 田中耕作 山下歳信 佐藤雅一 木下哲夫

凡 例

1. 遺構図に使用した方位は、国家座標の北を表している。座標系は国家座標第IX系である。
2. 遺構平面図に付した数字は、標高を表している。
3. 遺構の位置を示すグリッドの表記は、その遺構の南東の位置にあるグリッド名を示している。ただし、その遺構が面積的に多く掛かるグリッド名を使用している場合もある。
4. 遺構図については、下記の縮尺で掲載したが、一部縮尺の異なるものがあるので各挿図中にスケールを貼付してあるので参照されたい。

縦穴住居跡 1 : 60 住居跡の炉 1 : 30 土坑 1 : 40 埋甕 1 : 20 土器群 (住居跡相当 1 : 60、土坑相当 1 : 40)

5. 遺物図の縮尺は下記の通りである。

土器 1/2・1/3・1/4 土器展開図 1/8・1/10 土器の拓影図 1/3・1/4

耳飾り、土製品 1/2

石鏃 4/5 石錐、スクレイパー 1/2 打製石斧、磨製石斧、石核 1/3

敲石、凹石、磨石 1/4 多孔石、台石、石皿、石棒 1/6 垂飾品 1/2

縮尺を各挿図中に明記してあるものもある。

6. 遺物図中に使用したスクリーントーン及び表現は、下記のとおりである。

土器展開図の縄文施文部

打製石斧については次のように表現した

石器の磨面

節理面

摩滅範囲



7. 土器・石器については、紙面等の都合により代表的なものを掲載した。また、本文中に掲載した遺物は、必ずしも写真図版に掲載されてはいない。特に遺構外遺物については、その一部を代表させている。
8. 本書で使用した地形図は下記のとおりである。

国土地理院 1 : 25,000 「大胡」

1 : 50,000 「高崎」「前橋」

9. 住居跡の床面積については、デジタルプランイメーターで3回計測した平均値を採用した。

目 次

口 絵

序

例 言

凡 例

本文目次・挿図目次・写真図版目次

第1章 調査の経過と方法	1
1. 調査の経緯	1
2. 調査の方法	2
3. 調査の経過	4
4. 基本土層	5
第2章 遺跡の地理的環境及び歴史的環境	6
1. 地理的環境	6
2. 歴史的環境	7
第3章 検出された遺構と遺物	9
1. 縄文時代の遺構と遺物	9
(1) 竪穴住居跡	10
(2) 土 坑	54
(3) 埋 甕	63
(4) 土 器 群	80
(5) 遺構外出土遺物	103
土 器	103
石 器	150
2. その他	162
第4章 ま と め	163

報告書抄録

写真図版

挿 図 目 次

第 1 図	位置図	1	第 60 図	A 区 8 号埋甕・出土遺物	73
第 2 図	調査区設定図	3	第 61 図	A 区 9 号埋甕・出土遺物	74
第 3 図	基本土層模式図	5	第 62 図	A 区 10 号埋甕	74
第 4 図	伊勢崎の地形分布図（『伊勢崎市史』自然編）	6	第 63 図	A 区 10 号埋甕出土遺物	75
第 5 図	周辺遺跡位置図及び一覧表	8	第 64 図	C 区 2 号埋甕	76
第 6 図	A 区 13 号住居跡・掘り方	12	第 65 図	C 区 2 号埋甕遺物出土状況	77
第 7 図	A 区 13 号住居跡出土遺物（1）	13	第 66 図	C 区 2 号埋甕出土遺物（1）	78
第 8 図	A 区 13 号住居跡出土遺物（2）	14	第 67 図	C 区 2 号埋甕出土遺物（2）	79
第 9 図	A 区 13 号住居跡出土遺物（3）	15	第 68 図	C 区 2 号埋甕出土遺物（3）	80
第 10 図	A 区 13 号住居跡出土遺物（4）	16	第 69 図	A 区 2 号土器群・出土遺物（1）	81
第 11 図	A 区 15 号住居跡	17	第 70 図	A 区 2 号土器群出土遺物（2）	82
第 12 図	A 区 15 号住居炉跡・出土遺物	18	第 71 図	A 区 3 号土器群・出土遺物（1）	84
第 13 図	A 区 19 号住居跡・出土遺物（1）	21	第 72 図	A 区 3 号土器群出土遺物（2）	85
第 14 図	A 区 19 号住居跡出土遺物（2）	22	第 73 図	A 区 3 号土器群出土遺物（3）	86
第 15 図	A 区 19 号住居跡出土遺物（3）	23	第 74 図	A 区 4 号土器群・出土遺物	87
第 16 図	A 区 19 号住居跡出土遺物（4）	24	第 75 図	A 区 5 号土器群・出土遺物	88
第 17 図	A 区 19 号住居跡出土遺物（5）	25	第 76 図	A 区 6 号土器群・出土遺物（1）	90
第 18 図	A 区 19 号住居跡出土遺物（6）	26	第 77 図	A 区 6 号土器群出土遺物（2）	91
第 19 図	A 区 20 号住居跡・出土遺物（1）	28	第 78 図	A 区 8 号土器群・出土遺物（1）	94
第 20 図	A 区 20 号住居跡出土遺物（2）	29	第 79 図	A 区 8 号土器群出土遺物（2）	95
第 21 図	A 区 20 号住居跡出土遺物（3）	30	第 80 図	A 区 8 号土器群出土遺物（3）	96
第 22 図	A 区 28 号住居跡・掘り方	32	第 81 図	A 区 8 号土器群出土遺物（4）	97
第 23 図	A 区 28 号住居跡出土遺物（1）	33	第 82 図	A 区 8 号土器群出土遺物（5）	98
第 24 図	A 区 28 号住居跡出土遺物（2）	34	第 83 図	A 区 9 号土器群・出土遺物（1）	100
第 25 図	A 区 28 号住居跡出土遺物（3）	35	第 84 図	A 区 9 号土器群出土遺物（2）	101
第 26 図	A 区 29 号住居跡・出土遺物（1）	36	第 85 図	A 区 9 号土器群出土遺物（3）	102
第 27 図	A 区 29 号住居跡出土遺物（2）	37	第 86 図	遺構外出土土器（1）	105
第 28 図	A 区 47 号住居跡・出土遺物	38	第 87 図	遺構外出土土器（2）	106
第 29 図	A 区 67 号住居跡・掘り方	40	第 88 図	遺構外出土土器（3）	107
第 30 図	A 区 67 号住居跡出土遺物（1）	41	第 89 図	遺構外出土土器（4）	109
第 31 図	A 区 67 号住居跡出土遺物（2）	42	第 90 図	遺構外出土土器（5）	110
第 32 図	A 区 70 号住居跡・炉・出土遺物（1）	44	第 91 図	遺構外出土土器（6）	111
第 33 図	A 区 70 号住居跡出土遺物（2）	45	第 92 図	遺構外出土土器（7）	112
第 34 図	A 区 71 号住居跡・炉・出土遺物（1）	48	第 93 図	遺構外出土土器（8）	114
第 35 図	A 区 71 号住居跡出土遺物（2）	49	第 94 図	遺構外出土土器（9）	115
第 36 図	A 区 71 号住居跡出土遺物（3）	50	第 95 図	遺構外出土土器（10）	116
第 37 図	A 区 71 号住居跡出土遺物（4）	51	第 96 図	遺構外出土土器（11）	117
第 38 図	A 区 71 号住居跡出土遺物（5）	52	第 97 図	遺構外出土土器（12）	118
第 39 図	A 区 71 号住居跡出土遺物（6）	53	第 98 図	遺構外出土土器（13）	119
第 40 図	A 区 3 号土坑・出土遺物	54	第 99 図	遺構外出土土器（14）	121
第 41 図	A 区 79 号土坑・出土遺物	55	第 100 図	遺構外出土土器（15）	122
第 42 図	A 区 80 号土坑・遺物出土状況	56	第 101 図	遺構外出土土器（16）	124
第 43 図	A 区 80 号土坑出土遺物（1）	57	第 102 図	遺構外出土土器（17）	125
第 44 図	A 区 80 号土坑出土遺物（2）	58	第 103 図	遺構外出土土器（18）	127
第 45 図	A 区 83 号土坑・出土遺物	59	第 104 図	遺構外出土土器（19）	129
第 46 図	A 区 84 号土坑・出土遺物	59	第 105 図	遺構外出土土器（20）	130
第 47 図	A 区 86 号土坑・出土遺物（1）	60	第 106 図	遺構外出土土器（21）	131
第 48 図	A 区 86 号土坑出土遺物（2）	61	第 107 図	遺構外出土土器（22）	134
第 49 図	C 区 17 号土坑・出土遺物	61	第 108 図	遺構外出土土器（23）	135
第 50 図	D 区 5 号土坑・出土遺物	62	第 109 図	遺構外出土土器（24）	136
第 51 図	A 区 1 号埋甕・出土遺物	63	第 110 図	遺構外出土土器（25）	137
第 52 図	A 区 2 号埋甕	64	第 111 図	遺構外出土土器（26）	139
第 53 図	A 区 2 号埋甕出土遺物	65	第 112 図	遺構外出土土器（27）	141
第 54 図	A 区 3 号埋甕	67	第 113 図	遺構外出土土器（28）	142
第 55 図	A 区 3 号埋甕出土遺物	68	第 114 図	遺構外出土土器（29）	143
第 56 図	A 区 4 号埋甕・出土遺物	69	第 115 図	遺構外出土土器（30）	144
第 57 図	A 区 5 号埋甕・出土遺物	70	第 116 図	遺構外出土土器（31）	145
第 58 図	A 区 6 号埋甕・出土遺物	71	第 117 図	遺構外出土土器（32）	147
第 59 図	A 区 7 号埋甕・出土遺物	72	第 118 図	遺構外出土土器（33）	149

第119図	遺構外出土石器 (1)	151
第120図	遺構外出土石器 (2)	152
第121図	遺構外出土石器 (3)	153
第122図	遺構外出土石器 (4)	154
第123図	遺構外出土石器 (5)	155
第124図	遺構外出土石器 (6)	156
第125図	遺構外出土石器 (7)	157

第126図	遺構外出土石器 (8)	158
第127図	遺構外出土石器 (9)	159
第128図	遺構外出土石器 (10)	160
第129図	遺構外出土石器 (弥生)	162
第130図	つり手土器	165
第131図	波志江中野面遺跡全体図 (縄文時代)	167

写真図版目次

P L 1	A区西側全景 A区北側全景 (西から)	A区84号土坑全景 (南東から) A区84号土坑セクション (南東から)
P L 2	A区13号住居跡全景 (南から) A区13号住居跡遺物出土状況 (北東から) A区13号住居跡遺物出土状況 (北西から) A区13号住居跡遺物出土状況 (東から) A区13号住居跡掘り方全景 (南西から)	P L 11 A区86号土坑全景 (西から) A区86号土坑セクション (北から) C区17号土坑全景 (南から) C区17号土坑遺物出土状況 (南から) D区5号土坑全景 (南東から) D区5号土坑セクション (南から) A区1号埋甕 (南から) A区1号埋甕セクション (東から)
P L 3	A区15号住居跡全景 (南東から) A区15号住居跡セクション (南から) A区15号住居炉跡 (南から) A区15号住居炉跡 (西から) A区15号住居跡掘り方全景 (南から)	P L 12 A区2号埋甕 (北から) A区2号埋甕 (西から) A区2号埋甕セクション (西から) A区3号埋甕 (北西から) A区3号埋甕セクション (北西から)
P L 4	A区19号住居跡全景 (南から) A区19号住居炉跡全景 (北東から) A区19号住居炉跡? 全景 (北東から) A区19号住居炉跡セクション (南西から) A区19号住居跡土坑全景 (南東から)	P L 13 A区4号埋甕 (北から) A区4号埋甕 (南から) A区4号埋甕 (南東から) A区4号埋甕 (東から) A区5号埋甕 (西から) A区5号埋甕掘り方 (西から) A区6号埋甕 (南から) A区6号埋甕 (南東から)
P L 5	A区20号住居跡遺物出土状況 (北西から) A区20号住居跡遺物出土状況 (南西から) A区20号住居炉跡 (南西から) A区20号住居跡柱穴・ピット (南西から) A区28号住居跡全景 (南から) A区28号住居跡遺物出土状況 (南西から) A区28号住居跡床下土坑全景 (南から) A区28号住居跡掘り方全景 (南から)	P L 14 A区7号埋甕 (南から) A区7号埋甕 (南から) A区8号埋甕 (南から) A区8号埋甕セクション (南から) A区9号埋甕掘り方 (南から) A区10号埋甕 (南西から) A区10号埋甕 (東から) A区10号埋甕周辺 (南西から)
P L 6	A区29号住居跡全景 (南から) A区47号住居跡全景 (南から) A区47号住居跡遺物出土状況 (北から) A区47号住居跡東西セクション (南から) A区47号住居跡南北セクション (西から)	P L 15 C区2号埋甕 (西から) C区2号埋甕 (西から) C区2号埋甕 (北から) C区2号埋甕周辺 (南から) C区2号埋甕セクション
P L 7	A区67号住居跡全景 (北東から) A区67号住居跡遺物出土状況 (東から) A区67号住居跡掘り方全景 (南東から) A区70号住居跡全景 (北から) A区70号住居炉跡全景 (北から)	P L 16 A区2号土器群全景 (南西から) A区3号土器群全景 (西から)
P L 8	A区71号住居跡全景 (北東から) A区71号住居跡東西セクション (南から) A区71号住居跡南北セクション (西から) A区71号住居炉跡 (南から) A区71号住居炉跡 (上から)	P L 17 A区4号土器群全景 (南から) A区5号土器群全景 (北西から) A区6号土器群全景 (南から) A区6号土器群遺物出土状況 (北から) A区8号土器群遺物出土状況 (東から) A区8号土器群遺物出土状況近景 (東から) A区9号土器群全景 (西から) C区吊手土器出土状況 (西から)
P L 9	A区71号住居跡遺物出土状況 (南西から) A区71号住居跡埋甕 (西から) A区71号住居跡埋甕 (上から) A区71号住居跡埋甕セクション (南から) A区71号住居跡掘り方全景 (南東から)	P L 18 A区13号住居跡出土土器 A区19号住居跡出土土器
P L 10	A区3号土坑全景 (北西から) A区79号土坑全景 (西から) A区80号土坑全景 (南から) A区80号土坑セクション (南から) A区80号土坑遺物出土状況 (東から) A区83号土坑全景 (南から)	P L 19 A区19号住居跡出土土器 A区20号住居跡出土土器 A区28号住居跡出土土器

- P L 20 A区71号住居跡出土土器
 P L 21 A区79·80·83·C区17号土坑出土土器
 P L 22 A区1·2·3号埋甕出土土器
 P L 23 A区4·5·6·7·8·9·10号埋甕出土土器
 P L 24 C区2号埋甕出土土器
 A区2·4号土器群出土土器
 P L 25 A区5·6·8·9号土器群出土土器
 P L 26 遺構外出土土器
 P L 27 遺構外出土土器
 A区13号住居跡出土土器
 P L 28 A区13·15号住居跡出土土器
 A区19号住居跡出土土器 (1)
 P L 29 A区19号住居跡出土土器 (2)
 A区19号住居跡出土土器 (3)
 P L 30 A区20号住居跡出土土器
 A区28号住居跡出土土器
 P L 31 A区29号住居跡出土土器
 A区47号住居跡出土土器
 A区67号住居跡出土土器 (1)
 P L 32 A区67号住居跡出土土器 (2)
 A区70号住居跡出土土器
 P L 33 A区71号住居跡出土土器 (1)
 A区71号住居跡出土土器 (2)
 P L 34 A区71号住居跡出土土器 (3)
 A区3·79·84·86·D区5号土坑出土土器
 P L 35 A区80号土坑出土土器
 A区1·2·3·7·8·9·10·C区2号埋甕出土土器
 P L 36 A区2号土器群出土土器 (1)
 A区2号土器群出土土器 (2)
 P L 37 A区3号土器群出土土器 (1)
 A区3号土器群出土土器 (2)
 P L 38 A区3号土器群出土土器 (3)
 A区4·5号土器群出土土器
 P L 39 A区6号土器群出土土器 (1)
 A区6号土器群出土土器 (2)
 P L 40 A区8号土器群出土土器 (1)
 A区8号土器群出土土器 (2)
 P L 41 A区8号土器群出土土器 (3)
 A区8号土器群出土土器 (4)
 P L 42 A区8号土器群出土土器 (5)
 A区9号土器群出土土器 (1)
- P L 43 A区9号土器群出土土器 (2)
 遺構外出土土器 (第1·2群)
 P L 44 遺構外出土土器 (第3群)
 遺構外出土土器 (第3群)
 P L 45 遺構外出土土器 (第3群)
 遺構外出土土器 (第3群)
 P L 46 遺構外出土土器 (第3群)
 遺構外出土土器 (第3群)
 P L 47 遺構外出土土器 (第3群)
 遺構外出土土器 (第3群)
 P L 48 遺構外出土土器 (第3群)
 遺構外出土土器 (第3群)
 P L 49 遺構外出土土器 (第3群)
 遺構外出土土器 (第3群)
 P L 50 遺構外出土土器 (第3群)
 遺構外出土土器 (第3群)
 P L 51 遺構外出土土器 (第3群)
 遺構外出土土器 (第3群)
 P L 52 遺構外出土土器 (第3群)
 遺構外出土土器 (第3群)
 P L 53 遺構外出土土器 (第3群)
 遺構外出土土器 (第3群)
 P L 54 遺構外出土土器 (第3群)
 遺構外出土土器 (第3群)
 P L 55 遺構外出土土器 (第4群)
 遺構外出土土器 (第4群)
 P L 56 遺構外出土土器 (第4群)
 遺構外出土土器 (第4群)
 P L 57 遺構外出土土器 (第4群)
 遺構外出土土器 (第5群)
 P L 58 遺構外出土土器 (第6群)
 遺構外出土土器 (第6~9群)
 P L 59 A区13·15·19·20·28·29·70号住居跡出土土器
 P L 60 A区71号住居跡、A区3·86号土坑、C区2号埋甕、
 A区3·4·8·9号土器群出土土器
 P L 61 遺構外出土土器 (1)
 P L 62 遺構外出土土器 (2)
 P L 63 遺構外出土土器 (3)
 P L 64 遺構外出土土器 (4)
 P L 65 遺構外出土土器 (5)

第1章 調査の経過と方法

1. 調査の経緯

北関東自動車道（高崎～伊勢崎）地域埋蔵文化財発掘調査事業は、高崎市上滝町から伊勢崎市三和町の間、延長14.9kmの路線内に所在する遺跡を対象とする。平成7年度の全体計画では、遺跡数は35遺跡、総面積687,429㎡であった。

事業着手に先立ち、県教育委員会文化スポーツ部文化財保護課、県土木部道路建設課高速道路対策室、原因者である日本道路公団東京第二建設局により協議が行われ、その結果、本線部分の発掘調査については財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施することに決定した。

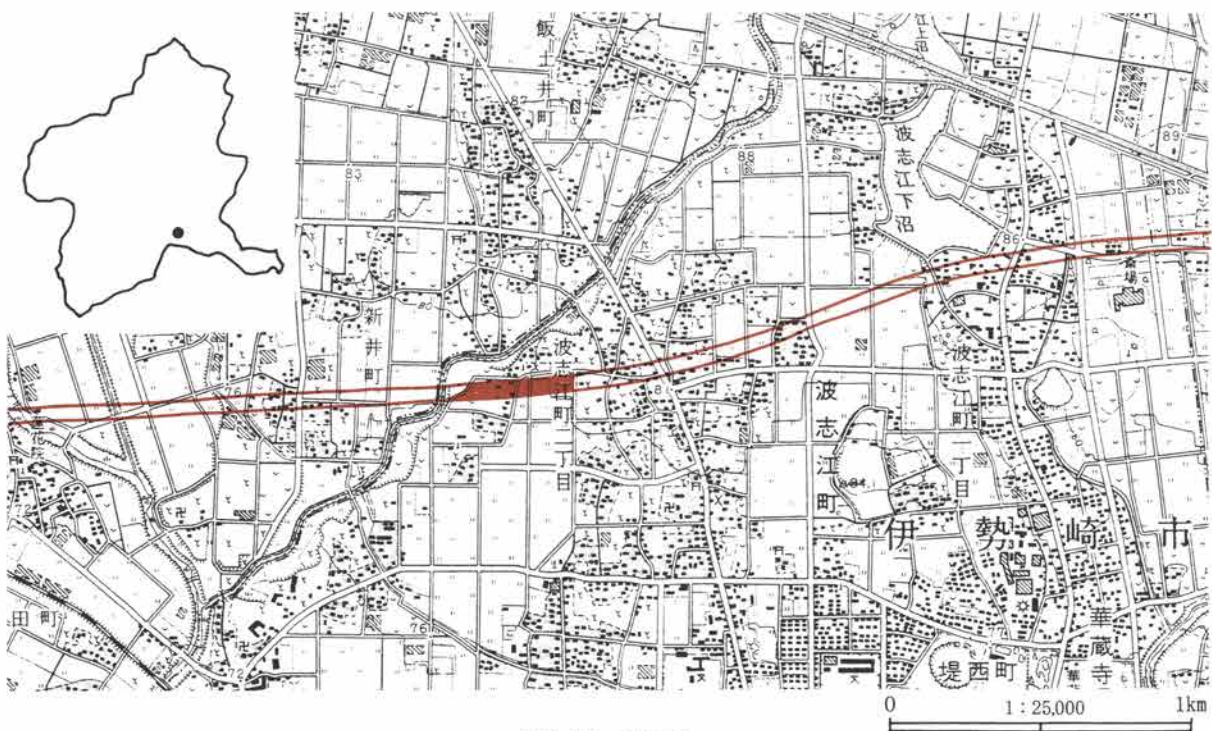
平成7年6月、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団により本格的発掘調査が高崎市上滝町において着手され、以後、用地取得、工事計画に基づく道路公団と群馬県教育委員会との協議に従って進められた。事業区間内全体の進行は、高崎市所在遺跡を皮切りに、平成8年1月に前橋市所在遺跡、平成8年

3月に伊勢崎市所在遺跡と続くが、波志江中野面遺跡の発掘着手は平成8年7月であった。

発掘調査に先立ち、群馬県教育委員会文化財保護課が平成8年7月31日から8月5日、及び平成8年11月11日に試掘調査を実施した。試掘は伊勢崎市と前橋市の境界部を流下する神沢川東岸から東へ約500mの間のうち用地買収の済んだ農地部分についてのトレンチ調査であった。

試掘の結果、神沢川から約90m区間は、神沢川の旧河床域に産業廃棄物の埋め立てが及んでおり遺跡の可能性はないものと判断された。他方、台地部は縄文時代から平安時代の遺構の存在が確認され、また、台地の東の低地では古代の水田跡が想定された。

平成9年度になって工事計画との調整上、調査実施が急を要してきたため、平成9年7月4日より集落跡が想定される遺跡西半部から、本格的発掘調査を開始した。



第1図 位置図

2. 調査の方法

国家座標IX系のX=38,800、Y=-58,400を基準にし、100m四方をもって、本遺跡を8つの大グリッドに分けた(第2図参照)。この大グリッド名を便宜上、南東から1~8区とした。当初、東端の1区、5区より東側の発掘区は遺跡でないとみられていたが、平成10年度の確認調査で、遺構が検出されたため、1区、5区の大グリッドの東側にそれぞれ9区、10区を追加した。これらの1区~10区の大グリッド内をX軸方向(西方向)にA~Tのアルファベットを使用し、Y軸方向(北方向)に0~19までの数字を使用して、それぞれ5mごとに細分し、グリッドの最小単位を5m四方とした。グリッドの呼称は、南東隅を代表させ、頭に大グリッド名を付け、次にX軸方向のアルファベットを、そしてY軸方向の数字で表現することにした。ちなみに、基準点を表すと1-A-0となる。なお、グリッド及び水準点の設定は、測量会社に委託した。

また、発掘調査全体の進捗状況を把握するために、本遺跡内を南北に通る市道により、便宜的に西端からA、B、C区の3調査区に分けて、調査を行った。(ただし、A区とB区の境界とした市道については、平成10年度に発掘調査を実施することになり、A区とB区の境界は、遺構の所属を見極めて行うことにした。)

さらに、平成11年度に発掘調査を実施した市道の北側でA区とB区に挟まれた区域をD区とした。本調査における遺構名称は各調査区ごとに、また種別ごとに通し番号を付した。

本遺跡の表土除去には、掘削機(バックホー)を使用し、遺構の確認作業及び覆土除去は発掘作業員

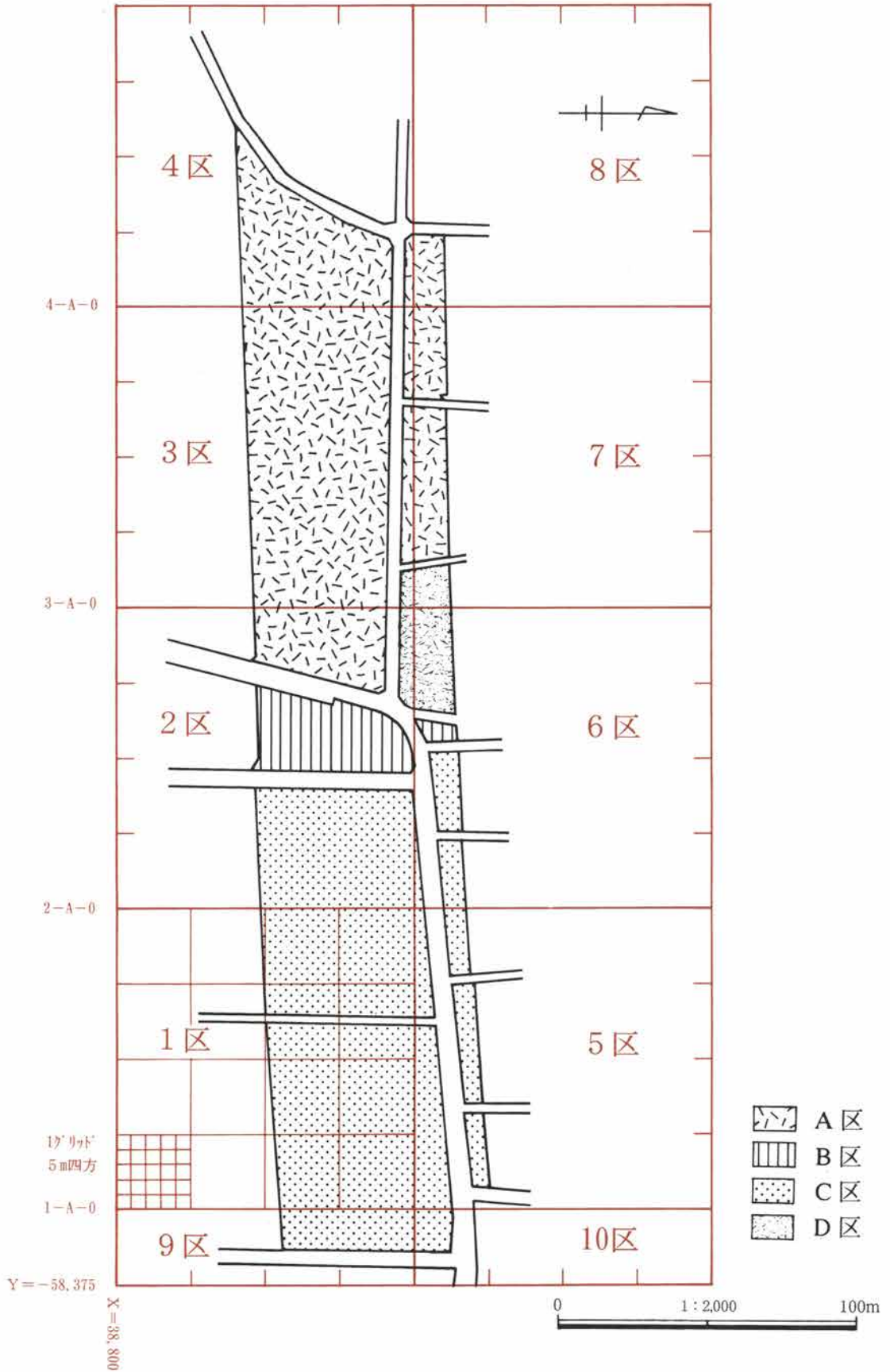
の手で行った。土層の見極めが難しかったが、竪穴住居跡、土坑、埋甕等を検出した。

個別の遺構の調査では、覆土の土層観察用ベルトを任意に設定して、移植ゴテほかにより、掘り下げ、遺構断面測量(縮尺1/20)及び断面の写真撮影を行った。遺構平面測量は、平板を使用し、調査担当者及び発掘作業員が主にあつた。必要に応じて1/10、1/20、1/40、1/100の縮尺を選択して行った。ただし、全体図のような広範囲に及ぶ測量は、測量会社に委託した。作成された遺構平面図には、遺跡名・遺構名またはグリッド名・図種・縮尺・レベル高・ベンチマークの高さ・標高・方位・実測者名・作成年月日を記入し、一枚一枚に通し番号をつけて、遺構ごとに図面袋に一括してまとめておいた。

記録写真の撮影には、基本的に6×7、35mmの白黒フィルムとリバーサルフィルムを使用した。全体写真の撮影(個々の遺構でも必要に応じて)は、高所作業車、ラジコンヘリを用いて行った。撮影したフィルムは現像処理し、白黒フィルムはベタ焼きをした。ベタ焼きをしたものをネガ検索用台紙に遺構ごとに貼り付け、撮影対象・撮影方向・撮影日・フィルム番号を記録した。リバーサルフィルムはコマごとに遺跡名・撮影対象・撮影方向・撮影日を記入し、遺構ごとに整理した。

遺物の注記は遺跡略号(KT-190)・調査区・遺構名またはグリッド名・遺物番号を書き込んだ。

調査を終えて、埋め戻しを行う前に、掘削機あるいは人力により、試掘坑を掘り、縄文時代早期や前期の遺構や遺物について掘り残しがないか確認した。



第2図 調査区設定図

3. 調査の経過

平成9年6月下旬より、発掘調査の準備を進め、7月4日から調査を開始した。遺跡の西側より東に向かってA区、B区、C区の順で調査を進める事にした。A区の調査では地表面のわずか20～30cm下から数多くの縄文土器や土師器が出土した。しかし土層の見極めが難しく、遺構の検出に苦労した。その結果、縄文～奈良・平安時代の住居跡、古墳時代の方形周溝墓等の遺構が検出された。一通りの調査を終えた後、縄文時代早期の遺構や遺物の見落としがないかどうか、再度掘削を行った。このようにして、平成10年2月にはA区西側の調査を終了した。平成10年度に入り、北関東自動車道建設工事との兼ね合いからC区の東側の調査を急いで実施せざるを得なくなった。4月下旬より担当者、作業員を増員し、A区東側、B区の調査と併行してC区東側の調査を進めた。掘削する箇所が一気に増え、遺構の確認作業に追われたが、調査は順調に進み、C区東側を平成10年7月に、9月にはB区の調査を終えた。この間、C区東側から縄文時代の埋壘、奈良・平安時代の住居跡、As-B下水田跡、近世の井戸等が検出され、B区から古墳時代の方形周溝墓、奈良・平安時代の竪穴住居跡等が検出された。A区北側の調査事務所前の調査を平成11年3月に終え、住宅が残っていたため調査ができなかったD区を残し、平成11年3月31日に本遺跡の調査を終了した。そして、平成11年8月17日から9月21日まで、先年度に実施できなかったD区の調査を行った。波志江中野面遺跡の発掘調査は調査期間1年10ヶ月、調査対象表面積20,954㎡(延べ面積31,757㎡)に及んだ。また、調査の結果、縄文～近世に至るまでの数多くの遺構と遺物を検出することができた。なお、古墳時代以降の遺構と遺物については、平成13年3月に刊行された『波志江中野面遺跡(1)―古墳時代以降編―』を参照されたい。

以下の調査日誌抄録は、発掘調査の経過に関わる事柄及び縄文時代の遺構の調査に関する事のみ抜粋

して掲載した。

調査日誌抄録

平成9年度

- 1997年 7. 8 A区西側の表土除去、遺構確認作業。
8. 21 A区13号竪穴住居跡調査。
9. 12 A区15、19、20号竪穴住居跡調査。
10. 20 A区4号埋壘調査。
10. 31 A区2号埋壘調査。
12. 7 遺跡見学会(見学者680名)。
1998年 1. 22 A区28、29号竪穴住居跡調査。
1. 23 A区1号埋壘調査。
1. 26 A区東側の表土除去、遺構確認作業。
2. 2 A区西側で縄文時代中期以前の遺構の試掘調査。
2. 9 A区西側の調査終了、埋め戻し。
2. 23 A区8号埋壘調査。
3. 5 A区6号埋壘調査。

平成10年度

- 1998年 4. 8 B区の表土除去。
4. 10 B区の遺構確認作業。
4. 20 C区東側の表土除去、遺構確認作業。
5. 25 A区47号竪穴住居跡調査。
6. 4 C区17号土坑、C区2号埋壘調査。
6. 17 C区東側で縄文時代中期以前の遺構の試掘調査。
6. 25 C区2号埋壘を土層ごと取り上げ作業。
7. 1 C区東側の調査終了、埋め戻し。
7. 8 C区東側を引き渡し。
7. 29 群馬県立太田女子高等学校生4名発掘体験学習。
8. 10 // 9名発掘体験学習。
11 // 9名発掘体験学習。
8. 12 C区西側の表土除去、遺構確認作業。
9. 4 A区東側の表土除去、遺構確認作業。
9. 25 B区の調査終了、埋め戻し。
10. 6 伊勢崎市立第四中学校生9名職場体験学習。
10. 12 A区とB区の境の市道部分の発掘調査。
10. 19 A区北側の表土除去、遺構確認作業。
10. 27 C区北側の表土除去、遺構確認作業。
11. 6 A区北側の調査事務所前の表土除去。
11. 19 A区北側の調査終了、埋め戻し。
11. 23 遺跡見学会(見学者440名)。
12. 3 B区北側の表土除去、遺構確認作業。
12. 16 A区67号竪穴住居跡調査。

1999年

1. 11 A区東側、B区引き渡し。A区6号土器群調査。
1. 19 A区3号土器群調査。
1. 20 C区西側を引き渡し。A区4号土器群調査。
1. 28 A区8号土器群調査。
2. 5 A区9号土器群調査。
2. 8 A区79号土坑調査。
2. 12 A区80号土坑調査。
2. 15 A区83、84、86号土坑調査。
2. 17 A区70号竪穴住居跡調査。
3. 4 A区71号竪穴住居跡調査。
3. 19 A区北側の調査事務所前の調査終了。
3. 31 D区の調査を残し、本遺跡の大部分の調査終了。

平成11年度

- 1999年 8. 17 D区の表土除去。
8. 25 D区の遺構確認作業。
9. 8 D区5号土坑調査。
9. 20 D区の埋め戻し。
9. 21 D区を引き渡し。波志江中野面遺跡調査終了。

4. 基本土層

詳細は『波志江中野面遺跡(1)―古墳時代編―』に掲載したので略す。第3図は、土層観察、土層柱状図、遺構の調査、自然科学分析等を基に作成した基本土層模式図である。

波志江中野面遺跡の基本土層

(近現代の土層)

- 1-a 褐色土 耕作土。軟質。5mm前後の砂粒が多い。草の根が多い。
1-b 褐色土 やや軟質。5mm前後の砂粒少ない。草の根ほとんどなし。上層よりもやや黒色が強い。この時期の土坑は丸いものが多い。

(中近世の土層)

- 2-a 黄褐色土 粒子密。砂粒ほとんど含まず。ほぼ均一で軟質。多くの土坑と溝がこの土を覆土としている。この時期の土坑は長方形である。
2-b 褐色土 硬質。やや砂質。上層の黄褐色土と下層のAs-Bおよび黒色土が混入したような土。

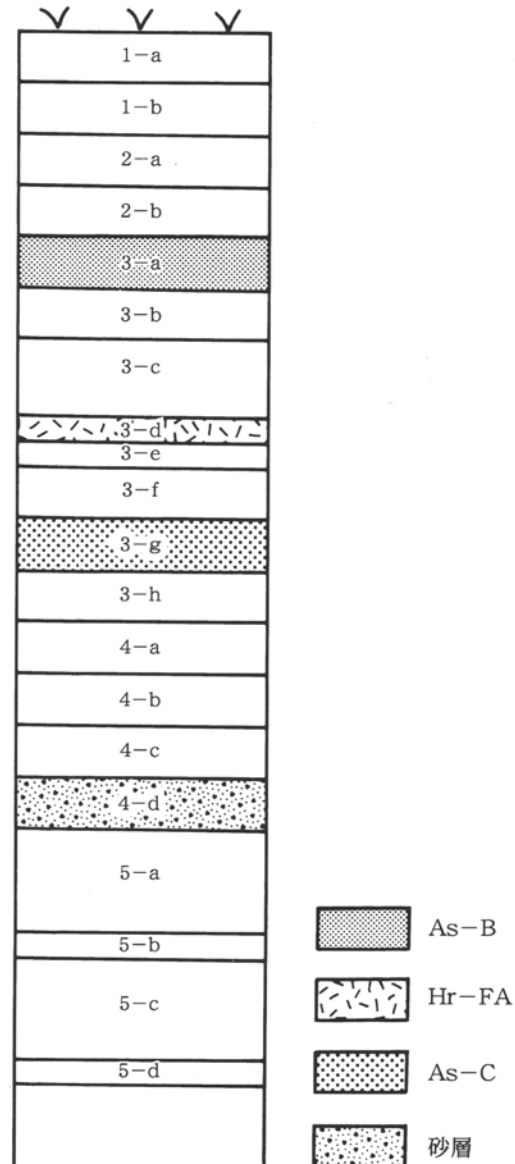
(古代の土層)

- 3-a 褐色土 As-Bを多く含む。As-Bは純層ではなく、流れ込みで2-b下層に位置する。
3-b 黒色土 硬質。やや粘性をもつ。同じ黒色土である3-e層より灰白色軽石粒が小さく、数が多い。平安時代の住居跡の覆土である。
(黒褐色含)
3-c 黒褐色土 硬質。やや粘性をもつ。1mm前後の褐色の砂粒多く含む。調査区西端の低地部分でHr-FAを直接埋めている土である。
3-d 黄褐色土 Hr-FAを多く含む。1cm前後の白色軽石粒を含む灰層。調査区の西端の低地、A区17号住居跡や方形周溝墓の周溝の土層で確認されている。
3-e 黒色土 2~3mmの灰白色軽石粒(As-C)を少量含む。古墳前期の住居跡と方形周溝墓の覆土上に堆積。
3-f 黒褐色土 1~5mm前後のAs-Cを大量に含む硬い層。多くの住居跡と方形周溝墓はこの土層の途中から掘り込む。
(黒色含)
3-g 灰白色土 1~6mmの角張ったAs-Cを主体としている。数軒の住居覆土で4~5cmの層をなして堆積している。
3-h 黒褐色土 5mm前後の小さな石粒を少量含む。数軒の住居跡はこの土層を掘り込んでいる。

(原始の土層)

- 4-a 黄褐色土 やや軟質。1mm以下の黄褐色の砂粒を多く含む。やや粘性あり。ソフトロームに似ている。
4-b 黒褐色土 非常に硬質。2~6mmの砂粒を多く含む。本遺跡の縄文時代の住居跡の覆土に多い。
4-c 明黄褐色土 1~5mmの丸い砂粒を主とした層。2×3、5×8cmの橙色の大きな塊を所々に含む。1cm前後の大きな砂利は部分的で、A区7号住居跡付近に多い。
4-d 灰黄褐色土 砂層。粒子は全て、1mm以下で全体的に均一。上層に橙色の粒子をブロック状に含む。住居の多くはこの面まで掘り込んでいる。

- 5-a 紫黒色土 硬質。粒子密。粘性強い。1mm前後の白色軽石粒を多く含む。A区7号溝と14号住居跡の柱穴等、深く掘り込まれた遺構はこの面まで掘り込んでいる。
5-b 灰黄褐色土 粘質。粒子密。4-d層より褐色が強い。
5-c 灰褐色土 1mm以下の砂粒が多く、全体に均一。
5-d 灰褐色土 粘質。褐色の鉄分と思われるブロックを全体に少し含む。A区23号住居跡の柱穴がこの層まで掘り込んでいる。



第3図 基本土層模式図

第2章 遺跡の地理的環境及び歴史的環境

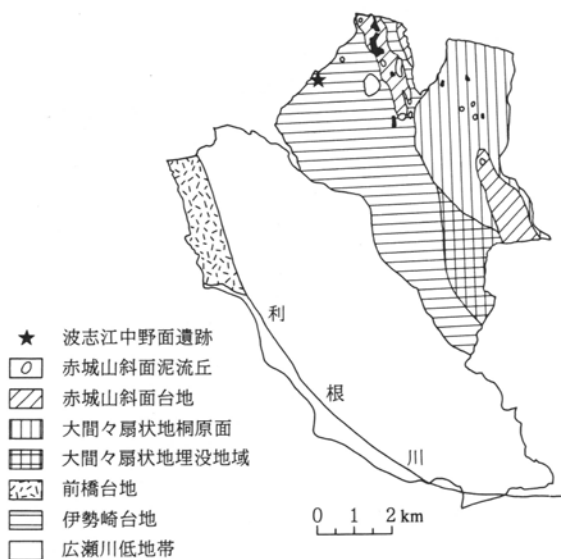
1. 地理的環境

波志江中野面遺跡は、市街地から約3km北西の伊勢崎市波志江町二丁目に所在する。本遺跡の所在する伊勢崎市は、群馬県南端に位置し、東は佐波郡東村・境町と、西は前橋市・佐波郡玉村町、南は利根川を境に埼玉県本庄市、北は前橋市・佐波郡赤堀町と各々接している。

伊勢崎市の地形を大まかにみると、関東平野の北西部にあたり、おおむね平坦地である。伊勢崎市の南西境沿いを利根川が南東方向に流れ、市域の東寄りを粕川、中央部を広瀬川が南東方向に流れている。

さらに、伊勢崎市の地形をその形成時期及び要因から見ると、次の5つの地形に分けることができる。

伊勢崎市を構成する地形の中でその形成時期が最も古いのは市域の北部から東部にかけての地域である。豊城町の権現山や華蔵寺公園の小丘に代表される泥流丘（流れ山）群とその周辺に広がる台地がそれである。この台地は、古い時代の赤城山の裾野を形成していた部分であり、今からおよそ30万年前後に形成された。この地形は赤城山斜面台地と呼ばれ、台地を形成する地層は凝灰質粘土層でできている。



第4図 伊勢崎の地形分布図（『伊勢崎市史』自然編）

市域の東部には、大間々扇状地が広がる。伊勢崎市北東部の三和町書上付近には男井戸、掛矢清水、鯉沼等の湧水池が分布し、池の南方には浅く細長い谷底平野（浸食谷）を形成している。この谷底平野の周辺は縄文時代や古墳時代の主だった遺跡が目立ち、伊勢崎でも最も遺跡の密度の高い地域である。

市域の西部はかつて利根川がこの地域を流れて形成した沖積平野で、広瀬川低地帯と呼ばれている。伊勢崎市の中では最も広大で低平な所である。農業地域として多くの集落を成立させてきた。さらにその西側には浅間火山起源とされる泥流堆積物で形成された前橋台地が広がる。

市域の中央部の赤城山斜面台地を除いた地域に、伊勢崎台地が広がる。この台地は赤城山の斜面から大量の伊勢崎砂層と呼ばれる砂質物質（細角礫質粗砂及び凝灰質泥で形成されている）が短期間に堆積して形成されたものである。土層にローム層が堆積していないことから、洪積世の末期頃から沖積世初頭に堆積した極めて新しい地層と考えられている。本遺跡はこの伊勢崎台地上に所在している。

最後に、本遺跡の立地について記述しておく。本遺跡は伊勢崎台地の北西部の縁辺で、神沢川の左岸に位置する。標高は77m～80mである。遺跡の西側・北側・東端は台地で、調査前は住宅地及び桑畑等であった。これらの区域からは縄文時代、古墳時代の集落跡が検出されている。また、遺跡の中央部及びその東側は低地で、水田耕作されていた。これらの区域からは、As-B 下水田跡、奈良・平安時代の大溝等が検出されている。

参考文献

『伊勢崎市史』自然編 1987
 『伊勢崎市史』通史編1 原始古代中世 1987

2. 歴史的環境

本遺跡(1)の周辺には、周知された遺跡が点在している。まず、それらのうちで旧石器時代から古墳時代までの主な遺跡や古墳を取り上げて紹介する。旧石器時代では、全国で最大規模を誇る直径50mに達する「環状ブロック」の発見された下触牛伏遺跡(4)がある。縄文時代では、後期中葉の配石遺構が見つかり、中期から晩期にかけての土器片や石器、土偶、耳飾り等が出土した八坂遺跡(17)がある。古墳時代では、パレス式土器やS字状口縁台付甕に象徴される東海系の土器が出土している喜多町遺跡(19)がある。また、全長125mの前方後円墳で埋葬施設が長持形石棺と思われるお富士山古墳(18)、古墳時代後期の環濠居館跡が見つかった原之城遺跡(15)がある。

つぎに、周辺にある遺跡で縄文時代の遺跡について、時期ごとに概述する。

縄文時代草創期の遺跡としては、「ハ」の字状の爪形文が縦位に施文された土器が出土した下触牛伏遺跡(4)がある。

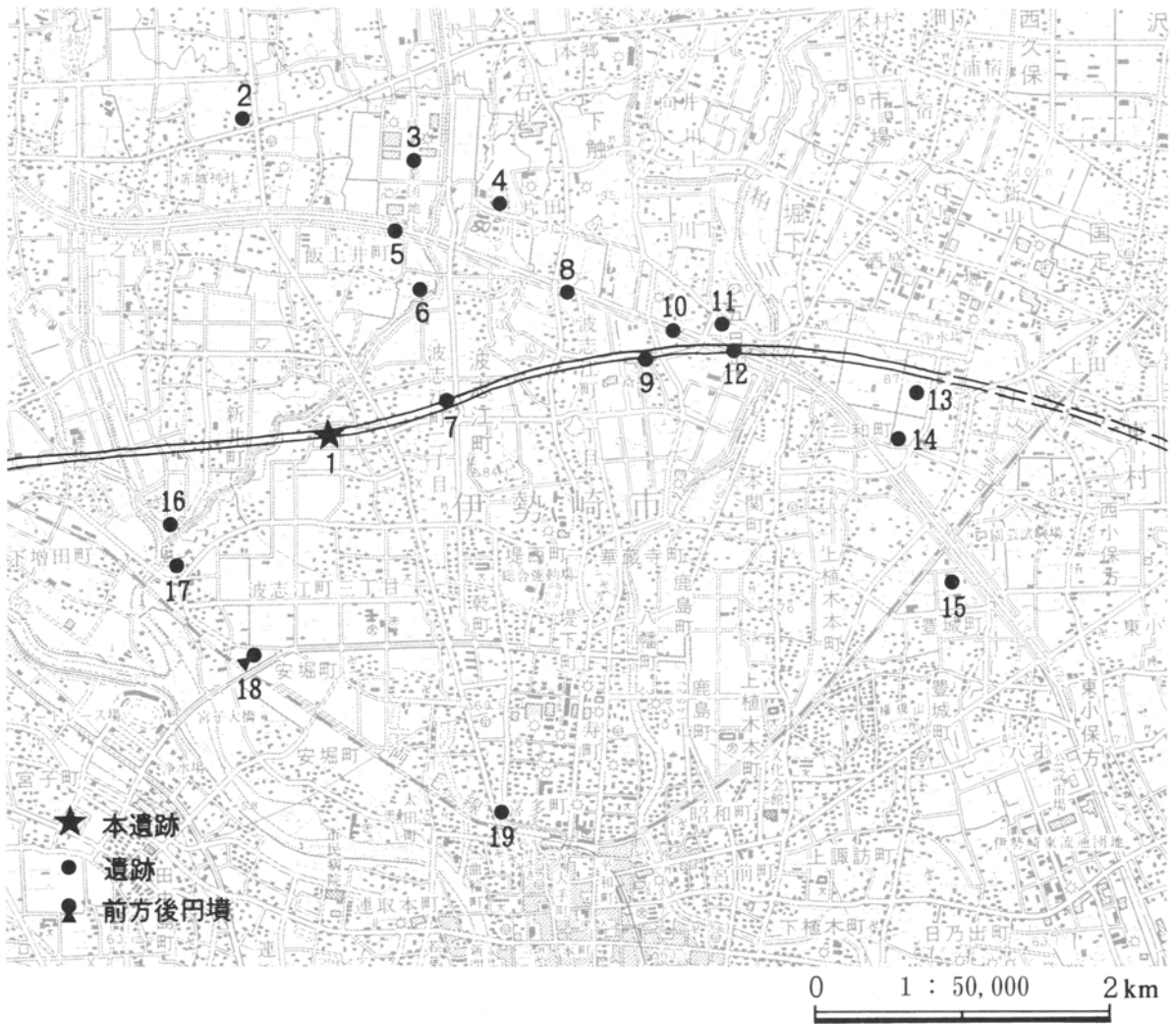
早期の遺跡としては、押型文と捺糸文系土器、スタンプ形石器が多数出土した波志江中屋敷遺跡(7)がある。この遺跡では、同時期の竪穴住居跡が2軒検出された。この2軒の住居跡は重複しており、新しい方の住居跡はほぼ円形のシャーレ状で、6柱穴が確認された。この他にも早期及び前期の住居跡が見つかった五目牛新田遺跡(9)、条痕文系の尖底器形の深鉢が出土した飯土井二本松遺跡(5)がある。飯土井二本松遺跡では、台地上に厚く堆積する砂壤土中に縄文時代早期から中期の遺構及び遺物が見つまっている。この砂壤土は、関東ローム層上に二次堆積したもので、赤城山の山体崩壊土砂が河川作用により堆積し、形成されたものとみることができる。周辺地域の遺跡立地を考える上でも重要な遺跡となっている。

前期の遺跡としては、五目牛清水田遺跡(12)がある。この遺跡では、竪穴住居跡6軒・土坑・集石土坑等が検出されている。出土土器はそのほとんどが前期初頭(花積下層式)のもので、縄文を多用した尖底土器が主体になっている。この土器群は、北関東地方の基準資料となるばかりでなく、周辺地域との関係を知る上でも重要なものである。また、同じような時期の土器が出土している遺跡として五目牛南組遺跡(10)がある。さらに、諸磯b式期の遺構や遺物が見つかった遺跡として、荒砥上ノ坊遺跡(2)、荒砥二之堰遺跡(6)、三和工業団地I遺跡(13)、波志江天神山遺跡(8)等がある。荒砥上ノ坊遺跡では、諸磯b式を主体とした土器がまとまって出土しており、沖積地や湧水池を臨む台地上に営まれた小規模な縄文時代前期の集落が検出された。

中期の遺跡としては、加曾利E式期の住居跡が2軒検出された二本松遺跡(3)、台地東側縁辺にやはり加曾利E式期の竪穴住居跡が5軒検出された鯉沼東遺跡(14)、荒砥前原遺跡(16)がある。荒砥前原遺跡では、中期後半の加曾利E3式期の新しい時期を中心に加曾利E4式期までの継続した集落が見つかっており、この時期に竪穴住居跡の形が円形から柄鏡形の敷石住居へと大きく変化することがわかる。

後期の遺跡としては、称名寺I式期から堀之内式期の柄鏡形敷石住居跡が7軒検出された荒砥二之堰遺跡(6)がある。この遺跡の調査によって柄鏡形敷石住居跡の変遷と消滅についての検討材料が与えられた。この他にも称名寺式土器の破片が多数出土した住居跡を含めて3軒の後期の住居跡が見つかった五目牛洞山遺跡(11)、堀之内式土器の埋甕が出土している三和工業団地I遺跡(13)がある。

晩期の遺跡としては、安行、大洞式土器が遺物包含層から出土した八坂遺跡(17)がある。



番号	遺跡名	所在地	参考文献
1	波志江中野面遺跡	伊勢崎市波志江町	本書及び「波志江中野面遺跡—古墳時代以降編—」(叡群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001年)
2	荒砥上ノ坊遺跡	前橋市二之宮町、荒子町	「荒砥上ノ坊遺跡 I」(叡群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995年)
3	二本松遺跡	前橋市飯土井町	「前橋市文化財調査報告書」13 前橋市教育委員会 1983年
4	下触牛伏遺跡	佐波郡赤堀町	「下触牛伏遺跡」(叡群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986年)
5	飯土井二本松遺跡	前橋市飯土井町	「飯土井二本松遺跡 下江田前遺跡」(叡群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991年)
6	荒砥二之堰遺跡	前橋市飯土井町	「荒砥二之堰遺跡」(叡群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985年)
7	波志江中屋敷遺跡	伊勢崎市波志江町	「年報」19 (叡群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000年)
8	波志江天神山遺跡	伊勢崎市波志江町	「書上本山遺跡・波志江六反田遺跡・波志江天神山遺跡」(叡群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992年)
9	五目牛新田遺跡	佐波郡赤堀町	「年報」19 (叡群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000年)
10	五目牛南組遺跡	佐波郡赤堀町	「五目牛南組遺跡」(叡群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992年)
11	五目牛洞山遺跡	佐波郡赤堀町	「五目牛洞山遺跡発掘調査概報」赤堀町教育委員会 1980年
12	五目牛清水田遺跡	佐波郡赤堀町	「五目牛清水田遺跡」(叡群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993年)
13	三和工業団地 I 遺跡	伊勢崎市三和町	「三和工業団地 I 遺跡(2)—縄文・古墳・奈良・平安時代他編—」(叡群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999年)
14	鯉沼東遺跡	伊勢崎市三和町	「鯉沼東遺跡・舞台遺跡」伊勢崎市教育委員会 1977年
15	原之城遺跡	伊勢崎市豊城町	「原之城遺跡発掘調査報告書」伊勢崎市教育委員会 1988年
16	荒砥前原遺跡	前橋市二之宮町	「荒砥前原遺跡 赤石城址」(叡群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985年)
17	八坂遺跡	伊勢崎市波志江町	「伊勢崎市史」通史編 1 1987年
18	お富士山古墳	伊勢崎市安堀町	山本良知「御富士山古墳発掘調査概報」1966年
19	喜多町遺跡	伊勢崎市喜多町	「群馬県史」資料編 2 1986年

第5図 周辺遺跡位置図及び一覧表

第3章 検出された遺構と遺物

1. 縄文時代の遺構と遺物

本遺跡の試掘調査の際に縄文時代の遺物が確認されていたことから、調査当初より、縄文時代の遺構が検出されることが予想された。今回の調査では、中期中葉から晩期にかけての土器および石器類が検出された。これらのうち、その主体を占めるのは、中期後半の加曾利E式土器であり、遺構のほとんどはこの時期にあたる。遺構は、A区から住居跡10軒・土坑7基・埋甕10基・土器群7基、C区から土坑1基・埋甕1基、D区から土坑1基がそれぞれ検出された。総計は住居跡10軒・土坑8基・埋甕11基・土器群7基である。これらの遺構は、砂壤土を掘り込んで構築されているため、その検出は困難を極めた。特に、住居跡の調査では、壁や柱穴の検出されたものは少ない。調査の結果、住居跡は10軒全てが中期にあたり、そのほか中期の遺構としては土坑6基・埋甕9基・土器群7基がある。後期の遺構としては土坑2基・埋甕1基がある。

以下、項目に従って遺構・遺物の説明をしていくことにする。なお、本遺跡から出土した土器については以下のように分類した。この分類は本遺跡出土の縄文土器全てを対象としている。

第1群土器 阿玉台式土器

第2群土器 勝坂式土器（勝坂式終末期から加曾利E式古段階）

第3群土器 加曾利E式及び併行する土器

1類 口縁部文様帯の下に頸部無文帯をもつ土器

2類 渦巻や楕円等の区画文によって構成された口縁部文様帯をもつ土器

3類 口縁部文様帯が簡略化し、胴部文様が主文様の構成をとる土器

4類 胴部文様が上下分帯し、胴部下半の文様は斉一化する土器

5類 異なる系統を引く土器

6類 類別が難しい深鉢形土器

7類 鉢形・浅鉢形土器

8類 その他

第4群土器 中期末から後期初頭の時期に位置づけられる土器

1類 胴部文様が上下分帯し、文様間が広がる土器

2類 胴部文様が分帯せず、胴部上半の文様が垂下する土器

3類 胴部に渦巻状のJ字文を有する土器

4類 胴部に主文様をもたない土器

第5群土器 称名寺式土器

1類 沈線で描かれた文様間を縄文で充填する土器

2類 沈線で描かれた文様間を刺突文で充填する土器

3類 沈線のみで文様を描く土器

第6群土器 堀之内式土器

1類 堀之内1式土器

2類 堀之内2式土器

3類 石神類型の土器

第7群土器 加曾利B式土器

第8群土器 後期に位置づけられる土器

第9群土器 安行式土器

第10群土器 胴部及び底部を一括する

(1) 竪穴住居跡

A区13号住居跡 (第6～10図 PL2・18・27・28・59)

位置 本住居跡は、遺跡の北西端に近い4-C-18グリッドに位置する。また、本住居跡はA区15号、28号住居跡と重複する。

形状 南西隅がやや内側に入るが、東西方向に長軸をもつ、隅丸長方形を呈する。住居規模は長軸となる東西方向で4.90m、短軸の南北方向で4.23mを測る。床面の面積は15.48㎡である。

構造 遺構確認面から20cm程掘り込んで、床面になる。床面は東西方向に緩やかに傾斜している。床高は77.77mを測る。壁周溝、炉跡は確認されていない。本住居跡のほぼ中央部から床面よりやや低い位置に土坑が1基検出された。この土坑の形状は楕円形で長軸172cm、短軸115cm、深さ18cmを測る。当初、位置的にみて炉跡ではないかと調査を進めたが、その覆土中に炭や焼土を全く含んでいないため、炉跡とすることは無理があるのではないかと考え、本書では、土坑として掲載することにした。

また、壁に沿ってピットが3基検出されたが、柱穴は検出されていない。ピットは径27～46cm、深さは7～21cmを測る。

遺物 遺物は表土から10cm程掘り下げたところ、住居の中央部から東側にかけて集中して出土しており、遺物量はかなり多い。以下、土器と石器に分けて個別に説明する。

<土器>

1は平口縁となる深鉢形土器である。区画化した渦巻と変形した楕円の区画文が入り組み状になる口縁部文様帯をもつ。口縁部文様帯の一部に構成の違いがみられる。胴部はやや幅広の磨消懸垂文が垂下する。縄文は、口縁部文様帯内については、RL(0段多条)が横位に施文される。胴部の懸垂文の中は、上半部がRL(0段多条)が横位または斜位に、下半部が縦位に施文されている。2は舌状突起を4単位もつ深鉢形土器である。突起の内側には沈線により渦巻状の文様が描かれている。口縁部文様帯は区

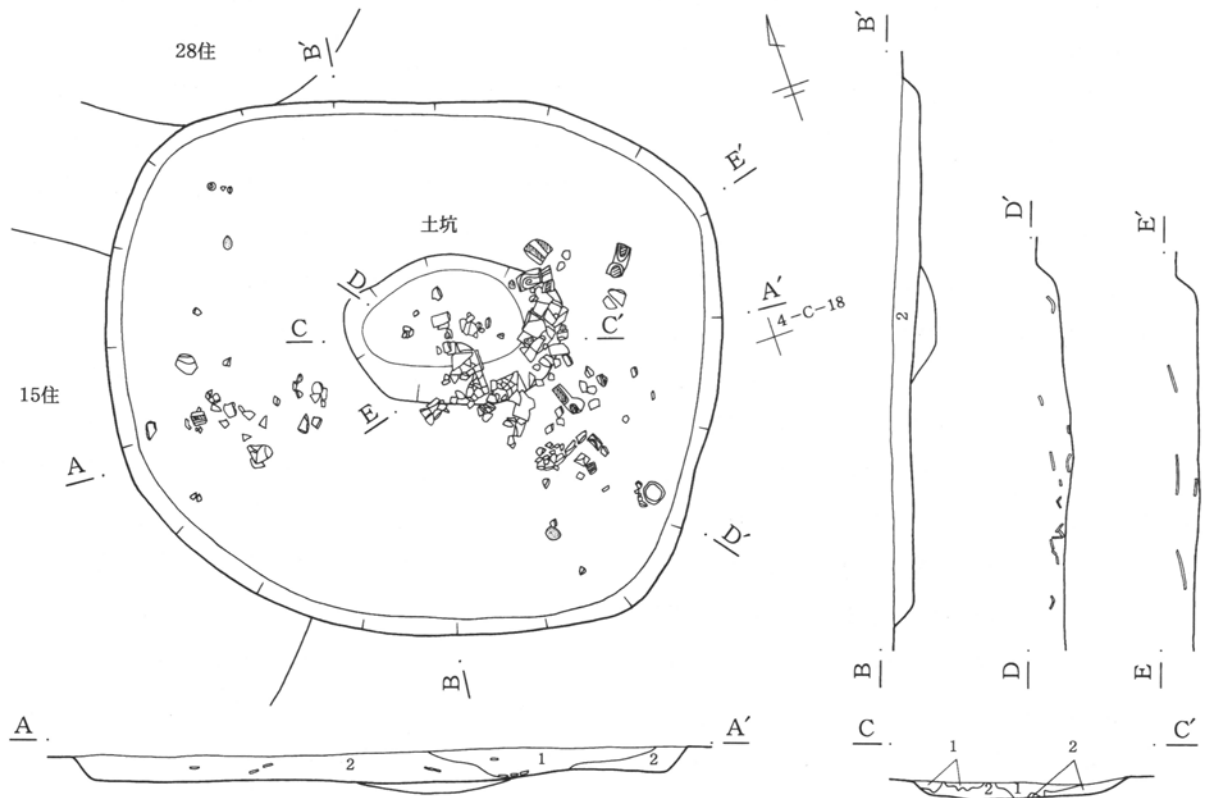
画化した渦巻と楕円の区画文が組合わさった構成になっている。胴部は幅のやや狭い磨消懸垂文が垂下する。一部懸垂文内に沈線が垂下するところもある。縄文はRLにLを付加させた付加条縄が口縁部文様帯内は横位に、懸垂文内は縦位に施文されている。3は舌状突起を4単位もつ深鉢形土器である。突起の形状が2の土器に比べて丸みが少なく、角ばっている。また、突起と突起の間に小さな高まりをもち、その下に刺突をもつ。口縁部文様帯は区画化した渦巻と変形した楕円の区画文が入り組み状になっている。胴部は磨消懸垂文の上端が∩字状になったり、一部に蕨状文等が施文されている。縄文はLRが口縁部文様帯内は横位に、胴部は縦位に施文されている。4は4単位の波状口縁となる深鉢形土器である。口縁部文様帯は楕円の区画文で構成されている。胴部は幅の狭い磨消懸垂文が垂下する。縄文は口縁部文様帯内はRLが縦位及び斜位に、胴部は縦位に施文されている。5は1単位の大きな突起をもつと思われる深鉢形土器である。文様は、太い沈線により大きく波状を描く。その波状沈線で囲まれた胴部上半の区画内にはS字状文が施文されている。大きな突起には大型のS字状文が施文されていると思われる。ただし、波状沈線の一部が渦巻化した可能性もある。波状沈線の下部には、波状沈線と入り組むように∩字状の区画、蕨状文が垂下する。縄文は、口唇部ではRLが横位、縦位に施文され、他の部分は縦位、斜位に施文されており、羽状縄文になっている。胴部はRLが縦位に施文されている。6は3単位の突起をもつと思われる深鉢形土器である。突起は上端に孔をもつ。胴部上半の文様は無文の口唇部の下に1本の沈線が引かれ、胴部文様帯との区画になっている。この沈線は突起の下で途切れている。沈線の下に刺突が施文されている。また、3条の沈線による磨消懸垂文が垂下する。胴部中程に横位に沈線と刺突列をもち、器形がやや括れる。胴部

下半の文様は胴部上半と同じような構成をとる。縄文はRLが縦位に施文されている。7は器形が丸みを帯びた有孔鏝付土器と思われる。隆帯によるトンネル状の孔をもつ。文様は縄文が施文されず、太い沈線による渦巻、刺突等で構成されている。8は4単位の突起をもつ波状口縁となる深鉢形土器である。突起は上端に孔をもつ。口唇部の縁と突起をつなぐように太い1本の沈線が引かれる。その沈線の下から胴部文様が展開する。胴部文様は磨消部が広がった微隆帯による∩字状及びO字状の区画と思われる。区画内の縄文はLR(0段多条)が横位に施文されている。9は懸垂文が垂下する胴部及び底部である。縄文はRLが縦位に施文されている。10は波状口縁となる深鉢形土器である。口縁部文様帯は区画化された渦巻と楕円区画によって構成される。胴部は磨消懸垂文が垂下する。縄文はRLが口縁部文様帯内は横位に、胴部は縦位に施文されている。11は舌状突起を4単位もつと思われる深鉢形土器である。突起の上端は楕円状の孔をもつ。口縁部文様帯は区画化された渦巻と楕円区画によって構成される。胴部の磨消部に蕨状文が垂下すると思われる。縄文はRL(0段多条)が口縁部文様帯内は横位に、胴部は縦位に施文されている。12~15は楕円等の区画文で構成された口縁部文様帯をもつ土器である。12・13の縄文はRL(0段多条)が横位に施文されている。14はRLが横位に施文されている。15はRL(0段多条)が斜位に施文されている。16~20は沈線によって区画された懸垂文が垂下する。16の縄文はRLが縦位に施文されている。17はRL(0段多条)が縦位、斜位に施文されている。18~20はRL(0段多条)が縦位に施文されている。21~23は3条1組の沈線による磨消懸垂文が垂下する。縄文は、21にはRL(0段多条)、22にはLR(0段多条)が縦位に施文されている。23にはRLが縦位に施文されている。24は微隆帯による磨消懸垂文が垂下する胴部である。縄文はRL(0段多条)が施文されている。25は磨消部にS字状文が施文されている。一部懸垂文か∩字状の区画と思われる沈線

も見える。26は蕨状文、∩字状の磨消懸垂文が垂下する胴部である。縄文はLR(0段多条)が縦位に施文されている。27は幅の狭い口縁部無文帯の下に沈線が引かれ、胴部文様帯との区画になっている。胴部に2本の沈線による波状文が描かれる。縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。区画となる口縁部無文帯下は施文方向を変え、羽状縄文になっている。28は波状沈線文による区画に蕨状文が施文されている。縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。29は波状沈線文による区画の上に蕨状文またはS字状文が施文されている。区画内はRL(0段多条)が、斜位に施文されている。30は2条1組の波状沈線による区画をもつと思われる。縄文はRLが縦位に施文されている。無文の∩字状の区画をもつ。31~34は胴部上半に2条の沈線による渦巻が描かれると思われる土器である。31の縄文はRL(0段多条)が横位、斜位、縦位に施文されており、一部羽状縄文になっている。32はRL(0段多条)が口縁部では横位に、以下は縦位に施文されており、羽状縄文になっている。33はRLが横位に施文されている。34は横位の沈線により、口縁部無文帯が区画される。縄文はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。35は刺突列・沈線の組み合わせが2段になっている。胴部は∩字状の区画が垂下するものと思われる。36は幅の狭い口縁部無文帯をもち、胴部は沈線と条線が施文されている土器である。37・38は条線のみ施文されている胴部である。39・40は底部であるが、40は上げ底になっている。1~7・9~35の土器は第3群土器に属する。8・36~38は第4群土器に属する。

<石器>

出土した石器には、石鏃が1点、石錐が2点、スクレイパーが4点、敲石が1点ある。これらの石器に使用される石材には、石鏃に黒色安山岩、石錐に黒色頁岩・黒曜石、スクレイパーに黒色頁岩、敲石に粗粒輝石安山岩が使用されている。

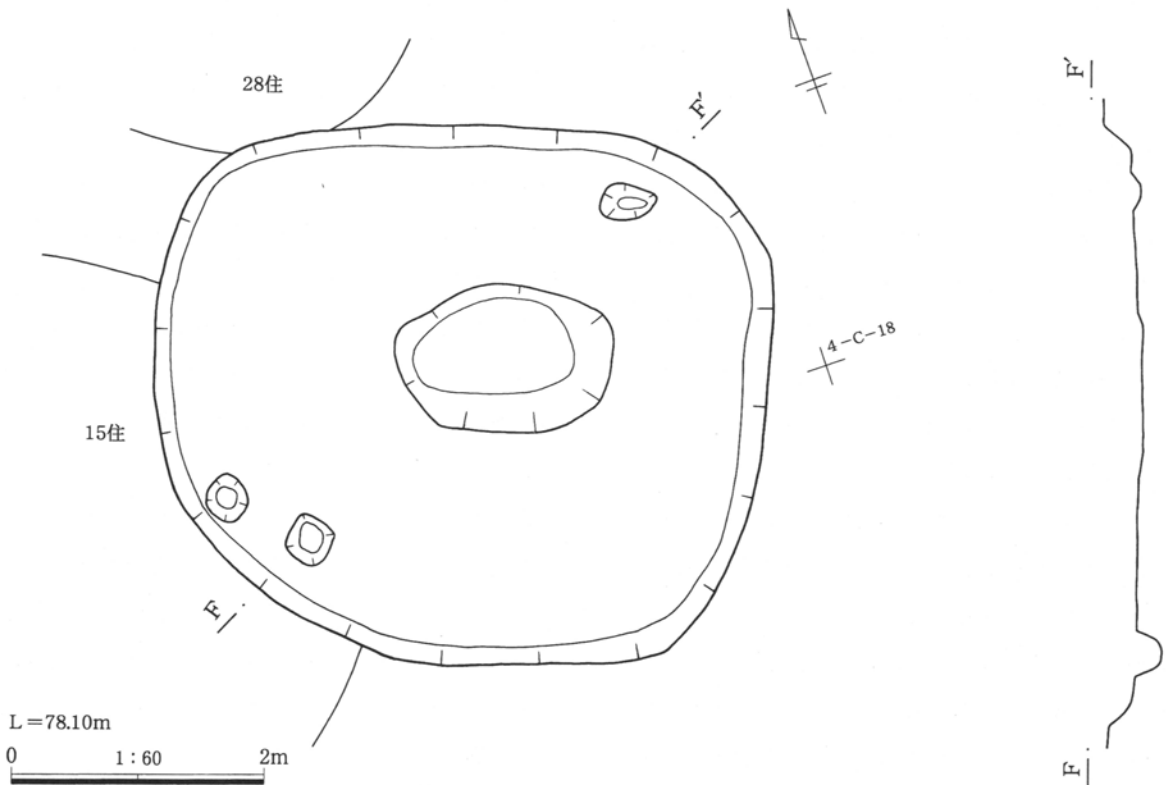


A区13号住居跡

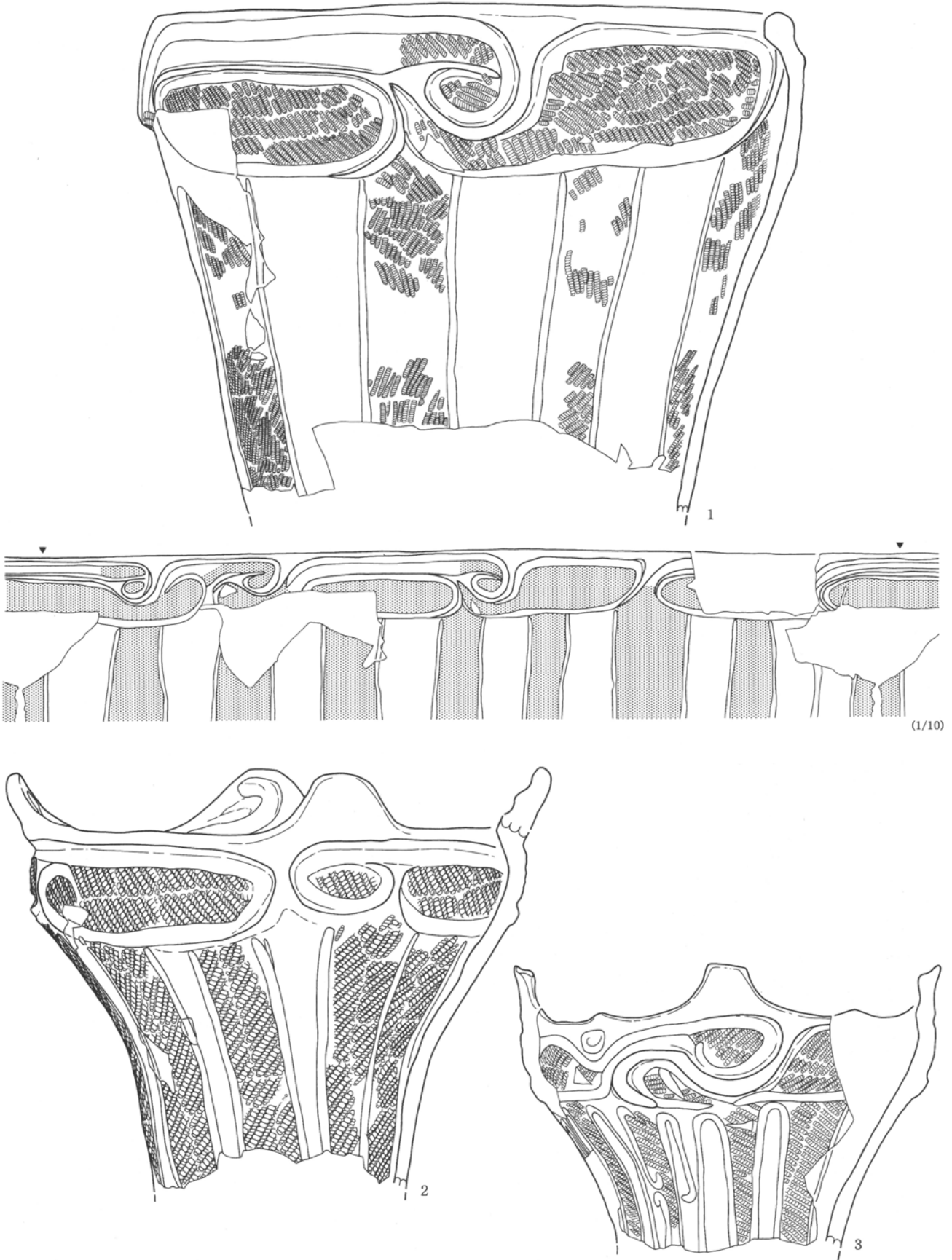
- 1 黒褐色土 4-b層を主とした層。下層の2層より黒色が強い。2~7mmの砂粒を多く含む。橙色粒も含む。
- 2 黒褐色土 4-b層を主とした層。少量の4-c、4-d層を含む。砂質である。

土坑

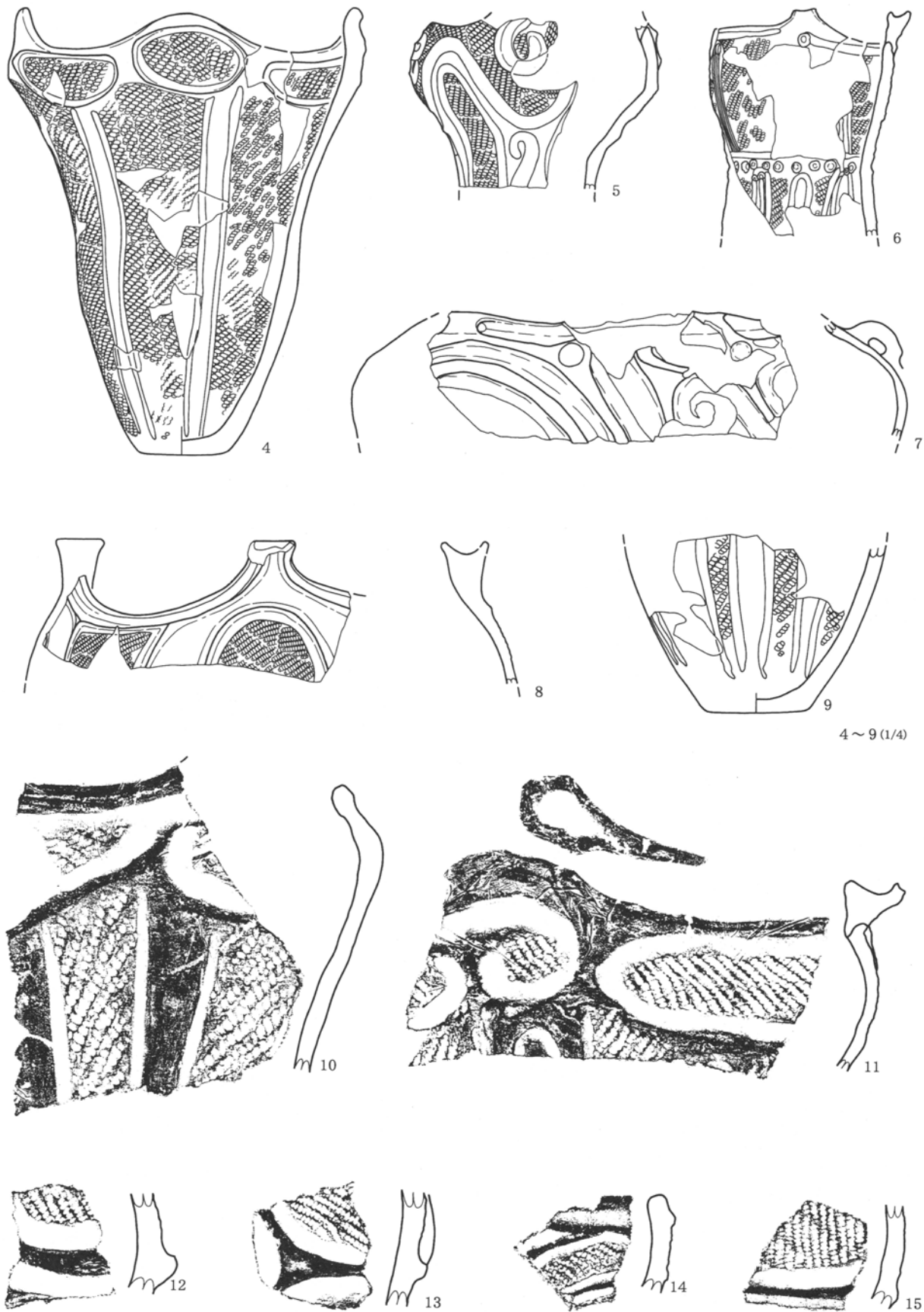
- 1 黒褐色土 4-b層を主とした層。下層の2層より黒色が強い。
- 2 灰黄褐色土 4-d層を主とした層。1層の黒褐色土が混入している。



第6図 A区13号住居跡・掘り方

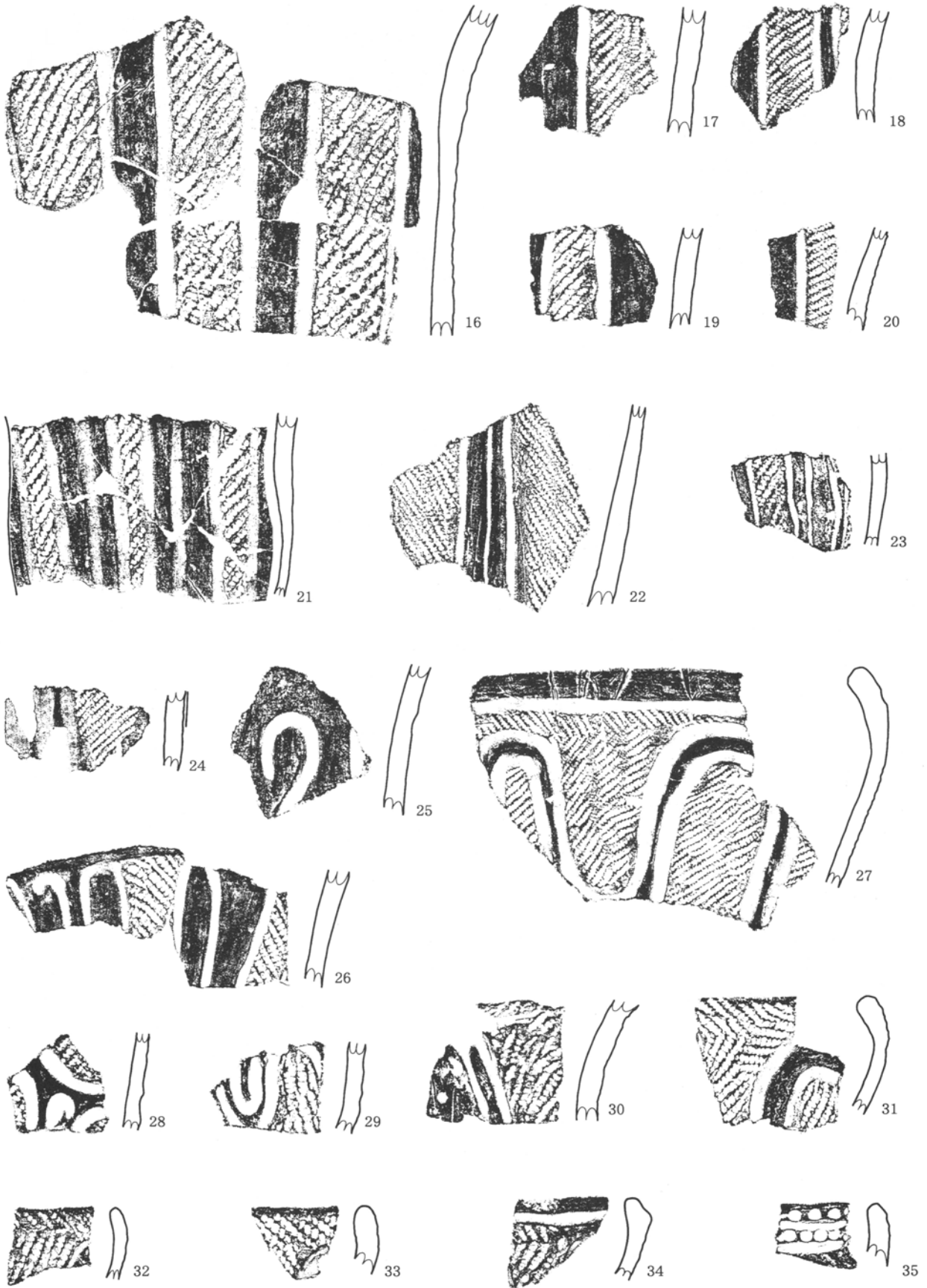


第7図 A区13号住居跡出土遺物 (1)



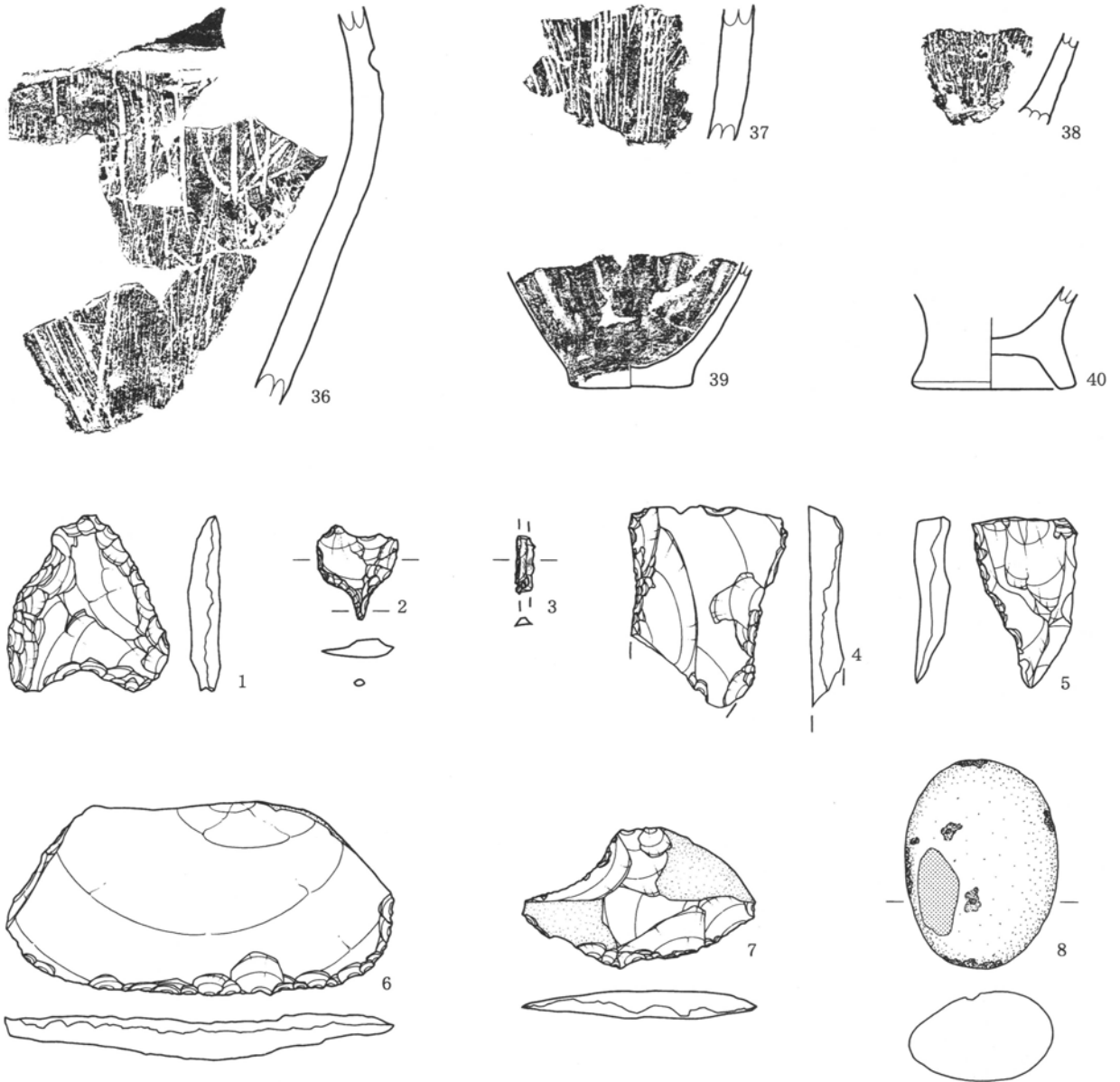
4~9(1/4)

第8図 A区13号住居跡出土遺物 (2)



第9図 A区13号住居跡出土遺物 (3)

第3章 検出された遺構と遺物



A区13号住居跡石器計測表

No	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
1	石鏃	黒色安山岩	3.2	3.0	0.6	6.10
2	石錐	黒色頁岩	2.7	2.4	0.5	2.2
3	〃	黒曜石	(1.7)	(0.6)	(0.2)	(0.2)
4	スクレイパー	黒色頁岩	(5.9)	4.7	(1.0)	(26.8)

No	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
5	スクレイパー	黒色頁岩	4.9	3.1	1.0	11.9
6	〃	〃	5.7	11.4	1.3	87.2
7	〃	〃	4.1	6.8	0.8	21.4
8	敲石	粗粒輝石安山岩	12.2	8.9	5.2	820

第10図 A区13号住居跡出土遺物 (4)

A区15号住居跡 (第11・12図 PL 3・18・59)

位置 本住居跡は、遺跡の北西端に近い4-D-18グリッドに位置する。A区28号、29号住居跡と近接し、A区13号住居跡と重複する。

形状 西壁の一部が直線的になっているが、ほぼ円形を呈する。住居規模は長軸となる南北方向で4.77m、短軸の東西方向で4.46mを測る。床面の面積は13.75㎡である。

構造 表土が薄い堆積状況のため、表土を掘削し、遺構を確認する作業の段階で、本住居跡の石囲い炉が検出された。また、住居覆土の確認が困難を極め、住居の壁、床面を検出するのに苦労した。炉の高さ等を考慮しながら慎重に調査を進め、遺構確認面から10cm程下で床面を確認することができた。検出された床面の床高は77.80mを測る。壁周溝、柱穴等は検出されなかった。

本住居の炉跡は大小様々な10個の自然石で台形に組まれた石囲い炉で、住居の中央部よりやや南に位

置する。炉の規模は長軸となる南北方向で75cm、短軸となる東西方向の中央部で62cmを測る。炉を構成する石の石材は粗粒輝石安山岩で、石のいくつかは火を受けて表面がはげている。炉を構成する石の中で最大のものは長さ50.7cm、幅28.0cm、厚さ12.6cm、重さ23.3kgである。炉内から少量の焼土粒が検出されている。

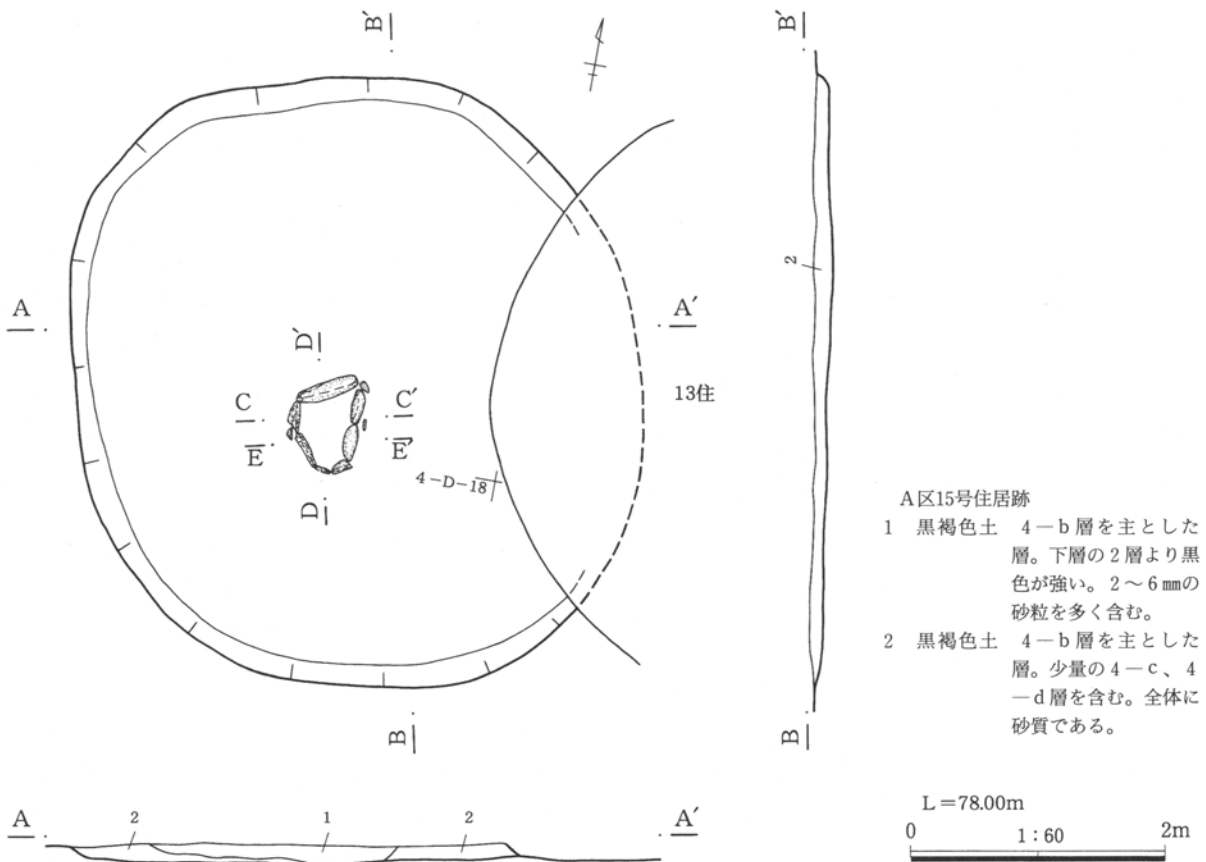
遺物 遺物の検出が少なく、土器と石器が各1点である。以下、土器と石器に分けて個別に説明する。

<土器>

1は、口縁部と胴部を区画する沈線が引かれている胴部片である。口縁部の文様構成ははっきりしない。胴部の地文は条線であり、コンパス文のように描かれている。この土器は第3群土器に属する。

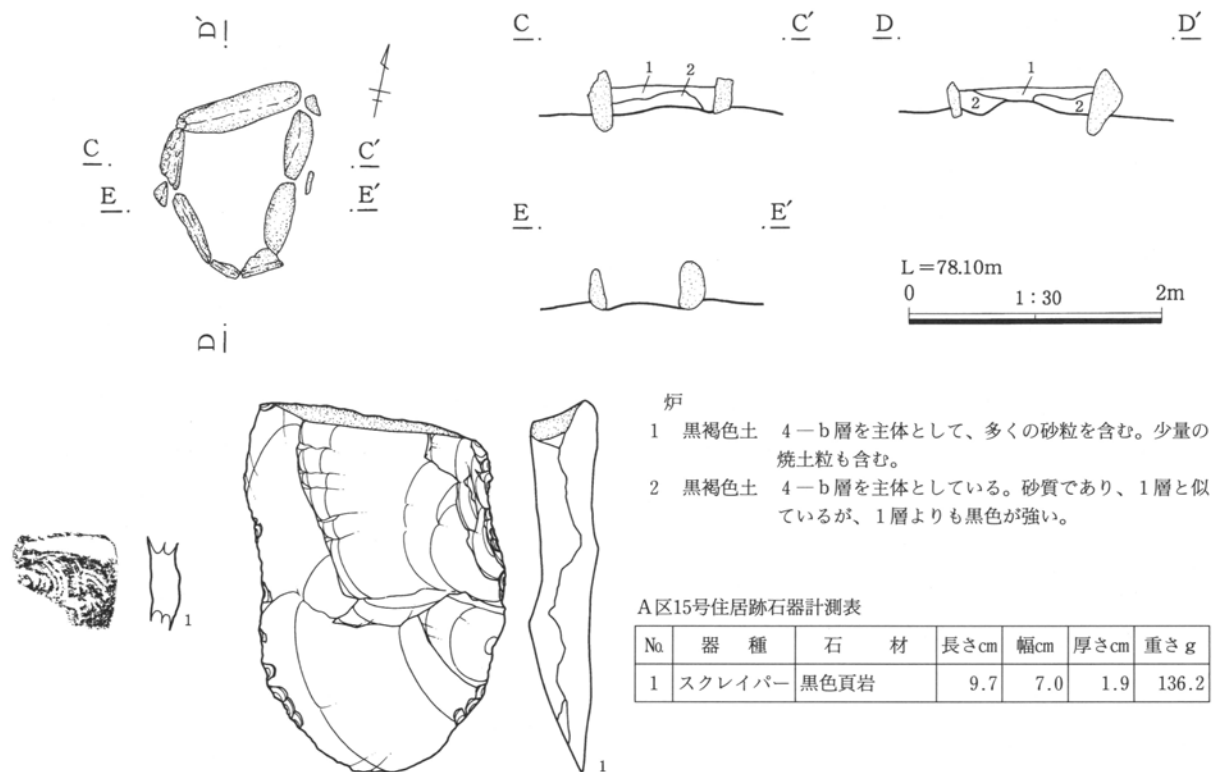
<石器>

出土した石器は、スクレイパーの1点のみで、石材は、黒色頁岩が使用されている。



- A区15号住居跡
- 1 黒褐色土 4-b層を主とした層。下層の2層より黒色が強い。2~6mmの砂粒を多く含む。
 - 2 黒褐色土 4-b層を主とした層。少量の4-c、4-d層を含む。全体に砂質である。

第11図 A区15号住居跡



第12図 A区15号住居炉跡・出土遺物

A区19号住居跡 (第13~18図 PL 4・18・19・28・29・59)

位置 本住居跡は、遺跡の西端の4-F-14グリッドに位置する。近くには、A区20号住居跡、2号土器群がある。

形状 住居跡の掘り込みが確認出来なかったため、炉跡を中心に据え、柱穴の位置を考慮して住居範囲を推定した。推定した住居跡の形状はほぼ円形である。住居規模は南北方向で6.83m、東西方向で6.26mを測る。床面の面積は29.94m²である。

構造 表土が薄い堆積状態で、しかも、住居覆土の見極めに苦勞し、住居の壁の検出が難しかった。しかし、遺物の出土状況、柱穴、炉跡を考慮し、住居跡とすることにした。平均的な床高は77.60mを測る。南西方向に、やや傾斜していると思われる。壁周溝は検出されなかった。

炉跡は埋設された土器を使用したと思われる。炉の本体となる加曾利E式土器の周りに、別個体の土器を補強するかのよう差し込む形になっていた。炉体の主体となる土器の内側は焼け色が強い。また、

この炉跡の南東方向にやはり炉跡ではないかと思われる埋設された土器が出土している。この土器も二次焼成を受けている。

柱穴は6基検出されている。柱穴の覆土は黒褐色土であるが、砂質の黄褐色土も多く含まれ、地山に近い感じであった。柱穴の形状はほぼ円形で、径は30~47cm、深さ7~20cmを測る。

本住居跡の床面を掘り下げたところ、北側部分に多くの土器が集中して出土した。床面より下であることや本住居跡より出土した土器と分類の上で余り差が感じられないことから、その範囲を住居内の土坑と判断し、住居平面図に掲載することにした。この土坑の形状は楕円形で、長軸となる南北方向で3m、短軸の東西方向で2.2mを測る。深さ10~27cmである。
遺物 遺物の出土状況から見ると住居跡の南側部分より多く出土している。本住居跡の周辺より出土したものも含めて、以下土器と石器に分けて個別に説明する。

<土器>

1は平口縁となる深鉢形土器である。この土器は炉の本体として埋設されていたものである。楕円等の区画文と波状沈線による文様構成となる口縁部文様帯を有する。胴部は2条1組の沈線による㊦字状の区画が垂下しているが、胴部全体に縄文が施文されている。口縁部文様帯の楕円区画内はRLが横位に施文されている。胴部はRLが横位、斜位、縦位に施文されている。2も1と同様に埋設されていた土器である。2は橋状把手が対につく深鉢形土器である。ただし、胴部文様の構成、あるいは把手の遺存の状況を見ると、2単位の把手は大きさが違うものと思われる。口縁部は内折し、刺突がうたれた沈線による文様区画をもつ。区画内はRL(0段多条)が横位に施文されている。この区画の下に無文帯をもち、やはり刺突がうたれた沈線で区画される。胴部上半に展開する2条の沈線による渦巻文の上端と連結している部分もある。この渦巻は横位のS字状に展開し、連結している部分もある。橋状把手のところで文様の構成が変わっている。渦巻の上端に刺突をうち、刺突に囲まれた区画ができていた所もある。胴部の縄文はRL(0段多条)を充填している。3は区画化した渦巻と楕円等の区画文で構成された口縁部文様帯をもつ土器である。縄文はRL(0段多条)が口縁部文様帯内は斜位に、胴部は縦位に施文されている。4～6は楕円等の区画文で構成された口縁部文様帯をもつ土器である。4は口唇部上端に沈線が施文され、波頂部にいくに従って、器形が肥厚していることから、突起をもつと思われる。縄文はRL(0段多条)が横位、斜位に施文されている。5・6はRL(0段多条)が横位に施文されている。7・8は口縁部文様帯の区画がみえる胴部である。磨消懸垂文が垂下する。7の区画内はRL(0段多条)が縦位と横位に施文されており、羽状縄文になっている。胴部は縦位に施文されている。8は文様帯の区画上に刺突をうち、その下の胴部にS字状文または蛇行文が垂下する。口縁部の区画内はRL(0段多条)が横位に、胴部は縦位に施文されて

いる。9～23は懸垂文が垂下する胴部である。9はRL(0段多条)が縦位に施文されている。10～13はRLが縦位に施文されている。14はLRLが縦位に施文されている。15～17は3条の沈線による磨消懸垂文をもつ胴部である。15はRL(0段多条)が縦位に施文されている。16はRLが縦位に施文されている。17はLR(0段多条)が斜位に施文されている。18は磨消部に蕨状文をもつ胴部である。縄文はRL(0段多条)が横位に施文されている。19・20は沈線による懸垂文の区画をもつと思われる胴部である。19はRLが縦位に、20はLRが縦位に施文されている。21～23は磨消部が隆帯になっている胴部である。21は口縁部の区画の沈線がみられる。縄文はRL(0段多条)が横位、縦位に施文され、羽状縄文になっている。22はRLが縦位に施文されている。23はRL(0段多条)が縦位に施文されている。24～29は2条の隆帯で描かれた渦巻の周囲を縄文で充填している胴部である。24～28はRLを充填している。29はRL(0段多条)を充填している。30は2条の沈線による波状文を描くと思われる土器である。縄文はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されている。一部施文方向を変え、羽状縄文になっている。31～33は太い沈線で描かれた㊦字状の区画内が無文になっている土器である。31は㊦字状の区画下にS字状文あるいは蕨状文が垂下すると思われる。縄文は31～33ともにRLが口唇部は横位に、以下は縦位に施文され、羽状縄文になっている。34～36は口唇部に2段の刺突列をもち、胴部は沈線による㊦字状の区画が垂下する土器である。縄文はLR(0段多条)が縦位に施文されている。37は胴部中程に刺突列をもち、沈線によるU字または波状区画をもつと思われる。38は幅の狭い口縁部無文帯をもち、胴部に細い磨消懸垂文が垂下する土器である。縄文はRL(0段多条)が横位、縦位に施されており、羽状縄文になっている。39は懸垂文の一部が胴部中程で、対向するU字状の区画になっている胴部である。縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。40～42は胴部上半に1条の隆帯により、渦巻を

第3章 検出された遺構と遺物

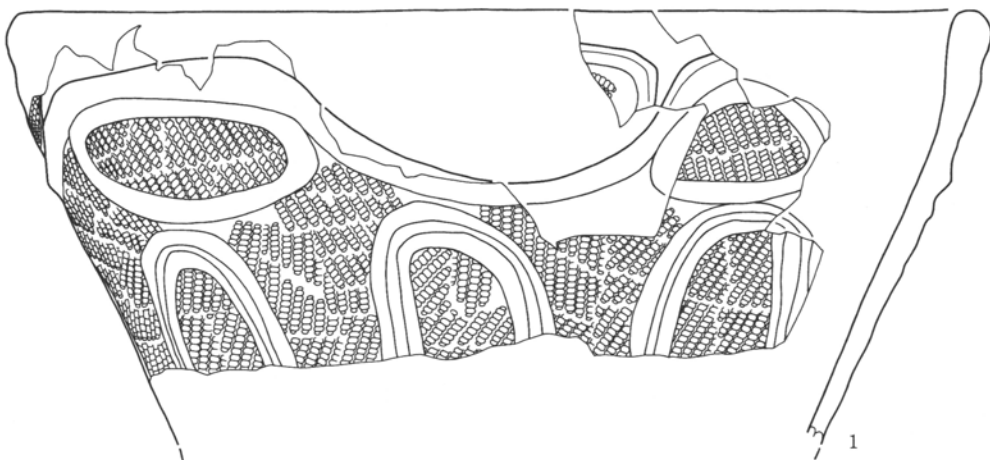
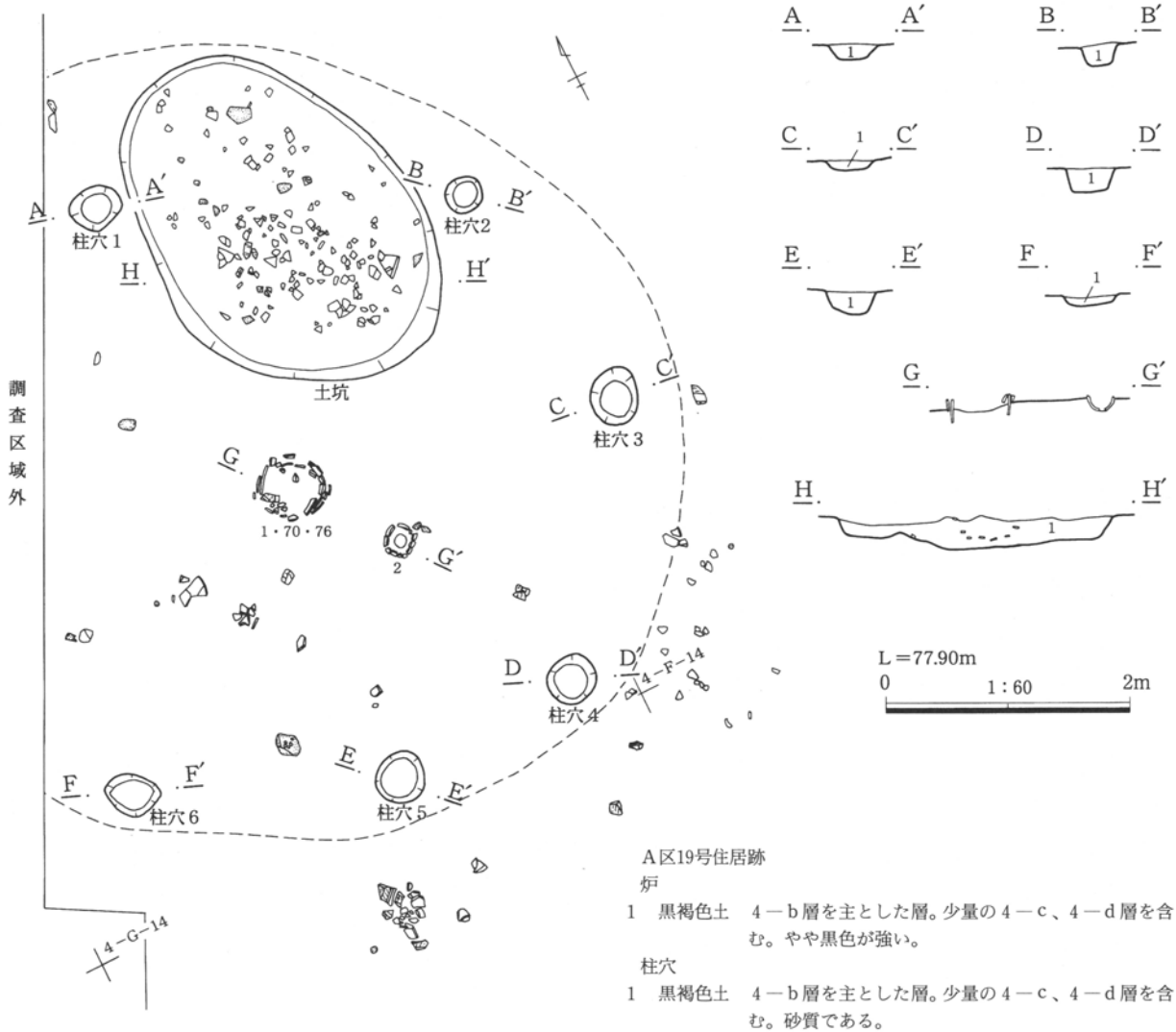
描く土器である。40・41は口縁部無文帯をもつ。40の縄文はRLが横位、縦位に施文されている。41はLRが縦位に施文されている。42は口縁部にRLが横位に施文されている。43～46は胴部上半に2条の沈線による渦巻を描く土器である。43はLRが口唇部は横位に、以下は縦位、斜位に施文されている。44は口縁部無文帯をもつ。縄文はRLが横位、縦位に施文され、羽状縄文になっている。45はRLが縦位に施文されている。46はLRが横位、縦位に施文されている。47～54は胴部文様が細い沈線によるW字状の構成をもつ深鉢形土器である。47は口唇部より、RL（0段多条）が横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。48・49は波状口縁となる。48はRL（0段多条）が横位に施文されている。49は口縁部無文帯をもつ。RL（0段多条）が横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。50も口縁部無文帯をもつ。縄文はRLが充填されている。51はRL（0段多条）が横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。52はRLが縦位に施文されている。53は胴部中程にあたる。縄文はRL（0段多条）が縦位に施文されている。54はLRにRを付加させた付加条縄が縦位に施文されている。55～62は胴部上半に細い沈線によるO字状の文様構成をもつ土器である。55・56は口縁部に2段の爪状の刺突列をもつ。縄文はRLが横位に施文されている。57は口縁部無文帯が前面にせり出すような厚みをもつ。縄文はLR（0段多条）が縦位に施文されている。58・59はLR（0段多条）が横位に施文されている。60～62は同一個体と思われる。60は口縁部無文帯をもち、その下に胴部との区画をするように、隆帯をもつ。隆帯にはLR（0段多条）が横位に施文されている。胴部にはLR（0段多条）が充填されている。ただし、60は胴部上半に渦巻を描くことも考えられる。63は胴部上半に渦巻を描き、胴部下半に∩字状の区画をもつ土器である。縄文はRL（0段多条）が縦位に施文されている。64・65は口縁部無文帯下に沈線が施文されている。胴部の文様構成ははっきりしない。64の縄文はLRが充填

されている。65はRL（0段多条）が充填されている。66・67は地文がみられず、隆帯による文様構成をもつ土器と思われる。68は口縁がくの字状に屈曲する浅鉢形土器である。胴部に楕円等の区画文で構成された文様帯をもつと思われる。なお、全面に赤色塗彩されている。69・70は磨消部が広くなり、微隆帯によるU字状の区画が対向するような文様構成の土器である。69の縄文はRL（0段多条）が斜位に施文されている。70はRL（0段多条）が充填されている。71～73は2条の微隆帯による楕円区画をもつ土器である。縄文はいずれもRL（0段多条）が縦位に施文されている。74は口縁部無文帯下に隆帯による区画をもつ土器である。胴部の文様構成ははっきりしないが、懸垂文が垂下する可能性もある。縄文はRL（0段多条）が横位に施文されている。75～77は懸垂文が垂下する胴部である。75の縄文はLR（0段多条）が縦位に施文されている。76は70と同じような文様構成になる場合も考えられる。縄文はRL（0段多条）が斜位に施文されている。77はRL（0段多条）が斜位に施文されている。78は縄文のみの胴部である。縄文はRLが充填されている。79～86は条線を地文とする土器である。79・80は沈線が横位にあることから口縁部文様帯をもつ土器と思われる。79は縦位の条線であるが、80は円形になっている条線が見える。81は懸垂文の区画内が条線になっている胴部である。82～86は条線のみの胴部である。87～89は無文部がめだつ土器である。87・89は器形、文様ははっきりしない。89は微隆帯による懸垂文区画をもつ。90～92は底部である。90は上げ底状になっている。これらの土器は1～68までは第3群土器、69～89は第4群土器に属する。

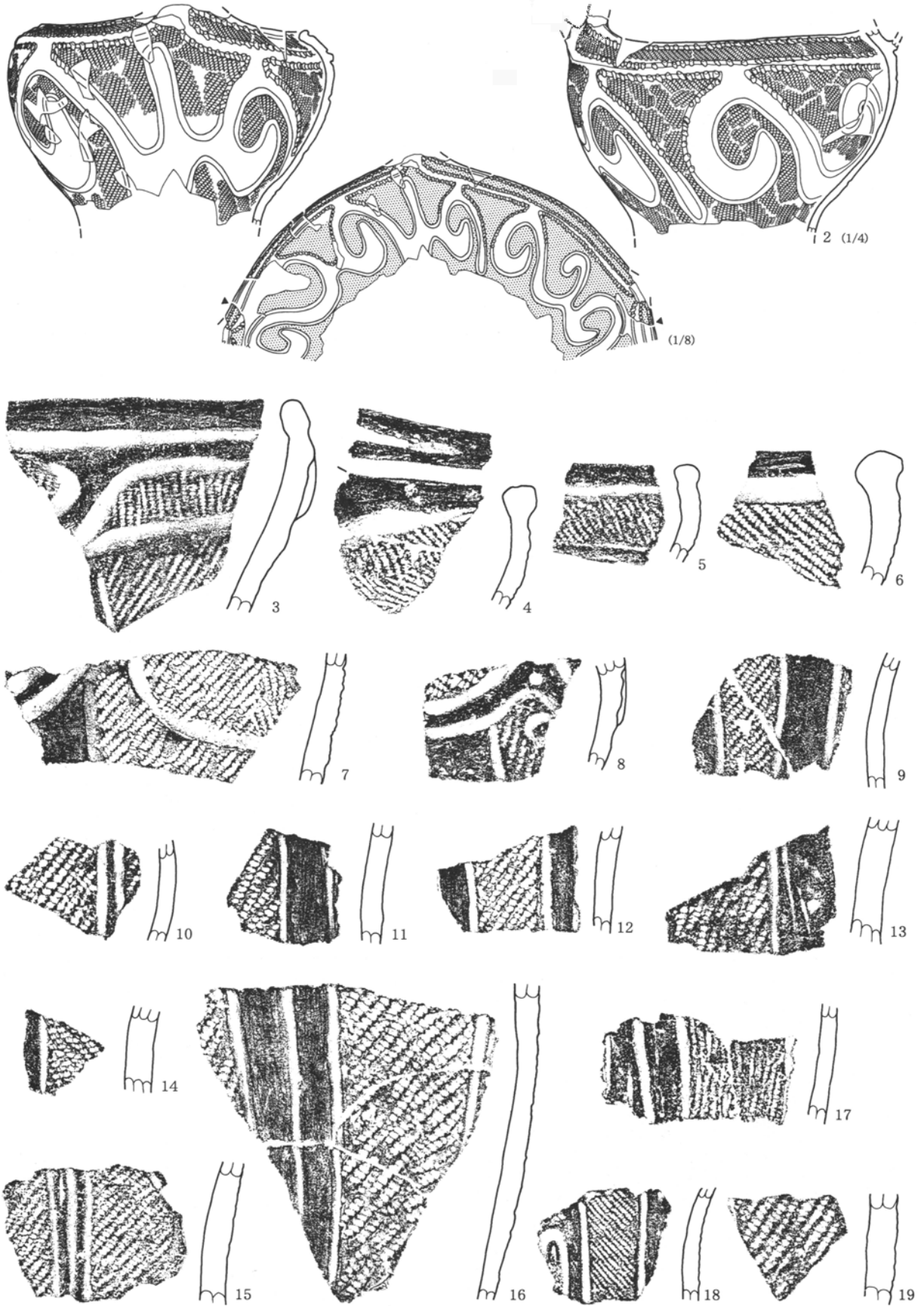
<石器>

出土した石器には、打製石斧が2点、磨石が2点、多孔石が1点ある。これらの石器に使用される石材には、打製石斧に黒色頁岩・細粒輝石安山岩、磨石に粗粒輝石安山岩、多孔石に粗粒輝石安山岩が使用されている。

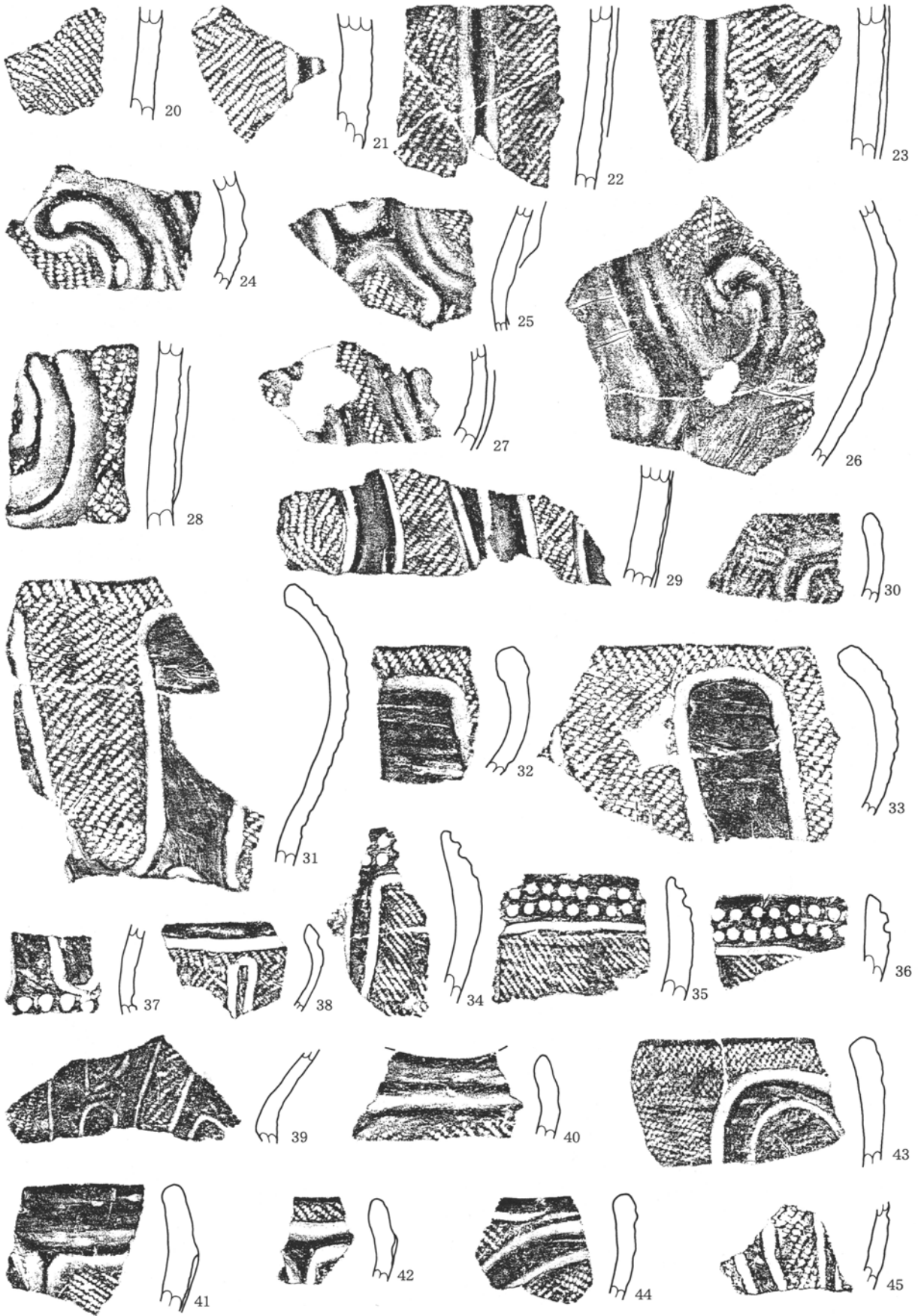
1. 縄文時代の遺構と遺物



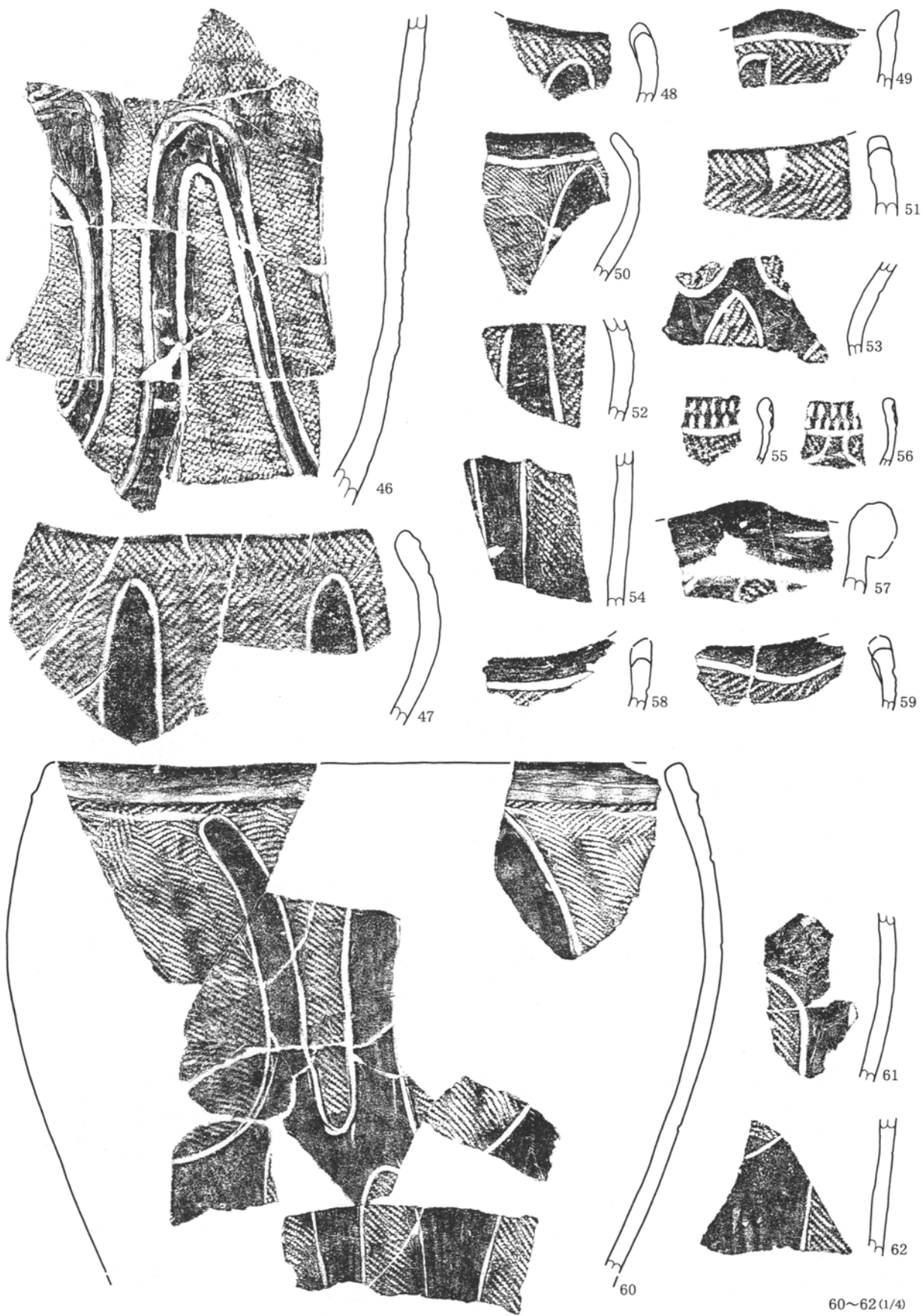
第13図 A区19号住居跡・出土遺物 (1)



第14図 A区19号住居跡出土遺物 (2)

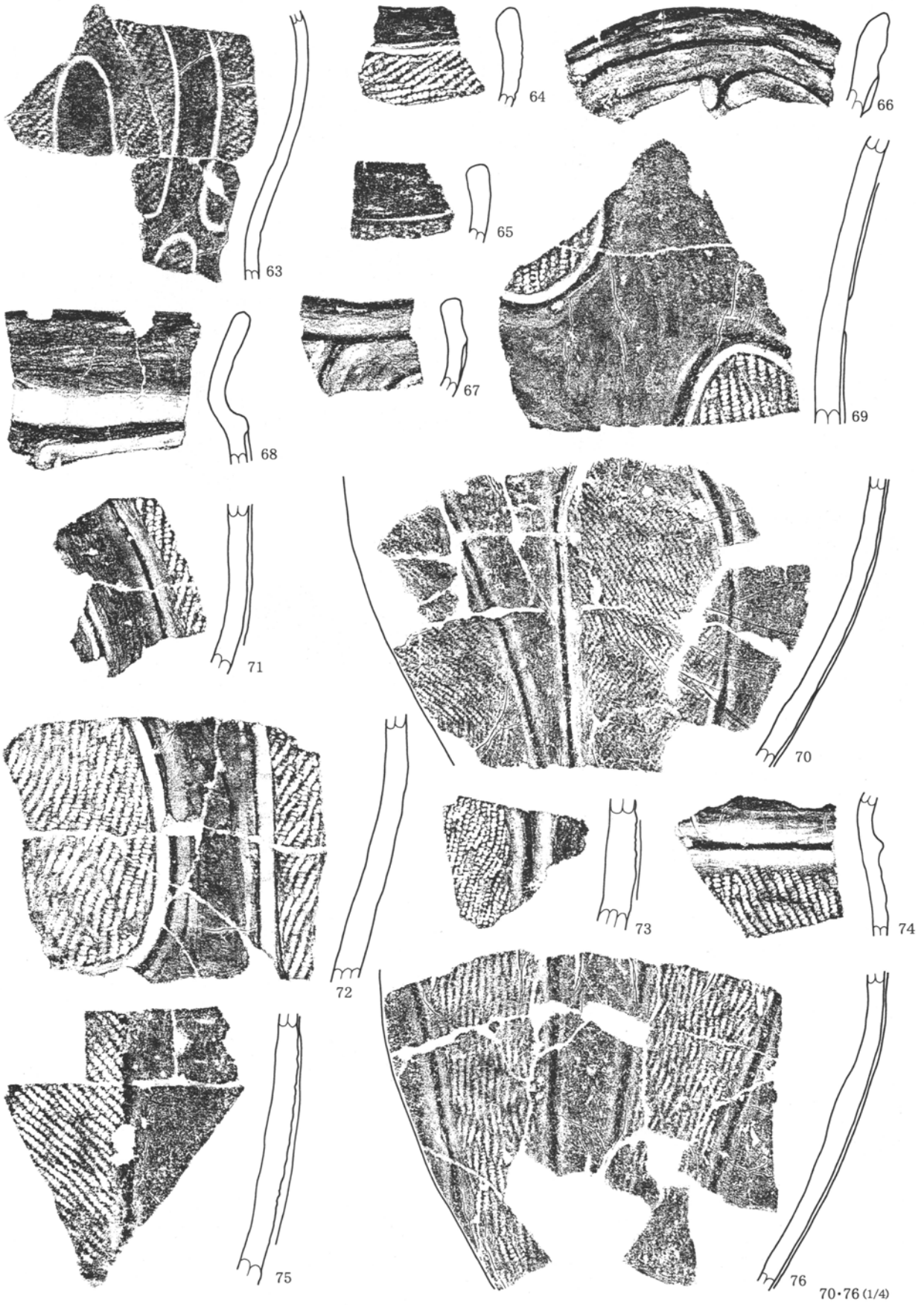


第15図 A区19号住居跡出土遺物 (3)



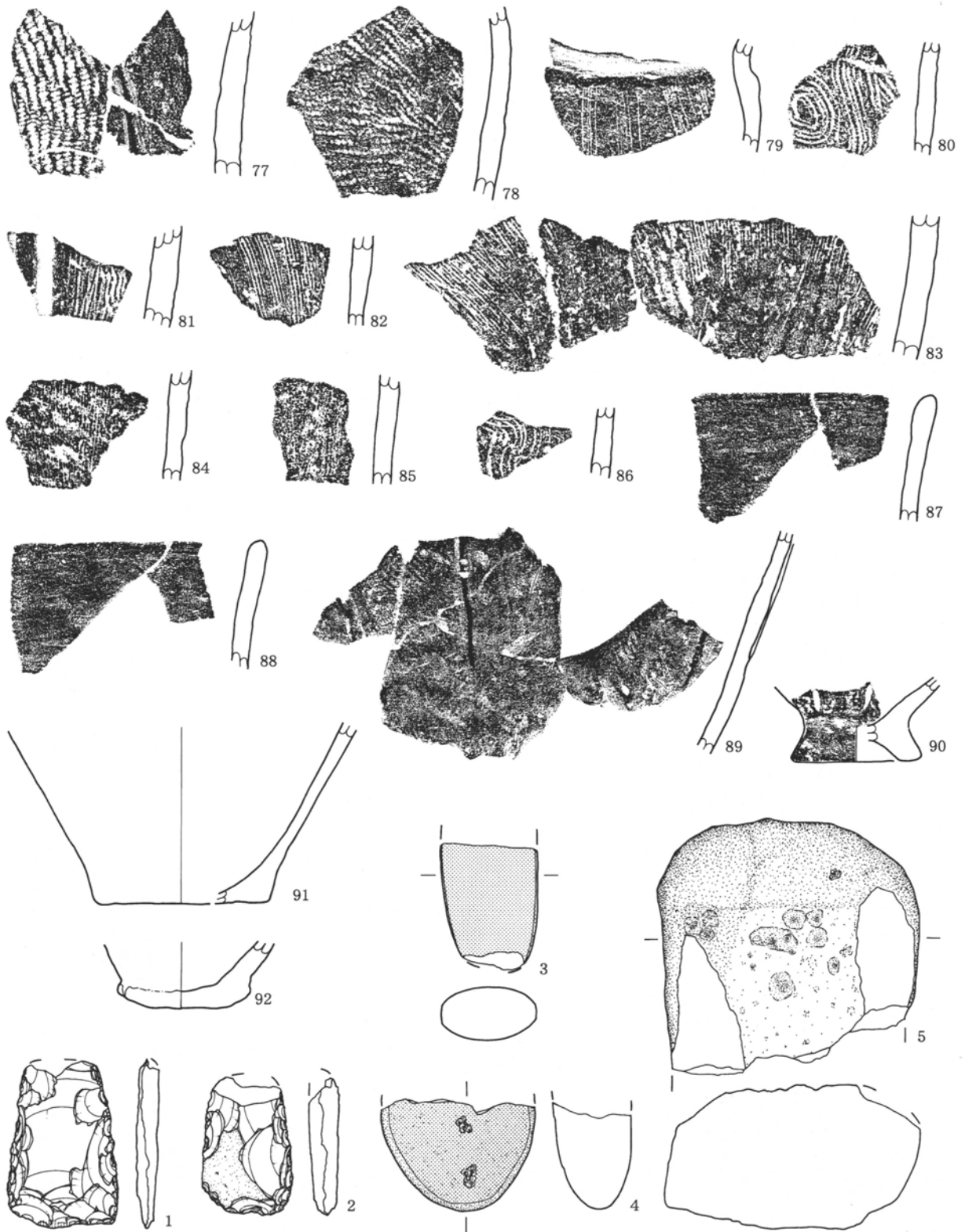
第16図 A区19号住居跡出土遺物 (4)

60~62(1/4)



第17図 A区19号住居跡出土遺物 (5)

第3章 検出された遺構と遺物



A区19号住居跡石器計測表

No	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
1	打製石斧	黒色頁岩	(8.4)	5.5	1.1	(63.5)
2	〃	細粒輝石安山岩	(6.8)	4.5	1.5	(58.3)
3	磨石	粗粒輝石安山岩	(8.4)	(6.5)	3.7	(358)

No	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
4	磨石	粗粒輝石安山岩	(7.4)	(10.3)	(5.3)	(509)
5	多孔石	〃	(25.3)	(26.3)	(14.3)	(12,350)

第18図 A区19号住居跡出土遺物 (6)

A区20号住居跡 (第19～21図 PL5・19・30・59)

位置 本住居跡は、遺跡の南西端に近い4-F-11グリッドに位置する。本住居跡の近くにはA区2号土器群や19号住居跡がある。

形状 遺構確認の段階で住居の掘り込みがはっきりしなかったため、慎重に掘り進めていたところ、住居の壁面や床が確認できないまま、埋設された土器による炉跡が検出された。そこで、炉跡の検出された地点及び遺物の出土状況、柱穴等を考慮し、住居範囲を推定することにした。推定した住居跡の形状はやや楕円形に近い。住居の規模は長軸となる南北方向で4.10m、短軸の東西方向で3.75mを測る。床面の面積は12.45㎡である。

構造 炉跡からみて、本住居跡の床高は77.45mである。床面は炉付近から西側にやや傾斜していると思われる。炉跡は土器を埋設して炉として使用しているもので、炉に使用された土器は熱を受けていて、脆い。柱穴は3基検出されている。柱穴の覆土は灰黄褐色土が主体でやや黒褐色土が含まれるが、地山に近い土であった。柱穴の形状はほぼ円形で、径は26～34cm、深さ10～21cmを測る。

遺物 遺物は炉跡の周囲に集中している。以下土器と石器に分けて個別に説明する。

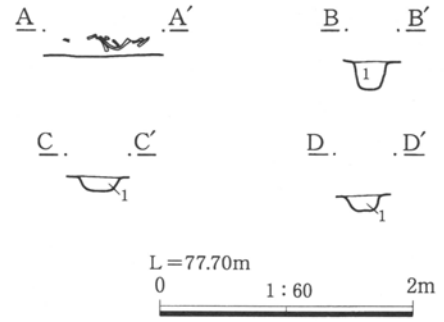
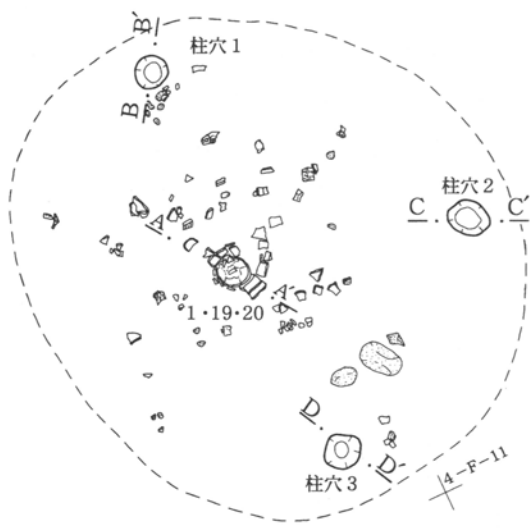
<土器>

1は炉本体の土器である。4単位の小突起をもつ深鉢形土器である。口縁部文様帯は楕円の区画文が弧状の区画になり、突起に集まるような文様構成になっている。胴部は懸垂文が垂下する。縄文は口縁部文様帯内ではRL(0段多条)が横位に、胴部では斜位、横位に施文されている。2は懸垂文が垂下する胴部である。台付の器形になると思われる。磨消部は微隆帯になっている。縄文はRLが縦位に施文されている。3は弧状の区画で構成された口縁部文様帯を有する深鉢形土器である。縄文は口縁部文

様帯の中をRL(0段多条)が横位に、胴部の懸垂文内は横位、斜位に施文されている。4は楕円等の区画文で構成された口縁部文様帯をもつ深鉢形土器である。口縁部文様帯の中は太い沈線による区画になっている。縄文は口縁部文様帯内ではRL(0段多条)が横位に、胴部懸垂文内はRL(0段多条)が縦位に施文されている。なお、5～9は4と同一個体と思われる。10～12は懸垂文が垂下する胴部である。10はRL(0段多条)が縦位に施文されている。11はLRが斜位に施文されている。12はRL(0段多条)が縦位に施文されている。13～17は波状口縁となる深鉢形土器である。同一個体であるが接点がなく接合できなかった。文様は胴部上半に隆帯で区画された渦巻区画をもつ深鉢形土器である。胴部下半には〇字状の区画が垂下すると思われる。縄文はRL(0段多条)を充填している。口縁部に近い所では横位に、以下は縦位に施文しており、羽状縄文になっている。18は胴部上半に細い沈線によるW字状の文様構成をもつと思われる土器である。縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。19は縄文が全面に施文されている胴部である。20の底部と同一個体と思われる。なお、接合面には接合するための刻み痕がみられる。縄文はLR(0段多条)が縦位に施文されている。21は条線が施文されている胴部である。1～18の土器は第3群土器に属する。19～21の土器は第4群土器に属する。

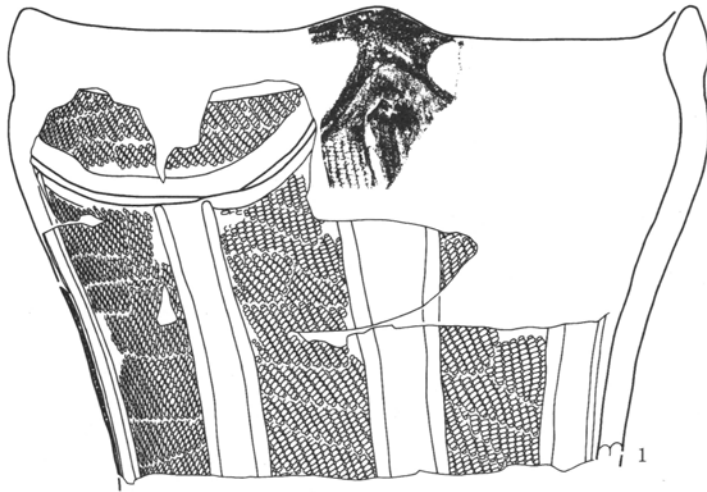
<石器>

出土した石器には、スクレイパーが1点、打製石斧が5点、磨石が1点、多孔石が1点ある。これらの石器に使用される石材には、スクレイパーに黒色頁岩、打製石斧に黒色頁岩・細粒輝石安山岩、磨石に粗粒輝石安山岩、多孔石に文象斑岩が使用されている。

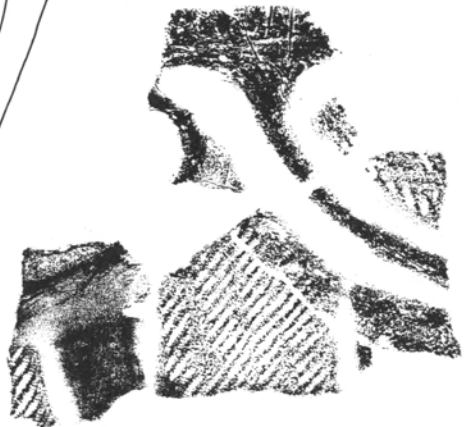


A区20号住居跡
柱穴

1 黒褐色土 4-b層を主とした層。少量の4-c、4-d層を含む。砂質である。

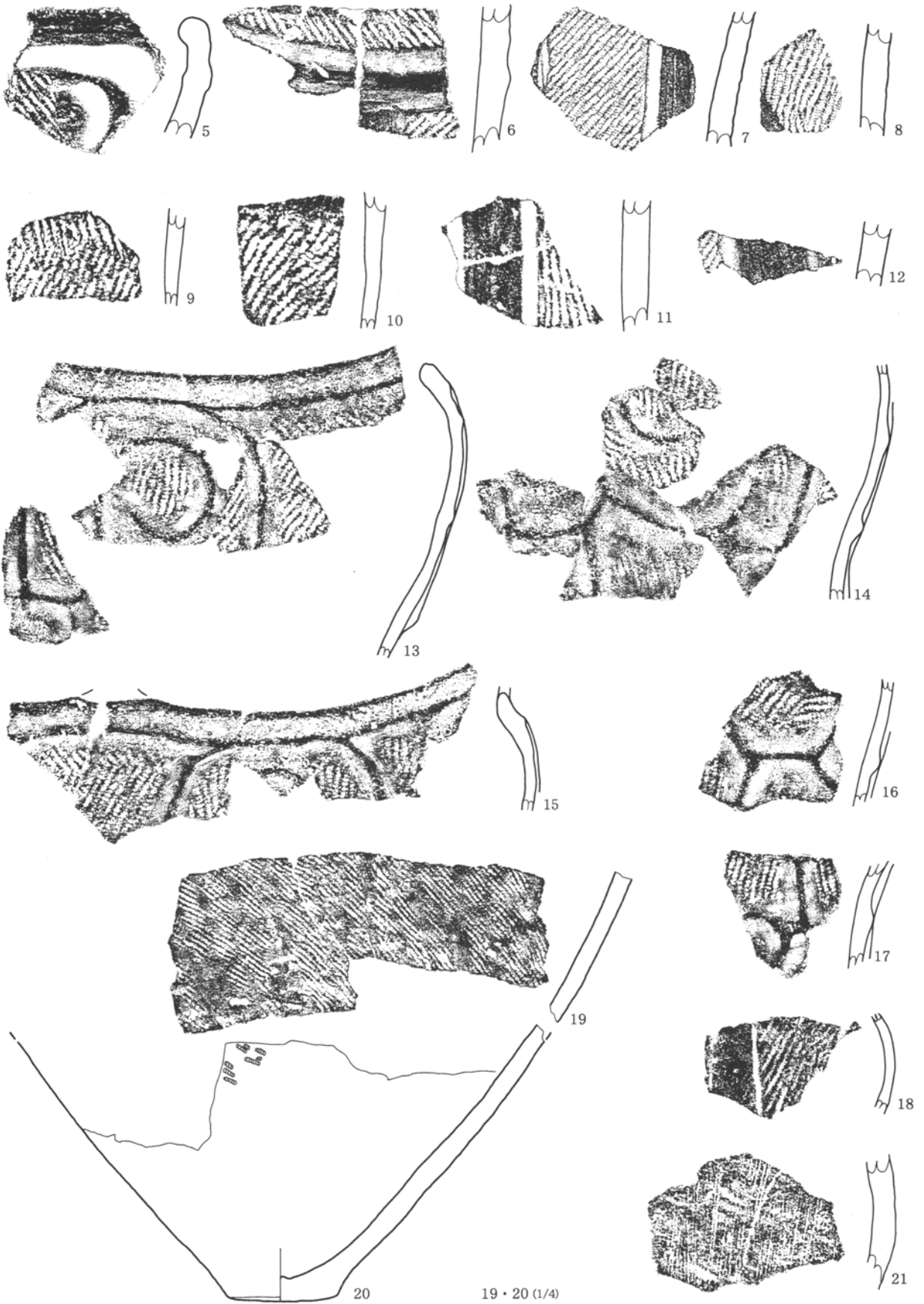


1・2(1/4)



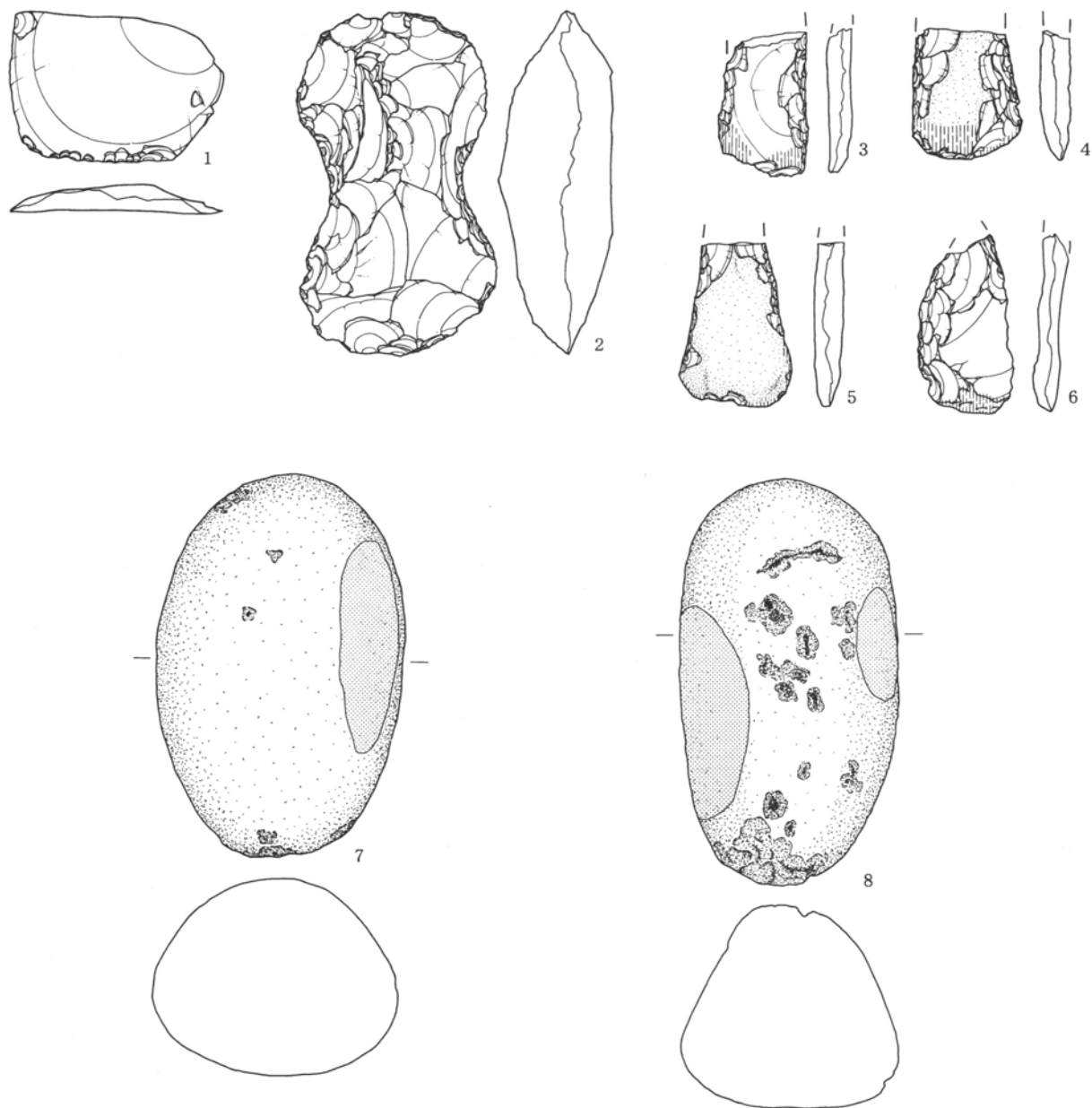
第19図 A区20号住居跡・出土遺物 (1)

1. 縄文時代の遺構と遺物



第20図 A区20号住居跡出土遺物 (2)

第3章 検出された遺構と遺物



A区20号住居跡石器計測表

No.	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
1	スクレイパー	黒色頁岩	4.4	6.4	0.9	28.6
2	打製石斧	〃	15.0	8.8	5.0	612.0
3	〃	〃	(6.4)	4.0	1.1	(38.2)
4	〃	細粒輝石安山岩	(5.7)	4.8	1.3	(51.2)

No.	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
5	打製石斧	細粒輝石安山岩	(7.2)	5.0	1.3	(54.9)
6	〃	黒色頁岩	(7.8)	4.2	1.5	(46.3)
7	磨石	粗粒輝石安山岩	22.5	14.7	11.5	5,500
8	多孔石	文象斑岩	35.5	19.2	17.8	17,000

第21図 A区20号住居跡出土遺物 (3)

A区28号住居跡（第22～25図 PL5・19・30・59）

位置 本住居跡は遺跡の北西端に近い4-C-18グリッドに位置する。近くにはA区15号、29号住居跡がある。また、A区13号住居跡と重複している。

形状 本住居跡の北側部分は、住民の生活道路に面しており、調査することができなかった。本住居跡の形状は、調査できた部分の形状および遺物が出土の様子、断面の状況などからほぼ円形と推定した。また、表土の堆積が薄く、遺構確認の段階で住居の掘り込みがはっきりしなかった。慎重に掘り下げて、床面を検出した。床面の東西方向は3.35m、南北方向は1.33mを測る。床面の面積は3.43㎡である。

構造 床高は77.85mを測る。床面の土は黒褐色土に砂質の灰黄褐色土が混じった土である。住居中央部の遺物の集中している箇所を調査した所、床下に土坑が検出された。この土坑の形状はほぼ円形で東西方向110cm、南北方向110cm、深さ26cmを測る。この土坑内およびその周囲より遺物が多く検出された。また、本住居跡では炉跡、壁周溝、柱穴等は検出されなかった。

遺物 遺物は土坑内より数多くの土器が検出された。また土坑の周囲より石器が出土している。以下土器と石器に分けて個別に説明する。

＜土器＞

1～7は同一個体と思われる。口縁部が内傾し、胴部に4単位の十字状の橋状把手をもつ樽のような器形の土器である。口縁部は幅広の無文帯を有し、その下に1条の隆帯が貼付される。その隆帯にはRLが横位に施文されている。胴部は上半に2条1組の微隆帯による渦巻を描く。胴部下半は∩字状の区画が垂下する。胴部の縄文はRLが充填されている。また、十字状の橋状把手は中央部が凹み、左右両サイドにRLが充填されている。2は橋状把手をつけた状態で図上復元した。8は内湾する無文の口縁部をもつ深鉢形土器である。口縁部と胴部文様帯との境に横位に縦長の連続刺突文を施文している。胴部文様ははっきりしない。9は渦巻が区画化されて、楕円等の区画文で構成された口縁部文様帯をもつ深

鉢形土器である。波状口縁になると思われる。縄文はLR(0段多条)が縦位に施文されている。10～14は楕円等の区画文で構成された口縁部文様帯をもつ土器である。10は太い沈線による区画の一部が見える。縄文はRL(0段多条)が横位に施文されている。11・12は隆帯による区画の一部が見える。11の縄文はRLが横位に施文されている。12はRLが斜位に施文されている。13は楕円等の区画文の一部が見える。縄文はLR(0段多条)が斜位に施文されている。14は隆帯による区画の一部が見える。口縁部文様帯内はRLが横位に施文されている。胴部はRLが縦位、横位に施文されており、部分的に羽状縄文になっている。15～24は懸垂文が垂下する胴部である。15～17の縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。18はRLRが縦位に施文されている。19はLが縦位に施文されている。20はRL(0段多条)が縦位に施文されている。21はRLRが縦位に施文されている。22はRLが縦位に施文されている。23はS字状文または蛇行文が垂下する。縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。24は磨消懸垂文が隆帯になっている胴部である。縄文はRLが縦位に施文されている。25・26は波状口縁となる深鉢形土器である。文様は沈線による波状または楕円の区画をもち、区画内に蛇行文が垂下し、地文部に蕨状文が垂下する。縄文は口縁に沿ってRL(0段多条)が横位に1段ないし2段施文され、以下は縦位に施文されており、羽状縄文となっている。25・26は同一個体と思われる。27・28は2条1組の沈線による波状文を描く土器である。27は地文部にS字状文または蛇行文が垂下すると思われる。縄文はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。28は平口縁となる深鉢形土器である。縄文はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。29・30は胴部上半に2条1組の沈線による渦巻を描く深鉢形土器である。29は口縁部に太い沈線が横位に施文されている。縄文はLR(0段多条)が横位に施文さ

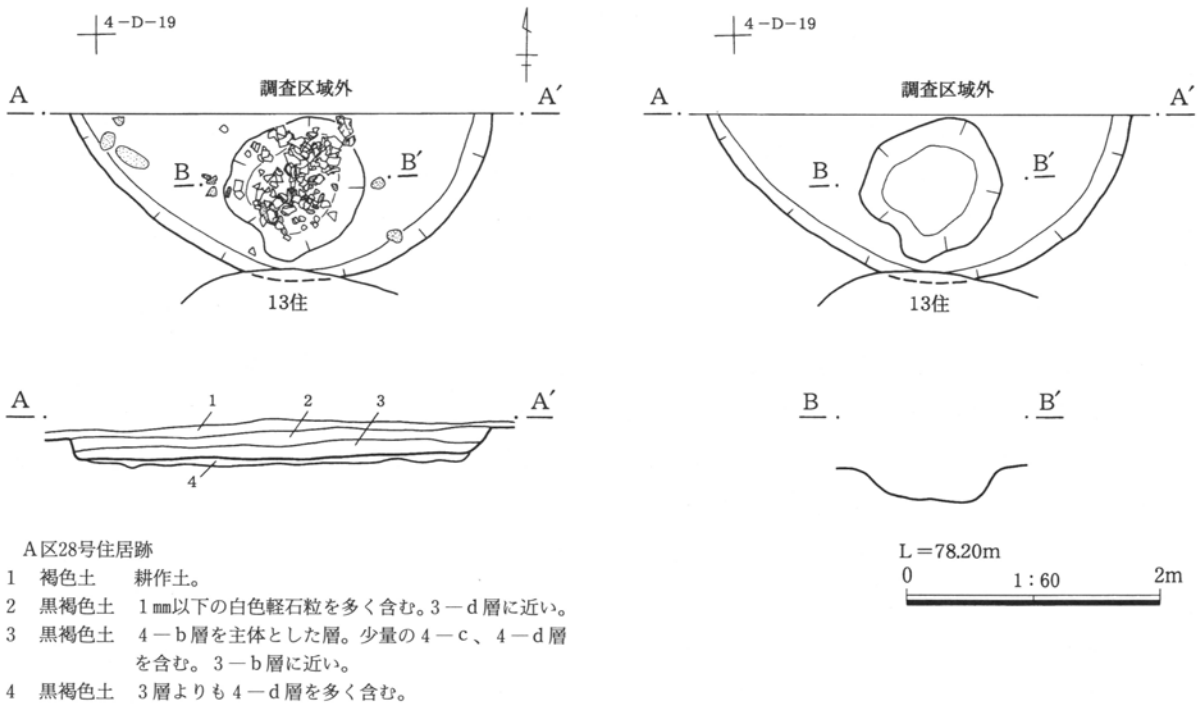
第3章 検出された遺構と遺物

れている。30は2条の沈線による渦巻文の間にLRが充填されている。口縁部は横位に施文されており、一部で羽状縄文になっている。31は口縁部無文帯をもち、胴部上半から懸垂文が垂下する土器である。縄文は横位の沈線の下はRLが横位に、以下は縦位に施文されており、羽状縄文になっている。32は微隆帯による文様構成をもつ土器である。胴部上半に隆帯による渦巻区画をもつ可能性もある。33は橋状把手をもつ土器である。把手付近に楕円区画で構成される文様帯をもつ。胴部下半は条線が施文されている。縄文はRLが縦位に施文されている。34・35は微隆帯による円字状の区画あるいは楕円区画をもつと思われる土器である。34は波状口縁となる。縄文はLRが縦位に施文されている。35はRL（0段多条）が縦位に施文されている。36～39は条線を地文にしている土器である。36は口唇部に横位に沈線

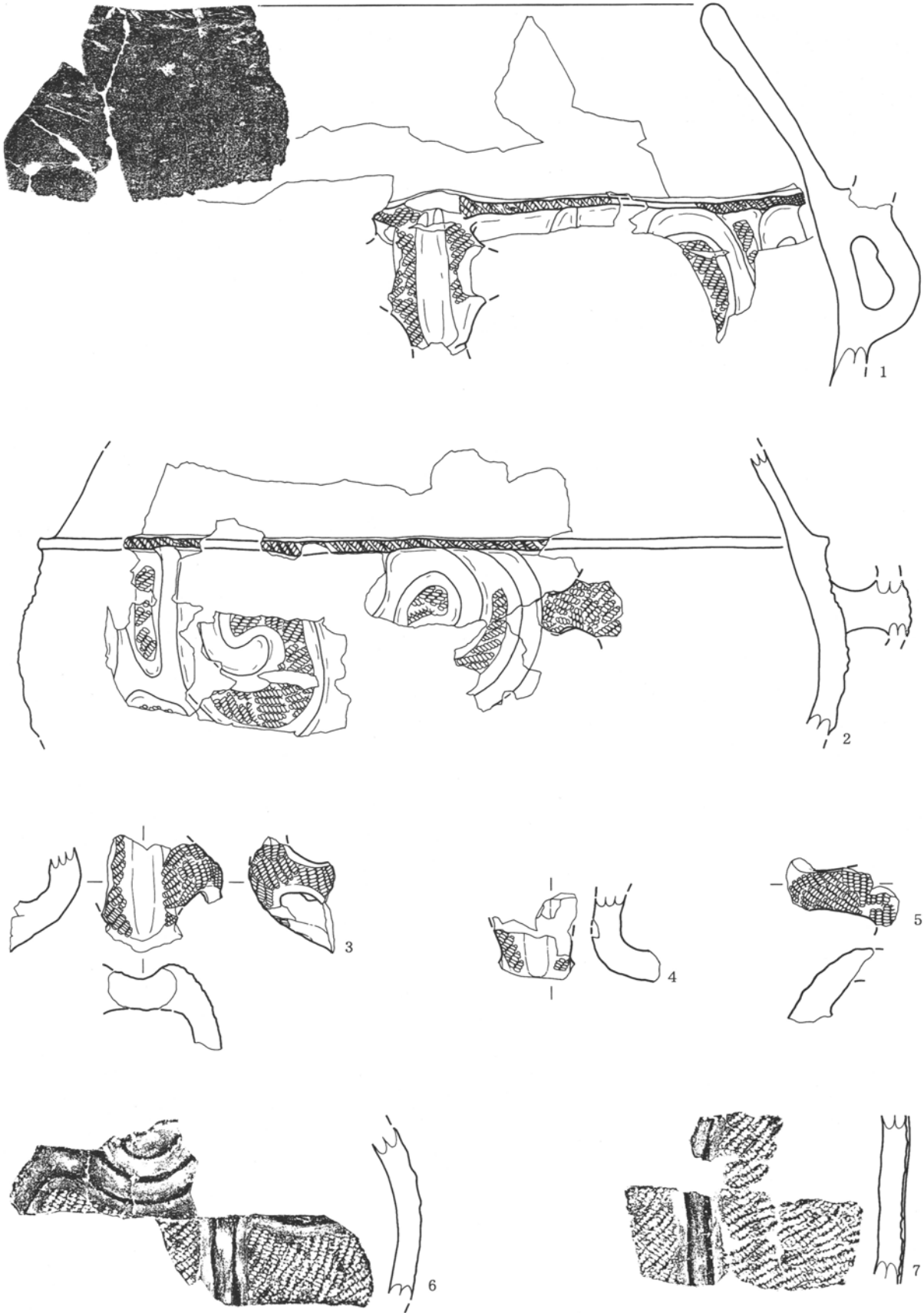
が施文されている。条線は縦位に施文されている。37は口唇部から条線が施文されている。38・39は条線だけの胴部である。38はコンパス文になっている。40は沈線が垂下する胴部である。41は懸垂文が垂下する胴部及び底部である。縄文はRLRが縦位に施文されている。8は第2群土器、1～33・41は第3群土器、34～39は第4群土器、40は第5群土器に属する。

<石器>

出土した石器には、スクレイパーが3点、打製石斧が1点、敲石が1点、凹石が1点、磨石が2点ある。これらの石器に使用される石材には、スクレイパーに黒色頁岩、打製石斧に細粒輝石安山岩、敲石に粗粒輝石安山岩、凹石に粗粒輝石安山岩、磨石に粗粒輝石安山岩が使用されている。

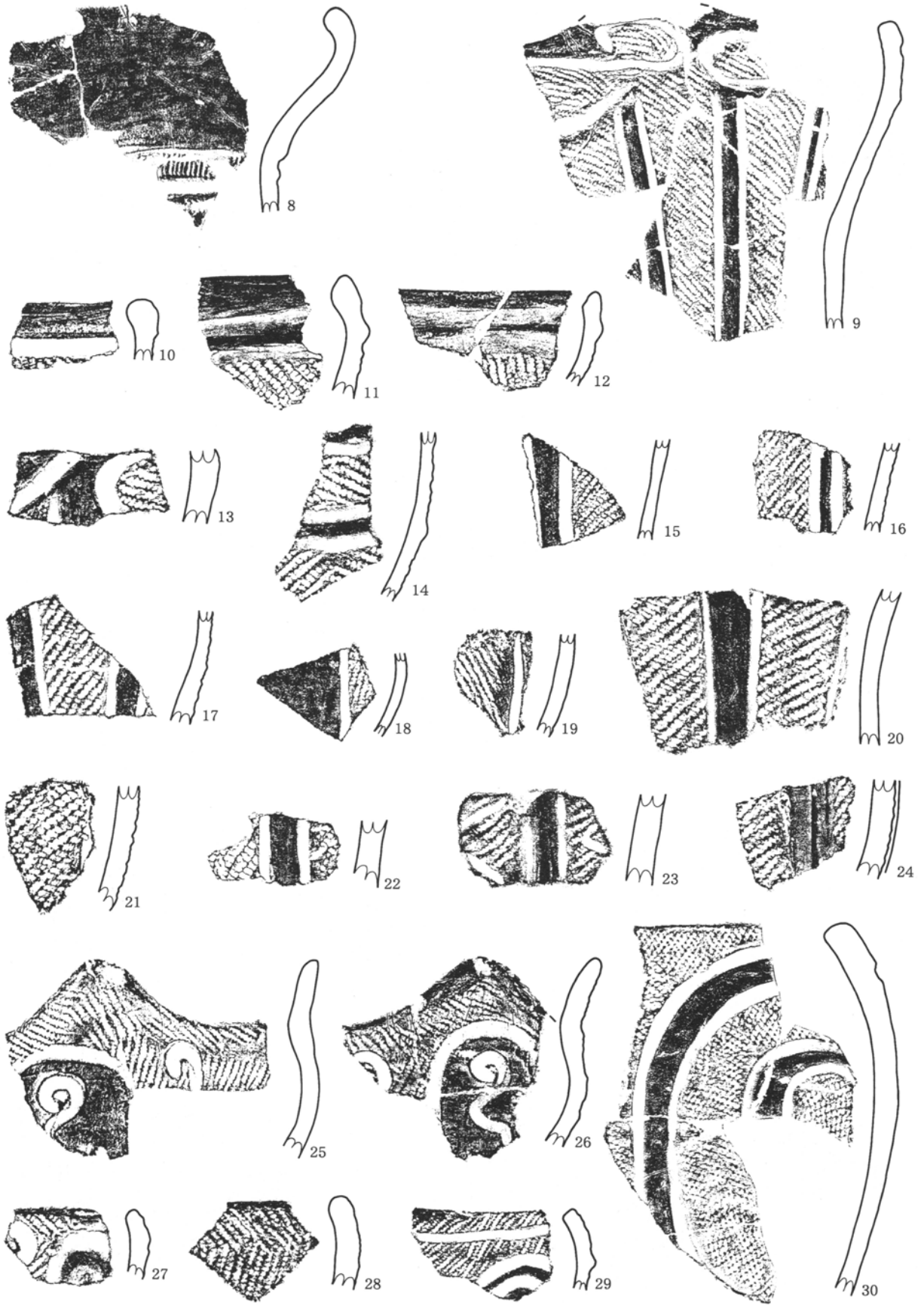


第22図 A区28号住居跡・掘り方



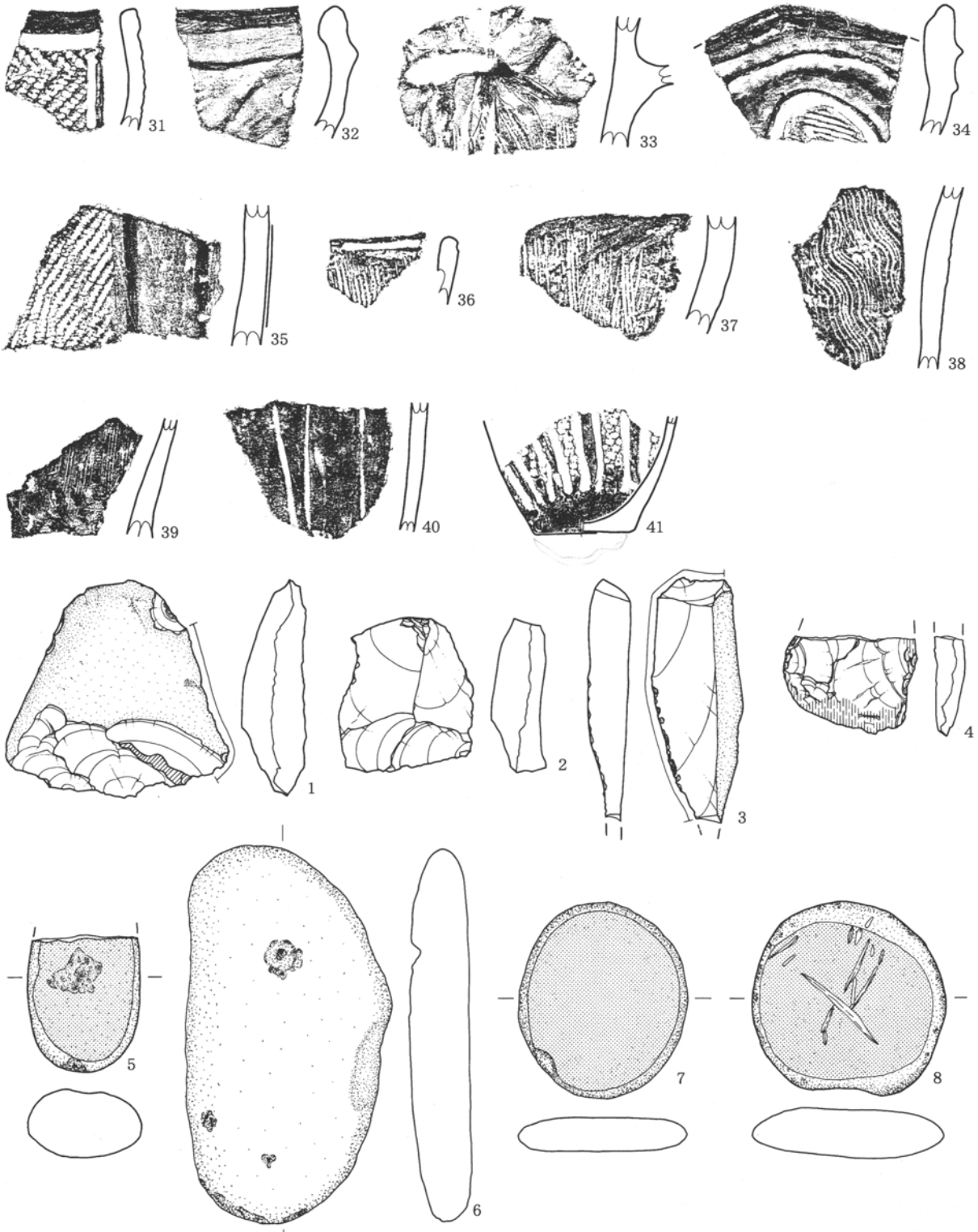
1~7(1/4)

第23図 A区28号住居跡出土遺物 (1)



第24図 A区28号住居跡出土遺物 (2)

1. 縄文時代の遺構と遺物



A区28号住居跡石器計測表

No.	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
1	スクレイパー	黒色頁岩	7.1	7.3	2.1	97.6
2	〃	〃	5.1	4.5	1.8	36.9
3	〃	〃	(8.1)	3.0	1.5	(28.6)
4	打製石斧	細粒輝石安山岩	(4.9)	6.5	(1.5)	(62.3)

No.	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
5	敲石	粗粒輝石安山岩	(9.0)	7.4	(4.5)	(506)
6	凹石	〃	24.6	13.6	4.4	1,939
7	磨石	〃	12.7	11.1	2.2	455
8	〃	〃	12.6	12.6	3.3	691

第25図 A区28号住居跡出土遺物 (3)

第3章 検出された遺構と遺物

A区29号住居跡 (第26・27図 PL 6・31・59)

位置 本住居跡は遺跡の北西端近くの4-D-18グリッドに位置する。近くには、A区15号、28号住居跡がある。

形状 本住居跡の北側及び北西部分は、住民の生活道路に面しており、調査することができなかった。調査できた部分及び、出土した土器の状況、断面に現れた住居跡の立ち上がりの様子から本住居跡はほぼ円形と考えられる。A区28号住居跡と同様、表土の堆積が薄く、遺構確認の段階で掘り込みを確認するのに苦労した。慎重に掘り下げて、床面を検出した。住居跡の南北方向は1.13mを測る。床面の面積は1.68㎡である。

構造 床高は77.80mを測る。床面の土は黒褐色土に砂質の灰黄褐色土が混じった土である。炉跡、壁周溝、柱穴等は検出されなかった。

遺物 以下、出土した土器と石器を個別に説明する。

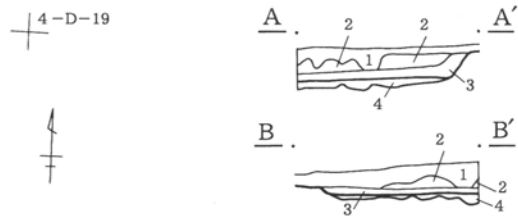
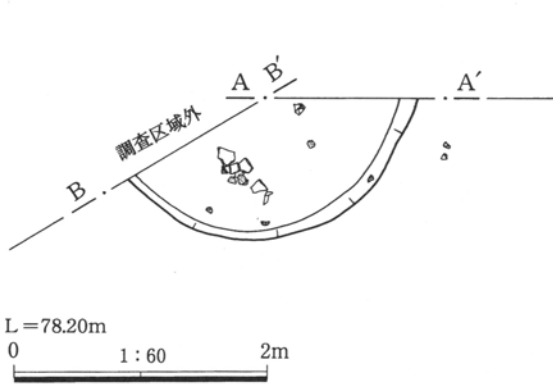
<土器>

1は波状口縁となる深鉢形土器である。楕円等の区画文を有する口縁部文様帯をもつ。口縁部文様帯

の区画文は太い沈線により描かれる。胴部には懸垂文が垂下する。懸垂文内の縄文はLRが縦位に施文されている。2～8は懸垂文が垂下する胴部である。2はRLが縦位に施文されている。3はRL(0段多条)が縦位に施文されている。4・5はLR(0段多条)が縦位に施文されている。6は磨消懸垂文が3本の沈線により区画されている。懸垂文内の縄文はRLが縦位に施文されている。7は縄文が施文された中に蕨状文あるいはS字状文が垂下する。縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。8は地文がなく、沈線により渦巻等の文様を描く胴部である。9は条線が施文されている胴部である。1～8は第3群土器、9は第4群土器に属する。

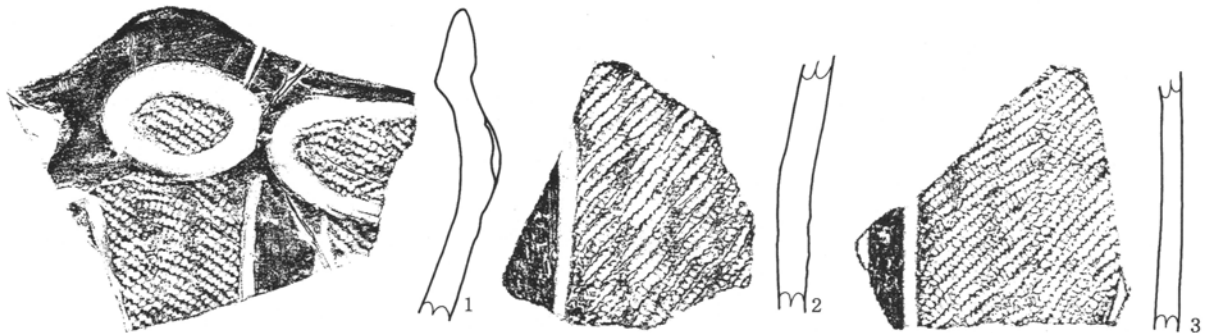
<石器>

出土した石器には、石鏃が1点、スクレイパーが2点ある。これらの石器に使用される石材には、石鏃に黒色安山岩、スクレイパーに黒色頁岩が使用されている。

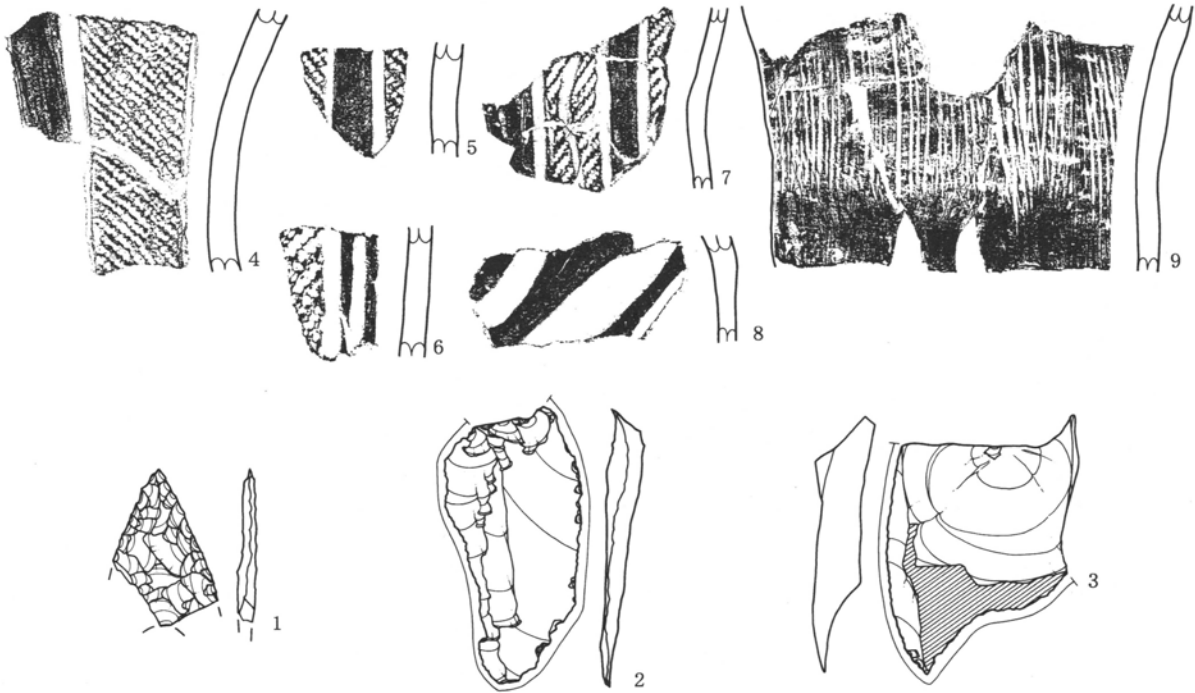


A区29号住居跡

- 1 褐色土 耕作土。
- 2 黒褐色土 1mm以下の白色軽石粒を多く含む。
- 3 黒褐色土 4-b層を主体とした層。少量の4-c、4-d層を含む。
- 4 黒褐色土 3層よりも4-d層を多く含む。



第26図 A区29号住居跡・出土遺物 (1)



A区29号住居跡石器計測表

No.	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
1	石鏃	黒色安山岩	(2.6)	(1.7)	(0.3)	(1.20)
2	スクレイパー	黒色頁岩	7.3	3.6	1.0	17.7

No.	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
3	スクレイパー	黒色頁岩	6.8	5.0	1.6	32.7

第27図 A区29号住居跡出土遺物 (2)

A区47号住居跡 (第28図 PL 6・31)

位置 本住居跡は遺跡のやや西よりの3-M-18グリッドに位置する。近世のA区13号、14号溝と重複している。本住居跡の近くにはA区70号住居跡がある。

形状 本住居跡の形状はほぼ円形を呈する。住居の規模は東西方向3.24m、南北方向3.06mを測る。床面の面積は4.35㎡である。

構造 近世のA区13号、14号溝の調査の際、溝の下層より縄文時代の遺物が集中して出土した。そのため、遺物に注意して慎重に調査を進めたところ、住居跡の床面が検出された。炉跡、壁周溝、柱穴等は検出されなかったが、遺物の出土状況及び床面の検出等を考慮して本遺構を住居跡とすることにした。床面の土は黒褐色土に砂質の灰黄褐色砂質土が混じった土である。床高は78.31mを測る。

遺物 遺物は床面中央部に多く出土している。以下、主に土器について個別に説明する。

<土器>

1～3は懸垂文が垂下する胴部である。1はRLが縦位に施文されている。2・3はLRが縦位に施文されている。4～8は胴部上半に隆帯で区画された渦巻を描くと思われる土器である。4はLRが縦位に施文されている。5はRL(0段多条)が充填されている。6はLRが充填されている。7はRLが充填されている。8は胴部下半にU字状の区画が垂下する胴部である。区画内の縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。9～12は胴部上半にW字状の文様構成をもつ土器と思われる。9の区画内はRL(0段多条)が縦位に施文されている。10はRLが縦位に施文されている。11はRL(0段多条)が縦位に施文されている。12は胴部下半にあたり、2条の沈線による区画が垂下している。胴部上半は9・10と同様な文様構成をもつと思われる。縄文はLRが充填されている。13はくの字状に外傾す

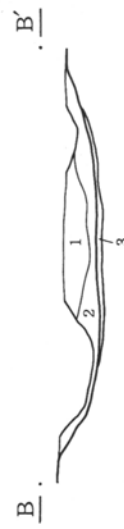
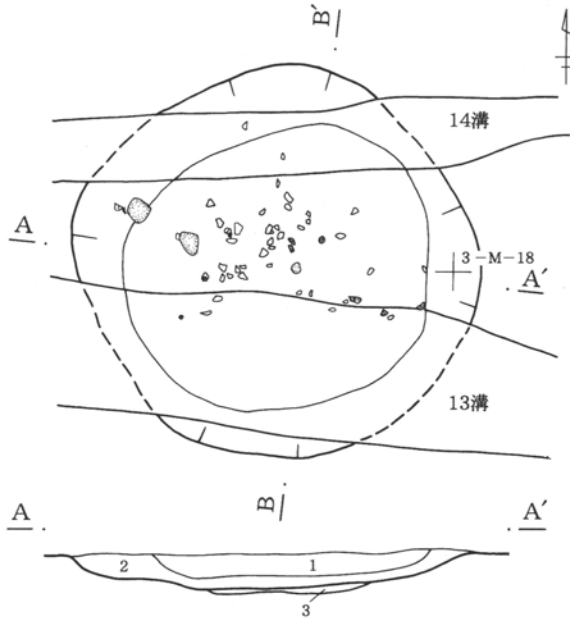
第3章 検出された遺構と遺物

る幅広の口縁部無文帯をもつ浅鉢形土器と思われる。口縁部無文帯下に1条の隆帯が貼付されている。14は隆帯で区画された懸垂文が垂下する胴部である。縄文はLR(0段多条)が縦位に施文されている。15は条線が施文されている胴部である。横位の沈線が施文されており、口縁部文様帯をもつ可能性

もある。16・17は底部である。16は上げ底になっている。1~13は第3群土器、14・15は第4群土器に属すると思われる。

<石器>

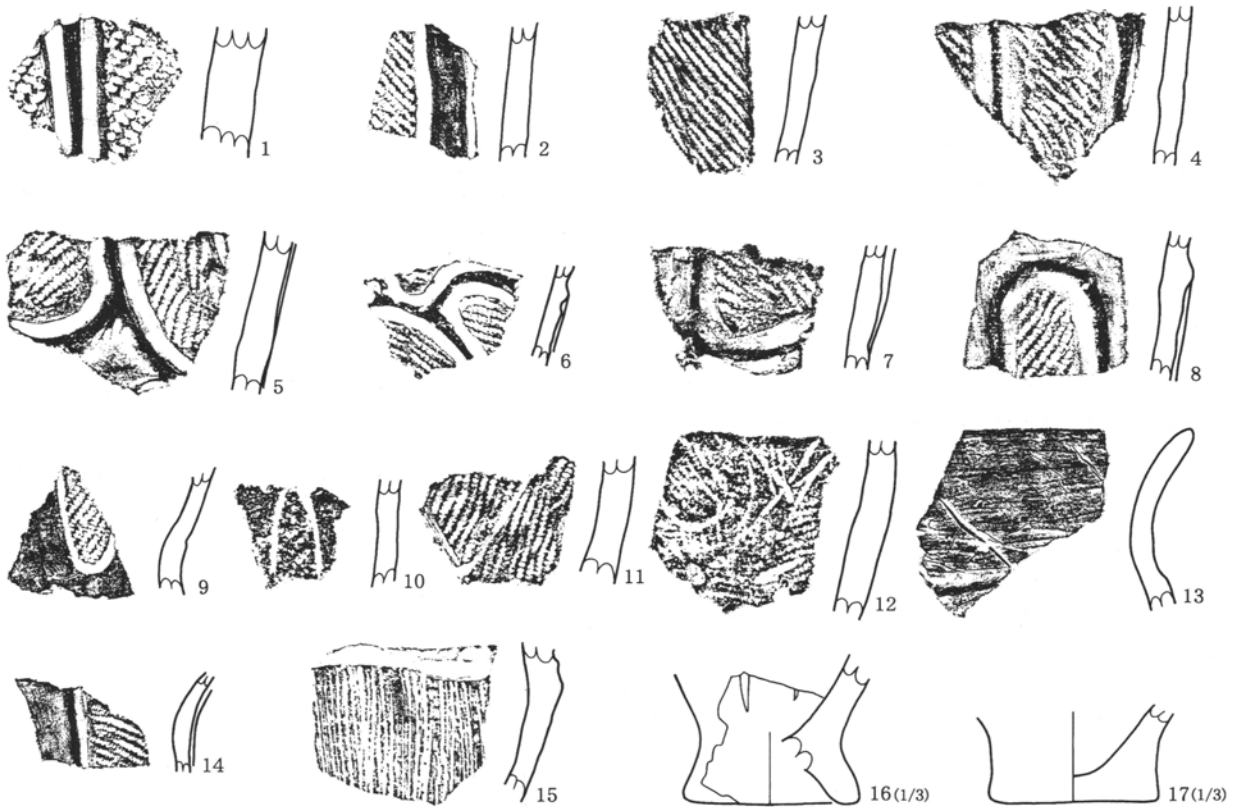
出土した石器には黒色安山岩、黒色頁岩のフレーク・破片や黒色安山岩の打製石斧の破損品がある。



A区47号住居跡

- 1 黒褐色土 4-b層を主体とした層。2~3mmの砂粒を多く含む。6mm前後の砂粒を少量含む。
- 2 黒褐色土 4-b層を主体とした層。4-d層の砂質土を少量含む。
- 3 黒褐色土 4-b層を主体とした層。4-d層の砂質土を多く含む。

L=78.80m
0 1:60 2m



第28図 A区47号住居跡・出土遺物

A区67号住居跡 (第29～31図 PL7・31・32)

位置 本住居跡は遺跡の南端近くの3-J-10グリッドに位置している。近くには縄文時代の遺構はあまり検出されていない。この住居跡は古墳時代の7号方形周溝墓の方台部から検出された。

形状 本住居跡の形状はほぼ円形を呈する。住居の規模は東西方向5.36m、南北方向5.36mを測る。床面の面積は20.68㎡である。

構造 床高は78.93mを測る。床面の土は黒褐色土に砂質の黄褐色土が混じった土である。床面中央部から土坑が検出された。この土坑は当初、炉跡ではないかと調査を進めたが、炭や焼土等が検出されなかったこともあり、炉跡として判断するのは無理があると考えて、土坑とすることにした。また、床面からピットも検出されているが、これらについても柱穴と判断しにくいのでピットとして記載することにした。ピットの形状は円形で径14～39cm、深さ7～9cmを測る。壁周溝は検出されなかった。

遺物 遺物は床面から土器を中心に数多く出土している。以下、主に土器について個別に説明する。

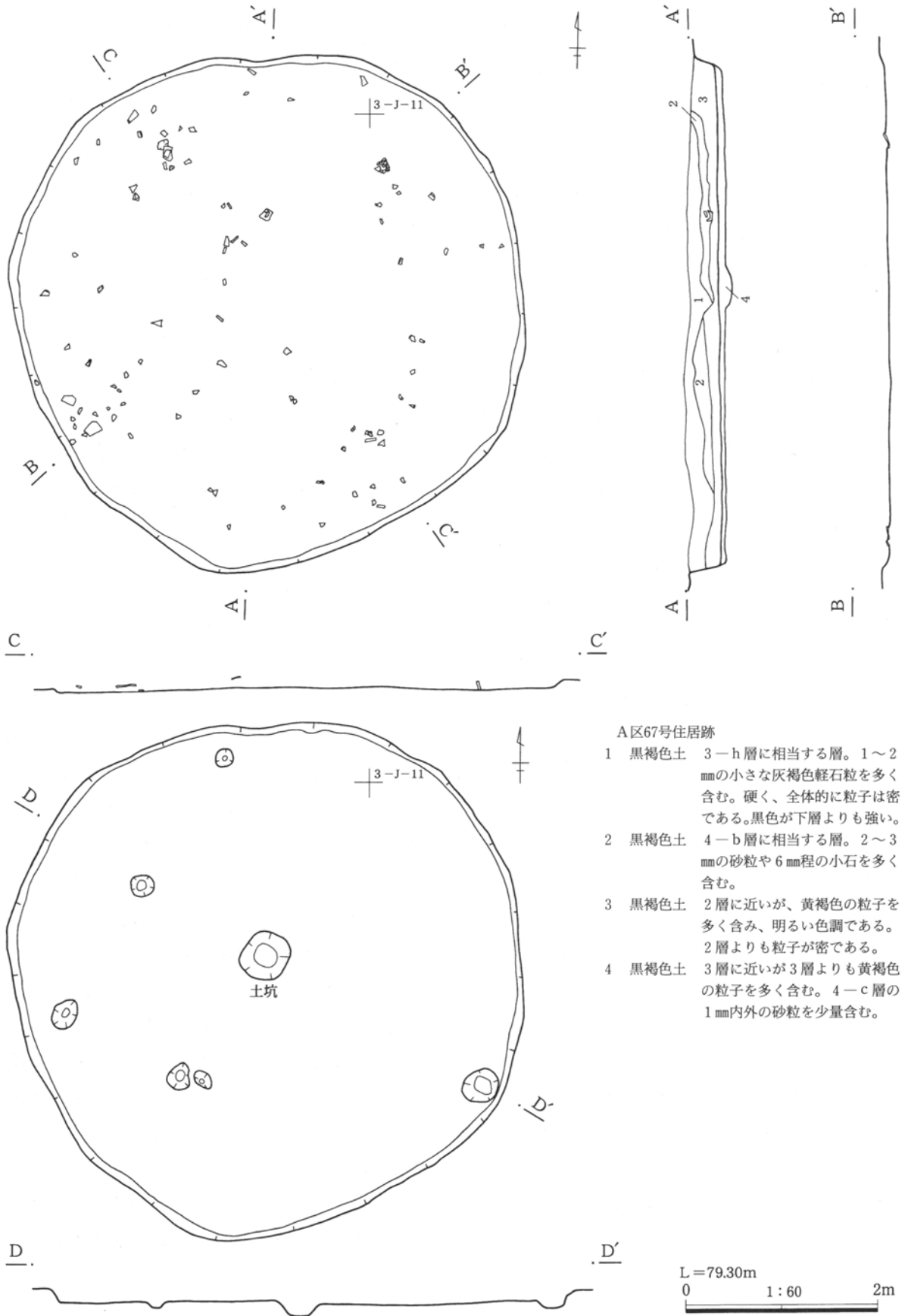
<土器>

1～8は胴部上半にW字状の文様構成をもつ土器である。1は波状口縁となる深鉢形土器である。幅の狭い口縁部無文帯の下に1条の細い沈線が引かれ、胴部にW字状の文様構成をもつ。縄文はLR(0段多条)が充填されている。2・3の縄文はLR(0段多条)が縦位に施文されている。4はRL(0段多条)が縦位に施文されている。5はLR(0段多条)が縦位に施文されている。6・7はLRが縦位に施文されている。8はRL(0段多条)が縦位に施文されている。9～14は胴部上半に沈線によるO字状の文様構成をもつ土器である。9～11は同一個体と思われる。縄文はLRが9・10は縦位に、11は横位、縦位に施文されている。11は波頂部が前面にでる器形である。12は4単位に小突起をもつ。縄文

はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。13は胴部上半に沈線による文様はみられないが、口縁部無文帯下の沈線が斜め上にのびる気配があり、沈線によるO字状の文様をもつと思われる。縄文はLRが横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。しかし、胴上半部に渦巻を描く可能性もある。14は幅の狭い口縁部無文帯をもち、胴部上半にO字状の文様構成を有すると思われる土器である。縄文はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。15の縄文はLRが縦位に施文されている。16は口縁部無文帯をもつ土器である。微隆帯により口縁部と胴部文様との区画をなす。胴部は縄文のみが施文されているが、懸垂文が垂下する可能性がある。縄文はRL(0段多条)が充填されている。17～20は微隆帯による区画になっている懸垂文が垂下する胴部である。17・18はRL(0段多条)が縦位に施文されている。19はRL(0段多条)が充填されている。20はRL(0段多条)が縦位、横位、斜位に施文されている。21は口縁部に橋状把手をもつ深鉢形土器である。口縁部は無文帯をもつ。胴部に沈線または隆帯による文様構成はみられず全面縄文が施文されている。縄文はLR(0段多条)が充填されている。22は口縁部無文帯をもつ土器である。口縁部の下に縄文が施文されていると思われるが、はっきりしない。23は縄文が施文されているのみの胴部である。縄文はLR(0段多条)が充填されている。24は懸垂文が垂下する胴部である。25はケズリの痕跡のある底部である。文様は見られないが、器形から後期の土器の底部と思われる。1～15・24は第3群土器、16～23は第4群土器に属する。

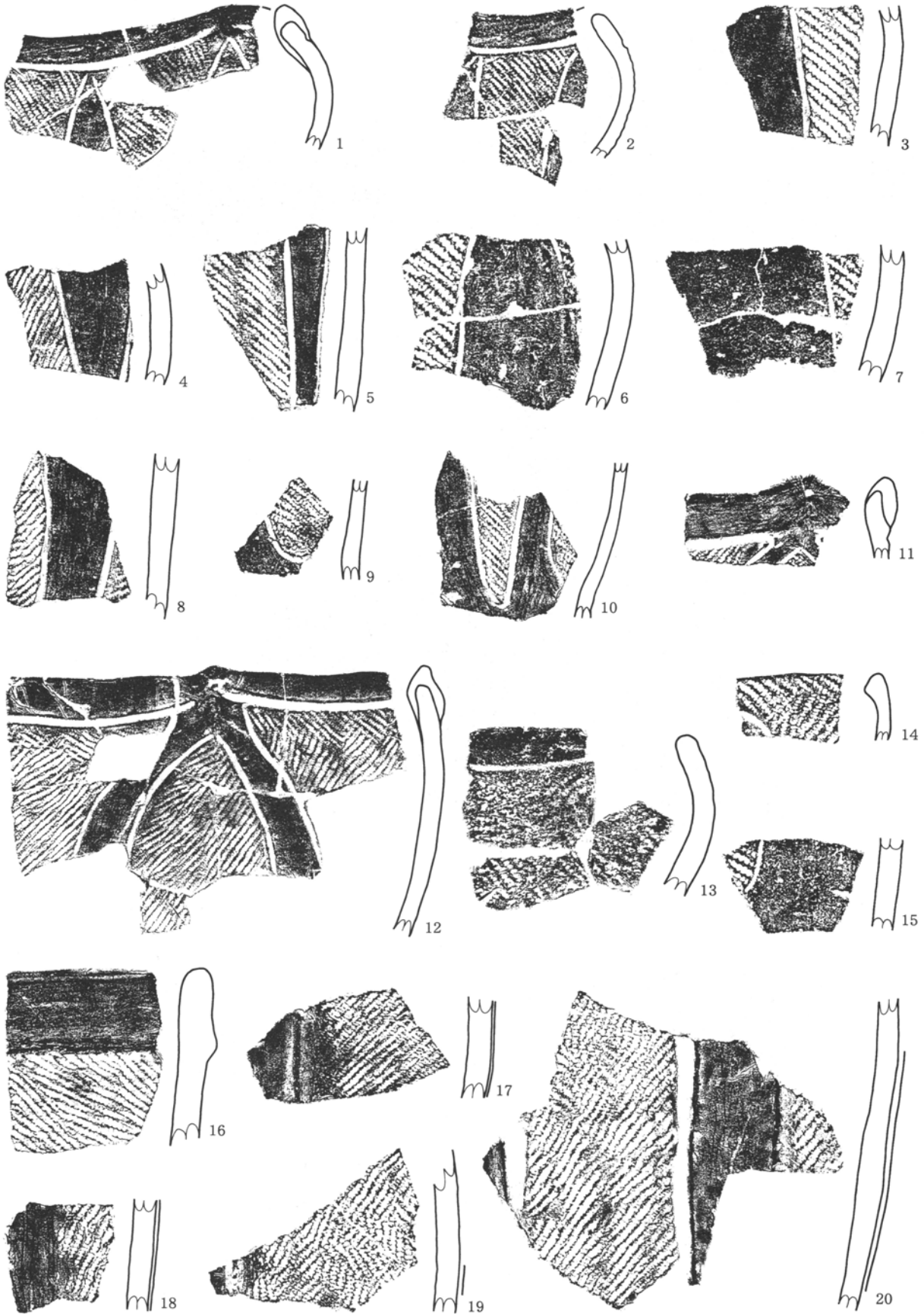
<石器>

出土した石器には黒色安山岩、黒色頁岩のフレーク・碎片や頁岩製の打製石斧の破損品がある。

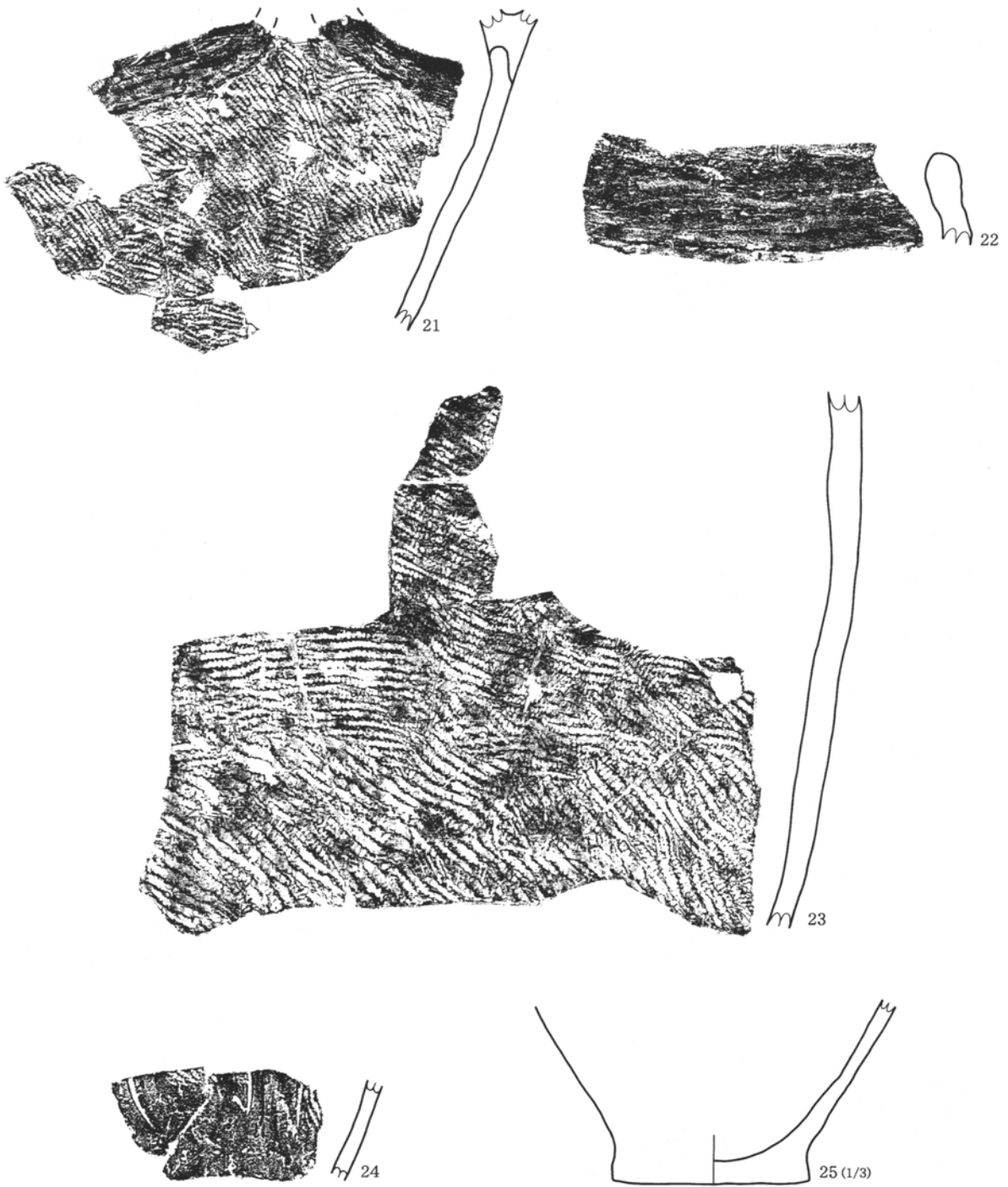


第29図 A区67号住居跡・掘り方

1. 縄文時代の遺構と遺物



第30図 A区67号住居跡出土遺物 (1)



第31図 A区67号住居跡出土遺物 (2)

A区70号住居跡 (第32・33図 PL7・32・59)

位置 本住居跡は遺跡のやや北寄りの3-K-19グリッドに位置する。本住居跡の近くには、A区79号、80号土坑、9号土器群がある。

形状 本住居跡の南側は住民の生活用道路に面しており、調査することができなかった。そのため、本住居跡の調査は北側部分のみである。本住居跡の形状は炉跡の位置、断面での住居跡の確認作業等から円形または楕円形と思われる。検出した住居の規模は東西方向5.39m、南北方向2.40mである。床面の面積は10.82㎡を測る。

構造 住居範囲を確認するために、道路の端まで拡張して少しずつ掘り進めたところ、石囲いの炉跡が検出された。

この炉跡は大小様々な8個の自然石でほぼ円形に組まれており、本住居の中央部よりやや東に位置する。炉の規模は南北方向で1.2m、東西方向で1.18mを測る。炉を構成する石の石材は粗粒輝石安山岩・ひん岩で、石のいくつかは火を受けて表面がはげている。炉跡を構成する石の中で最大のものは長さ36.9cm、幅20.5cm、厚さ10.7cm、重さ9,900gである。炉内から炭や焼土粒は検出されていない。

住居覆土の見極めが難しく、慎重に調査を進めたが、始めの段階で本住居跡の北端は床面より下げてしまったと思われる。炉跡周囲の床面から判断すると、道路面から30cm程掘り下げた位置が床面である。床高は78.65mを測る。床面は黒褐色土に明黄褐色土の砂粒を含む土である。なお、柱穴、壁周溝等は検出されなかった。

遺物 炉跡の周囲から遺物が出土している。以下、土器と石器に分けて個別に説明する。

<土器>

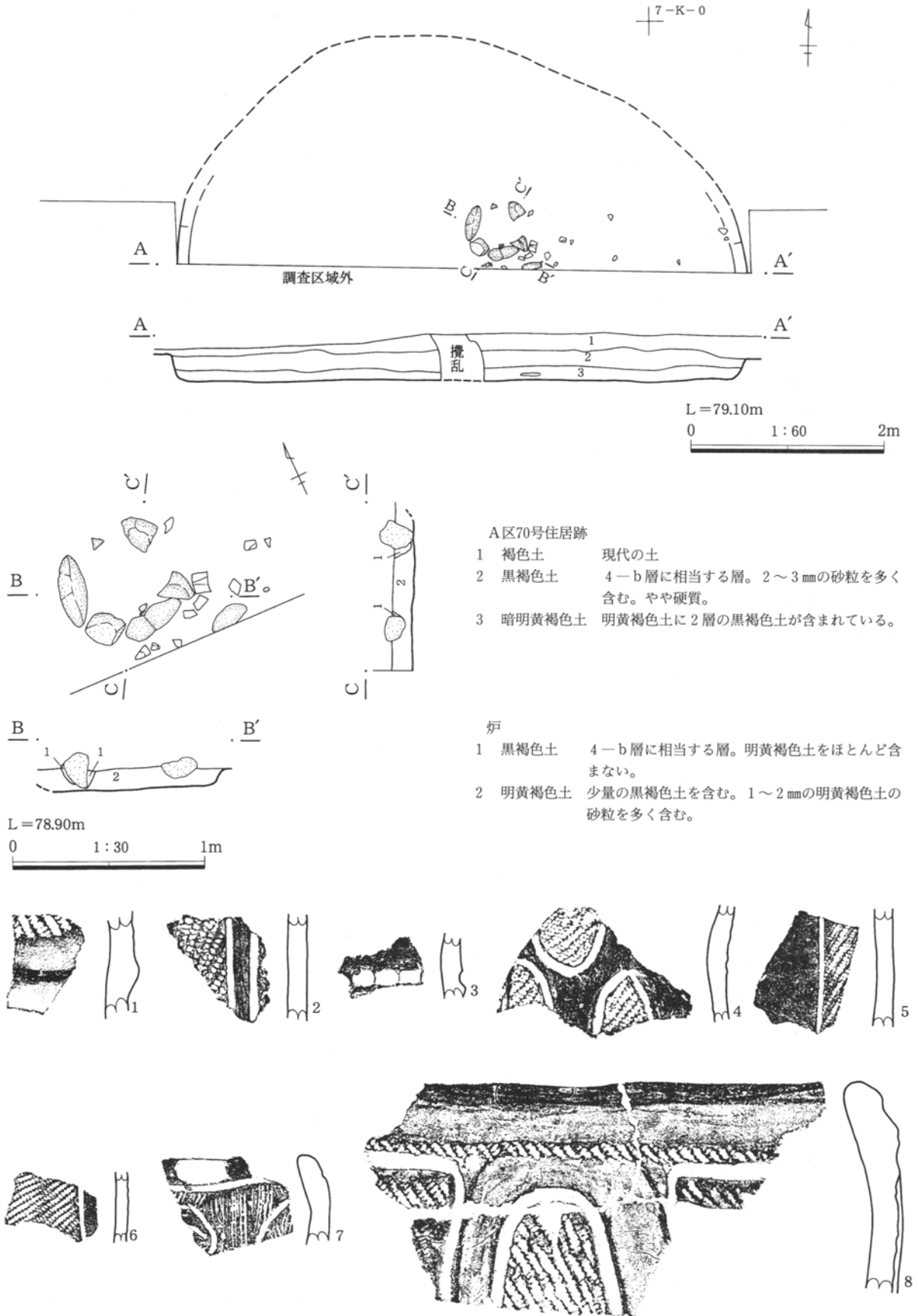
1は楕円等の区画文で構成された口縁部文様帯をもつ土器である。隆帯による区画の一部が見える。

縄文はRL(0段多条)が横位に施文されている。

2は懸垂文が垂下する胴部である。縄文はRLが縦位に施文されている。3は胴部中程に刺突列をもつ土器である。4～6は胴部上半にW字状の文様構成をもつ土器である。4の縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。5の縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。6はRLが縦位に施文されている。7は口縁部無文帯をもち、沈線による渦巻と思われる文様が描かれている。地文は条線である。8～10は口縁部無文帯をもち、微隆帯による∩字状の区画が垂下する、または楕円区画を有する土器である。8は口縁部無文帯下に微隆帯が横位に貼付される。この微隆帯にはRL(0段多条)が横位に施文されている。胴部上半もRL(0段多条)が横位に施文されている。9の縄文はRL(0段多条)が充填されている。10は胴部上半に微隆帯による楕円区画をもつ土器である。胴部下半には∩字状の区画が垂下すると思われる。縄文はRLが縦位、横位に施文されており、羽状縄文を呈する。またこの土器の欠け口には、土器製作の際の接合痕がよく残っていた。11は縄文のみの胴部である。RLが横位に施文されている。12は条線のみの胴部である。13はJ字状の文様構成をもつと思われる。縄文はRLが充填されている。1～7は第3群土器、8～12は第4群土器、13は第5群土器に属する。

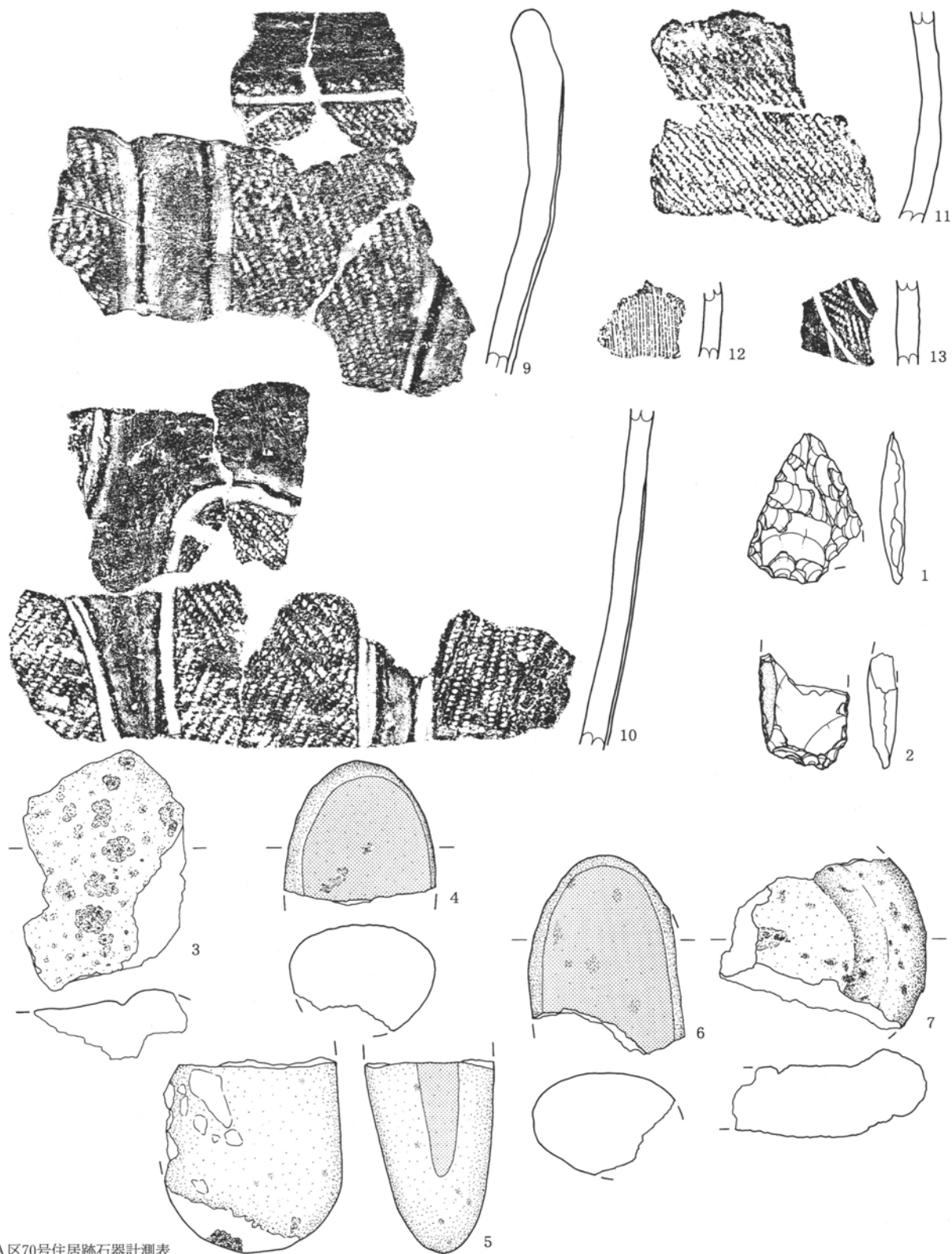
<石器>

出土した石器には、石鏃が1点、打製石斧が1点、多孔石が1点、台石が3点、石皿が1点ある。これらの石器に使用される石材には、石鏃に黒色安山岩、打製石斧に細粒輝石安山岩、多孔石に粗粒輝石安山岩、台石に粗粒輝石安山岩、石皿に粗粒輝石安山岩が使用されている。



第32図 A区70号住居跡・炉・出土遺物 (1)

1. 縄文時代の遺構と遺物



A区70号住居跡石器計測表

No.	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
1	石鏃	黒色安山岩	3.2	(2.3)	0.5	(2.90)
2	打製石斧	細粒輝石安山岩	(5.9)	(4.5)	(1.5)	(29.9)
3	多孔石	粗粒輝石安山岩	(23.9)	(16.3)	(6.9)	(1,969)
4	台石	〃	(14.5)	(15.3)	(10.5)	(2,554)

No.	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
5	台石	粗粒輝石安山岩	(19.4)	(17.9)	(12.9)	(6,130)
6	〃	〃	(19.9)	(15.7)	(10.2)	(3,366)
7	石皿	〃	(17.0)	(20.5)	(8.7)	(2,338)

第33図 A区70号住居跡出土遺物 (2)

A区71号住居跡(第34~39図 PL 8・9・20・33・34・60)

位置 本住居跡は遺跡の北端である7-M-1グリッドに位置する。本住居跡南側を平安時代のA区69号住居の竈跡に、南東部を奈良・平安時代のA区7号溝に掘り込まれている。また本住居跡の上位及び北側部分に、数多くの土器が出土した。本住居跡の範囲をこえて出土した土器については8号土器群として一括呼称した。なお、A区8号土器群と本住居跡の関係については、A区8号土器群のところで詳述する。

形状 本住居跡の形状は、重複を受けている住居の南側及び南東部分ははっきりしないが、検出された炉跡を中心に据えたほぼ円形と思われる。住居の規模は東西方向3.88m、南北方向4.38mを測る。床面の面積は10.54㎡である。

構造 本住居跡の床高は78.45mである。床面は2~3mmの砂粒を多く含む黒褐色土に粘性の強い紫黒色土が混入した土で出来ている。また、床面から炉跡、埋甕が各1基検出された。

炉跡は埋設した土器を使用している。炉本体に使用された土器は6の土器である。外傾する口縁の一部と胴部下半および底部が欠損していた。また、この土器全体が熱を受けていて大変脆い。炉の中程から、1の土器が炉に敷きつめられたように検出された。炉の覆土は住居覆土に近い黒褐色土が主であるが、少量の灰を含む。

埋甕は2の土器である。胴部下部及び底部が欠損している。口縁部を上にして、正位に埋設されていた。この埋甕の内側及び周囲に数多くの土器が出土した。その多くは3の土器になっている。埋甕の覆土は住居覆土に近い黒褐色土が主体で、やや黒色が強い。焼土や灰は検出されなかった。本住居跡から壁周溝、柱穴等は検出されていない。

遺物 炉跡、埋甕付近に数多くの遺物が出土している。以下、土器と石器に分けて個別に説明する。

<土器>

1は炉内から検出された土器である。頸部に無文帯をもつ深鉢形土器である。4単位の小突起をもつ

波状口縁となる。口縁部文様帯は隆帯による区画が目立ち、S字状になっている渦巻と円形、楕円形等の区画文で構成されている。胴部上半に2条1組の隆帯による大きな渦巻が描かれる。この渦巻に4つの渦巻がつき、その周囲及び内側は不定形の区画文になっている。胴部下半はΠ字状の区画が垂下する。縄文は口縁部文様帯の区画内はRLが横位に施文されている。胴部上半はRLが横位、縦位、斜位に施文されている。胴部下半はRLが縦位に施文されている。2は埋甕の本体の土器である。平口縁となる深鉢形土器である。渦巻が区画文化し、楕円等の区画文で構成された口縁部文様帯をもつ。胴部は懸垂文が垂下するが、懸垂文内に縦位に沈線が垂下するところもある。また3条1組の沈線による磨消懸垂文が垂下する部分もある。縄文はRL(0段多条)が口縁部文様帯の区画内は斜位に施文されている。胴部は縦位に施文されているのが主であるが横位、斜位に施文されているところもある。3は埋甕の内側及び周囲から出土した土器である。2と同様に楕円等の区画文で構成された口縁部文様帯をもつ深鉢形土器である。口縁部文様帯は沈線による区画が目立つ。胴部は懸垂文が垂下する。縄文は口縁部文様帯の区画内はRが横位に施文されている。胴部はRLRが縦位に施文されている。4も平口縁となる深鉢形土器である。楕円等の区画文で構成された口縁部文様帯をもつ。胴部の懸垂文内に蛇行文が垂下する。縄文はRLが口縁部文様帯内は縦位、斜位に、胴部は縦位に施文されている。5は4単位の舌状突起をもつ深鉢形土器である。舌状突起の内側には沈線による渦巻状の文様が描かれている。口縁部文様帯には区画化された渦巻と楕円等の区画文で構成される。胴部は懸垂文の上端がΠ字状になっている。そのΠ字状の懸垂文の中に蛇行文が垂下する。また、蕨状文の下にΠ字状の磨消懸垂文が垂下したり、懸垂文が楕円区画になっているところもある。縄文はRLが口縁部文様帯内は横位に、胴部は縦位に施文されている。6は炉本体に使われた土器である。幅

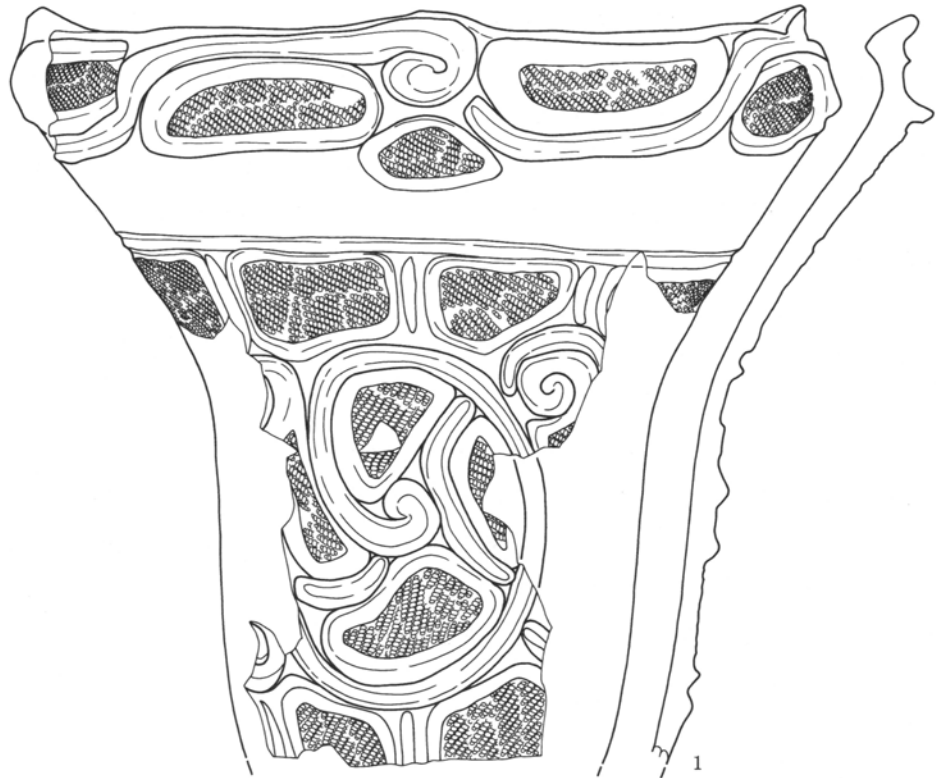
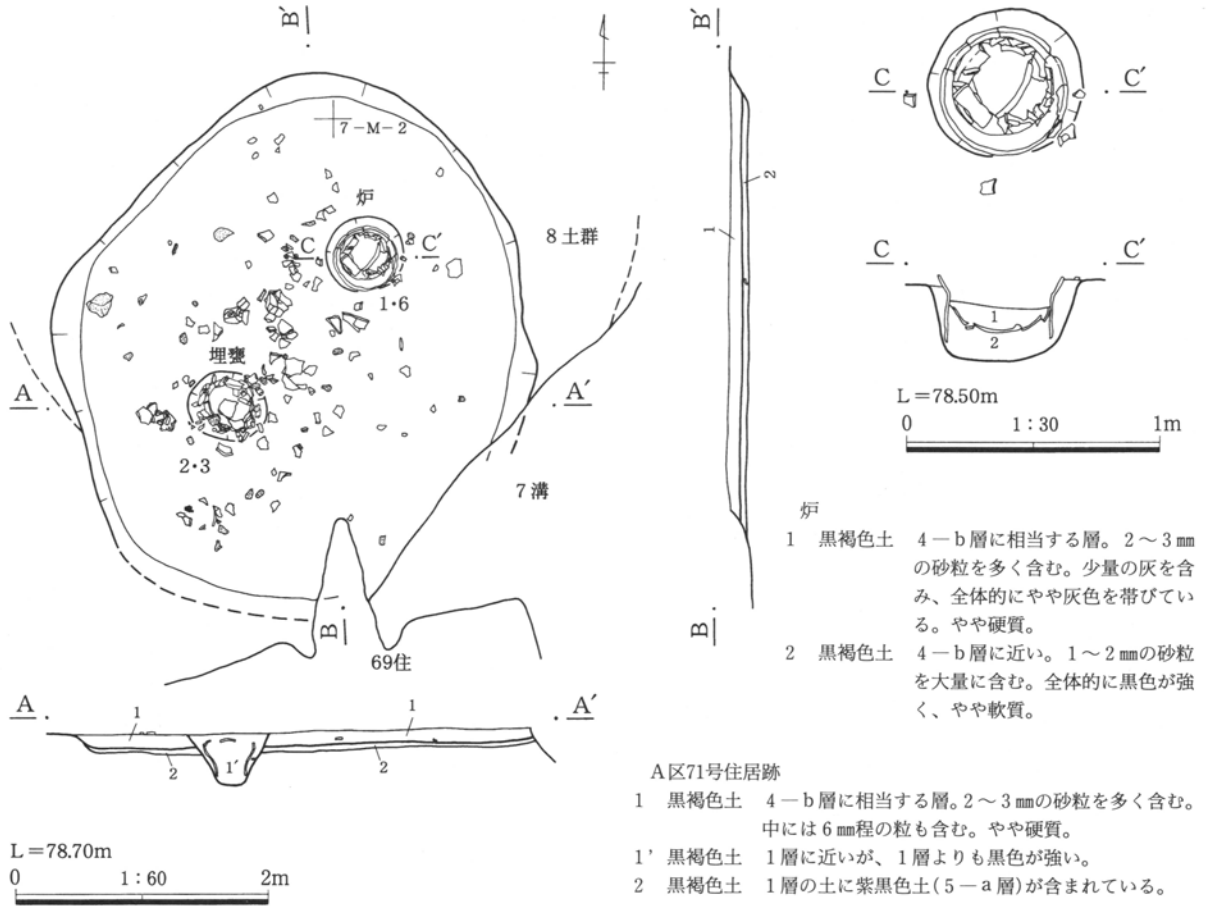
1. 縄文時代の遺構と遺物

広の大きく外傾する口縁部無文帯をもつ。本土器の口縁部は欠損している。口縁部の無文帯の下に2条1組の隆帯に囲まれた帯状の区画をもち、その区画内に2段の矢羽根状の刺突列が施文されている。胴部上半に2条1組の隆帯による渦巻が描かれ、その周りは不定形の区画文になっている。区画文内は短めな沈線が縦位に施文されている。胴部下半及び底部は欠損しているが、胴部下半は∩字状の区画が垂下すると思われる。7～11は同一個体と思われる。器形は口縁部がくの字状に内折する深鉢形土器である。内折しているため、口縁部文様帯の区画が上方を向くような感がある。隆帯による渦巻及び楕円等の区画文による構成である。頸部に無文帯をもつ。胴部文様は1と同様に2条1組の隆帯による渦巻とその周囲に不定形の区画文をもつと思われる。縄文はLRLが横位に施文されている。12も頸部に無文帯をもち、胴部の文様が7～11と同様と思われる。区画内の縄文はRLが縦位に施文されている。13～16は波状口縁となる深鉢形土器である。いずれも4単位の突起をもつ土器である。また、突起の内側に沈線による渦巻を描く。口縁部文様帯は区画化された渦巻と楕円等の区画文によって構成されている。13の縄文はRLが横位に施文されている。16の縄文はRL（0段多条）が横位、斜位、縦位に施文されている。17～23は楕円等の区画文で構成されている口縁部文様帯をもつ深鉢形土器である。17は平口縁となる深鉢形土器である。胴部には懸垂文が垂下し、懸垂文内には蕨状文が施文されている。縄文はRL（0段多条）が口縁部文様帯内は横位に、胴部は縦位に施文されている。18の胴部にも懸垂文が垂下し、懸垂文内には蛇行文が施文されている。縄文はRLが縦位に施文されている。19も胴部は懸垂文が垂下する。縄文はRLが縦位に施文されている。20の縄文はRLが縦位に施文されている。21はLR

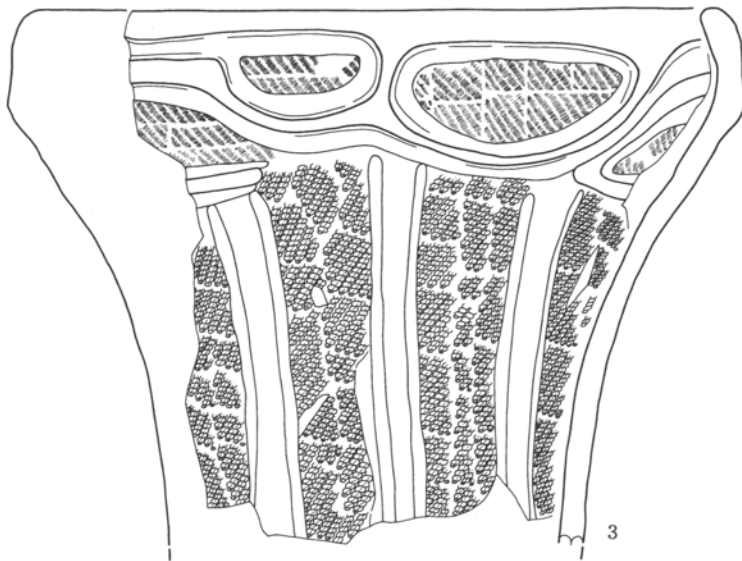
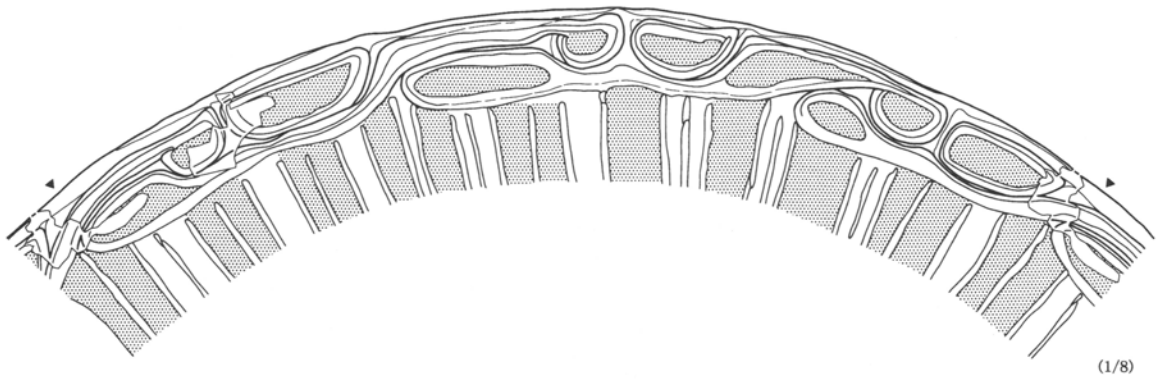
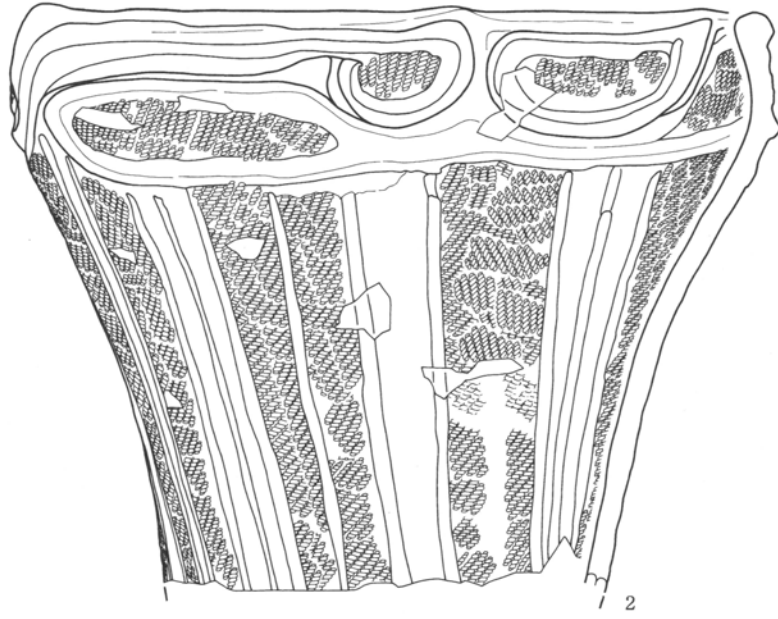
が縦位に施文されている。22は胴部に懸垂文が垂下する。懸垂文内に蕨状文または蛇行文が垂下すると思われる。縄文はRLが口縁部文様帯内は横位に、胴部は縦位に施文されている。23の縄文はRL（0段多条）が横位に施文されている。24～33は懸垂文が垂下する胴部である。24は口縁部文様帯の一部が見える。縄文はRLが口縁部文様帯内は横位に、胴部は縦位に施文されている。25も口縁部文様帯の一部が見える。縄文はRLが縦位に施文されている。26～29はRLが縦位に施文されている。30はRL（0段多条）が縦位に施文されている。31はLRが縦位に施文されている。32は懸垂文の中に蛇行文が垂下する。縄文はRL（0段多条）が縦位に施文されている。33はRLが縦位に施文されている。34は胴部上半に∩字状の区画をもつ深鉢形土器である。口縁部に無文帯をもつ。∩字状区画内は無文になっている。縄文はLR（0段多条）が縦位に施文されている。35～37は地文が条線の土器である。35は口唇部より条線が縦位に施文されている。36・37は条線が縦位に施文されている胴部である。38は口縁部がくの字状に外傾し、幅広の無文帯になっている土器である。胴部文様ははっきりしないが、器形が鉢または浅鉢になる可能性がある。39は2条1組の沈線が垂下する胴部及び底部である。縄文は施文されていない。1～34・38・39の土器は第3群土器に属する。35～37の土器は第4群土器に属する。

<石器>

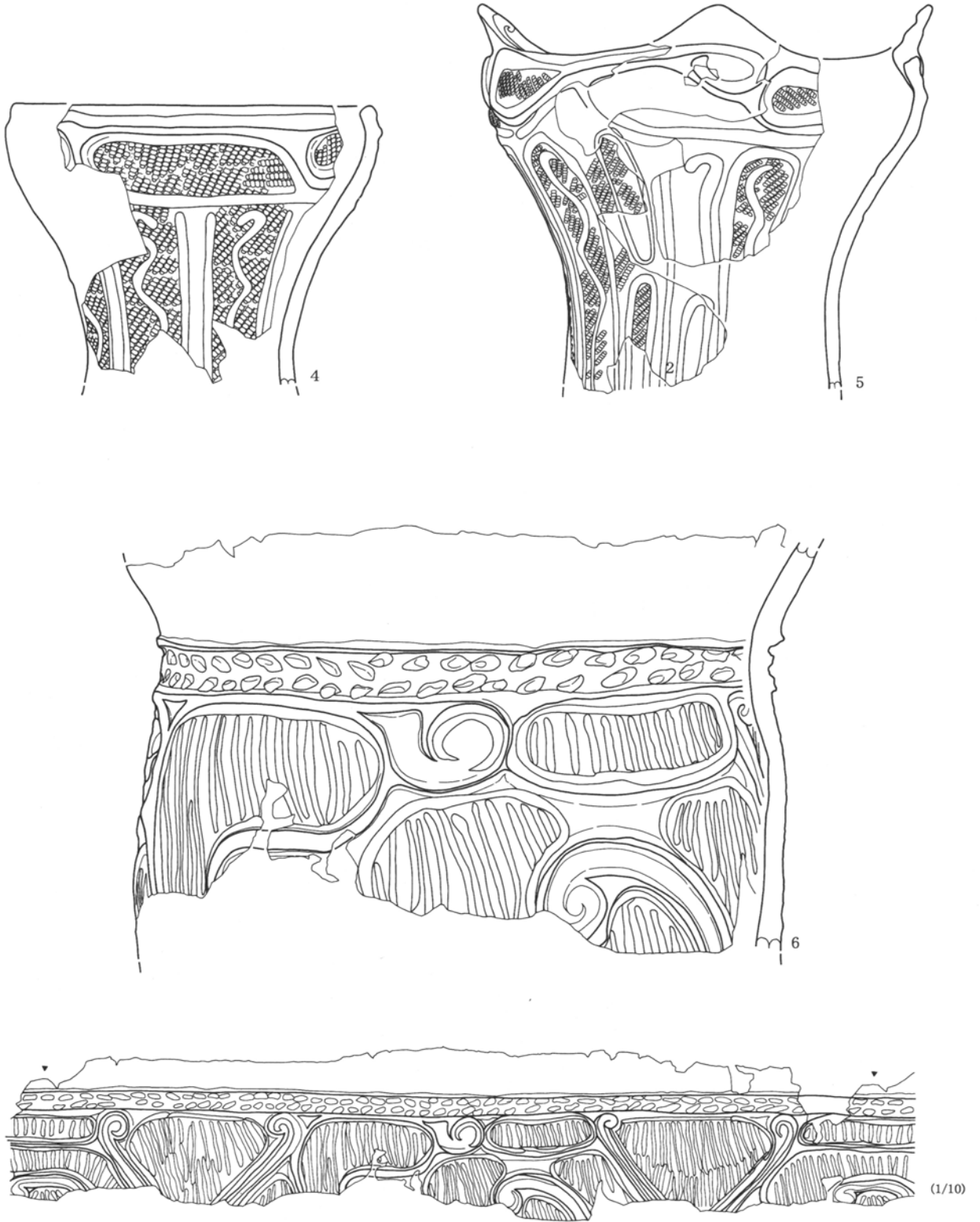
出土した石器には、石鏃が1点、打製石斧が2点、磨製石斧が1点、磨石が1点、石核が1点である。これらの石器に使用される石材には、石鏃に黒曜石、打製石斧に細粒輝石安山岩、磨製石斧に蛇紋岩、磨石に粗粒輝石安山岩、石核に黒色頁岩が使用されている。



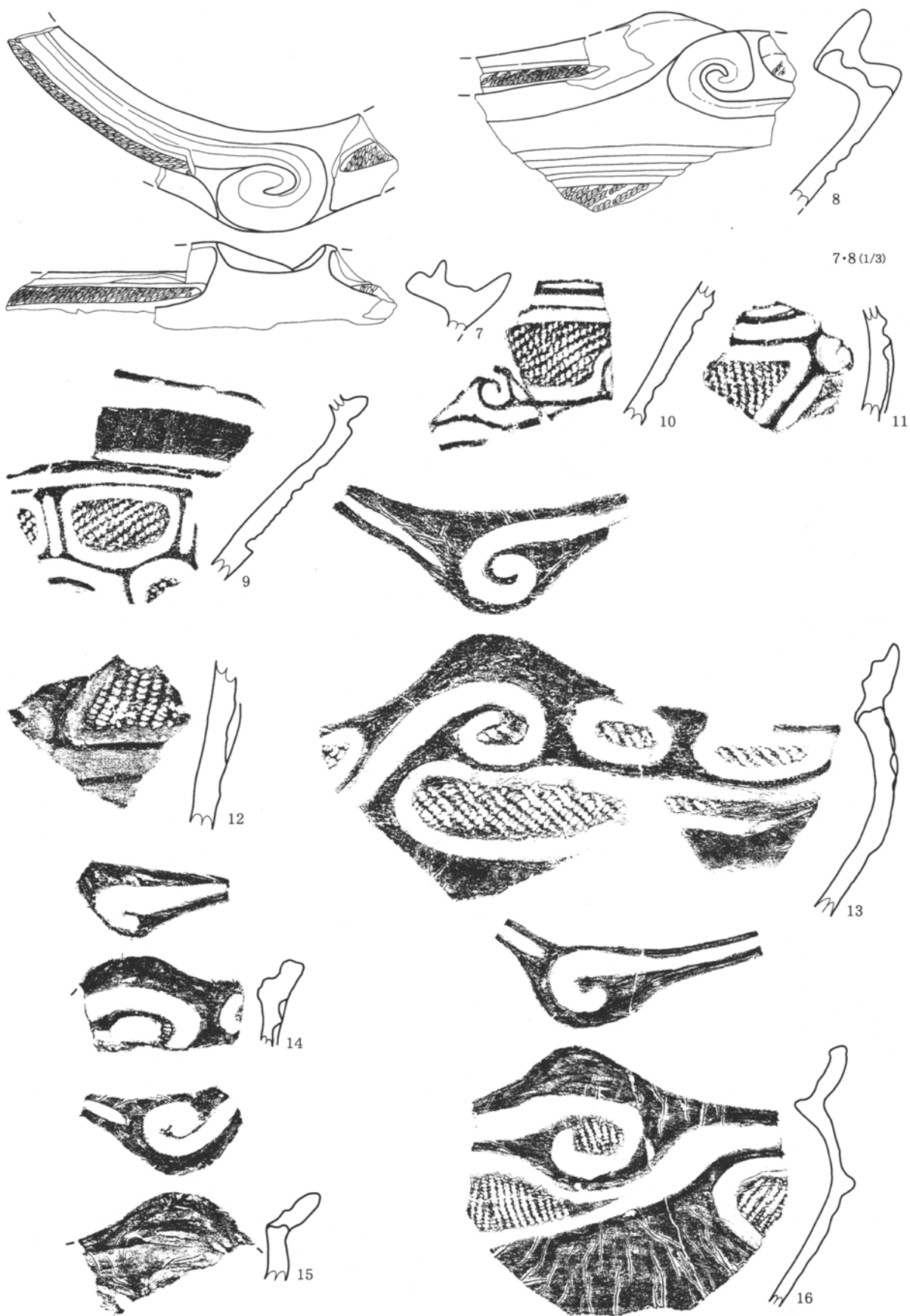
第34図 A区71号住居跡・炉・出土遺物 (1)



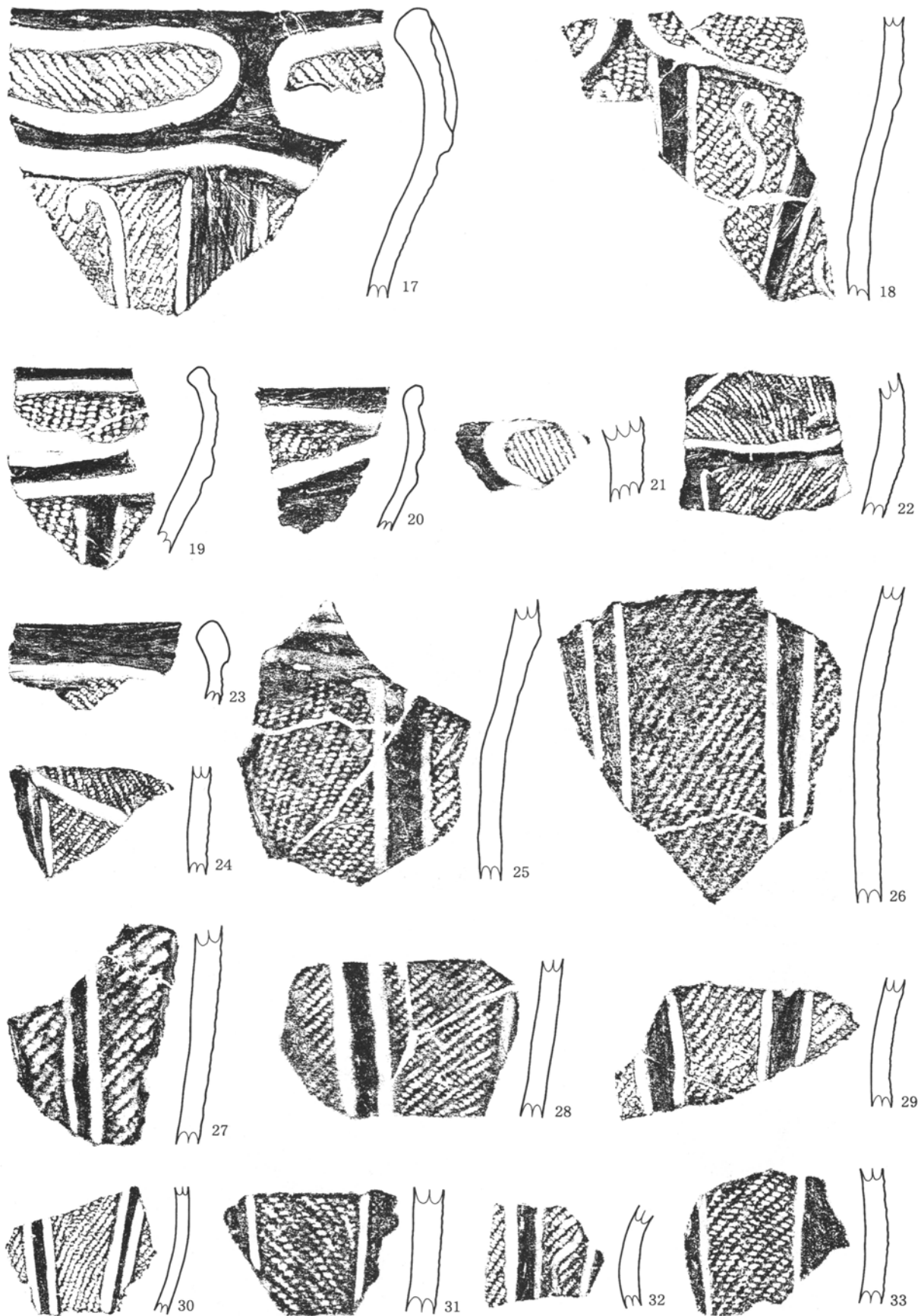
第35図 A区71号住居跡出土遺物 (2)



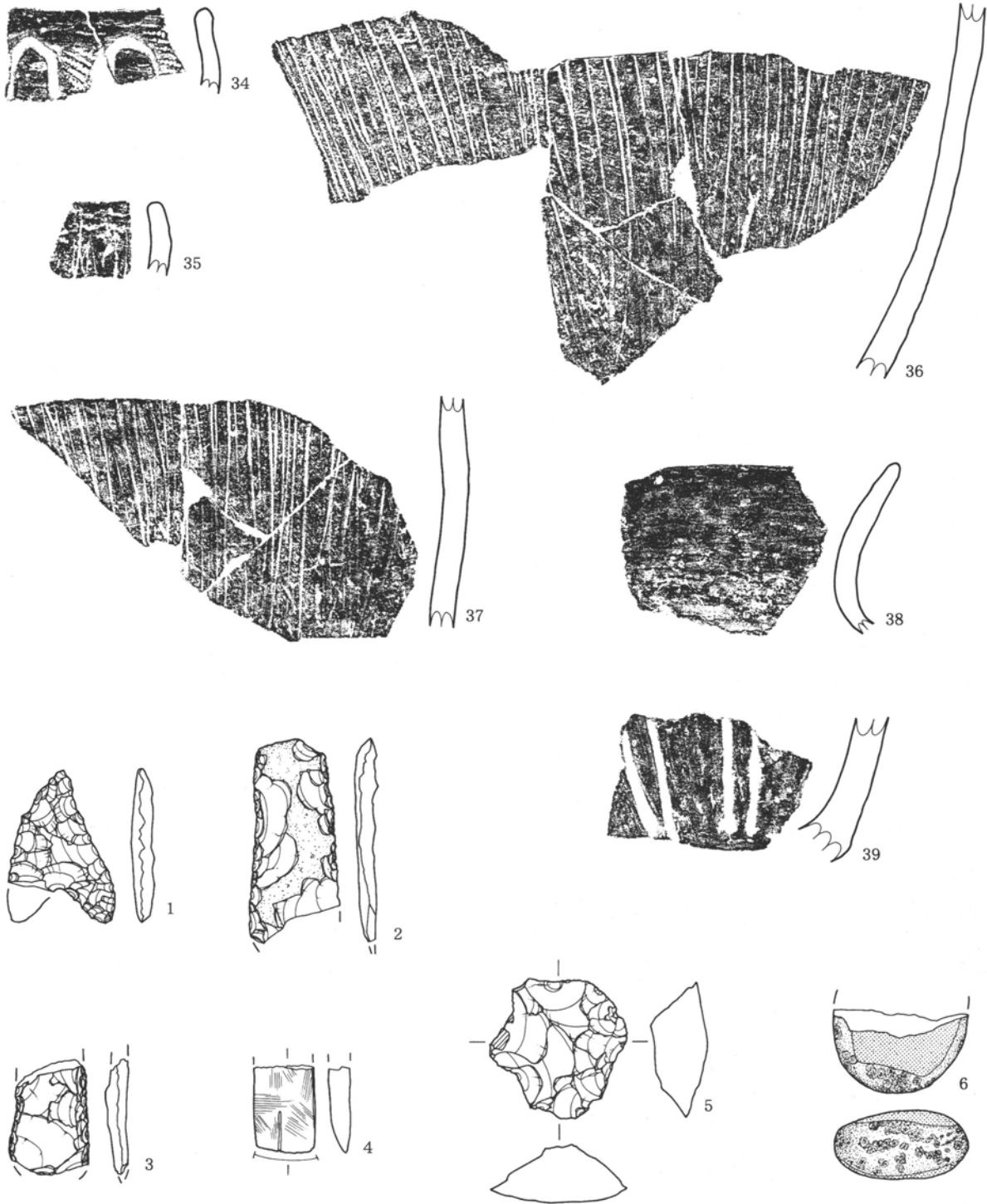
第36図 A区71号住居跡出土遺物 (3)



第37図 A区71号住居跡出土遺物 (4)



第38図 A区71号住居跡出土遺物 (5)



A区71号住居跡石器計測表

No	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
1	石鏃	黒曜石	3.0	(2.1)	0.5	(1.90)
2	打製石斧	細粒輝石安山岩	(9.6)	(4.3)	(1.1)	(49.2)
3	〃	〃	(5.4)	(3.8)	(1.1)	(25.8)

No	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
4	磨製石斧	蛇紋岩	(4.1)	(2.9)	(1.0)	(27.3)
5	石核	黒色頁岩	6.6	6.5	2.8	107.8
6	磨石	粗粒輝石安山岩	(5.3)	(8.6)	(4.2)	(216)

第39図 A区71号住居跡出土遺物 (6)

(2) 土 坑

A区3号土坑 (第40図 PL10・34・60)

位置 本土坑は遺跡の北西端に近い4-D-17グリッドに位置する。本土坑の近くにはA区13号、15号住居跡がある。

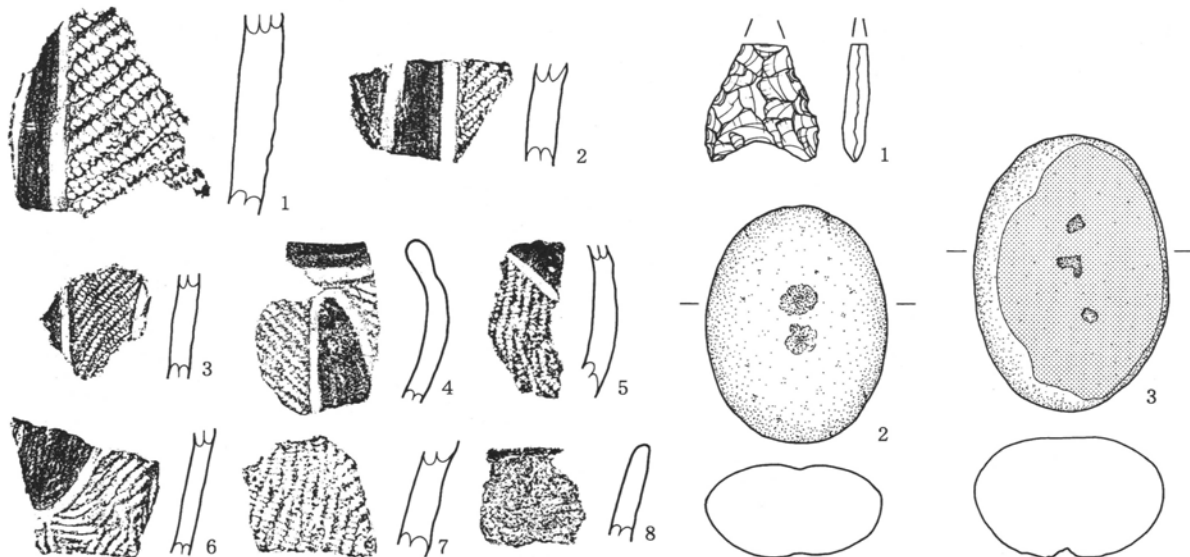
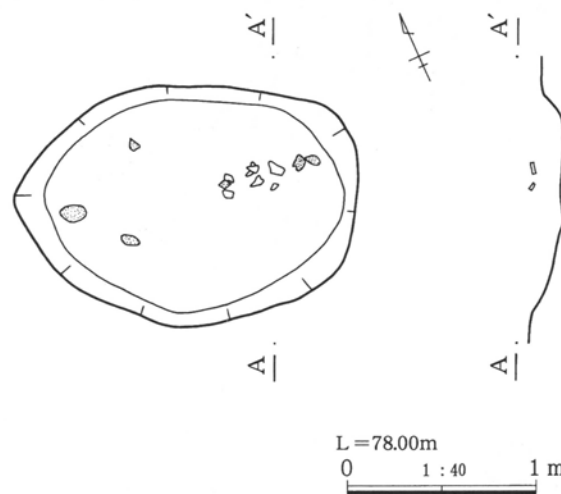
概要 本土坑の形状は東西方向に長軸をもつ楕円形である。その規模は東西方向183cm、南北方向128cm、深さ15cmを測る。掘り込みは浅く、断面は皿状である。土坑の底面は明黄褐色土で、覆土は縄文時代住居覆土と同じである。

遺物 数は少ないが土器と石器が出土している。以下個別に説明する。

<土器> 1～3は懸垂文が垂下する胴部である。1はRLが縦位に施文されている。2・3はRL(0段多条)が縦位に施文されている。4は口縁部無文帯をもち、胴部上半にW字状の文様構成をもつ深鉢形土器である。縄文はLR(0段多条)が縦位に施文されている。5・6は口縁部無文帯をもち、胴部上半にO字状の文様構成をもつと思われる深鉢形土器である。5はRL(0段多条)が充填されている。6はRL(0段多条)が充填されている。7は縄文

のみの胴部である。縄文はRL(0段多条)が充填されている。8は口縁部に無文帯をもつ土器である。胴部文様ははっきりしない。1～6の土器は第3群土器に属する。

<石器> 出土した石器には、石鏃が1点、凹石が1点、磨石が1点ある。これらの石器に使用される石材には、石鏃に黑色安山岩、凹石・磨石に粗粒輝石安山岩が使用されている。



A区3号土坑石器計測表

No.	器種	石 材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
1	石鏃	黑色安山岩	(2.0)	1.9	0.45	(1.37)
2	凹石	粗粒輝石安山岩	12.5	9.5	4.9	748

No.	器種	石 材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
3	磨石	粗粒輝石安山岩	14.6	10.2	6.4	1,370

第40図 A区3号土坑・出土遺物

A区79号土坑 (第41図 PL10・21・34)

位置 本土坑は遺跡の北端に近い7-J-0グリッドに位置する。本土坑の近くにはA区70号住居跡がある。

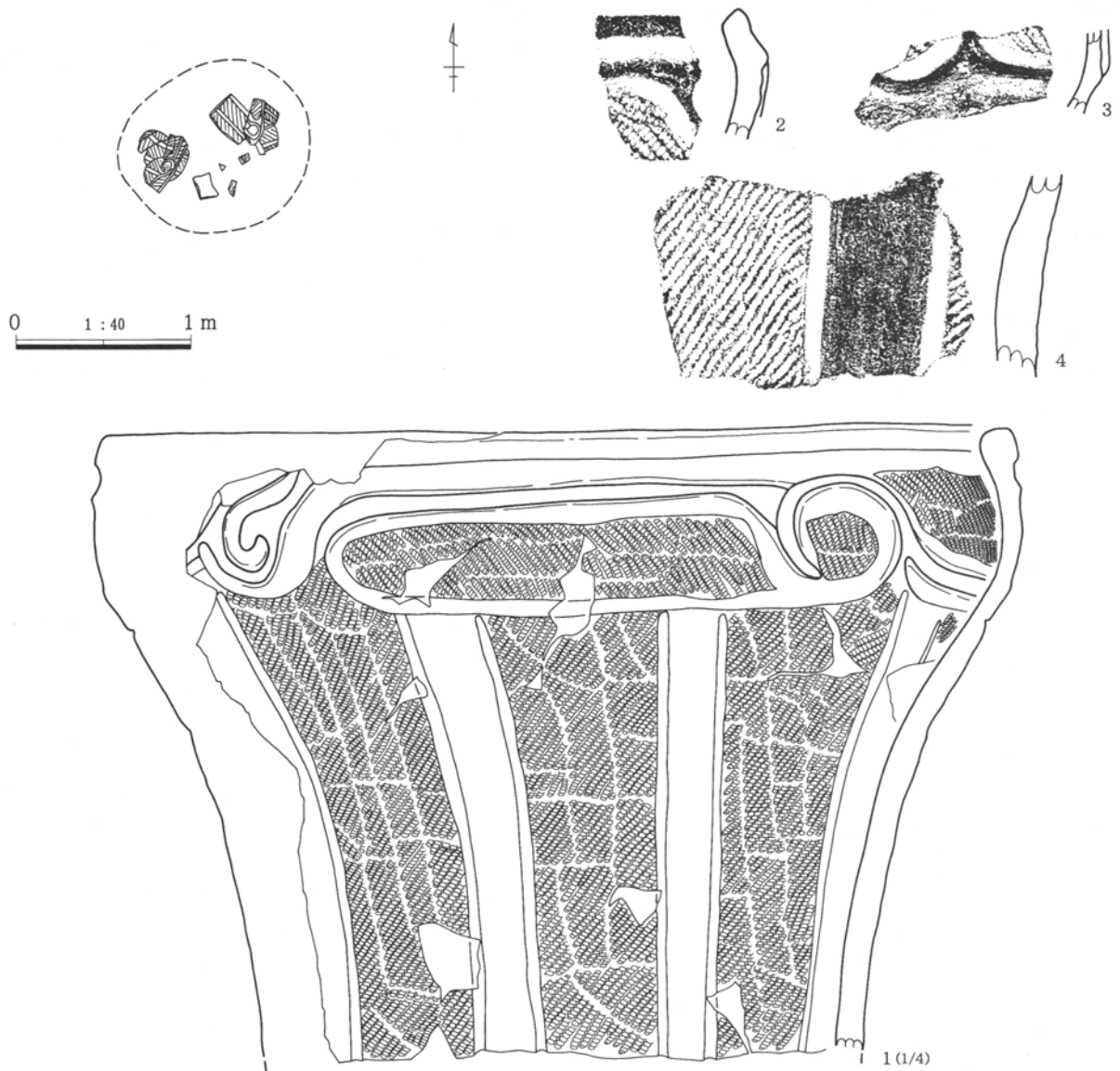
概要 本土坑は掘り込みがはっきりしないため、土器の出土状況から土坑の範囲を推定した。推定した本土坑の形状はほぼ円形である。その規模は東西方向108cm、南北方向98cmと思われる。

遺物 土坑内より土器のみ出土した。以下個別に説明する。

<土器>

1は平口縁となる深鉢形土器である。口縁部文様

帯は渦巻と楕円等の区画文で構成されている。胴部は懸垂文が垂下する。縄文はRL(0段多条)が口縁部文様帯内は横位に、胴部は縦位に施文されている。2・3は楕円等の区画文で構成される口縁部文様帯をもつ土器である。2はRLが横位に施文されている。3はRLが横位に施文されている。4は懸垂文が垂下する胴部である。縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。1~4の土器は第3群土器に属する。



第41図 A区79号土坑・出土遺物

A区80号土坑 (第42~44図 P L10・21・35)

位置 本土坑は遺跡の北端に近い7-L-0グリッドに位置する。本土坑の近くにはA区70号住居跡がある。A区9号土器群と重複している。A区9号土器群が本土坑の上位に位置すると思われる。なお、本土坑とA区9号土器群との関係については、A区9号土器群のところで詳述している。

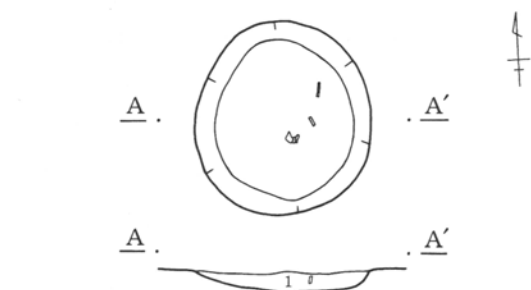
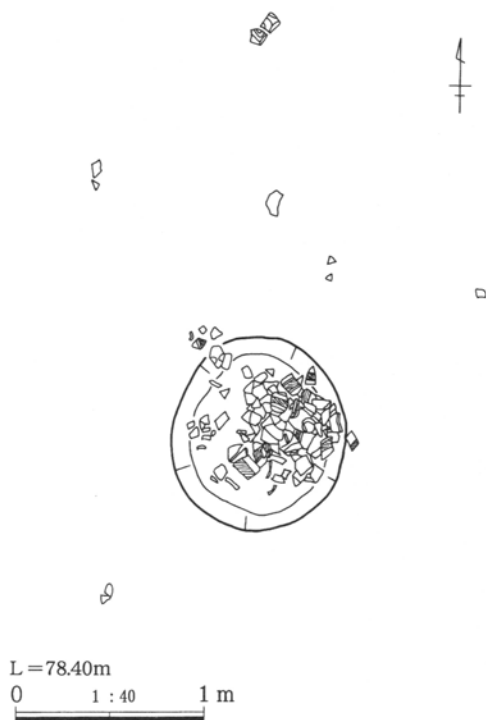
概要 本土坑の形状は南北方向に長軸をもつ、ほぼ円形である。その規模は南北方向102cm、東西方向92cm、深さ10cmを測る。掘り込みは浅く断面は皿状を呈する。土坑覆土は2~3mmの砂粒を多く含む黒褐色土で、同時期の住居覆土と似た土である。

遺物 本土坑内及び周辺より土器が出土している。以下個別に説明する。

<土器>

1は4単位の舌状突起をもつ深鉢形土器である。口縁部文様帯は円または楕円等の区画文で構成されている。区画文間にS字状文が4単位施文されている。胴部は幅広の懸垂文が垂下する。磨消懸垂文内に蕨状文が垂下するところもある。縄文はRLが口縁部文様帯内及び胴部は横位、縦位、斜位に施文さ

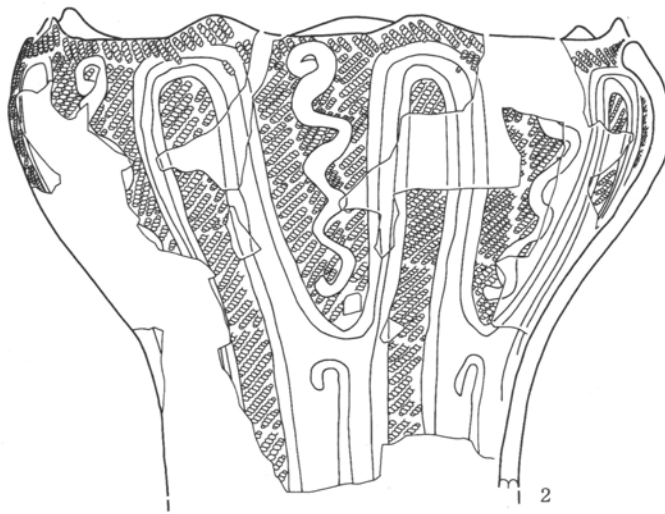
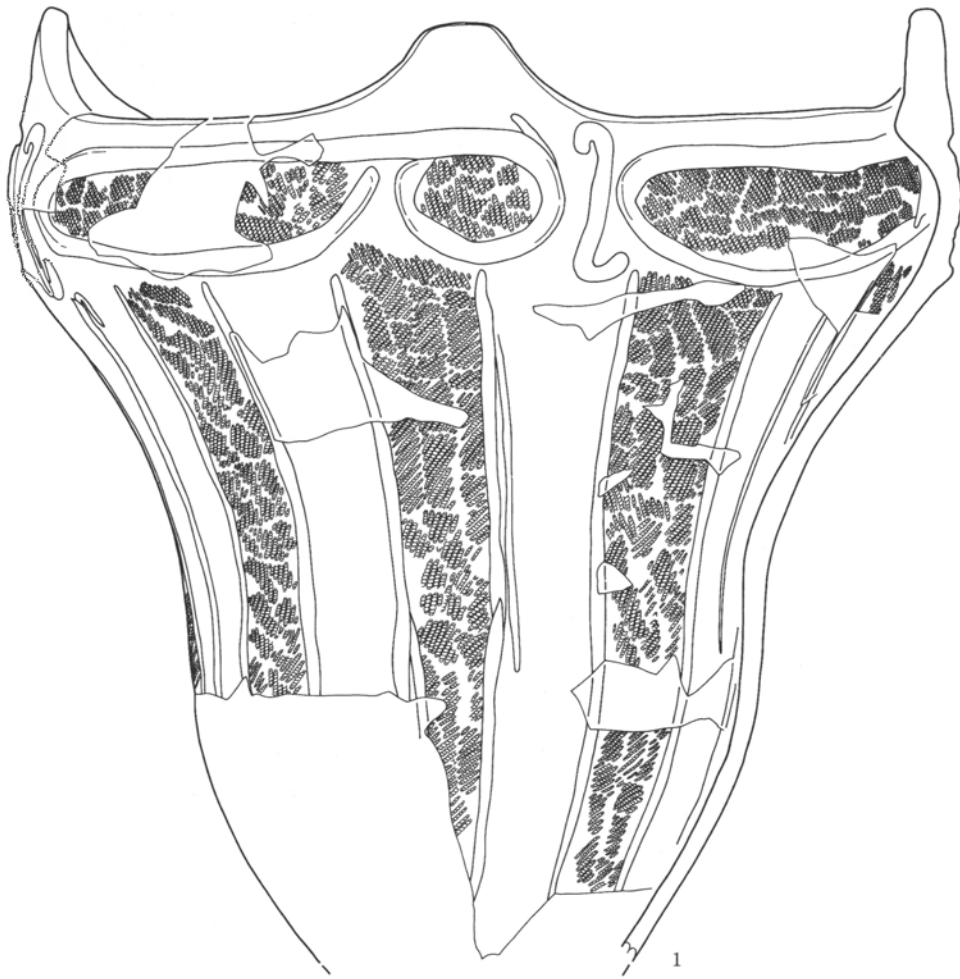
れている。胴部上半は羽状縄文になっている。2は7単位の突起をもつキャリパー形の深鉢形土器である。胴部上半に波状沈線文を描く。波状沈線文の波頂部に∩字状の区画が入り組み、波底部に蛇行文、蕨状文が垂下する。蕨状文の周囲は磨消になっている。縄文はRLが口唇部は横位に施文されている。以下は縦位に施文され、羽状縄文を呈する。3は平口縁となる深鉢形土器である。区画化された渦巻と楕円等の区画文で構成される口縁部文様帯をもつ。胴部は懸垂文の上端が∩字状になり、垂下する。縄文はRL(0段多条)が口縁部文様帯内は横位に、胴部は縦位に施文されている。4は楕円等の区画文で構成された口縁部文様帯をもつ。口縁部文様帯の下部の沈線が大きく流れるように描かれる。胴部は3と同様に懸垂文の上端が∩字状になっている。縄文はRL(0段多条)が口縁部文様帯内は横位に、胴部は縦位に施文されている。5は胴部上半に2条1組の沈線による波状文を描くと思われる。S字状文または蛇行文が施文されていると思われる。縄文はLRが横位、縦位に施文されており、羽状縄文を呈する。6は口縁部無文帯をもち、胴部上半に2条1組の細い沈線により渦巻を描く土器である。縄文はRL(0段多条)が充填されている。7は丸みのある器形をもつ土器である。縄文は施文されておらず、2条1組の微隆帯による渦巻が描かれる。8は地文が条線の胴部である。1~7の土器は第3群土器に属する。8は第4群土器に属する。



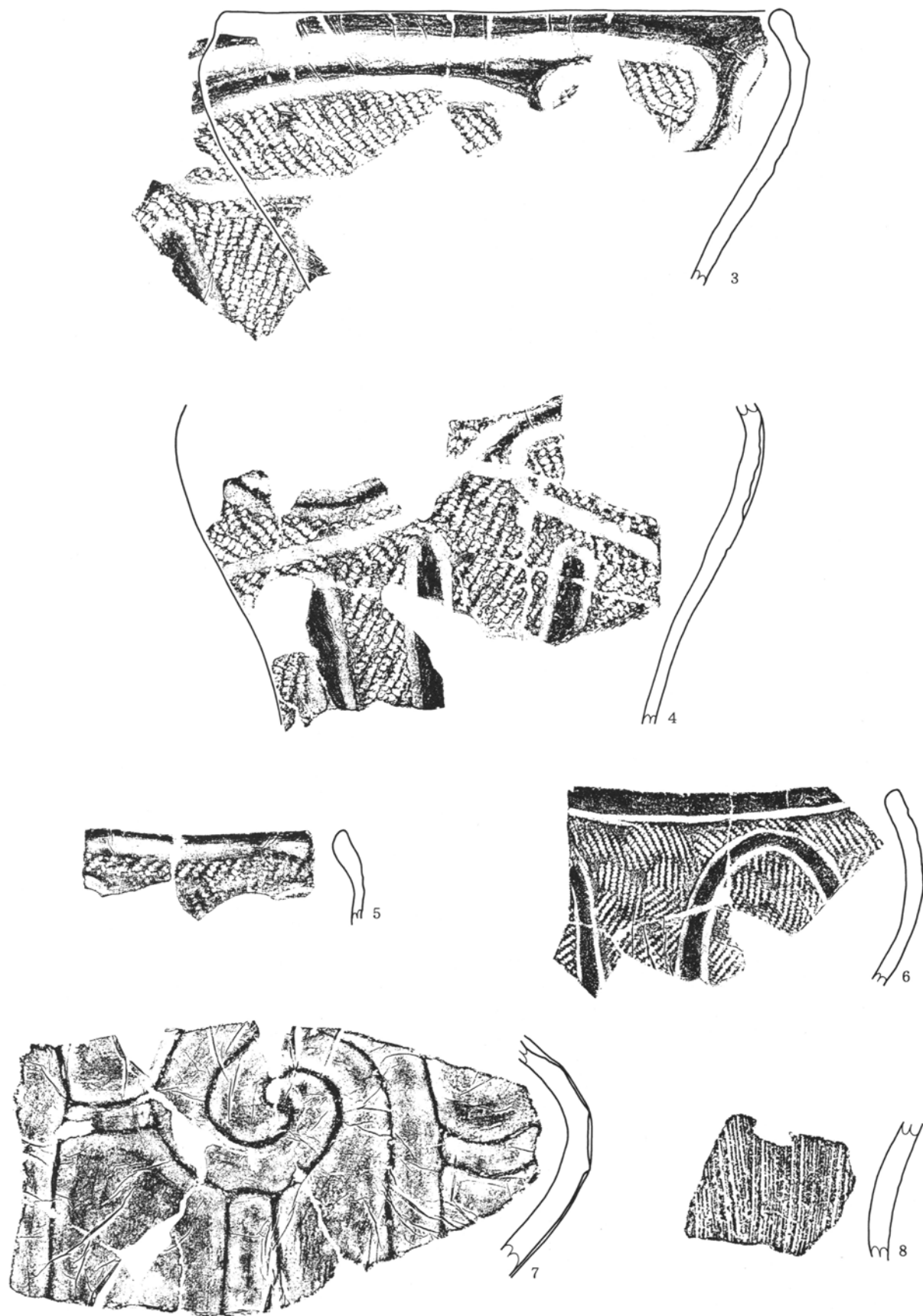
A区80号土坑

1 黒褐色土 4-b層を主体としている。2~3mmの砂粒が多く含まれている。橙色の大きな塊も含む。

第42図 A区80号土坑・遺物出土状況



第43図 A区80号土坑出土遺物 (1)



第44図 A区80号土坑出土遺物 (2)

A区83号土坑 (第45図 PL10・21)

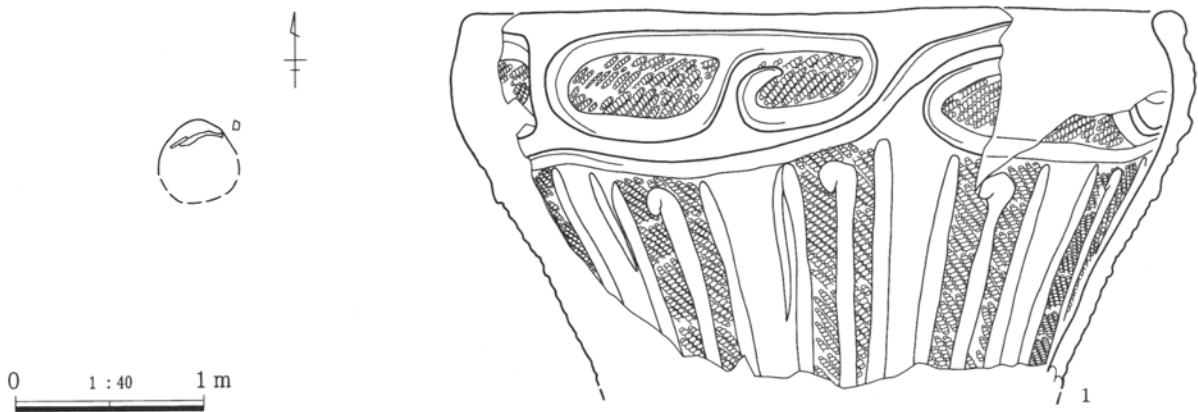
位置 本土坑は遺跡の北端に近い7-K-1グリッドに位置する。本土坑の近くにA区79号土坑と9号土器群がある。また、A区84号土坑は近接する。

概要 本土坑は掘り込みがはっきりしないため、土器の出土状況から土坑の範囲を推定した。推定した本土坑の形状は円形である。その規模は東西方向42cm、南北方向42cmである。覆土は1~2mmの砂粒を多く含む黒褐色土である。

遺物 本土坑の土器にA区84号土坑の土器片が接合している。以下その土器について説明する。

<土器>

1は平口縁となる深鉢形土器である。口縁部文様帯は区画化された渦巻と楕円等の区画文で構成されている。胴部は懸垂文が垂下する。懸垂文の中に蕨状文が施文されている。縄文はLR(0段多条)が口縁部文様帯内は横位に胴部は縦位に施文されている。この土器は第3群土器に属する。



第45図 A区83号土坑・出土遺物

A区84号土坑 (第46図 PL10・34)

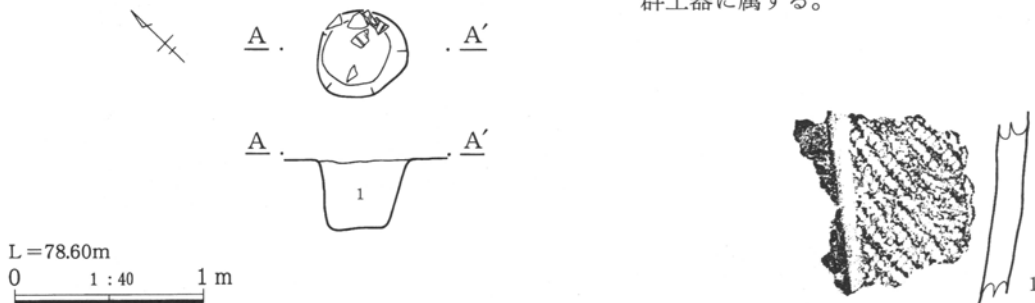
位置 本土坑は遺跡の北端に近い7-K-1グリッドに位置する。本土坑の近くにA区79号土坑と9号土器群がある。また、A区83号土坑は近接する。

概要 本土坑の形状はほぼ円形である。その規模は東西方向50cm、南北方向45cm、深さ35cmを測る。覆土は1~2mmの砂粒を多く含む黒褐色土である。

遺物 遺物の多くはA区83号土坑出土の土器と接合している。以下接合しなかった土器について説明する。

<土器>

1は懸垂文が垂下する胴部である。縄文はLR(0段多条)が縦位に施文されている。この土器は第3群土器に属する。



A区84号土坑

1 黒褐色土 4-b層を主体としている。1~2mmの砂粒を含む。

第46図 A区84号土坑・出土遺物

A区86号土坑 (第47・48図 PL11・34・60)

位置 本土坑は遺跡の北端に近い7-I-0グリッドに位置する。本土坑の近くにはA区79号土坑がある。近世のA区17号溝と重複している。

概要 本土坑の形状は円形である。断面は皿状を呈する。その規模は東西方向100cm、南北方向101cm、深さ22cmを測る。覆土は2~3mmの砂粒を含む黒褐色土に多くの明黄褐色土を含む。全体的に砂質の覆土である。

遺物 本土坑内より土器と石器が出土している。以下個別に説明する。

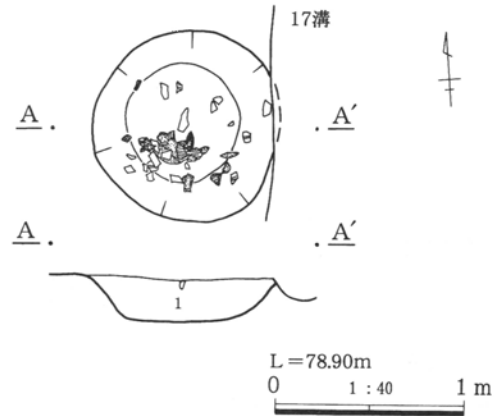
<土器>

1~3は楕円等の区画文で構成された口縁部文様帯をもつ土器である。いずれも波状口縁となる。1の縄文はRL(0段多条)が横位、斜位に施文されている。2はRLにLを付加させた付加条縄が横位に施文されている。3はRL(0段多条)が横位、斜位に施文されている。4~7は懸垂文が垂下する胴部である。4はRLが縦位に施文されている。5はRLが縦位に施文されている。6は懸垂文内に蕨状文が施文されていると思われる。縄文はRLが縦位に施文されている。7は磨消懸垂文が3条1組になっているか、蕨状文が垂下すると思われる。縄文はRLが縦位に施文されている。8は胴部下半にU字状の区画が垂下する文様構成をもつ土器である。

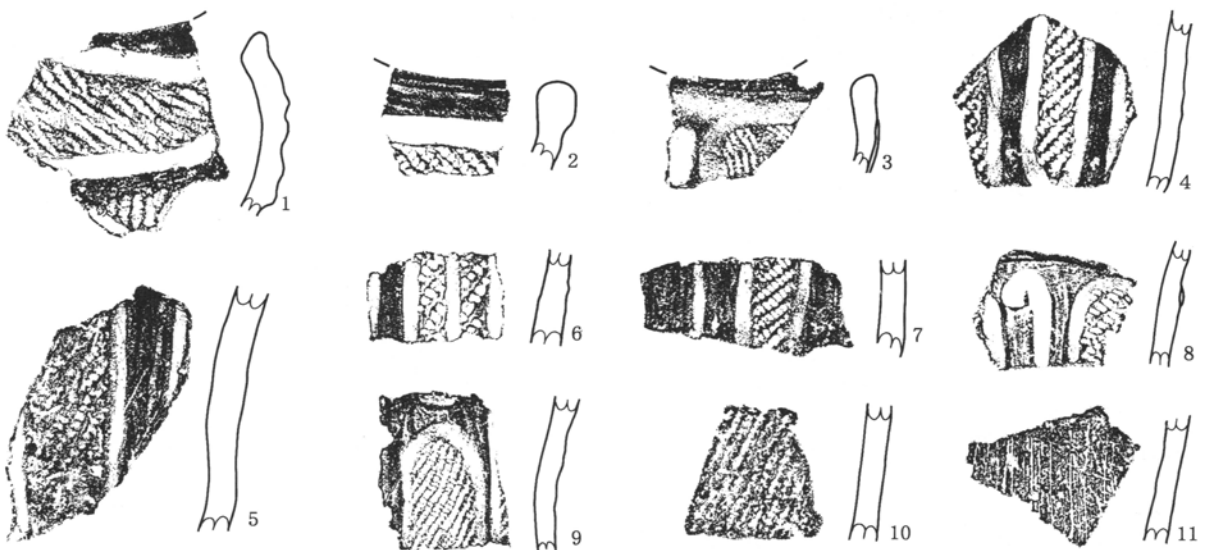
区画文の間に蕨状文が垂下する。縄文はRLが縦位に施文されている。9は胴部上半より懸垂文が垂下する土器である。懸垂文の一部がU字状の区画になっている。縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。10は縄文のみの胴部である。懸垂文が垂下することも考えられる。縄文はRLが縦位に施文されている。11は条線のみ胴部である。1~10は第3群土器、11は第4群土器に属する。

<石器>

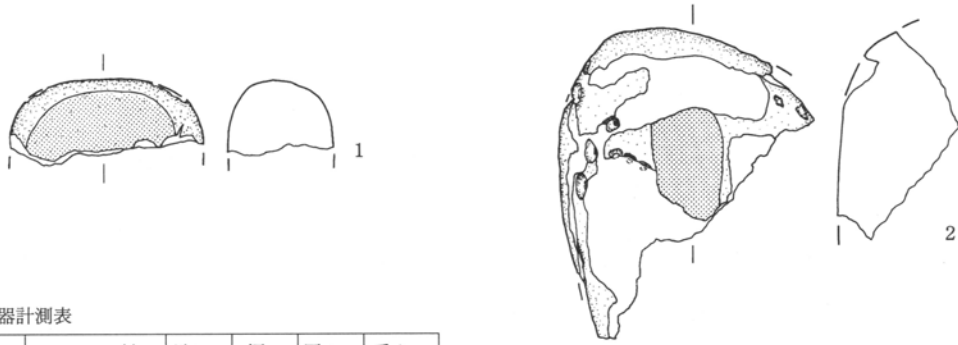
出土した石器には、磨石が1点、多孔石が1点ある。磨石、多孔石共に粗粒輝石安山岩が使用されている。



A区86号土坑
1 黒褐色土 4-b層を主体としている。多くの明黄褐色土を含んでいて、全体的に砂質である。



第47図 A区86号土坑・出土遺物 (1)



A区86号土坑石器計測表

No.	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
1	磨石	粗粒輝石安山岩	(4.5)	(10.2)	(5.6)	(317)
2	多孔石	〃	(25.0)	(20.7)	(18.0)	(3,827)

第48図 A区86号土坑出土遺物 (2)

C区17号土坑 (第49図 P L11・21)

位置 本土坑は遺跡の東端に近い9-R-17グリッドに位置する。本土坑の上層は攪乱によって掘り込まれていた。近くにはC区2号埋甕がある。

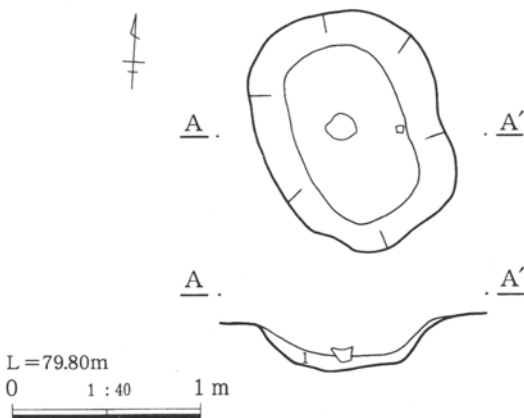
概要 本土坑の形状は南北方向に長軸をもつ楕円形である。その規模は東西方向100cm、南北方向125cm、深さ27cmを測る。断面形状は、掘り込みが浅く、皿状である。覆土は2～3mmの砂粒を含む黒褐色土と砂質の灰黄褐色土の混ざった土である。調査時は出土した底部をもとにC区1号埋甕 (C区17号土坑) と呼称していた。しかし、土坑の掘り込みがはっきりしていることや本遺構から出土した底部がC区2号埋甕の2と接合することなどを考慮して、埋甕と考えるよりは土坑と考えたほうが妥当ではないかと

思われ、本書ではC区17号土坑の呼称をとるほうが良いと考えた。

遺物 C区2号埋甕と接合した以外の土器について説明する。

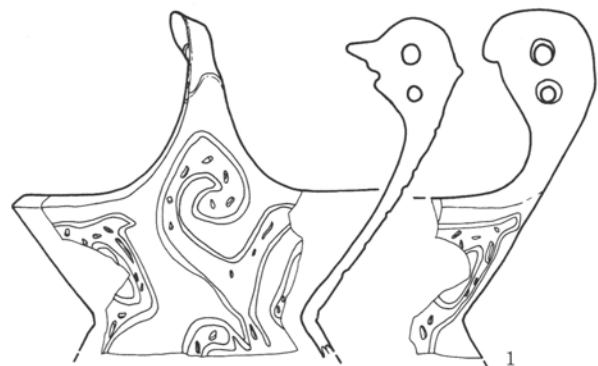
<土器>

1は胴部中程で強く括れ、胴部下半で丸みをもつと思われる。口縁部に把手が1個つけられ、口縁が波状を呈すると思われる。把手のところに渦を巻くようなJ字状の区画文が施文され、胴部下半のJ字状の区画文と連結している。区画文内は刺突が充填されている。器面は内外ともに良好に研磨されている。この土器は第5群土器に属する。



C区17号土坑

1 暗灰黄褐色土 黒褐色土と砂質の灰黄褐色土の混じった土。



第49図 C区17号土坑・出土遺物

D区5号土坑 (第50図 P L11・34)

位置 本土坑は遺跡中央部の北端に近い7-B-1グリッドに位置する。周囲には縄文時代の遺構はあまりない。本土坑の近くにある遺構はA区6号土器群である。

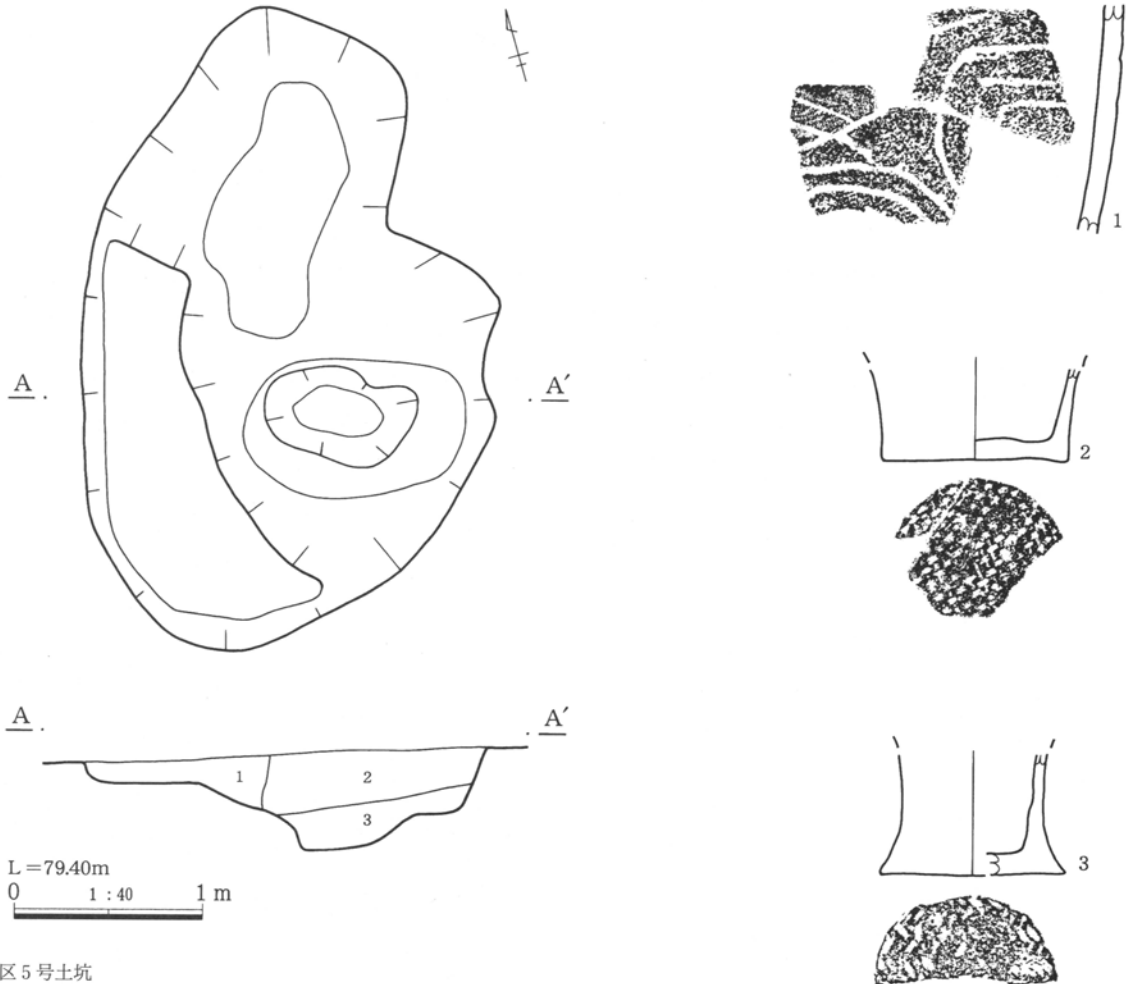
概要 本土坑の形状は楕円形が組合わさったような不正楕円形である。その規模は東西方向228cm、南北方向338cm、深さ52cmを測る。本土坑は、本遺跡の他の土坑と形状が違い、テラス状の平坦な箇所をもつ。形状から考えて、2つの土坑に区切られる可能性もある。本土坑の覆土は黄褐色の砂粒を含む暗灰褐色土である。

遺物 本土坑内より土器が出土している。以下個別

に説明する。

<土器>

1は幾何学文をもつ胴部と思われる。充填されている縄文はLRである。2・3は網代痕のある底部である。2・3ともに底部より胴部が直に立ち上がる器形をもつ薄手の土器である。2の底部に残る網代痕は経条と緯条の太さが多少違うが、交互に規則的に編んだものと思われる。3の底部に残る網代痕は2つ超え2つ潜り1つ送りの綾編みと思われる。これらの土器は第6群土器に属すると思われる。



D区5号土坑

- 1 暗灰褐色土 褐色土ブロック、軽石粒を含む。
- 2 暗灰褐色土 褐色土ブロック、軽石粒、黄褐色砂粒を含む。
- 3 灰黒色土 軽石粒を含む。

第50図 D区5号土坑・出土遺物

(3) 埋 甕

A区1号埋甕 (第51図 PL11・22・35)

位置 本埋甕は遺跡の北西端に近い4-C-17グリッドに位置する。近くには、A区13号、15号住居跡がある。

概要 埋設されていた土器は、深鉢形土器で、口縁部を上にして正位で埋設されていた。なお、埋甕内から焼土は確認されず、土器も二次焼成を受けていない。

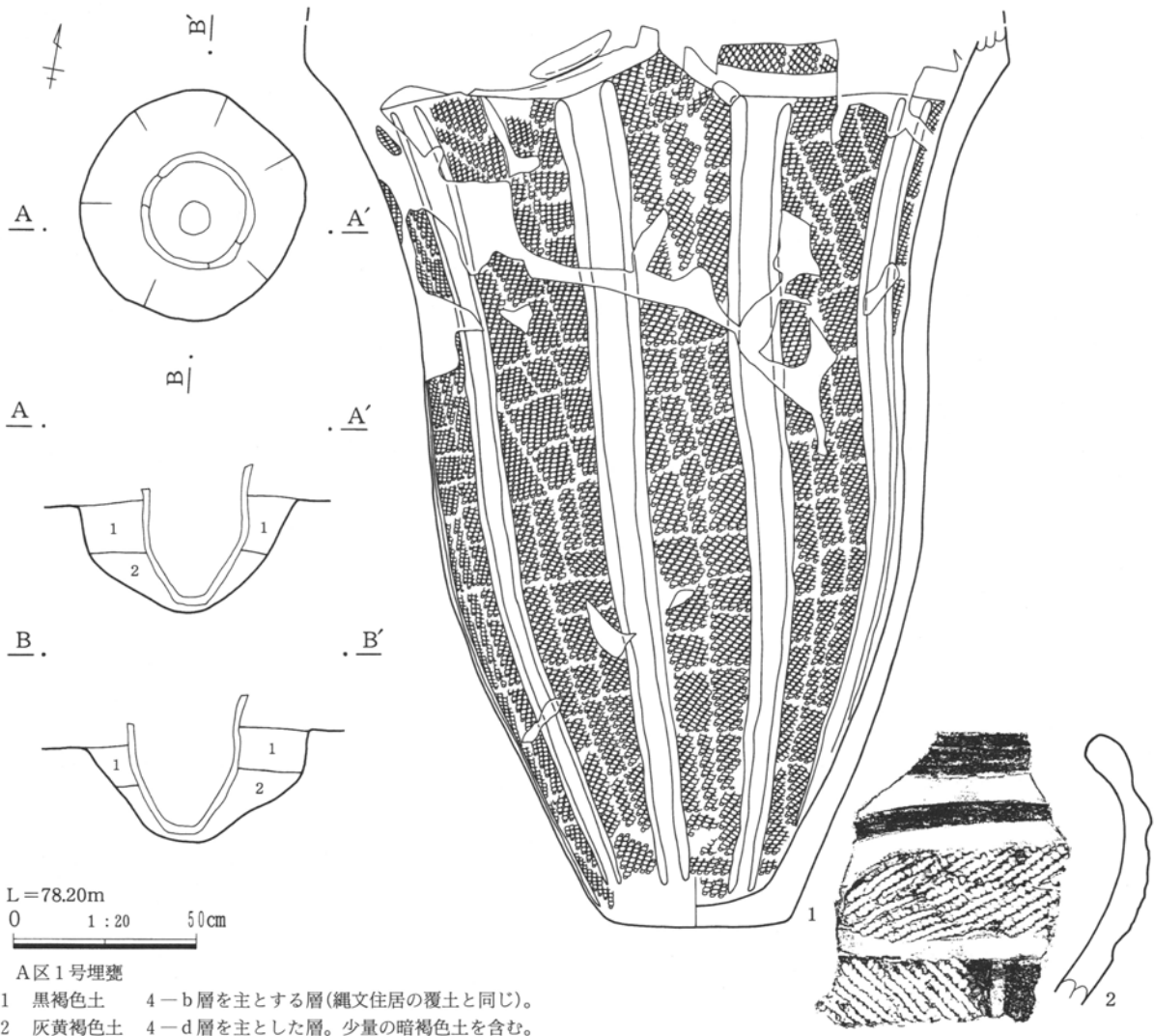
本埋甕は、土坑状の掘り込みが確認されたので、調査時にはA区35号土坑という呼称も使われていた。

遺物 埋設されていた土器及び周辺より出土した土

器を個別に説明する。

<土器>

1は埋設されていた土器である。口縁部のほとんどは欠損しているが、楕円等の区画文による構成となる口縁部文様帯を有すると思われる。胴部には懸垂文が垂下する。縄文はRLが口縁部文様帯内は横位に、胴部は縦位に施文されている。2も楕円等の区画文による構成となる口縁部文様帯をもつ深鉢形土器である。胴部には懸垂文が垂下する。縄文はLRが口縁部文様帯内は横位に胴部は縦位に施文されている。これらの土器は第3群土器に属する。



第51図 A区1号埋甕・出土遺物

A区2号埋甕 (第52・53図 PL12・22・35)

位置 本埋甕は遺跡の西側にあたる3-Q-14グリッドに位置する。近くには、A区3号埋甕がある。本埋甕は縄文時代住居跡から離れた位置で検出されている。

概要 埋設されていた土器は、大型の深鉢形土器で、口縁部を下にして逆位で埋設されていた。調査時は底部欠損と思われたが、接合して見るとほぼ完形の土器であることがわかった。なお、埋甕内の土については、整理作業のなかで篩にかけてみたが、埋設の土層とほとんど変わりなく、特別なものは確認できなかった。この土器自体は二次焼成を受けていない。

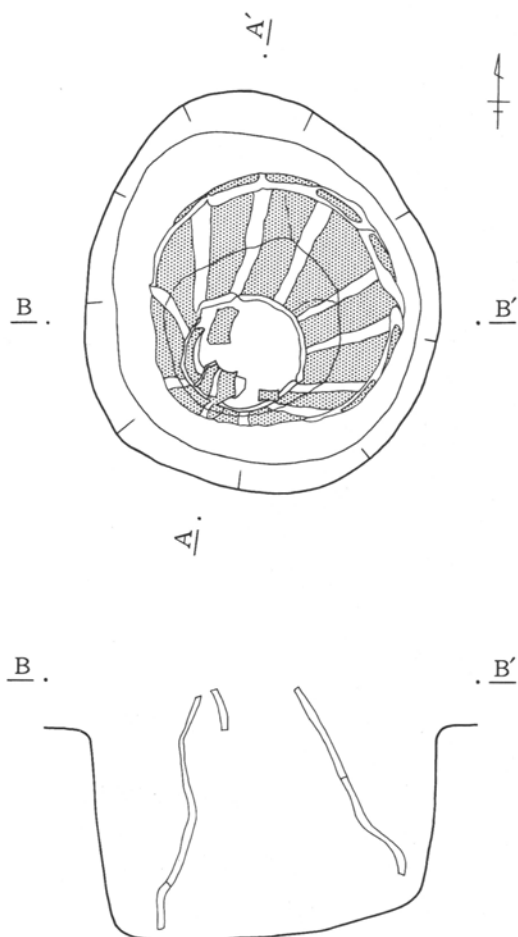
本埋甕は、土坑状の掘り込みが確認されたので、調査時にはA区32号土坑という呼称も使われてい

た。

遺物 埋設されていた土器及び周辺より出土した土器を個別に説明する。

<土器>

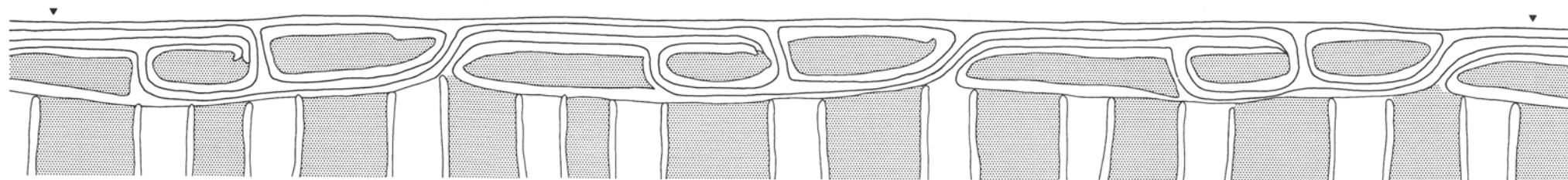
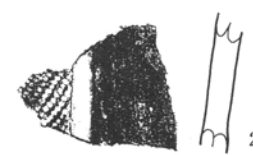
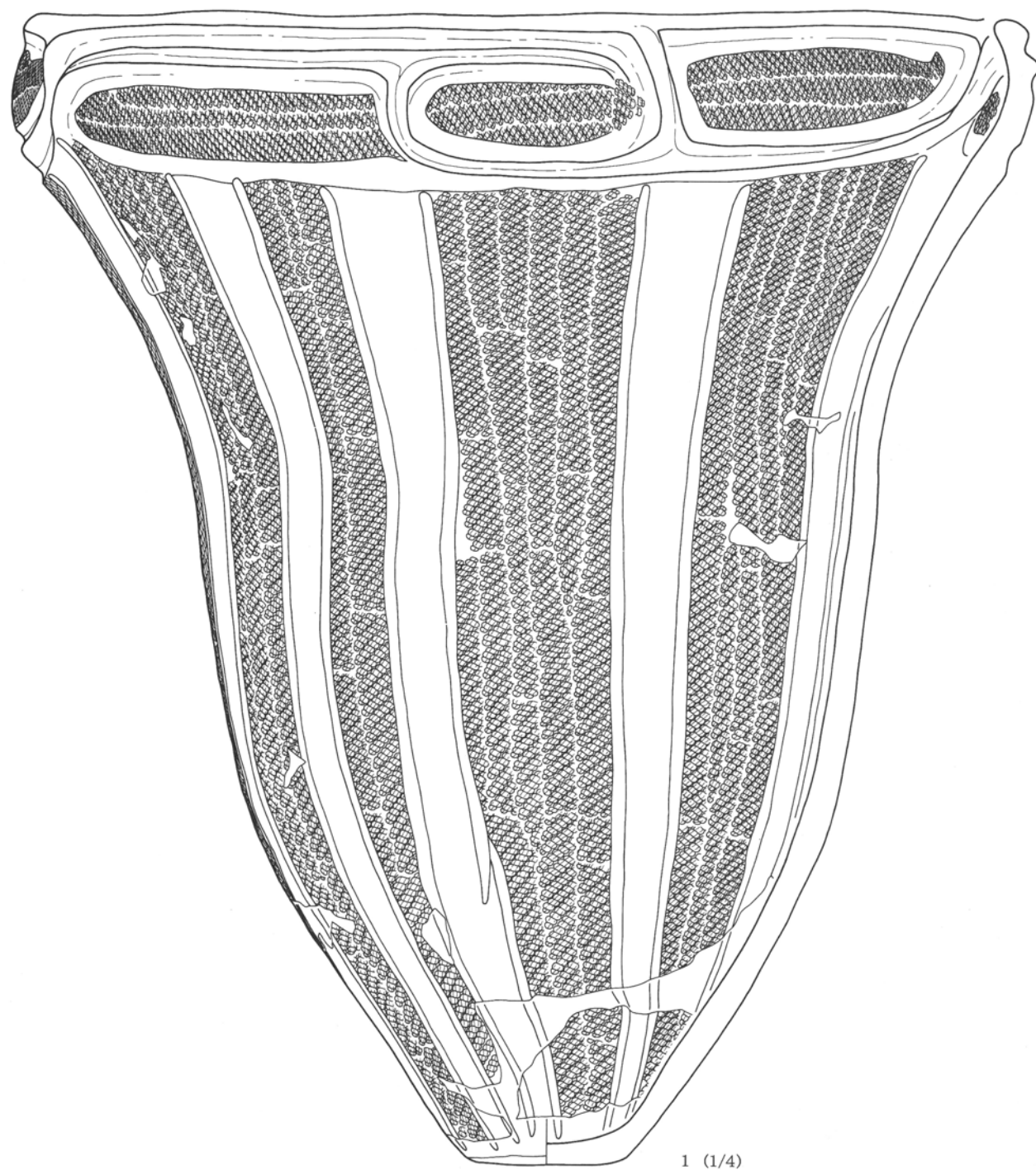
1は口径64.3cm、器高73.6cm、底径10cmの大型の深鉢形土器である。器形は、胴部が若干括れる緩やかなキャリパー形を呈する。底部は、器形の大きさに比べて小さく、不安定な形である。口縁部文様帯は楕円等の区画文で構成される。胴部は懸垂文が垂下する。懸垂文の割付の幅が違うところがあり、展開図を作成した。縄文はRLRが口縁部文様帯内は横位に、胴部は縦位に施文されている。2は懸垂文が垂下する胴部である。縄文はRLが縦位に施文されている。これらの土器は第3群土器に属する。



A区2号埋甕

- 1 黒褐色土 4-b層を主とした層に地山の4-d層(砂層)を少量含む。
- 2 褐灰色土 灰色の強い砂層。少量の黒褐色土を含む(4-b層に近い)。

第52図 A区2号埋甕



第53图 A区2号埋甕出土遺物

A区3号埋甕 (第54・55図 P L12・22・35)

位置 本埋甕は遺跡の西側にあたる3-P-14グリッドに位置する。近くには、A区2号埋甕がある。本埋甕は2号埋甕と同様に縄文時代住居跡から離れた位置で検出されている。

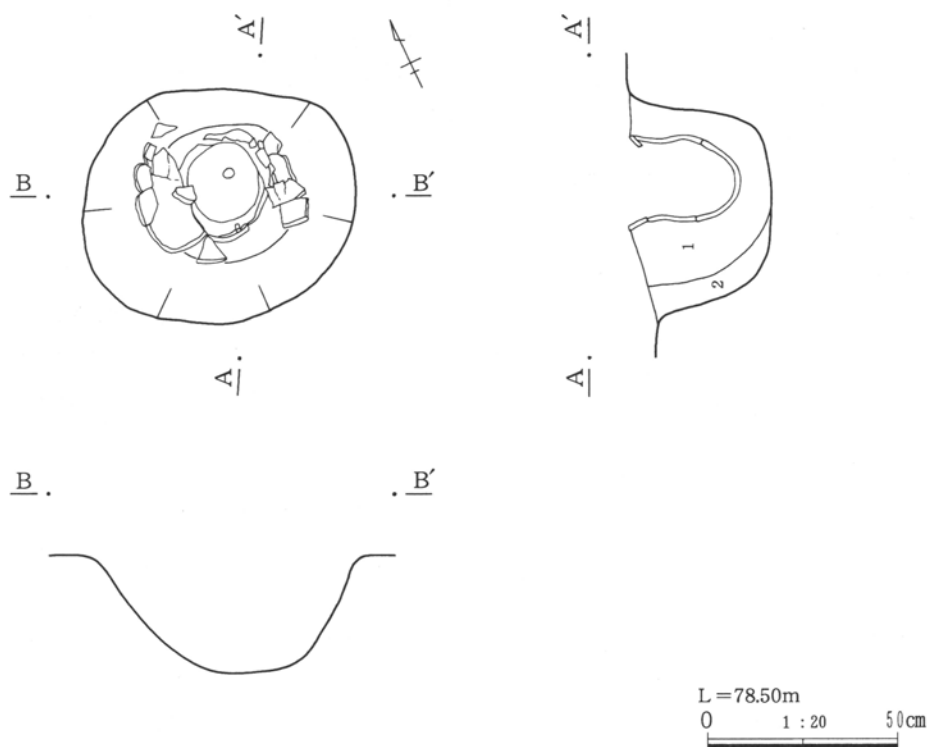
概要 埋設されていた土器は、深鉢形土器で、口縁部を上にして正位で埋設されていた。口縁部は欠損部が多い。なお、埋甕内から焼土は確認されず、土器も二次焼成を受けていない。

本埋甕は、土坑状の掘り込みが確認されたので、調査時にはA区33号土坑という呼称も使われていた。

遺物 埋設されていた土器及び周辺より出土した土器を個別に説明する。

<土器>

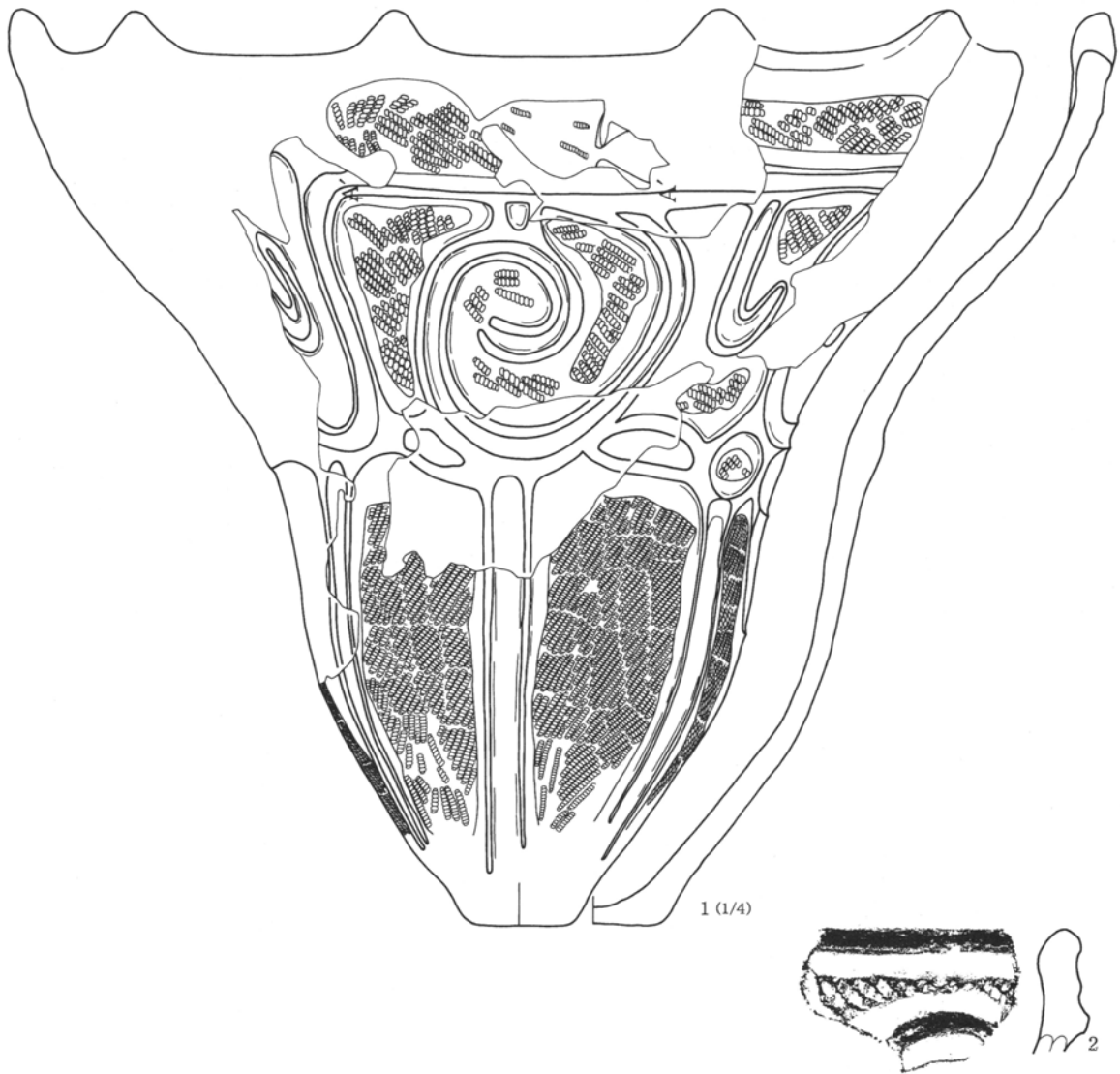
1は埋設されていた土器である。8単位の舌状突起をもつと思われる深鉢形土器である。口径のわりに底部は小さく不安定である。文様は渦巻と楕円等の区画文で構成される口縁部文様帯をもつ。胴部上半に2条1組の隆帯で渦巻を描き、その周囲は不定形な区画文になっている。胴部下半には隆帯で区画された∩字状の区画が垂下する。縄文はRLが口縁部文様帯内は横位、縦位、斜位に、胴部は横位、縦位に施文されている。2は楕円等の区画文で構成された口縁部文様帯をもつ土器である。縄文はRLが横位に施文されている。



A区3号埋甕

- 1 黒褐色土 4-b層を主とする。4-b層より黒色が強い。全体に粒子が密である。
- 2 黒褐色土 4-b層を主とする。1層より黒色がやや薄い。全体に粒子が密である。

第54図 A区3号埋甕



第55図 A区3号埋甕出土遺物

A区4号埋甕 (第56図 P L13・23)

位置 本埋甕は遺跡の南西側にあたる3-P-10グリッドに位置する。本埋甕は縄文時代住居群から離れた位置にある。この埋甕は近世のA区27号土坑と重複する。A区27号土坑が本埋甕の上端を掘り込む。

概要 埋設されていた土器は、大型の深鉢形土器で、口縁部を下にして逆位で埋設されていた。胴部、底部は欠損部が多い。なお、埋甕内の土から焼土、灰等は確認されず、土器自体も二次焼成を受けていない。

本埋甕は、土坑状の掘り込みが確認されたので、

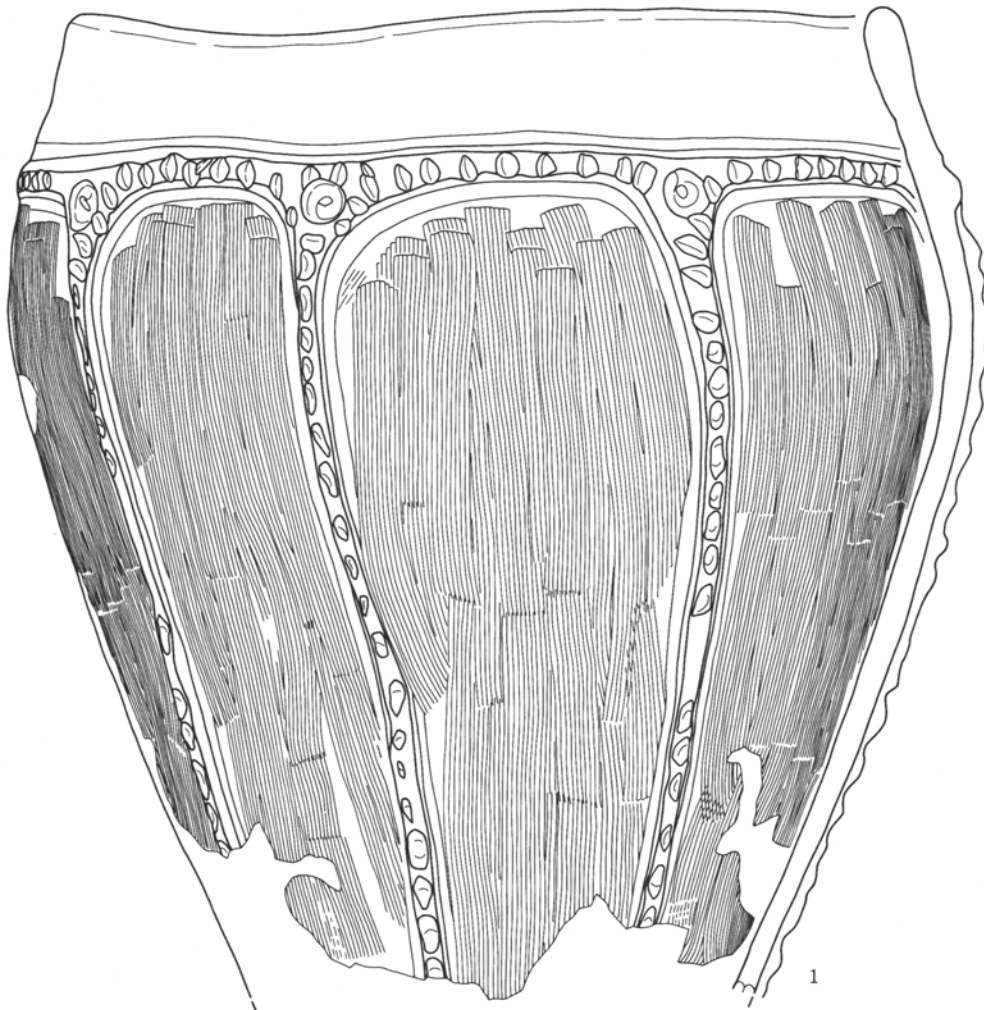
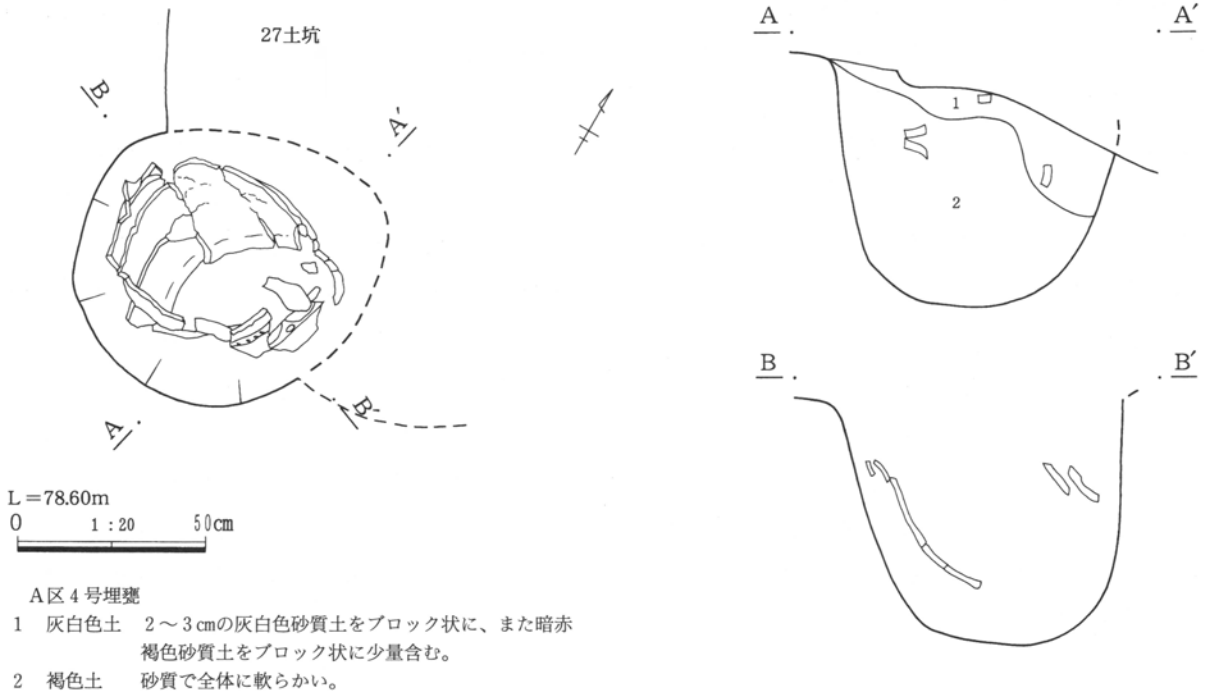
調査時にはA区28号土坑という呼称も使われていた。

遺物 埋設されていた土器の説明をする。

<土器>

1は口径43cm、残存する器高52cmの大型の深鉢形土器である。内傾する口縁部無文帯をもち、口縁部無文帯下の隆帯及び懸垂する隆帯に指頭圧痕状の刺突が刻まれている。横位の隆帯と懸垂する隆帯が合流するところに8単位、円形の圧痕をもつ。地文は条線である。この土器は第3群土器に属する。

1. 縄文時代の遺構と遺物



第56図 A区4号埋甕・出土遺物

A区5号埋甕 (第57図 P L13・23)

位置 本埋甕は遺跡のA区中央部北寄りにあたる3-J-17グリッドに位置する。本埋甕の近くにはA区9号埋甕がある。周辺には縄文時代の遺構は少ない。

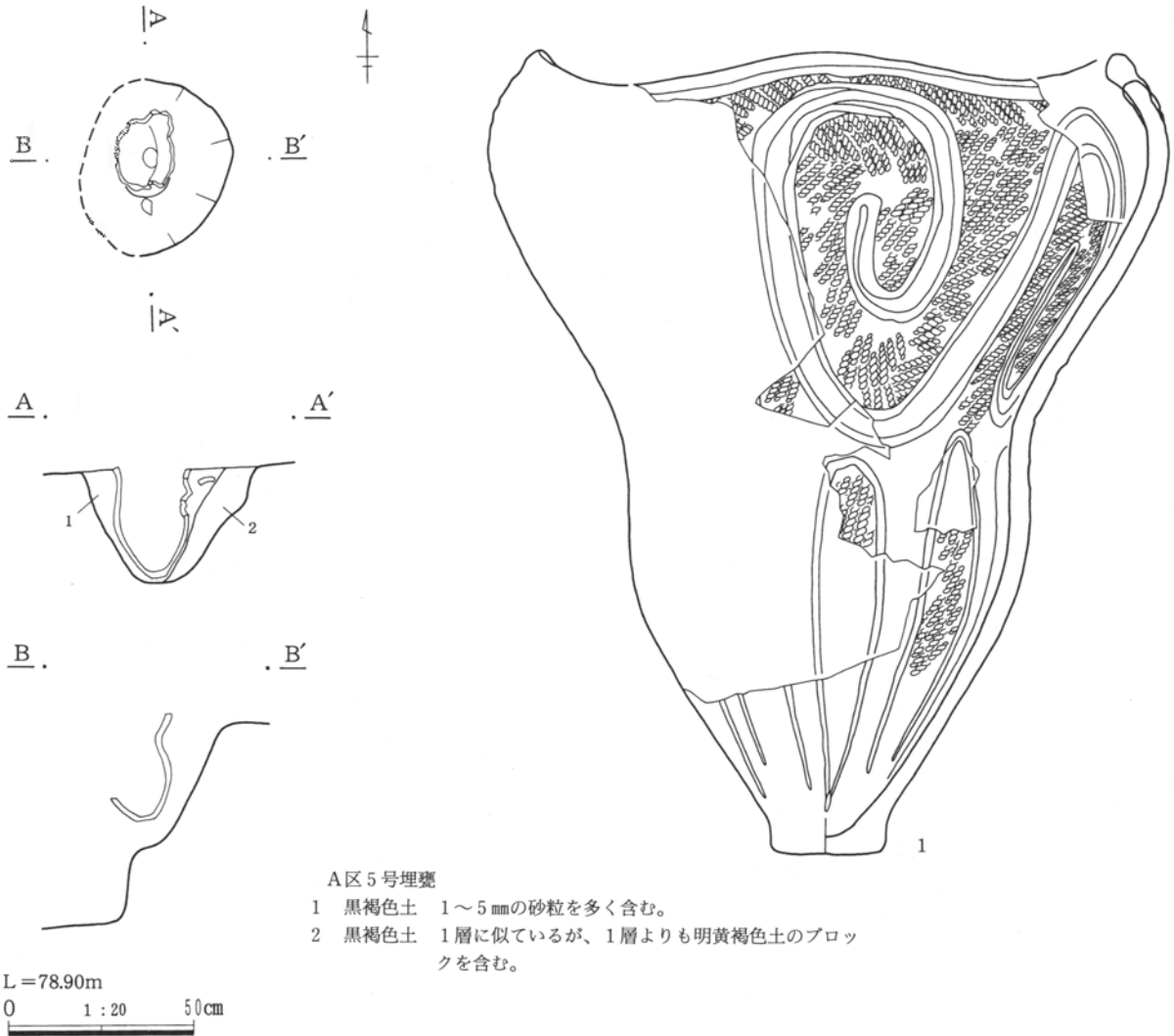
概要 本埋甕は、土層確認のためのトレンチを掘り込んだ際に検出された。埋設されていた土器は、深鉢形土器で、口縁部を上にして正位で埋設されていた。なお、埋甕内の土から焼土などは確認されず、住居跡の覆土と似た土である。土器本体も二次焼成を受けていない。

本埋甕は、土坑状の掘り込みが確認されたので、調査時にはA区34号土坑という呼称も使われていた。

遺物 埋設されていた土器を説明する。

<土器>

1は口径31cm、器高43.2cm、底径5.8cmの波状口縁となる深鉢形土器である。器形は口縁部が内湾し、胴部中程の括れが強くなる。小さな底部をもつ不安定な器形である。文様は口唇部に太めの沈線を口縁部形状に合わせて施文し、胴部との区画をなす。胴部上半に2条1組による沈線で渦巻が描かれる。渦巻区画の周囲は縄文が施文されている。胴部下半は∩字状の区画が垂下する。∩字状の区画内も縄文で施文されている。縄文はRLが横位、縦位に施文されており、口唇部の横位の沈線下は、羽状縄文になっている。この土器は第3群土器に属する。



A区5号埋甕

- 1 黒褐色土 1～5mmの砂粒を多く含む。
- 2 黒褐色土 1層に似ているが、1層よりも明黄褐色土のブロックを含む。

第57図 A区5号埋甕・出土遺物

A区6号埋甕 (第58図 PL13・23)

位置 本埋甕は遺跡の北西端に近い8-A-1グリッドに位置する。本埋甕の東にはA区7号埋甕がある。

概要 埋設されていた土器は、深鉢形土器で、口縁部は欠損している。口縁部方向を上にして正位で埋設されていた。なお、埋甕内の土から焼土、灰等は確認されず、土器も二次焼成を受けていない。

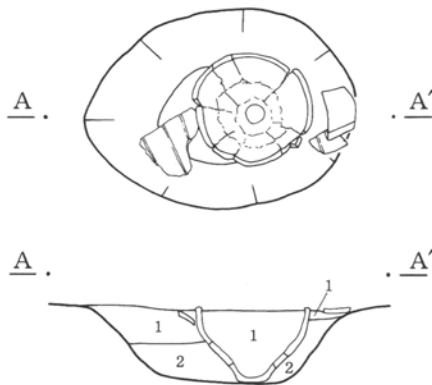
本埋甕は、土坑状の掘り込みが確認されたので、

調査時にはA区40号土坑という呼称も使われていた。

遺物 埋設されていた土器を説明する。

<土器>

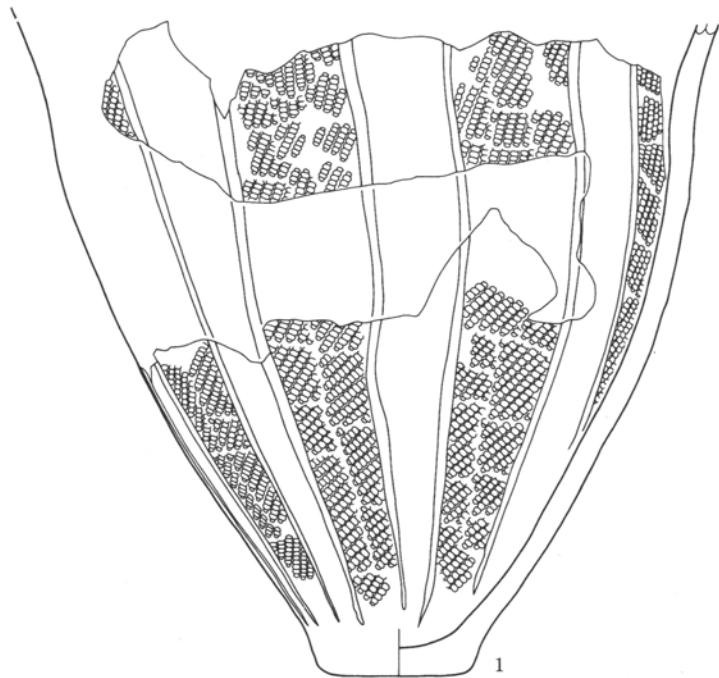
1は小さな底部をもつ、やや不安定な器形の深鉢形土器である。文様は懸垂文が垂下する。縄文はRLが縦位、斜位に施文されている。この土器は第3群土器に属する。



L=78.00m
0 1:20 50cm

A区6号埋甕

- | | |
|---------|-----------------------------------|
| 1 黒褐色土 | 4-b層を主とした層。わずかに4-d層の灰黄褐色土(砂質)を含む。 |
| 2 灰黄褐色土 | 4-d層を主とした層。少量の黒褐色土(4-b層と思われる)を含む。 |



第58図 A区6号埋甕・出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

A区7号埋甕 (第59図 PL14・23・35)

位置 本埋甕は遺跡の北西端に近い7-R-0グリッドに位置する。本埋甕の西にはA区6号埋甕がある。本埋甕の検出された位置は縄文時代の住居跡から、やや離れている。

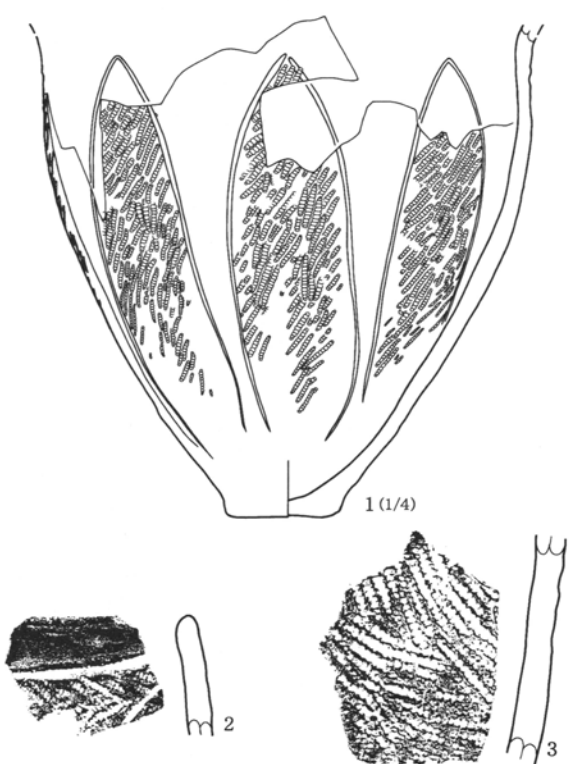
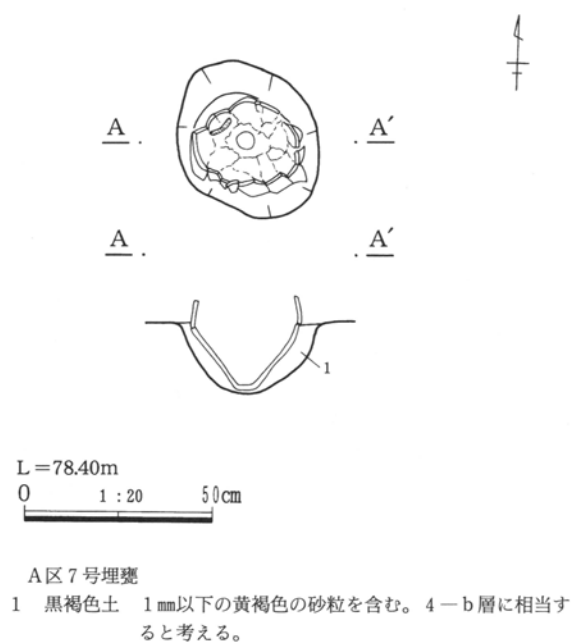
概要 埋設されていた土器は、深鉢形土器で、口縁部が欠損している。口縁部を上にして正位で埋設されていた。なお、埋甕内の土は黒褐色土で覆土の土層と大きな違いはみられない。また焼土、灰等は確認されず、土器自体も二次焼成を受けていない。

本埋甕は土坑状の掘り込みが確認されたので、調査時にはA区43号土坑という呼称も使われていた。

遺物 埋設されていた土器及び周辺より出土した土器を個別に説明する。

<土器>

1は胴部中程に弱い括れをもつ。文様は細い沈線によるΠ字状の区画が垂下する。胴部上半の文様構成はW字状になると思われる。縄文はRLが縦位、斜位に施文されている。2は口縁部無文帯をもち、胴部上半はO字状または渦巻の文様構成となると思われる土器である。縄文はRL(0段多条)が縦位、横位に施文されており、羽状縄文になっている。3は縄文のみの胴部である。LRが充填されている。これらの土器は第3群土器に属する。



A区7号埋甕
1 黒褐色土 1mm以下の黄褐色の砂粒を含む。4-b層に相当すると考える。

第59図 A区7号埋甕・出土遺物

A区8号埋甕 (第60図 PL14・23・35)

位置 本埋甕は遺跡の北西端に近い7-O-0グリッドに位置する。本埋甕の近くにA区3号土器群、71号住居跡がある。

概要 埋設されていた土器は深鉢形土器で、口縁部を上にして、正位で埋設されていた。胴部、底部は欠損している。なお、土坑状の掘り込み内から焼土などは確認されず、土器も二次焼成を受けていない。

本埋甕は土坑状の掘り込みが確認されたので、調査時にはA区40号土坑という呼称も使われていた。

遺物 埋設されていた土器及び周辺より出土した土器を個別に説明する。

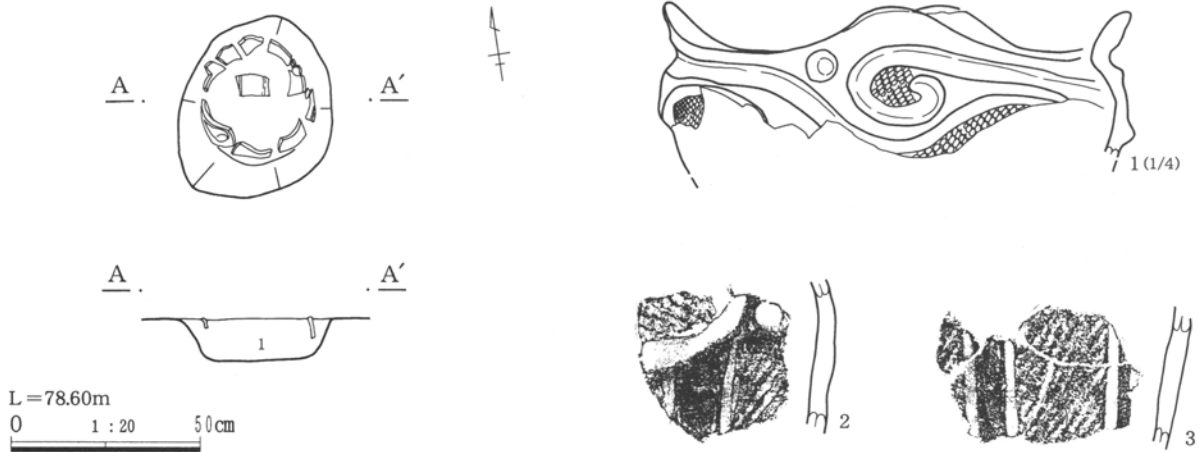
<土器>

1は4単位の舌状突起をもつ深鉢形土器である。文様は区画化された渦巻と楕円等の区画文で構成さ

1. 縄文時代の遺構と遺物

れる。口縁部文様帯の区画文間に円形の刺突をもつ。縄文はRLが横位に施文されている。2は口縁部文様帯をもつ深鉢形土器である。楕円等の区画文で構成されていると思われる。胴部は懸垂文が垂下する。懸垂文内に蛇行文が施文されていると思われる。縄

文はRLが口縁部文様帯内は横位に、胴部は縦位に施文されている。3は懸垂文が垂下する胴部である。縄文はRLが縦位に施文されている。これらの土器は第3群土器に属する。



A区8号埋甕

1 黒褐色土 砂粒を大量に含む。4-b層に相当すると思われる。

第60図 A区8号埋甕・出土遺物

A区9号埋甕 (第61図 PL14・23・35)

位置 本埋甕は遺跡の中央部北寄りに近い3-L-17グリッドに位置する。本埋甕の近くにはA区47号住居跡がある。古墳時代のA区10号住居跡と重複していると思われる。

概要 本埋甕は、古墳時代のA区10号住居跡の調査を終え、縄文時代の土層面まで、確認調査のため、人力で地面を掘り下げたが、遺物・遺構とも確認されなかったため、重機でさらに地面を掘り下げた時に検出された。その際、埋甕と思われる土器片が多数出土した。土器の埋設の状況ははっきりしないが、土器の出土した位置を記載しておくことにする。

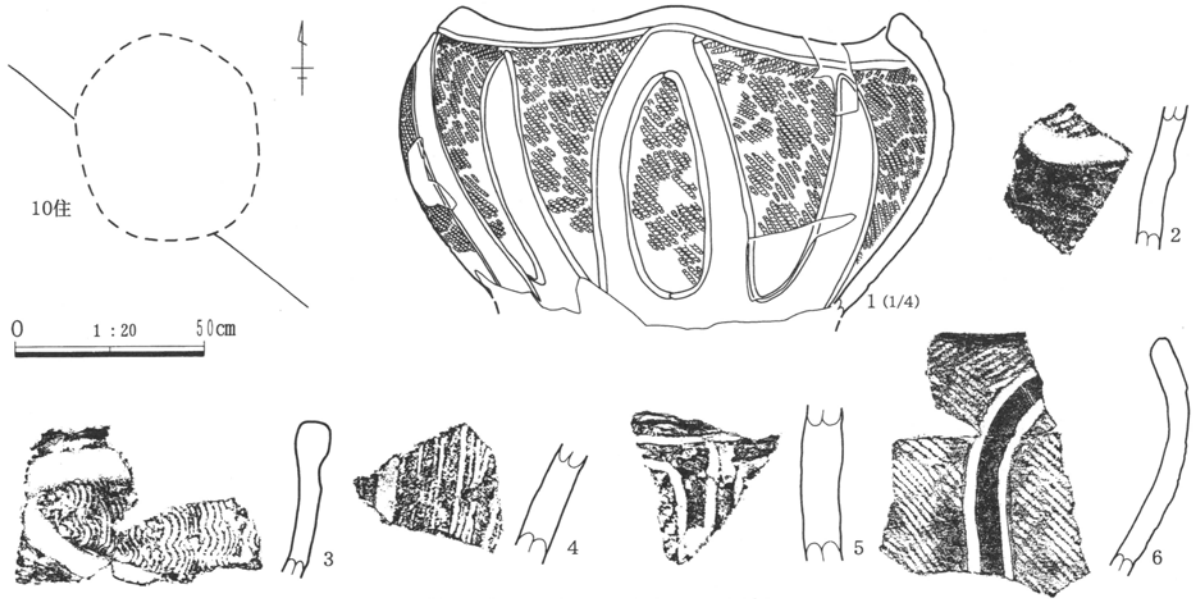
本埋甕は他の埋甕同様に土坑状の掘り込みがあったらうと思われ、調査時にはA区49号土坑という呼称も使われていた。

遺物 埋設されていた土器及び周辺より出土した土器を個別に説明する。

<土器>

1は本埋甕の本体と思われる土器である。胴部下

半以下は欠損している。器形は波状口縁となる深鉢形土器である。口唇部に沿って細い沈線が施文されている。胴部上半に細い沈線によるO字状の区画をもつ。縄文はLRが横位、縦位に施文されており、口唇部付近は羽状縄文になっている。2・3は楕円等の区画文で構成された口縁部文様帯をもつ土器である。2の縄文はRLが縦位に施文されている。3の口縁部文様帯内はコンパス文が充填されている。4は懸垂文が垂下する胴部である。懸垂文内は条線が施文されている。5は胴部下半に∩字状の区画が垂下する胴部である。∩字状の区画間に1条の沈線が垂下する。区画内はRLが縦位に施文されている。6は2条1組の沈線による渦巻を描くと思われる。縄文はLR(0段多条)が横位、縦位に施文されており、口縁部付近は羽状縄文になっている。1~6は第3群土器に属する。



第61図 A区9号埋甕・出土遺物

A区10号埋甕 (第62・63図 PL14・23・35)

位置 本埋甕は遺跡の北西端に近い4-A-17グリッドに位置する。本埋甕の近くにA区13号住居跡がある。また、古墳時代のA区11号住居跡と重複する。

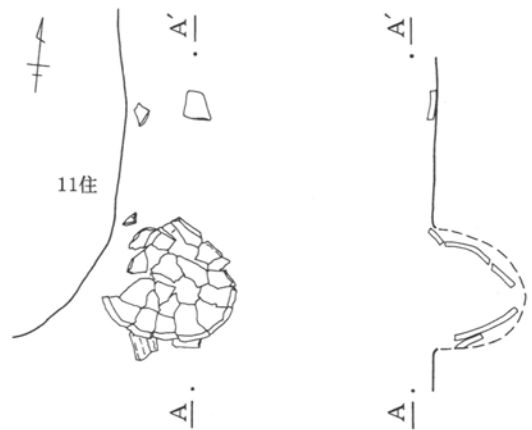
概要 調査時は埋設されていた土器を中央部に想定した住居跡として、A区26号住居跡と呼称していた。しかし、土器の埋設状態及び住居断面の土層の堆積の様子、遺物の出土状況等を検討した結果、住居跡とするのは無理があるのではなかろうかと考え、埋設されていた土器を生かしてA区10号埋甕とすることにした。埋設された土器は深鉢形土器で、口縁部は欠損しているが、口縁部方向を上にした正位で埋設されていた。なお、土器内の土から焼土等は確認されず、住居覆土と似た土であった。土器も二次焼成を受けていない。

遺物 埋設されていた土器及び周辺から出土した土器について個別に説明する。

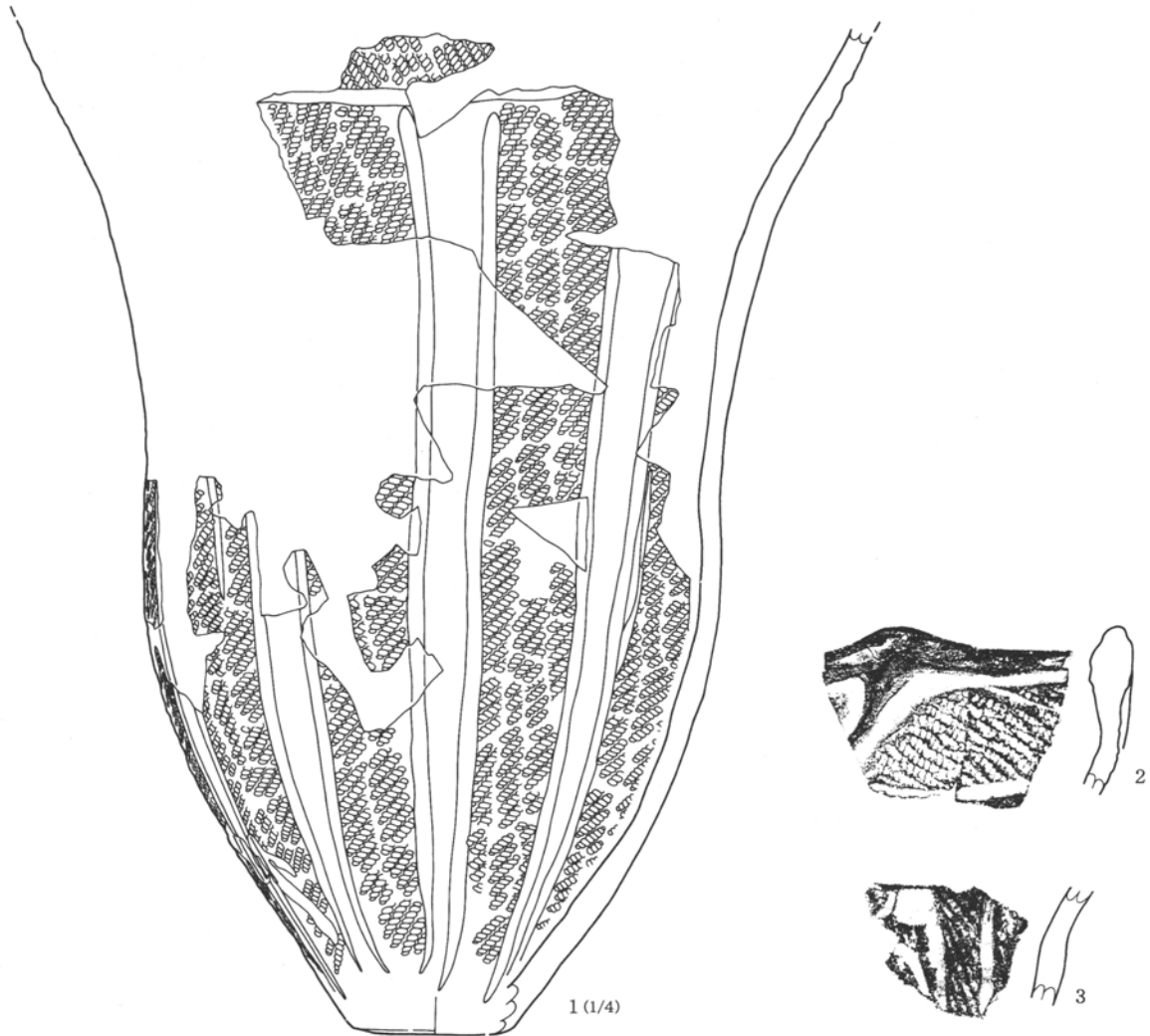
<土器>

1は本埋甕本体となる深鉢形土器である。器形は、胴部が若干括れる緩やかなキャリパー形を呈する。口縁部が欠損しているが、楕円等の区画文で構成された口縁部文様帯をもつ。胴部は懸垂文が垂下する。縄文はRLが口縁部文様帯内は横位に、胴部は縦位

に施文されている。2は楕円等の区画文で構成された口縁部文様帯をもつ土器である。器形は波状口縁となる深鉢形土器である。縄文はRL(0段多条)が横位に施文されている。3は懸垂文が垂下する胴部である。蛇行文と思われる沈線文が施文されている。縄文はLが縦位に施文されている。1~3の土器は第3群土器に属する。



第62図 A区10号埋甕



第63図 A区10号埋甕出土遺物

C区2号埋甕 (第64～68図 PL15・24・35・60)

位置 本埋甕は遺跡の南東端に近い9-T-16グリッドに位置する。本埋甕の周辺には縄文時代の遺構は余り見られない。本埋甕の近くにはC区17号土坑がある。

概要 埋設されていた土器は、ほぼ完形の深鉢形土器で、口縁部を上にして正位で埋設されていた。またその土器の上面及び口縁部に、まるで差し込まれているかのように3個体分の土器が出土した。次のページ平面図の右側①～③は調査の流れを示している。第64図①は最初に本埋甕を確認した時の平面図である。②は外形を確認するためにさらに掘り下げた時の平面図。③は本埋甕の上の土器を取り上げた直後のものである。

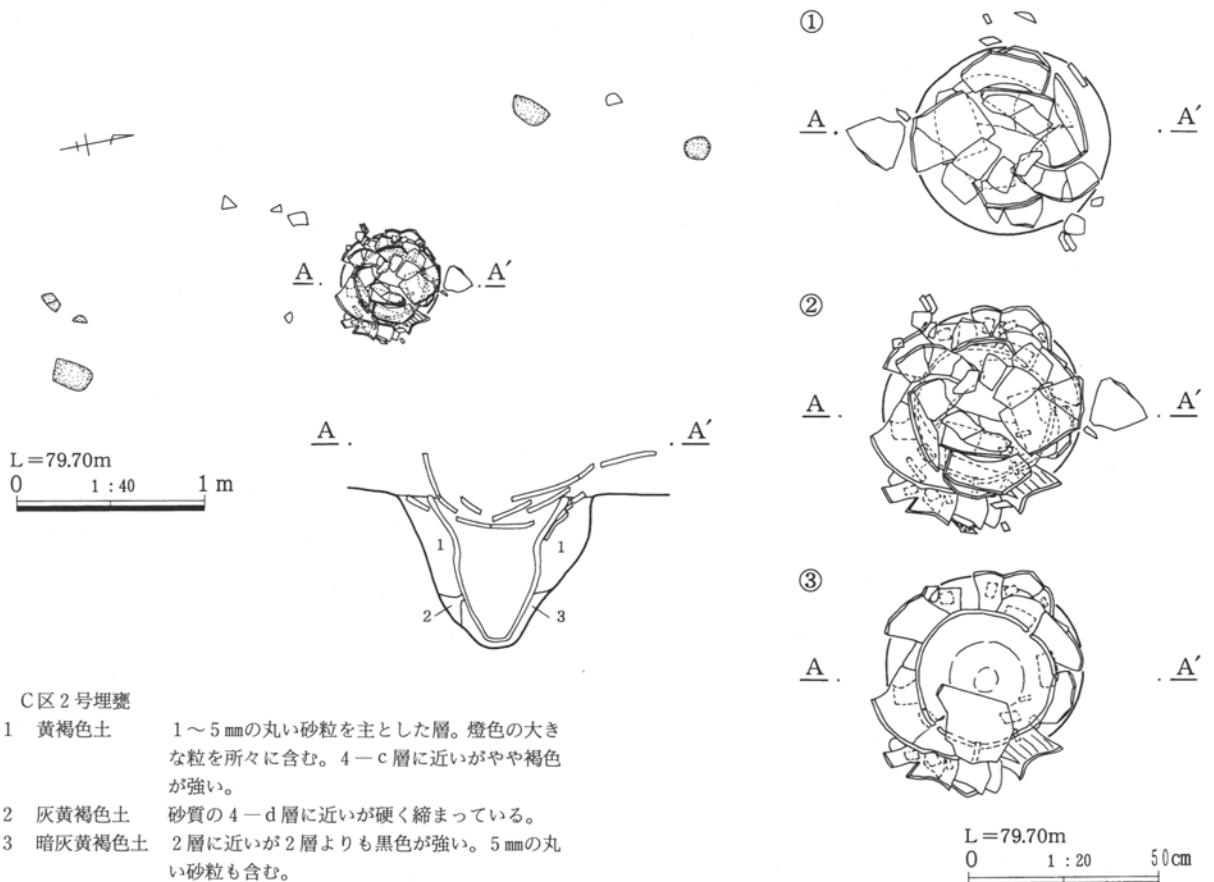
なお、埋甕内の土は黒褐色土で縄文時代の住居跡覆土と同じような土であった。この土から焼土、灰等は検出されなかった。埋甕本体の土器は二次焼成を受けており、大変脆い。調査時にはこの埋甕を中心に据えた住居跡を想定し、C区2号住居跡と呼称も検討し、周辺を慎重に掘り下げた。しかし、遺物の出土状況、土層の堆積の様子等を考慮した結果、住居跡とすることは無理があるだろうと判断し、埋甕とすることにした。本埋甕は掘り込みがあることから調査時にはC区18号土坑という呼称も使われていた。

遺物 埋設されていた土器及び周辺より出土した遺物を個別に説明する。

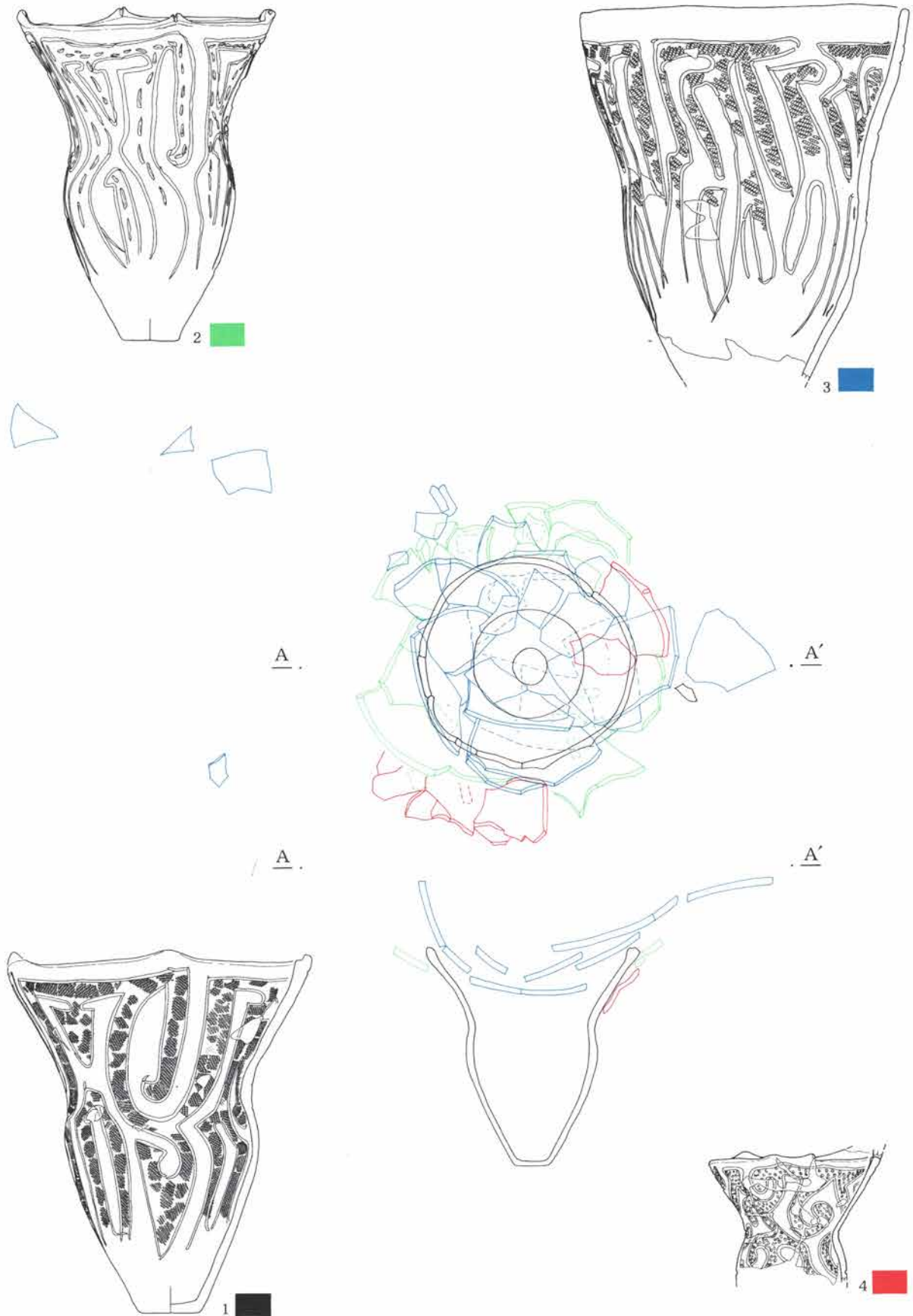
<土器>

1は本埋甕の本体の土器である。器形は胴部中程に括れをもち、胴部下半が丸みをもつ深鉢形土器で、口縁に4単位の波頂部をもつ波状口縁である。波頂部の内側には円形の刺突をもつ。文様は胴部上半に2条の沈線で囲まれたJ字状の区画及びスベード状の区画をもち、連結している。胴部下半にJ字状の区画で釣り針状になっているものもみられるが、下が開放されている区画もある。区画内はLRが充填されている。2も1と同様な器形をもつ深鉢形土器である。口縁に4単位の波頂部をもつ波状口縁である。波頂部に刻みをもつ。刻みの隣に円形の刺突をもつところもある。文様は胴部上半に2条の沈線で囲まれたJ字状の区画及びスベード状の区画をもち、連結している。胴部下半の区画は下が開放されているものが目立つ。区画内はやや長めの刺突が充填されている。3は胴部中程の括れが弱い、平口縁となる深鉢形土器である。文様は2条の沈線で囲ま

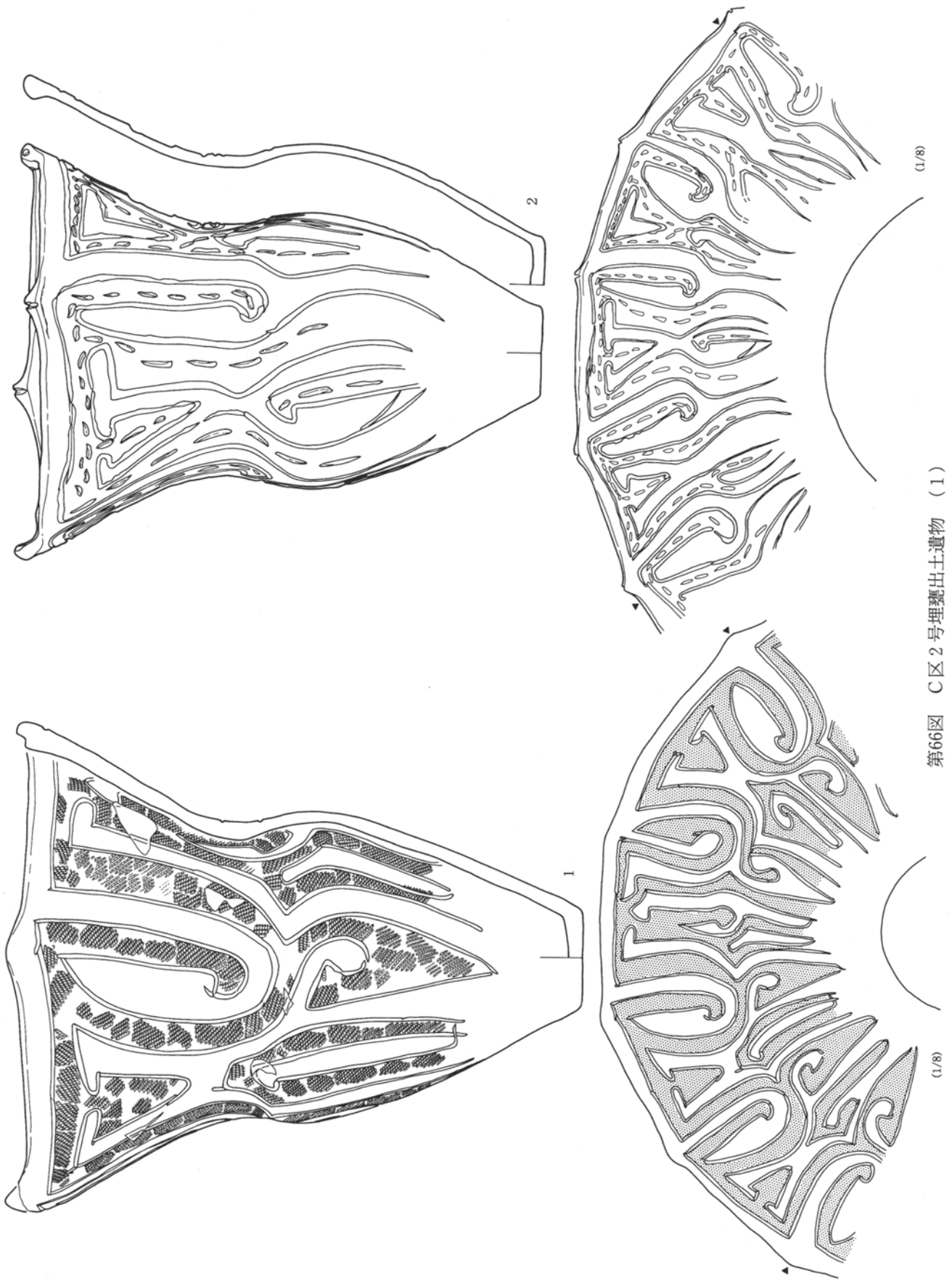
れた区画をもつが、縦位に流れる傾向にあり、J字状の区画がはっきりしない。口縁部近くの横位に連結する区画がある。胴部下半は区画内に縄文が施文されていないか、区画の下部が開放されている。縄文はLRが充填されている。4は胴部中程に括れをもち、胴部下半が丸みをもつ深鉢形土器である。口縁部に3単位の波頂部をもつ波状口縁の土器である。波頂部の1つは大型把手になると思われる。胴部下部は欠損している。文様は渦巻状のJ字文が横位及び縦位に連結している。区画内は円形の刺突が充填されている。5は口縁部から縄文が施文されている土器である。縄文はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。6は、縦位にやや太めの沈線が施文され、斜め方向に細い沈線による区画をもつ。区画内にはLRが充填施文されている。1~4は第5群土器、5は第4群土器、6は第6群土器に属する。



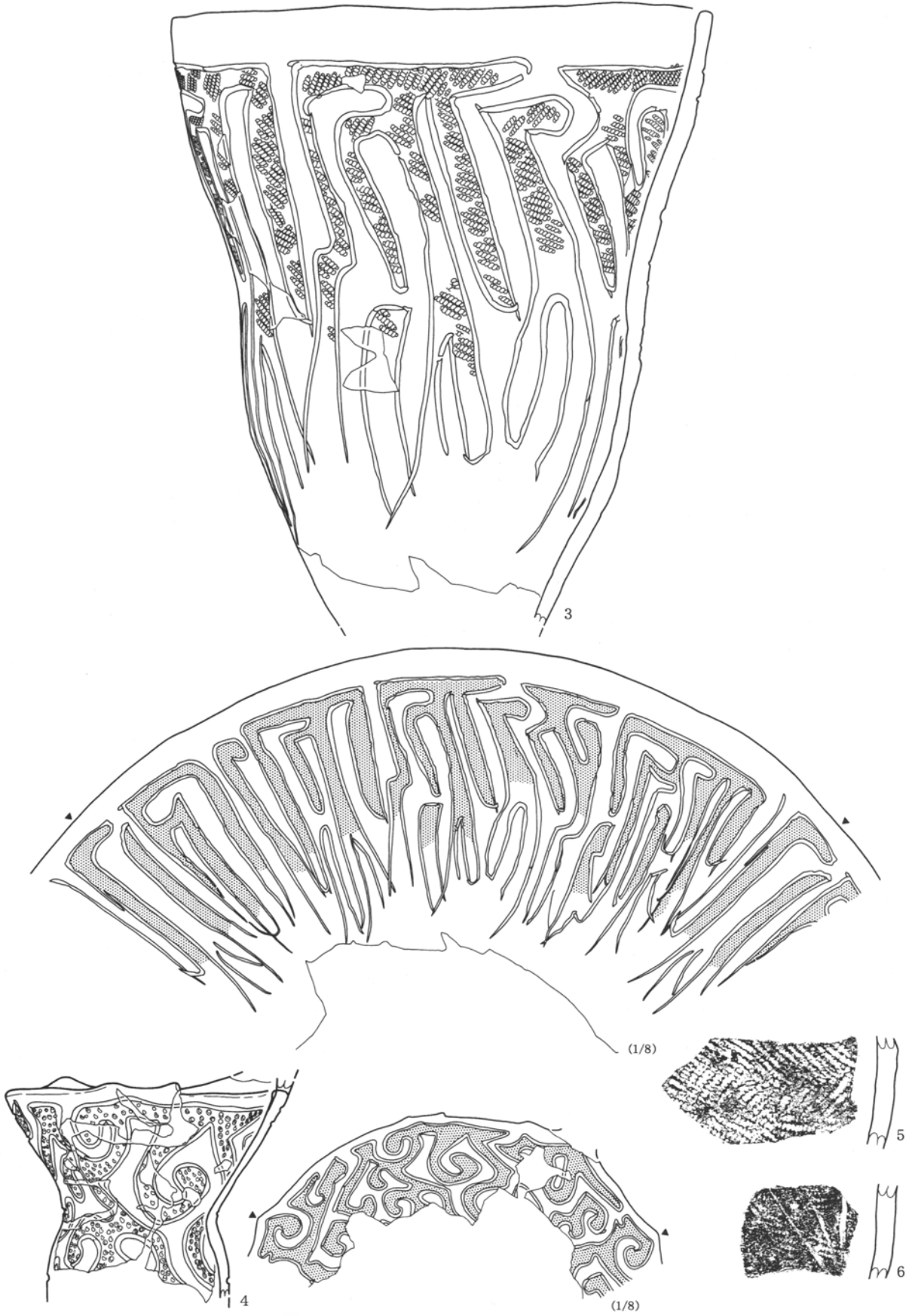
第64図 C区2号埋甕



第65図 C区2号埋甕遺物出土状況



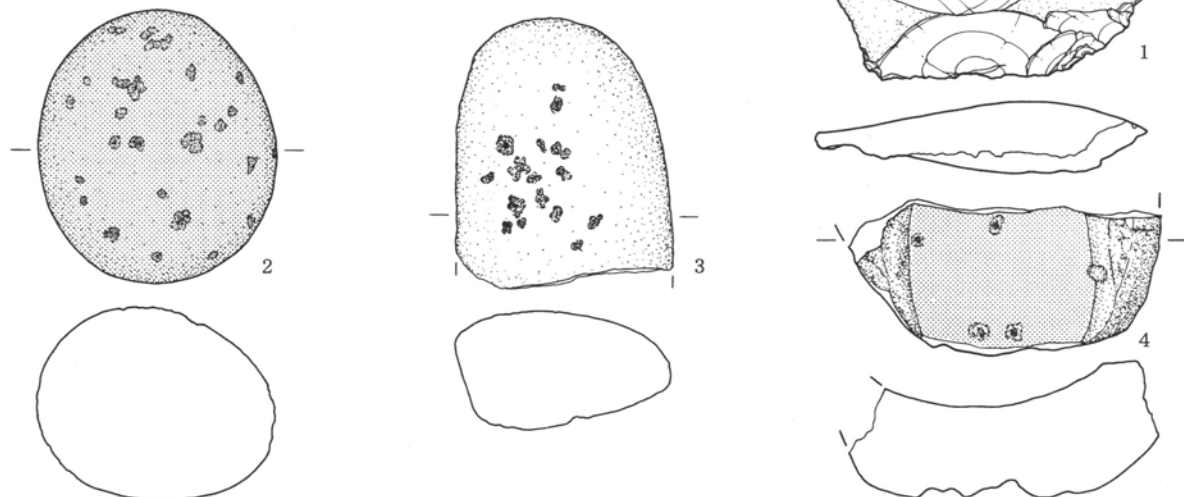
第66図 C区2号埋葬出土遺物 (1)



第67図 C区2号埋甕出土遺物 (2)

<石器>

出土した石器には、スクレイパーが1点、磨石が1点、多孔石が1点、石皿が1点ある。これらの石器に使用される石材には、スクレイパーに黑色頁岩、磨石に変質安山岩、多孔石に粗粒輝石安山岩、石皿に粗粒輝石安山岩が使用されている。



C区2号埋藏石器計測表

No.	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
1	スクレイパー	黑色頁岩	8.1	8.8	2.0	129.7
2	磨石	変質安山岩	14.3	12.7	10.2	2,643

No.	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
3	多孔石	粗粒輝石安山岩	(21.3)	(17.2)	9.3	(5,154)
4	石皿	粗粒輝石安山岩	(12.1)	(24.6)	(10.9)	(3,223)

第68図 C区2号埋藏出土遺物 (3)

(4) 土器群

A区2号土器群 (第69・70図 P L16・24・36)

位置 本土器群は遺跡の西端に近い4-G-13グリッドに位置する。近くには、A区19号住居跡がある。

概要 A区19号住居跡近くの4-G-13グリッド付近で、東西1.35m、南北1.35mの範囲に遺物の集中する箇所が見られた。土坑等を想定しながら、慎重に掘り進めたが、壁面、底面等を確認することが難しかった。そこで、本書においては、遺構を想定しながらも、遺物が集中的に出土した箇所としてA区2号土器群と呼称し、掲載しておくことにする。

遺物 本土器群およびその周囲より出土した土器について個別に説明する。

<土器>

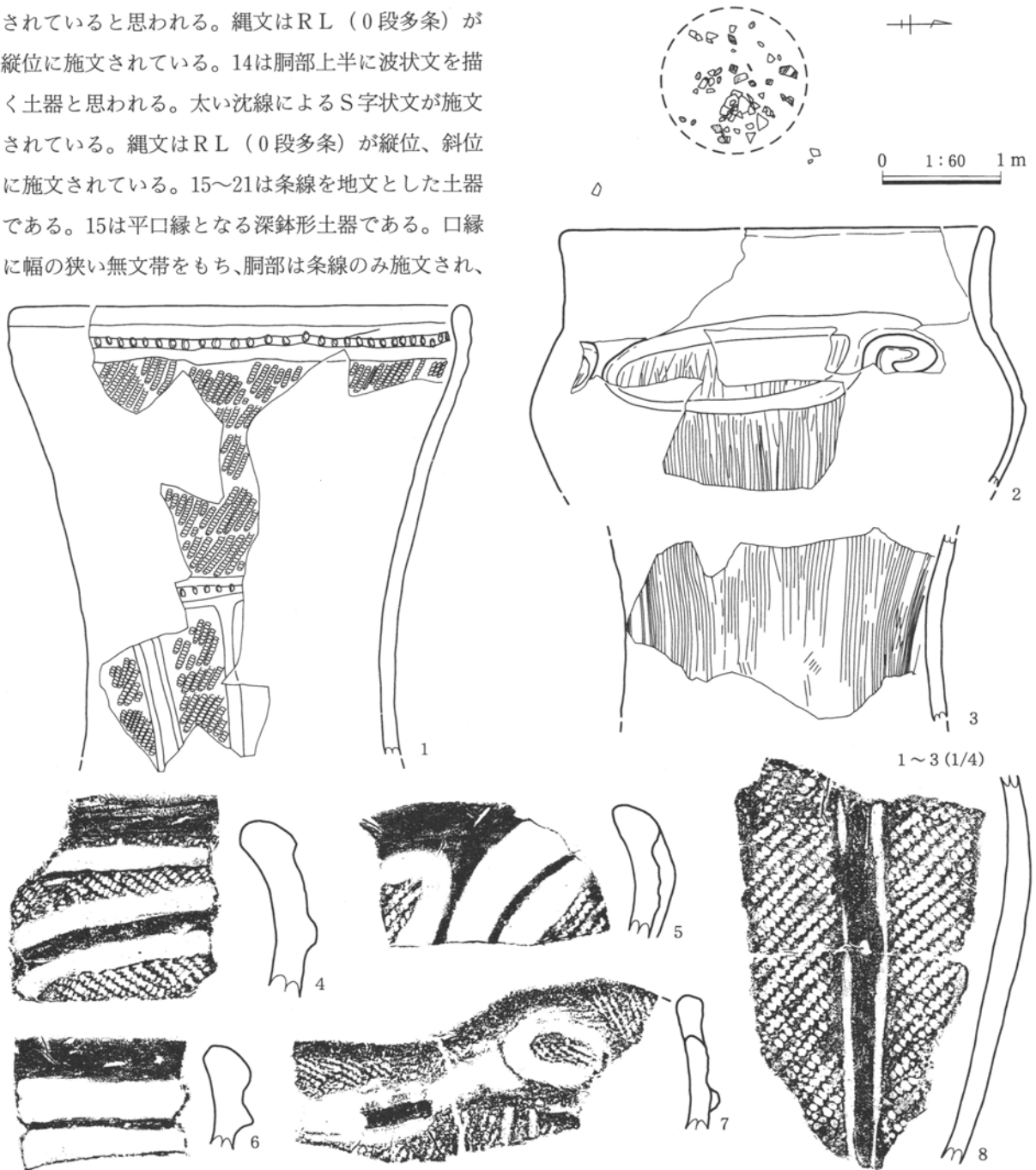
1は胴部中程の括れが弱い平口縁となる深鉢形土

器である。口縁部及び胴部中程に太い横位の沈線に刺突列が施文されている。胴部中程の刺突列により胴部文様が2分される。胴部上半は縄文のみ施文されており、区画をもたない。胴部下半にはΠ字状の区画が垂下する。縄文はRLが縦位に施文されている。2は口縁部がやや直線的に立ち上がり、胴部に丸みをもつ鉢形土器と思われる。口縁部無文帯をもち、胴部上半に渦巻と楕円等の区画文で構成された文様帯を有する。区画文内及び以下は条線が縦位に施文されている。3は条線が縦位に施文された胴部である。4～7は楕円等の区画文で構成された口縁部文様帯をもつ土器である。いずれも隆帯による区画がめだつ。4はRLが横位に施文されている。5はLRが横位に施文されている。7は波状口縁とな

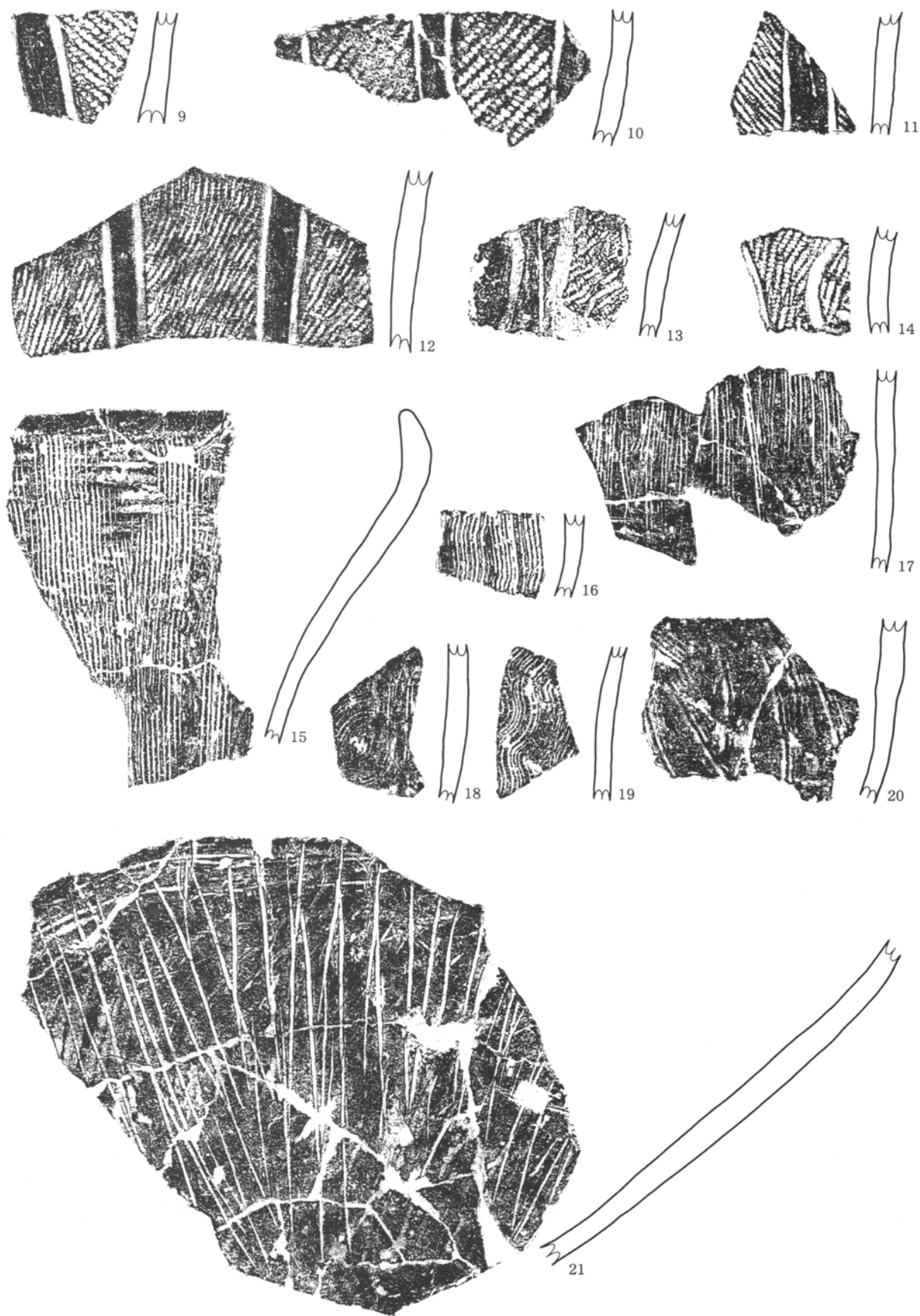
1. 縄文時代の遺構と遺物

る深鉢形土器である。口縁部に円形または渦巻の区画文をもつ。区画の隆帯の一部が残されている。胴部に懸垂文が垂下する。縄文は口唇部までRLが横位に、胴部は縦位に施文されている。8～13は懸垂文が垂下する胴部である。8・10はRLが縦位に施文されている。9・11はLRが縦位に施文されている。12はRLが縦位、斜位に施文されている。13は懸垂文内に蛇行文が、磨消懸垂文内に蕨状文が施文されていると思われる。縄文はRL（0段多条）が縦位に施文されている。14は胴部上半に波状文を描く土器と思われる。太い沈線によるS字状文が施文されている。縄文はRL（0段多条）が縦位、斜位に施文されている。15～21は条線を地文とした土器である。15は平口縁となる深鉢形土器である。口縁に幅の狭い無文帯をもち、胴部は条線のみ施文され、

他の文様はみられない。16はややカーブをつけた条線のみの胴部である。17は直線的な条線のみの胴部である。18は条線が渦を巻いている。19はコンパス文である。20は条線が入り組んだ胴部である。条線の一部が隆起線になっている。21は粗い条線が施文された胴部で器形から浅鉢形土器と思われる。1～14・21は第3群土器、15～20は第4群土器に属する。



第69図 A区2号土器群・出土遺物 (1)



第70図 A区2号土器群出土遺物 (2)

A区3号土器群 (第71~73図 PL16・37・38・60)

位置 本土器群は遺跡の北東端に近い7-N-0グリッドに位置する。近くには、A区8号埋甕、A区71号住居跡がある。

概要 A区8号埋甕近くの7-N-0グリッド内に東西2.87m、南北3.12mの範囲に遺物の集中する箇所が見られた。遺物の出土状況から住居跡等を想定しながら、慎重に掘り進めたが、住居覆土の見極めが難しく、壁面、床面、柱穴等を検出することはできなかった。遺物の多くは標高78.50~78.59mの高さから出土している。住居跡の可能性は捨てきれないが、本書においては、遺物が集中的に出土した箇所としてA区3号土器群と呼称し、掲載しておくことにする。

遺物 本土器群およびその周囲より出土した遺物について個別に説明する。

<土器>

1~13は楕円等の区画文で構成される口縁部文様帯をもつ土器である。1~3の器形は波状口縁となる深鉢形土器である。1の縄文はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されており、羽状縄文となっている。2はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されている。3はRLが横位に施文されている。4は平口縁となる深鉢形土器である。縄文はRLが横位に施文されている。5は波状口縁となる深鉢形土器である。縄文はRL(0段多条)が横位に施文されている。6の口縁部文様帯は隆帯で区画されている。胴部は条線が縦位に施文されている。区画内の縄文はRLが横位に施文されている。7は胴部に懸垂文が垂下する。磨消懸垂文内は3条の沈線による区画と思われる。縄文はRL(0段多条)が斜位に施文されている。8はRL(0段多条)が横位に施文されている。9~11は楕円の区画が弧状に変化したと思われる構成をとる口縁部文様帯をもつ土器である。9は平口縁となる深鉢形土器である。胴部に懸垂文が垂下する。口縁部文様帯内の縄文はRL(0段多条)が横位に施文されている。10の胴部は懸垂文が垂下する。縄文はRL(0段多条)が口縁部文

様帯内は横位に、懸垂文内は横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。11はRL(0段多条)が口縁部文様帯内は横位に、懸垂文内は横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。12はRL(0段多条)が斜位に施文されている。13はRLが縦位に施文されている。14~24は懸垂文が垂下する胴部である。14~19の縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。20は3条1組の沈線による磨消懸垂文が垂下する。縄文はRLが縦位に施文されている。21・22はRL(0段多条)が縦位に施文されている。23は磨消懸垂文内に蕨状文が垂下する胴部である。縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。24は3条1組の沈線による磨消懸垂文が垂下する。縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。25は蕨状文が施文されている懸垂文が垂下する胴部と思われる。縄文はRLが斜位、縦位に施文されている。26は胴部上半に2条1組の隆帯による渦巻を描く。渦巻の周囲は不定形の区画文をもつと思われる。胴部下半に沈線によるΠ字状の区画をもつ。Π字状の区画の間に蕨状文が垂下する。縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。27~30は胴部上半に1条の微隆帯による渦巻状の区画をもつ土器である。27は口縁部無文帯をもつ。縄文はRL(0段多条)が充填施文されている。28はRLが縦位に施文されている。29は胴部上半に渦巻区画をもち、胴部下半に微隆帯によるΠ字状の区画が垂下する。縄文はRL(0段多条)が縦位、斜位に施文されている。30は胴部上半の1条の微隆帯による区画文が連結している。胴部下半に無文部をもち、Π字状の区画が垂下すると思われる。縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。31は胴部上半に2条1組の沈線による渦巻を描くと思われる土器である。口縁は波状になるとと思われる。縄文はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されており、口縁部付近は羽状縄文になっている。1~31は第3群土器に属すると思われる。

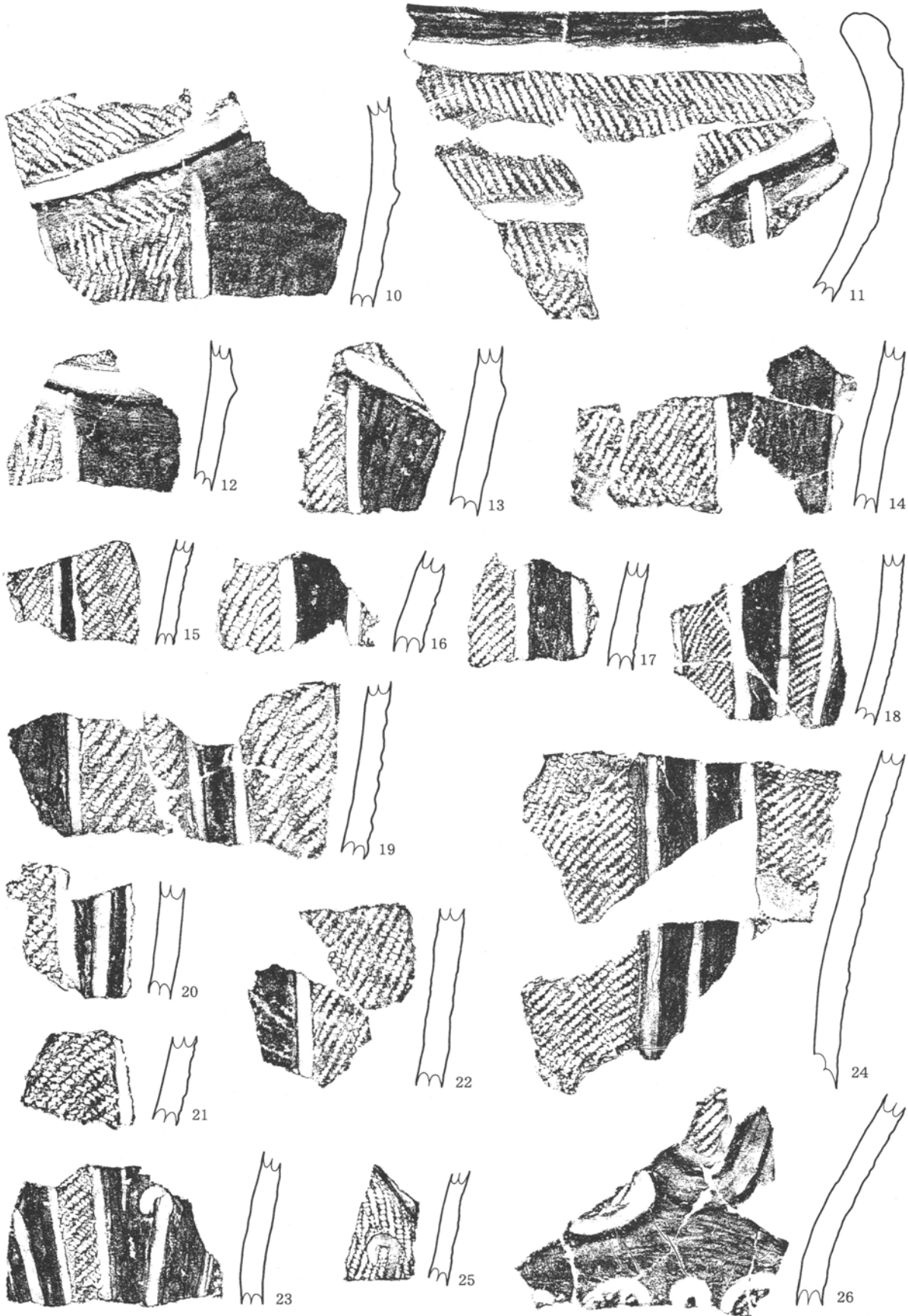
<石器>

出土した石器には、スクレイパーが1点、磨石が1点ある。これらの石器に使用される石材には、ス

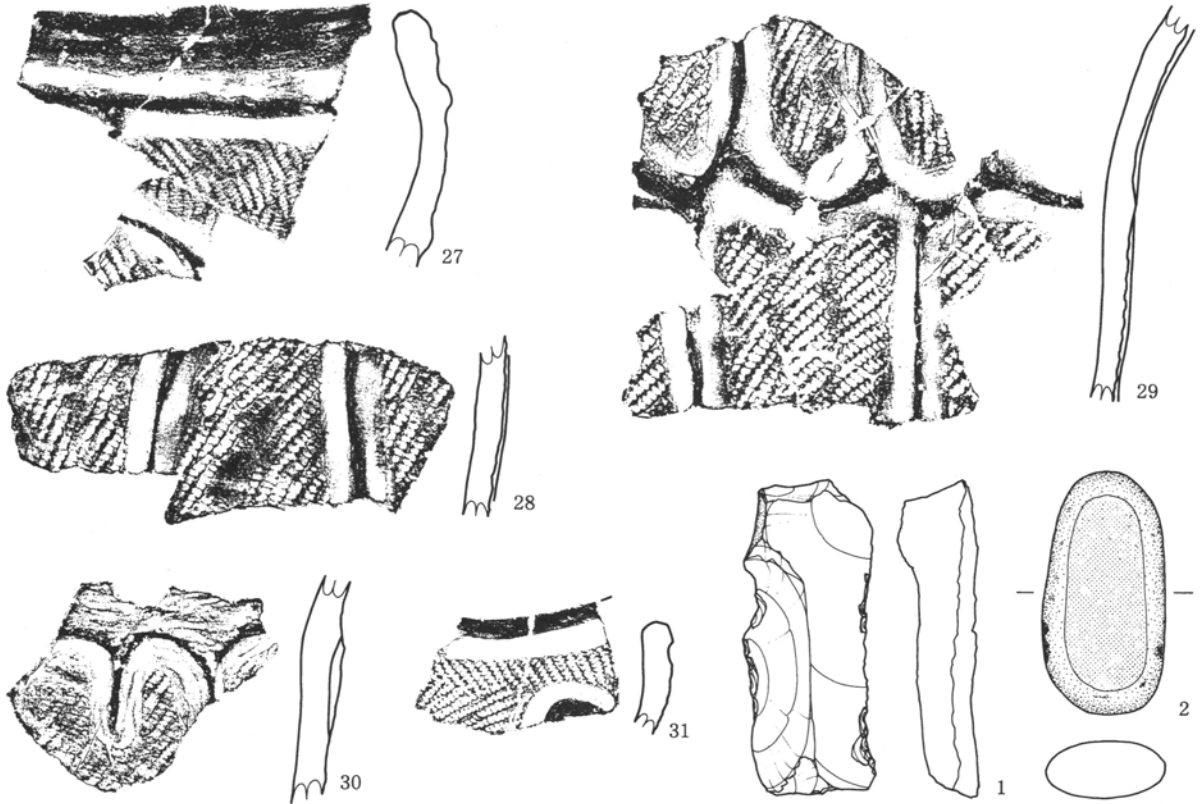
クレイパーに黒色頁岩、磨石に粗粒輝石安山岩が使用されている。



第71図 A区3号土器群・出土遺物 (1)



第72図 A区3号土器群出土遺物 (2)



A区3号土器群石器計測表

No.	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
1	スクレイパー	黒色頁岩	8.3	3.5	2.2	50.5

No.	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
2	磨石	粗粒輝石安山岩	12.8	6.6	3.1	448

第73図 A区3号土器群出土遺物 (3)

A区4号土器群 (第74図 P L17・24・38・60)

位置 本土器群はA区の中央部南端に近い3-C-10グリッドに位置する。本土器群の近くには古墳時代の住居跡や方形周溝墓、平安時代の住居跡等が多く検出されているが、縄文時代の遺構の検出はない。

概要 3-C-10グリッド内に東西0.8m、南北0.8mの範囲に遺物の集中する箇所が見られた。遺物の出土状況から土坑等を想定しながら、慎重に掘り進めたが、壁面、底面等を検出することが難しかった。そこで、本書においては、遺構を想定しながらも、遺物が集中的に出土した箇所としてA区4号土器群と呼称し、掲載しておくことにする。

遺物 本土器群およびその周囲より出土した遺物について個別に説明する。

<土器>

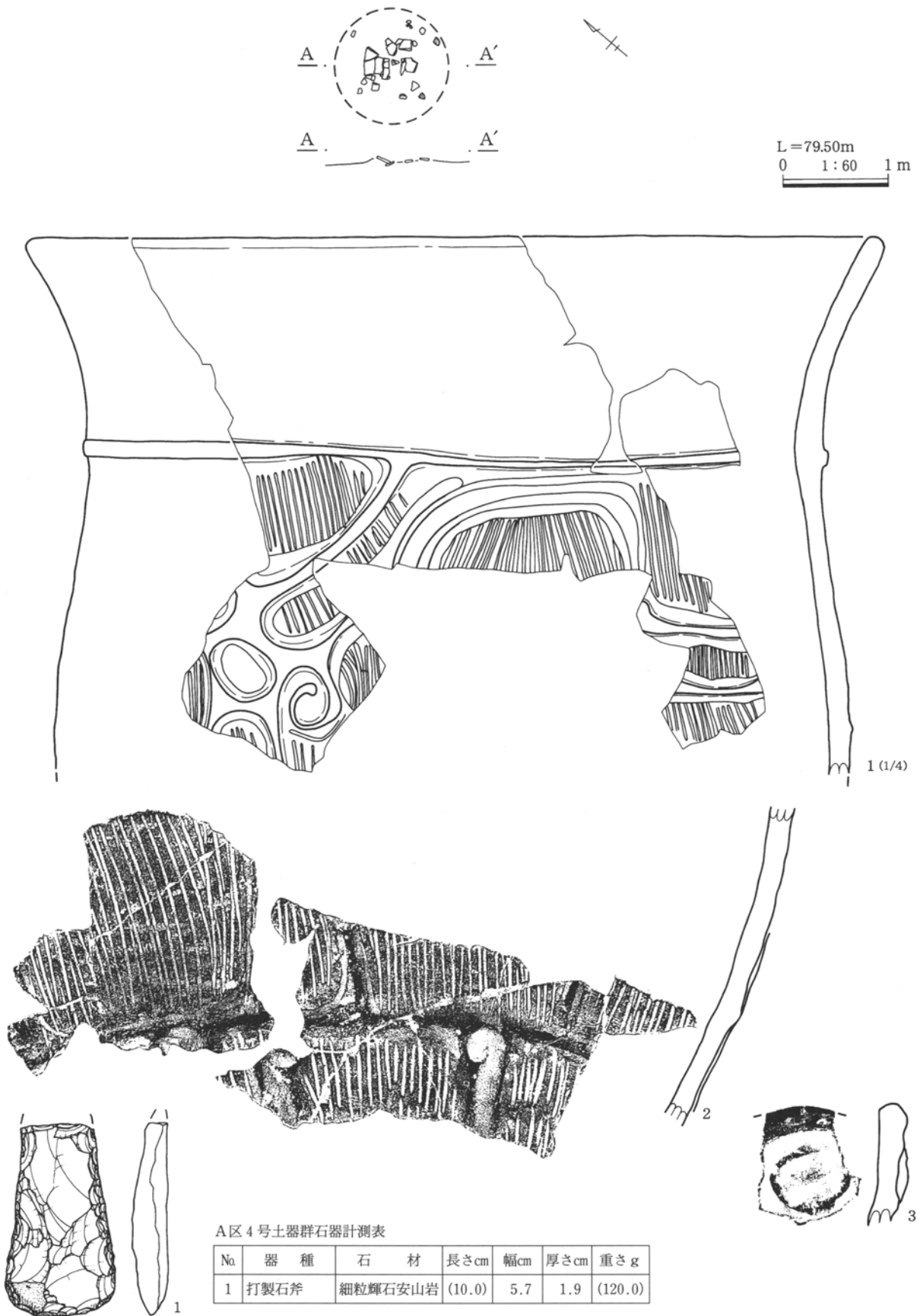
1は外傾する幅広の口縁部無文帯をもつ。胴部は

2条1組の微隆帯により渦巻を描き、その周囲は不定形の区画文で構成されている。区画内は縦位の沈線が施文されている。なお、円形の区画文内は沈線が施文されていない。2は横位に微隆帯をもち、分帯される。横位の隆帯から上方に隆帯による∩字状の区画をもつ。隆帯より下に太い沈線で描かれた蕨状文が垂下し、やはり∩字状の区画をもつ。区画内は縦位の沈線で施文されている。1と2は同一個体の可能性がある。3は波状口縁となる深鉢形土器と思われる。渦巻及び楕円等の区画文で構成された口縁部文様帯をもつ。1～3は第3群土器に属する。

<石器>

出土した石器には、打製石斧が1点ある。打製石斧に使用された石材は細粒輝石安山岩である。

1. 縄文時代の遺構と遺物



第74図 A区4号土器群・出土遺物

A区5号土器群 (第75図 P L17・25・38)

位置 本土器群はA区の中央部に近い3-F-16グリッドに位置する。本土器群の近くには古墳時代の住居跡や方形周溝墓、平安時代の住居跡等が検出されており、縄文時代の遺構はない。

概要 3-F-16グリッド付近に東西1.08m、南北1.08mの範囲に遺物の集中する箇所が見られた。遺物出土状況から土坑等を想定しながら、慎重に掘り進めたが、壁面、底面を検出することが難しかった。そこで、本書においては、遺構を想定しながらも、遺物が集中的に出土した箇所としてA区5号土器群と呼称し、掲載しておくことにする。また、本土器群の周囲には土師器の破片も散乱しており、何らかの重複関係があったものと思われる。

遺物 本土器群およびその周囲より出土した土器について個別に説明する。

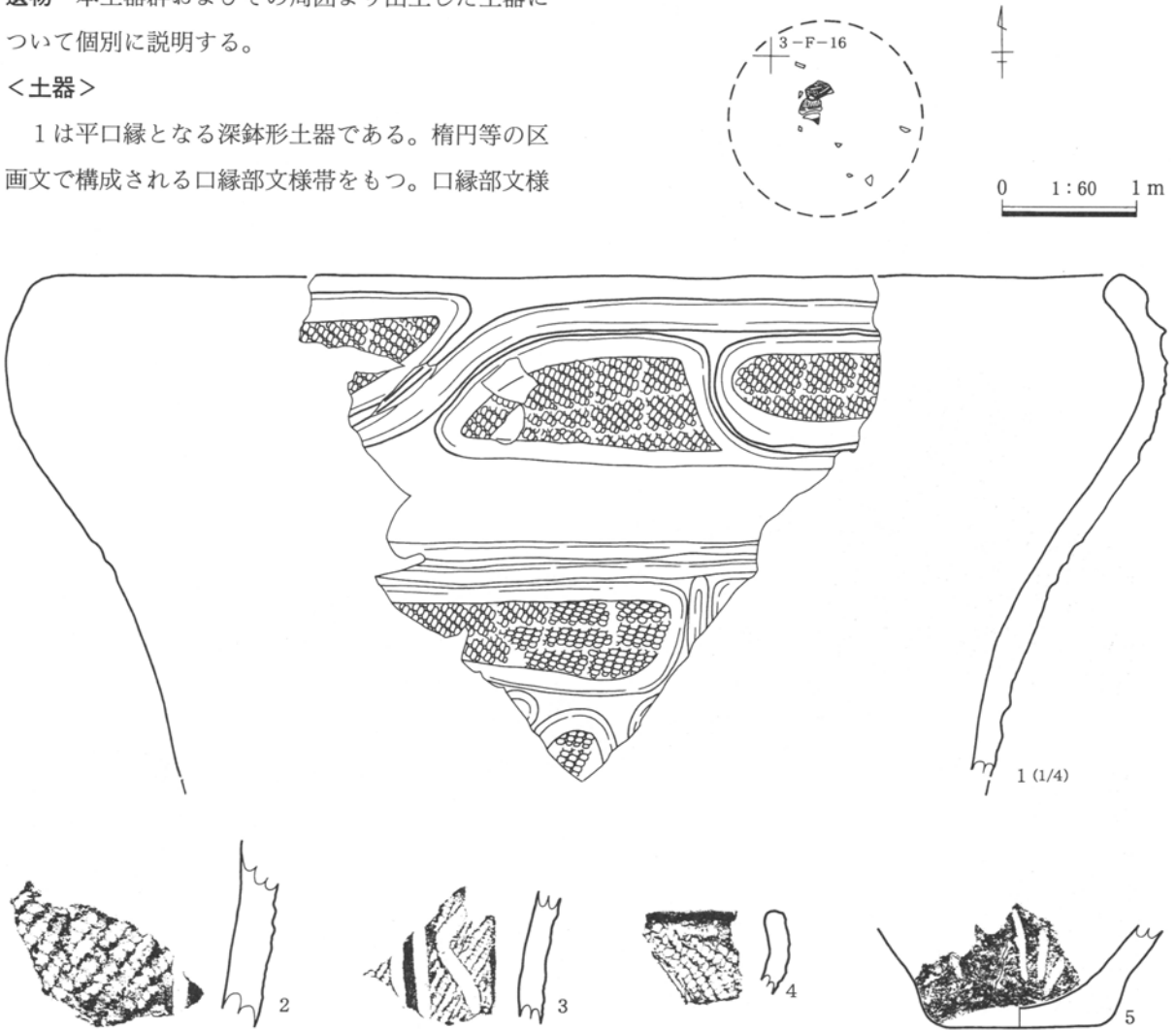
<土器>

1は平口縁となる深鉢形土器である。楕円等の区画文で構成される口縁部文様帯をもつ。口縁部文様

帯下に頸部無文帯を有する。胴部には2条1組の隆帯により渦巻を描く。渦巻の周囲は不定形の区画文をもつ。縄文はRLが口縁部文様帯内は横位、胴部は横位、縦位に施文されている。2・3は懸垂文が垂下する胴部である。2はRLが縦位に施文されている。3は懸垂文内に蛇行文が垂下する。縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。4は沈線による波状または渦巻の区画をもつと思われる土器である。縄文はRLが縦位に施文されている。5は懸垂文が垂下する胴部及び底部である。1~5は第3群土器に属する。

<石器>

石器は黒色頁岩のフレークがある。



第75図 A区5号土器群・出土遺物

A区6号土器群 (第76・77図 PL17・25・39)

位置 本土器群はA区の中央部北端に近い7-D-0グリッドに位置する。近くには、D区5号土坑がある。

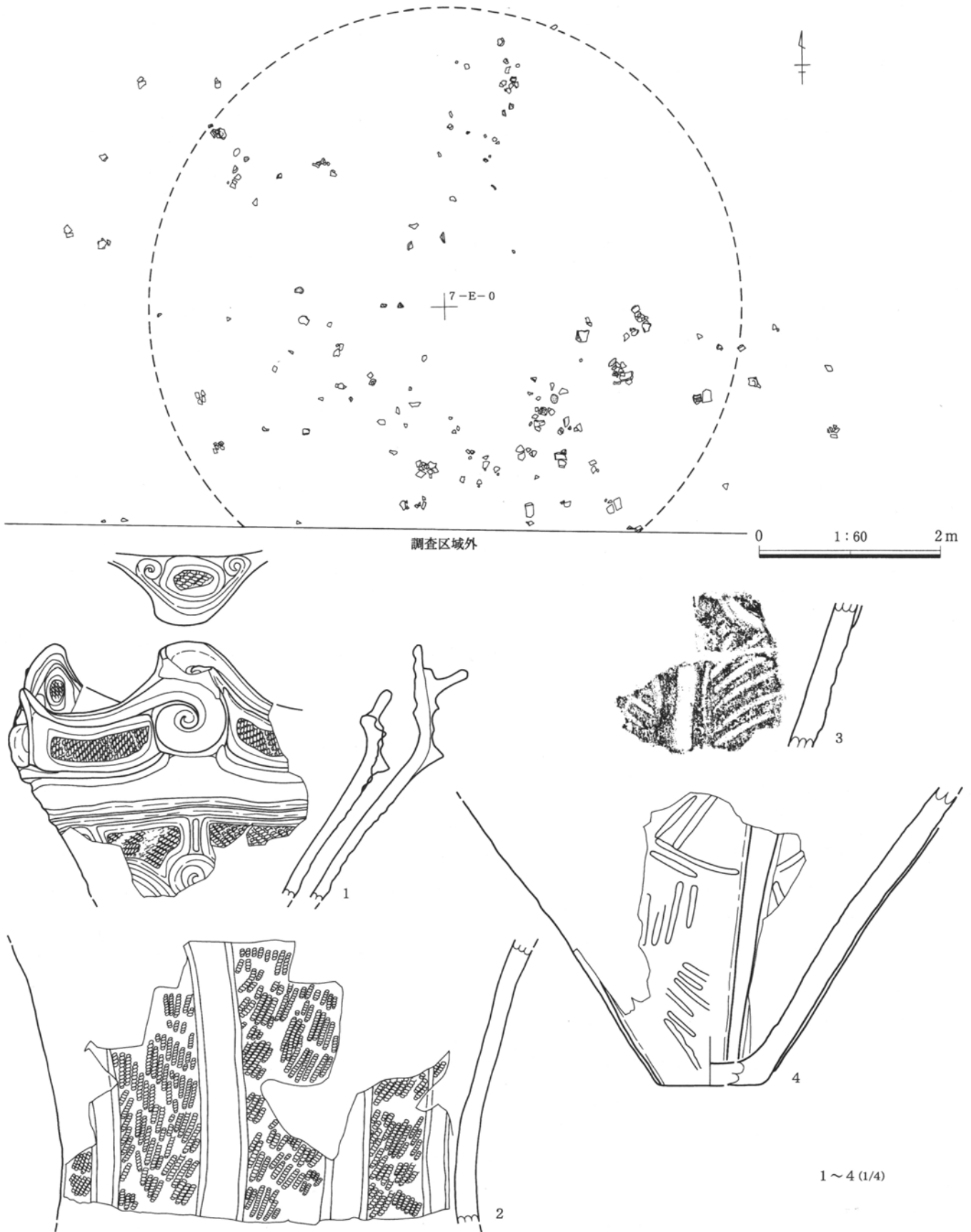
概要 7-E-0グリッドの周囲に東西6.18m、南北5.74mの範囲に遺物の集中する箇所が見られた。遺物の出土状況から住居跡を想定しながら、慎重に掘り進めたが、壁面、床面、柱穴等を検出することが難しかった。そこで、本書においては、遺構を想定しながらも、遺物が集中的に出土した箇所としてA区6号土器群と呼称し、掲載しておくことにする。

遺物 本土器群およびその周囲より出土した土器について個別に説明する。

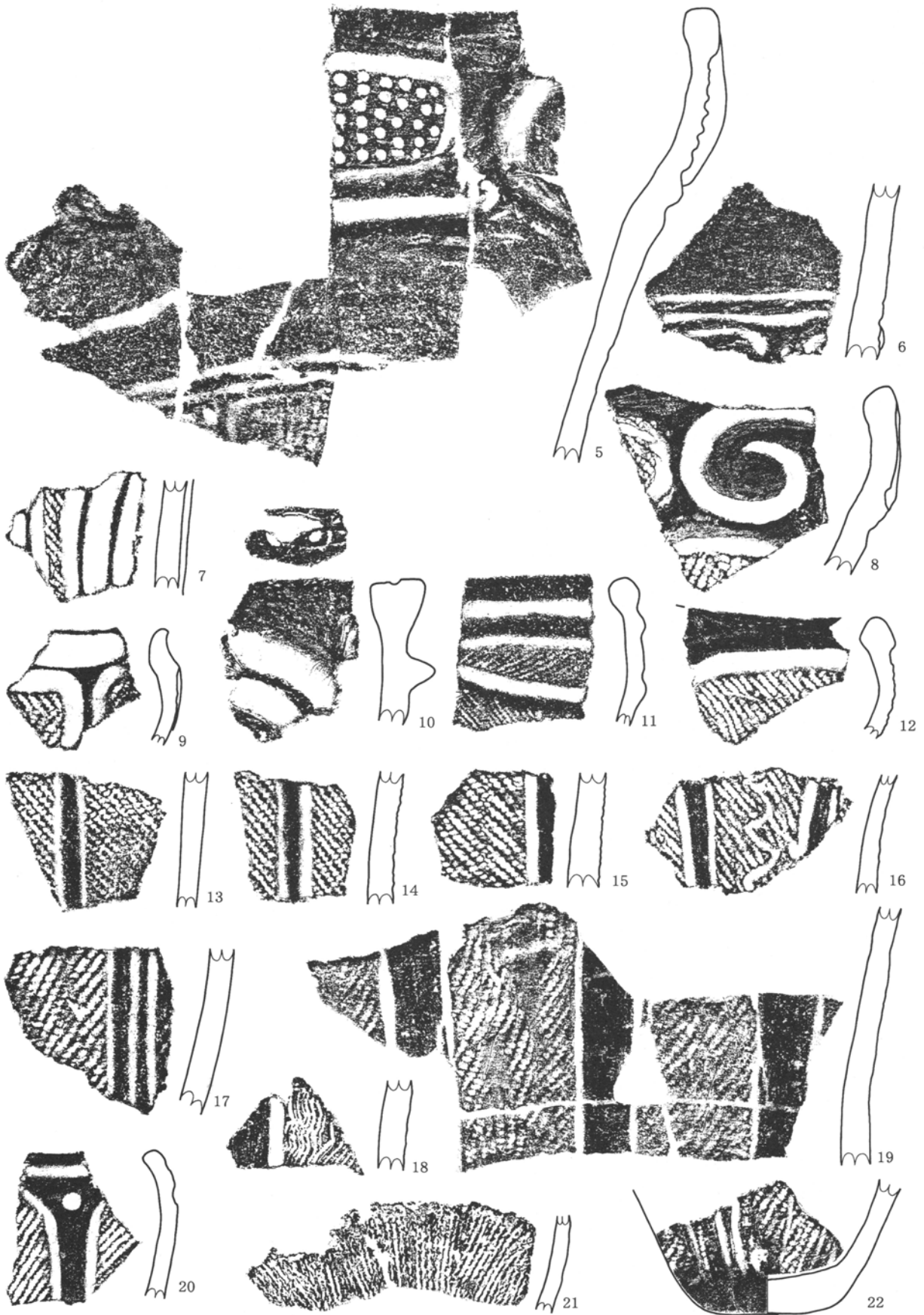
＜土器＞

1は大突起を3単位、その間に小突起を3単位もつ深鉢形土器である。大突起は上端と前面に隆帯による渦巻を描く。大突起の上端にある渦巻は小突起の前面にある渦巻と連結した文様構成になっている。大小の突起の間は長方形に近い区画となり、LRが横位に施文されている。また、大突起の内側には沈線による渦巻及び楕円の区画文があり、区画文内にはLRが横位に施文されている。頸部に無文帯をもつ。胴部は2条の隆帯により渦巻を描き、その周囲は不定形の区画文で構成される。胴部の区画文内はLRが縦位に施文されている。2は懸垂文が垂下する胴部である。縄文はRLが縦位に施文されている。3・4は懸垂文が垂下する胴部及び底部である。綾杉文が施文されている。3・4は同一個体と思われる。5は平口縁となる深鉢形土器である。渦巻と楕円等の区画文で構成された口縁部文様帯をもつ。口縁部文様帯の区画内は円形の刺突が充填されている。頸部は無文帯をもち、胴部は1と同様に隆

帯により渦巻を描き、周囲に不定形の区画文を有する。胴部の縄文はRLが縦位に施文されている。6は頸部無文帯をもつ胴部である。胴部文様は1・5と同様と思われる。7は1・5と同様に隆帯による渦巻を主文様とした区画文が描かれる胴部である。縄文はLRが縦位に施文されている。8～12は渦巻と楕円等の区画文で構成される口縁部文様帯をもつ深鉢形土器である。8の縄文はRLが口縁部文様帯内は横位、胴部は縦位に施文されている。9の区画内はRLが横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。10は口唇部上端に沈線によるC字状の文様をもつ。口縁部文様帯の区画は隆帯になっている。11は懸垂文が垂下する。口縁部文様帯内はLRが横位、胴部は縦位に施文されている。12は波状口縁となる土器である。縄文はRL(0段多条)が横位に施文されている。13～19は懸垂文が垂下する胴部である。13～15はLRが縦位に施文されている。16は懸垂文内に蛇行文が垂下する。縄文はLRが縦位に施文されている。17は3条1組の沈線による磨消懸垂文が垂下する。縄文はRLが縦位に施文されている。18は条線が縦位に施文されている。19の懸垂文内に磨消で蛇行文がうっすらと見える。縄文はRLが縦位に施文されている。20は口縁部に無文帯をもち、∩字状の区画文が垂下すると思われる土器である。区画文間に円形の刺突を施している。区画内の縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。21は縄文のみの胴部である。縄文は撚糸文Lを縦位に施文している。22は懸垂文が垂下する胴部および底部である。縄文はRLが縦位に施文されている。1～22は第3群土器に属する。



第76図 A区6号土器群・出土遺物 (1)



第77図 A区6号土器群出土遺物 (2)

A区8号土器群(第78~82図 PL17・25・40~42・60)

位置 本土器群はA区の中央部北端に近い7-L-1グリッド付近に位置する。本土器群はA区71号住居跡の上層及びその北側に位置する。また、近くには、A区3号土器群、9号土器群がある。

概要 7-L-1グリッド内に東西5.12m、南北4.80mの範囲に遺物の集中する箇所が見られた。土層の違いで遺構を確認することが困難であったので、遺物を残しながら、慎重に掘り進め、遺構を確認しようとした。しかし、遺構が確認できないまま遺物のみ高く残される状態になってしまったので、遺物が特に集中する箇所をA区8号土器群と呼称して、遺物を取り上げるほうがよいだろうと判断した。その後、さらに掘り下げていくなかで、炉跡・埋甕が検出された。これらは床面、壁をもつ住居跡の一部であることが判明した。そして、この住居跡をA区71号住居跡と呼称することにした。調査段階では、本土器群とA区71号住居跡の関係を把握することができなかったので、図面や写真、出土遺物等を確認しながら、遺構の再検討を行った。出土遺物については、本土器群から出土した遺物の標高とA区71号住居跡の床高、及び同住居跡から出土した遺物の標高を比較検討した。また遺物の接合関係を見て、同一個体は同一遺構とした。このような検討の結果、本土器群の遺物の集中する箇所とA区71号住居跡の床高及び遺物の標高には大きな差があることがわかった。そこで、便宜上78.60m以上の標高をもつ遺物を本土器群のものとすることにした。そして、本土器群はA区71号住居跡よりも上位、及びその北側に位置することにした。A区71号住居跡が埋まりかけた段階で本土器群の遺物が堆積したのではないかと思われる。ただし、遺物の様子を見るとA区71号住居跡との時間差はあまりないと思われる。また、本土器群自体も住居跡等の遺構の可能性もあると思われるが、現時点ではA区8号土器群として掲載す

ることとしておく。

遺物 本土器群およびその周囲より出土した遺物について個別に説明する。

<土器>

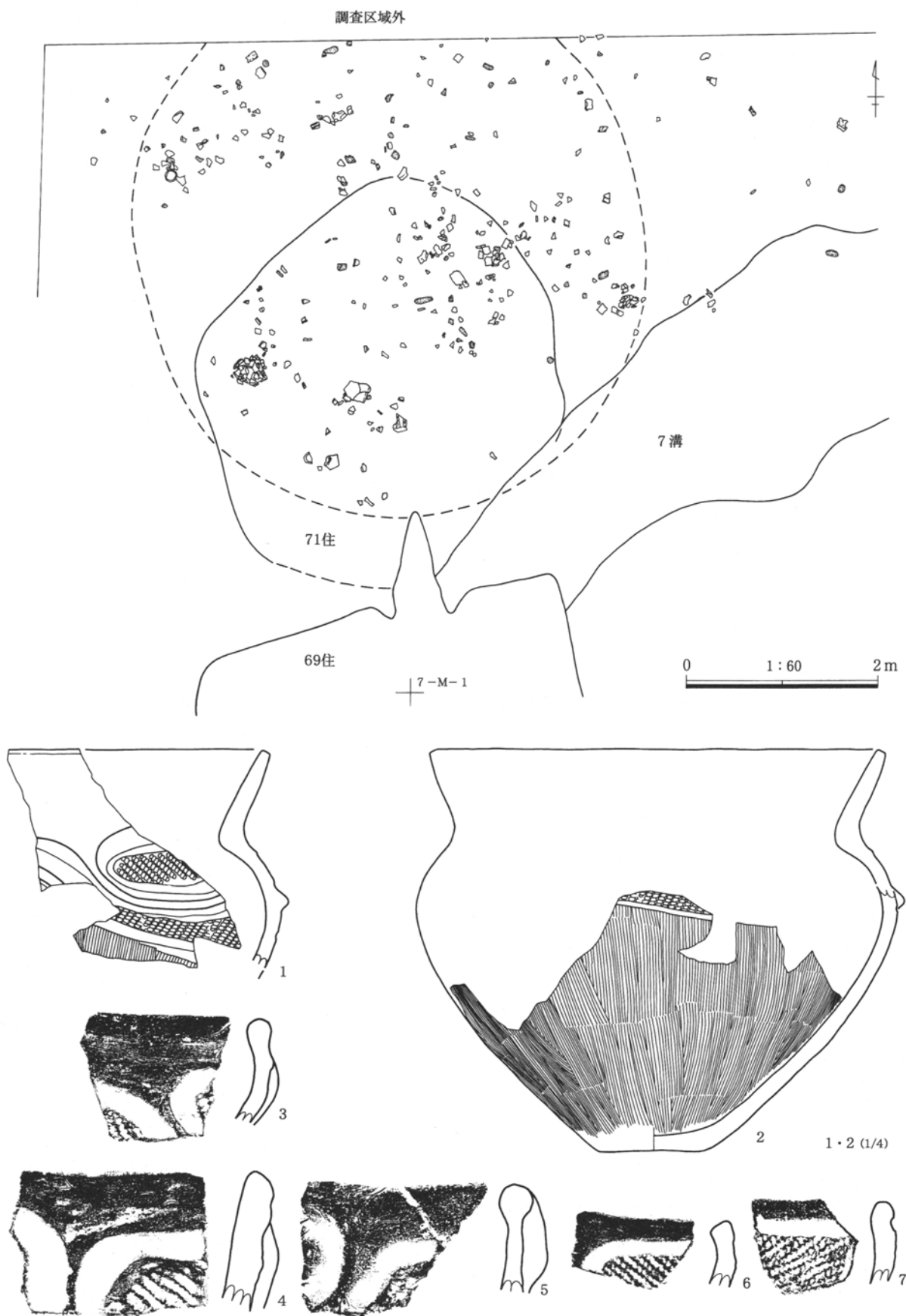
1は口縁部がくの字状に外傾し、胴部上半に楕円等の文様帯をもつ浅鉢形土器である。口縁部は幅広の無文帯になっている。胴部下半は条線が縦位に施文されている。区画内はRLが横位、縦位に施文されている。2は1と同様な文様構成をもつ浅鉢形土器である。縄文はRLが縦位に施文されている。3~23は楕円等の区画文で構成された口縁部文様帯をもつ土器である。3の区画内はRLが横位に施文されている。4の区画内はRLが横位に施文されている。5の区画内はLRが横位に施文されている。6の区画内はRLが横位に施文されている。7の区画内はLRが横位に施文されている。8は隆帯による区画をもつ。区画内はRL(0段多条)が横位に施文されている。9の区画内はRLが横位に施文されている。10は平口縁となる深鉢形土器である。渦巻内が区画文化した口縁部文様帯をもつ。胴部は懸垂文が垂下する。縄文はRL(0段多条)が口縁部文様帯内は横位、縦位、胴部は縦位に施文されている。11は細い沈線による区画をもつ。区画内はRLが横位に、胴部は縦位に施文されている。12は隆帯による区画をもつ。区画内はLRが縦位、斜位に充填施文されている。13はRLが横位に施文されている。14は渦巻と楕円等の区画文で構成された口縁部文様帯をもつ。胴部は懸垂文が垂下する。懸垂文内は縄文が施文されているところと条線が施文されているところがある。縄文は口縁部文様帯内はRLが横位に、胴部は縦位に施文されている。15~17は同一個体と思われる。15~17はLR Lが横位に施文されている。18は波状口縁となる深鉢形土器である。波頂部のところで「大」の字のような区画になる。基本

的には楕円等の区画文と考えている。胴部は懸垂文が垂下する。縄文はRL（0段多条）が区画内は横位、縦位、斜位に、胴部は縦位に施文されている。19は平口縁となる深鉢形土器である。隆帯による区画をもつ。縄文はLRが横位に施文されている。20～23は波状口縁となる土器である。区画化された渦巻と楕円等の区画文によって構成される口縁部文様帯をもつ。胴部には懸垂文が垂下し、懸垂文内にはS字状文が施文される。磨消懸垂文内には蕨状文が垂下する。20はLR（0段多条）が口縁部文様帯内は縦位、斜位に、胴部は縦位に施文されている。21～23は同じような器形をもつ。21の縄文はLRが口縁部文様帯内は斜位に、胴部は縦位、斜位に施文されている。22はLRが縦位に施文されている。23はLRが縦位、斜位に施文されている。24～35は懸垂文が垂下する胴部である。24は口縁部文様帯の隆帯による区画がみえる。懸垂文内はRLが縦位に施文されている。25は口縁部文様帯の沈線による区画がみえる。縄文はRL（0段多条）が口縁部文様帯内は横位に、懸垂文内は縦位に施文されている。26も口縁部文様帯の区画が見える。懸垂文内はRLが縦位に施文されている。27・28はRLが縦位に施文されている。29はRLにLを付加させた付加条縄が縦位に施文されている。30はRLが縦位に施文されている。31はRL（0段多条）が縦位に施文されている。32～34は懸垂文内にS字状文が垂下する胴部である。32はRL（0段多条）が縦位に施文されている。33は口縁部文様帯の沈線による区画が見える。縄文はRL（0段多条）が口縁部文様帯内は斜位、胴部は縦位に施文されている。34はRL（0段多条）が縦位に施文されている。35は磨消懸垂文が隆帯の区画になっている。縄文はRLが縦位に施文されている。36は胴部上半に2条1組の沈線による波状文を描く土器である。区画内はRL（0段多条）が斜位に施文されている。37は口縁部から懸垂文が垂下する土器である。口縁部に円形の刺突列をもつ。懸

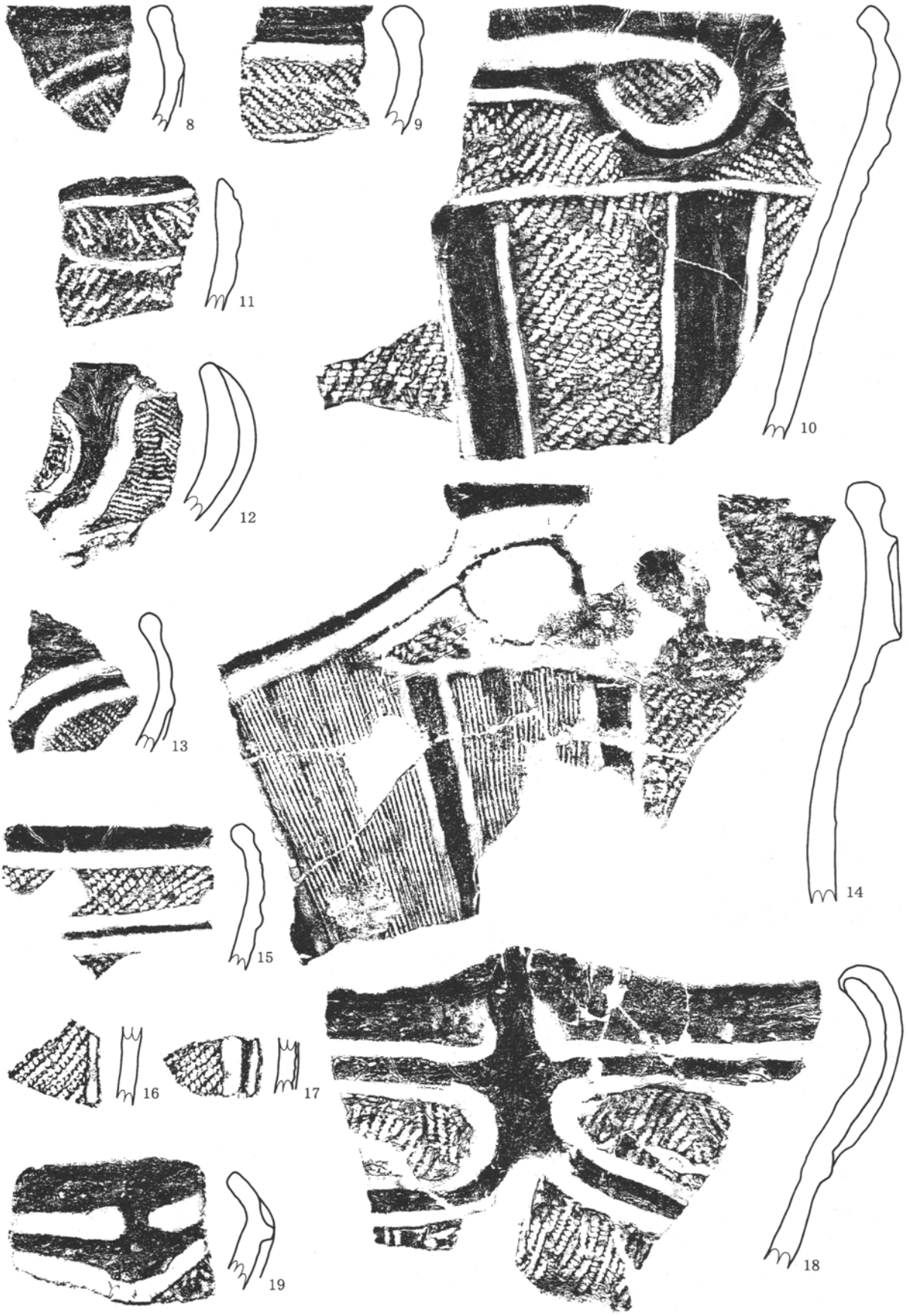
垂文内はRLが縦位に施文されている。38は〇字状の区画が垂下する胴部である。蛇行文も施文されている。区画内はRL（0段多条）が縦位に施文されている。39・40は胴部上半に隆帯による渦巻を描き、その周囲は不定形な区画をもつ。39は口縁部に太い横位の沈線が施文され、その下に渦巻を主とした区画文をもつ。区画内はRL（0段多条）が横位、縦位に施文されている。40の区画内はRL（0段多条）が横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっているところもある。41は器形が丸みを帯び、地文をもたない土器である。口縁部無文帯下にトンネル状の隆帯をもつ。42～45は地文が条線の土器である。42・43は横位の沈線により、口縁部無文帯をもつ。条線は縦位に施文されている。44・45は条線のみ胴部である。44は条線が縦位に施文されている。45はコンパス文になっている。46は縄文のみの胴部である。RLが縦位に施文されている。47は波状口縁となる土器である。口縁部に横位の沈線が施文されている。器面全体が研磨されていて、胴部に文様はみられない。48は沈線による〇字状の区画をもつ把手である。縄文は磨滅してははっきりしないが、LRが縦位に施文されていると思われる。49・50は懸垂文が垂下する胴部及び底部である。49はRLが縦位に施文されている。50の縄文はわからない。51は無文の底部である。文様はわからない。1～41・48～50は第3群土器に属する。42～47は第4群土器に属する。

<石器>

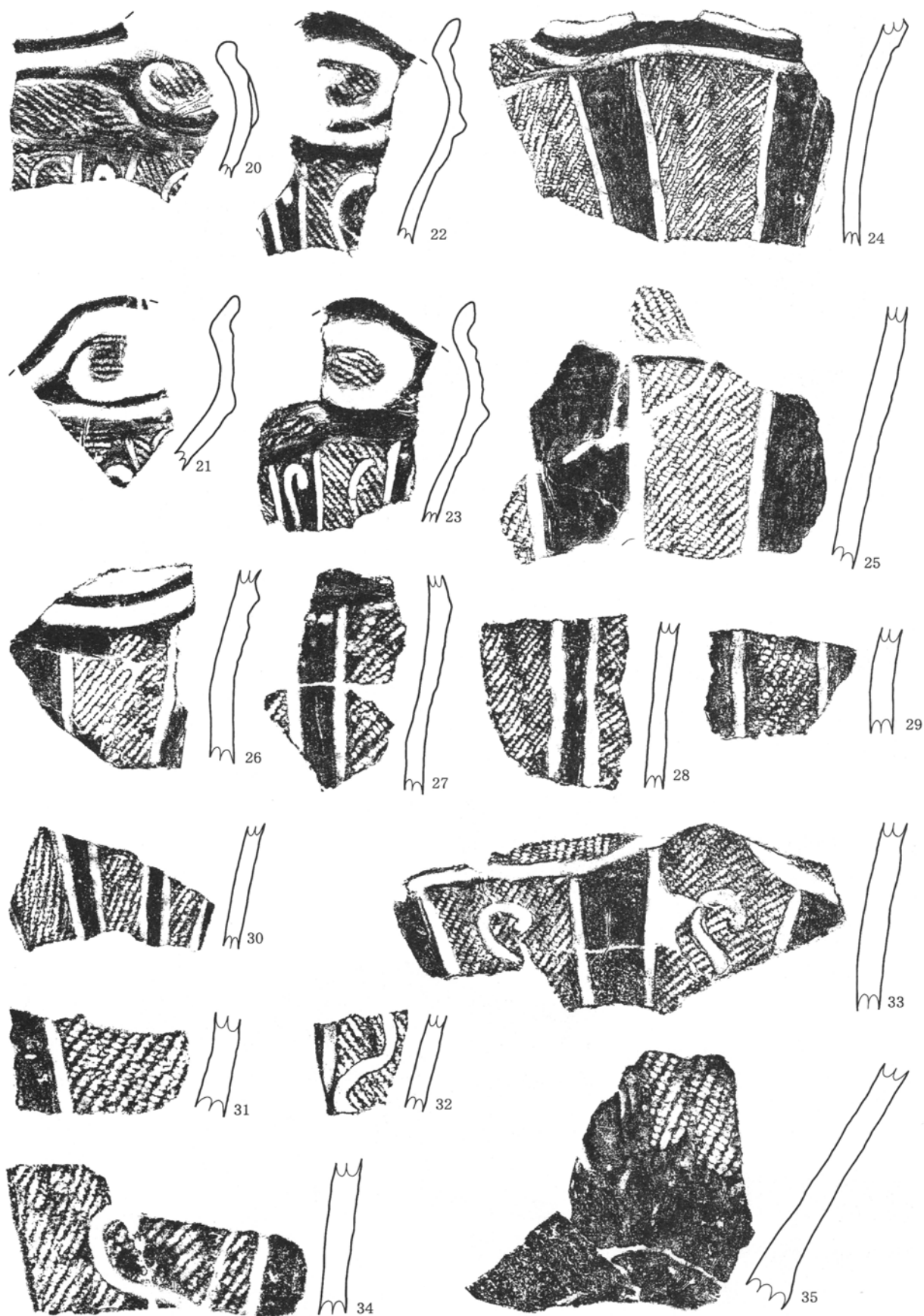
出土した石器には、スクレイパーが2点、打製石斧が8点、敲石が1点、凹石が3点、石棒と思われるものが1点ある。これらの石器に使用される石材には、スクレイパーに黒色頁岩、打製石斧に黒色頁岩・細粒輝石安山岩、敲石に溶結凝灰岩、凹石に粗粒輝石安山岩・溶結凝灰岩、石棒と思われるものに粗粒輝石安山岩が使用されている。



第78図 A区8号土器群・出土遺物 (1)

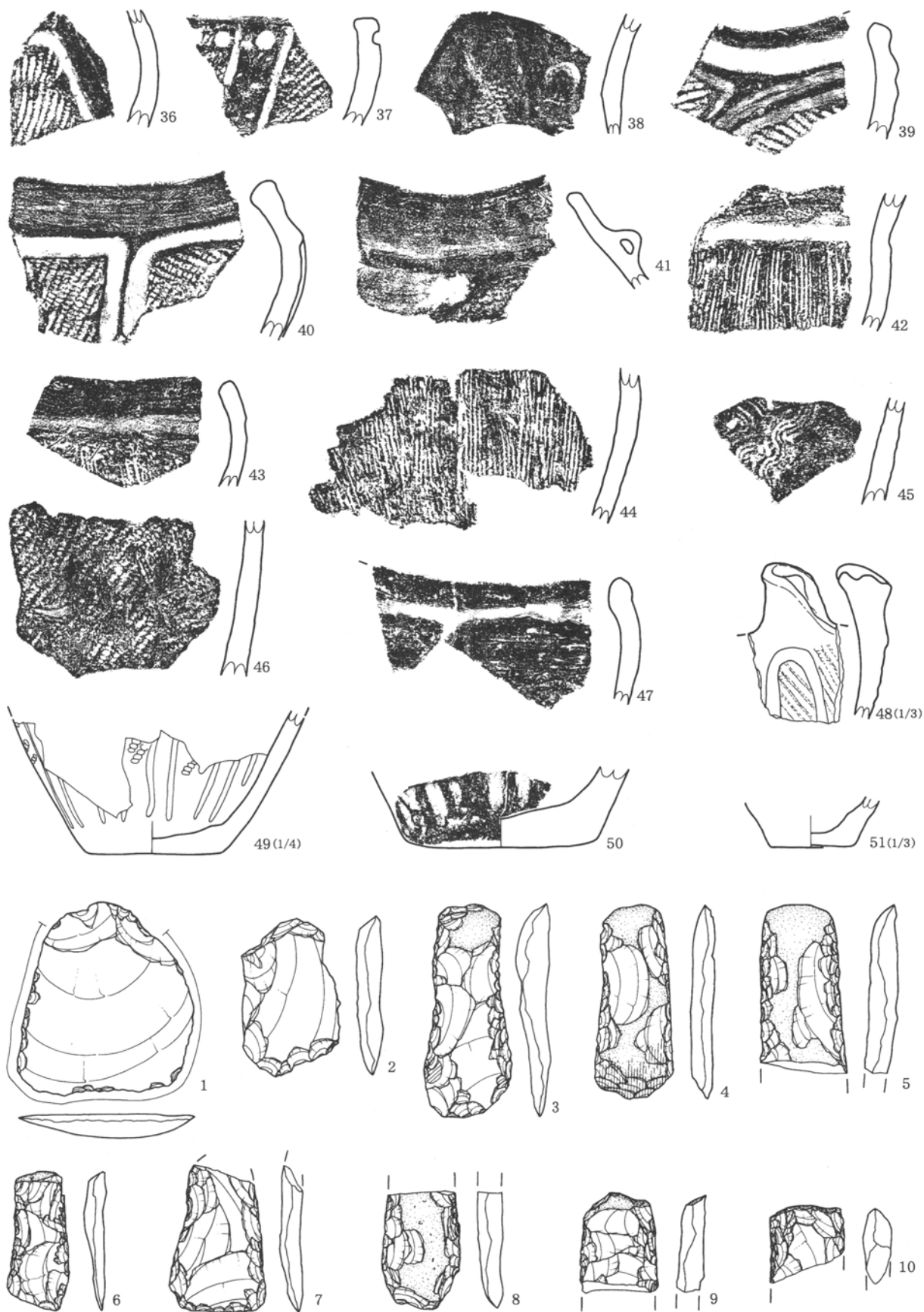


第79図 A区8号土器群出土遺物 (2)



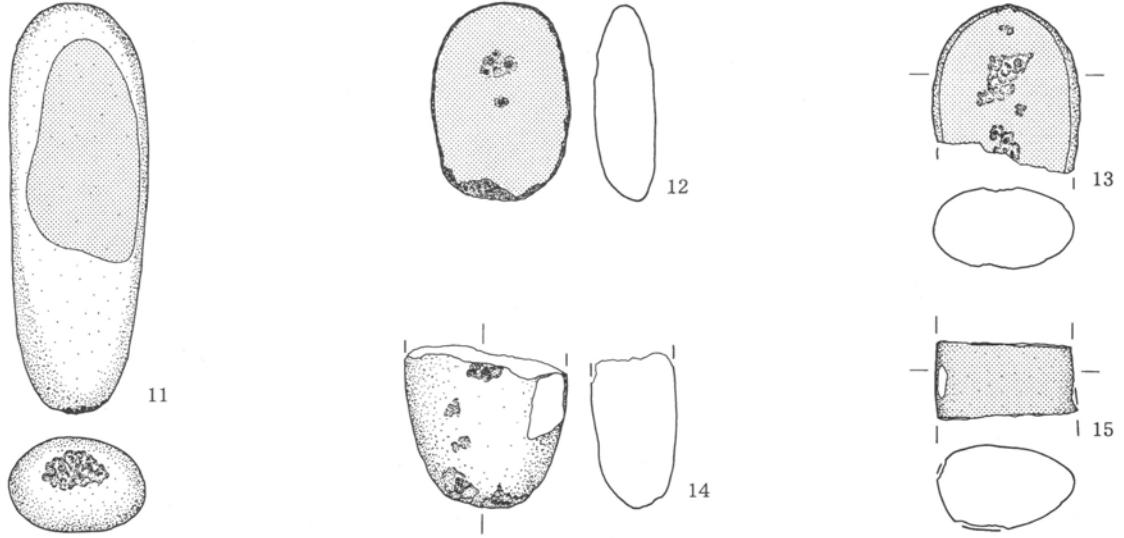
第80図 A区8号土器群出土遺物 (3)

1. 縄文時代の遺構と遺物



第81図 A区8号土器群出土遺物 (4)

第3章 検出された遺構と遺物



A区8号土器群石器計測表

No.	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
1	スクレイパー	黒色頁岩	6.8	6.2	0.8	42.6
2	〃	〃	5.5	3.4	0.9	19.5
3	打製石斧	〃	11.0	4.6	1.8	80.2
4	〃	〃	10.1	4.0	1.2	67.8
5	〃	細粒輝石安山岩	(8.7)	(4.5)	(1.7)	(84.2)
6	〃	黒色頁岩	7.2	3.2	1.1	24.0
7	〃	細粒輝石安山岩	(7.6)	5.0	1.2	(51.3)

No.	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
8	打製石斧	細粒輝石安山岩	(6.2)	4.1	(1.3)	(45.1)
9	〃	〃	(5.2)	(4.1)	(1.4)	(38.3)
10	〃	黒色頁岩	(4.0)	(3.9)	(1.4)	(23.7)
11	敲石	溶結凝灰岩	21.5	7.3	4.95	1,141
12	凹石	粗粒輝石安山岩	10.5	7.4	3.3	381
13	〃	溶結凝灰岩	(8.8)	7.7	4.2	(359)
14	〃	粗粒輝石安山岩	(8.6)	(8.6)	(4.4)	(457)
15	石棒?	〃	(6.1)	(11.2)	(6.5)	(767)

第82図 A区8号土器群出土遺物 (5)

A区9号土器群 (第83~85図 PL17・25・42・43・60)

位置 本土器群はA区の中央部北端に近い7-L-0グリッドに位置する。本土器群はA区80号土坑の上層に位置する。また、近くにはA区70号、71号住居跡、A区79号土坑等がある。奈良・平安時代のA区69号住居跡とは重複関係となる。

概要 7-L-0グリッドに東西3.84m、南北4.16mの範囲に遺物の集中する箇所が見られた。住居跡を想定し、遺物を残しながら慎重に掘り進めたが、遺構が確認できないまま遺物のみ高く残される状態になってしまった。そこで、特に遺物が集中する範囲をA区9号土器群と呼称して、遺物を取り上げるほうがよいだらうと判断した。その後、さらに掘り下げていくなかで、土坑が検出された。この土坑をA区80号土坑と呼称した。調査段階では、本土器群とA区80号土坑の関係を把握することができなかったため、整理作業で図面や写真、出土遺物等を確認しながら、遺構の再検討を行った。まず、本土器群から出土した遺物の標高とA区80号土坑の出土遺物の標高を比較検討した。その際に、遺物の接合関係

を見て、同一個体は同一遺構とした。次に、両遺構の出土土器を観察した。両遺構の土器は分類上で大きな差はないが、A区80号土坑の出土土器のほうがやや古い要素をもつ。このようなことから、本土器群はA区80号土坑よりやや新しい遺構と考え、本土器群はA区80号土坑の上位に位置し、重複関係をもつであろうと判断した。また、本土器群は住居跡の可能性もあると思われるが、本書ではA区9号土器群として報告しておくことにする。

遺物 本土器群およびその周囲より出土した遺物について個別に説明する。

<土器>

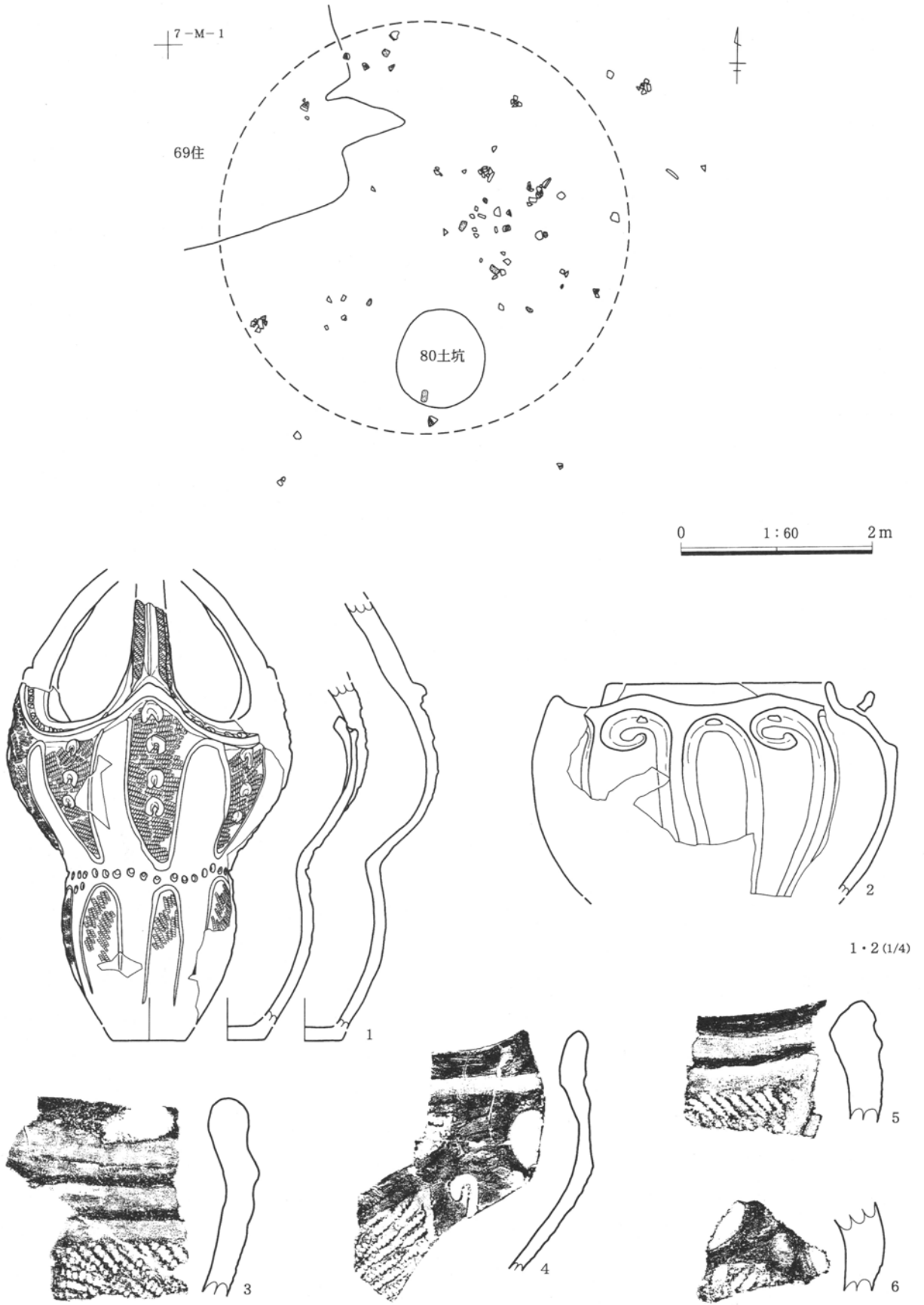
1は4単位の把手が連結し、釣手になると思われる深鉢形土器である。把手の中央部に沈線が垂下し、両サイドはLR(0段多条)が縦位に施文されている。釣手の側面と口唇部には刺突がうたれた沈線が巡る。胴部上半はW字状の区画をもち、区画内はLR(0段多条)が斜位に施文されている。また、馬蹄形の刺突文が把手の下で4段、釣手以外の下で3

段縦位に施文されている。胴部中程に括れをもち、1段または2段の横位の刺突列がある。胴部下半は匚字状の区画になっており、LR（0段多条）が縦位に施文されている。2は器形が丸みをもち、地文が施文されていない有孔罌付土器である。内傾して立ち上がる口縁をもつ。胴部は口縁部より前面に段をもつようにでている。胴部文様は太い沈線による渦巻文や匚字状の区画が垂下する。沈線による文様の上部に孔があいている。3～6は口縁部文様帯をもつ土器である。3は隆帯による区画文をもつ平口縁となる深鉢形土器である。区画内はRLが横位に施文されている。4は波状口縁となる深鉢形土器である。渦巻と楕円等の区画文をもつと思われる。胴部には懸垂文が垂下し、磨消部に蕨状文が施文されている。縄文は口縁部文様帯内はRL（0段多条）が斜位に、胴部は縦位に施文されている。5は隆帯による区画をもつ。区画内の縄文はRL（0段多条）が横位に施文されている。6の胴部はRLが縦位に施文されている。7～19は懸垂文が垂下する胴部である。7は口縁部文様帯の一部が見える。口縁部文様帯内はRL（0段多条）が横位に施文されている。8はRLが縦位に施文されている。9はRL（0段多条）が縦位に施文されている。10はRL（0段多条）が斜位に施文されている。11はRLが縦位に施文されている。12はRL（0段多条）が縦位に施文されている。13はRL（0段多条）が縦位に施文されている。14はRL（0段多条）が縦位に施文されている。15～17は磨消懸垂文内が3条の沈線による区画になっている。15～17の縄文はRLが縦位に施文されている。18は磨消懸垂文が隆帯になっている。懸垂文内はLR（0段多条）が縦位に施文されている。19・20は2条1組の沈線による波状の区画を描く土器である。19の口唇部付近はRL（0段多条）が横位に施文され、以下は縦位に施文され、羽状縄文になっている。20は口唇部に1条の沈線を横位に施文し、胴部との区画をなし、胴部にRLが横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。21～25は口縁部無文帯下に爪形の刺突列を横位に施

文する土器である。21は波状口縁となる。2段の爪形の刺突列の下に胴部文様が展開する。胴部には匚字状の区画が垂下する。匚字状の区画に1条の沈線が垂下している。区画内はLRが縦位に施文されている。22も2段の爪形の刺突列をもつと思われる。胴部の匚字状の区画内はLRが縦位に施文されている。23・24は同一個体と思われる。24の区画内はRLが縦位に施文されている。25は爪形の刺突だけで胴部文様ははっきりしないが、匚字状の区画が垂下すると思われる。26は懸垂文が垂下する胴部である。懸垂文が胴部中程で匚字状の区画になり、H状の区画となる。縄文はRL（0段多条）が縦位に施文されている。27～30は胴部上半に2条1組の隆帯による渦巻を描き、その周囲に不定形の区画文をもつ土器である。これらの土器は同一個体と思われる。区画内をRLで横位、縦位、斜位と施文し充填している。31も27と同様な文様構成をもつと思われる。31の懸垂文内はRL（0段多条）が縦位、斜位に充填されている。32・33は幅の狭い口縁部無文帯をもち、胴部上半に2条1組の沈線による渦巻を描くと思われる土器である。32の縄文はRL（0段多条）が横位、斜位に施文されている。33の縄文はRL（0段多条）が横位、縦位、斜位に施文されている。34・35は条線が地文の胴部である。36は口縁部無文帯下に横位に微隆帯による区画をもつ。縄文はRL（0段多条）が縦位に施文されている。37は橋状把手を4単位もつ浅鉢形土器と思われる。口縁部はくの字状に外傾し、無文になっている。胴部に楕円等の区画文で構成される文様帯をもつ。縄文はLRが縦位に施文されている。1～33・37は第3群土器、34～36は第4群土器に属する。

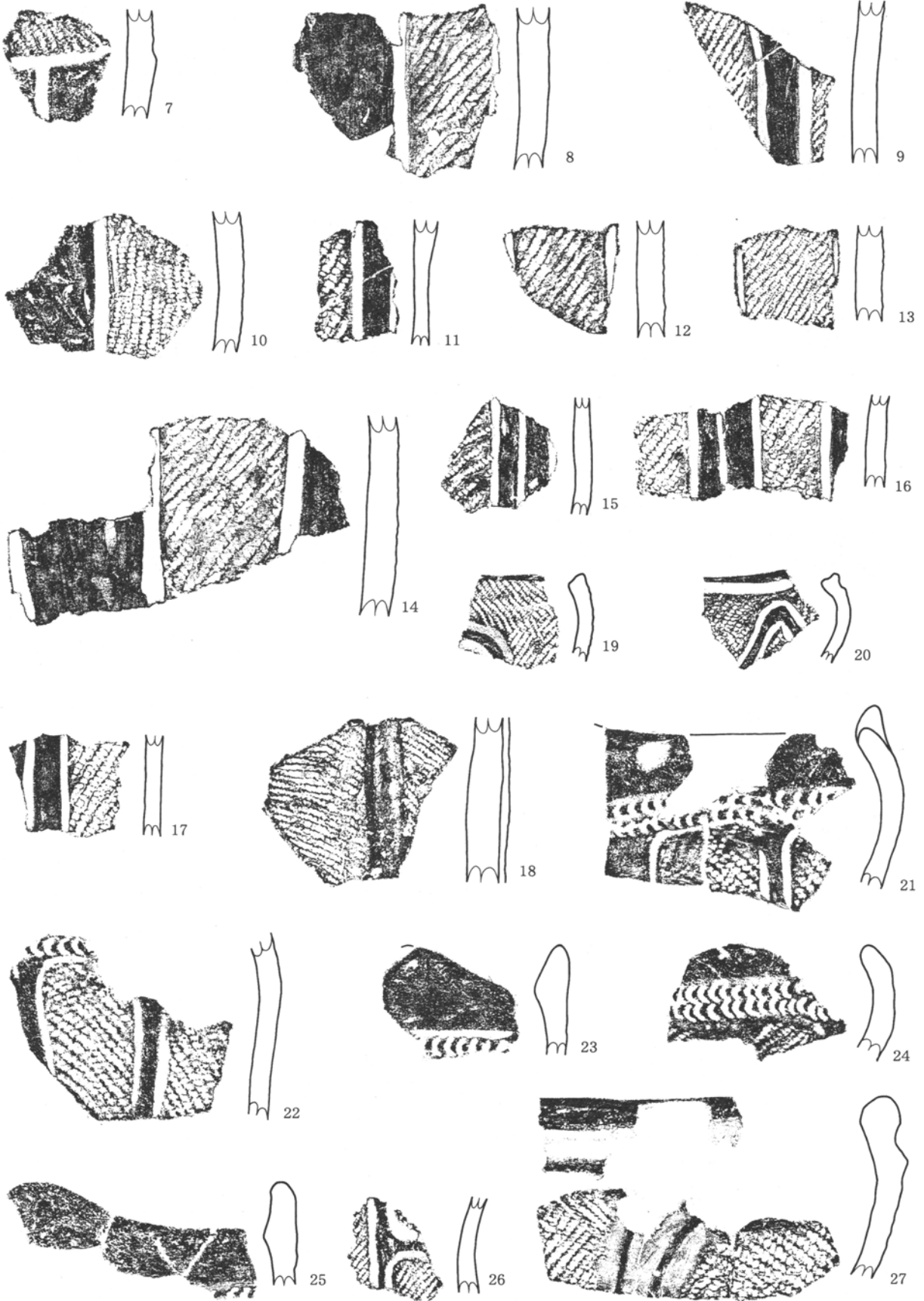
<石器>

出土した石器には、スクレイパーが3点、打製石斧が1点、石皿が1点ある。これらの石器に使用される石材には、スクレイパーに黒色頁岩、打製石斧に細粒輝石安山岩、石皿に粗粒輝石安山岩が使用されている。



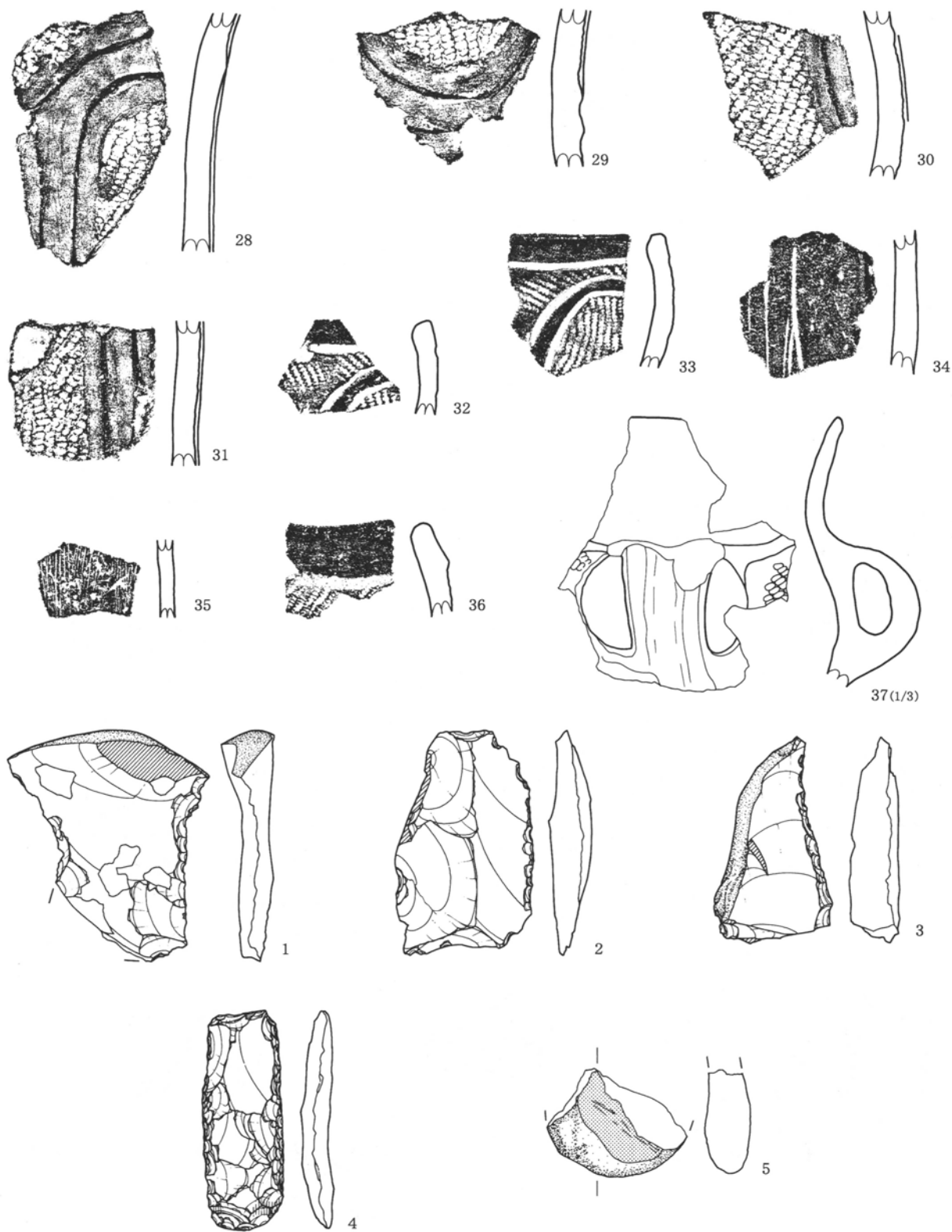
第83図 A区9号土器群・出土遺物 (1)

1. 縄文時代の遺構と遺物



第84図 A区9号土器群出土遺物 (2)

第3章 検出された遺構と遺物



A区9号土器群石器計測表

No	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
1	スクレイパー	黒色頁岩	7.8	6.8	1.8	(62.7)
2	〃	〃	7.6	4.7	1.5	45.1
3	〃	〃	7.0	4.0	1.7	42.7

No	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
4	打製石斧	細粒輝石安山岩	10.9	4.0	1.6	86.8
5	石皿	粗粒輝石安山岩	(10.8)	(14.0)	(4.6)	(249)

第85図 A区9号土器群出土遺物 (3)

(5) 遺構外出土遺物

遺構外からの遺物の出土量は、比較的が多い。本遺跡の北西部に位置する台地の西及び北緩斜面からの出土遺物が、そのほとんどを占めている。出土した遺物は、土器や石器がほとんどであるが、耳飾り、土製円盤などの土製品や垂飾などの石製品もわずかなのであるが出土している。

土器 (第86～118図 P L43～58)

出土した土器の量は、遺物収納箱で70箱余りである。これらの土器は、台地の西及び北緩斜面の黒褐色土を主体とする縄文時代の包含層から出土したものである。出土した土器を時期で見ると、縄文時代中期、後期、晩期の資料であり、その中でも中期後葉土器が最も多い。晩期の資料はわずかなのである。

記述するにあたり、次のように各土器群を大別し、観察を行う。

第1群土器 阿玉台式土器

第2群土器 勝坂式土器 (勝坂式終末期から加曾利E式古段階)

第3群土器 加曾利E式及び併行する土器

- 1類 口縁部文様帯の下に頸部無文帯をもつ土器
- 2類 渦巻や楕円等の区画文によって構成された口縁部文様帯をもつ土器
- 3類 口縁部文様帯が簡略化し、胴部文様が主文様の構成をとる土器
- 4類 胴部文様が上下分帯し、胴部下半の文様は齊一化する土器
- 5類 異なる系統を引く土器
- 6類 類別が難しい深鉢形土器
- 7類 鉢形・浅鉢形土器
- 8類 その他

第4群土器 中期末から後期初頭の時期に位置づけられる土器

- 1類 胴部文様が上下分帯し、文様間が広くなる土器

2類 胴部文様が分帯せず、胴部上半の文様が垂下する土器

3類 胴部に渦巻状のJ字文を有する土器

4類 胴部に主文様をもたない土器

第5群土器 称名寺式土器

1類 沈線で描かれた文様間を縄文で充填する土器

2類 沈線で描かれた文様間を刺突文で充填する土器

3類 沈線のみで文様を描く土器

第6群土器 堀之内式土器

1類 堀之内1式土器

2類 堀之内2式土器

3類 石神類型の土器

第7群土器 加曾利B式土器

第8群土器 後期の土器であるが、群別が難しい土器

第9群土器 安行式土器

第10群土器 胴部及び底部を一括する

第1群土器 (第86図1～3 P L43)

阿玉台式土器をまとめた。1は隆線に沿って1列の角押し文が施文されている。さらにその周囲に角押し文による区画をもつ。2も角押し文が施文されている。3は扇状把手である。把手の上端部に刻みをもつ。さらに把手の形状にあわせて上端部、側面に平行する2列の角押し文が施文される。上端部には2重に2列の角押し文が巡る。側面の角押し文の区画内に平行する2列の鋸歯状、直線状の角押し文が施文されている。

第2群土器 (第86図4～15 P L43)

勝坂式土器をまとめた。4～6は隆帯・短沈線による区画をもつ。7は縦位に隆帯が垂下し、横位の沈線が施文されている。8は交互刺突をもつ。9～14は縄文が施文されている。9・10は楕円等の区画をもち、区画内に鋸歯状の沈線が2列横位に施文され

第3章 検出された遺構と遺物

ている。縄文はRLが横位に施文されている。11は交互刺突の下に区画をもつ。区画内はRLが斜位に施文されている。12は横位に隆帯を貼付し、隆帯の上にも縄文が施文されている。縄文はRLが横位に施文されている。13は沈線による区画をもつ。縄文はRLが施文されている。14は2条1組の隆帯で渦巻を描く。隆帯の上はRLが横位に施文されている。隆帯で囲まれた区画内はRLが縦位に施文されている。15は屈曲の強い浅鉢形土器である。縄文が施文されておらず、隆帯による区画をもつ。これらの土器は勝坂式終末期から加曾利E式古段階にあたる。

第3群土器(第86図16～第110図607 PL44～54)

加曾利E式土器及び併行する土器をまとめた。これらの土器は頸部無文帯の有無、口縁部・胴部に施文される文様から、次の1～8類に分類される。

1類(第86図16～18)

頸部無文帯をもつ土器をまとめた。16・17は頸部無文帯の下に懸垂文が垂下する胴部である。16の懸垂文内はLRが縦位に施文されている。17はRLが縦位に施文されている。18は楕円等の区画文で構成された口縁部文様帯をもつ。頸部無文帯をもつが、胴部文様ははっきりしない。胴部に懸垂文が垂下する可能性がある。区画内はRLが横位に施文されている。この他にも頸部無文帯をもつ土器はA区71号住居跡、A区5号土器群、6号土器群、8号土器群から出土している。いずれも胴部上半に隆帯により渦巻が描かれ、その周囲に不定形の区画文をもち、胴部下半に∩字状の区画が垂下する土器である。

2類(第86図19～第100図314)

渦巻や楕円等の区画文によって構成された口縁部文様帯をもつ土器をまとめた。区画文の変化と胴部文様から、以下のようにA～C種に分類される。

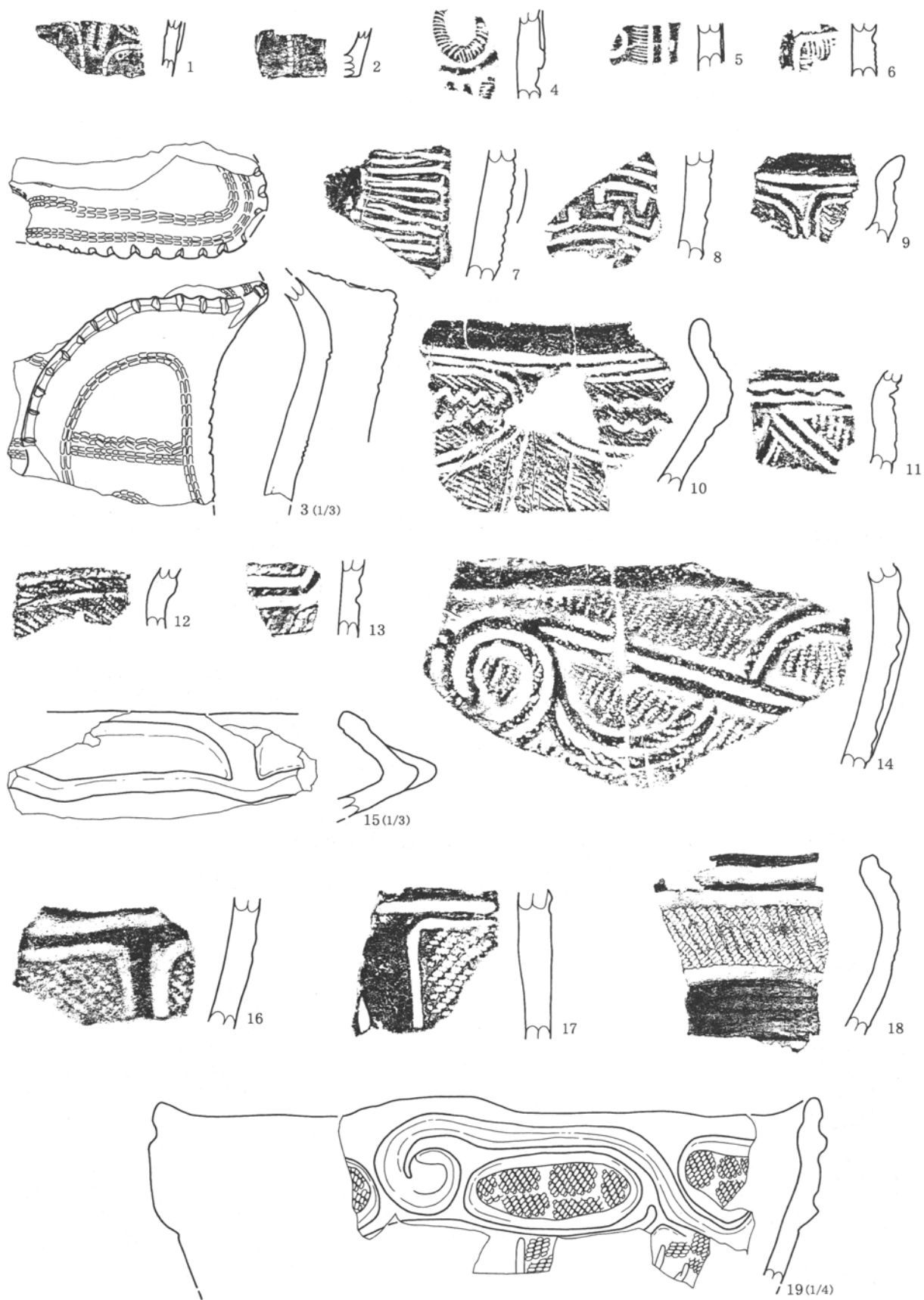
A種(第86図19～第87図32)

渦巻と楕円等の区画文で構成された口縁部文様帯をもつ土器をまとめた。19は波状口縁となる深鉢形土器である。隆帯による区画文になっている。胴部は懸垂文が垂下する。縄文はRLが口縁部文様帯内は横位に、胴部は縦位に施文されている。20は平口

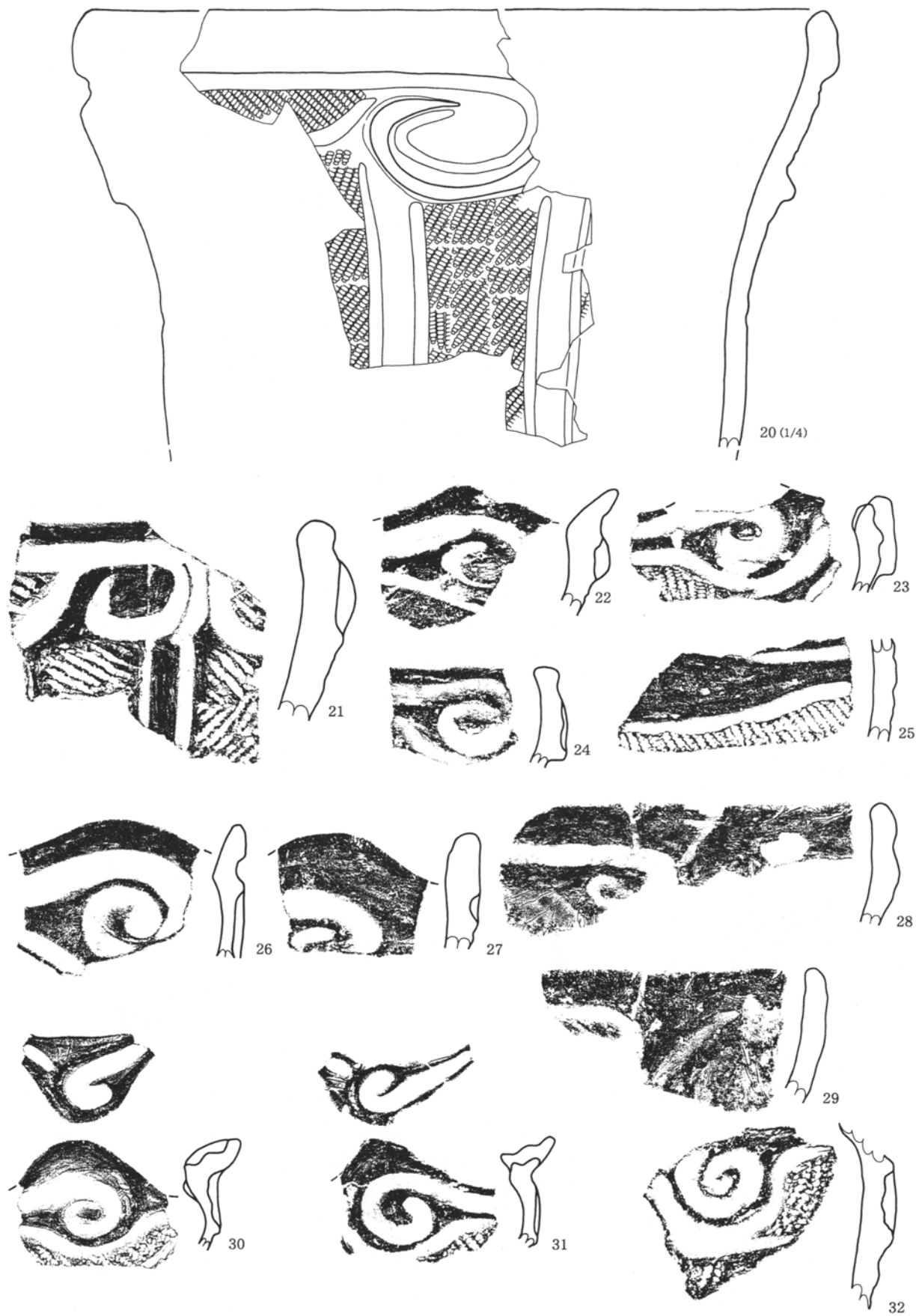
縁となる深鉢形土器である。口縁部文様帯内の渦巻の間隔が広がっている。また渦巻と区画文が連結している。胴部は懸垂文が垂下する。縄文はRLが口縁部文様帯内は横位に、胴部は縦位、斜位に施文されている。21は20と同じような文様構成をもつ。縄文はRLが口縁部文様帯内は横位に、胴部は横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。22・23・25～27は波状口縁となる。23と25は同一個体と思われる。縄文はRL(0段多条)が横位に施文されている。24・28・29は平口縁となる。28・29は同一個体と思われる。区画内はLRが横位に施文されている。30・31は突起の内側に沈線によるC字状の文様をもつ。30・31の区画内はRL(0段多条)が横位に施文されている。32の区画内はRLが縦位に施文されている。

B種(第88図33～第93図135)

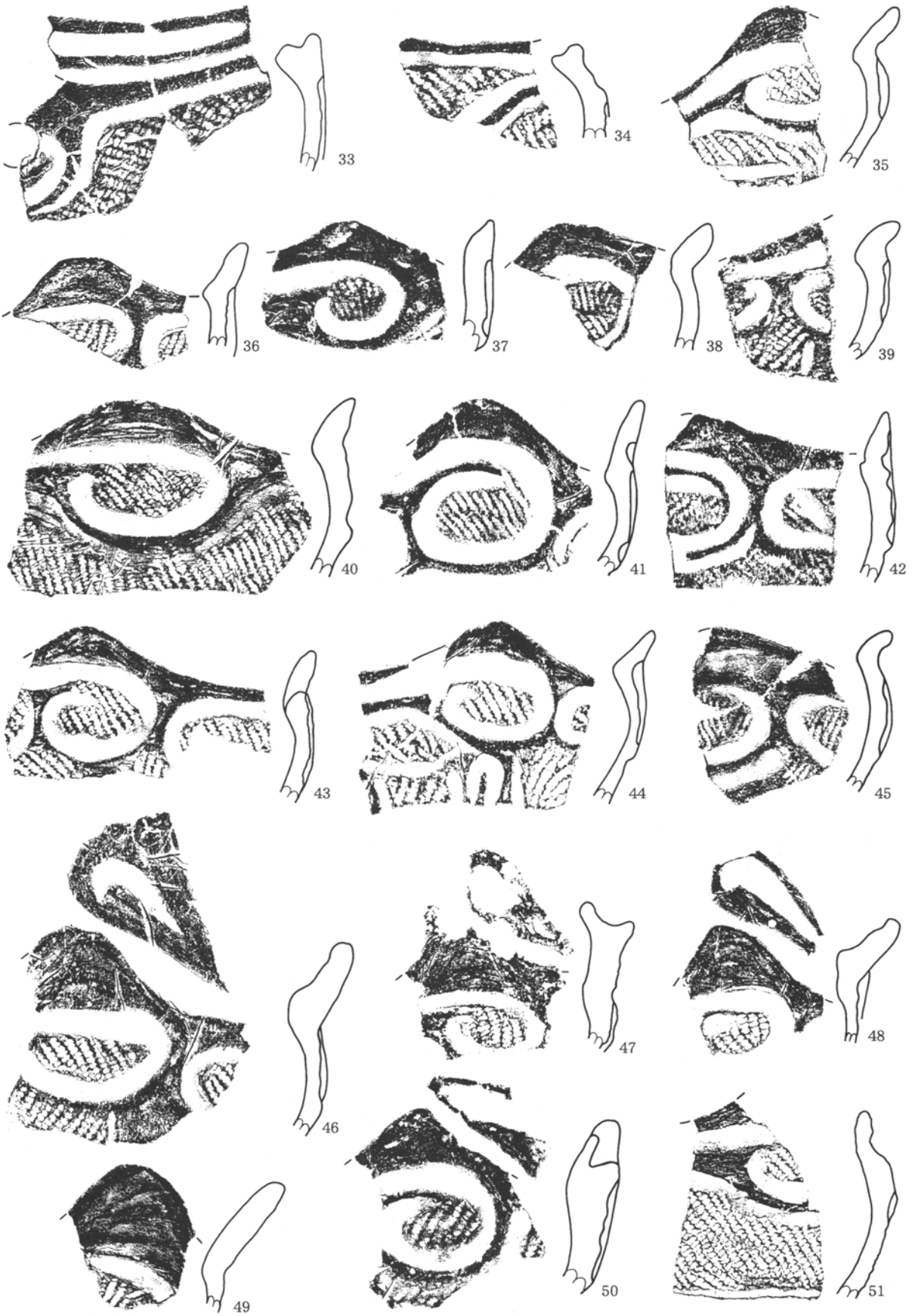
区画文化した渦巻と楕円等の区画文で構成された口縁部文様帯をもつ土器をまとめた。33～78はやや渦巻の形状を残しながら区画文化された文様等で構成されている。これらの土器は波状口縁の土器が多い。33・34は同一個体と思われる。口唇部上端は太い沈線が施文されている。4単位の舌状突起をもつと思われる。33は渦巻のところに孔をもつ。区画内はRL(0段多条)が横位に施文されている。35～53は波状口縁の土器である。35は突起がくの字状に外傾する。区画内はRLが横位に施文されている。36の区画内はRL(0段多条)が縦位に施文されている。37は他の土器と比べて、突起の外傾が少ない。区画内はRL(0段多条)が横位に施文されている。38の区画内はLR(0段多条)が横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。39は胴部の懸垂文が見える。区画内はRLが横位に、胴部は縦位に施文されている。40の区画内はRL(0段多条)が横位に施文されている。41の区画内はRL(0段多条)が横位に施文されている。42の区画内はLRが横位に、胴部は縦位に施文されている。43の区画内はRL(0段多条)が横位、斜位に施文されている。44は胴部懸垂文が垂下している。磨消部には蕨



第86図 遺構外出土土器 (1)



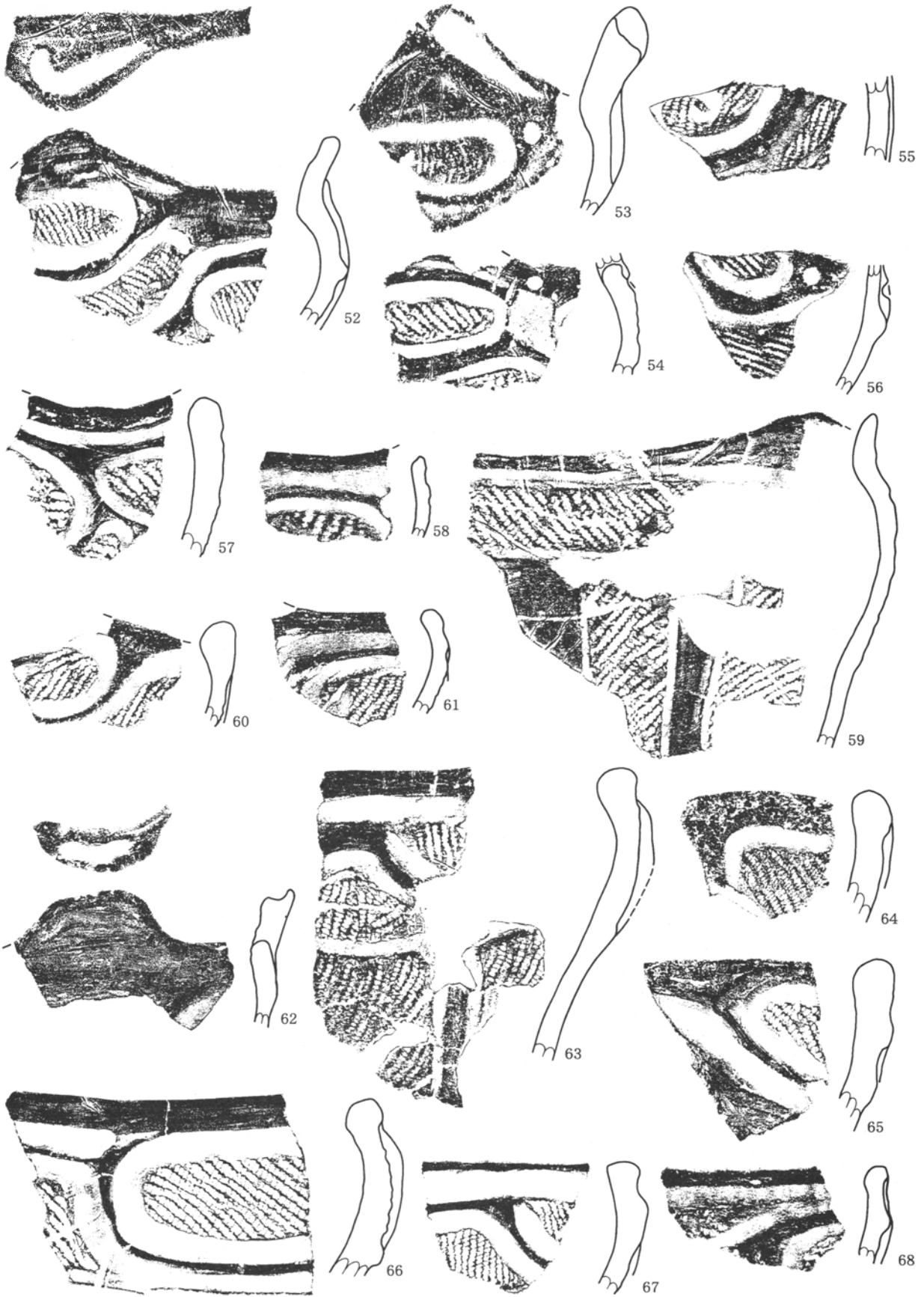
第87図 遺構外出土土器 (2)



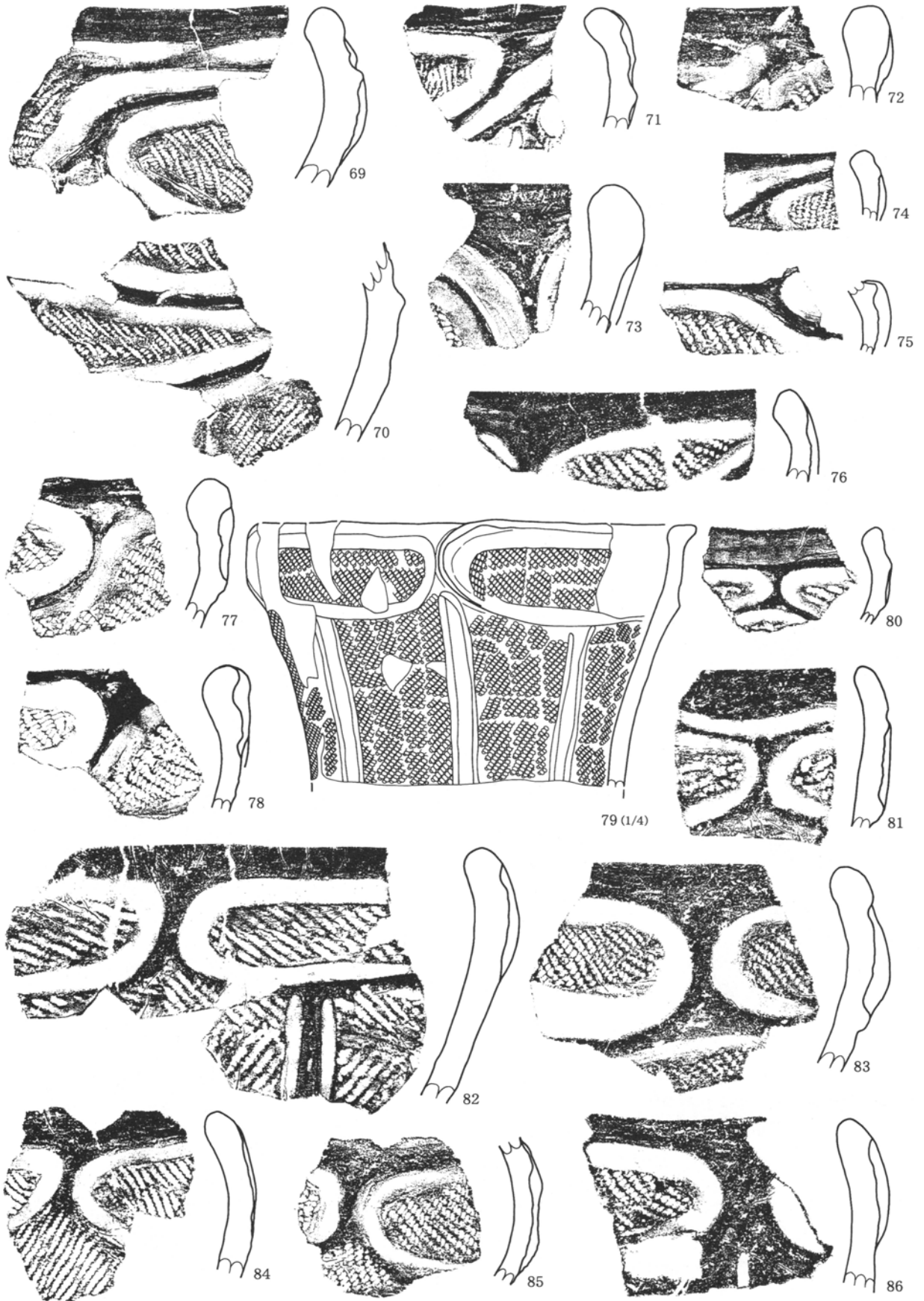
第88図 遺構外出土土器 (3)

状文が垂下する。区画内はRL（0段多条）が横位に、胴部は縦位に施文されている。45は突起の外傾する部分が短い。縄文はRL（0段多条）が横位、縦位に施文されている。46～48・50・52は突起の内側に沈線によるC字状の文様をもつ。46は胴部に懸垂文が垂下する。区画内はRLが横位に、胴部は縦位に施文されている。47の区画内はRL（0段多条）が斜位に施文されている。48はRLが横位、斜位に施文されている。50はRLが縦位に施文されている。52の区画内はRL（0段多条）が横位に施文されている。49の区画内はRL（0段多条）が縦位に施文されている。51の区画内はRL（0段多条）が横位に施文されている。53・54・56は渦巻状区画文のそばに円形の刺突をもつ。53は口唇部の上端が抉れる。渦巻状の区画文のそばに円形の刺突をもつ。区画内はLRが斜位に施文されている。54は胴部に∩字状の区画が垂下する。区画内はRL（0段多条）が横位に、胴部は縦位に施文されている。56はLRが縦位に施文されている。55の区画内はLR（0段多条）が横位、斜位に施文されている。57の区画内はRLが横位、斜位に施文されている。58はRLが縦位に施文されている。59は胴部に懸垂文が垂下する。口縁部文様帯はRL（0段多条）が横位に、胴部は縦位に施文されている。60はRLが縦位に施文されている。61はRL（0段多条）が縦位に施文されている。62は舌状突起の上端が抉れている。63～78は平口縁の深鉢形土器である。63は胴部に懸垂文が垂下し、口縁部文様帯の区画内はRLが縦位、斜位に、胴部は縦位に施文されている。64～66の区画内はRL（0段多条）が横位に施文されている。67の区画内はRL（0段多条）が横位、斜位に施文されている。68の区画内はRL（0段多条）が横位に施文されている。69と70は同一個体と思われる。縄文はRL（0段多条）にLが付加された付加条縄が口縁部文様帯内は横位、斜位に、胴部は縦位に施文されている。71は胴部に蕨状文が垂下し、区画内はRLが縦位、斜位に施文されている。72・73はRLが横位に施文されている。74の区画内はRL（0段多条）

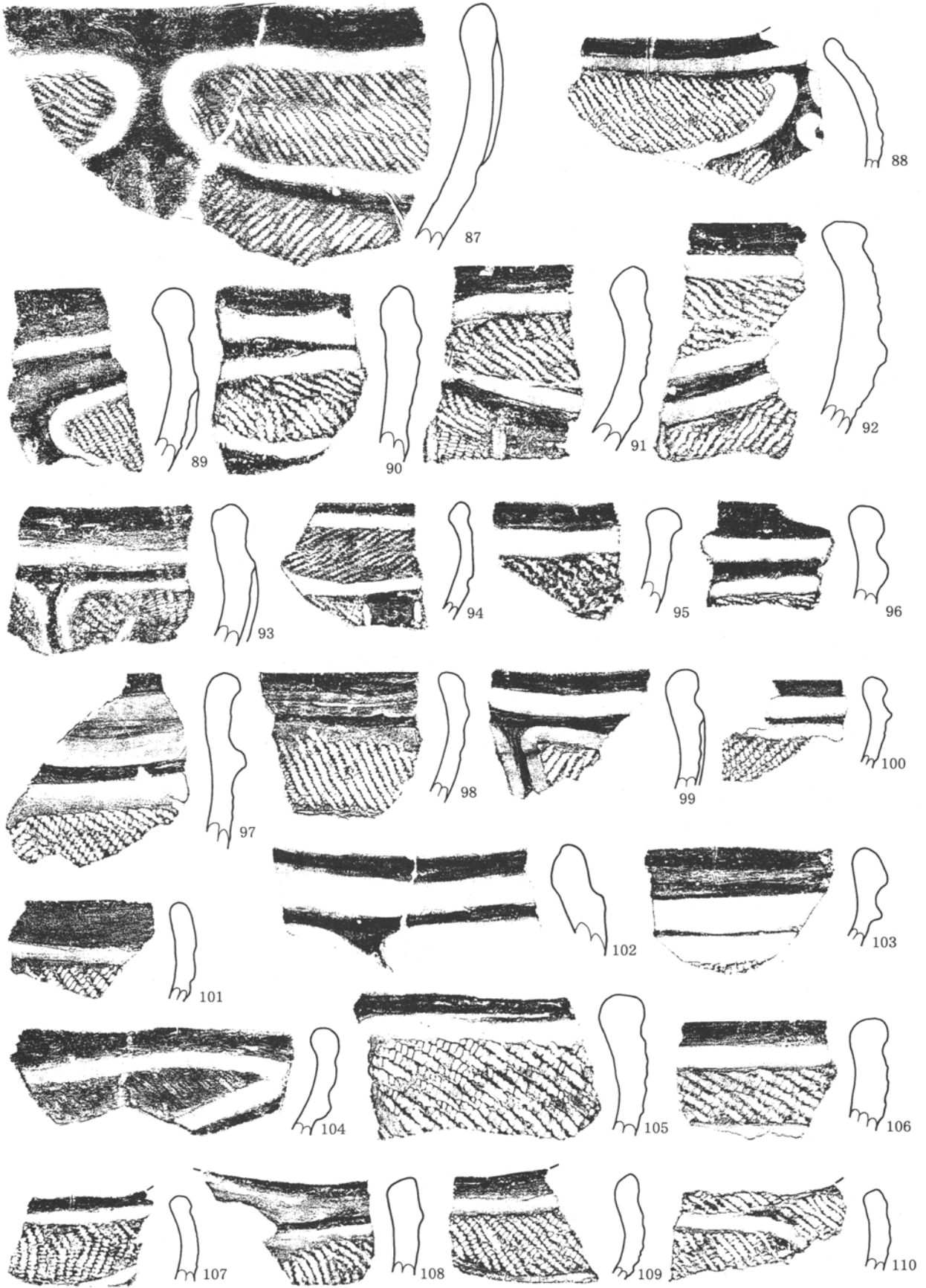
が斜位に施文されている。75はRLが横位に施文されている。76～78の区画内はRL（0段多条）が横位に施文されている。79～114は楕円等の区画文で構成されている口縁部文様帯をもつ土器をまとめた。これらの土器は平口縁のものが多い。79は楕円の区画文が相対するような構成になる。胴部は懸垂文が垂下する。磨消懸垂文の一部の上端が連結し、∩字状の区画になっている。縄文はRLが口縁部文様帯内は横位に、胴部は縦位に施文されている。80の区画内はRLが横位に施文されている。81の区画内はLRが横位に施文されている。82は懸垂文が垂下している。口縁部文様帯の区画内はRLが横位に、胴部は横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。83の区画内はRLが横位に施文されている。84の区画内はRL（0段多条）が横位に、胴部は縦位に施文されている。85の区画内はRL（0段多条）が横位に、胴部も横位に施文されている。86は懸垂文が垂下している。縄文はRLが横位に施文されている。87は懸垂文が垂下している。口縁部文様帯の区画内はRL（0段多条）が横位に、胴部は縦位に施文されている。88は波状口縁となる。区画文の下部がやや弧状になっている。胴部に蕨状文等が垂下する。口縁部文様帯内はRL（0段多条）が横位に、胴部は縦位に施文されている。89の区画内はRL（0段多条）が横位に施文されている。90の区画内はRLが横位に施文されている。91・92は懸垂文が垂下する。91の縄文はRL（0段多条）が口縁部文様帯内は横位に、胴部は横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。92の縄文はRLが口縁部文様帯内は横位に、胴部は縦位に施文されている。93の区画内はRL（0段多条）が横位に施文されている。94は懸垂文が垂下する。縄文はLRが口縁部文様帯内は横位に胴部は縦位に施文されている。95の区画内はRLが横位に施文されている。96・97は隆帯による区画が目立つ。96の区画内はRLが横位に施文されている。97の区画内はRL（0段多条）が横位、縦位に施文されている。98の区画内はRL（0段多条）が横位に施文されている。99の区画内はL



第89図 遺構外出土土器 (4)



第90図 遺構外出土器 (5)



第91図 遺構外出土器 (6)



第92図 遺構外出土土器 (7)

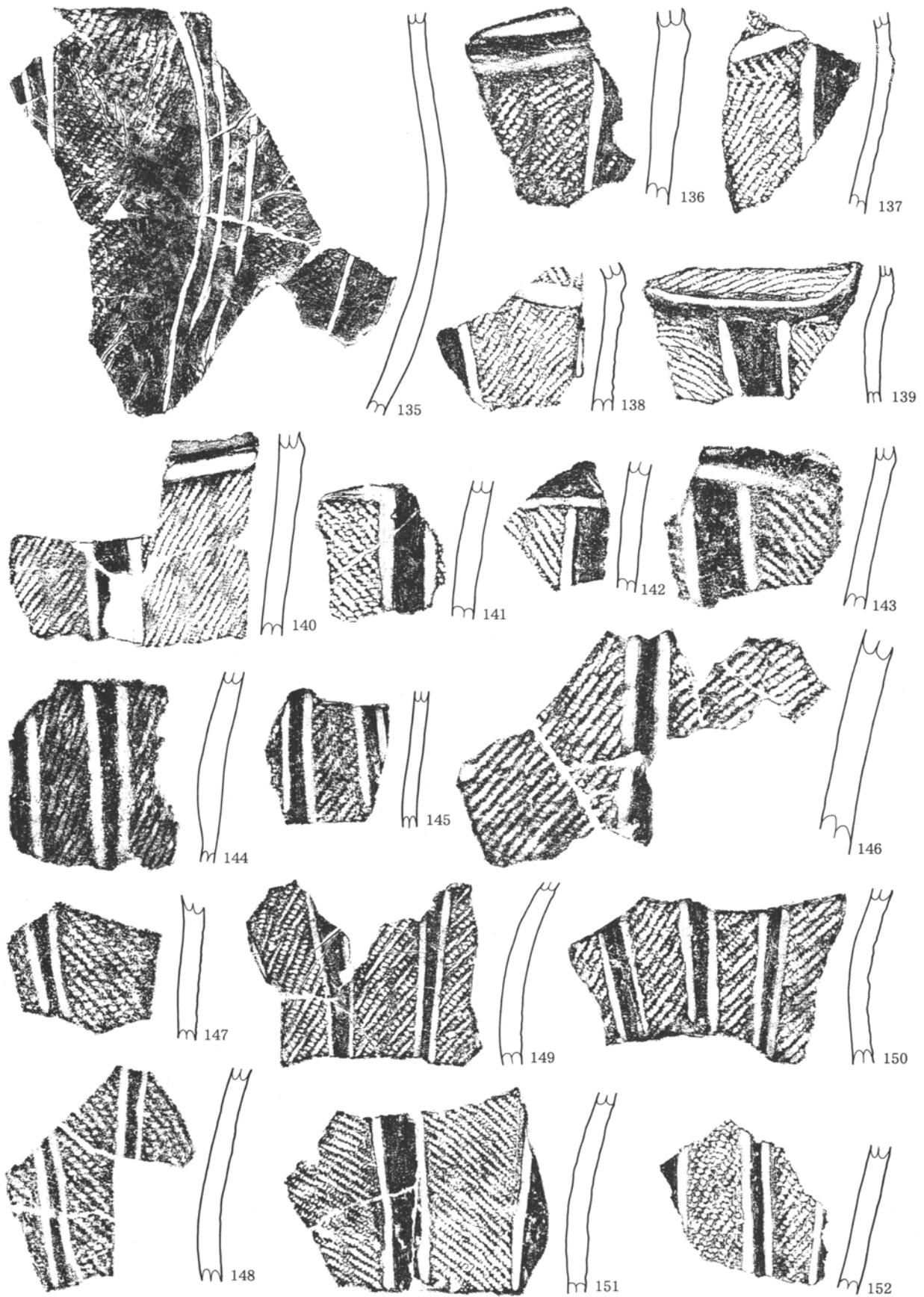
1. 縄文時代の遺構と遺物

R（0段多条）が横位に施文されている。100はLRLが横位に施文されている。101はRL（0段多条）が横位に施文されている。102・103は隆帯による区画文をもつ。104の区画内はRL（0段多条）が横位、斜位に施文されている。105・106はRLが横位に施文されている。107～110は波状口縁となる。107はRL（0段多条）が横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。108はRLが横位に施文されている。109はRL（0段多条）が横位に施文されている。110は口唇部まで縄文が施文されている。縄文はRL（0段多条）にLが付加された付加条縄が横位に施文されている。111はRLが横位に施文されている。112～114は区画文下の胴部である。112はLRLが横位に施文されている。112の上端には接合痕が残る。113はRLが横位に施文されている。114はRLが縦位に施文されている。115～127は楕円等の区画文で構成された口縁部文様帯をもつ土器で、区画内に条線を充填するものを一括した。115は波状口縁となる。116は平口縁となる。胴部に懸垂文が垂下する。口縁部文様帯の区画から条線がはみ出して施文されている。117の区画内は横位、斜位に条線が施文されている。118の区画内は条線が曲線で、胴部は縦位に施文されている。119は流線状に縦位に施文されている。120の区画内は条線が曲線で施文されている。121は縦位に施文されている。122は曲線で施文されている。123の区画内は曲線で、胴部は縦位に施文されている。124・125も曲線で施文されている。126は懸垂文が垂下する。口縁部文様帯内は流線状に縦位に施文されている。127は流線状に縦位に施文されている。128～135は胴部の懸垂文の上端が連結し∩字状の区画となったものをまとめた。128は頸部の無文部が広い。縄文は口縁部文様帯の区画内はRLが横位に、胴部は縦位に施文されている。129は胴部の磨消懸垂文に蕨状文が垂下する。縄文はRLが口縁部文様帯内は横位に、胴部は縦位に施文されている。130の区画内はRL（0段多条）が縦位に施文されている。131は胴部の磨消懸垂文の沈線と口縁部文様帯の区画の沈線が連結し∩字状の区画のように見える。

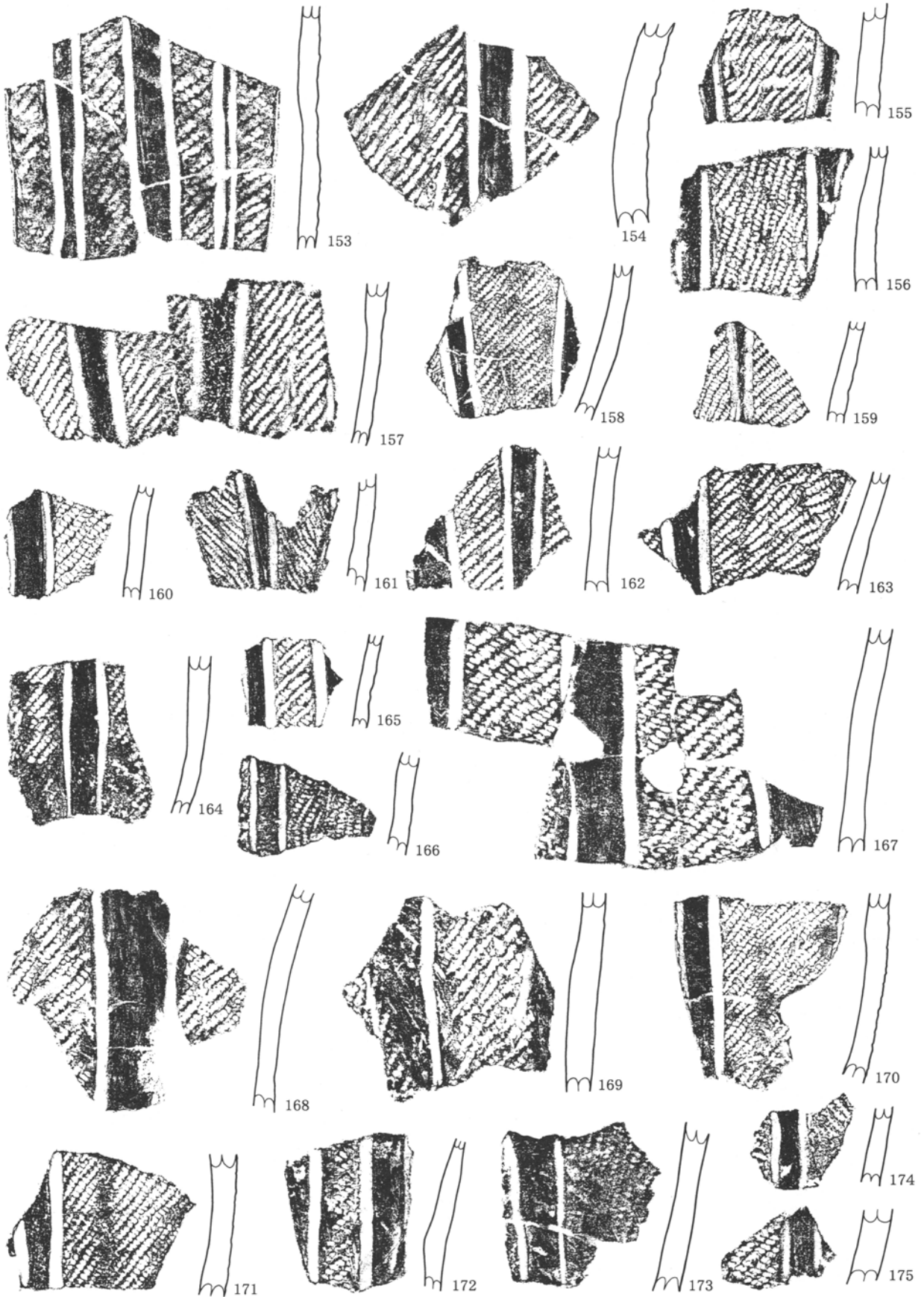
縄文はRL（0段多条）が口縁部文様帯内は横位に、胴部は縦位に施文されている。132～134はRL（0段多条）が縦位に施文されている。135は磨消懸垂文が3条1組になっている。縄文はRLが縦位に施文されている。

C種（第93図136～第100図314）

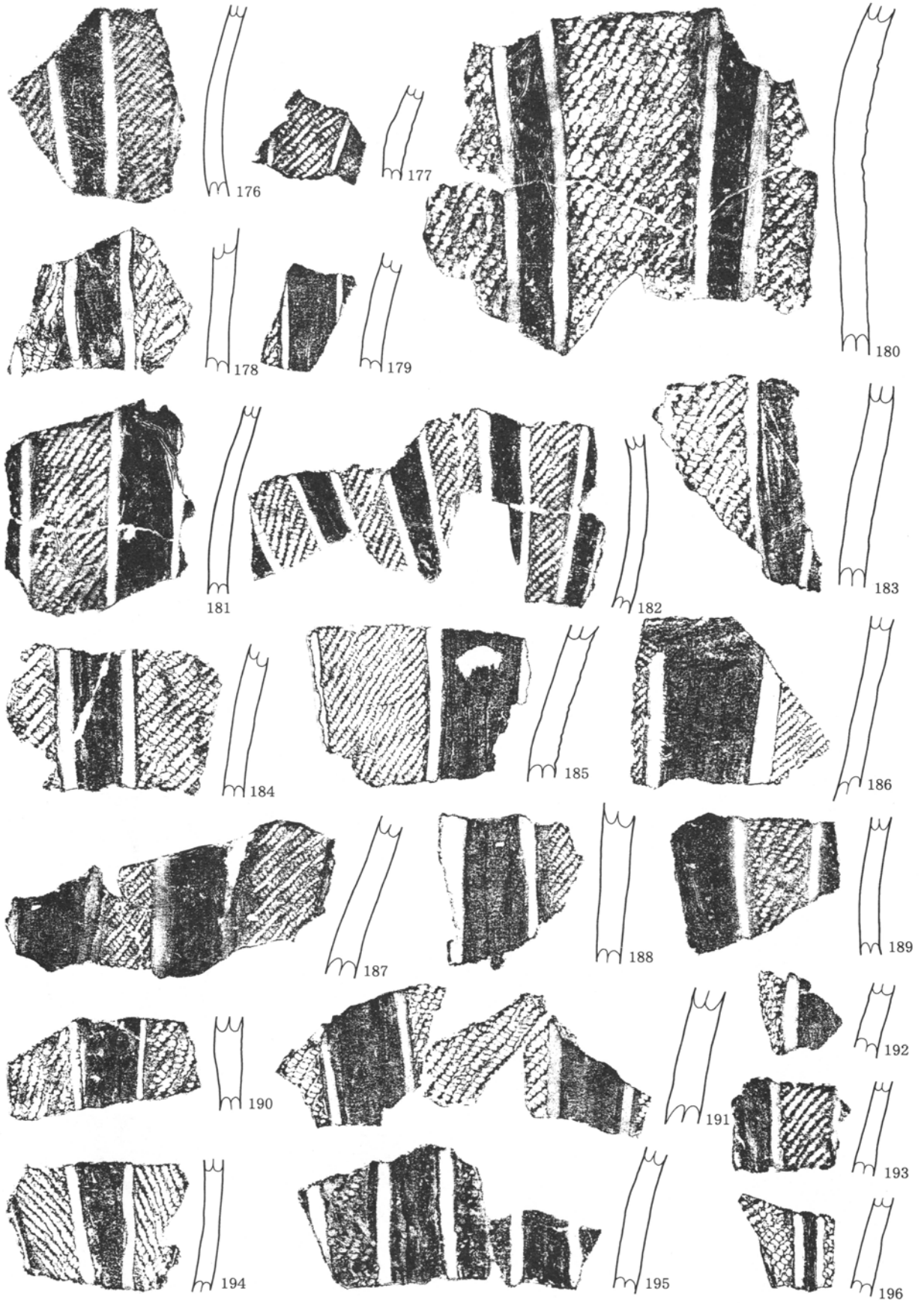
A種・B種に分類が難しい胴部を一括した。136～219は懸垂文が垂下する胴部である。136はRLが縦位に施文されている。137はRL（0段多条）が口縁部文様帯内は横位に、胴部は横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。138はRL（0段多条）が口縁部文様帯内は横位に、胴部は縦位に施文されている。139はLR（0段多条）が口縁部文様帯内は横位に、胴部は縦位に施文されている。140はRL（0段多条）が縦位に施文されている。141は懸垂文の上端部が連結している。縄文はLRが縦位に施文されている。142はLR（0段多条）が縦位に施文されている。143はLRが縦位に施文されている。144～146はRLが縦位に施文されている。147・148は同一個体と思われる。縄文はLRが縦位に施文されている。149はRLにLが付加された付加条縄が縦位に施文されている。150はRL（0段多条）が縦位に施文されている。151はLR（0段多条）が縦位に施文されている。152はRLが縦位に施文されている。153は磨消懸垂文の幅に違いが見られる。縄文はRLが縦位に施文されている。154はRLが縦位に施文されている。155～159はRL（0段多条）が縦位に施文されている。160はRLが縦位に施文されている。161はLRが縦位に施文されている。162はRLが縦位に施文されている。163はRL（0段多条）が縦位に施文されている。164はRLが縦位に施文されている。165・166はRLにLが付加された付加条縄が縦位に施文されている。167・168はRL（0段多条）が縦位に施文されている。169はRLが縦位に施文されている。170・171はRL（0段多条）が縦位に施文されている。172・173はRLが縦位に施文されている。174はLRが縦位に施文されている。175はRLRが縦位に施文されている。176～181はRL



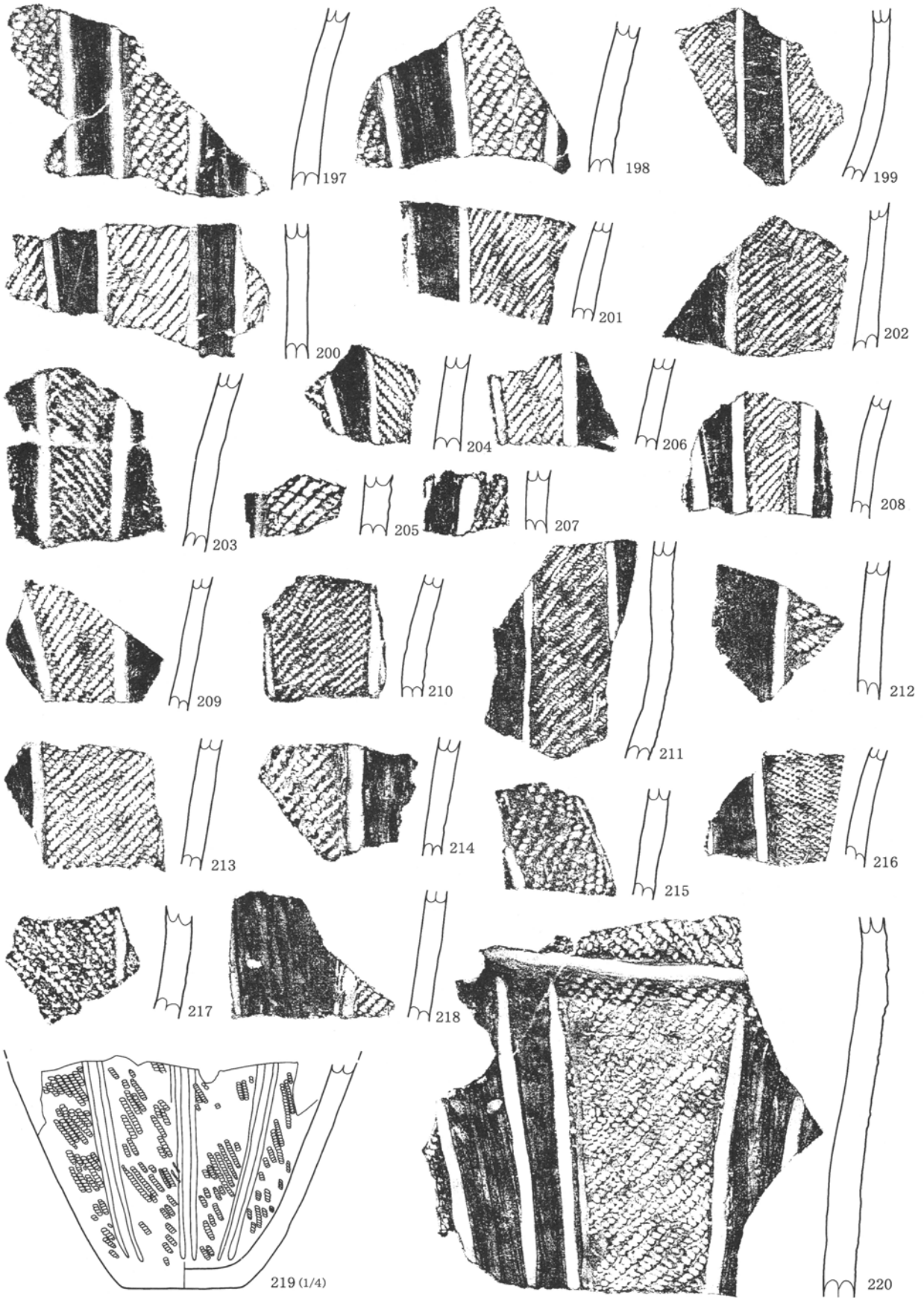
第93図 遺構外出土土器 (8)



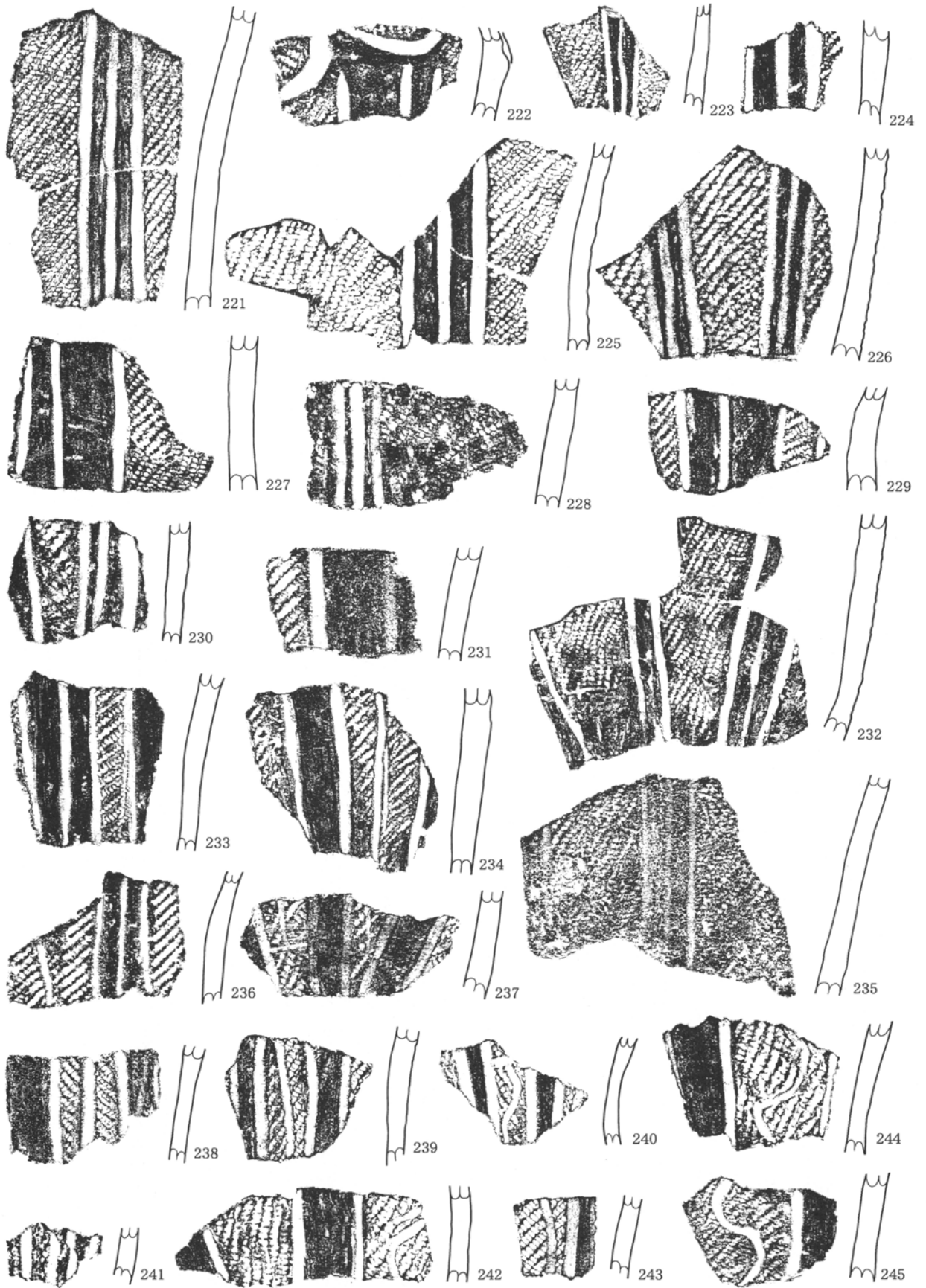
第94図 遺構外出土土器 (9)



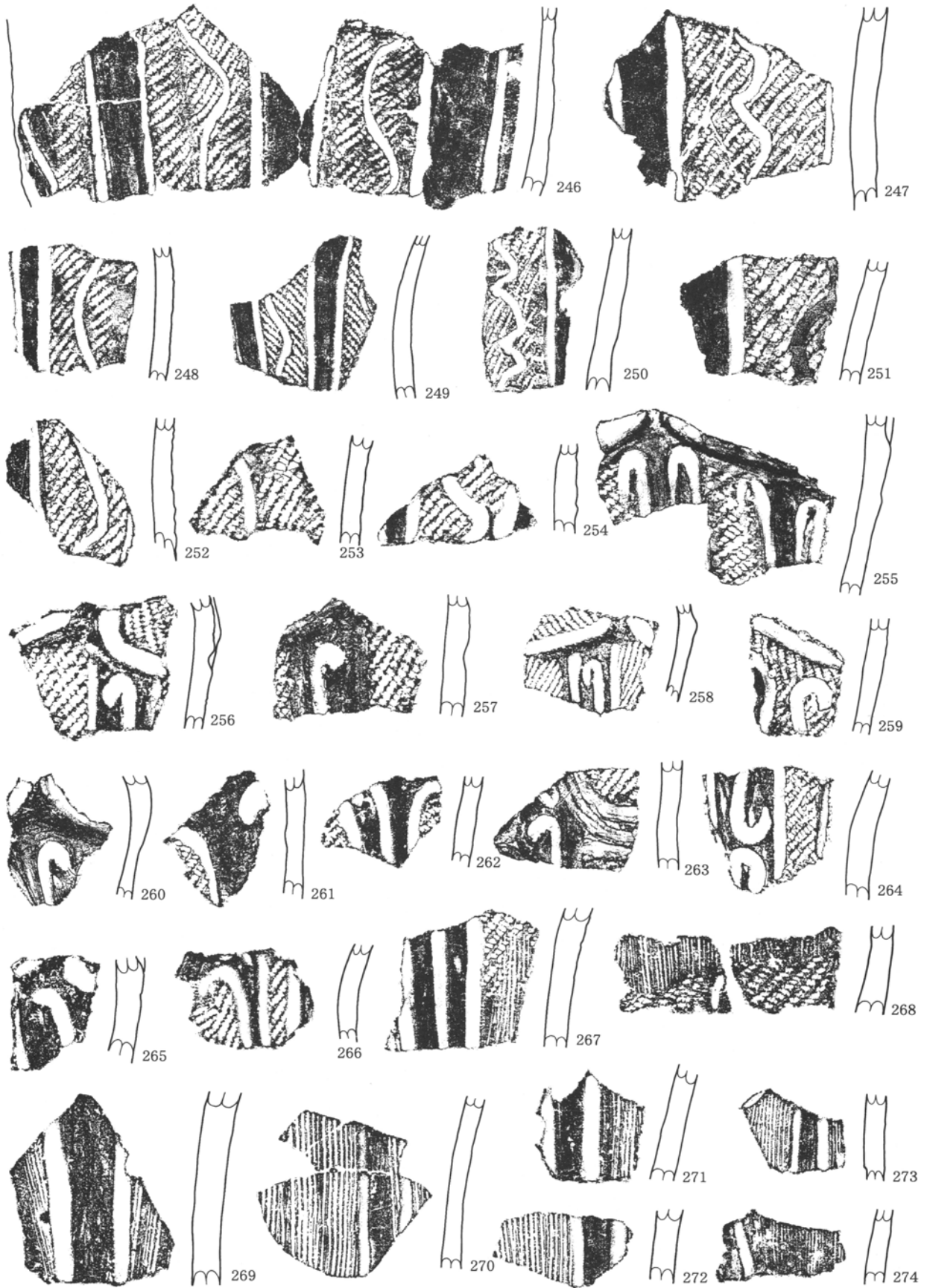
第95図 遺構外出土土器 (10)



第96図 遺構外出土土器 (11)



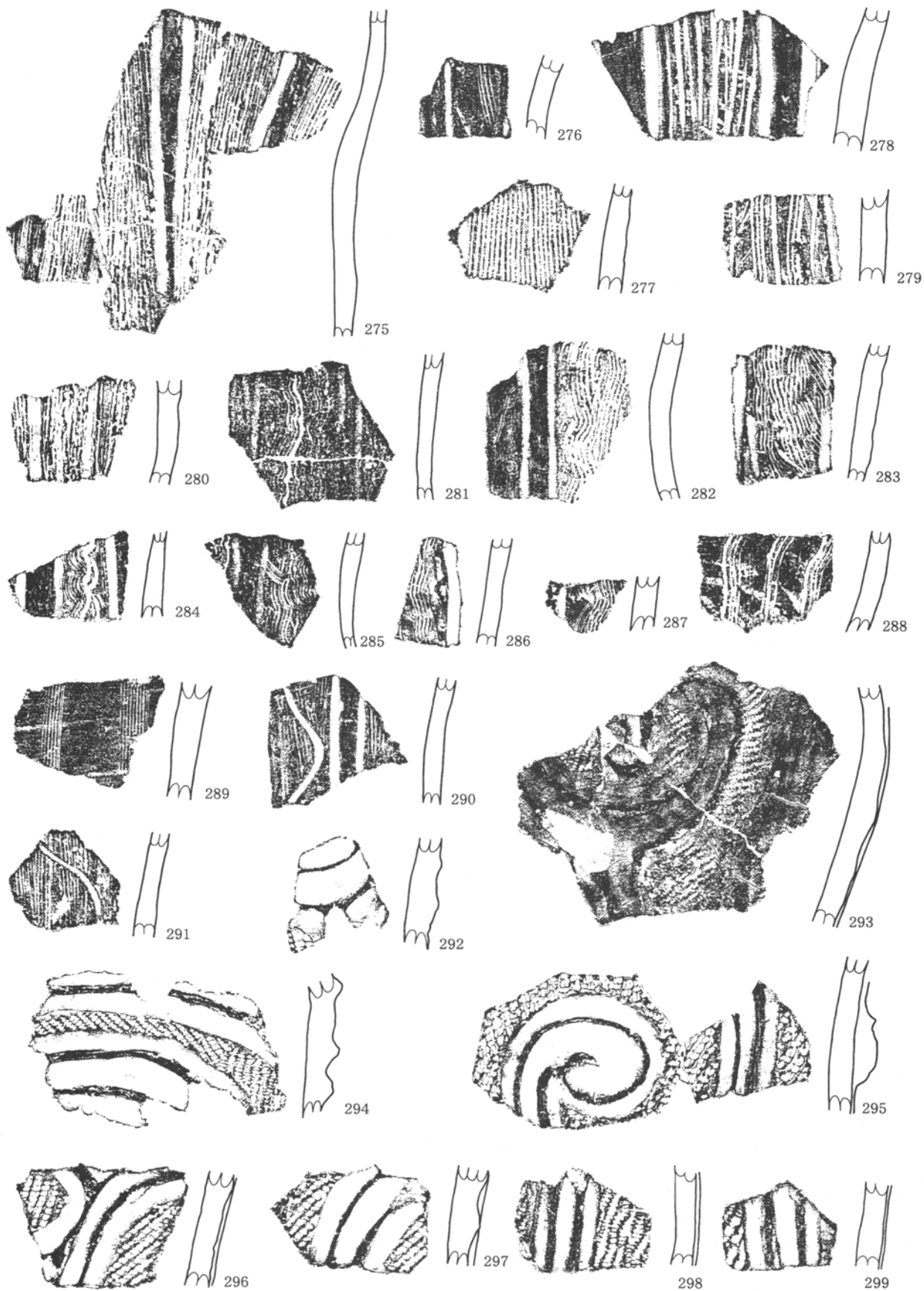
第97図 遺構外出土土器 (12)



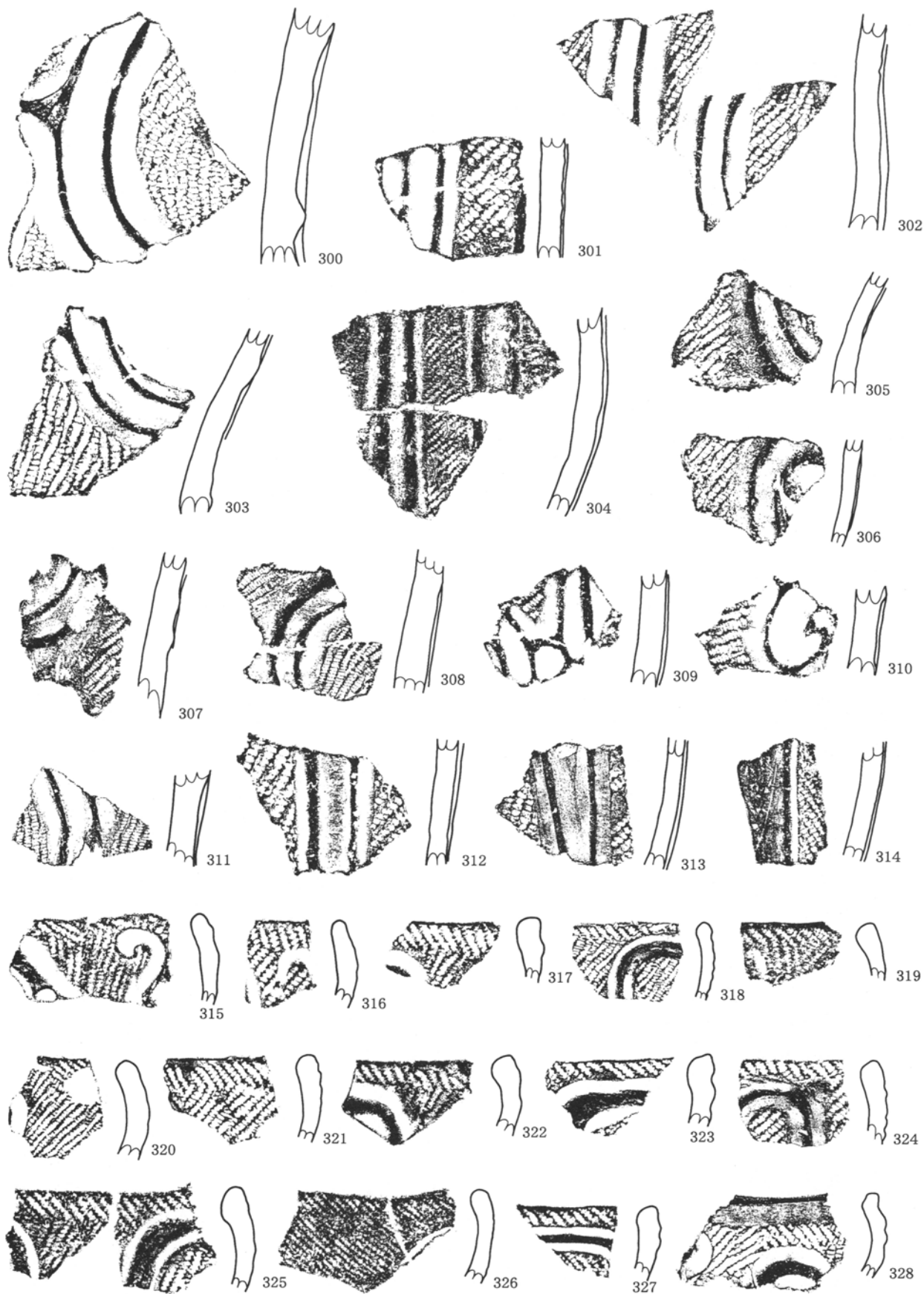
第98図 遺構外出土土器 (13)

が縦位に施文されている。182～186はRL（0段多条）が縦位に施文されている。187はRL（0段多条）にLが付加された付加条縄が縦位に施文されている。188はRL（0段多条）が縦位に施文されている。189～191はRLが縦位に施文されている。192はRLRが縦位に施文されている。193はRLが縦位に施文されている。194はRL（0段多条）が横位に施文されている。195～198はRLが縦位に施文されている。199～202はRL（0段多条）が縦位に施文されている。203はLRが縦位に施文されている。204はLR（0段多条）が縦位に施文されている。205はRLが縦位に施文されている。206はRL（0段多条）が縦位に施文されている。207はRLが縦位に施文されている。208・209はRL（0段多条）が縦位に施文されている。210はRLが縦位に施文されている。211はRL（0段多条）にLが付加された付加条縄が縦位に施文されている。212はRL（0段多条）が縦位に施文されている。213～215はRLが縦位に施文されている。216・217はLRが縦位に施文されている。218はRL（0段多条）が縦位に施文されている。219はLRが縦位に施文されている。220～233・235は3条1組の沈線による磨消懸垂文が垂下する胴部をまとめた。220の縄文はRLが口縁部文様帯内は横位に胴部は縦位に施文されている。221はRLRが縦位に施文されている。222はRLが口縁部文様帯内は横位に、胴部は縦位に施文されている。223はRLRが縦位に施文されている。224はRLが縦位に施文されている。225はRL（0段多条）が縦位に施文されている。226はRLが縦位に施文されている。227はRL（0段多条）が縦位に施文されている。228はRLが縦位に施文されている。229はRL（0段多条）が縦位に施文されている。230はRLが縦位に施文されている。231はRL（0段多条）が縦位に施文されている。232はRLが縦位に施文されている。233はRL（0段多条）が縦位に施文されている。235はRLが縦位に施文されている。234・236～240は懸垂文内に沈線が垂下する胴部で、蕨状文等が垂下していることも考えられる。234はRLが縦位に施文されてい

る。236は磨消懸垂文が3条1組の沈線で構成されている。縄文はRLが縦位に施文されている。237はRLにLが付加された付加条縄が縦位に施文されている。238はLR（0段多条）が縦位に施文されている。239はRL（0段多条）が縦位に施文されている。240～254は懸垂文内に蛇行文が垂下する胴部である。240はLRが縦位に施文されている。241はRLが縦位に施文されている。242はRL（0段多条）が縦位、斜位に施文されている。243はRLが縦位に施文されている。244～248はRL（0段多条）が縦位に施文されている。247は0段多条の太さをかえて撚り合わせたRLが縦位に施文されている。249はLR（0段多条）が縦位に施文されている。250はRLにLが付加された付加条縄が縦位に施文されている。251はRLが縦位に施文されている。252～254はRL（0段多条）が縦位に施文されている。255～266は蕨状文が垂下する胴部である。255は磨消懸垂文に2対に蕨状文が垂下する。縄文はRL（0段多条）が縦位に施文されている。256はRLが口縁部文様帯内は横位に、胴部は縦位に施文されている。257はRLが縦位に施文されている。258はRL（0段多条）が口縁部文様帯内は横位に、胴部は縦位に施文されている。259～262は∩字状の区画が垂下する胴部である。259の縄文はRL（0段多条）が斜位、縦位に施文されている。261・262はRL（0段多条）が縦位に施文されている。263・264は蕨状文が上下に施文されている。263は波状文が描かれることも考えられる。縄文はRL（0段多条）が縦位に施文されている。264はRL（0段多条）が縦位に施文されている。265は蕨状文が見える。266はRL（0段多条）が縦位に施文されている。267～291は懸垂文が垂下するが、条線が施文されている胴部である。267は3条1組の沈線による磨消懸垂文をもつ。懸垂文内はRL（0段多条）が縦位に施文され、その後に条線が縦位に施文されている。268はRLRが縦位に施文され、その上に条線が垂下する。縄文の中に蕨状文が施文されている。269～278は磨消懸垂文をもち、条線が縦位に施文されている。279・280は磨消懸垂文



第99図 遺構外出土土器 (14)



第100図 遺構外出土土器 (15)

がはっきりしない。281～287は懸垂文内の条線が曲線またはコンパス文になっている。288・289は懸垂文の区画を持たない。290・291は懸垂文内に蛇行文が垂下する。292～314は2条1組の隆帯による渦巻を描き、その周囲に不定形の区画をもつ胴部をまとめた。これらの胴部は1類に該当するものもあると思われるが、この種の中で一括する。292はLRが縦位に施文されている。293はRL(0段多条)が縦位、斜位に施文されている。294はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されている。295はRLRが横位、縦位に施文されている。296・297はRLが縦位に施文されている。298・299・301～311はRL(0段多条)が縦位に施文されている。300はRL(0段多条)が斜位、縦位に施文されている。312・313はRLが縦位に施文されている。314はLR(0段多条)が縦位に施文されている。312～314は懸垂文が垂下する胴部の可能性もある。

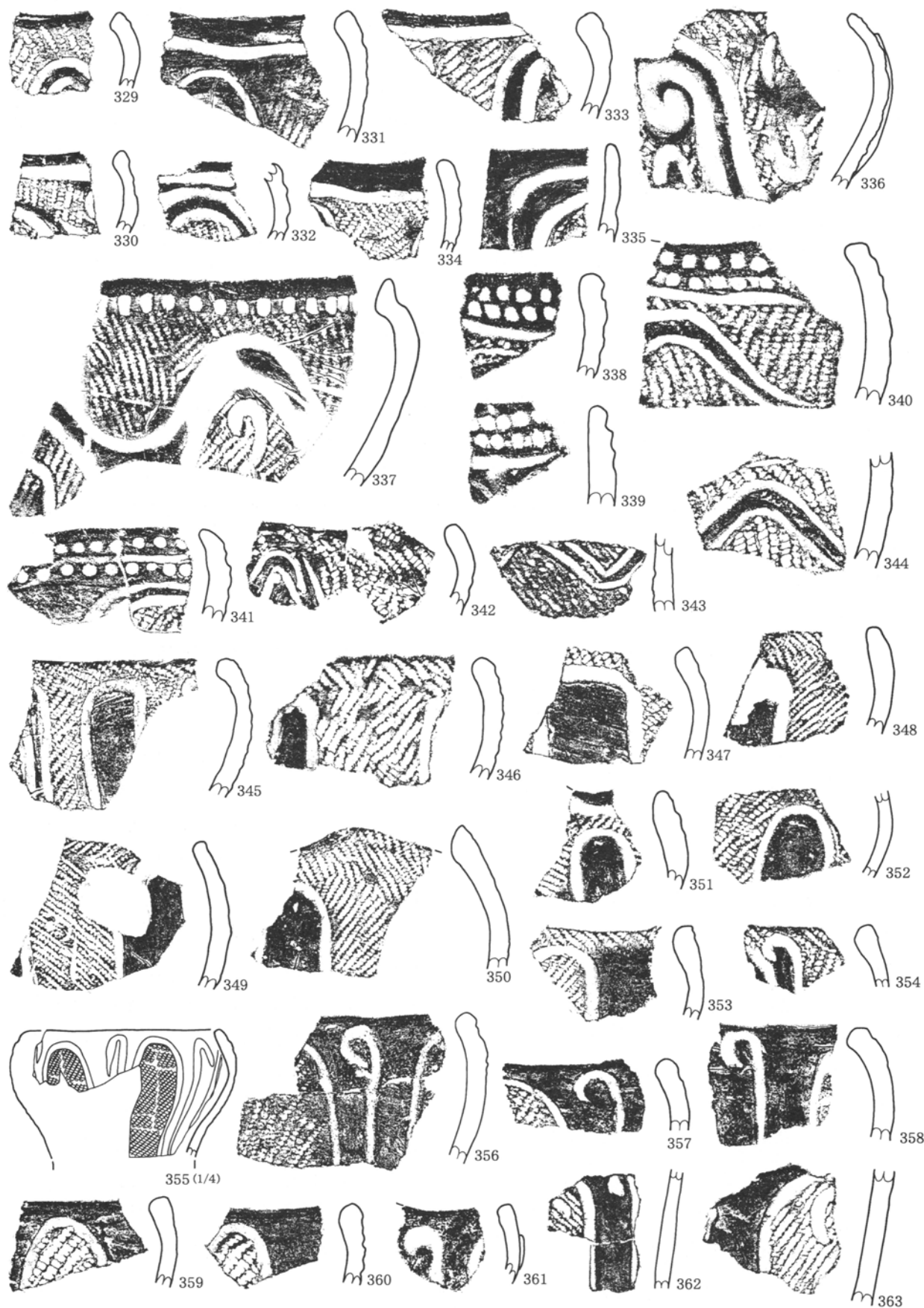
3類 (第100図315～第104図445)

口縁部文様帯が簡略化し、胴部文様が主文様の構成をとる土器をまとめた。胴部文様の違いにより、以下のA～C種に分類される。

A種 (第100図315～第101図344)

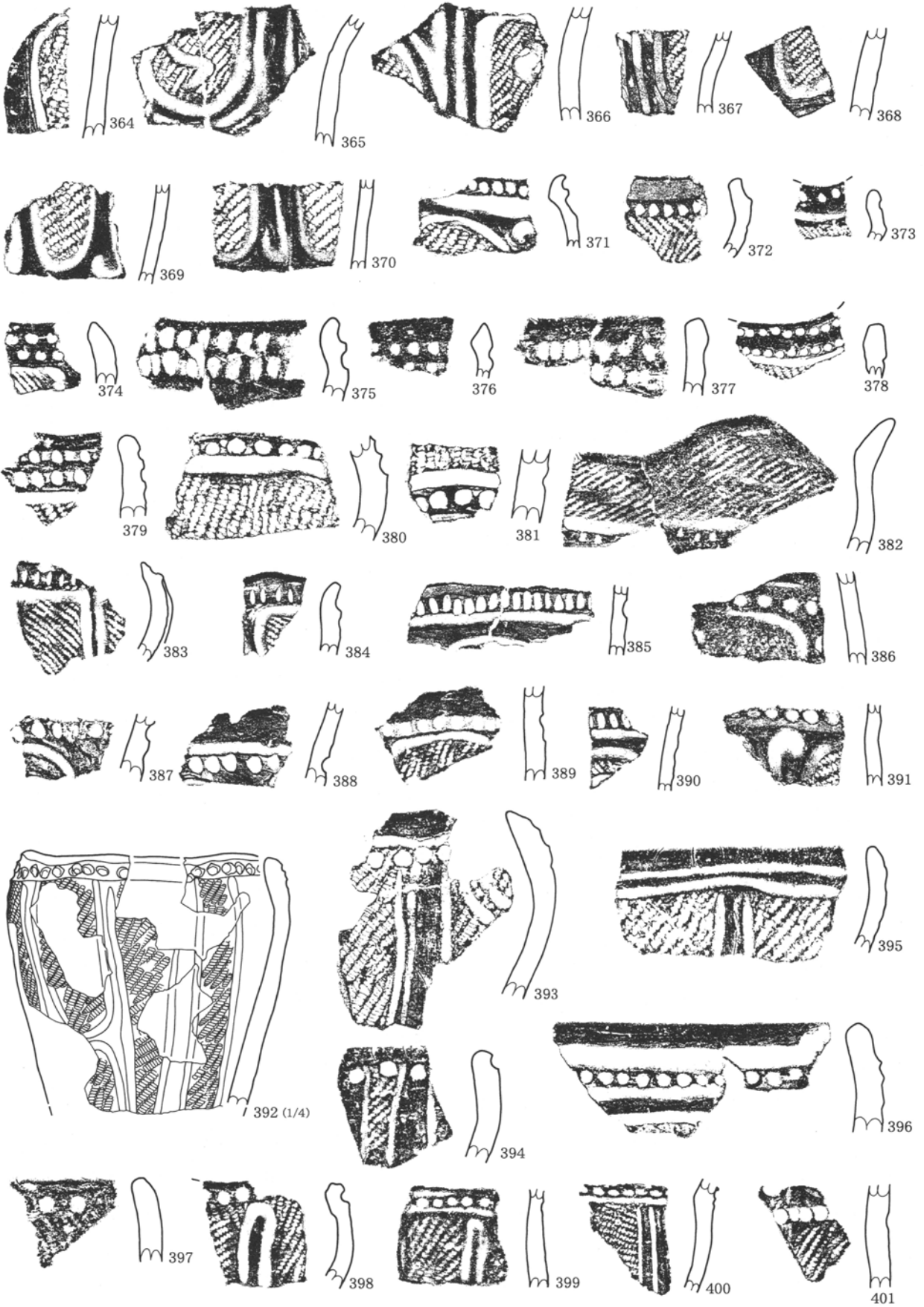
胴部上半に波状文を描く土器をまとめた。315～337は波状沈線の波頂部に∩字状の区画が入り組む構成になっていると思われる。315～327は口唇部に横位に縄文が施文されている。315～325は羽状縄文になっている。315・316はS字状文が垂下する。315は波状沈線の下に円形の刺突をもつと思われる。縄文はRLが横位、縦位に施文されている。316はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されている。317～321はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されている。322・323はRLが横位、縦位に施文されている。324・325はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されている。326はRLが横位に施文されている。327はRL(0段多条)が横位に施文されている。328～334は幅の狭い口縁部無文帯をもつ。328は口縁部に横位の太い沈線が施文されている。また、S字状文が垂下する。縄文はRL(0段多条)が横位、

縦位に施文されている。329は横位の沈線が施文されていない。縄文はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。330～334は横位に施文された沈線により幅の狭い口縁部に無文帯をもつ。330はS字状文が垂下する。縄文はRL(0段多条)が斜位に施文されている。331の縄文はRLが縦位に施文されている。施文されていないところも見られる。332はRLが斜位に施文されている。333・334はS字状文が垂下する。333の縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。334はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。335は無文部が広く、波状沈線もナデにより細くなっている。縄文はRLが縦位に施文されている。336は波状沈線の波頂部に渦巻を描く。渦巻の下に蕨状文が垂下すると思われる。また、S字状文も垂下する。縄文はRLが口縁部は横位に、以下は縦位に施文されており、羽状縄文になっている。337は口縁部に横位の沈線が施文され、その中に円形の刺突列をもつ。胴部は波状沈線に∩字状の区画が入り組む構成になっている。区画内にS字状文が垂下する。縄文はRL(0段多条)が横位、斜位、縦位に施文されている。338～344は2条1組の波状沈線が施文されている土器である。338～341・344は口縁部に2段の円形刺突列をもつ。338～340は2段の刺突列の下に横位の沈線が施文されている。338はRL(0段多条)が横位に施文されている。340はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されている。341は円形の刺突列の下に沈線が施文され、また刺突列をもつ。縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。縄文が施文されていないところがあることから、∩字状の区画が垂下する可能性もある。342～344は2条1組の波状沈線が施文されている。342はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。343はLR(0段多条)が縦位に施文されている。344は340と同様な文様と思われる。縄文はRL(0段多条)が横位、斜位に施文されている。



第101図 遺構外出土土器 (16)

1. 縄文時代の遺構と遺物



第102図 遺構外出土土器 (17)

第3章 検出された遺構と遺物

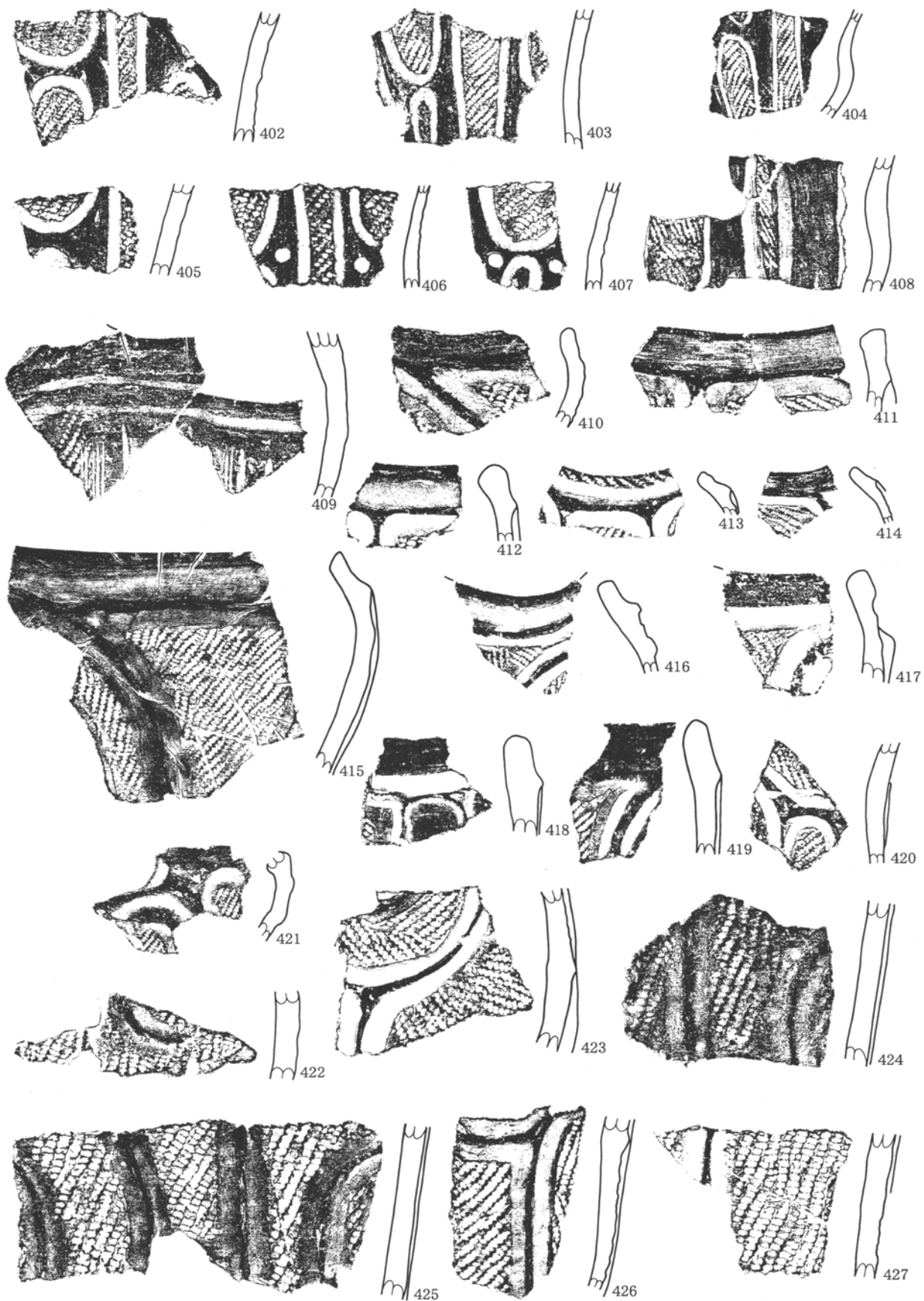
B種 (第101図345～第102図391)

胴部上半からㇿ字状の区画または楕円区画が垂下する土器をまとめた。345～352はㇿ字状の区画内が無文になっている。縄文は口縁部と胴部の施文方向を変え、羽状縄文になっている。345～348はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されている。349はLRにRが付加された付加条縄が横位、縦位に施文されている。350は波状口縁となる。縄文はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されている。351は波状口縁で口縁部無文帯をもつ。縄文はLR(0段多条)が横位、縦位に施文されている。352はRLが縦位に施文されている。353～364は口縁部からㇿ字状の区画が垂下し、区画外に蕨状文が垂下する土器である。353・354は口縁部と胴部の施文方向を変え、羽状縄文になっている。353の縄文はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されている。354はRLが横位、縦位に施文されている。355～360の区画内の縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。362・363は区画内にS字状文等が垂下する。362の縄文はLRが縦位に施文されている。363はRL(0段多条)が縦位に施文されている。364はRLが縦位に施文されている。365～370は楕円等の区画が垂下し、区画外に蕨状文が垂下する土器である。365～367は2条1組の沈線で区画されているが、波状沈線が描かれる土器よりも区画間が狭いことを考慮し、この種においた。365・366は区画内に蛇行文が垂下する。365～368の縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。369・370は胴部下半にㇿ字状の区画が垂下すると思われる。縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。371～391は口縁部または胴部に刺突列をもち、ㇿ字状の区画が垂下する土器である。371～380・382～384は口縁部に円形の刺突列をもつ土器である。371～373は口縁部に1段の刺突列をもち、その下にㇿ字状の区画が垂下する土器である。371は刺突列の下に横位の沈線が施文されている。区画外に、蕨状文が垂下する。区画内はRLが縦位に施文されている。372は太い沈線の下に刺突列をもつ。縄文はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されており、

羽状縄文になっている。373は波状口縁である。縄文はLR(0段多条)が縦位に施文されている。374～380は2段の円形の刺突列をもつ。374の区画内はLRが縦位に施文されている。378～380は刺突列の下に横位の沈線が施文されている。378は波状口縁である。縄文はLR(0段多条)が縦位に施文されている。379はRL(0段多条)が横位に施文されている。380はLR(0段多条)が縦位に施文されている。382は波状口縁の土器である。横位の沈線の下に刺突列をもつ。縄文はLRが横位に突起まで施文されている。383・384は長円形の刺突列をもつ。384は隆帯によるㇿ字状の区画が垂下する。縄文はLRが縦位に施文されている。384は波状口縁となる。縄文はLRが縦位に施文されている。381・385～391は胴部中程に刺突列をもつ。381はRL(0段多条)が斜位に施文されている。385は胴部下半に楕円区画をもつ。386～391は円形の刺突列の下にㇿ字状の区画が垂下する。386・389の縄文はRLが縦位に施文されている。390は区画内にS字状文等が垂下する。縄文はRLが横位に施文されている。391は蕨状文が垂下する。縄文はRLが縦位に施文されている。

C種 (第102図392～第103図409)

胴部上半から懸垂文が垂下する土器をまとめた。392～394・396～398は口縁部に円形の刺突列をもつ土器である。392～394は懸垂文の一部が分帯し、磨消懸垂文がH字状の区画になっている。392の縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。393は口縁部無文帯の下に刺突列をもつ。縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。394の縄文はRLが縦位に施文されている。395は口縁部無文帯の下に横位の沈線を施文し、その下に懸垂文が垂下している。縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。396は口縁部に、沈線に挟まれた円形の刺突列をもつ。縄文はRL(0段多条)が縦位、斜位に施文されている。397の縄文はRLが横位に施文されている。398・399は磨消懸垂文の上端がㇿ字状になっている。398の縄文はRLが横位、縦位に施文されている。399～401は胴部中程に刺突列をもつ。399の縄文



第103図 遺構外出土土器 (18)

第3章 検出された遺構と遺物

はRLが縦位に施文されている。400はLRが縦位に施文されている。401はRLが縦位に施文されている。402・404は磨消懸垂文がH字状の区画になっている胴部である。402の縄文はRL（0段多条）が縦位に施文されている。404の縄文はRLが縦位に施文されている。403・405～407はU字状の区画の下に蕨状文が垂下する。403の縄文はRL（0段多条）が縦位に施文されている。405の縄文はRLが縦位に施文されている。406・407は蕨状文のところに円形刺突が施文されている。406の縄文はRLが縦位に施文されている。407はU字状の区画内にS字状文が施文されていると思われる。縄文はRL（0段多条）が縦位に施文されている。408の縄文はLRが縦位に施文されている。409は波状口縁となる。口縁部無文帯の下に横位の沈線が施文されている。RLが縦位に施文され、縄文が施文されたあとに、縦位の条線が施文されている。

D種（第103図410～第104図445）

胴部上半に隆帯や沈線により渦巻を描く土器をまとめた。410～431は口縁部に無文帯をもち、胴部上半に1条の隆帯により渦巻を描き、その周囲に不定形の区画をもつ土器である。410の縄文はRL（0段多条）が縦位に施文されている。411はRLが横位に施文されている。412はRL（0段多条）が縦位に施文されている。413は口唇部にRL（0段多条）が横位に、胴部は縦位に施文されている。414はLR（0段多条）が縦位に施文されている。415はRL（0段多条）が縦位に施文されている。416はRLが横位、斜位に施文されている。417は太い沈線により隆帯の区画を際立たせている。縄文はRL（0段多条）が横位、縦位に施文されている。418はLRが縦位に施文されている。419はRLが縦位に施文されている。420はRLが横位、縦位に施文されている。421はRLが縦位に施文されている。422はRL（0段多条）が縦位、斜位に施文されている。423はRLが横位、縦位に施文されている。424～428はRLが縦位に施文されている。429はLRが縦位に施文されている。430はRLが縦位に施文されている。431はRL（0

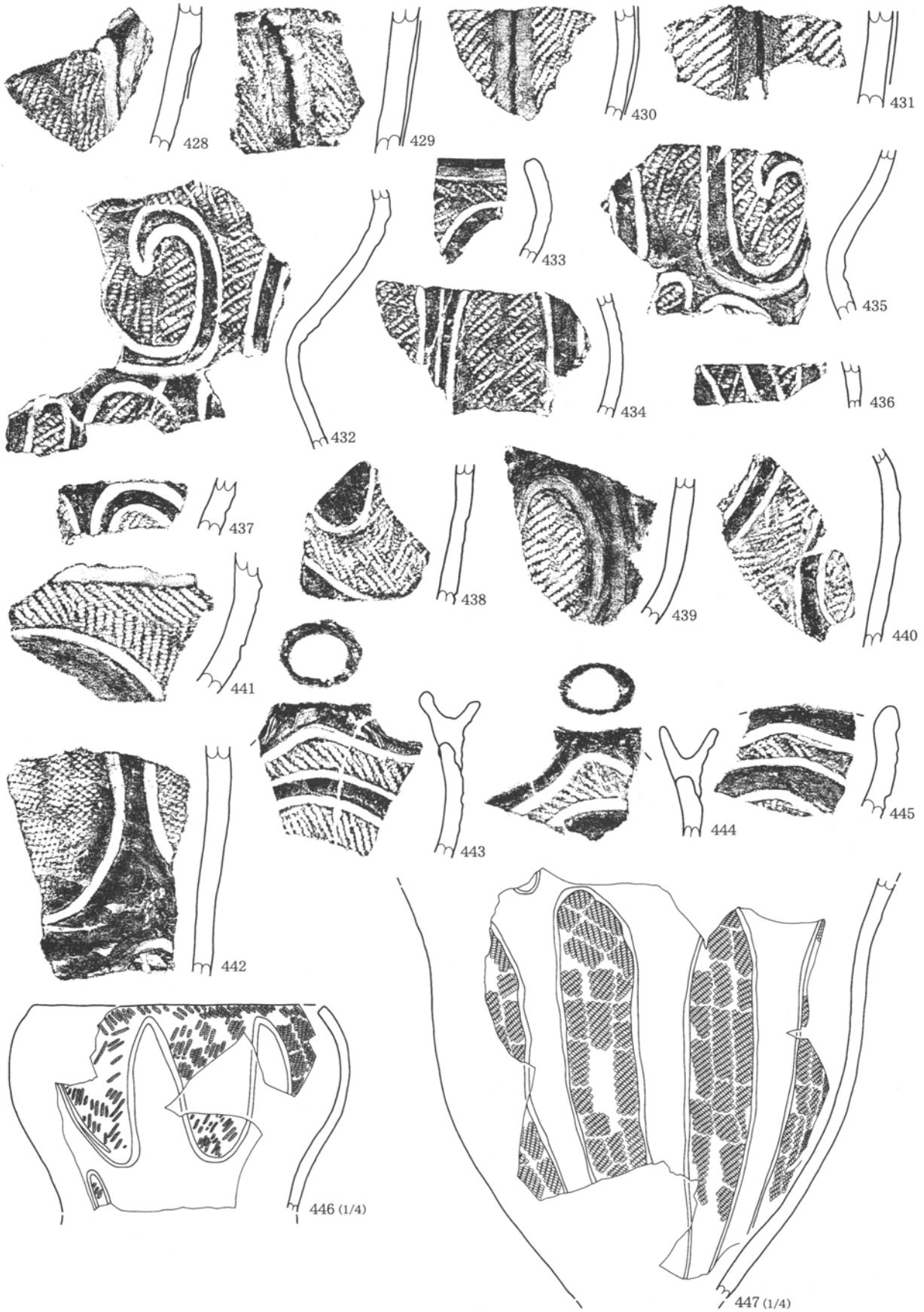
段多条）が縦位に施文されている。432～445は口縁部に無文帯をもち、胴部上半に2条1組の沈線により渦巻を描く土器である。432～436は同一個体と思われる。胴部下半に∩字状の区画が垂下する。縄文はRLにLが付加された付加条縄が横位、縦位、斜位に施文されている。437はRL（0段多条）が縦位に施文されている。438はRLが充填されている。439はRL（0段多条）が縦位に施文されている。440はRLが充填されている。441はRL（0段多条）が横位、斜位に施文されており、羽状縄文になっている。442はLRが縦位に施文されている。443～445は円筒形の突起をもつ、波状口縁の土器である。縄文はRL（0段多条）が横位に施文されている。

4類（第104図446～第107図538）

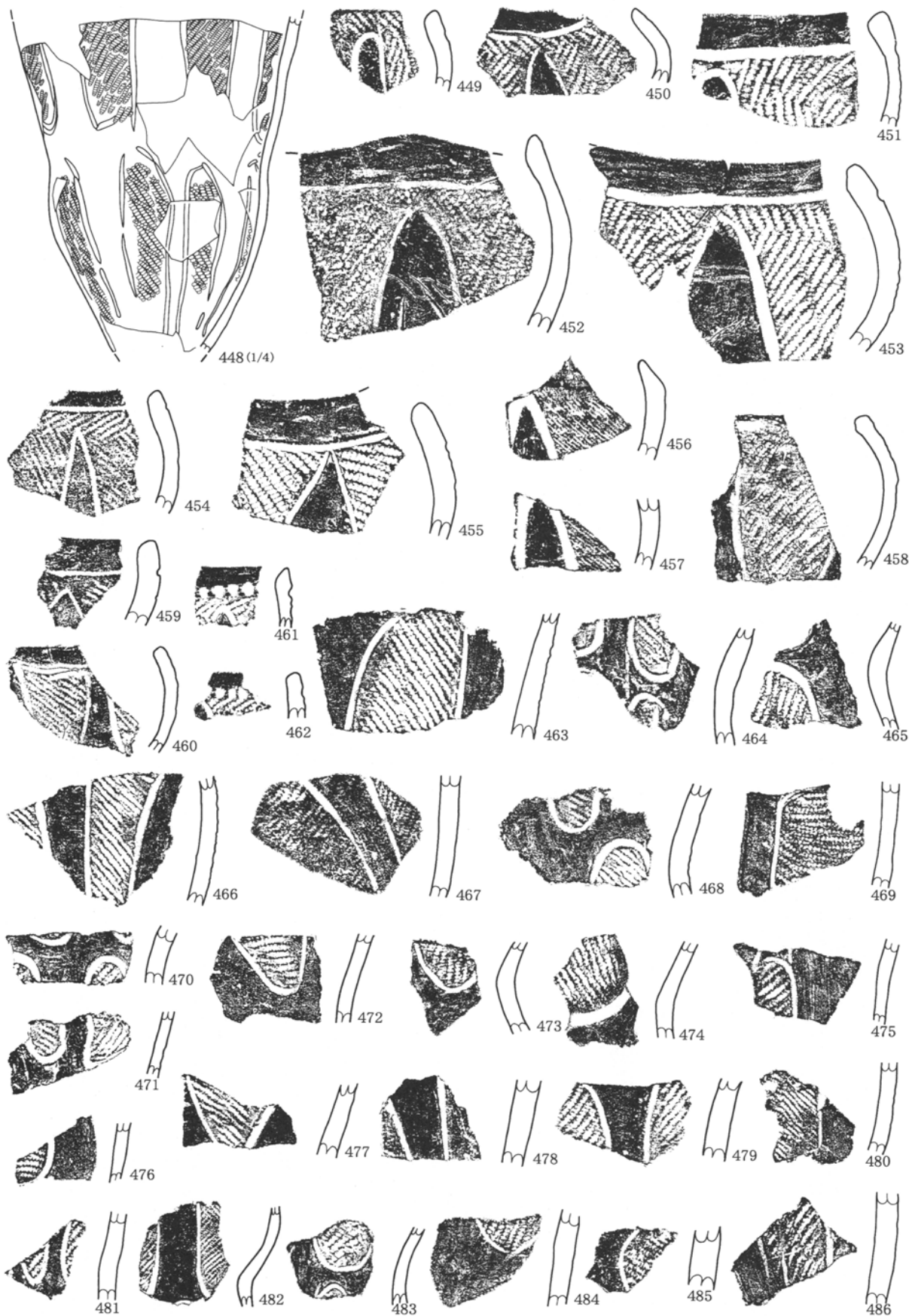
胴部文様が上下分帯し、胴部下半に∩字状の区画が垂下する土器をまとめた。胴部上半の文様の違いから、以下A～C種に分類する。この類の文様は細い沈線で施文されることが多い。

A種（第104図446～第106図506）

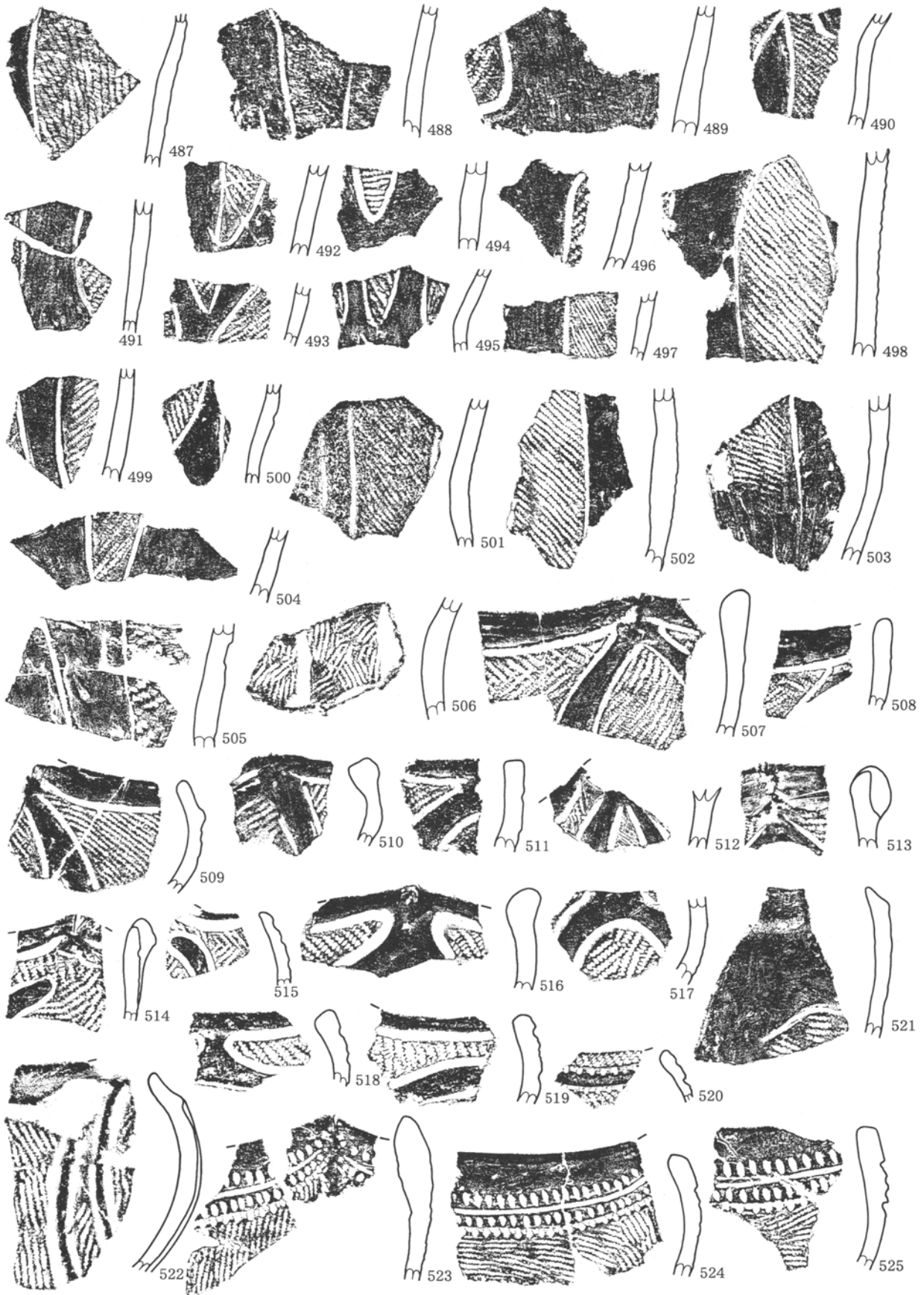
胴部上半にW字状の文様構成をもつ土器をまとめた。446は口縁部にRLRが横位に、以下は縦位に施されており、羽状縄文になっている。447は∩字状の区画が垂下する胴部である。区画内の縄文はRL（0段多条）が斜位、縦位に施文されている。448は胴部の括れがやや弱い器形になっている。胴部上半の区画内はRL（0段多条）が縦位に施文されている。胴部下半の区画内はLR（0段多条）にRが付加された付加条縄が縦位に施文されている。449は口縁部はRLが横位に、以下は縦位に施文されており、羽状縄文になっている。450～455・459・460は幅の狭い口縁部無文帯をもつ。450の縄文はRL（0段多条）が横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。451はRLが縦位、斜位に施文されており、羽状縄文になっている。452・453・455は波状口縁となる。452の縄文はRLが横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。453はRL（0段多条）が横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。454はLRが横位、縦位に施文されており、羽状縄文



第104図 遺構外出土土器 (19)



第105図 遺構外出土器 (20)



第106図 遺構外出土土器 (21)

になっている。455はLR(0段多条)が縦位に施文されている。459はLRが縦位に施文されている。460は口縁部無文帯と胴部上半の無文部が連結したような文様構成になっている。縄文はLRが縦位に施文されている。456・457は同一個体と思われる。口唇部が内折する器形である。縄文はLRにrが付加された付加条縄が縦位に施文されている。458は口縁部に無文帯をもたず、縄文が施文されている。縄文はRLが縦位に施文されている。461・462は口縁部無文帯の下に横位に円形の刺突列をもつ。縄文はLRが横位に施文されている。463～506は〇字状の区画が垂下する胴部である。B種・C種になる胴部も含まれている可能性もあると思われるが、ここでまとめることにする。463の区画内はLR(0段多条)が縦位に施文されている。464の区画内はRLが縦位に施文されている。465の区画内はRLが縦位に施文されている。466の区画内はLRが縦位に施文されている。467の区画内はRLが縦位に施文されている。468の区画内はLRが縦位に施文されている。469の区画内はLRが縦位、斜位に施文されている。470の区画内はRLが縦位に施文されている。471の区画内はLRが縦位、横位に施文されている。472の区画内はLRが斜位に施文されている。473の区画内はRL(0段多条)が斜位に施文されている。474の区画内はRLが横位、斜位に施文されている。475の区画内はRLが縦位に施文されている。476の区画内はLR(0段多条)が斜位に施文されている。477・478の区画内はLRが縦位に施文されている。479の区画内はRL(0段多条)が縦位に施文されている。480の区画内はLRが縦位に施文されている。481はRLが縦位に施文されている。482の区画内はRLが横位、縦位に施文されている。483・484の区画内はRLが縦位に施文されている。485の区画内はLRが縦位に施文されている。486の区画内はRLが縦位に施文されている。区画内に沈線も縦位に施文されている。487はLR(0段多条)が縦位、斜位に施文されている。488はLRが斜位に施文されている。489はRL(0段多条)が縦位に施文されている。490はLRが縦位

に施文されている。491はRL(0段多条)が縦位に施文されている。492はLRが縦位に施文されている。493はRL(0段多条)が縦位に施文されている。494はLRが斜位に施文されている。495はLR(0段多条)が縦位に施文されている。496はRLが縦位に施文されている。497・498はLRが縦位に施文されている。499はRL(0段多条)が縦位に施文されている。500はLR(0段多条)が縦位に施文されている。501はLRが縦位に施文されている。502はLR(0段多条)が縦位に施文されている。503はLRが縦位に施文されている。504はRLが縦位に施文されている。505はRLが縦位に施文されている。506は区画の内外の区別なくRLが充填されている。

B種(第106図507～525)

口縁部に無文帯を有し、胴部上半に〇字状の文様構成をもつ土器をまとめた。これらの土器は小突起をもつ器形のもが目立つ。507・508は同一個体と思われる。縄文はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。509の縄文はLRが縦位に施文されている。510の縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。511はLRが横位に施文されている。512はLRが縦位に施文されている。513は、口縁部が前面に突き出る器形になっている。縄文はLRが横位、斜位に施文されている。514・515は口縁部無文帯と〇字状の文様が接していない構成になっている。514の縄文はRL(0段多条)が横位、縦位、斜位に施文されている。515の縄文はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。516～519はやや太めの沈線により区画されている。516と517は同一個体と思われる。縄文はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されている。518と519は同一個体と思われる。縄文はRL(0段多条)が横位に施文されている。520は口唇部からRL(0段多条)が横位に施文され、円形の刺突列により区画された無文部をもつ。521は口唇部が内折する器形である。沈線による区画がはっきりせず、無文部が広がる。縄文はLR(0段多条)が縦位に施文されている。522は胴部上半の丸み

が強い器形である。微隆帯によるO字状の区画内も縄文が施文されている。縄文はRLが横位、縦位、斜位に施文されている。523～525は同一個体と思われる。口縁部無文帯の下部に楕円状の刺突列を1段もち、さらにその下に刺突列及び沈線に施文された刺突列をもつ。縄文はLRが横位、縦位、斜位に施文されている。

C種 (第107図526～538)

口縁部無文帯をもち、胴部上半に2条1組の沈線により、渦巻を描く土器をまとめた。526は波状口縁となる。縄文はRL(0段多条)が横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。527の縄文はRLが横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。528はLRが横位、縦位、斜位に施文されている。529・530はRLが横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。531は波状口縁となる。縄文はRLが斜位、縦位に施文されている。532～538は胴部及び底部である。532はLRが充填されている。533はRLが縦位に施文されている。534はLRが縦位に施文されている。535はRL(0段多条)が充填されている。536・537はLR(0段多条)が縦位に施文されている。538は渦巻を描く沈線の上端に刺突が施文されている。縄文はLRが縦位、斜位に施文されている。

5類 (第107図539～第108図558)

異なる系統を引く土器をまとめた。施文された文様の違いから、以下のようにA～C種に分類する。

A種 (第107図539～545)

短い沈線及び綾杉文が施文されている胴部をまとめた。これらの土器は胴部上半に2条1組の沈線による渦巻を描き、その周囲は不定形の区画をもつと思われる。539はA区4号土器群の1と同一個体の可能性がある。541・544は綾杉文が施文されている。

B種 (第107図546～548)

懸垂文が垂下し、雨だれ状の刺突が充填される胴部をまとめた。546は2条1組の隆帯による磨消懸垂文が垂下する。

C種 (第107図549～第108図558)

指頭圧痕状の刺突が刻まれた隆帯が垂下し、条線が施文されている胴部をまとめた。これらの土器はA区4号埋甕と同様な器形と思われる。549は口縁部の無文帯下に横位に貼付された隆帯である。

6類 (第108図559・560)

第3群土器に属すると思われるが、類別が難しいものをまとめた。559・560は波状口縁となる。559は口縁部に沈線による粗い波状文が描かれる文様区画をもつ。胴部は∩字状の区画が垂下する。区画内にS字状文が施文されている。縄文はRL(0段多条)が横位に施文されている。560は559ほど沈線による文様区画がはっきりしないが、波状沈線が施文されており、∩字状の区画が入り組む。

7類 (第108図561～第110図592)

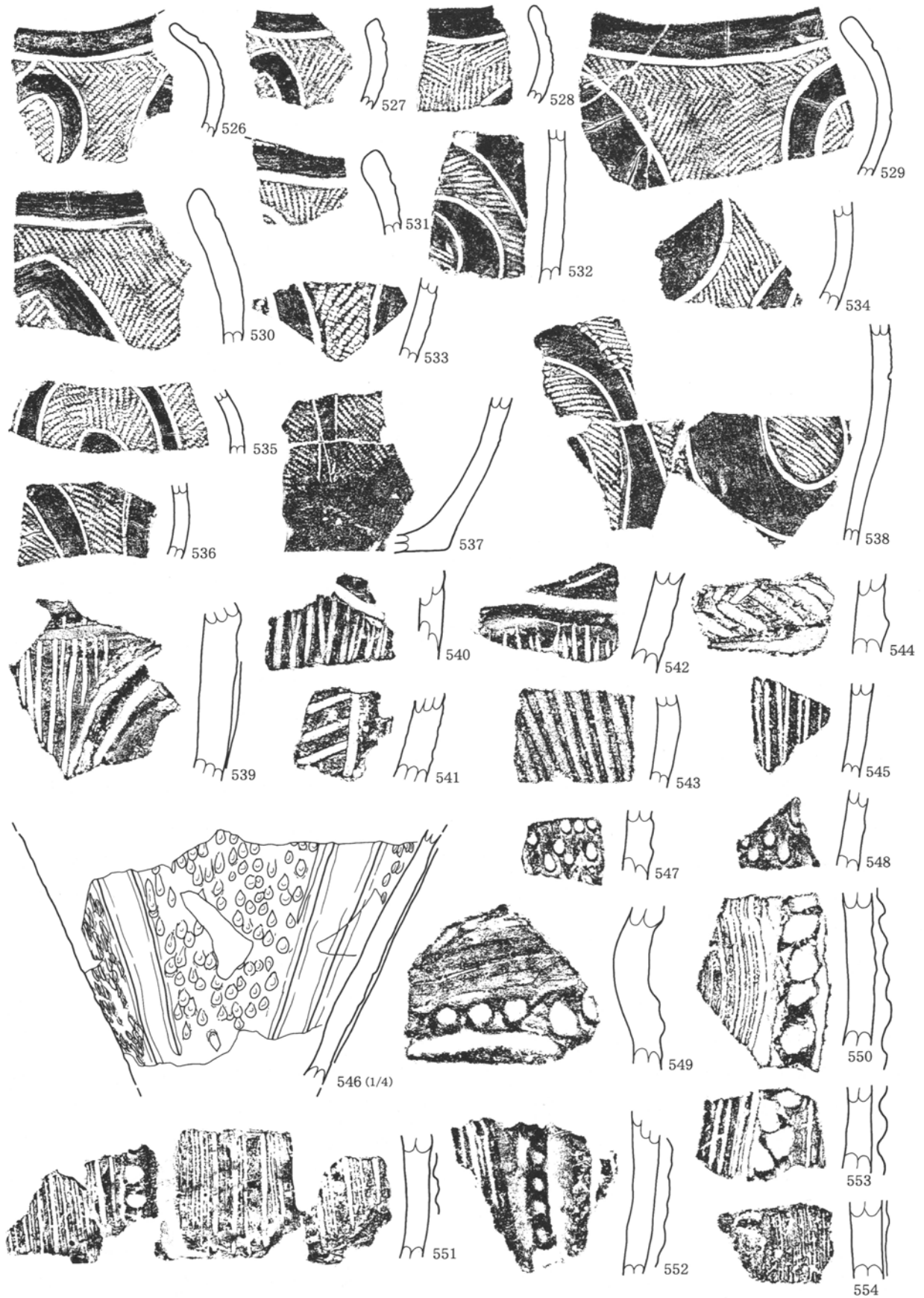
鉢形・浅鉢形土器をまとめた。施文される文様の違いから以下のように、A～C種に分類する。

A種 (第108図561～567)

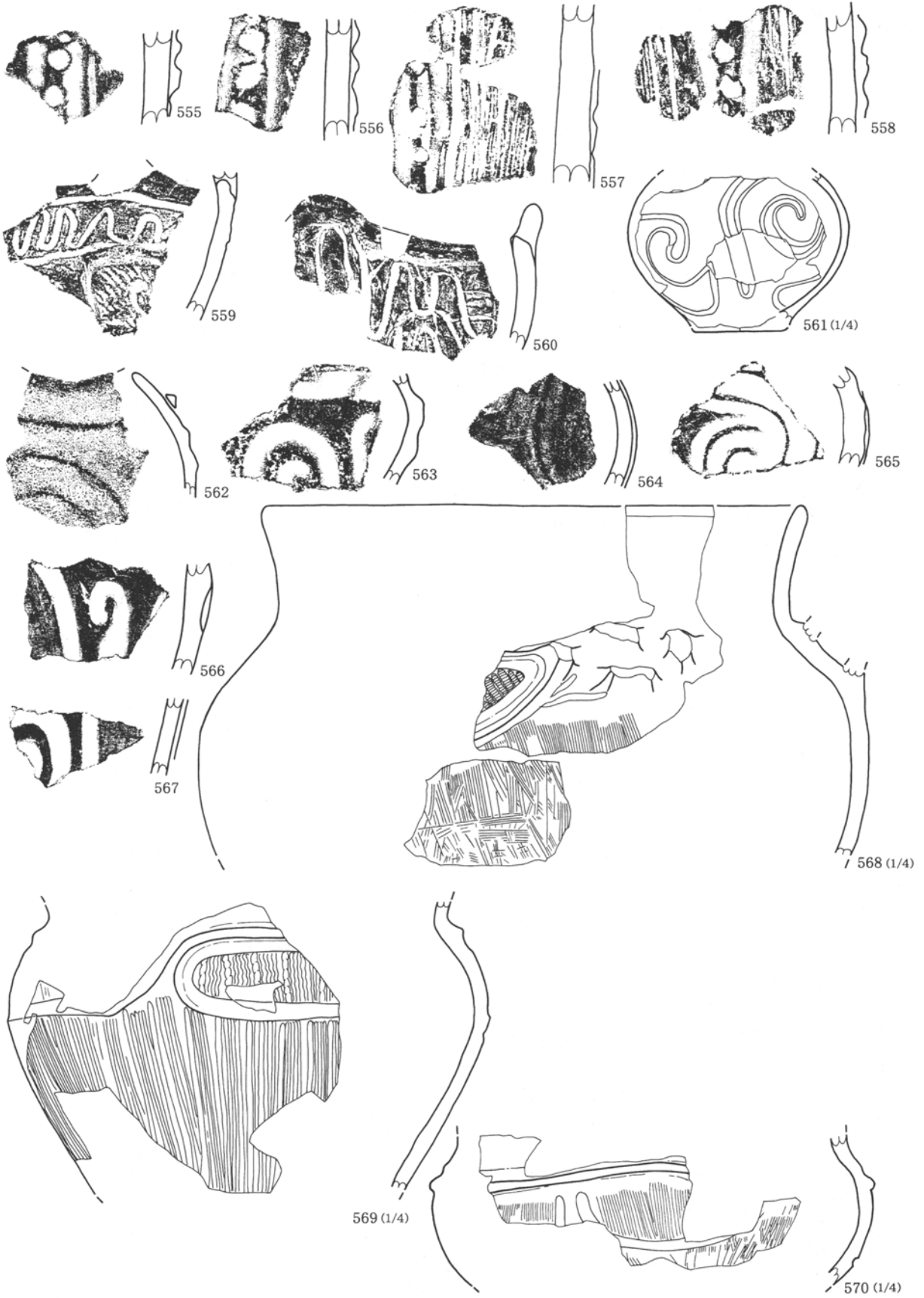
器形が丸みを帯び、沈線または隆帯による文様のみで地文が見られない土器をまとめた。561は2条1組の沈線により渦巻を描く。沈線に囲まれた区画内は削り取られており、段差をもつ。562・564・565は2条1組の隆帯により、渦巻を描く。562は隆帯の一部に孔があり、有孔罅付土器と思われる。563は太めの沈線により渦巻を描く。566・567は同一個体と思われる。太めの沈線により渦巻が描かれ、蕨状文が施文されている。

B種 (第108図568～第109図589)

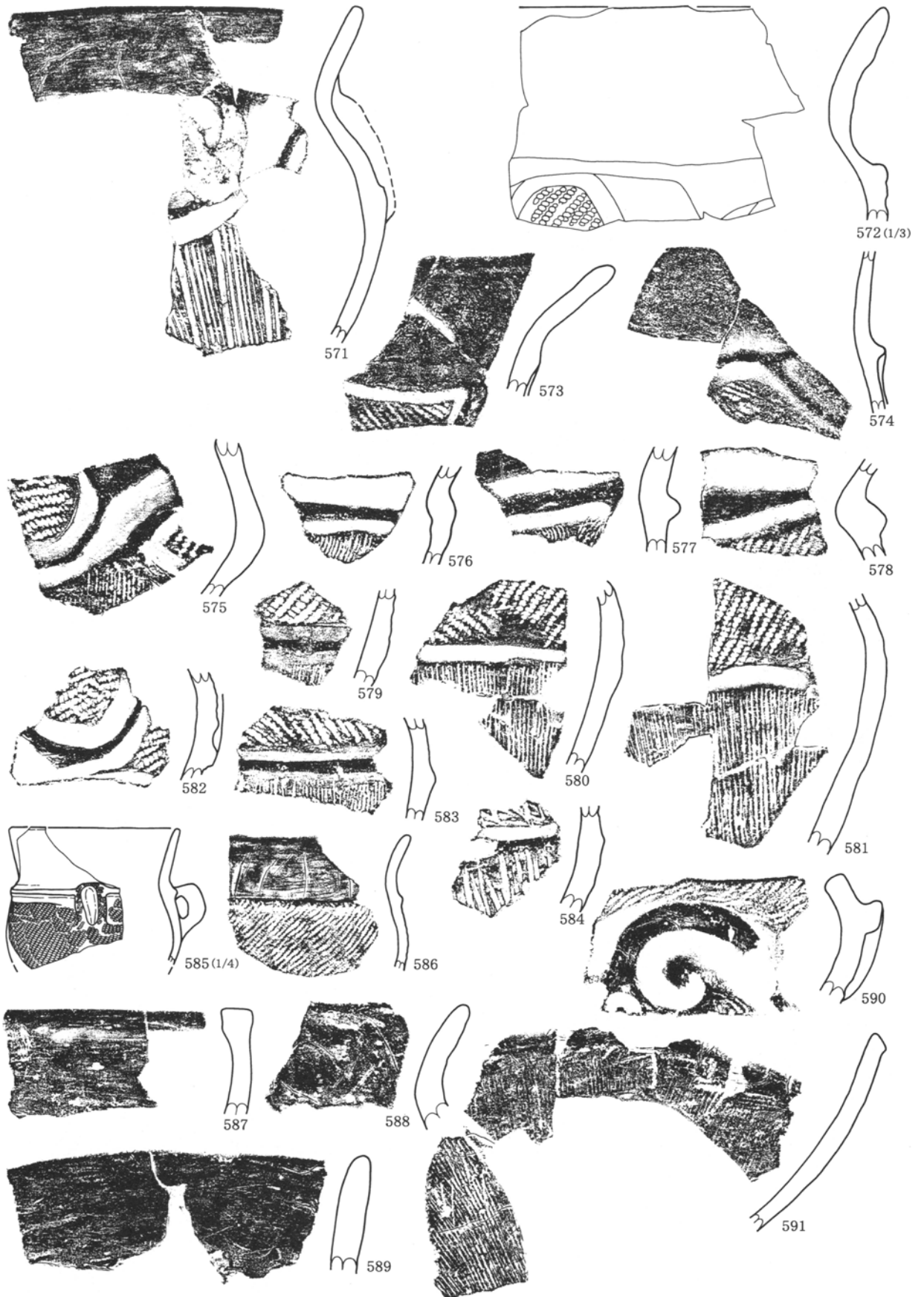
くの字状に立ち上がる無文帯の口縁部をもつ土器をまとめた。568～584は胴部上半に楕円等の区画文で構成された文様帯を有する。568は2ないし4単位の橋状把手をもつ。区画内はRL(0段多条)が横位に施文されている。胴部下半は条線が縦位、横位、斜位に施文されている。569の区画内は流線状の条線が施文されている。胴部下半は条線が縦位に施文されている。570は区画内は縦位に条線が施文されている。胴部下半は条線が縦位、斜位に施文されている。571の剝離している区画内はRLが横位に施文



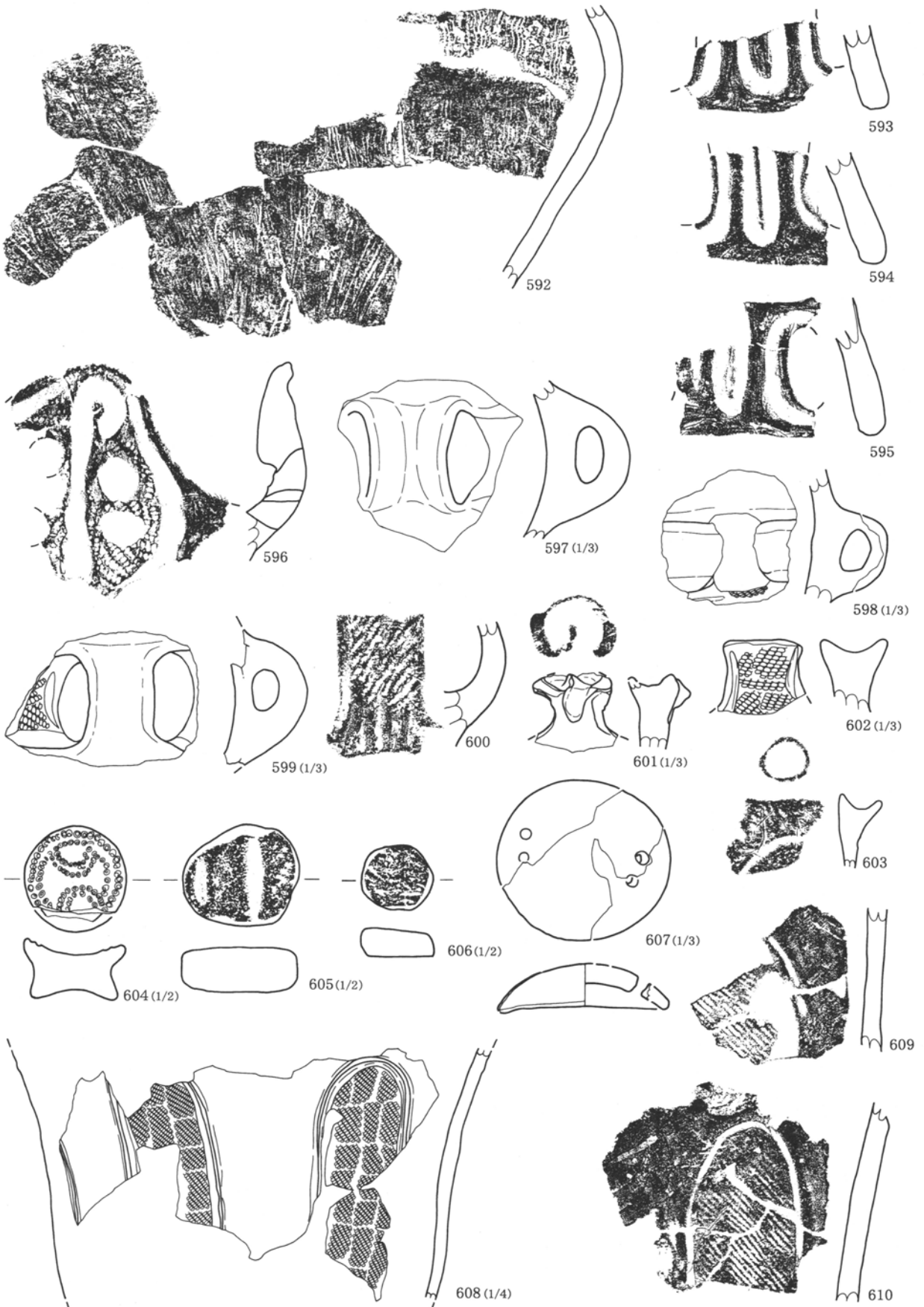
第107図 遺構外出土土器 (22)



第108図 遺構外出土器 (23)



第109図 遺構外出土土器 (24)



第110図 遺構外出土器 (25)

第3章 検出された遺構と遺物

されていると思われる。胴部下半は条線が縦位に施文されている。572の区画内はRLが縦位に施文されている。573の区画内はRLが横位に施文されている。574の区画内はLRが縦位に施文されている。575の区画内はRL（0段多条）が縦位に施文されている。胴部下半は条線が縦位に施文されている。576・577の区画内は条線が施文されている。578の区画内はRL（0段多条）が縦位に施文されている。579の区画内はRL（0段多条）が縦位に施文され、胴部下半は条線が縦位に施文されている。580の区画内はRLが横位、縦位に施文され、胴部下半は条線が縦位に施文されている。581の区画内はRLが縦位に施文されている。胴部下半は条線が縦位に施文されている。582の区画内はRLが縦位に施文されている。583はRLが横位に施文されている。胴部下半は条線が縦位に施文されている。584は太めの条線が縦位、斜位に施文されている。585・586は胴部上半に楕円等の区画をもたない。585は4単位の橋状把手をもつ。縄文はRL（0段多条）が縦位に施文されている。586はRL（0段多条）が縦位に施文されている。587はやや内湾する口縁である。588はくの字状に屈曲する口縁である。589はやや直線上に立ち上がる口縁である。

C種（第109図590～第110図592）

口縁部に無文帯をもたない土器をまとめた。590は胴部上半に隆帯による渦巻をもつ。縄文は口縁部にLR（0段多条）が横位に施文されている。土器の内外面は赤色塗彩されている。591は条線が縦位に施文され、592は曲線状の条線も施文されている。

8類（第110図593～607）

器台・把手及び突起・耳飾り・土製円盤・蓋状土製品をまとめた。593～595は器台である。全体的によく磨かれている。孔に沿って太い沈線が施文され、その間に楕円等が描かれる。596～603は把手である。596は大型の把手である。沈線で区画された中に蕨状文が垂下し、左右に2対の孔をもつ。縄文はRLが充填されている。597～600は橋状把手である。598はLR（0段多条）が縦位に施文されている。599は接

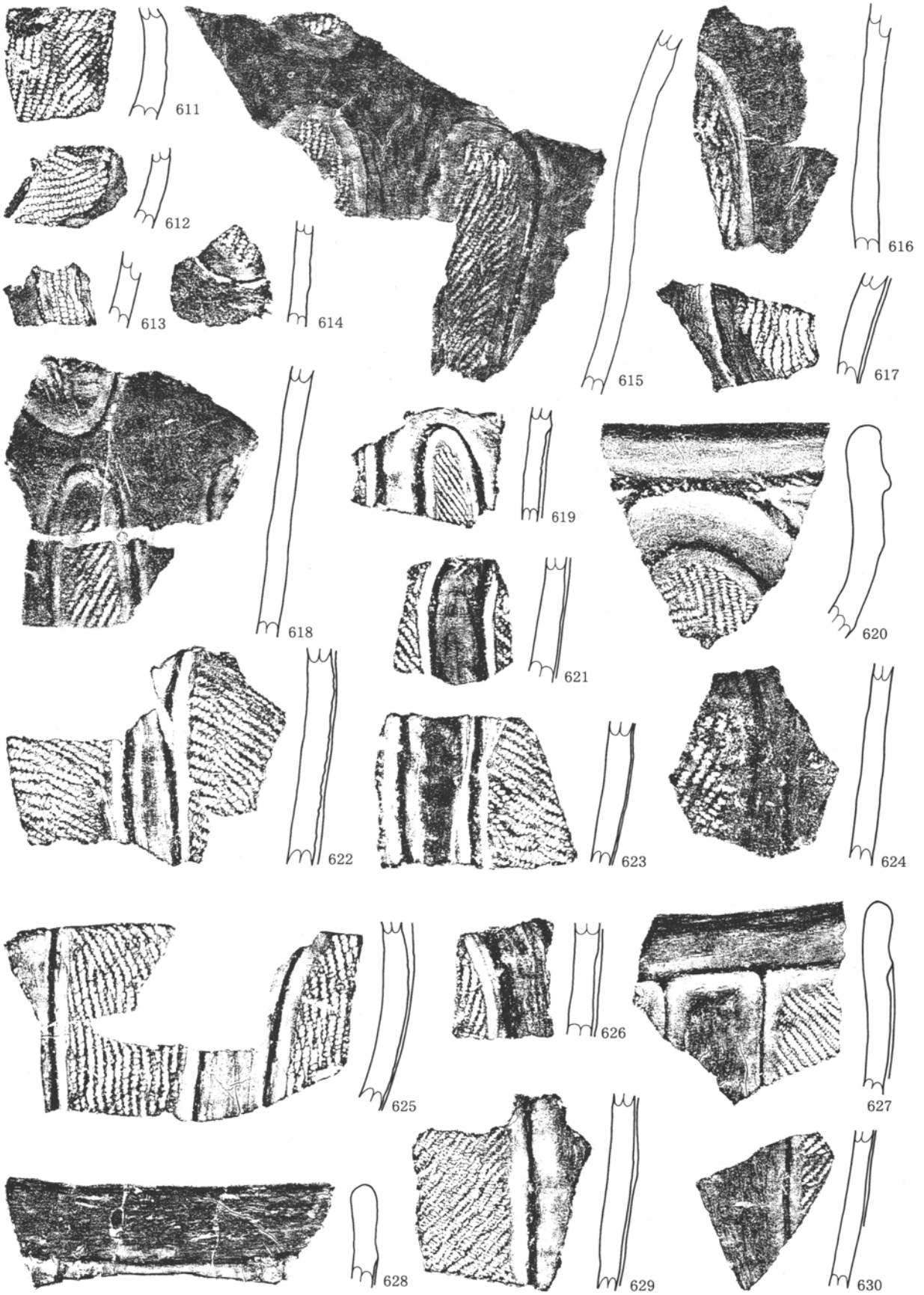
合部の表面にRLが横位、縦位に施文されている。600はRL（0段多条）が縦位に施文されている。601～603は突起である。601は上端部に沈線によるC字状の文様をもつ。602・603は円筒形の突起になる。602は沈線による区画をもち、RLが縦位に施文されている。603は沈線による∩字状の区画が施文されている。縄文はRLが縦位に施文されている。604は耳飾りである。円形の刺突により、中央部に撥状の文様を描く。605・606は土製円盤である。いずれの円盤も、側縁部が磨かれているもので、土器片を利用したものである。605の円盤の表面には懸垂文が見える。縄文はRLが縦位に施文されている。607は蓋状土製品である。円形で2対の孔が4個あけられている。器面は粗い。

第4群土器（第110図608～第116図744 PL55～57）

中期末から後期初頭の時期に位置づけられる土器をまとめた。第3群に似た文様構成が見られるが、この群の土器は胴部の括れが弱いものが多い。また、微隆帯による文様が目立つ。胴部に施文される文様の違いから、以下の1～4類に分類する。

1類（第110図608～第111図619）

胴部文様が上下分帯し、文様間が広くなる土器をまとめた。608～610・614～616・618・619はU字状の区画が向かい合う構成となる土器である。608～610は同一個体と思われる。区画内の縄文はLR（0段多条）が縦位に施文されている。614はRLが縦位に施文されている。615の区画内はRL（0段多条）が縦位、斜位に施文されている。616の区画内はRL（0段多条）が斜位に施文されている。618の区画内はRLが縦位に施文されている。619の区画内はLR（0段多条）が縦位に施文されている。611～613・617は胴部上半に楕円の区画をもつと思われる。611の縄文はRL（0段多条）が縦位、斜位に施文されている。612はLRが縦位、斜位に施文されている。613はRLが斜位に施文されている。617はRL（0段多条）が縦位、斜位に施文されている。



第111図 遺構外出土土器 (26)

第3章 検出された遺構と遺物

2類 (第111図620～643)

胴部文様が分帯せず、胴部上半の文様が垂下する土器をまとめた。胴部に施文される文様の違いからA種・B種に分類する。

A種 (第111図620～626)

胴部上半から2条1組の微隆帯による∩字状の区画が垂下する土器をまとめた。620は口縁部に無文帯をもつ。無文帯の区画をなす横位の微隆帯にRL(0段多条)が横位に施文されている。区画内はRL(0段多条)が斜位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。621～626は∩字状の区画が垂下する胴部である。621～623の縄文はLR(0段多条)が縦位に施文されている。624はRL(0段多条)が縦位に施文されている。625はRL(0段多条)が斜位に施文されている。626はRL(0段多条)が縦位に施文されている。

B種 (第111図627～第112図643)

胴部上半から懸垂文が垂下する土器をまとめた。627は口縁部に無文帯をもち、胴部上半から懸垂文が垂下する。区画内はRL(0段多条)が横位に施文されている。628は口縁部下に懸垂文の区画の一部が見える。629～643は微隆帯による懸垂文が垂下する胴部である。629・630の縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。631はLR(0段多条)が縦位に施文されている。632～635はRL(0段多条)が縦位に施文されている。636はLRが縦位に施文されている。637はRLが縦位に施文されている。638はLRが縦位に施文されている。639～642はRL(0段多条)が縦位に施文されている。643は微隆帯による区画は見られない。縄文はLR(0段多条)が縦位に施文されている。

3類 (第112図644・645)

胴部に渦巻状のJ字文を有する土器をまとめた。644・645は口縁部無文帯の下に2段の円形の刺突列をもつ。644は波状口縁となる。胴部上半に弧状の区画、胴部下半に2条1組の沈線による渦巻状のJ字文が施文されている。区画内及び一部は区画外にもLRが充填されている。

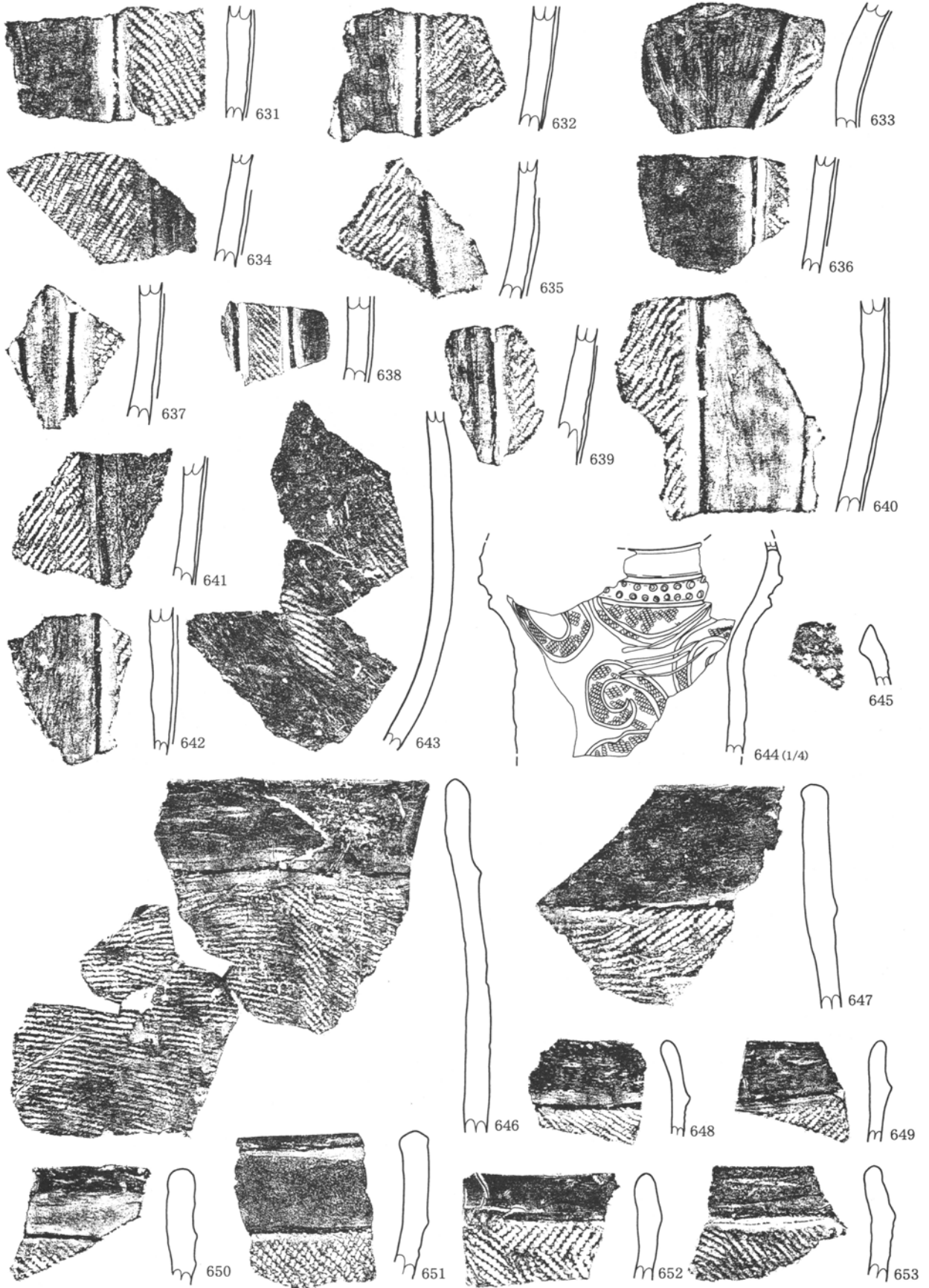
4類 (第112図646～744)

胴部に主文様をもたない土器をまとめた。口縁部無文帯の有無、地文の有無でA～C種に分類した。

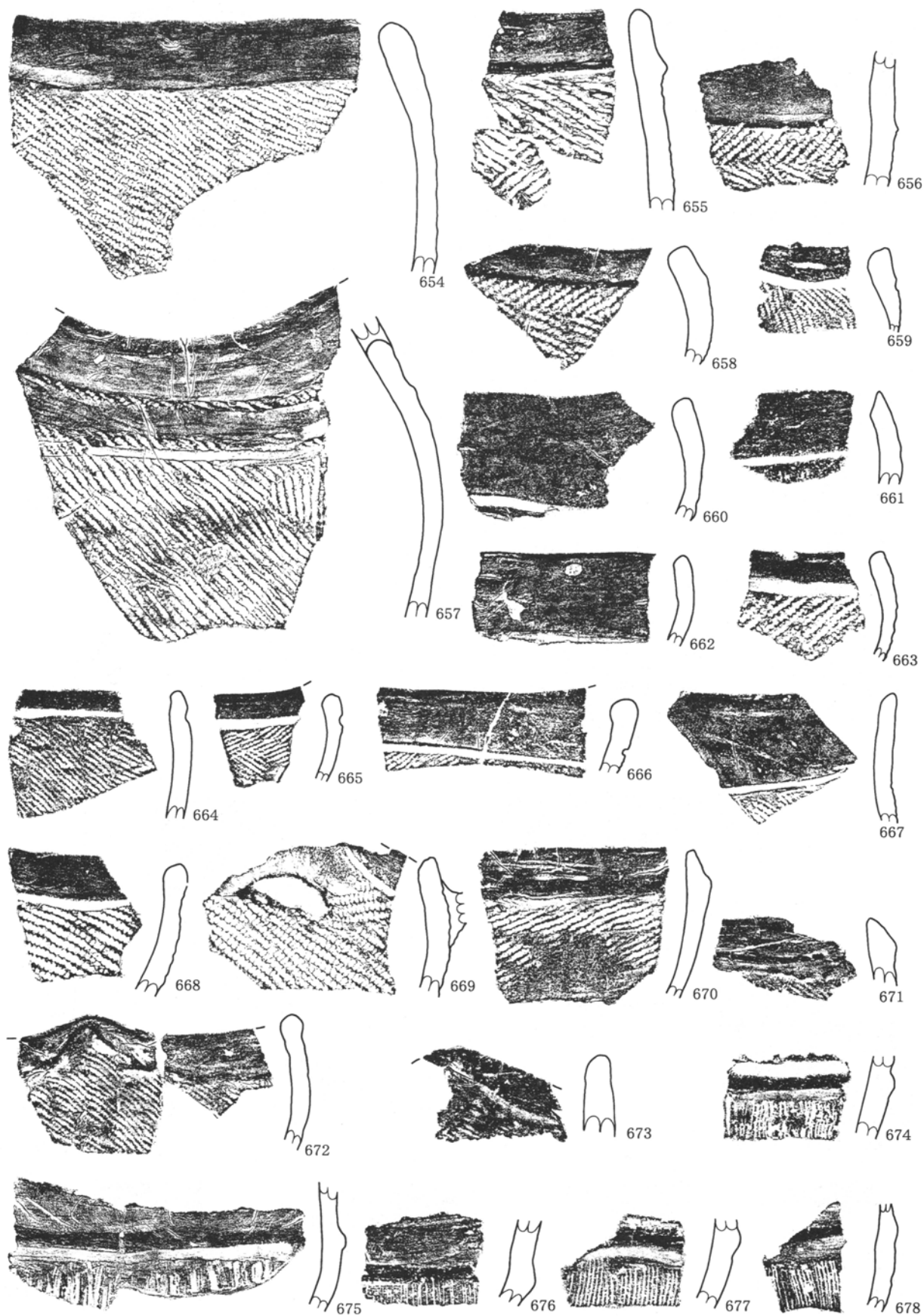
A種 (第112図646～第114図697)

口縁部に無文帯を有し、胴部に主文様をもたない土器をまとめた。646～658・670～673は口縁部無文帯が微隆帯で区画され、胴部に縄文が施文されている土器をまとめた。646はLRが充填されている。647はLRが充填されている。648はLR(0段多条)が縦位に施文されている。649はRL(0段多条)が縦位に施文されている。650はLR(0段多条)が縦位に施文されている。651はRL(0段多条)が横位に施文されている。652はLRが横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。653・654はLR(0段多条)が縦位に施文されている。655はLRが縦位、横位に施文されている。656はLRが横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。657は口縁部が大きく内湾する器形である。口縁部無文帯が2条の微隆帯により、区切られる。微隆帯には、RL(0段多条)が横位に施文されている。胴部はRL(0段多条)が横位、斜位に施文されている。658はLRが横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。670・671は口唇部の断面が三角になっている。670の縄文はLR(0段多条)が横位に施文されている。671はLR(0段多条)が縦位に施文されている。672・673は小突起に無文帯が集まる構成になっている。縄文はLR(0段多条)が縦位に施文されている。659～668は口縁部無文帯が沈線で区画されている土器をまとめた。659の胴部はRL(0段多条)が横位、斜位に施文されている。663はRL(0段多条)が縦位に施文されている。664はLR(0段多条)が縦位に施文されている。665・666は波状口縁となる。縄文はLRが横位、縦位に施文されている。666はLRが横位に施文されている。667はLRが縦位に施文されている。668はLRが縦位に施文されている。669は橋状把手をもつ。縄文はLRが縦位、斜位に施文されている。674～678は口縁部無文帯が微隆帯で区画され、胴部に条線が施文されている土器をまとめ

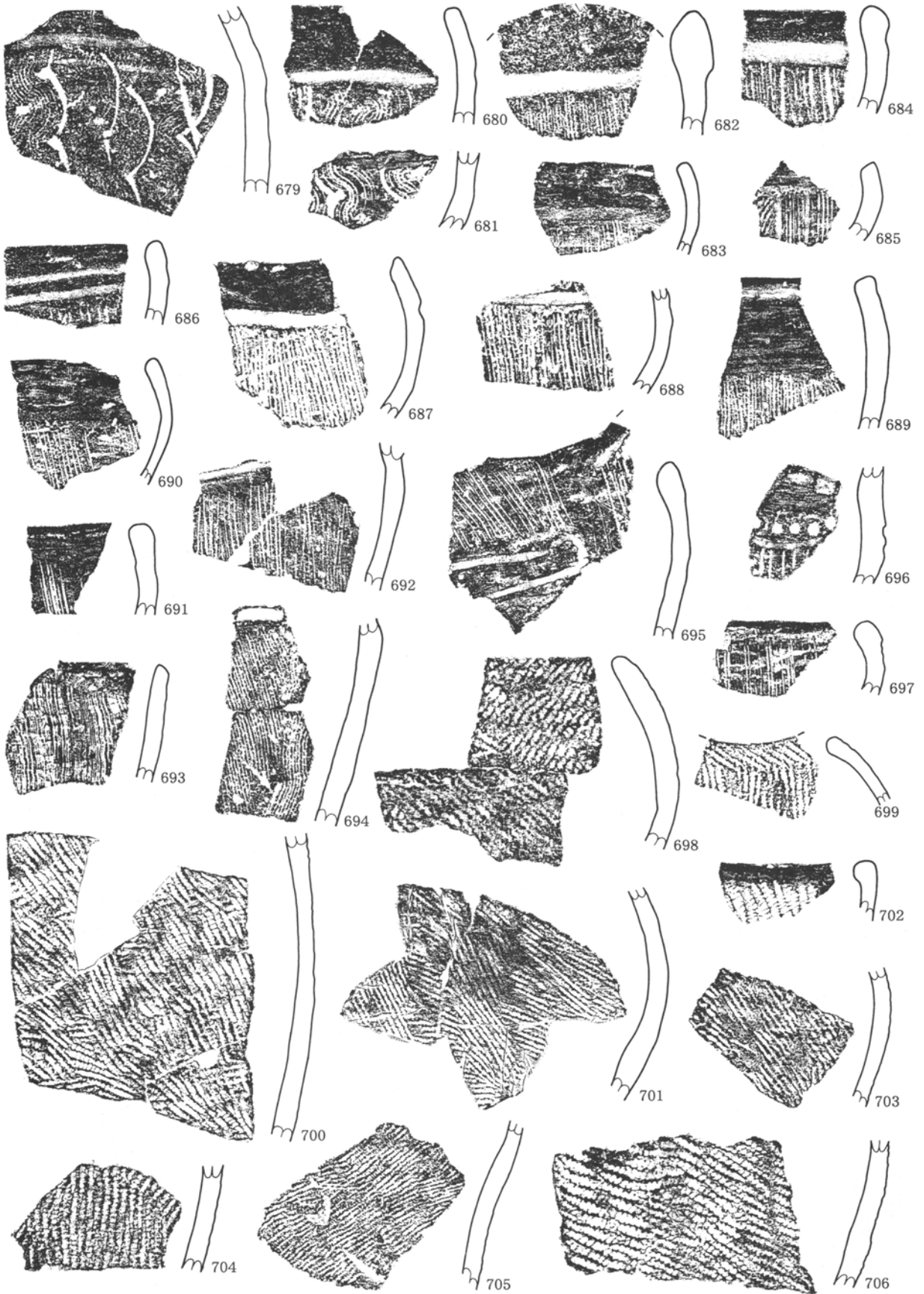
1. 縄文時代の遺構と遺物



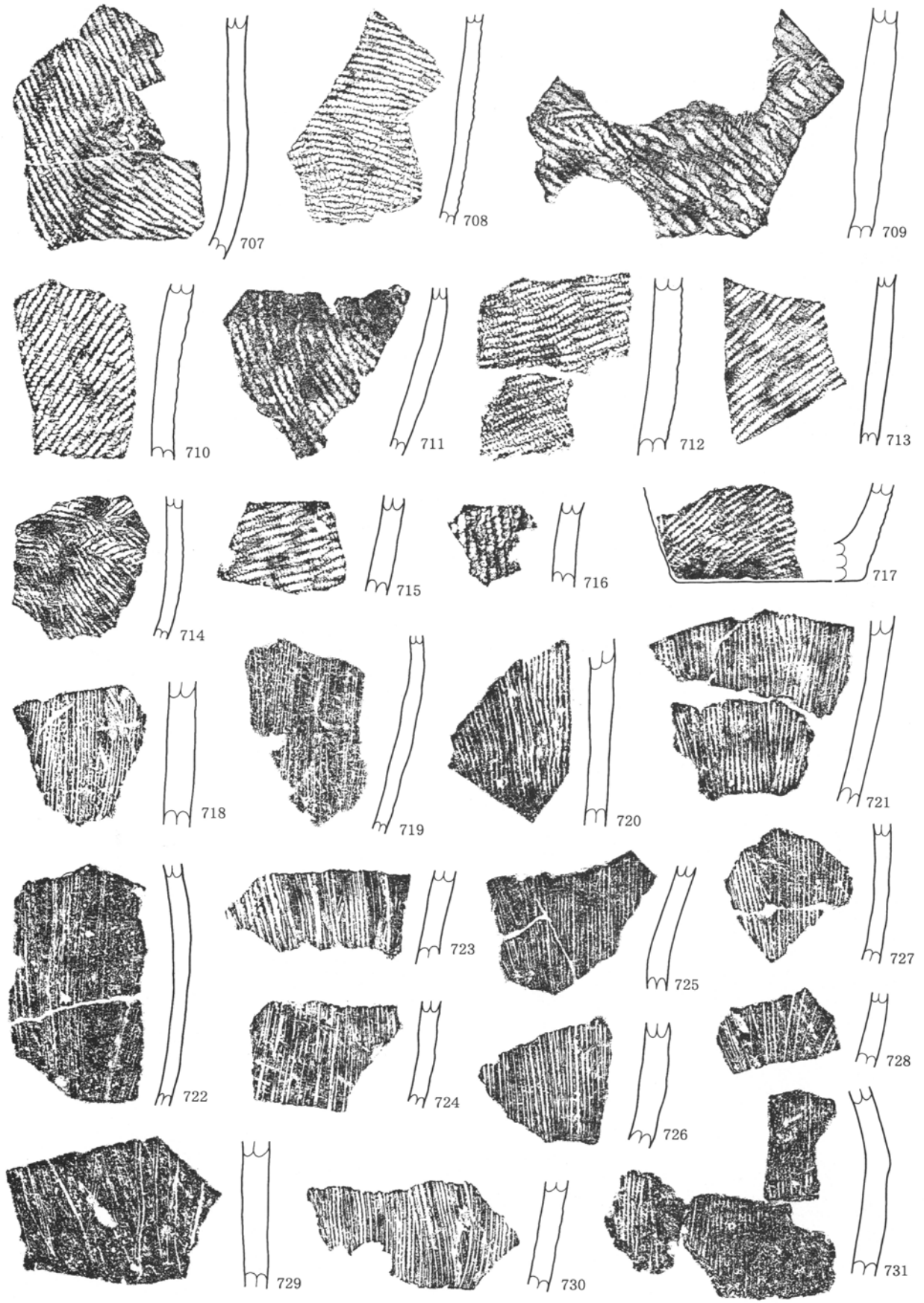
第112図 遺構外出土土器 (27)



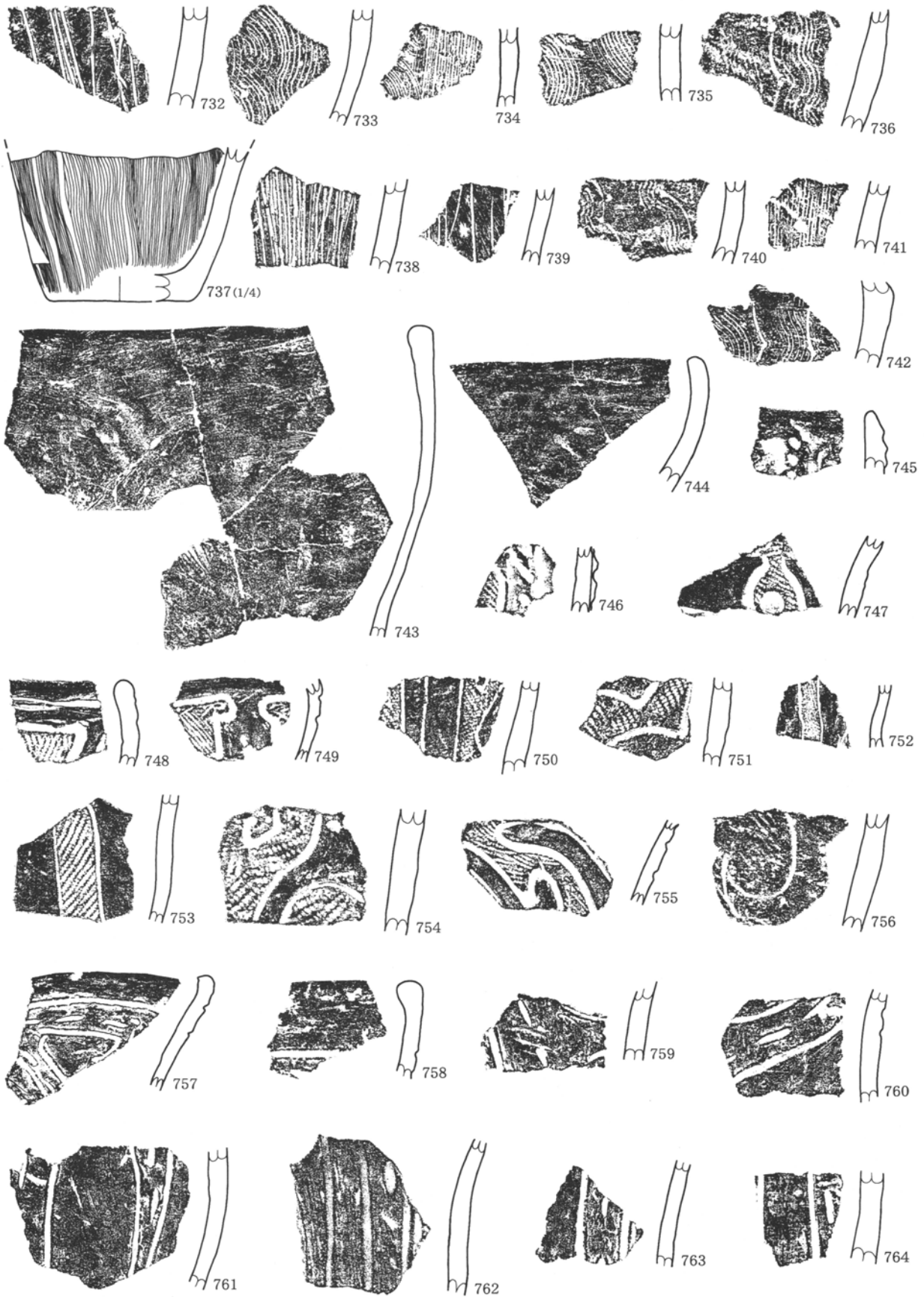
第113図 遺構外出土土器 (28)



第114図 遺構外出土土器 (29)



第115図 遺構外出土土器 (30)



第116図 遺構外出土土器 (31)

第3章 検出された遺構と遺物

た。いずれも縦位の条線が施文されている。675は太さの違う条線が施文されている。679～694・696・697は口縁部無文帯が沈線で区画され、胴部に条線が施文されている土器をまとめた。679～681の胴部はコンパス文が施文されている。682は波状口縁となる。685は縦位、斜位に条線が施文されている。686は口縁部に2条1組の沈線が施文されている。689～691は無文帯の区画をなす沈線が施文されていない。693・694の条線は流線状である。695は波状口縁となる。口縁部から条線が施文され、2条1組の沈線による区画をもつ。696は無文帯内に円形の刺突列をもつ。697は幅の狭い口縁部無文帯をもつ。

B種 (第114図698～第116図742)

全面に縄文、条線が施文されており、胴部に主文様をもたない土器をまとめた。698～717は縄文が施文されている土器である。698は口縁部より、縄文が施文されている。器形はやや丸みをもつ。縄文はLRが横位、縦位に施文されており、羽状縄文になっている。699は波状口縁となる。RL(0段多条)が横位、斜位に施文されている。700・701はLR(0段多条)が充填されている。702はRL(0段多条)が横位に施文されている。703はLR(0段多条)が縦位に施文されている。704はRLが縦位、斜位に施文されている。705はRL(0段多条)が縦位に施文されている。706はLRが縦位に施文されている。707はLR(0段多条)が縦位に施文されている。708はLRが斜位に施文されている。709はLR(0段多条)が縦位に施文されている。710はRL(0段多条)が縦位に施文されている。711はLRが縦位に施文されている。712はRLが斜位に施文されている。713はRL(0段多条)が縦位に施文されている。714はLRが縦位、横位に施文されている。715はRL(0段多条)が斜位に施文されている。716はRLが斜位に施文されている。717は胴部及び底部である。縄文はRL(0段多条)が縦位に施文されている。718～742は条線が施文されている土器である。733～735は条線が曲線状に施文されている。736・740・742はコンパス文が施文されている。737は胴部及び底部であ

る。

C種 (第116図743・744)

地文が施文されておらず、全面無文の土器をまとめた。743は括れが弱い器形になっている。744は胴部上半が丸みをもつ器形である。

第5群土器 (第116図745～第117図778 P L57)

称名寺式土器をまとめた。施文された文様の違いから以下の1～3類に分類する。

1類 (第116図745～756)

沈線で描かれた文様間を縄文で充填する土器をまとめた。745・746は鎖状の隆帯をもつ土器である。746の沈線による区画内は、LRが縦位に施文されている。747はJ字文が施文されている。区画内はLRが縦位に施文されている。748の沈線による区画内はRLが充填されている。749はスペード文が描かれる。区画内はRLが充填されている。750は直線的で懸垂文のような区画が描かれている。区画内はLRが充填されている。751はスペード文が描かれる。区画内はLR(0段多条)が充填されている。752はLRが充填されている。753はRL(0段多条)が縦位に施文されている。754～756は沈線により、J字文が施文されている。754はRLが充填されている。755・756はLRが充填されている。

2類 (第116図757～764)

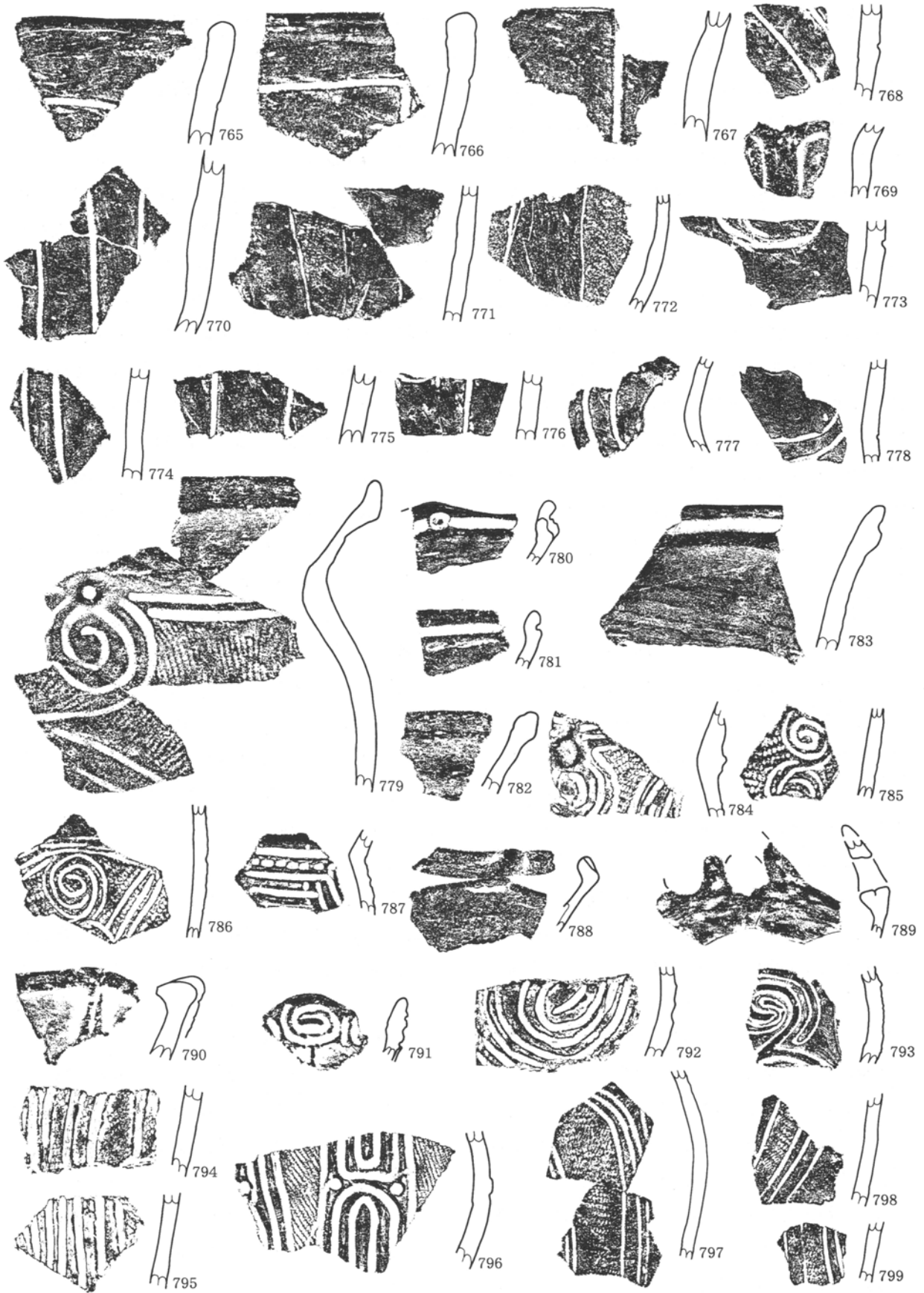
沈線で描かれた文様間を刺突文で充填する土器をまとめた。充填される刺突文は短い沈線のような形状のものが目立つ。757はスペード文が描かれる。759～761は沈線による曲線の区画が描かれる。762～764は直線的で懸垂文のような区画となる。

3類 (第117図765～778)

沈線のみで文様を描く土器をまとめた。765～767は口縁部に沈線による直線的な区画が描かれている。770～772・774～776は直線的な区画が描かれる胴部である。768・773・777・778はJ字文と思われる曲線による区画をもつ胴部である。

第6群土器 (第117図779～第118図813 P L58)

堀之内式土器をまとめた。施文された文様の違いから以下の1～3類に分類する。



第117図 遺構外出土土器 (32)

第3章 検出された遺構と遺物

1類 (第117図779～799)

堀之内1式土器をまとめた。779・782・784～786は頸部がくの字状に屈曲し胴部が張る器形の土器である。胴部は縄文地文に沈線により、渦巻が施文されている。779・784は渦巻の上端に孔をもつ。780・781・783は口唇部に円形の刺突と口縁に沿った沈線が施されている。787は沈線による渦巻が施されている。沈線間に刺突をもつ。788は小突起をもつ。789は突起に2つの孔をもつ波状口縁の土器である。790は刻みの入った隆帯が垂下する口縁である。791～793は沈線による渦巻が施されている胴部である。794～799は3条の沈線による∩字状の区画等が施された胴部である。区画内に縄文が充填されている。794の縄文はRLが縦位に施文されている。796は∩字状の区画が向かい合い、2対の刺突が施文されている。区画外にはLRが縦位に施文されている。797～799はLRが充填されている。

2類 (第118図800～809・812・813)

堀之内2式土器をまとめた。800～807は沈線による幾何学文の文様構成をもつ土器である。800～805の縄文はLRが充填されている。806・807の縄文はRLが充填されている。808・809は口縁部に1条の刺突のある隆帯と8の字状の貼付文が施されている土器である。808はLRが充填されている。812は底部より反り気味に立ち上がるコップ形の深鉢形土器である。口縁部に1条の刺突のある隆帯と8の字状貼付文が施されている。胴部上半の文様は楕円も含めた沈線による幾何学文で構成されている。区画内はLRが充填されている。813は吊手土器である。口縁部は欠損している。頸部が長く筒状になり、胴部が算盤珠のような器形をもつ。胴部は4分割され、2対の孔と2対の棒状の貼付文をもつ。棒状の貼付文内は上下2個の刺突と縦位の沈線が施されている。胴部の文様は横位の楕円区画で構成され、区画内は縄文が施文されている。頸部の内面は片側のみ煤けている。

3類 (第118図810・811)

石神類型の土器をまとめた。いずれの土器も小突

起をもつ器形である。810は外面の文様は見られず、内面に円形の貼付文が施されている。811も外面の文様は見られず、内面に多条の細線による文様が施されている。

第7群土器 (第118図814～817 P L 58)

加曾利B式土器をまとめた。814は胴部が算盤珠状の器形の土器である。口縁部に5単位の小突起をもつ。小突起の間は縄文が充填されている。その下に横位の沈線で区画された文様帯をもつ。文様帯内は、弧状の沈線が組み合い、羽状の文様となる。縄文はLRが充填されている。この文様帯の下にも横位に縄文が施文され、円形の貼付文をもつ。815は丸みを帯びた器形の土器である。口縁部はよく磨かれた無文部をもつ。また、刺突のある隆帯及び円形の貼付文が口縁部に施されている。816は器面が良く磨かれ、縦位の区画内に刺突列をもつ土器である。817は外面、内面ともに複段化した横帯文が施文されている。横帯文内は縄文が充填されている。

第8群土器 (第118図818 P L 58)

後期の土器であるが、群別が難しい土器をまとめた。818は外面の無文部はよく磨かれ、沈線による横位の区画をもつ。区画内はLRが横位に施文されている。内面もよく磨かれ、やや太めな沈線により楕円区画及び渦巻を描く。

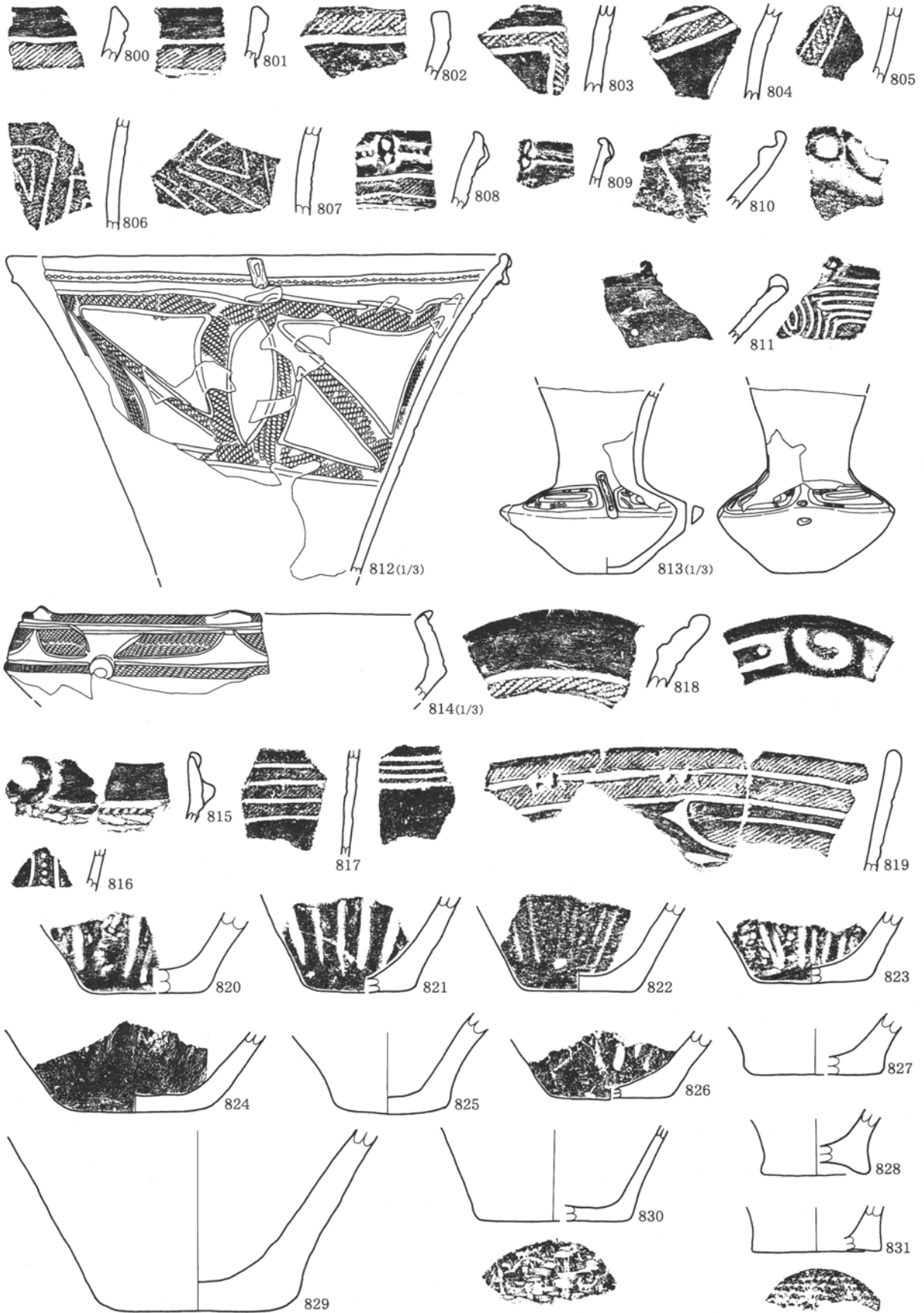
第9群土器 (第118図819 P L 58)

安行式土器である。819は口縁部に数段の帯縄文、頸部に三叉文をもつ平口縁の土器である。帯縄文を区画する沈線に2対の三角形の刺突が施文されている。縄文はLRが充填されている。

第10群土器 (第118図820～831)

胴部及び底部を一括した。820～824・826は懸垂文が垂下しており、第3群土器に属する可能性が高い。830・831は底部に網代痕を残す土器である。830の底部に残る網代痕は経条と緯条の太さが多少違うが、2つ超え2つ潜り1つ送りの綾編みと思われる。831の底部に残る網代痕は交互に規則的に編んだものと思われる。

1. 縄文時代の遺構と遺物



第118図 遺構外出土器 (33)

第3章 検出された遺構と遺物

石器 (第119～第128図 P L 61～65)

出土した石器は、遺物収納箱で20箱余りを数える。これらのうち、定型石器として認められているものは340点を数える。本書に掲載した石器はその一部であり、剥片類については掲載していない。出土した石器の多くは、台地の西及び北緩斜面の黒褐色土を主体とする縄文時代の包含層から出土したものである。また、古墳時代以降の遺構から出土した縄文時代の石器は本項で扱っている。石器の器種でみると、打製石斧が176点と最も多く、次にスクレイパーが84点、石鏃が39点と続く。

石鏃 (第119図1～39 P L 61)

出土した石鏃は39点である。使用される石材には、黒色安山岩が26点と最も多く、チャートが7点、黒色頁岩が5点、黒曜石が1点みられる。また、無茎のものが主体を占め、有茎石鏃は39点中5点である。また、これらの石鏃の中には、欠損しているものも認められ、製作途中のものと考えられるものもふくまれている。

石錐 (第120図40～47 P L 61)

出土した石錐は8点である。使用される石材には、黒色頁岩が7点と、チャートが1点みられる。素材の剥片形状をあまり変えずに、先端部加工を施すものもある。

スクレイパー (第120図48～第122図96 P L 61・62)

出土したスクレイパーは84点を数えるが、ここに掲載したものは比較的残存状態のよい49点である。使用される石材には、黒色頁岩が31点、黒色安山岩が11点、チャートが3点、珪質頁岩が3点、ホルンフェルスが1点みられる。使用される素材には縦長剥片ないしは横長剥片が用いられ、側縁部に片面あるいは両面から比較的平坦な剥離を連続的に施し、鋭利な刃部を作り出している。

打製石斧 (第122図97～第126図181 P L 62～64)

出土した打製石斧は176点を数えるが、ここに掲載したものは比較的残存状態のよい85点である。使用される石材には、黒色頁岩が44点、細粒輝石安山岩

が26点、珪質頁岩6点、ホルンフェルス3点、流紋岩3点、変質安山岩2点、頁岩1点がみられる。これら打製石斧の形状には、短冊形・撥形・分銅形等のものがあるが、石材による形状差は認められない。また、刃部に摩耗痕を明瞭に残すものが多く認められる。

磨製石斧 (第126図182 P L 64)

出土した磨製石斧は1点である。その石材は変はんれい岩である。敲打痕を残しながらも研磨されている。刃部に摩耗痕が目立つ。

敲石 (第126図183～185 P L 65)

ここで敲石としたものは端部に敲打痕を残すもので3点である。使用された石材は、粗粒輝石安山岩が2点、黒色頁岩が1点である。185は全体的によく磨かれている。

凹石 (第126図186～189 P L 65)

出土した凹石は4点である。使用された石材は、すべて粗粒輝石安山岩である。189はよく磨かれている。

磨石 (第126図190～第127図201 P L 65)

出土した磨石は12点である。使用された石材は、粗粒輝石安山岩が11点、石英閃緑岩が1点である。断面が球状、楕円形のものが目立ち、丁寧に磨かれている。中には凹状の孔を有するものもある。

多孔石 (第127図202～206 P L 65)

出土した多孔石は5点である。使用された石材は、すべて粗粒輝石安山岩である。

台石 (第127図207～第128図212 P L 65)

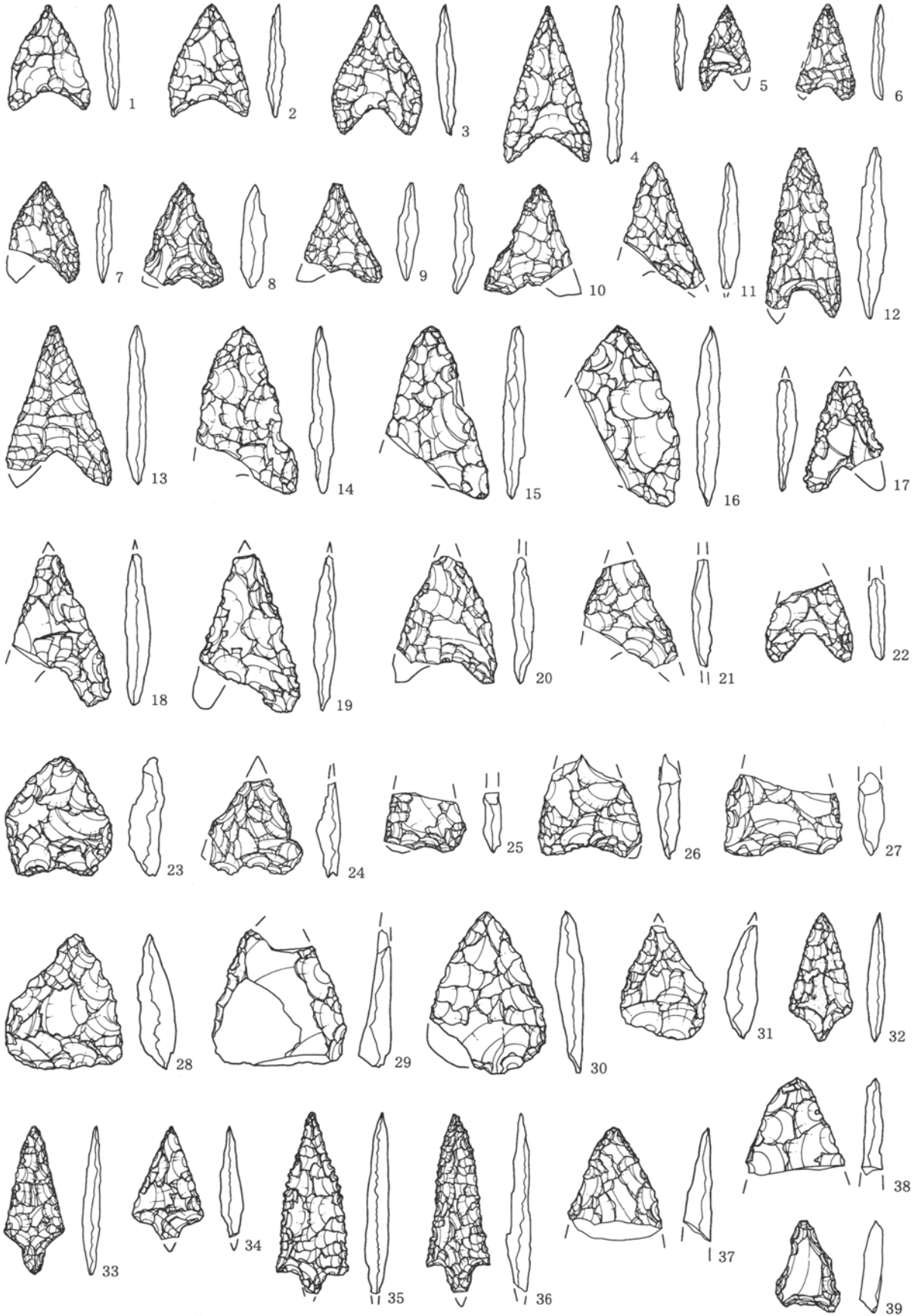
出土した台石は6点である。使用された石材は粗粒輝石安山岩が5点、変質安山岩が1点である。表面がよく磨かれたものが目立つ。

石皿 (第128図213 P L 65)

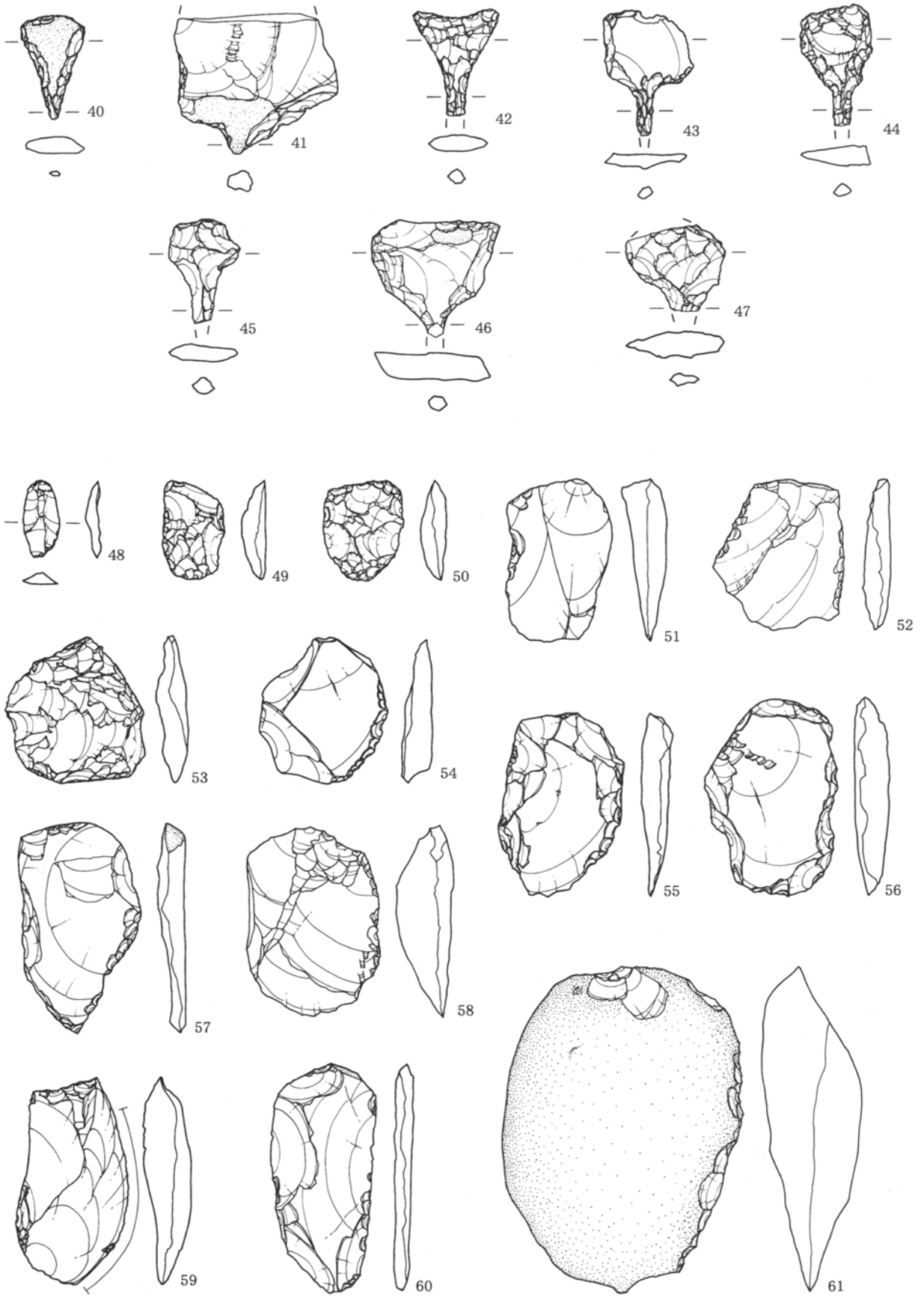
出土した石皿は1点である。使用された石材は石英閃緑岩である。

垂飾品 (第128図214 P L 65)

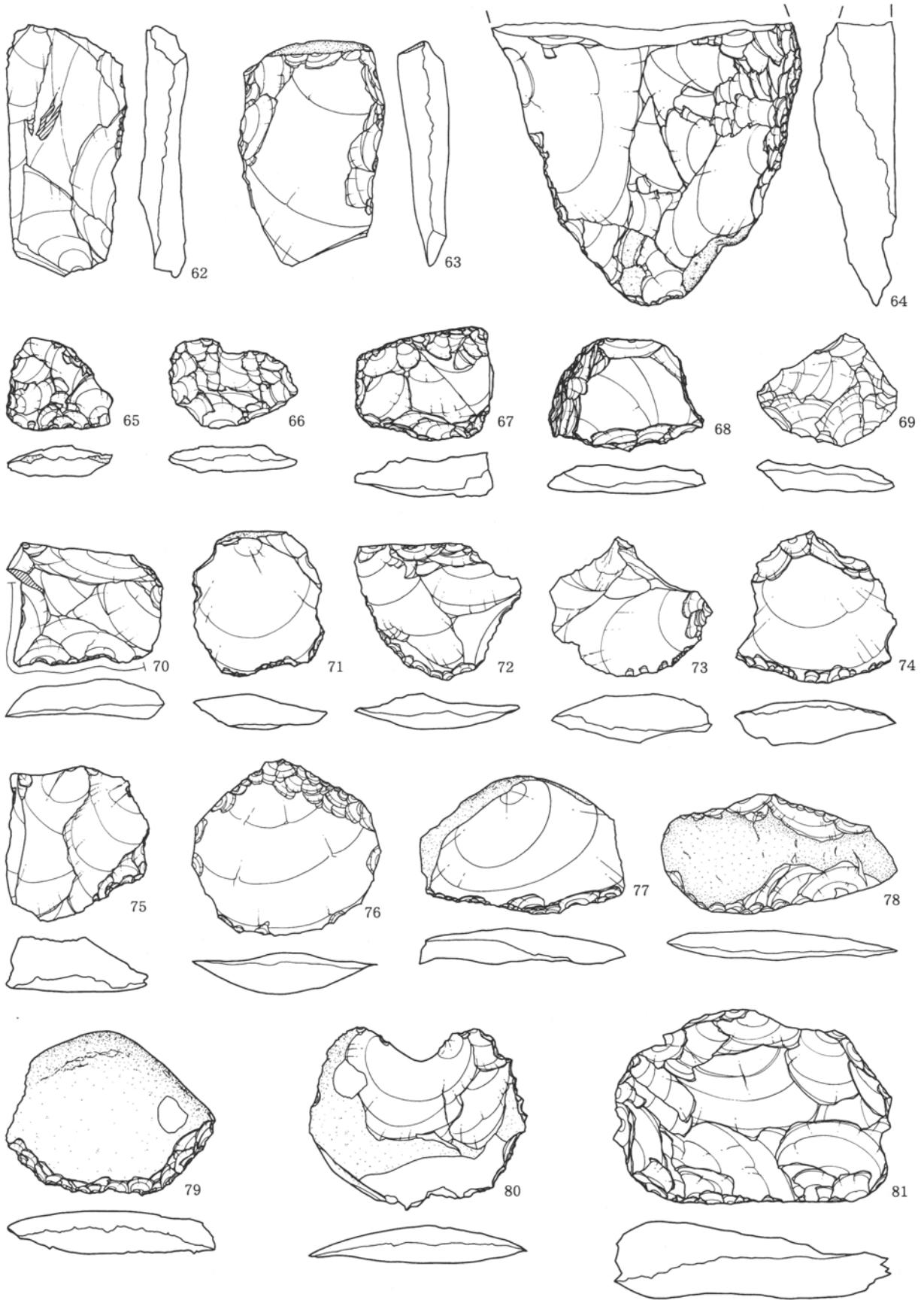
出土した垂飾品は1点だけである。使用された石材は砂岩質準片岩である。縦長の形状で全体的にかなり薄い。薄く剥離した痕跡が残る。中程に孔が穿たれている。



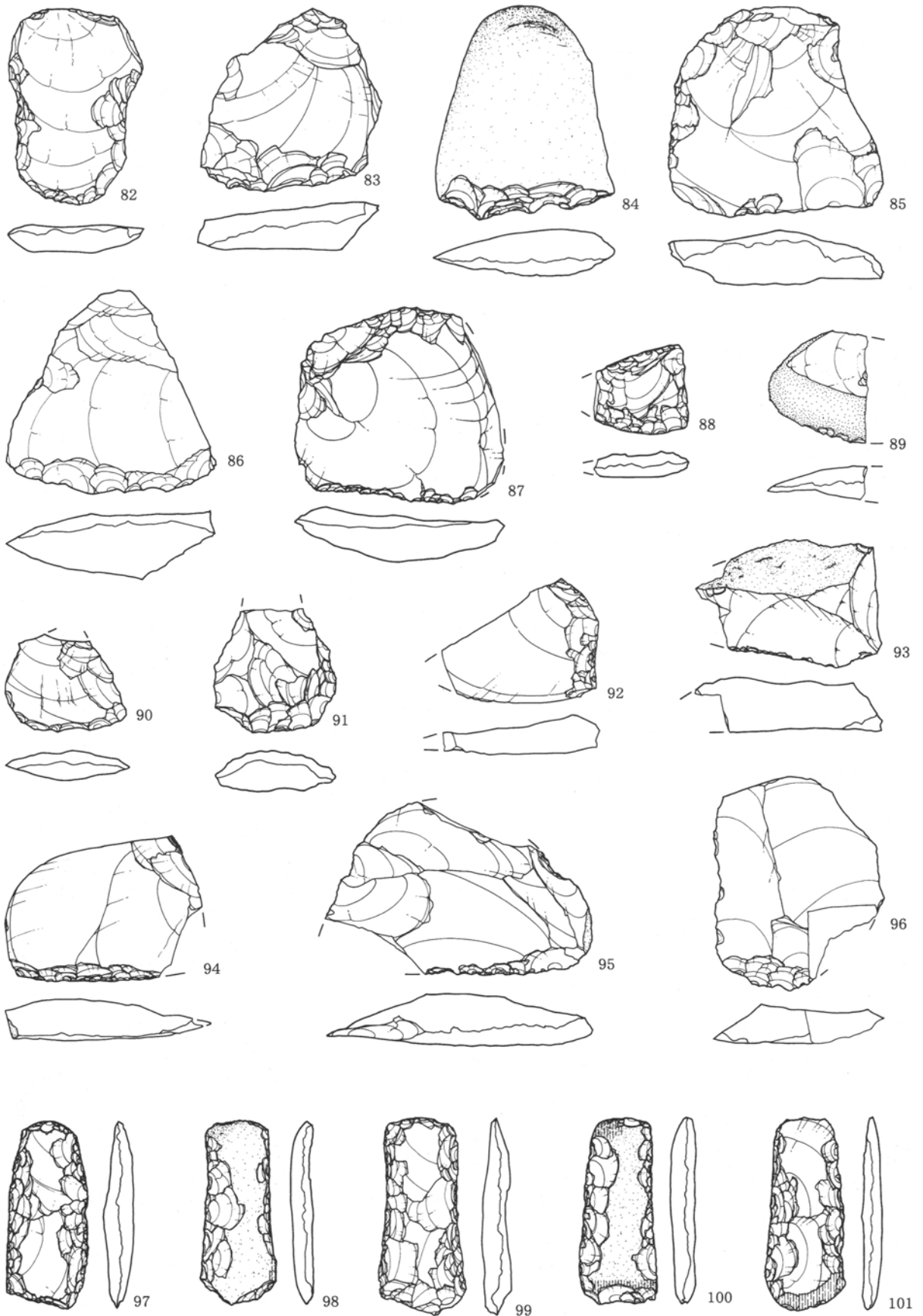
第119図 遺構外出土石器 (1)



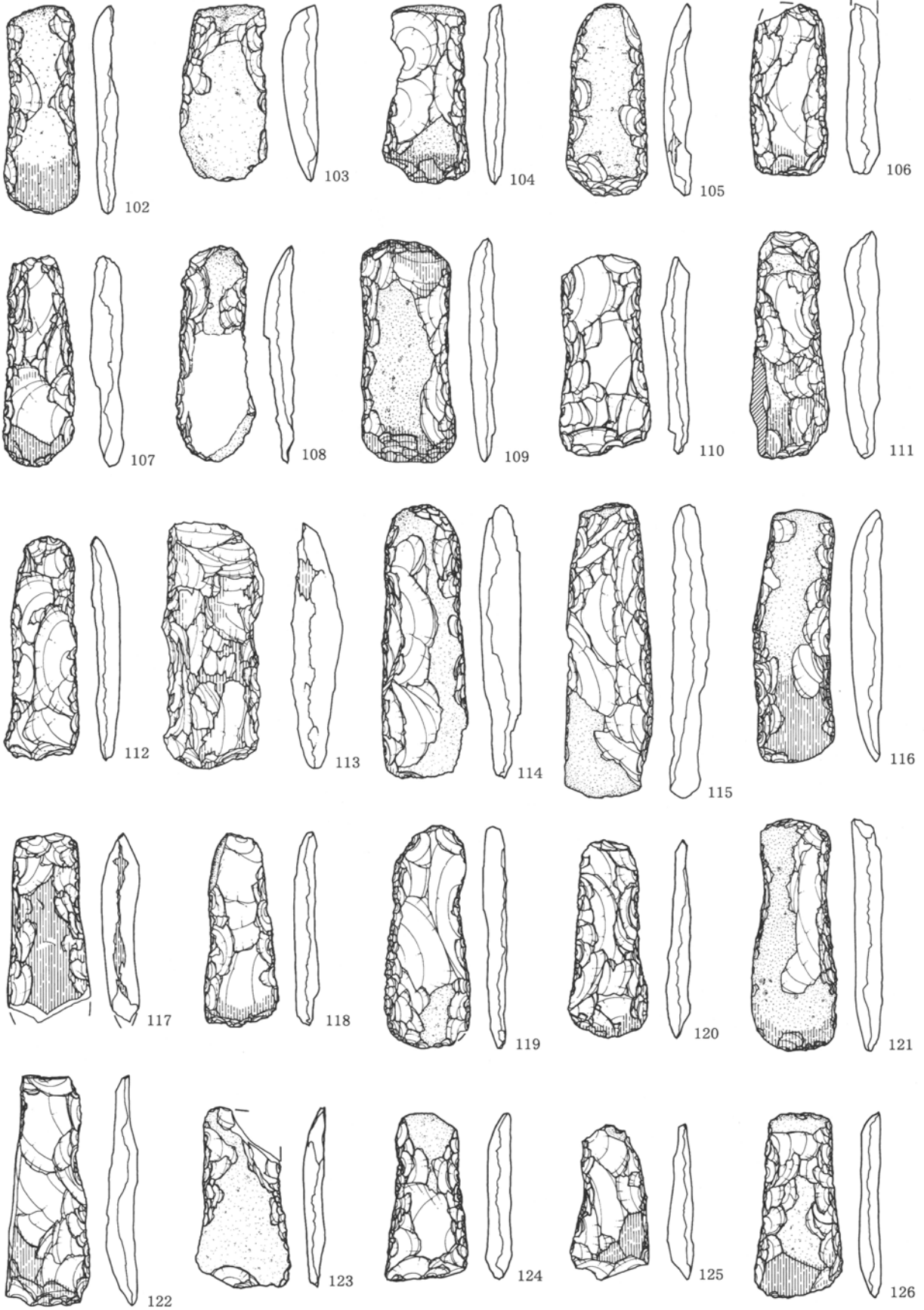
第120図 遺構外出土石器 (2)



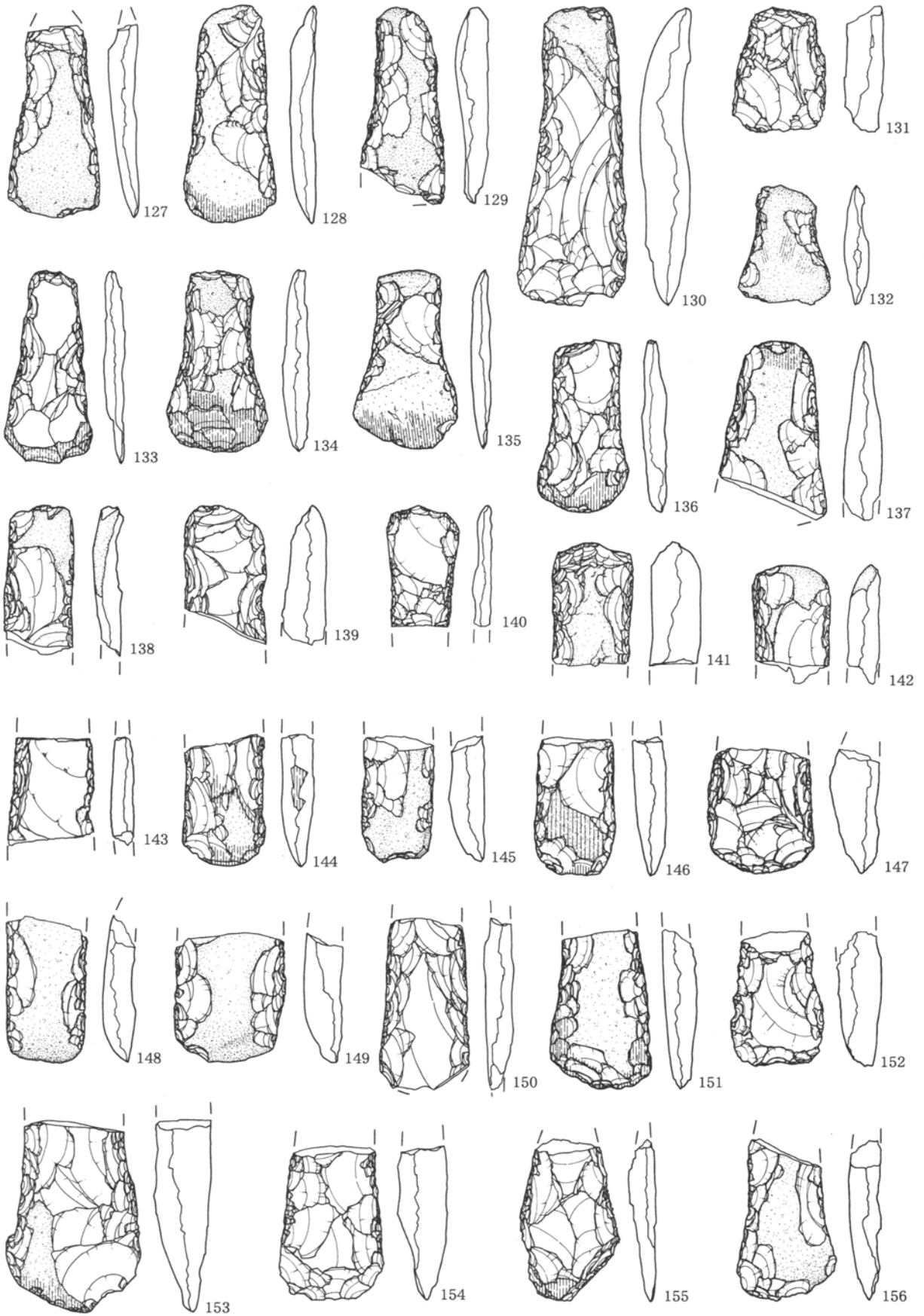
第121図 遺構外出土石器 (3)



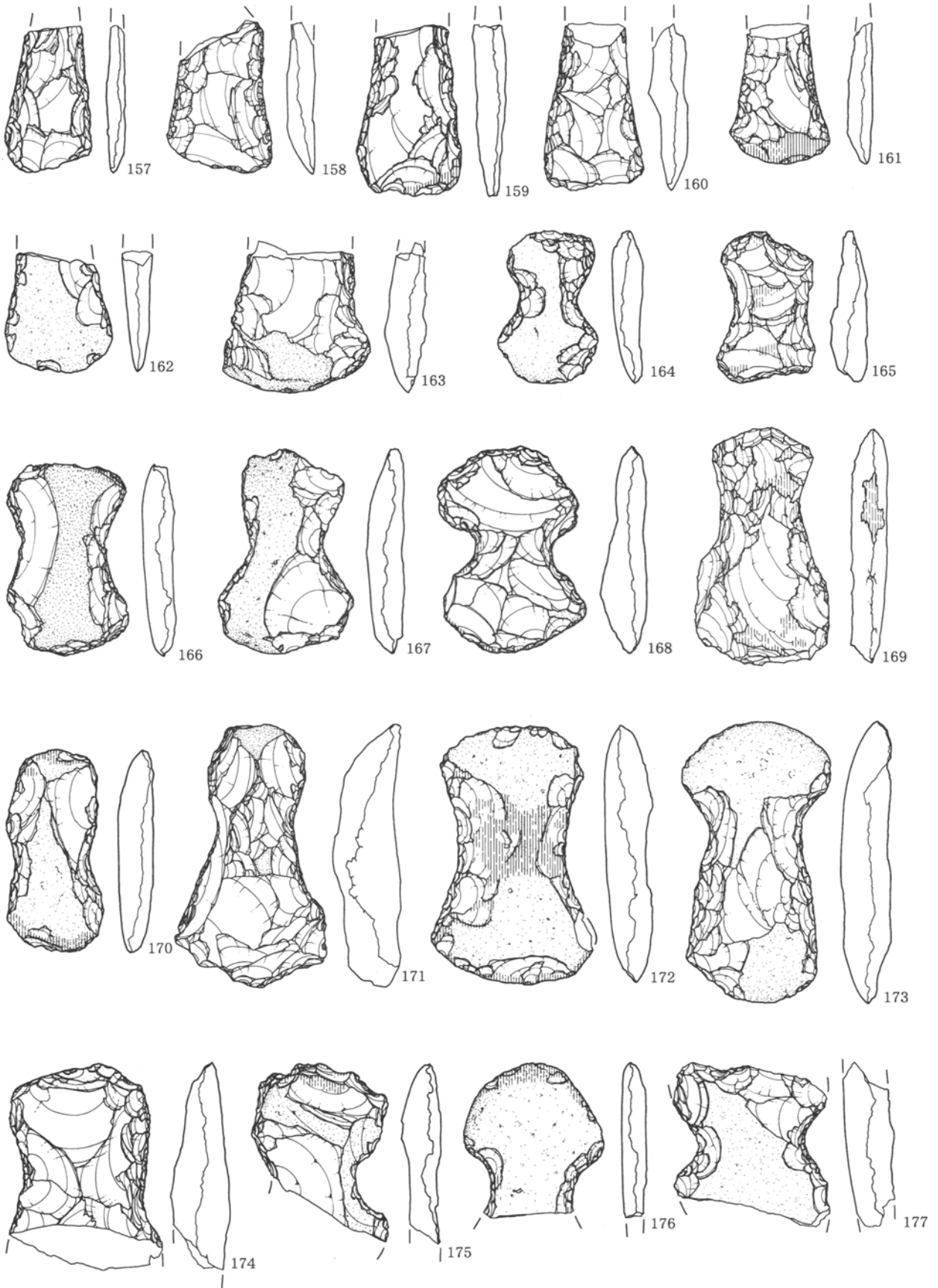
第122図 遺構外出土石器 (4)



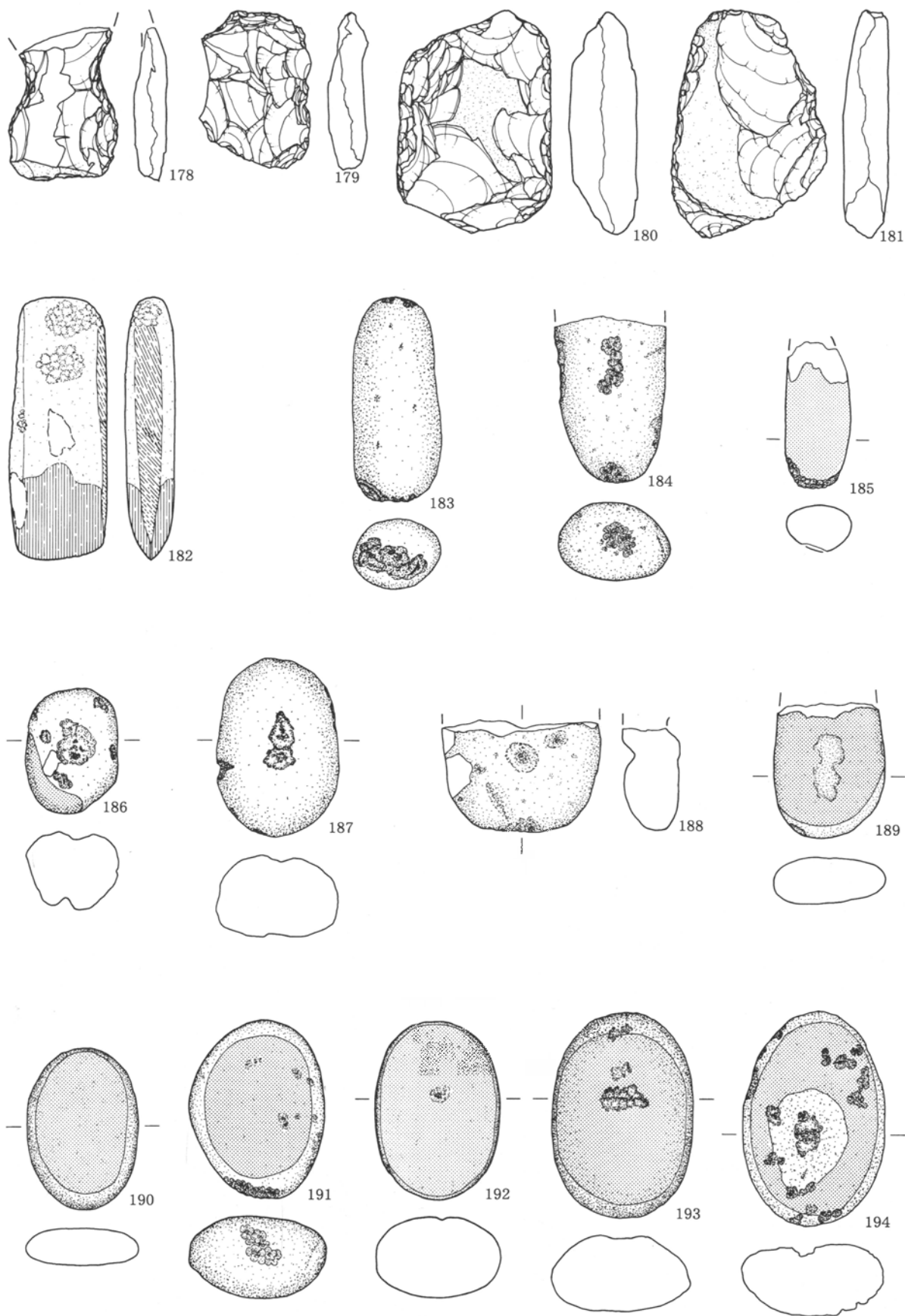
第123図 遺構外出土石器 (5)



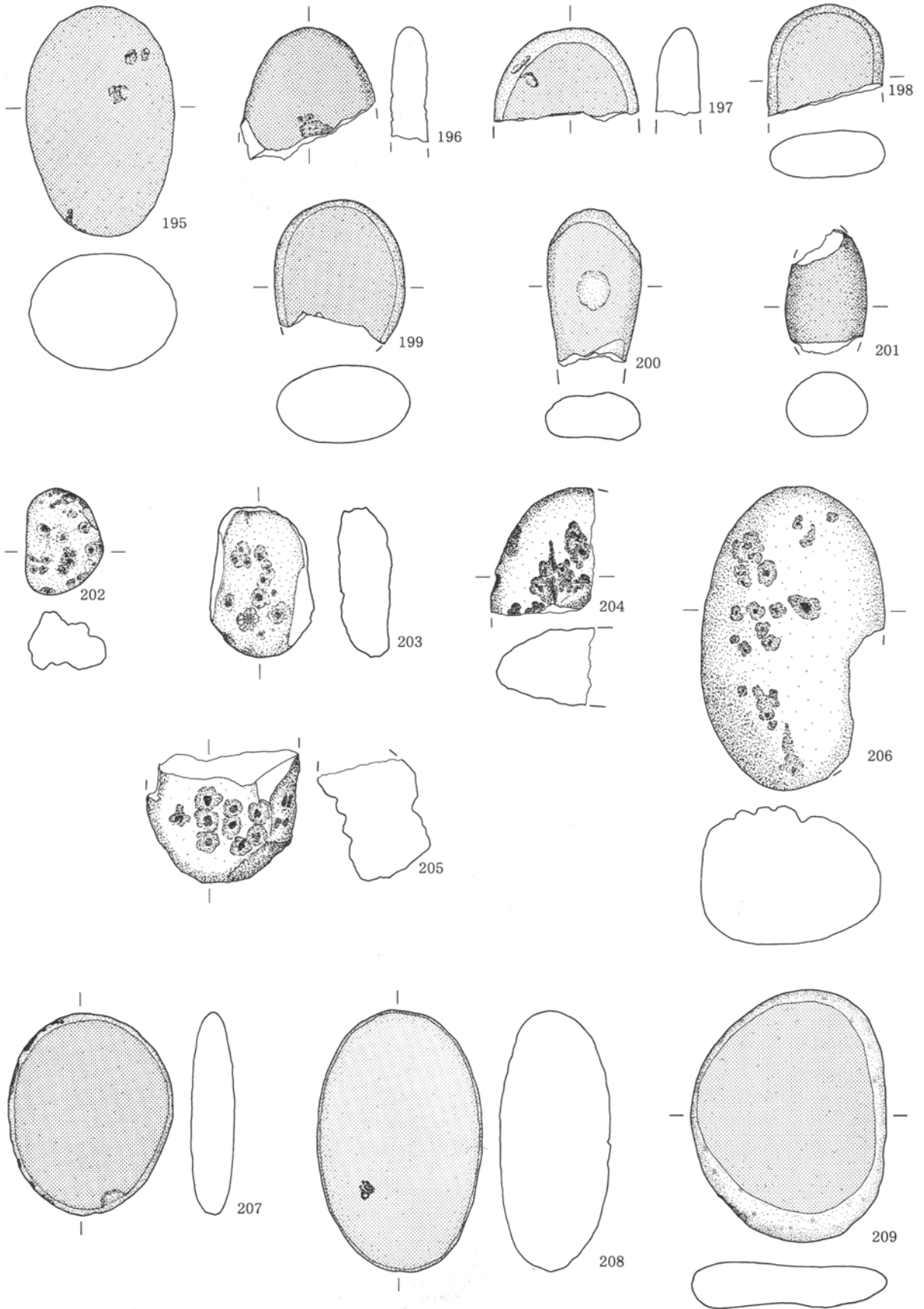
第124図 遺構外出土石器 (6)



第125図 遺構外出土石器 (7)

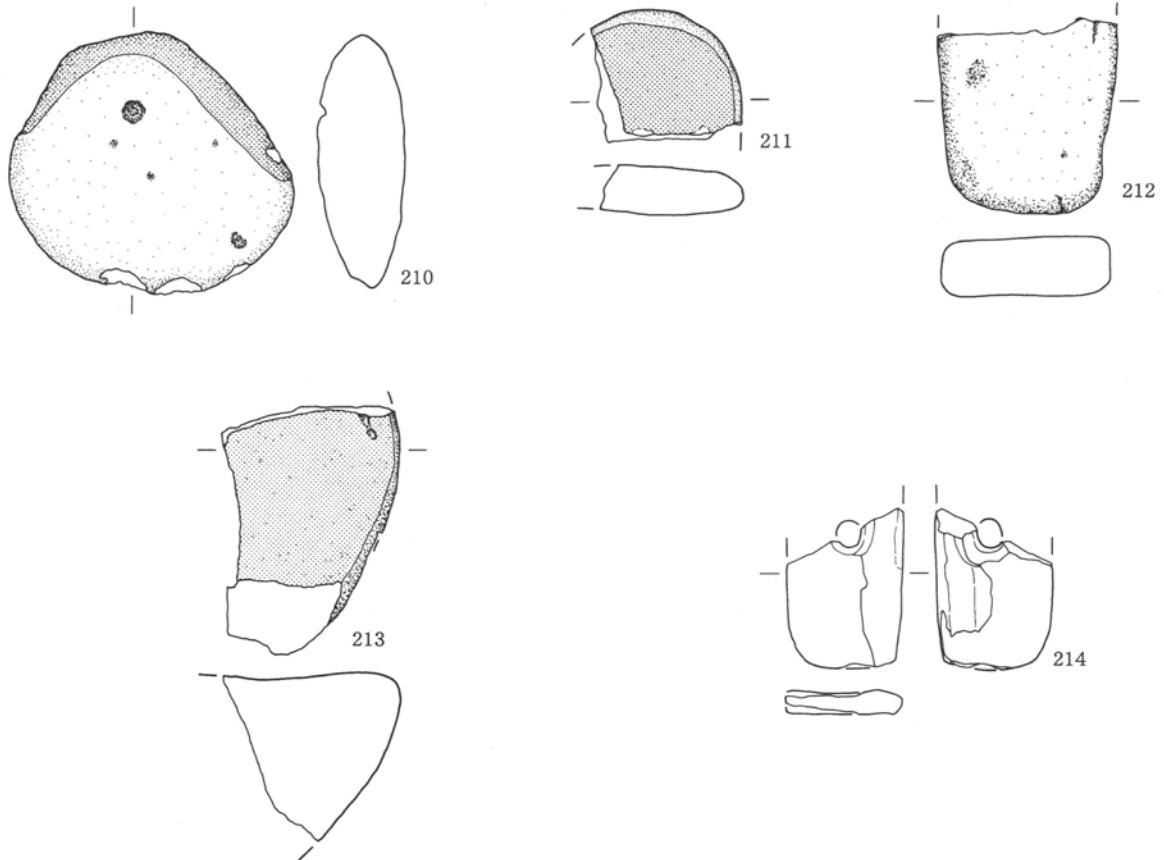


第126図 遺構外出土石器 (8)



第127図 遺構外出土石器 (9)

第3章 検出された遺構と遺物



第128図 遺構外出土石器 (10)

遺構外出土石器計測表 (石鏃)

No	石 材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
1	黒色安山岩	2.5	1.8	0.4	1.42
2	〃	2.85	1.95	0.4	1.62
3	〃	2.3	1.85	0.35	1.17
4	〃	3.45	1.95	0.4	1.56
5	黒曜石	1.8	(1.1)	0.3	(0.34)
6	チャート	2.0	(1.25)	0.25	(0.59)
7	黒色安山岩	2.2	(1.55)	0.3	(0.85)
8	〃	2.25	(1.7)	0.55	(1.70)
9	〃	2.15	(1.7)	0.5	(0.98)
10	チャート	2.5	(1.9)	0.4	(1.16)
11	黒色安山岩	(2.75)	(1.75)	0.45	(1.46)
12	黒色頁岩	3.75	(1.65)	0.65	(2.70)
13	チャート	3.5	(2.3)	0.4	(2.05)
14	黒色安山岩	3.4	(2.25)	0.5	(2.82)
15	〃	3.8	(2.25)	0.5	(3.05)
16	〃	3.9	(2.3)	0.5	(3.93)
17	チャート	(2.45)	(1.75)	0.45	(1.27)
18	黒色安山岩	(3.3)	(2.15)	0.55	(2.32)
19	〃	(3.4)	(2.2)	0.5	(2.59)
20	〃	(2.8)	(2.2)	0.5	(2.12)
21	〃	(2.2)	(2.15)	0.35	(1.71)
22	〃	(1.8)	1.9	0.4	(1.05)
23	〃	2.6	2.3	0.8	4.21
24	〃	(2.1)	(2.1)	0.5	(2.11)
25	〃	(1.3)	(1.8)	0.4	(0.95)
26	チャート	(2.3)	(2.3)	0.5	(2.25)
27	黒色安山岩	(1.8)	2.6	0.55	(2.76)
28	〃	3.0	2.6	0.85	5.96

No	石 材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
29	黒色頁岩	(3.0)	2.9	0.7	(4.79)
30	黒色安山岩	3.5	(2.5)	0.6	(4.52)
31	チャート	(2.5)	1.9	0.75	(3.0)
32	黒色安山岩	2.8	1.4	0.4	1.00
33	黒色頁岩	3.3	1.4	0.4	1.06
34	チャート	(2.5)	1.6	0.5	(1.37)
35	黒色頁岩	(4.0)	1.6	0.55	(2.79)
36	〃	(3.9)	1.4	0.55	(1.74)
37	黒色安山岩	(2.1)	(2.05)	(0.6)	(2.46)
38	〃	(2.1)	(2.1)	(0.5)	(1.66)
39	〃	2.0	1.4	0.5	1.24

遺構外出土石器計測表 (石鏃)

No	石 材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
40	黒色頁岩	3.2	2.2	0.7	4.82
41	〃	4.9	5.8	1.5	52.20
42	〃	(3.75)	3.05	0.6	(4.77)
43	〃	(4.45)	3.2	0.55	(7.15)
44	〃	(4.25)	2.55	0.75	(7.95)
45	〃	(3.7)	2.5	0.7	(5.25)
46	〃	(4.3)	4.5	0.9	(19.69)
47	チャート	(3.1)	3.5	1.0	(10.88)

遺構外出土石器計測表 (スクレイパー)

No	石 材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg
48	チャート	2.7	1.3	0.5	1.4
49	黒色安山岩	3.5	2.2	0.9	6.4

1. 縄文時代の遺構と遺物

No	石 材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さ g
50	黒色安山岩	3.6	2.9	0.9	9.9
51	黒色頁岩	5.7	3.8	1.6	25.7
52	〃	5.3	4.7	1.0	22.9
53	黒色安山岩	5.1	5.0	1.1	26.4
54	黒色頁岩	5.2	4.6	1.1	21.5
55	黒色安山岩	6.5	4.5	1.1	33.1
56	黒色頁岩	6.9	4.7	1.3	47.6
57	〃	7.4	4.4	1.0	37.2
58	〃	6.6	4.7	2.0	66.0
59	チャート	7.3	4.0	1.7	42.3
60	黒色頁岩	8.0	3.7	0.7	24.8
61	ホルンフェルス	11.6	8.4	3.5	347.7
62	チャート	8.8	4.3	1.7	66.1
63	黒色頁岩	7.9	5.2	1.8	83.5
64	〃	(10.0)	(10.9)	2.9	(251.2)
65	黒色安山岩	3.2	3.8	1.1	12.3
66	〃	3.2	4.5	1.0	13.3
67	黒色頁岩	4.0	4.9	1.6	35.7
68	〃	4.0	5.5	1.0	25.3
69	〃	4.0	4.9	1.1	16.8
70	〃	4.4	5.6	1.4	35.0
71	〃	5.0	4.6	1.2	29.3
72	珪質頁岩	4.8	5.9	1.3	22.2
73	黒色頁岩	4.9	5.6	1.7	33.6
74	〃	5.4	5.6	1.6	42.3
75	〃	5.5	5.1	1.9	37.2
76	〃	6.2	6.6	1.4	53.9
77	〃	4.9	7.2	1.2	41.0
78	珪質頁岩	4.2	8.3	1.0	31.3
79	黒色頁岩	5.8	7.4	1.5	70.7
80	珪質頁岩	6.4	7.7	1.3	61.1
81	黒色頁岩	6.8	9.8	2.7	186.0
82	〃	6.8	4.7	1.0	35.0
83	〃	6.3	6.3	1.7	76.6
84	〃	7.5	6.3	1.7	81.7
85	〃	7.3	7.5	1.9	112.8
86	〃	7.1	7.3	2.3	93.0
87	〃	6.7	(7.4)	1.9	(96.7)
88	黒色安山岩	3.1	(3.3)	0.9	(10.5)
89	〃	3.5	(3.9)	(1.2)	(11.3)
90	〃	(3.4)	4.3	1.0	(14.7)
91	〃	(4.3)	4.3	1.4	(25.8)
92	黒色頁岩	4.3	(5.4)	1.3	(30.2)
93	黒色安山岩	4.5	(6.5)	1.9	(51.2)
94	黒色頁岩	5.0	(6.9)	1.4	(47.0)
95	〃	(6.0)	(9.3)	1.8	(83.5)
96	〃	7.5	6.0	1.4	(42.3)

遺構外出土石器計測表 (打製石斧)

No	石 材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さ g
97	黒色頁岩	9.8	4.3	1.6	78.7
98	〃	9.6	4.0	1.2	57.4
99	〃	10.3	4.5	1.5	87.3
100	〃	9.7	4.0	1.3	69.2
101	〃	10.1	4.2	1.1	53.0
102	細粒輝石安山岩	10.8	3.9	1.3	57.0
103	珪質頁岩	9.2	4.5	1.9	94.6
104	細粒輝石安山岩	9.3	4.6	1.1	55.9
105	黒色頁岩	10.0	4.2	1.4	73.6
106	〃	(8.9)	4.0	1.8	(81.5)
107	〃	11.0	3.8	1.8	80.7
108	黒色頁岩	11.2	4.1	1.6	58.8
109	細粒輝石安山岩	11.7	4.9	1.4	110.1
110	黒色頁岩	10.5	4.7	1.5	69.8

No	石 材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さ g
111	黒色頁岩	11.9	4.1	1.9	102.3
112	〃	11.7	3.9	1.6	65.2
113	細粒輝石安山岩	12.8	5.3	2.7	220.6
114	黒色頁岩	14.3	4.5	2.2	175.1
115	細粒輝石安山岩	15.4	4.5	2.0	140.7
116	〃	13.2	4.3	1.6	123.4
117	黒色頁岩	(9.9)	(4.3)	2.0	(96.5)
118	〃	10.1	3.9	1.3	57.9
119	〃	11.6	4.4	1.3	66.4
120	〃	10.3	4.2	1.2	50.4
121	細粒輝石安山岩	12.1	4.4	1.6	119.0
122	〃	12.0	4.4	1.6	87.4
123	〃	(9.4)	5.0	1.1	(58.9)
124	黒色頁岩	8.7	4.3	1.4	56.8
125	〃	8.1	4.0	1.4	43.5
126	〃	9.7	4.5	1.1	60.8
127	〃	(10.1)	4.8	1.5	(77.1)
128	珪質頁岩	11.4	4.9	1.4	81.1
129	黒色頁岩	(10.3)	(4.4)	1.7	(81.6)
130	珪質頁岩	15.6	5.7	2.6	224.0
131	〃	6.5	4.9	2.1	70.8
132	黒色頁岩	6.3	4.8	1.3	35.3
133	細粒輝石安山岩	10.1	4.6	1.1	44.6
134	〃	9.5	5.3	1.4	71.6
135	頁岩	9.4	5.5	1.0	58.6
136	黒色頁岩	9.0	4.8	1.3	56.1
137	細粒輝石安山岩	(9.3)	(5.6)	2.1	(112.9)
138	黒色頁岩	(7.8)	(3.6)	(1.6)	(47.4)
139	細粒輝石安山岩	(7.3)	(4.4)	(2.3)	(81.5)
140	黒色頁岩	(6.3)	(3.8)	(1.0)	(29.1)
141	〃	(6.5)	(4.2)	(2.7)	(103.5)
142	ホルンフェルス	(6.2)	(4.1)	(1.7)	(55.8)
143	細粒輝石安山岩	(5.6)	(4.5)	(1.2)	(41.7)
144	流紋岩	(6.9)	4.3	(1.7)	(69.1)
145	黒色頁岩	(6.6)	3.7	(1.9)	(62.5)
146	細粒輝石安山岩	(7.2)	4.2	(1.8)	(70.2)
147	黒色頁岩	(6.5)	5.5	2.6	(115.8)
148	珪質頁岩	(7.7)	4.2	1.7	(73.6)
149	黒色頁岩	(6.7)	(5.8)	(2.0)	(108.9)
150	珪質頁岩	(9.0)	4.7	1.6	(84.6)
151	流紋岩	(8.3)	5.3	1.8	(98.6)
152	黒色頁岩	(7.1)	4.8	(2.3)	(83.0)
153	細粒輝石安山岩	(10.0)	7.0	(3.0)	(237.4)
154	変質安山岩	(8.1)	5.5	(2.6)	(137.5)
155	細粒輝石安山岩	(8.5)	5.2	1.4	(57.8)
156	黒色頁岩	(8.5)	5.2	1.7	(75.5)
157	ホルンフェルス	(7.7)	4.6	1.0	(45.1)
158	黒色頁岩	(8.1)	5.5	1.5	(72.4)
159	細粒輝石安山岩	(9.0)	5.5	1.8	(105.4)
160	黒色頁岩	(8.9)	5.3	2.1	(90.1)
161	〃	(7.4)	5.3	1.4	(58.7)
162	細粒輝石安山岩	(6.3)	5.7	(1.6)	(60.8)
163	〃	(8.0)	7.8	2.2	(132.2)
164	黒色頁岩	8.1	5.3	1.6	74.0
165	〃	8.0	5.2	1.9	78.0
166	〃	10.2	6.4	1.7	130.4
167	細粒輝石安山岩	10.8	7.1	2.0	152.8
168	黒色頁岩	10.9	7.9	2.5	179.3
169	細粒輝石安山岩	12.8	5.3	2.7	214.0
170	ホルンフェルス	10.7	5.1	1.9	131.3
171	黒色頁岩	13.9	8.0	3.6	349.2
172	細粒輝石安山岩	13.7	8.8	2.5	329.0
173	黒色頁岩	14.9	7.8	2.6	335.7
174	〃	(10.9)	(8.1)	(3.1)	(264.4)
175	細粒輝石安山岩	(9.5)	(7.2)	(2.1)	(126.4)

第3章 検出された遺構と遺物

No	石 材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さ g
176	細粒輝石安山岩	(8.2)	(7.4)	1.3	(105.6)
177	黒色頁岩	(8.7)	(8.2)	(2.7)	(194.7)
178	〃	(8.0)	(5.7)	1.7	(92.6)
179	細粒輝石安山岩	8.2	5.8	2.1	98.5
180	流紋岩	11.6	8.1	3.6	422.6
181	変質安山岩?	11.9	8.2	2.4	296.1

遺構外出土石器計測表 (磨製石斧)

No	石 材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さ g
182	変はんれい岩	13.6	5.2	2.6	344.3

遺構外出土石器計測表 (敲石)

No	石 材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さ g
183	粗粒輝石安山岩	14.2	6.2	4.8	652
184	〃	(11.6)	(7.8)	(5.3)	(613)
185	黒色頁岩	(10.1)	4.6	3.2	(223)

遺構外出土石器計測表 (凹石)

No	石 材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さ g
186	粗粒輝石安山岩	8.7	6.5	5.5	330
187	〃	12.4	8.5	5.6	853
188	〃	(7.7)	(11.1)	(4.0)	(468)
189	〃	(9.5)	7.9	3.3	(386)

遺構外出土石器計測表 (磨石)

No	石 材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さ g
190	粗粒輝石安山岩	11.2	7.8	2.9	343
191	〃	12.3	9.5	5.7	667
192	〃	12.5	8.8	5.7	933
193	〃	14.2	9.8	5.3	1,028
194	〃	15.0	10.0	5.0	758
195	〃	15.9	10.3	8.0	1,854

No	石 材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さ g
196	粗粒輝石安山岩	(9.2)	(9.4)	(2.6)	(255)
197	石英閃緑岩	(6.6)	(10.1)	(3.1)	(288)
198	粗粒輝石安山岩	(7.5)	(8.1)	(3.2)	(308)
199	〃	(10.0)	9.2	5.2	(662)
200	〃	(10.9)	6.6	3.3	(384)
201	〃	(8.6)	5.7	4.6	(285)

遺構外出土石器計測表 (多孔石)

No	石 材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さ g
202	粗粒輝石安山岩	11.1	8.2	6.0	488
203	〃	15.5	10.8	6.4	775
204	〃	(13.2)	(10.9)	(8.8)	(891)
205	〃	(16.0)	(13.7)	(11.7)	(2,080)
206	〃	31.5	(18.9)	14.3	(11,630)

遺構外出土石器計測表 (台石)

No	石 材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さ g
207	粗粒輝石安山岩	17.0	20.9	4.7	2,208
208	〃	27.2	17.1	11.5	6,550
209	〃	26.0	20.2	4.9	3,937
210	〃	20.6	22.5	6.9	3,986
211	〃	(10.5)	(11.9)	(4.1)	(760)
212	変質安山岩	(15.4)	(14.1)	(5.0)	(1,941)

遺構外出土石器計測表 (石皿)

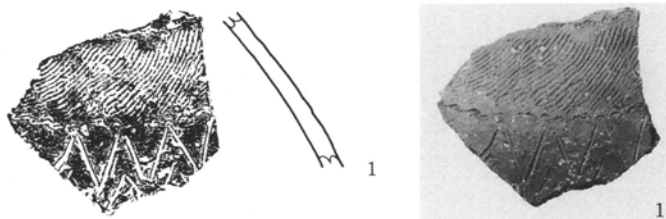
No	石 材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さ g
213	石英閃緑岩	(19.4)	(14.1)	(14.4)	(4,438)

遺構外出土石器計測表 (垂飾品)

No	石 材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さ g
214	砂岩質準片岩	(4.2)	(3.1)	(0.6)	(9.04)

2. その他

本遺跡から出土した弥生土器である。本遺跡では、この時期の遺構は検出されておらず、遺構外遺物として掲載しておくことにする。



第129図 遺構外出土土器 (弥生)

遺物観察表

番号	器 種	残 存 法 量 cm	出土位置	①胎土②焼成③色調	器 形 ・ 整 形 ・ 文 様 の 特 徴
1	弥生土器 壺	肩部片 口径 — 器高 — 底径 —		①粗砂 ②酸化焰 硬質 ③にぶい黄	丸みのある肩部。文様構成が羽状縄文、山形文の組み合わせになっており、久ヶ原式と思われる。 外面 肩部に羽状になるとと思われる結節回転文の下に、二段の山形文が施文されている。下段の山形文の下に赤色塗彩あり。 内面 ナデ

第4章 まとめ

波志江中野面遺跡における縄文時代の資料については、先の第3章で述べてきた通りである。ここでは資料を通しての所見を述べることで、調査のまとめとする。

1. 本遺跡の縄文時代遺構について

本遺跡は「第2章1. 地理的環境」で述べた通り、神沢川左岸の伊勢崎台地上に位置する。この平坦に近い台地内には南北方向に低地が入り組み、微高地と低地が縦縞状になっている。本遺跡の調査区を地形に置き換えてみると(折り込みの全体図参照)、A区・C区東端・D区は微高地に、遺跡の中程になるB区・C区は低地にあたる。

本遺跡で検出された遺構は竪穴住居跡10軒・土坑8基・埋甕11基・土器群7基である。これらの遺構のほとんどは微高地であるA区・D区より検出されている。土坑・埋甕の各1基のみが、やはり微高地であるC区東端から検出されている。低地であるB区・C区からは縄文時代の遺構は検出されていない。A区から検出された竪穴住居跡・土坑・埋甕・土器群は中期後半の加曾利E式期に比定され、D区より検出された土坑の1基のみ後期の堀之内式期にあたる。また、C区東端より検出された土坑・埋甕は後期の称名寺式期にあたる。すなわち、低地を挟んで遺跡の西側の微高地に中期後半の遺構、東側の微高地に後期の遺構が検出されたことになる。東側の微高地はさらに神沢川に沿って北東方向に続いてい(註1)る。このあたりは伊勢崎市の調査では神沢川南遺跡として、中期の遺物が確認されている。今回、本遺跡から後期の遺構が検出されたことにより、今後の調査の進展によっては、後期の遺構が本遺跡の北部や東部に広がる可能性がある。また、遺跡の西側の微高地は神沢川に沿って南北にのびている。本遺跡の南西には、縄文時代の後期から晩期の遺跡として

著名な八坂遺跡^(註2)が同じ台地に位置する。こちらも今後の調査の進展によっては、本遺跡の南側に中期後半から晩期にかけての遺構が検出される可能性がある。

2. 本遺跡出土のつり手土器について

つり手土器は釣手土器と表記される場合が多いが、中には、吊紐により懸垂されることを意識して吊手土器の文字をあてることもある。つり手土器とは、縄文時代中期から晩期にかけて見られる、口縁部に橋状のつり手がつけられた特殊な形態の土器である。つり手の形態は橋状、十字形、三叉形、香炉形など多様であるが、いずれもつり手の頂点は土器本体の中心上にある。また、つり手がつかずに懸垂用と思われる紐を通す孔が設けられた土器もある。

本遺跡から2つのタイプのつり手土器が出土している。A区9号土器群No1の土器(第130図1)と遺構外出土遺物No814の土器(第130図2)がこれにあたる。これらの土器について、つり手土器としての形態を中心に観察し、似た特徴をもつ土器との比較を通して、所見を述べることにする。

第130図1の土器の本体は胴部中程に括れをもつ深鉢形土器である。胴部の文様から中期後半の加曾利E式土器である。この土器本体の口径は18cm、器高・底径は推定でそれぞれ25cm、5.1cmを測る。口縁部の様子及び残存する把手の傾きの具合から、十字形の釣手をもつ、釣手土器になると思われる。そこで、釣手の頂上付近の形態ははっきりしないが、残存する釣手の形状を生かしながら、釣手土器として復元を試みた(第130図写真1)。本土器の釣手は正面からみると、帯状を呈し、中央部に溝状の沈線が刻まれている。側面には円形の刺突が釣手に沿って施文されている。釣手の断面は長方形で、本体との接合部が特に太いということはない。本体の口唇部

第4章 まとめ

に沿って紐状の隆帯が貼付されており、釣手の溝状の沈線とこの隆帯が直交するような感じになる。本体の口縁部、胴部には懸垂するのに適した孔や貫通している突起等は設けられていない。また、釣手の溝状の沈線や胴部の括れ部等に紐擦れの痕跡は見られない。

十字形の釣手をもつ土器は、^(註3)大森貝塚、^(註4)高井東遺跡(第130図3)等から出土している。これらの土器の本体はいずれも鉢形土器で、胴部の文様から後期の加曾利B式期の土器である。釣手は帯状であり、紐を通す溝やトンネル状に貫通している突起、頂上部に坏状の孔等をもち、懸垂するのに適した形態になっている。

次に、釣手をもつ深鉢形土器を調べてみた。葦原遺跡、^(註5)殿原遺跡^(註6)(第130図4)等から出土している。葦原遺跡出土の土器は中期後半、殿原遺跡出土のものは後期初頭の深鉢形土器である。いずれも橋状の大きな釣手をもつ。その釣手は薄手で、本体の土器との接合部付近は、強度をつけるためか断面が三角形になっている。また、釣手上に孔があげられている。殿原遺跡の土器は円形の孔が3つ、楕円形の孔が4つあげられている。これらの孔は土器本体の重量を考えると、懸垂するためのものというよりは、釣手の文様の一部とみたほうが妥当と思われる。

このようなことから、懸垂に適した釣手土器の本体の器形は鉢形土器が適当である。また、懸垂するためには釣手や胴部に紐を通す溝・孔・貫通する突起等が設けられていることがわかる。十字形の釣手をもつ深鉢形土器である本遺跡出土の土器は、懸垂しないで使用したものと思われる。

遺構外遺物No.814の土器(第130図2)は、口縁部が欠損している。頸部は緩やかに外反しながら長く伸びている。胴部は算盤珠のような器形をもつ。胴部上半は4単位の楕円区画で構成された文様帯をもち、区画間に2対の孔と2対の帯状の隆帯が施されている。帯状の隆帯は頸部下部より胴部上半に貼付されており、上下2個の円形の刺突と縦位の沈線が施されている。2対の孔は紐を通して吊り下げると

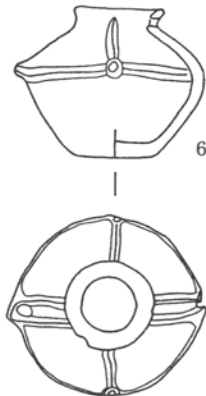
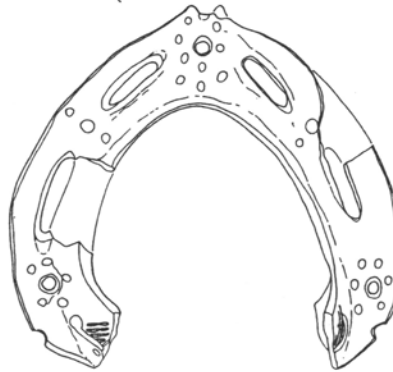
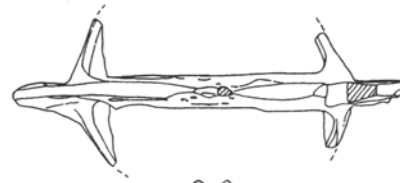
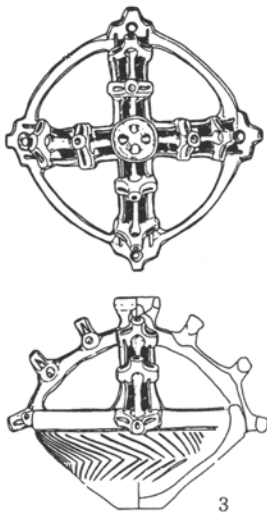
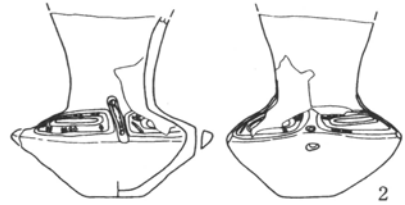
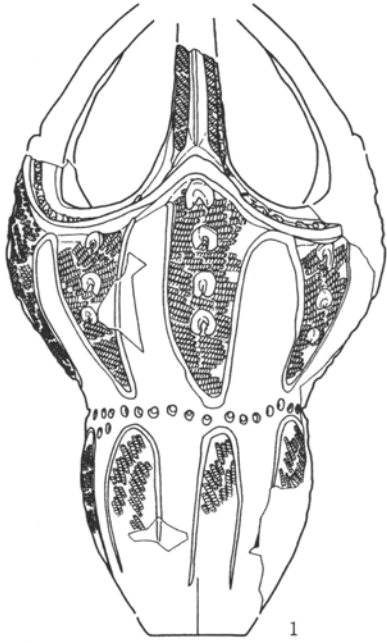
めのもんと思われるが、紐擦れの痕跡ははっきりしない。この2つの孔に紐を通しただけでは、頸部が長いので、安定しないので、欠損している口縁部または頸部に、紐を通す孔などが設けられていたと思われる。頸部及び胴部下半には文様は見られない。この土器は胴部の文様構成から後期の堀之内式土器と思われる。残存部分は頸部の最大径6.2cm・器高9.8cm・底径3.0cmを測る。

この吊手土器に似た形態をもつ土器としては二屋敷遺跡から出土した^(註7)土器(第130図5)、矢太神沼遺跡から出土した^(註8)土器(第130図6・7)等がある。二屋敷遺跡から出土した土器は、筒状の頸部をもち、口縁部が緩やかに外傾する。胴部は算盤珠状を呈する。胴部上半の文様から後期の綱取式土器である。頸部の孔と胴中位の貫通する突起が対になって2ヶ所あり、これらの孔に紐を通し、口縁部の内側に紐が抜けるように懸垂したと思われる。矢太神沼遺跡から出土した土器は、頸部が短く屈曲し、胴部は算盤珠状になる。胴部は隆帯により4単位に分けられ、胴部と頸部に2対の孔をもつ。これらの孔に紐を通し、口縁部の内側に紐が抜けるようにし、さらに、蓋にも紐を通して懸垂したと思われる。この土器は、胴部に文様がみられないが、後期の堀之内式土器と思われる。色調は黒色を呈するが、全体に赤色塗彩されている。

これらの土器はつり手の形態、器形、時期等いずれも本遺跡出土の土器と近い。本遺跡の土器もこれらの土器と同様に胴部中位と口縁部または頸部に孔をもち、懸垂するのに適した形態をもっていたと思われる。

このように本遺跡からは懸垂に適したものと適さないものの2つのタイプのつり手土器が出土している。これらのつり手土器はどのように使用されたのだろうか。つり手土器は、その特徴ある形態から灯^(註9)火具説や香炉具説がある。実際、第130図2の土器の内面は頸部・底部の片側部分が煤けている。このことも含めて、その使用方法については、今後の検討課題としたい。

2. 本遺跡出土のつり手土器について



0 1:4 10cm

第130図 つり手土器

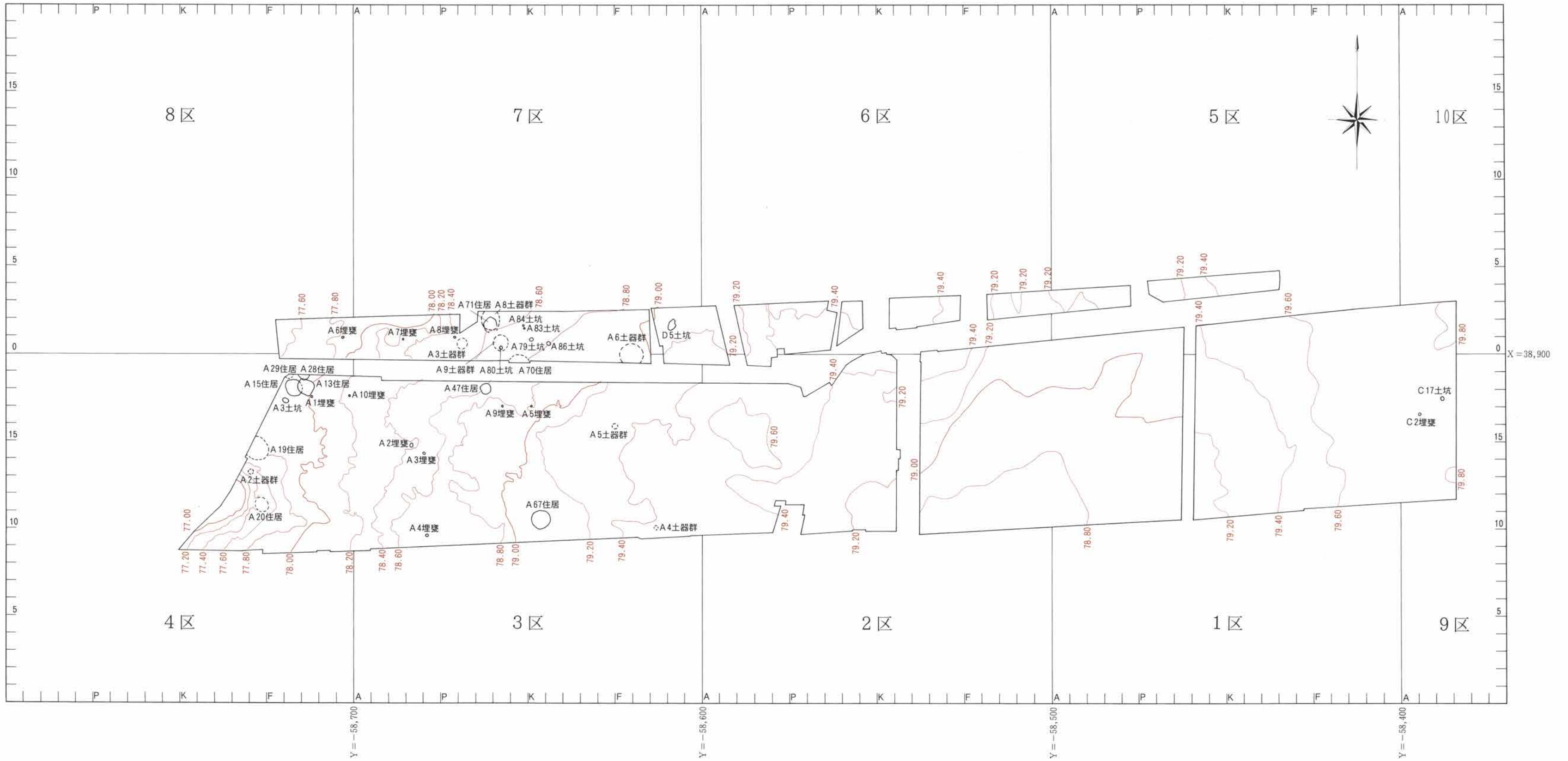
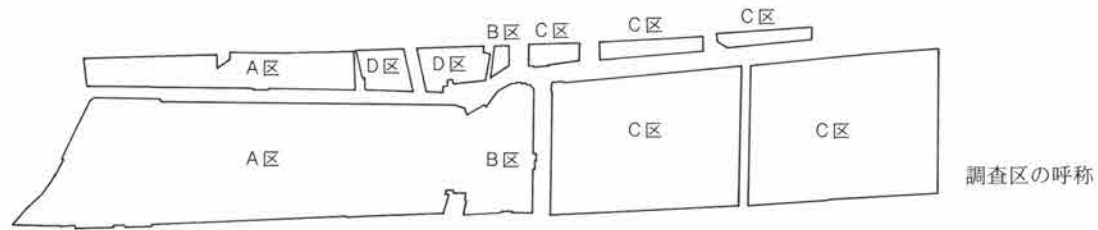
第4章 まとめ

- 註1 『伊勢崎市史』通史編1 原始古代中世 伊勢崎市 1987年 33頁「表1-1 伊勢崎市の縄文時代の遺跡一覧表」
- 註2 前掲書 44頁～53頁
- 註3 杉山寿栄男『日本原始工芸』1929年 第八十五圖版 釣形土器の2。この他にも第六圖版 釣手土器(信州地方)、第四百四十四圖版 釣手土器で橋状、十字形、三叉形、懸垂孔のあるものを掲載している。
- 註4 『高井東遺跡』埼玉県教育委員会 1974年 図版124 第14号住居址出土 土器(6)の2の土器、図版175 第23号住居址 出土土器(2)17の土器。65・66頁にいずれも釣手形土器として説明されている。本書には図版124 第14号住居址出土土器を掲載した。
- 註5 長野県東筑摩郡波田村葦原遺跡出土の釣手付深鉢形土器。現在は松商学園高校に所蔵されている。釣手は橋状で楕円区画が施文されている。本体はU字状区画が垂下するが、器形全体に縄文が施文されている。中期後半の加曾利E式土器である。
- 註6 『殿原遺跡』長野県飯田市教育委員会 1987年 土坑18より出土している。胴部文様から後期初頭の土器と説明されている。
- 註7 『東北自動車道遺跡調査報告書IX』宮城県教育委員会 1984年 二屋敷遺跡より出土。第177図南側遺物包含層出土土器(GJ区第3層)の2。
- 註8 『図録 矢太神沼遺跡』東京電力株式会社 1985年 本文中の図については能登 健・中里吉伸「88矢太神沼遺跡」『群馬県史』資料編1 原始古代1 1988年 940頁より掲載。
- 註9 藤森栄一『縄文農耕』1970年 「三 釣手土器論」の中で著者は井戸尻三号竪穴出土例を取り上げて釣手土器の灯火具説を述べている。

参考文献

本書を作成するにあたり、以下の文献を参考にさせていただいた。

1. 藤森栄一 「三 釣手土器論」『縄文農耕』 1970年
2. 今村啓爾 「称名寺式土器の研究(上)・(下)」『考古学雑誌』第63巻1号2号 1976年
3. 神奈川考古同人会縄文研究グループ「神奈川県における縄文時代中期後半土器編年試案 第1版」『神奈川考古』第4号 神奈川考古同人会 1978年
4. 鈴木保彦・山本暉久・戸田哲也・安孫子昭二・秋山道生・中西 充・末木 健・米田明訓・奈良泰史・長崎元広・島田哲男 「シンポジウム縄文時代中期後半の諸問題—とくに加曾利E式土器と曾利式土器との関係について—土器資料集成図集」『神奈川考古』第10号 神奈川考古同人会 1980年
5. 『三原田遺跡(住居篇)』群馬県企業局 1980年
6. 鈴木保彦・山本暉久・戸田哲也・安孫子昭二・秋山道生・中西 充・末木 健・米田明訓・奈良泰史・長崎元広・島田哲男 「シンポジウム縄文時代中期後半の諸問題—とくに加曾利E式土器と曾利式土器との関係について—」『神奈川考古』第11号 神奈川考古同人会 1981年
7. 丹羽 茂 「大木式土器」『縄文文化の研究』4 1981年
8. 谷井 彪・宮崎朝雄・大塚孝司・鈴木秀雄・青木美代子・金子直行・細田 勝 「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』1 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982年
9. 『開館10周年 シンポジウム堀之内式土器資料集—各地の堀之内式土器とその変遷—』市立市川考古博物館 1982年
10. 上川名 昭 「4 釣手形土器」『中期縄文文化論』1983年
11. 『荒砥前原遺跡・赤石城址』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985年
12. 『荒砥二之堰遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985年
13. 『将監塚—縄文時代—』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986年
14. 『伊勢崎市史』通史編1 原始古代中世 伊勢崎市 1987年
15. 『古井戸—縄文時代—』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989年
16. 『第3回縄文セミナー 縄文中期の諸問題』群馬県考古学研究所 1989年
17. 『第4回縄文セミナー 縄文後期の諸問題』縄文セミナーの会 1990年
18. 鈴木徳雄 「称名寺式土器」『調査研究集録』第7冊—特集称名寺式土器に関する交流研究会の記録—財団法人横浜市ふるさと歴史財団 1990年
19. 『群馬県史』通史編1 原始古代1 群馬県 1990年
20. 石坂 茂・藤巻幸男・桜岡正信 「縄文時代後期初頭における加曾利E式系土器の一樣相—群馬県域出土の資料を中心とした編年的分析—」『群馬県史研究』第34号 群馬県史編さん委員会事務局 1991年
21. 石井 寛 「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』第9冊 財団法人横浜市ふるさと歴史財団 1992年
22. 『第9回縄文セミナー 後期中葉の諸問題』縄文セミナーの会 1996年
23. 宮崎朝雄 「縄文時代中期後葉土器群の動態について—埼玉県行司免遺跡・古井戸遺跡・将監塚遺跡の比較分析から—」『縄文土器論集—縄文セミナー10周年記念論文集—』縄文セミナーの会 1999年
24. 『乗附長坂遺跡・乗附中原遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000年



報告書抄録

ふりがな	はしえなかのめんいせき
書名	波志江中野面遺跡(2)―縄文時代編―
副書名	北関東自動車道（高崎～伊勢崎）地域埋蔵文化財調査報告書
巻次	第14集
シリーズ名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第296集
編集者名	角田芳昭
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377-8555 群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2 TEL 0279(52)2511
発行年月日	西暦2002年3月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はしえなかのめん 波志江中野面	ぐんまけんいせきし 群馬県伊勢崎市 はしえまち 波志江町	10204		36° 20' 55"	139° 11' 52"	19970704～ 19980331 19980401～ 19990331 19990817～ 19990921	20,954	北関東自動車道建設工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
波志江中野面	集落	縄文時代	竪穴住居跡10軒 土坑 8基 埋甕 11基 土器群 7基	縄文土器 石器	縄文時代中期から晩期の多量の出土遺物

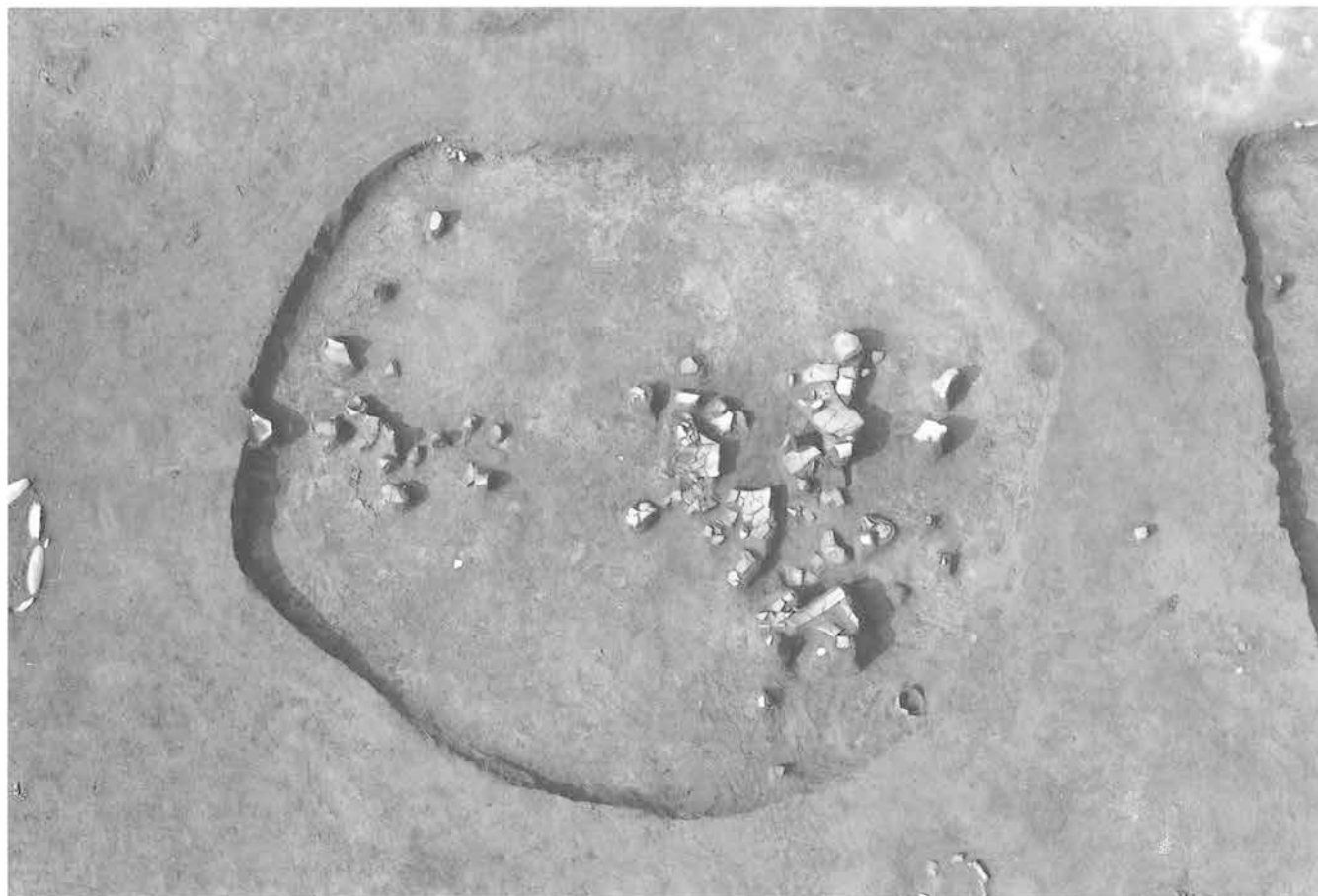
写 真 图 版



A区西側全景



A区北側全景 (西から)



A区13号住居跡全景（南から）



A区13号住居跡遺物出土状況（北東から）



A区13号住居跡遺物出土状況（北西から）



A区13号住居跡遺物出土状況（東から）



A区13号住居跡掘り方全景（南西から）



A区15号住居跡全景（南東から）



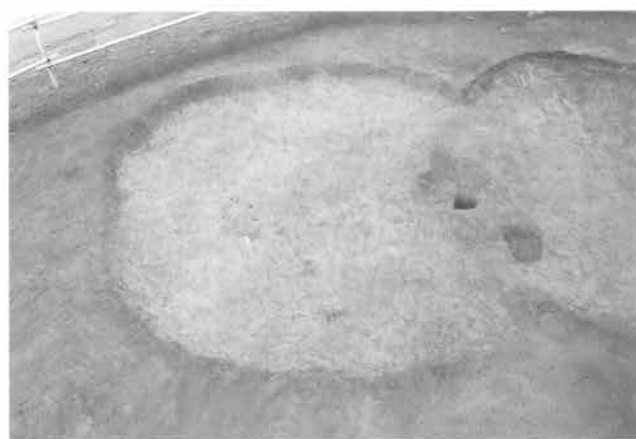
A区15号住居跡セクション（南から）



A区15号住居炉跡（南から）



A区15号住居炉跡（西から）



A区15号住居跡掘り方全景（南から）



A区19号住居跡全景（南から）



A区19号住居炉跡全景（北東から）



A区19号住居炉跡？全景（北東から）



A区19号住居炉跡セクション（南西から）



A区19号住居跡土坑全景（南東から）



A区20号住居跡遺物出土状況（北西から）



A区20号住居跡遺物出土状況（南西から）



A区20号住居炉跡（南西から）



A区20号住居跡柱穴・ピット（南西から）



A区28号住居跡全景（南から）



A区28号住居跡遺物出土状況（南西から）



A区28号住居跡床下土坑全景（南から）



A区28号住居跡掘り方全景（南から）



A区29号住居跡全景 (南から)



A区47号住居跡全景 (南から)



A区47号住居跡遺物出土状況 (北から)



A区47号住居跡東西セクション (南から)



A区47号住居跡南北セクション (西から)



A区67号住居跡全景（北東から）



A区67号住居跡遺物出土状況（東から）



A区67号住居跡掘り方全景（南東から）



A区70号住居跡全景（北から）



A区70号住居跡全景（北から）



A区71号住居跡全景（北東から）



A区71号住居跡東西セクション（南から）



A区71号住居跡南北セクション（西から）



A区71号住居炉跡（南から）



A区71号住居炉跡（上から）



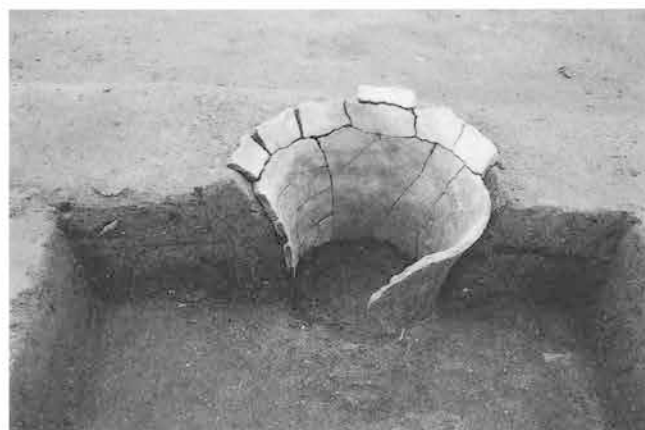
A区71号住居跡遺物出土状況（南西から）



A区71号住居跡埋甕（西から）



A区71号住居跡埋甕（上から）



A区71号住居跡埋甕セクション（南から）



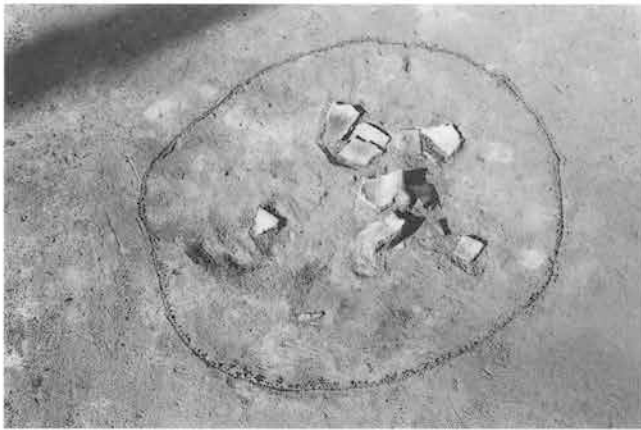
A区71号住居跡掘り方全景（南東から）



A区3号土坑全景 (北西から)



A区79号土坑全景 (西から)



A区80号土坑全景 (南から)



A区80号土坑セクション (南から)



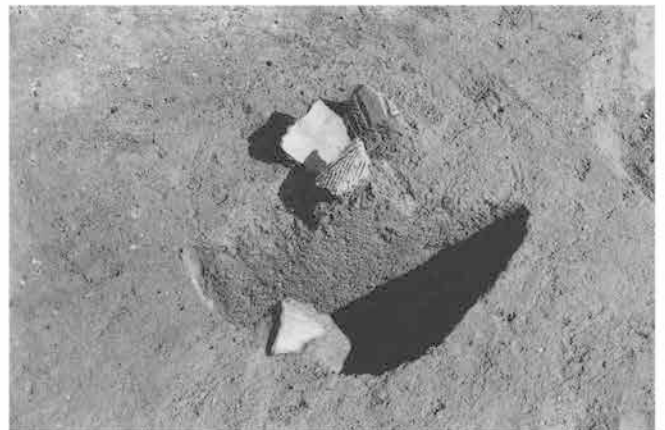
A区80号土坑遺物出土状況 (東から)



A区83号土坑全景 (南から)



A区84号土坑全景 (南東から)



A区84号土坑セクション (南東から)



A区86号土坑全景（西から）



A区86号土坑セクション（北から）



C区17号土坑全景（南から）



C区17号土坑遺物出土状況（南から）



D区5号土坑全景（南東から）



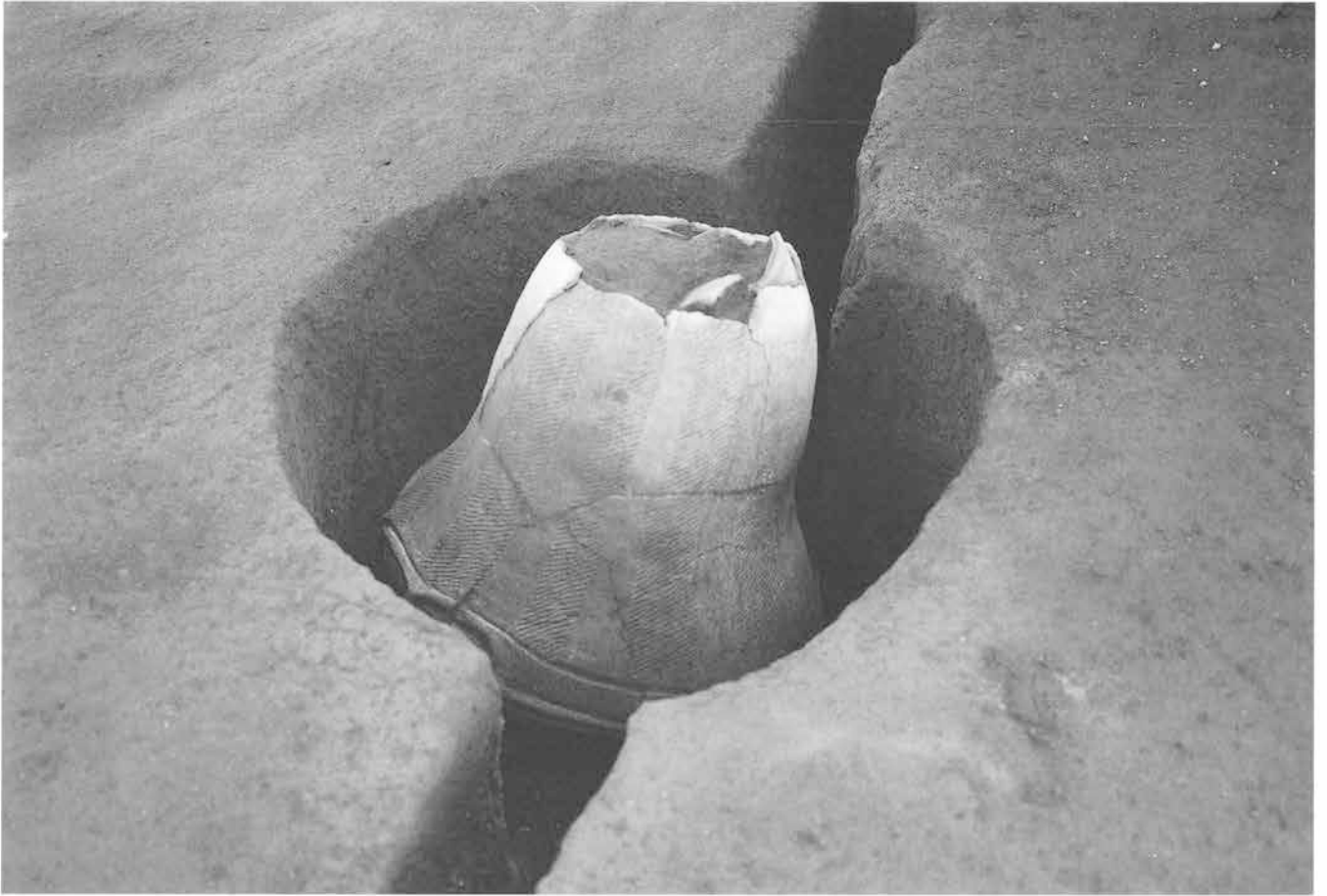
D区5号土坑セクション（南から）



A区1号埋甕（南から）



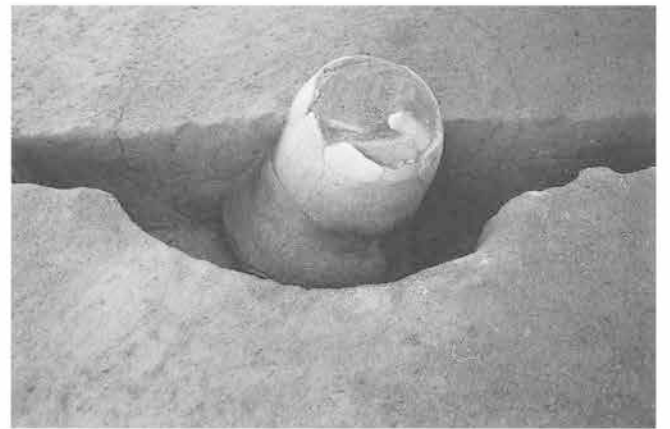
A区1号埋甕セクション（東から）



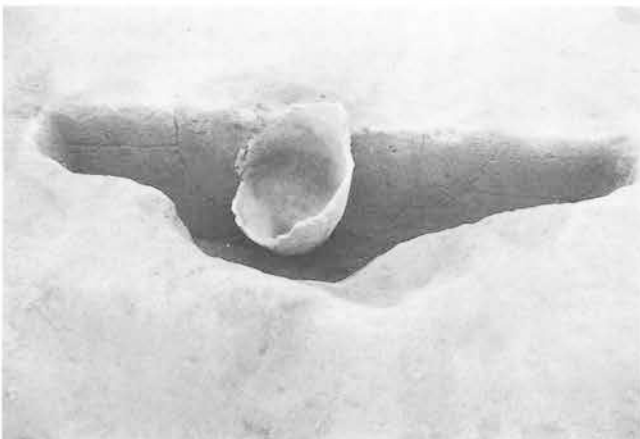
A区2号埋甕 (北から)



A区2号埋甕 (西から)



A区2号埋甕セクション (西から)



A区3号埋甕 (北西から)



A区3号埋甕セクション (北西から)



A区4号埋甕 (北から)



A区4号埋甕 (南から)



A区4号埋甕 (南東から)



A区4号埋甕 (東から)



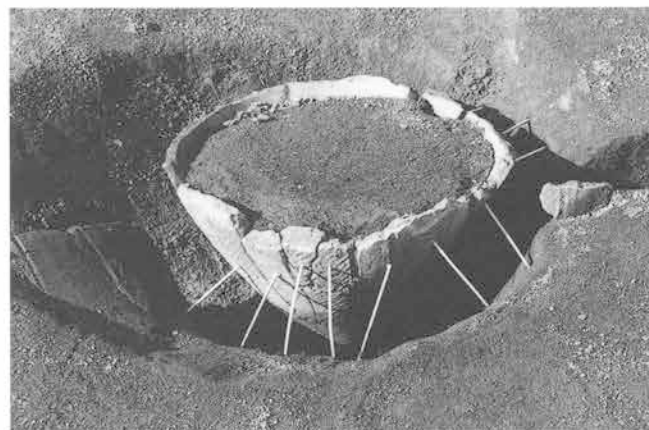
A区5号埋甕 (西から)



A区5号埋甕掘り方 (西から)



A区6号埋甕 (南から)



A区6号埋甕 (南東から)



A区7号埋甕 (南から)



A区7号埋甕 (南から)



A区8号埋甕 (南から)



A区8号埋甕セクション (南から)



A区9号埋甕掘り方 (南から)



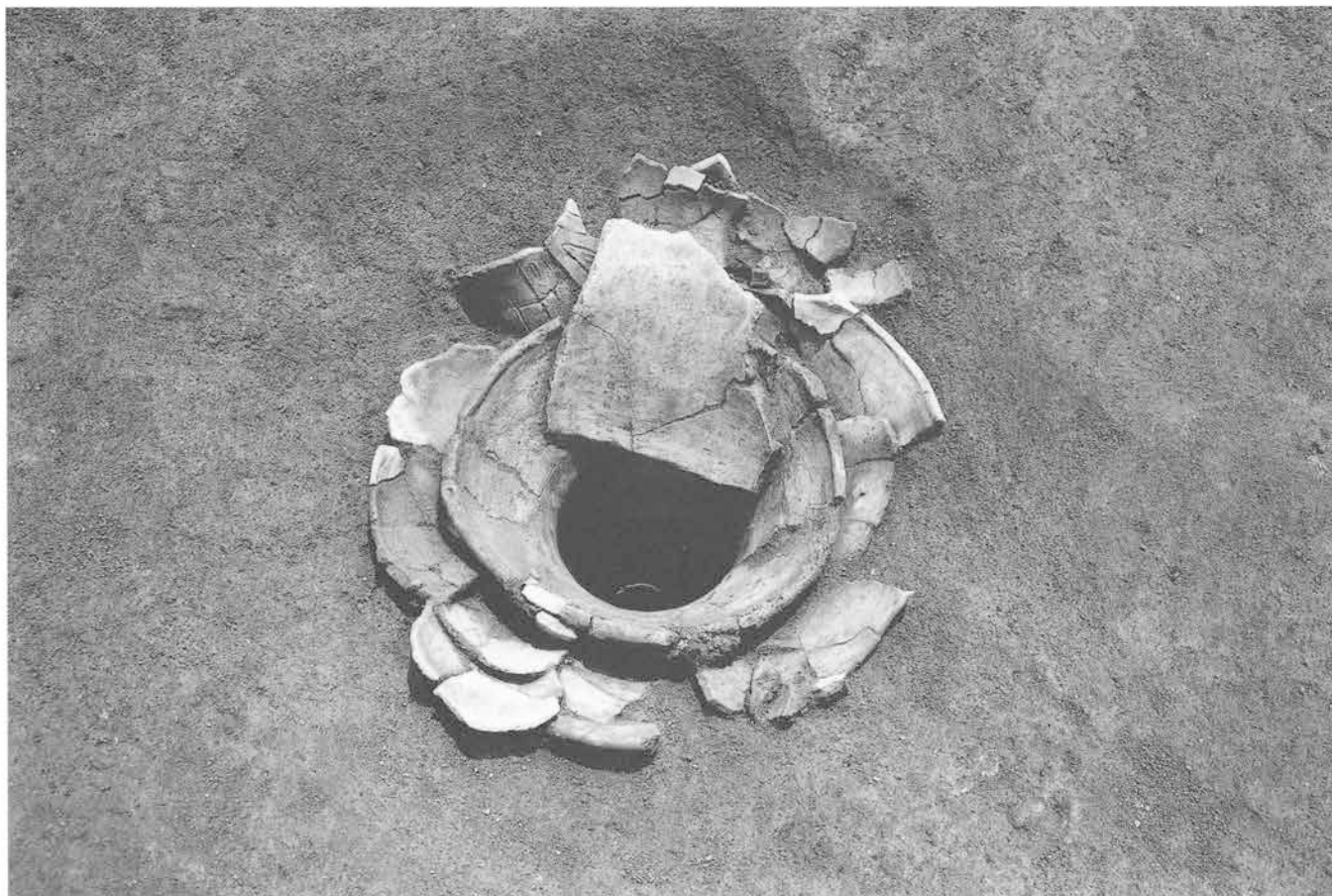
A区10号埋甕 (南西から)



A区10号埋甕 (東から)



A区10号埋甕周辺 (南西から)



C区2号埋甕 (西から)



C区2号埋甕 (西から)



C区2号埋甕 (北から)



C区2号埋甕周辺 (南から)



C区2号埋甕セクション



A区2号土器群全景 (南西から)



A区3号土器群全景 (西から)



A区4号土器群全景 (南から)



A区5号土器群全景 (北西から)



A区6号土器群全景 (南から)



A区6号土器群遺物出土状況 (北から)



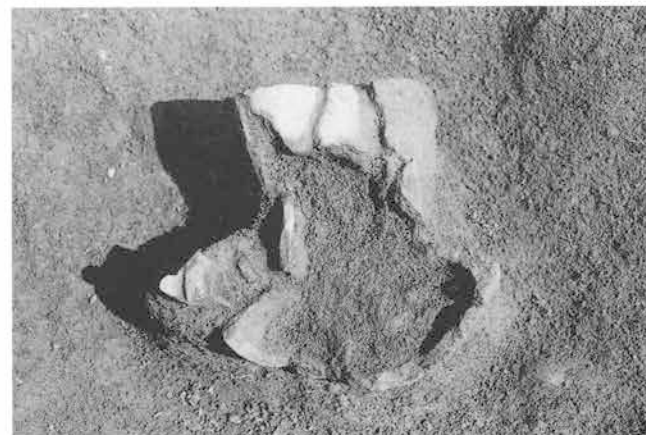
A区8号土器群遺物出土状況 (東から)



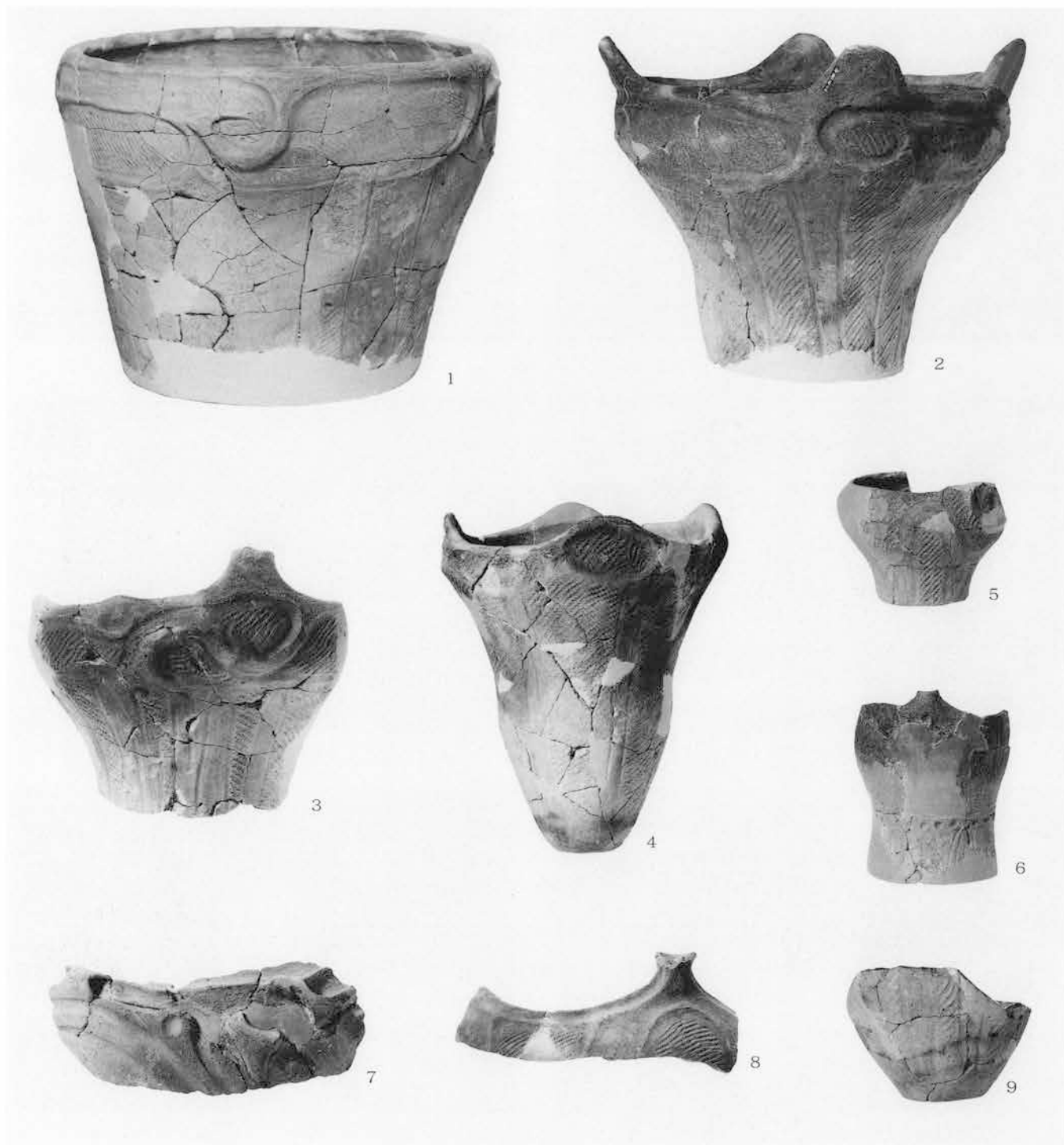
A区8号土器群遺物出土状況近景 (東から)



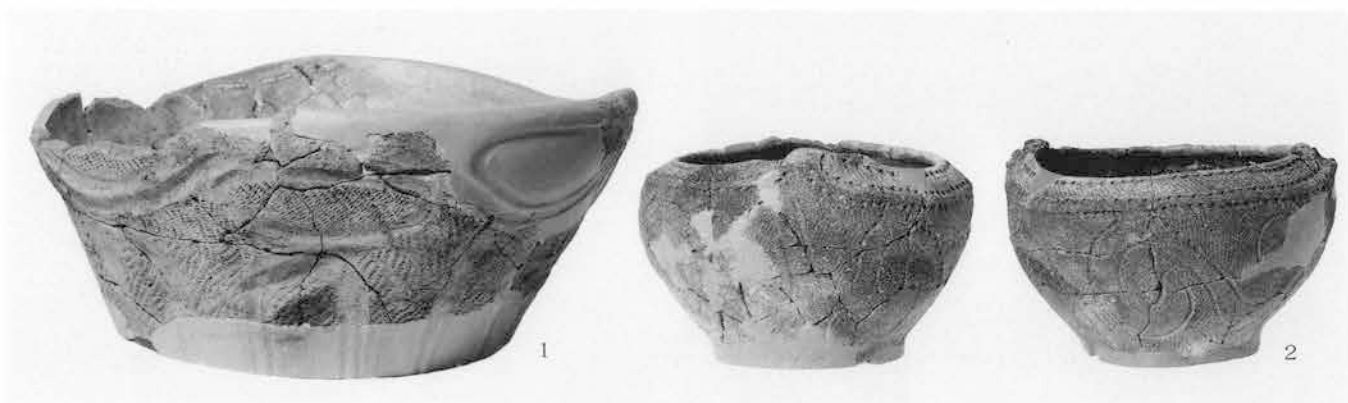
A区9号土器群全景 (西から)



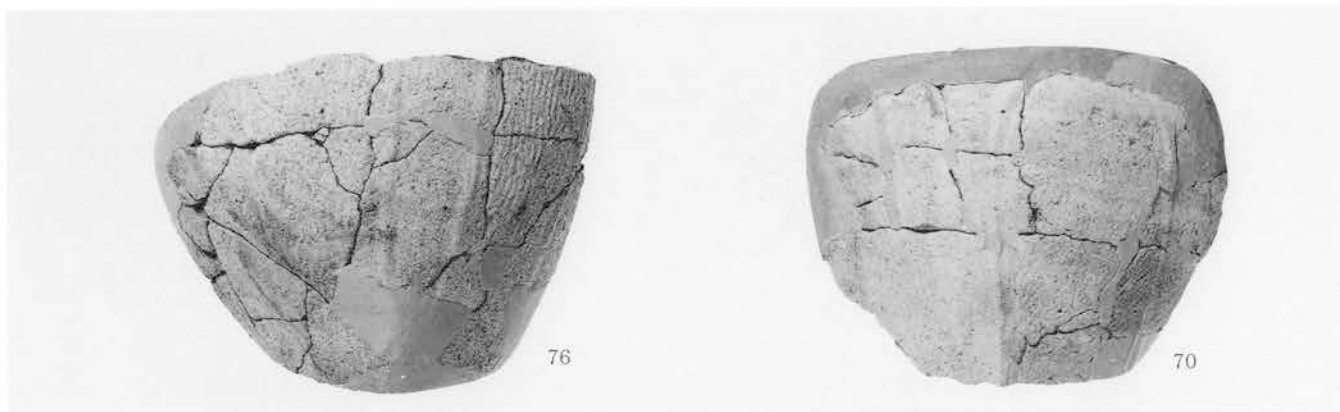
C区 吊手土器出土状況 (西から)



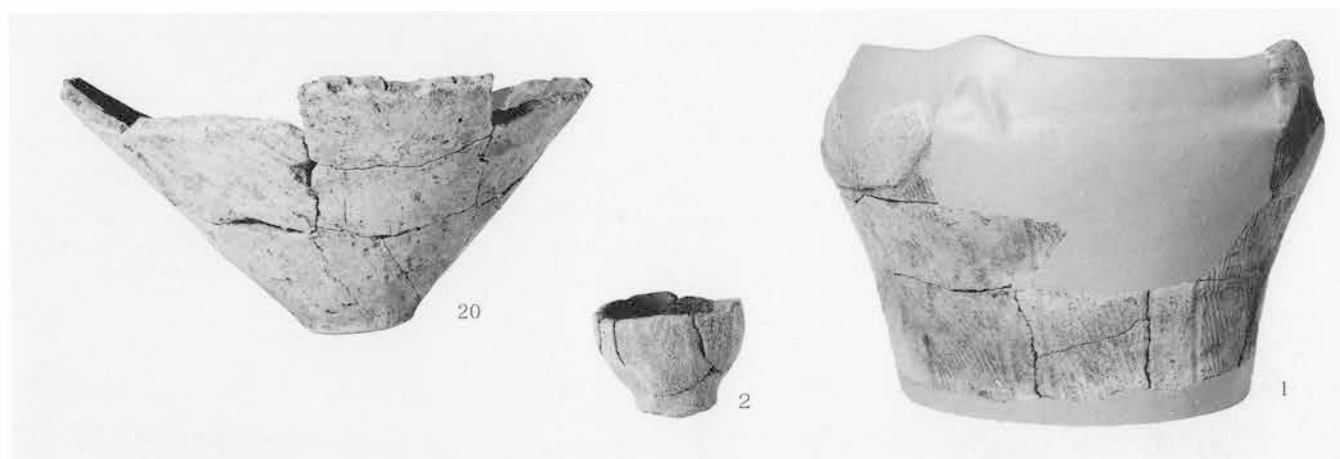
A区13号住居跡出土土器



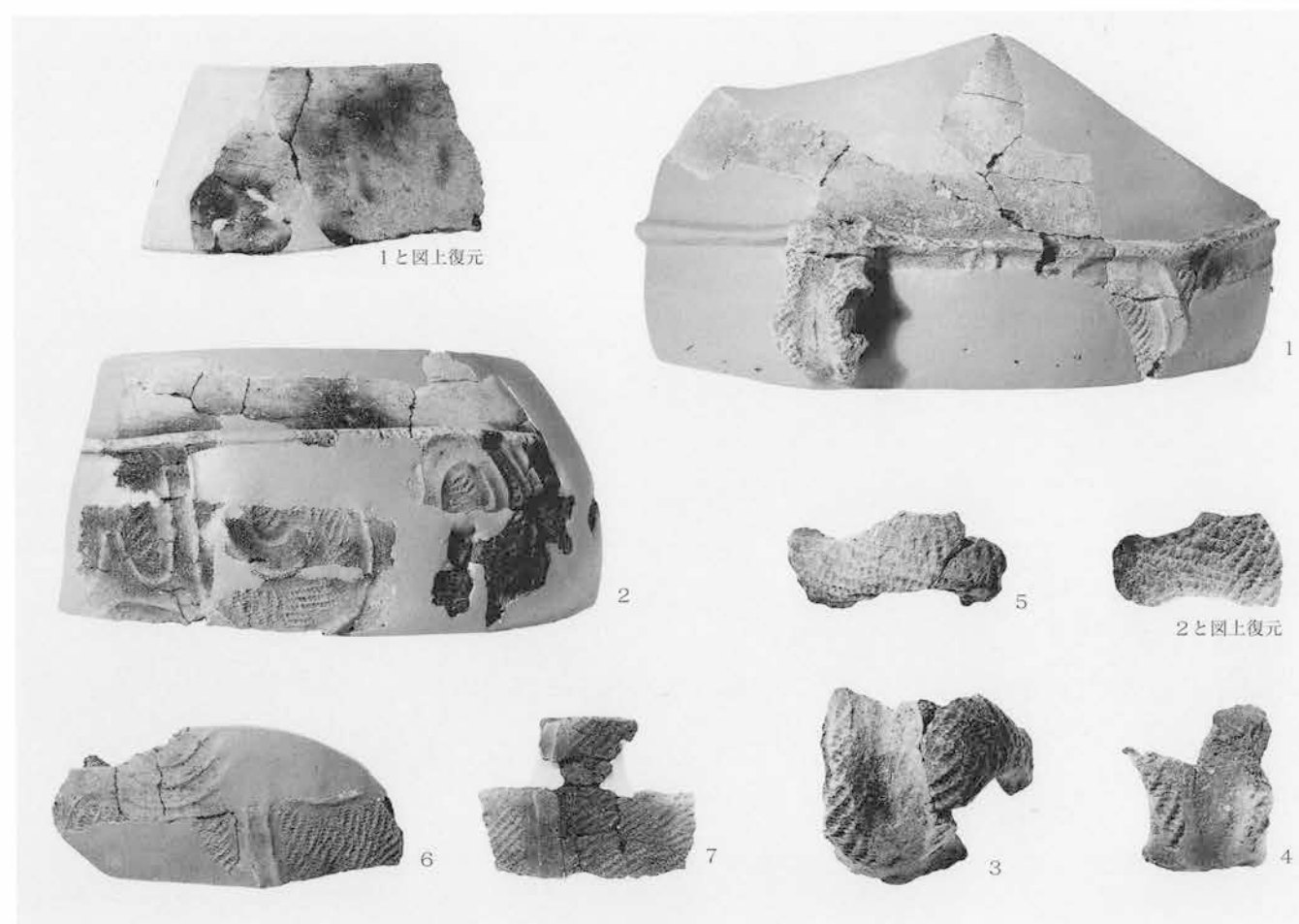
A区19号住居跡出土土器



A区19号住居跡出土土器



A区20号住居跡出土土器



A区28号住居跡出土土器



A区71号住居跡出土土器



79土坑1



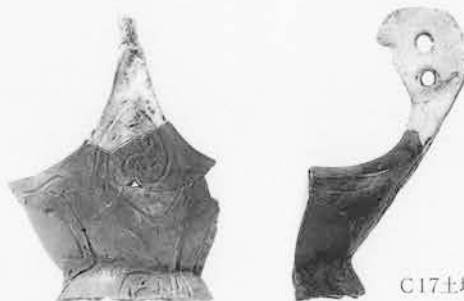
80土坑2



80土坑1



83土坑1



C17土坑1

A区79·80·83·C区17号土坑出土土器



A区1·2·3号埋瓷出土土器



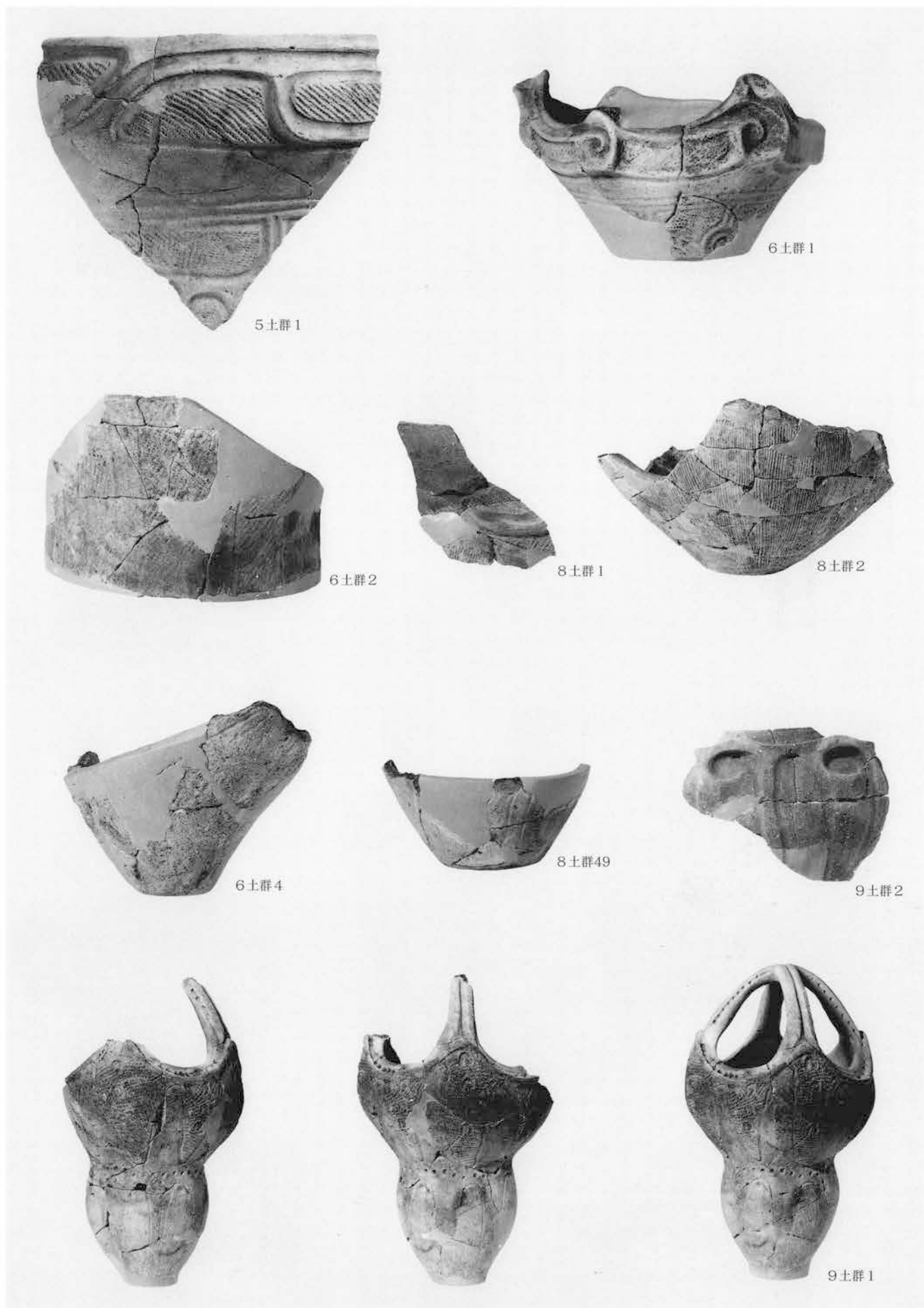
A区4·5·6·7·8·9·10号埋甕出土土器



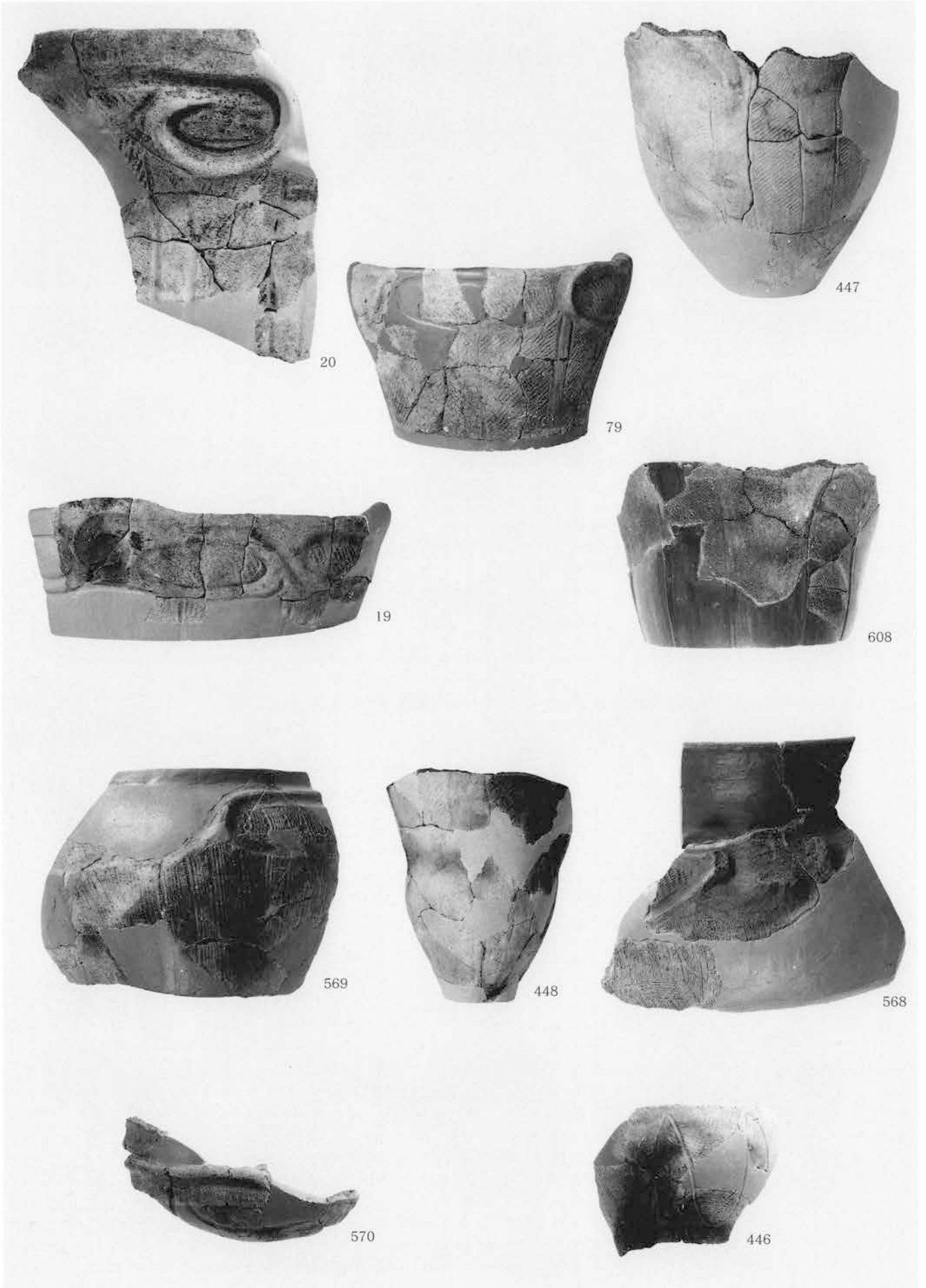
C区2号埋甕出土土器



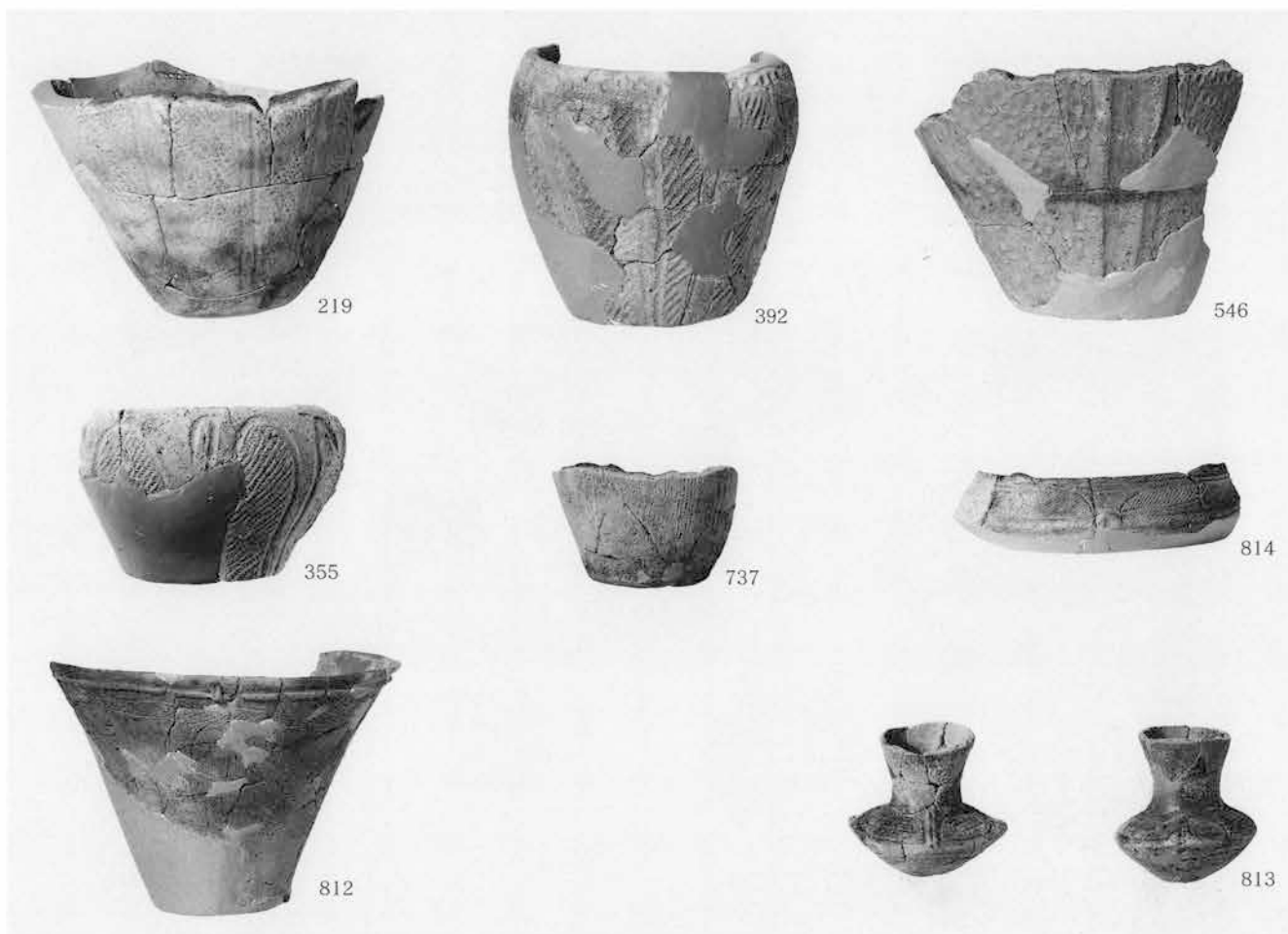
A区2·4号土器群出土土器



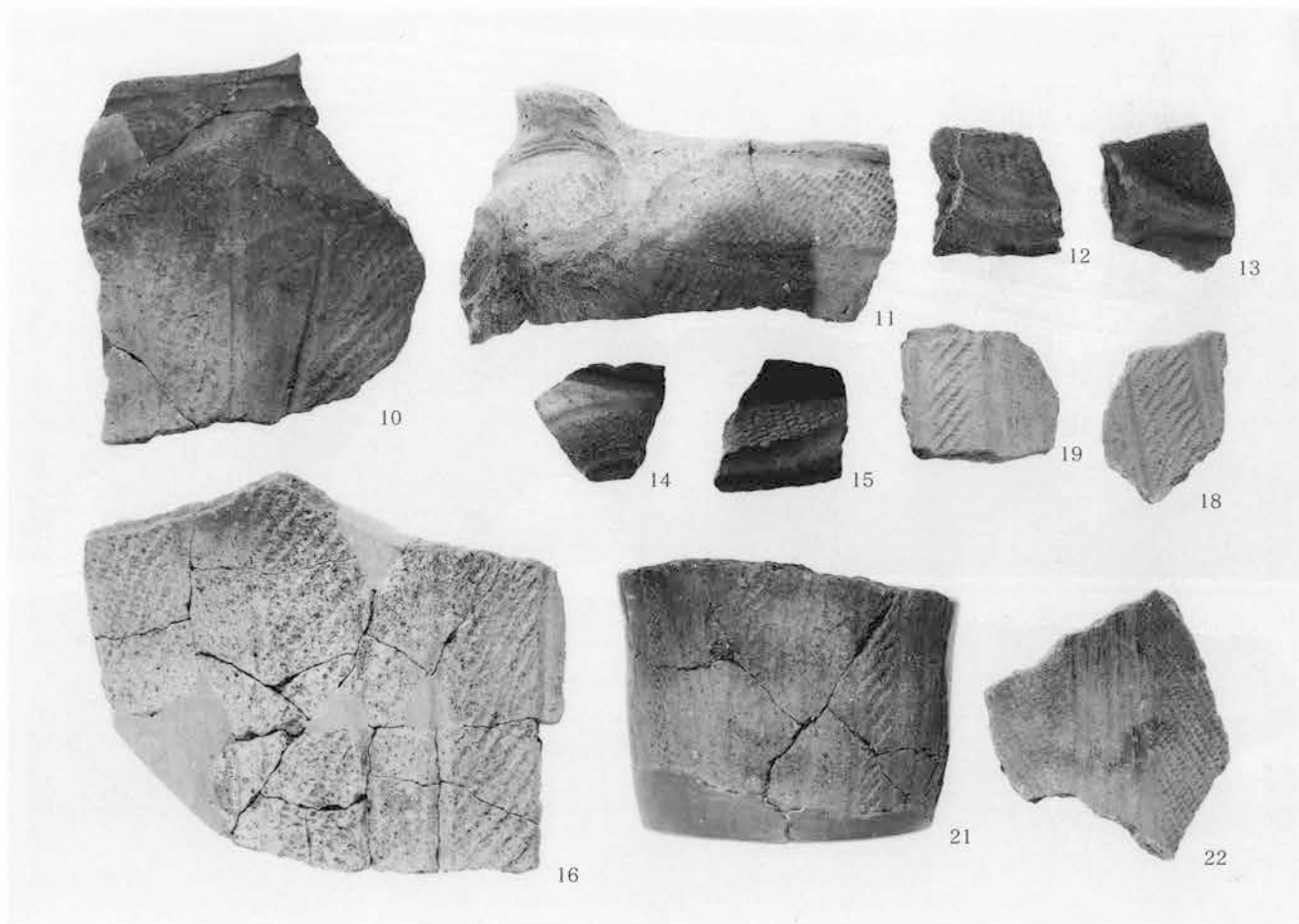
A区5·6·8·9号土器群出土土器



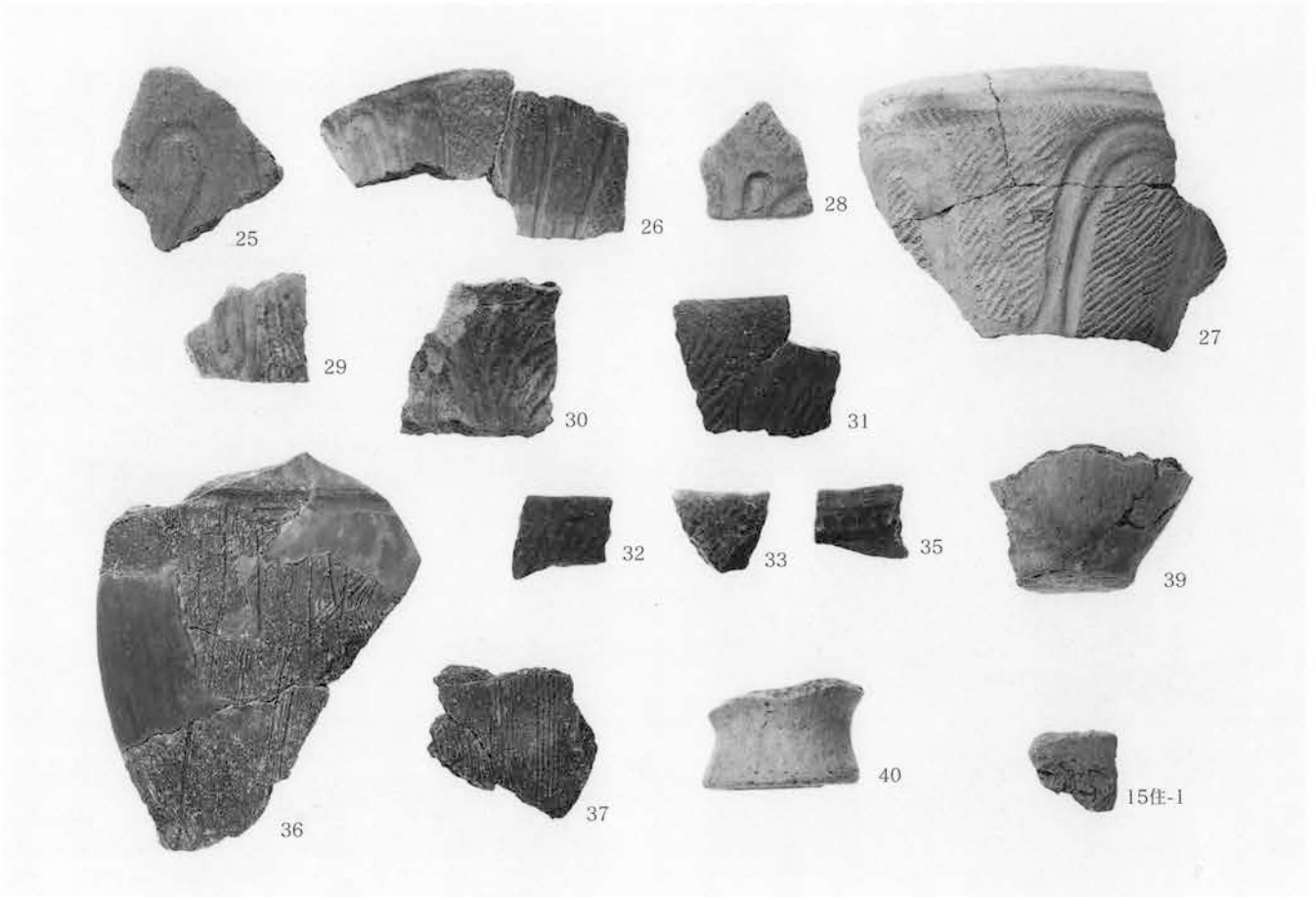
遺構外出土土器



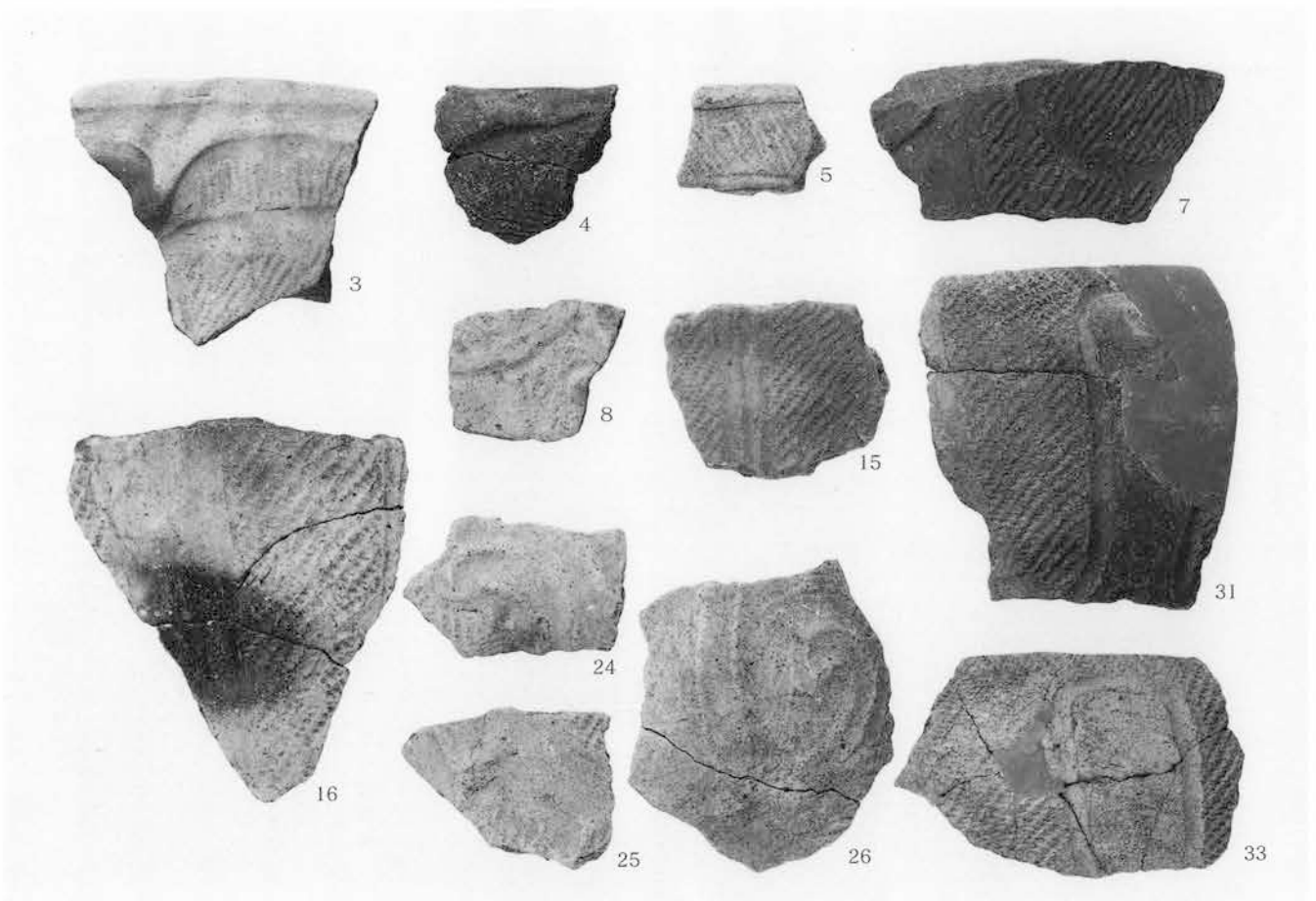
遺構外出土土器



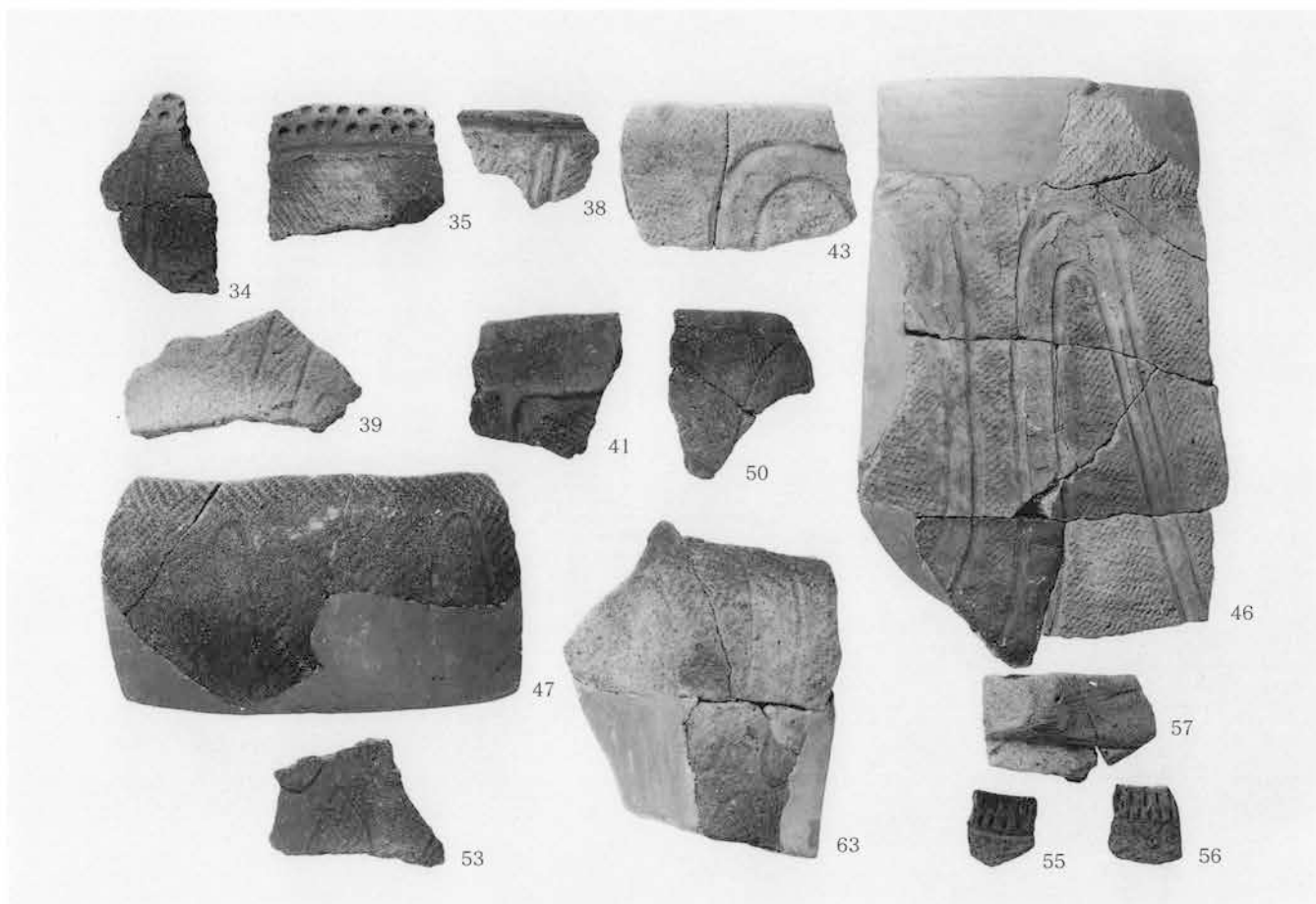
A区13号住居跡出土土器



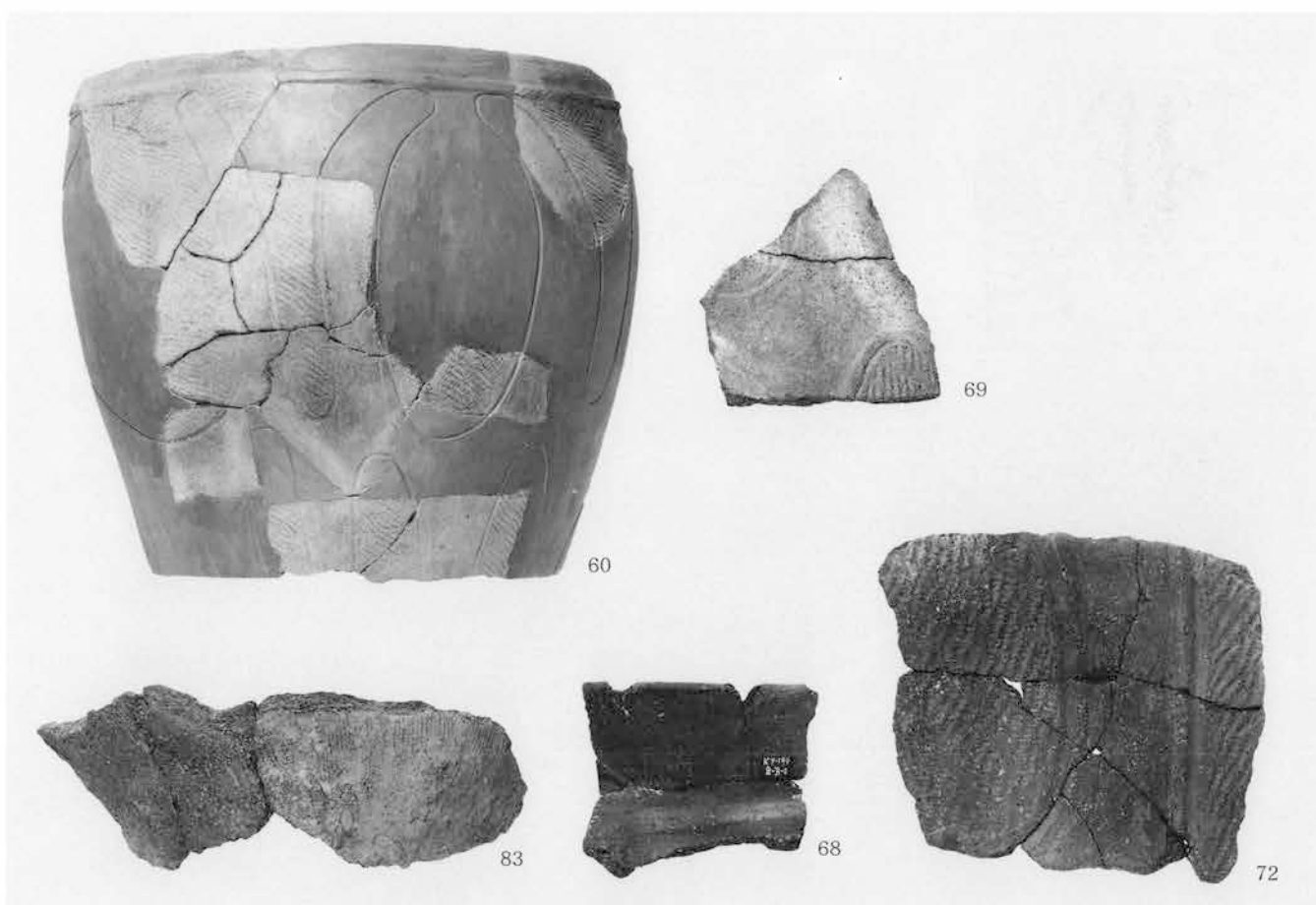
A区13·15号住居跡出土土器



A区19号住居跡出土土器 (1)



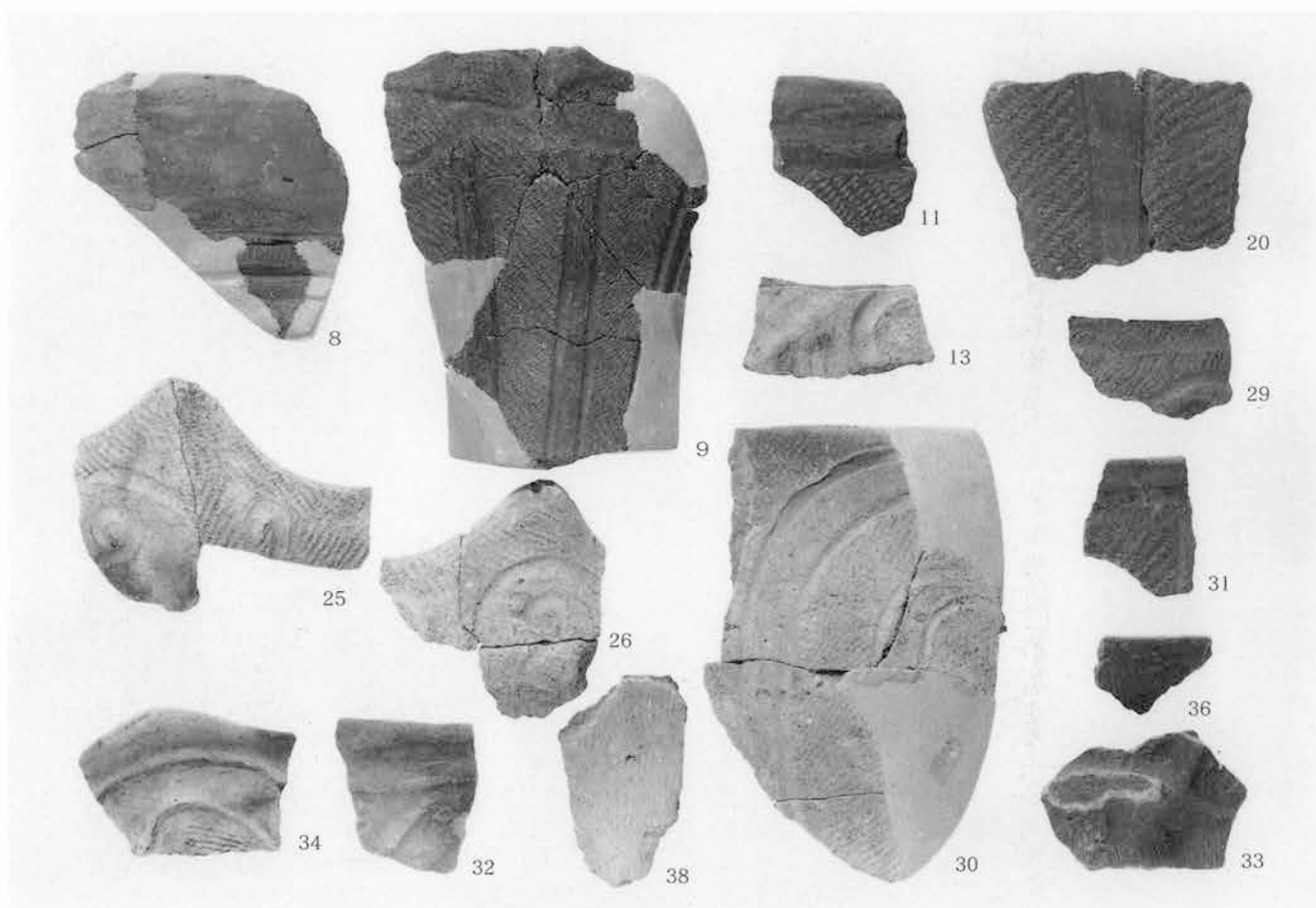
A区19号住居跡出土土器 (2)



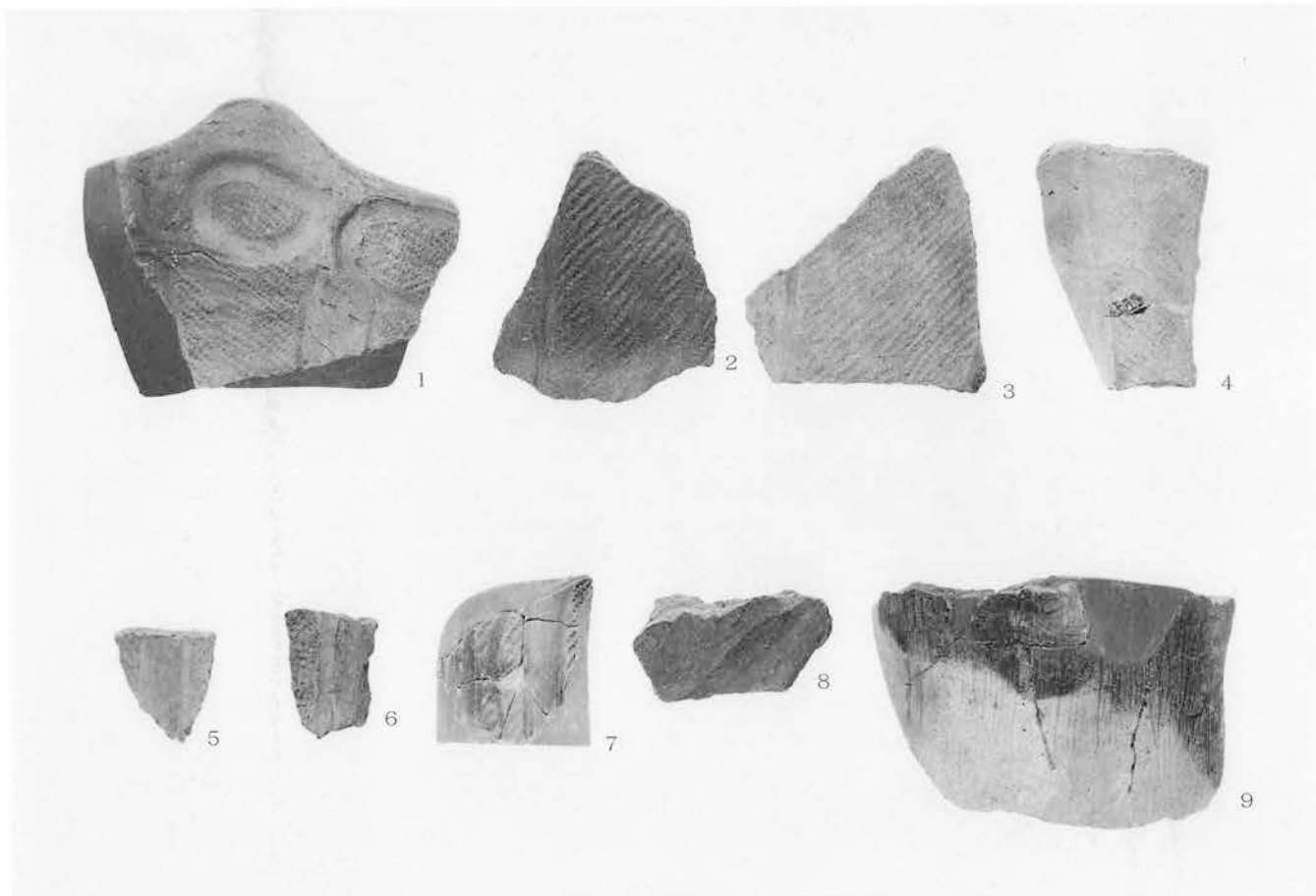
A区19号住居跡出土土器 (3)



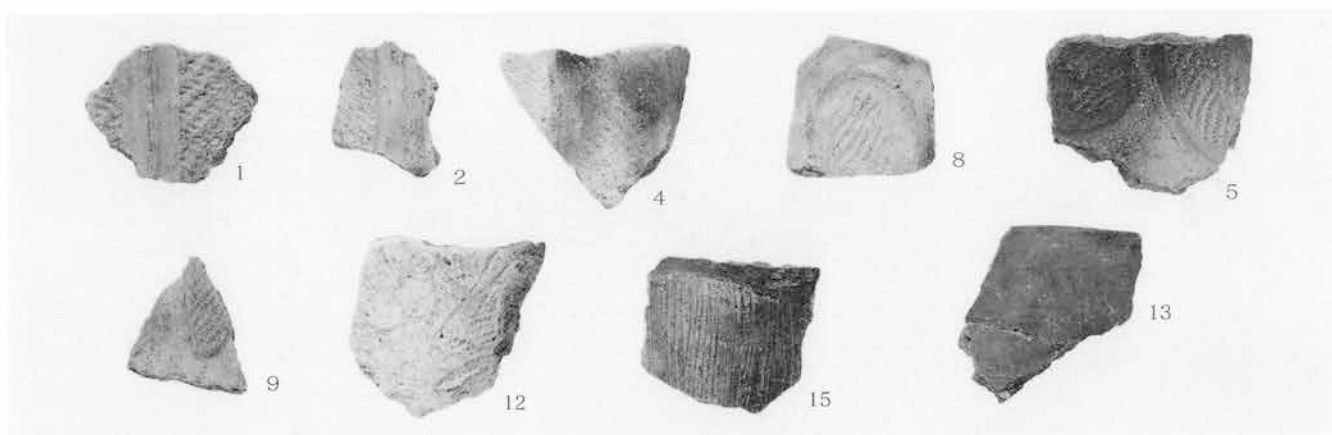
A区20号住居跡出土土器



A区28号住居跡出土土器



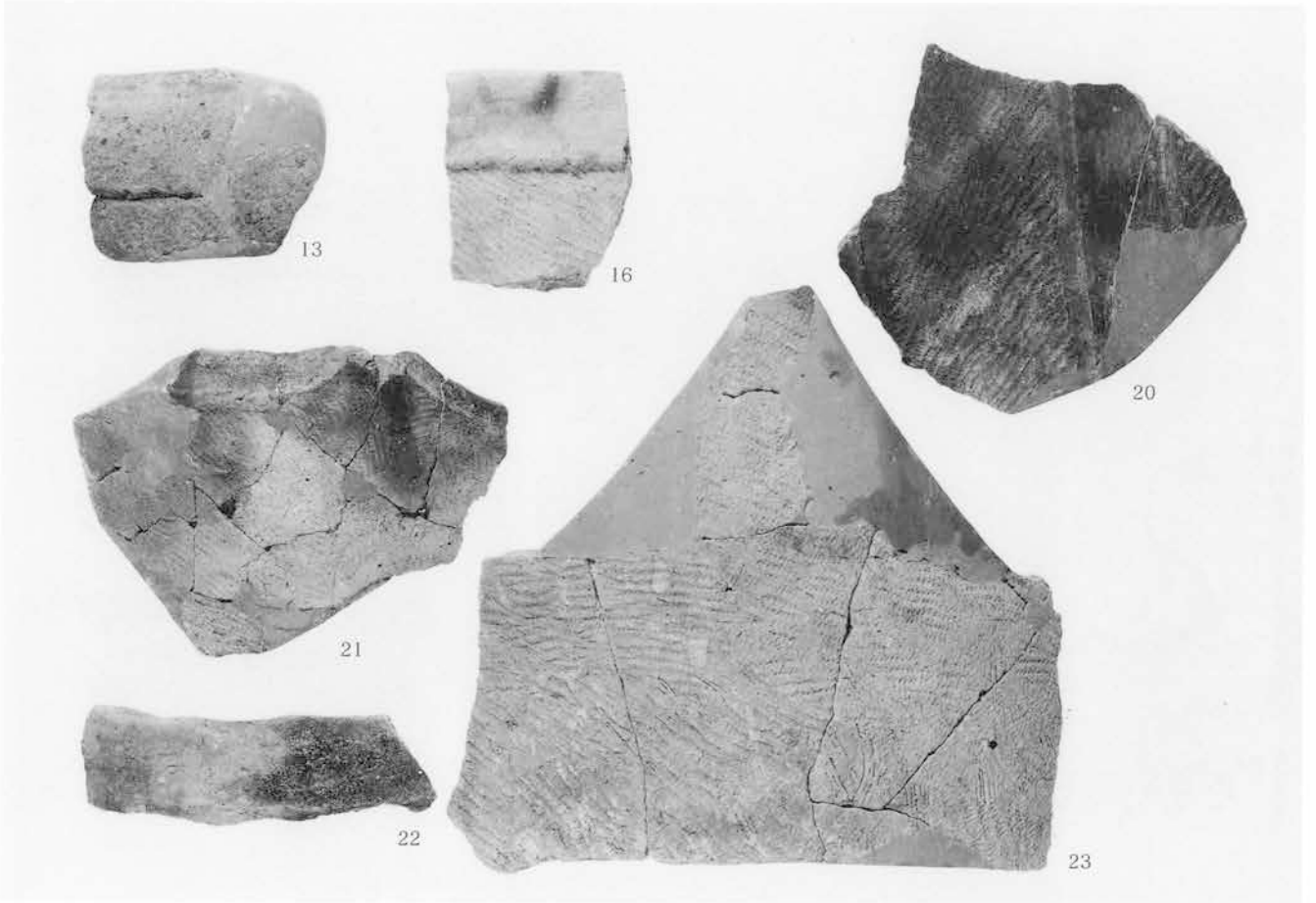
A区29号住居跡出土土器



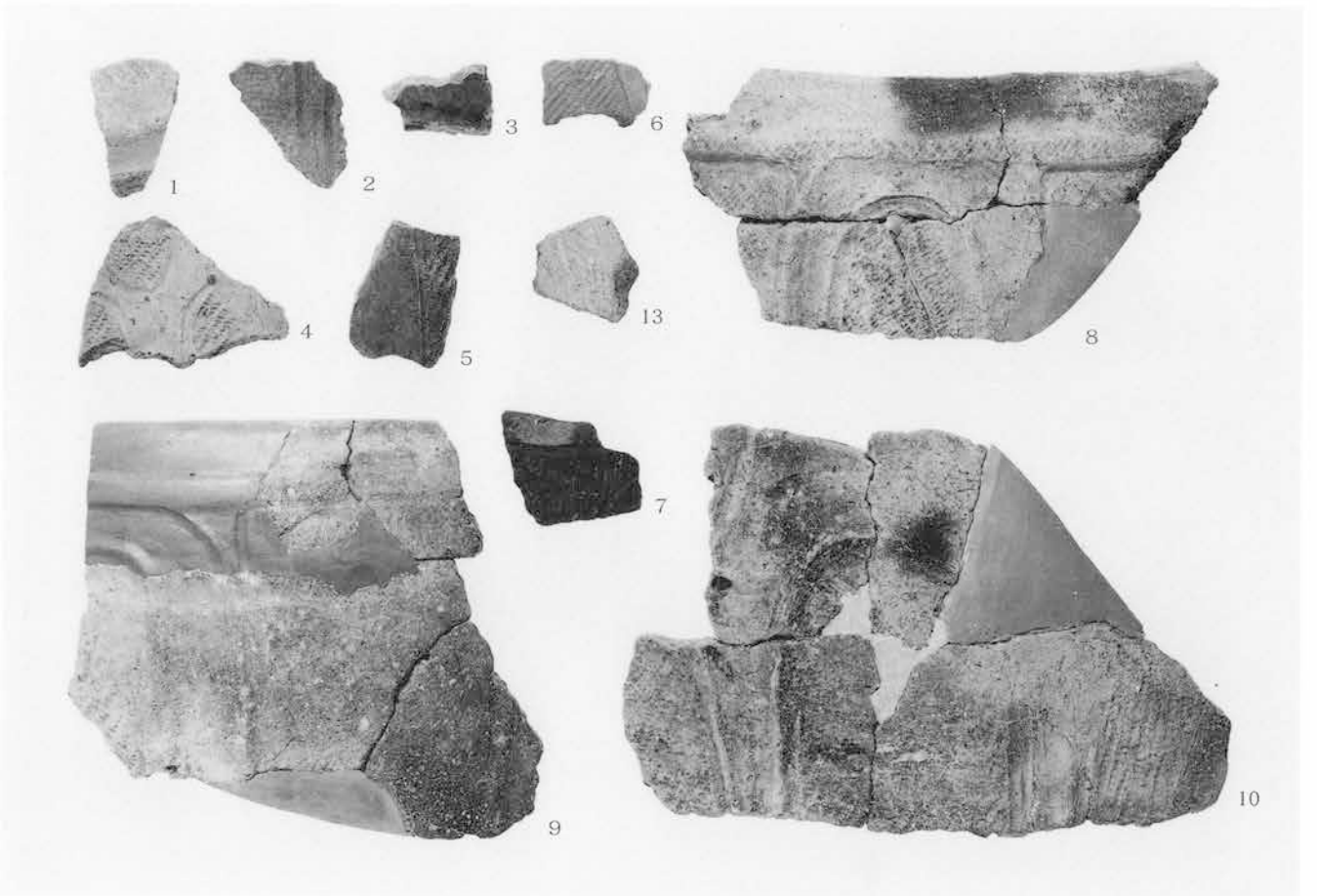
A区47号住居跡出土土器



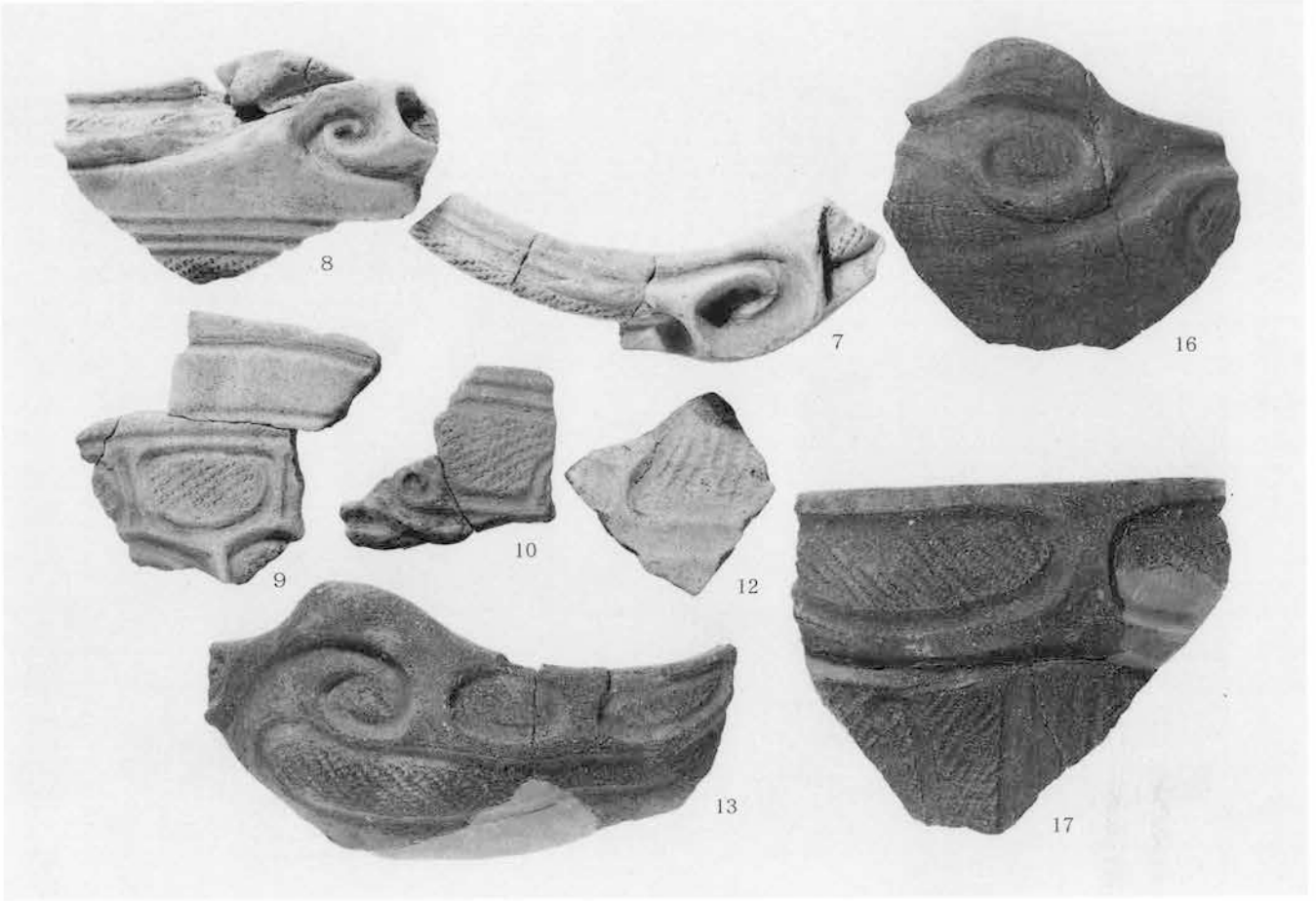
A区67号住居跡出土土器 (1)



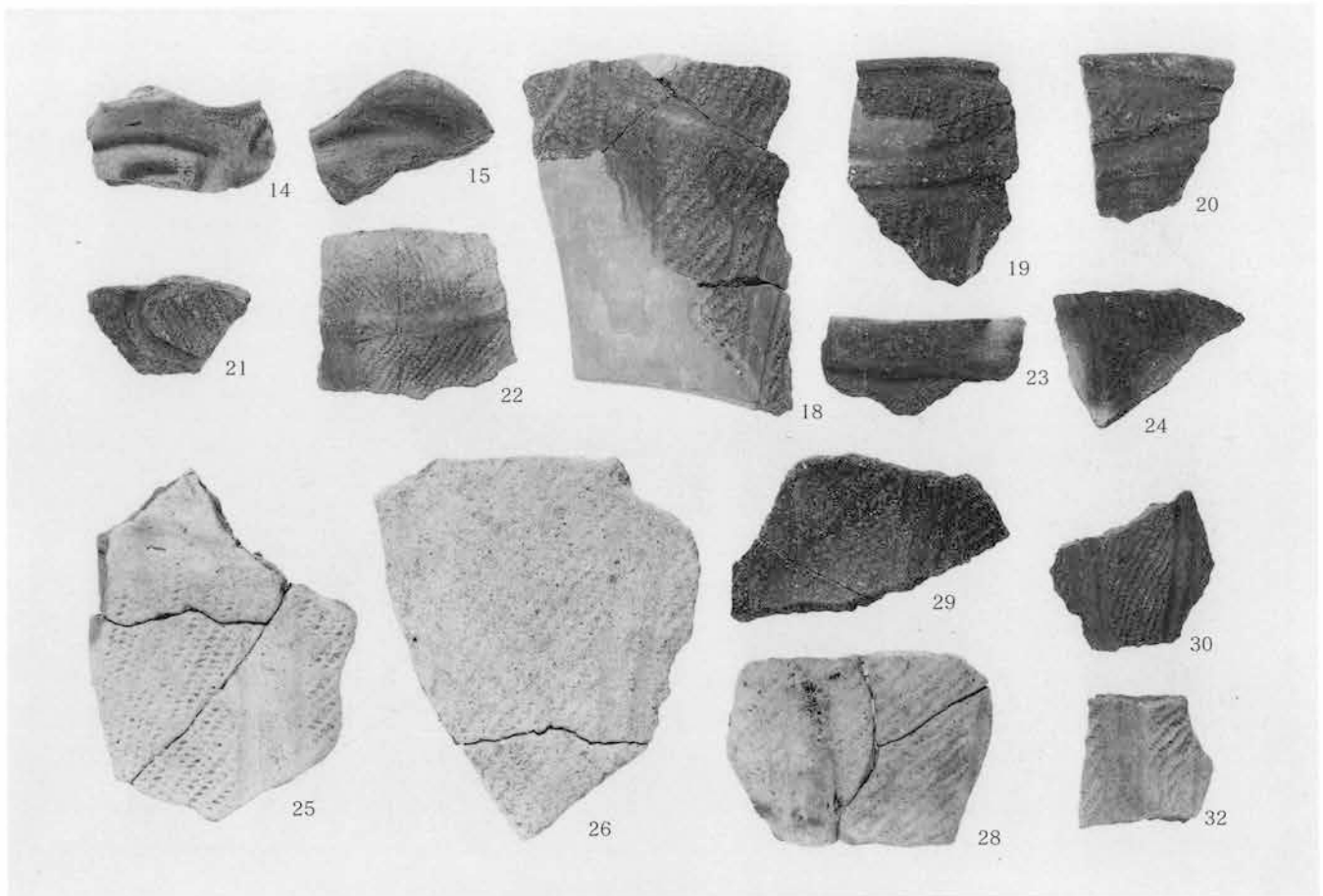
A区67号住居跡出土土器 (2)



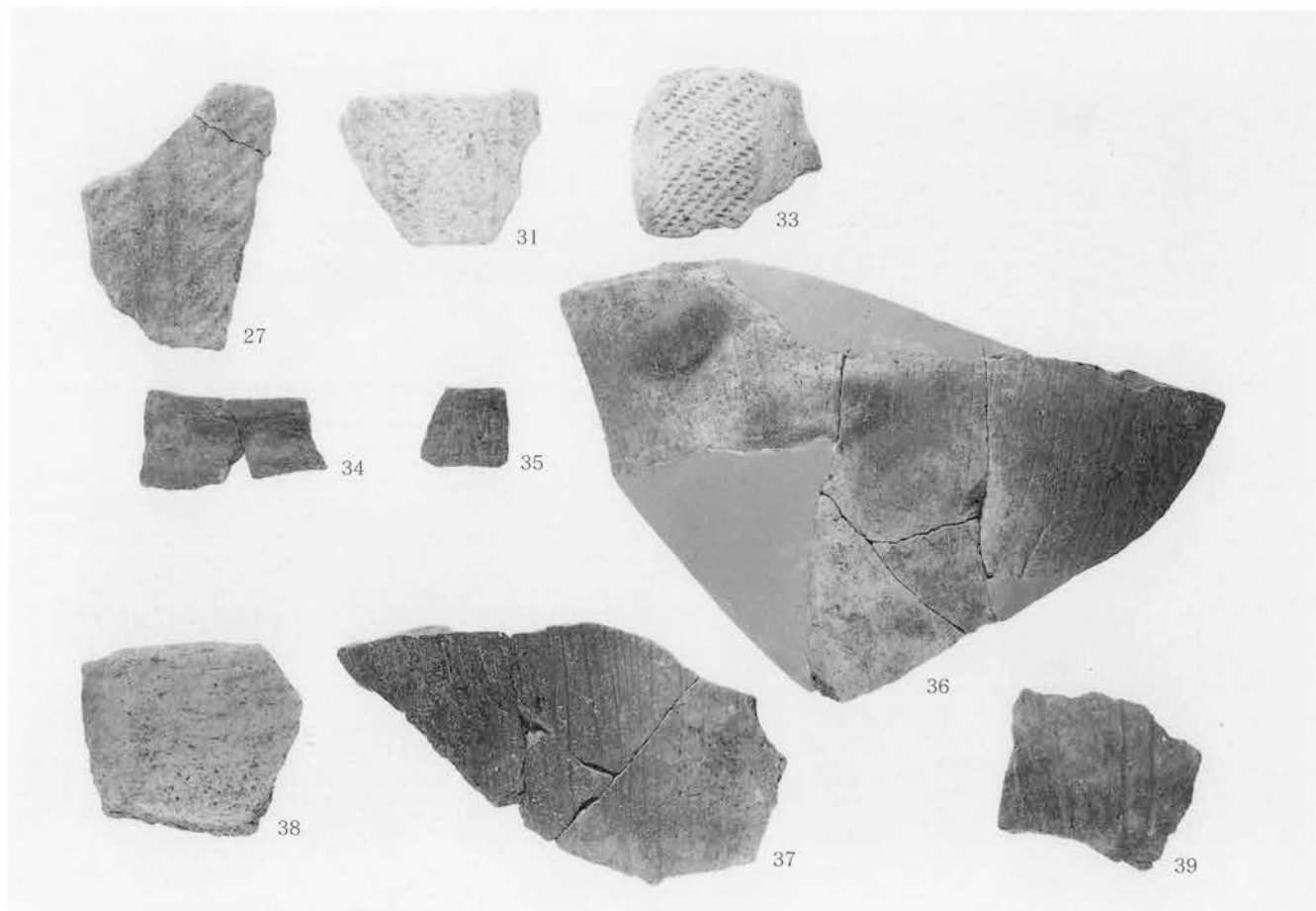
A区70号住居跡出土土器



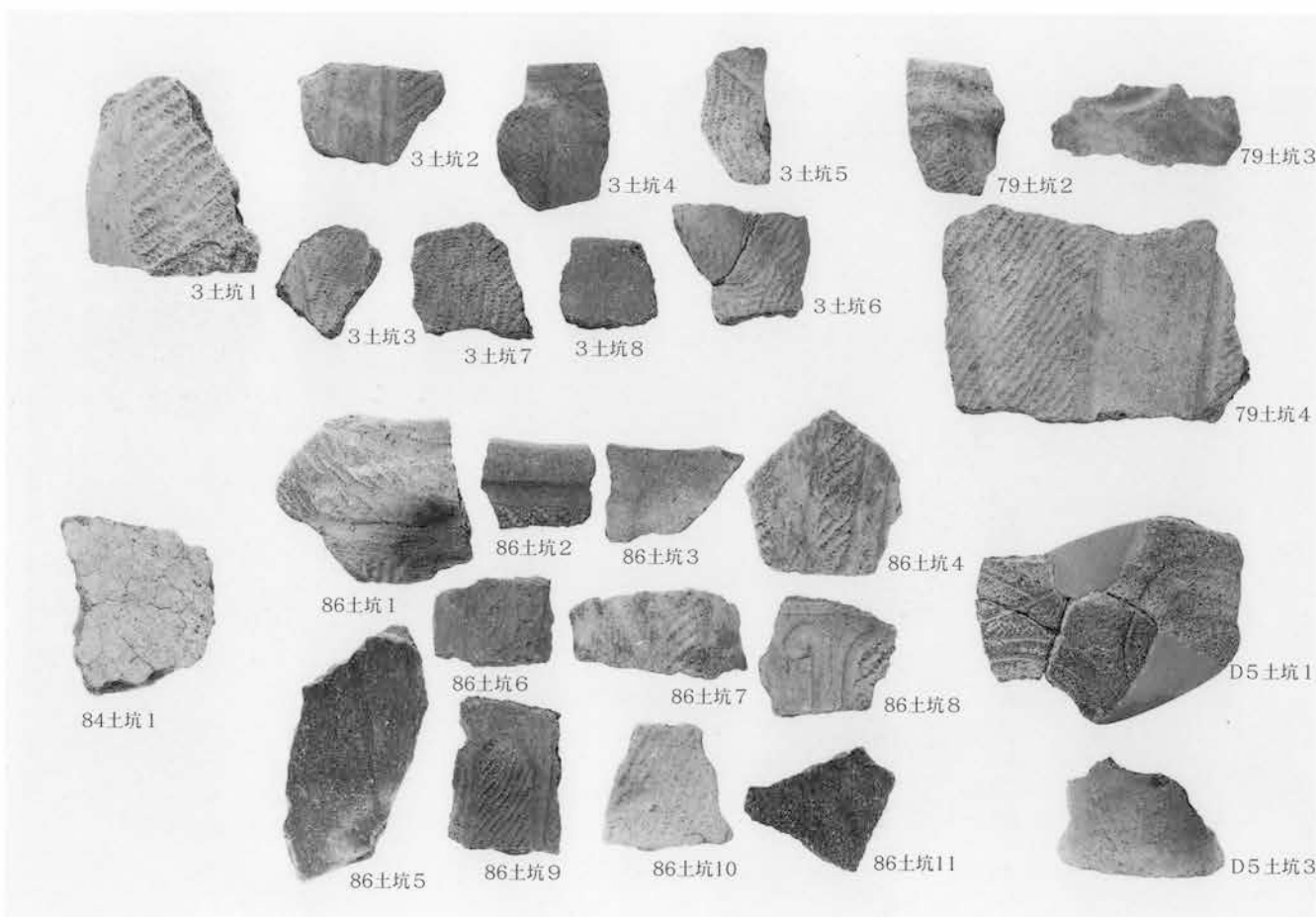
A区71号住居跡出土土器 (1)



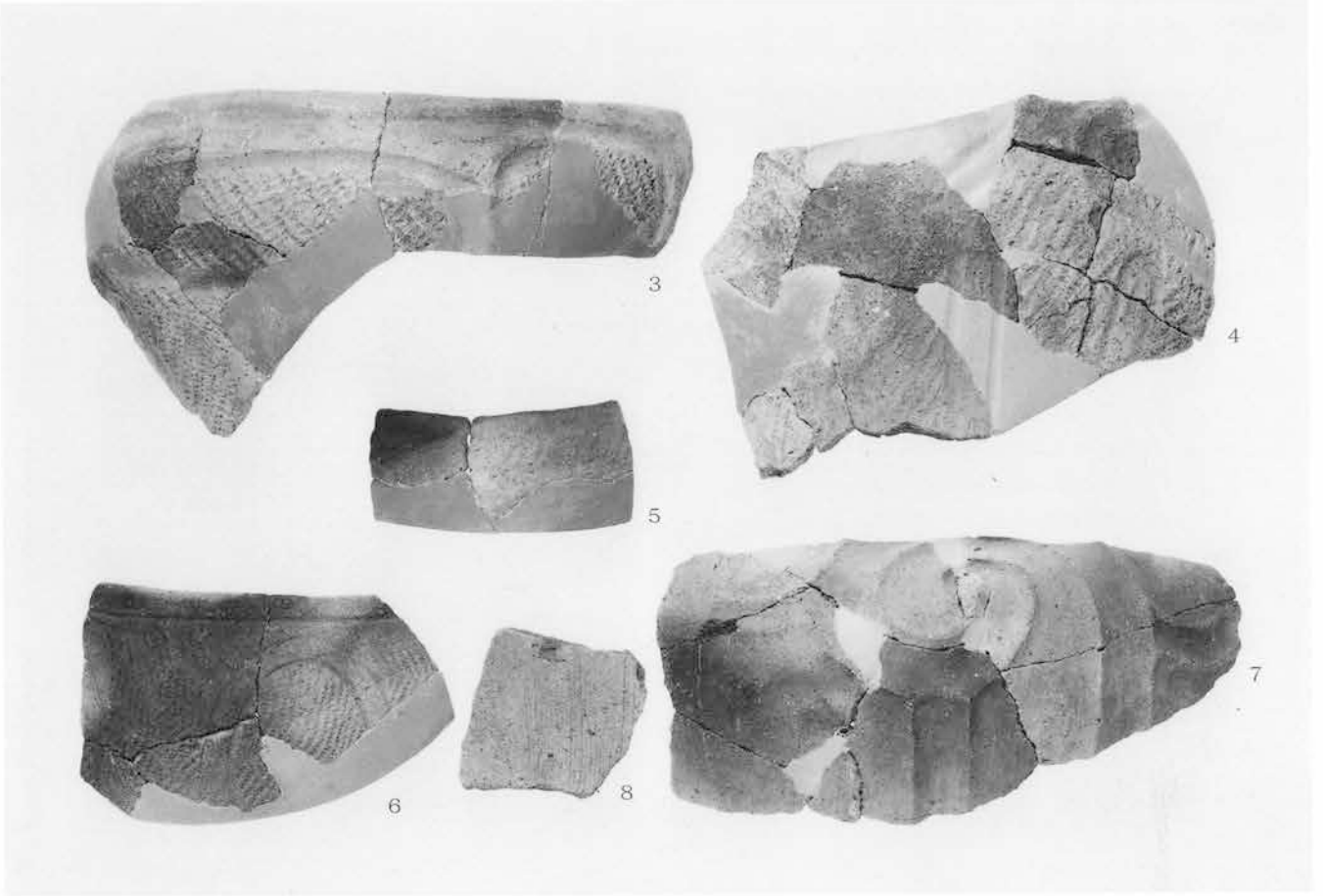
A区71号住居跡出土土器 (2)



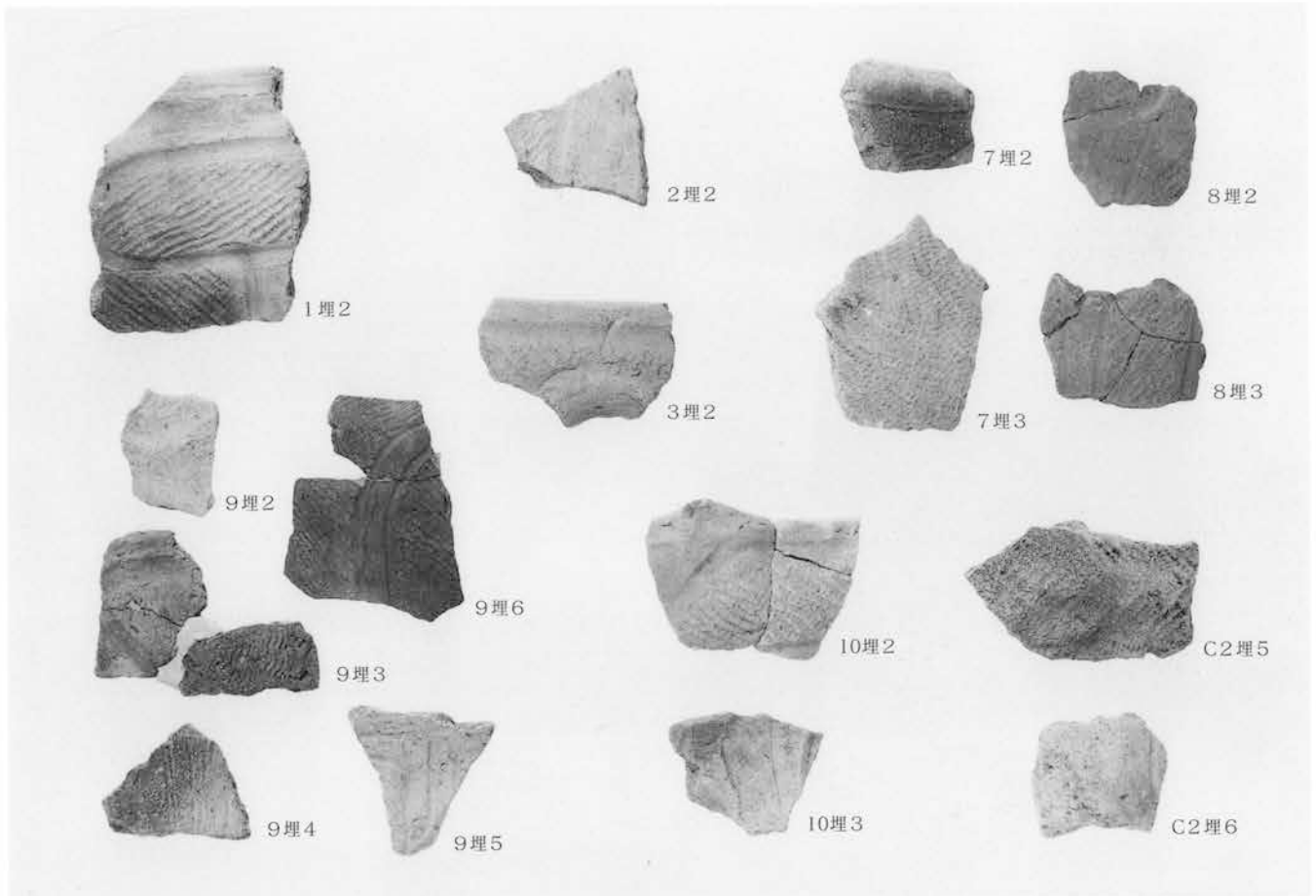
A区71号住居跡出土土器 (3)



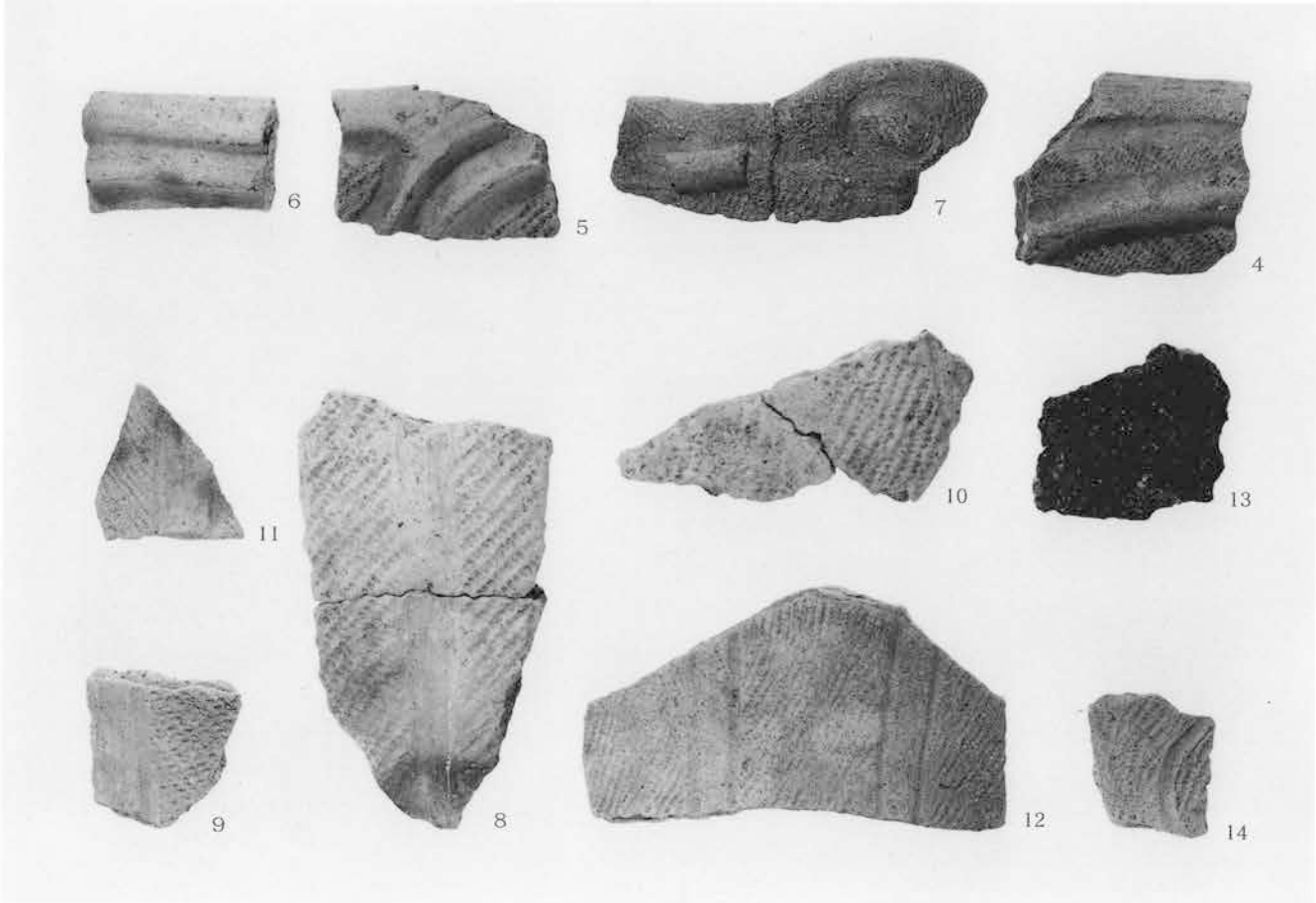
A区3·79·84·86·D区5号土坑出土土器



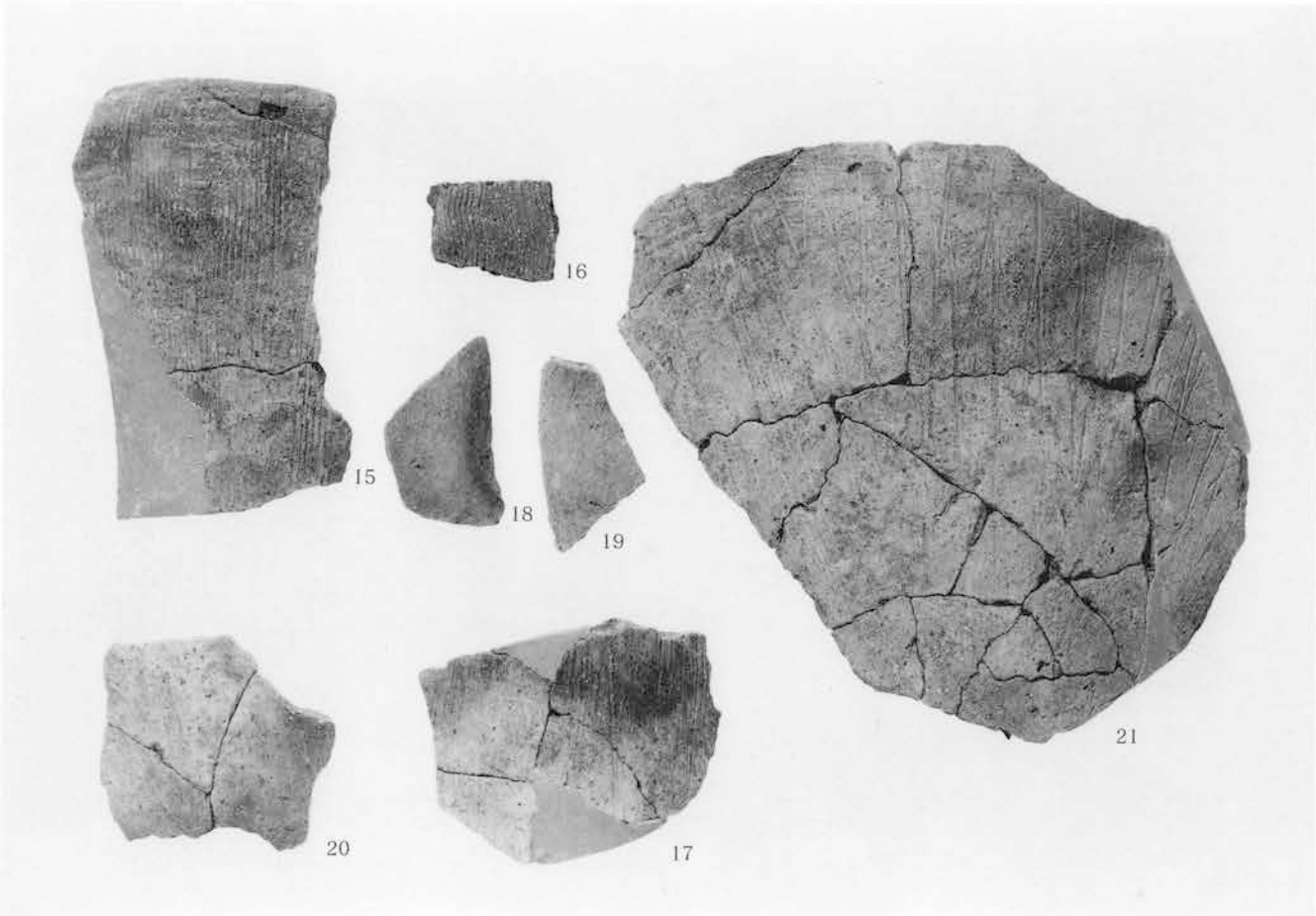
A区80号土坑出土土器



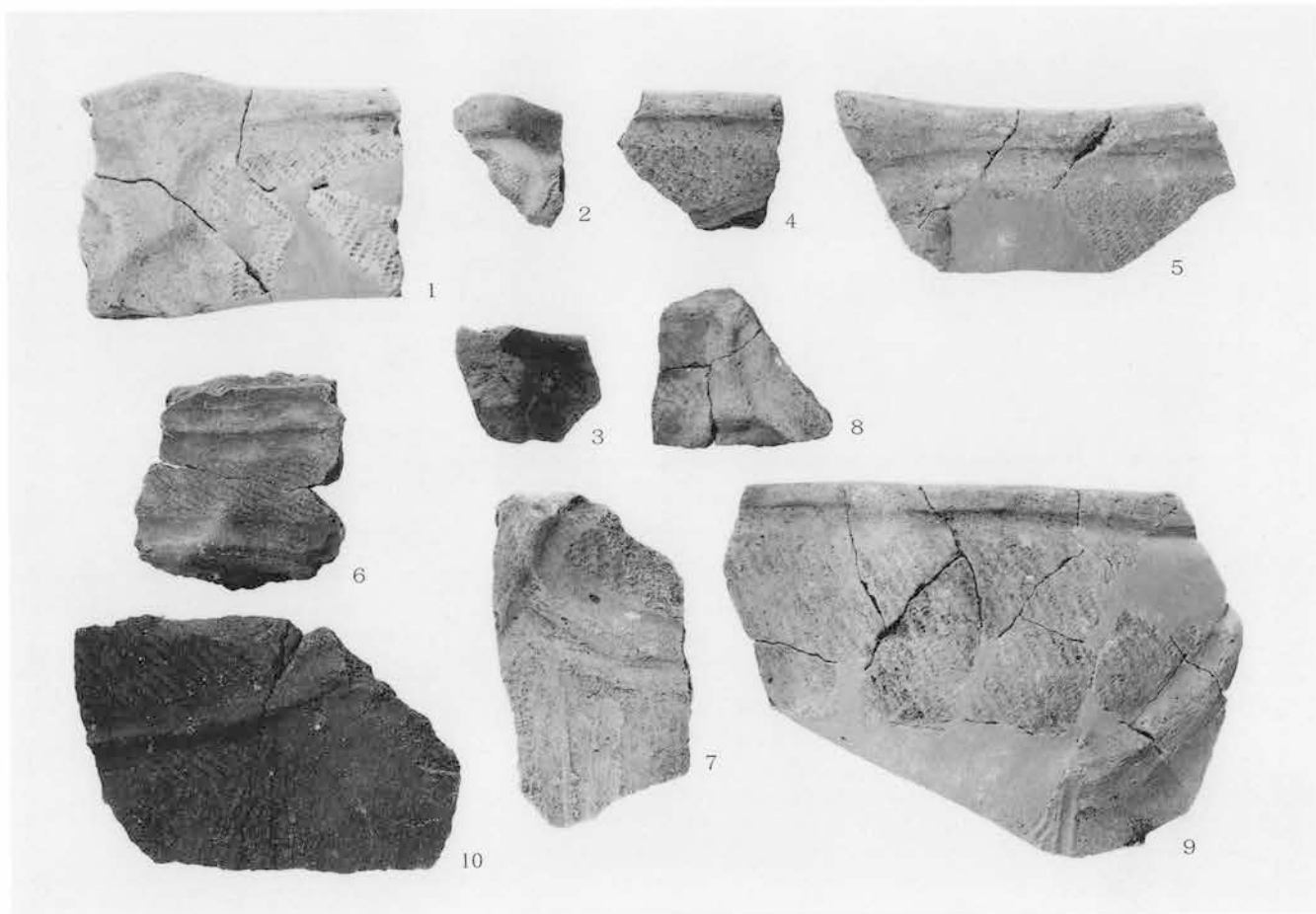
A区1·2·3·7·8·9·10·C区2号埋甕出土土器



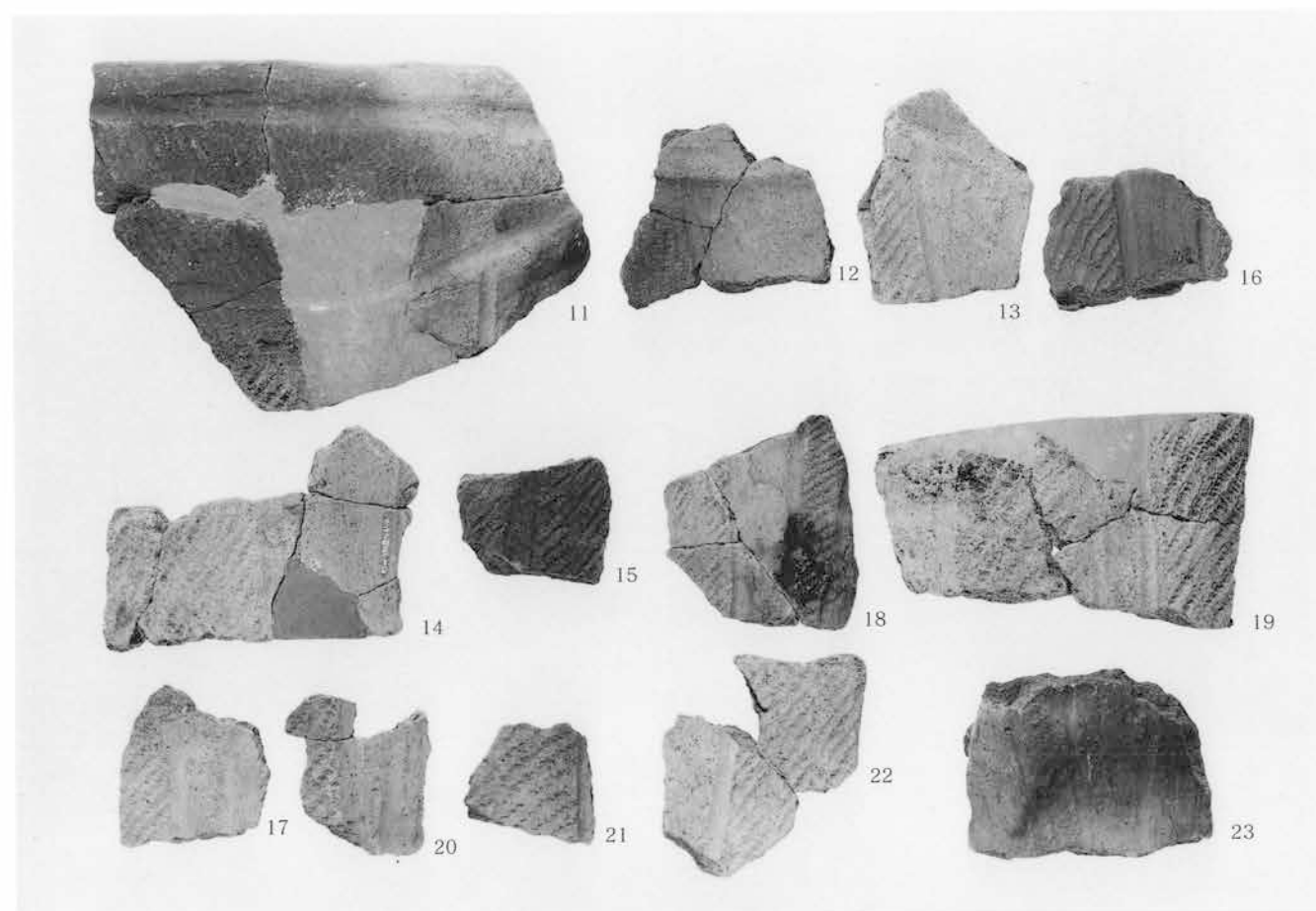
A区2号土器群出土土器 (1)



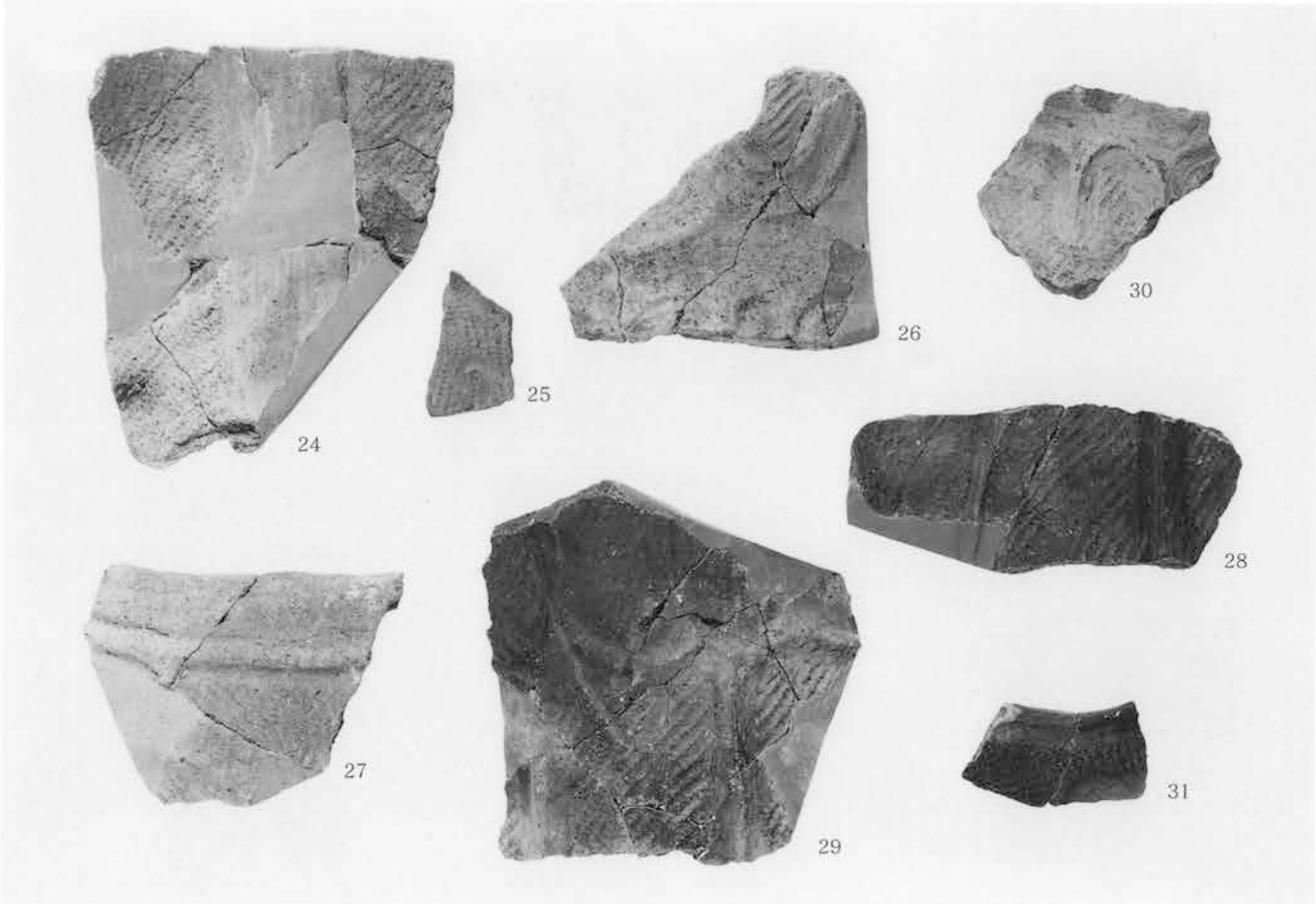
A区2号土器群出土土器 (2)



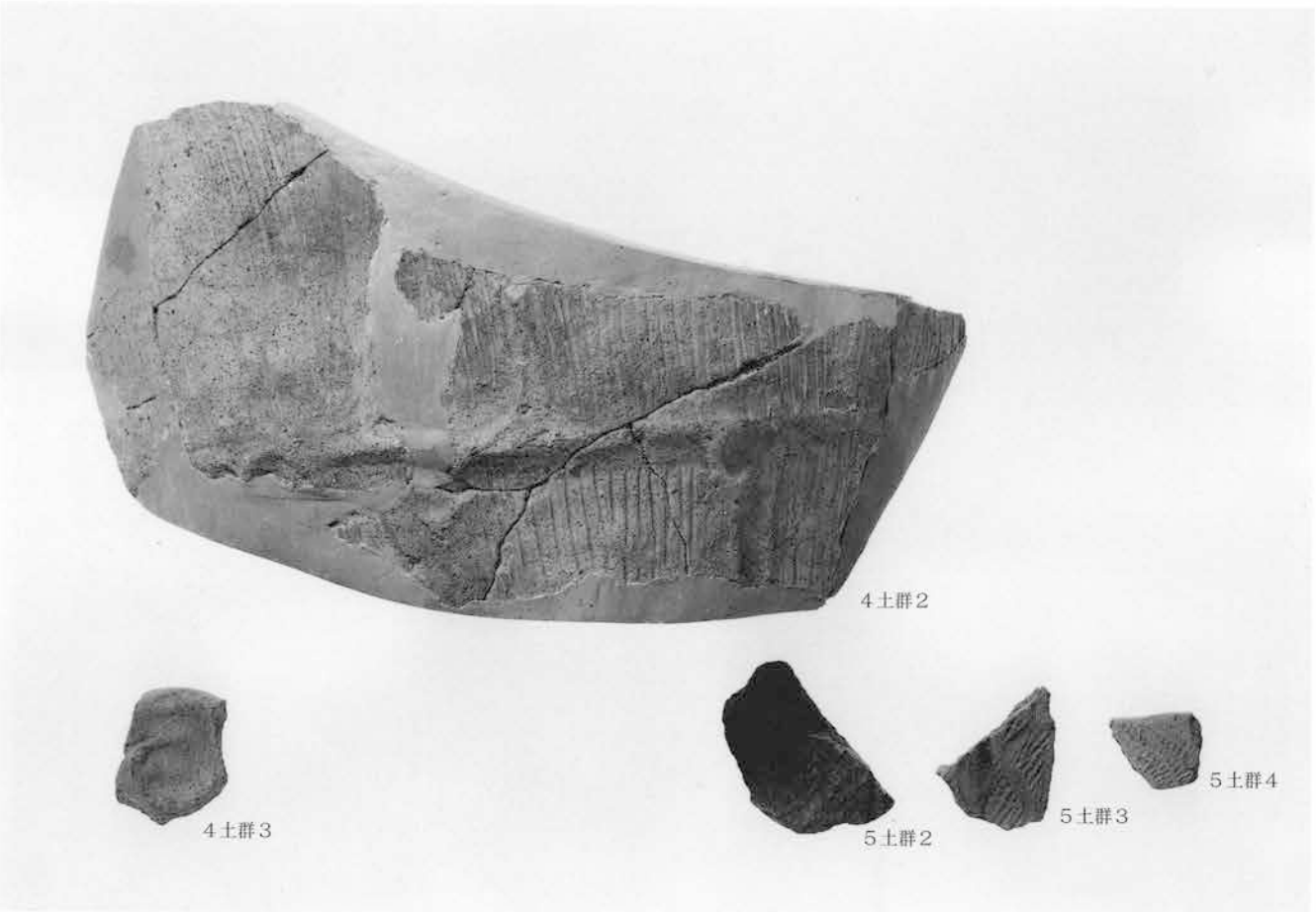
A区3号土器群出土土器 (1)



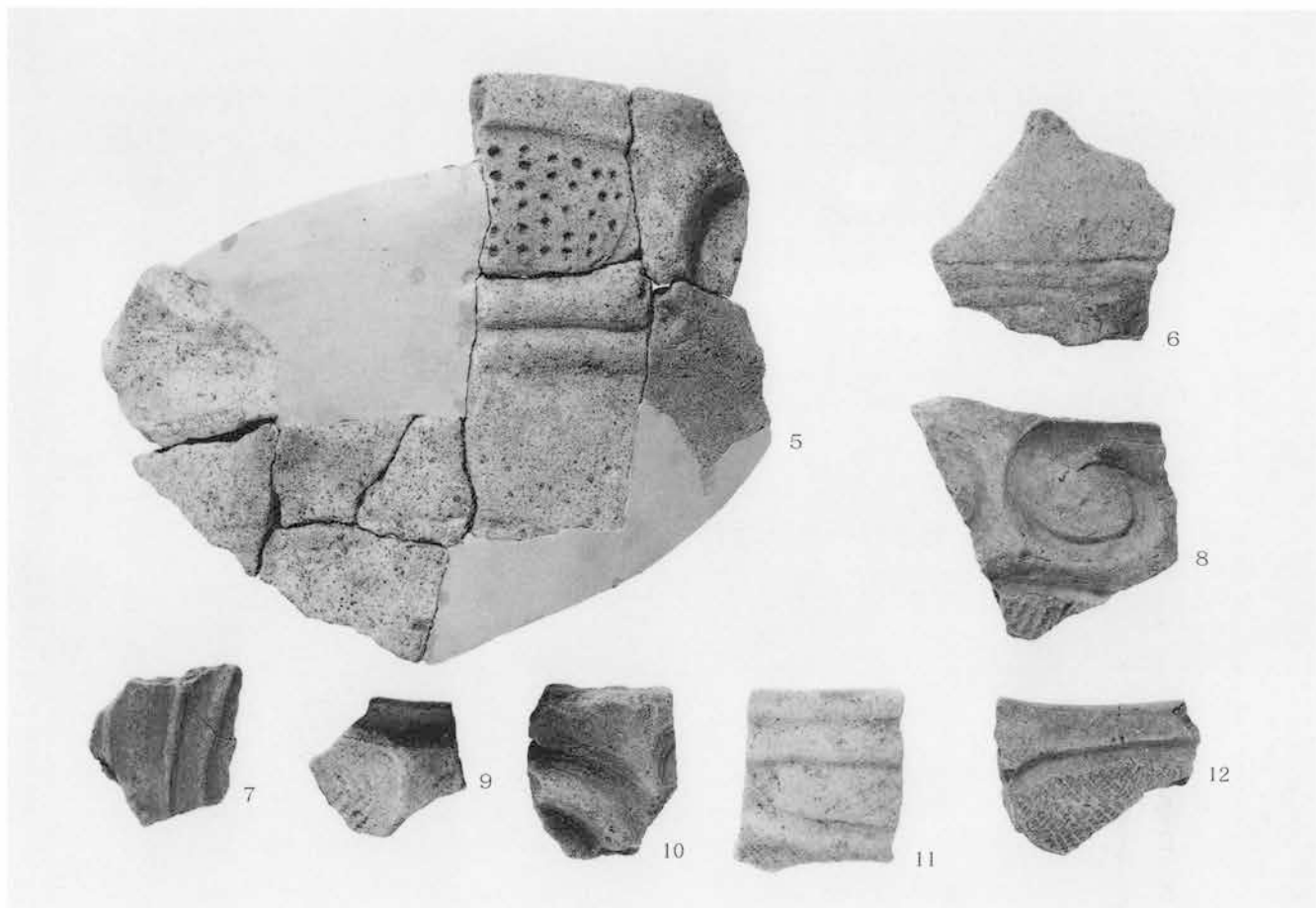
A区3号土器群出土土器 (2)



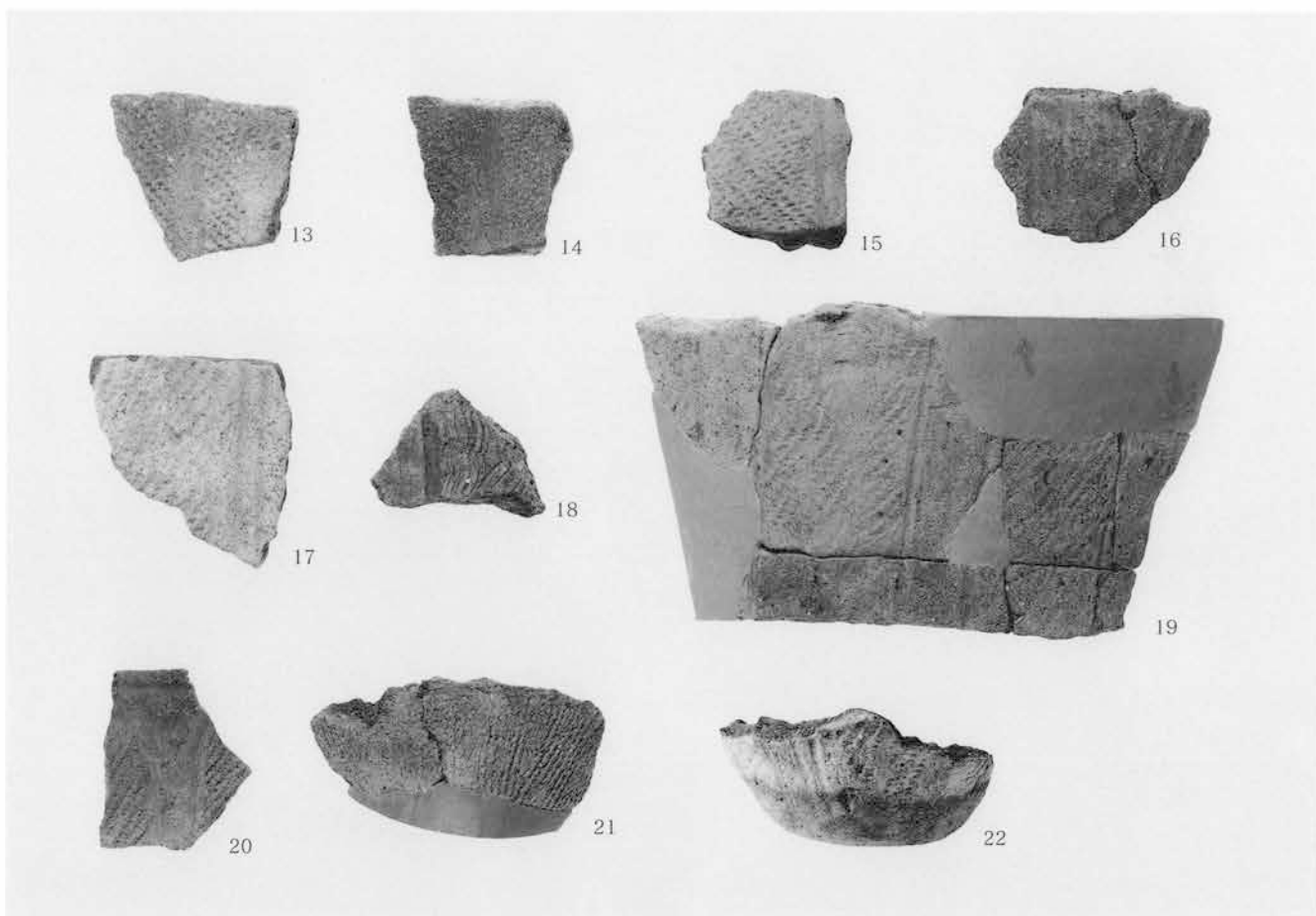
A区3号土器群出土土器 (3)



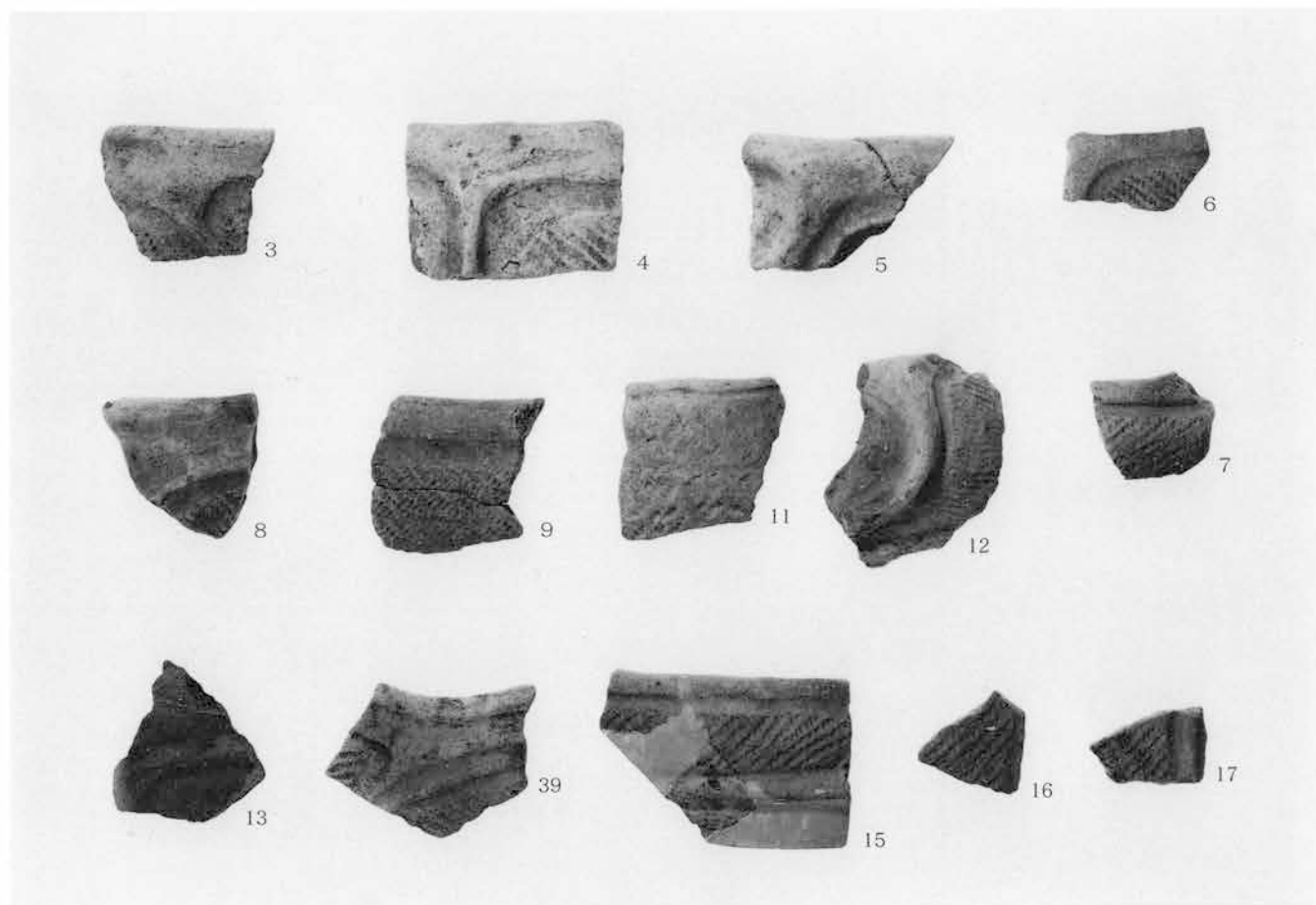
A区4・5号土器群出土土器



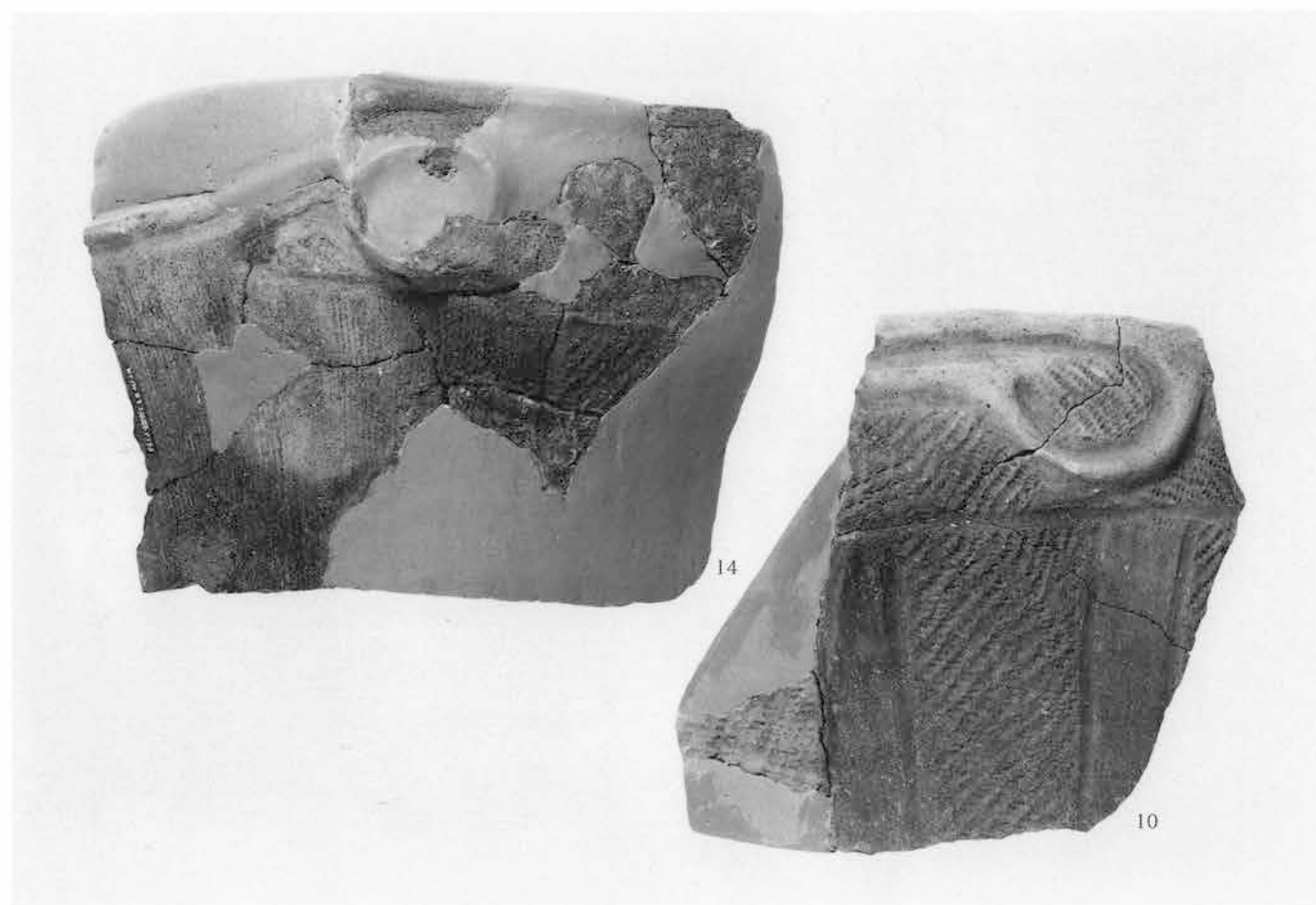
A区6号土器群出土土器 (1)



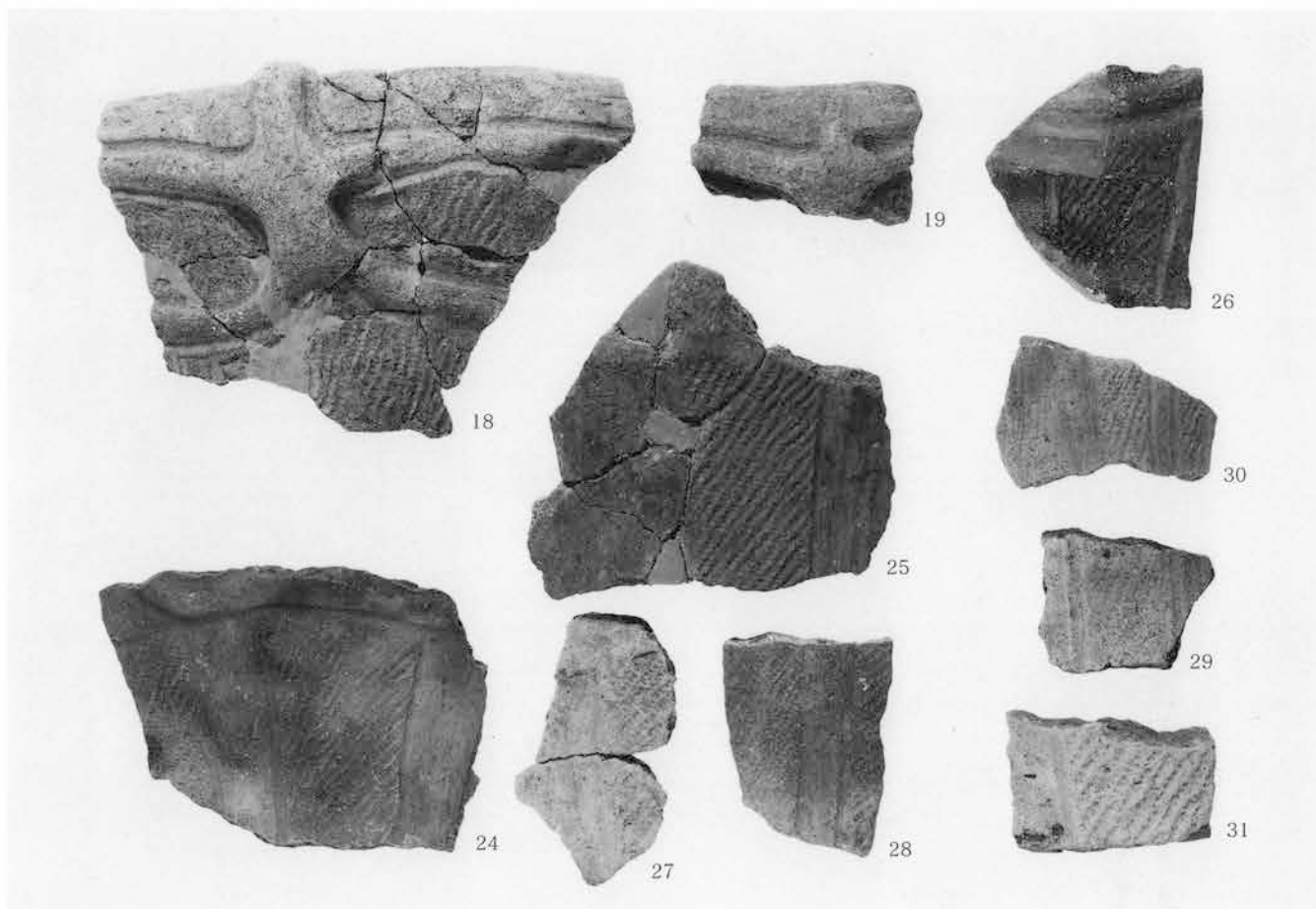
A区6号土器群出土土器 (2)



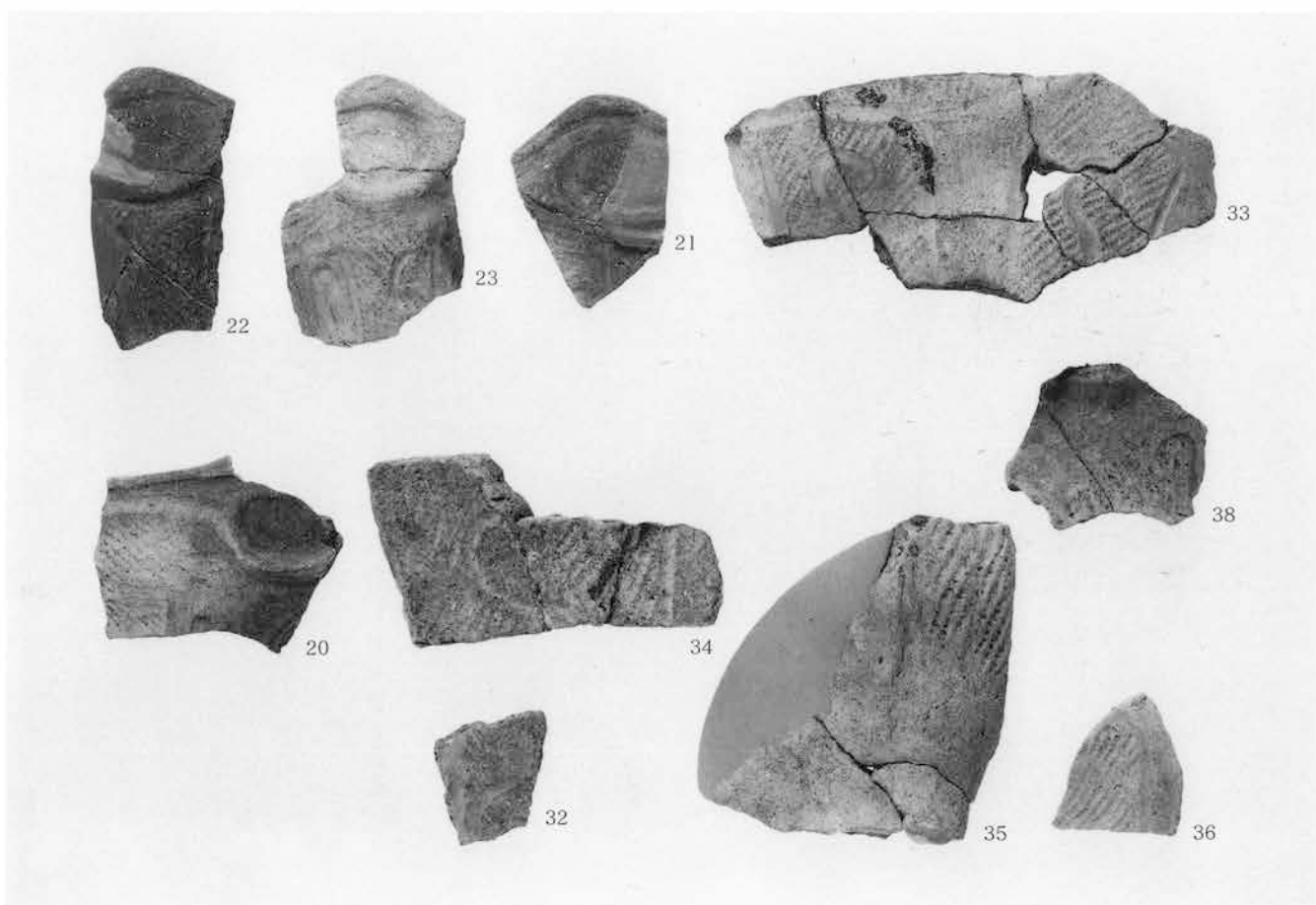
A区8号土器群出土土器 (1)



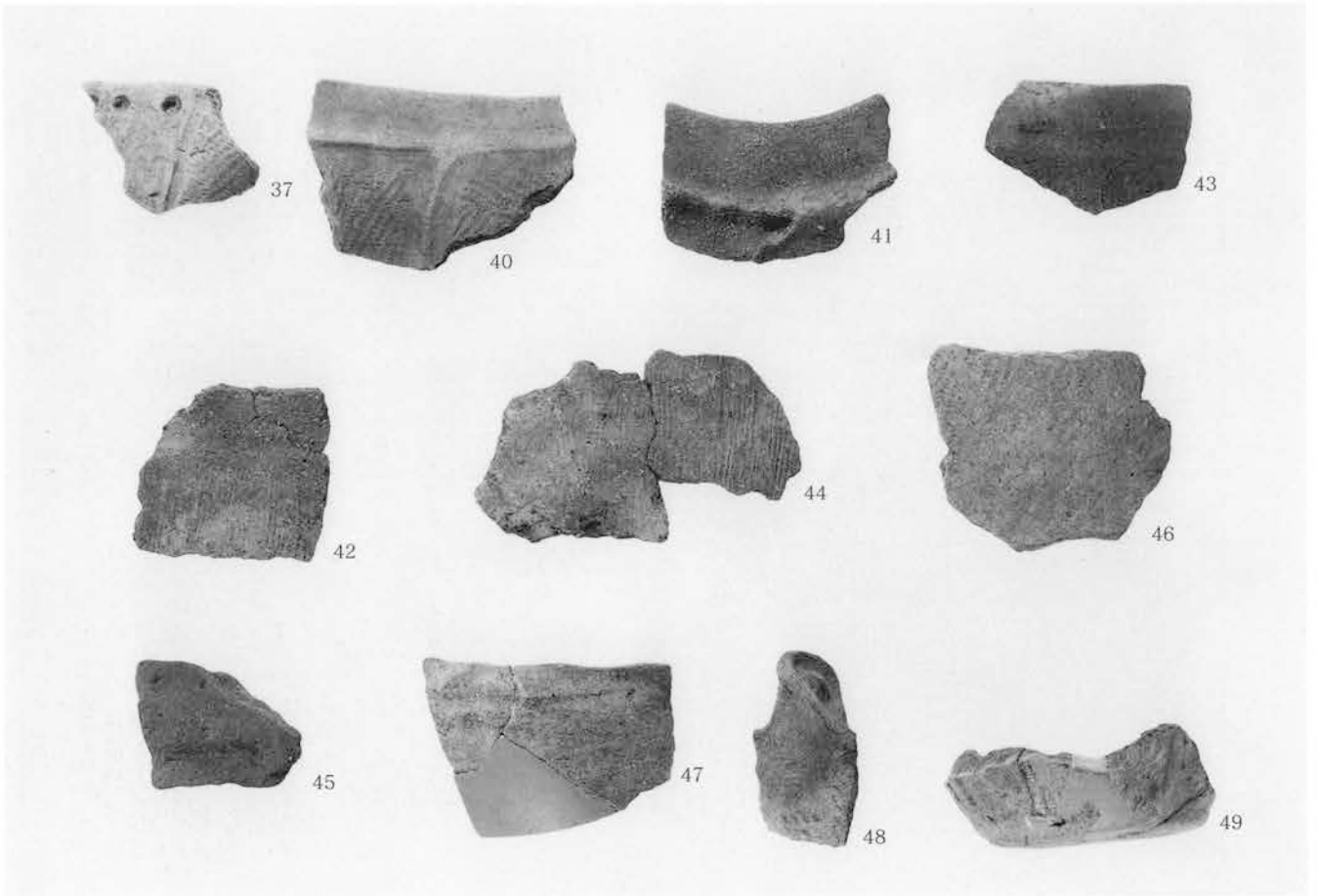
A区8号土器群出土土器 (2)



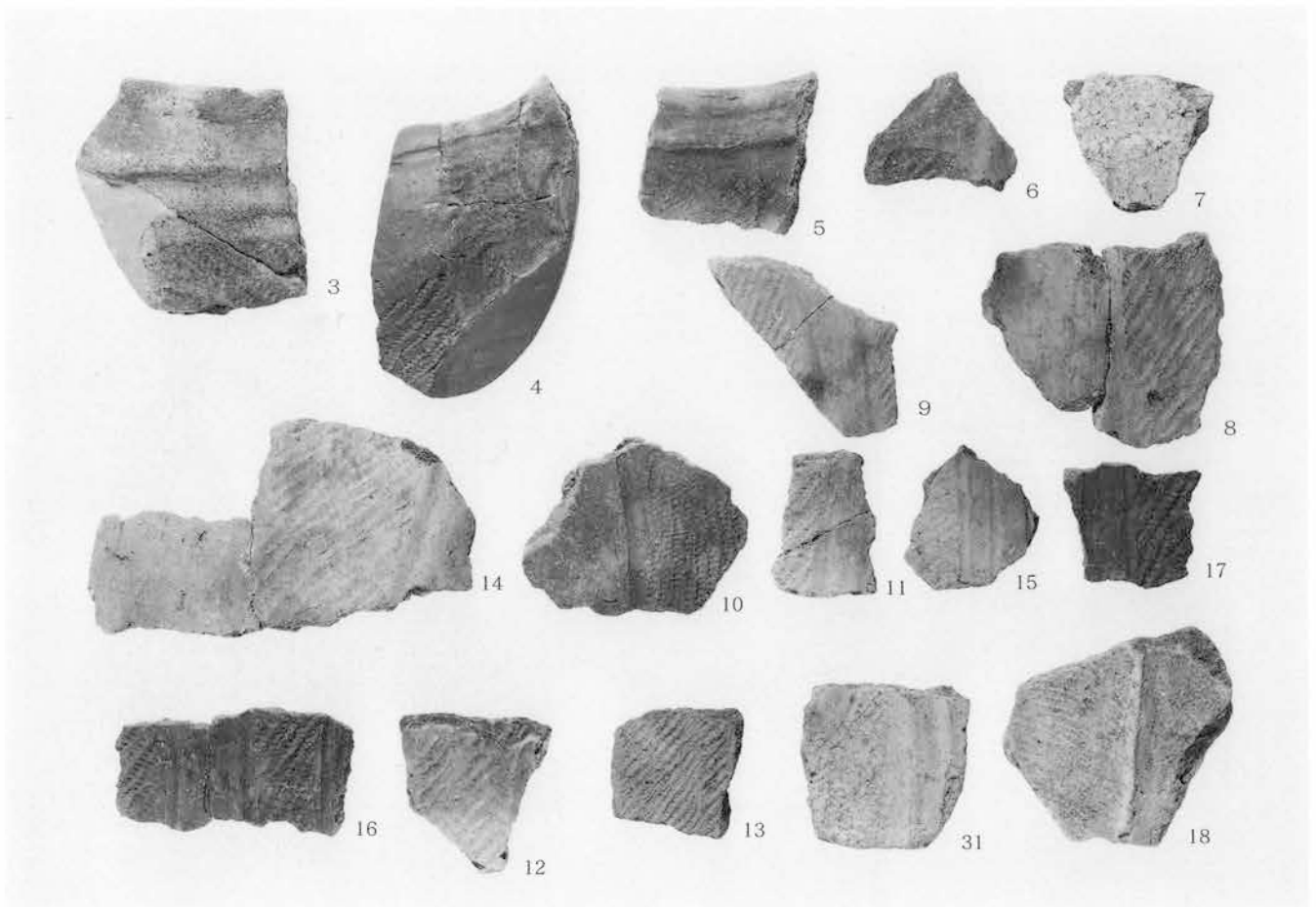
A区8号土器群出土土器 (3)



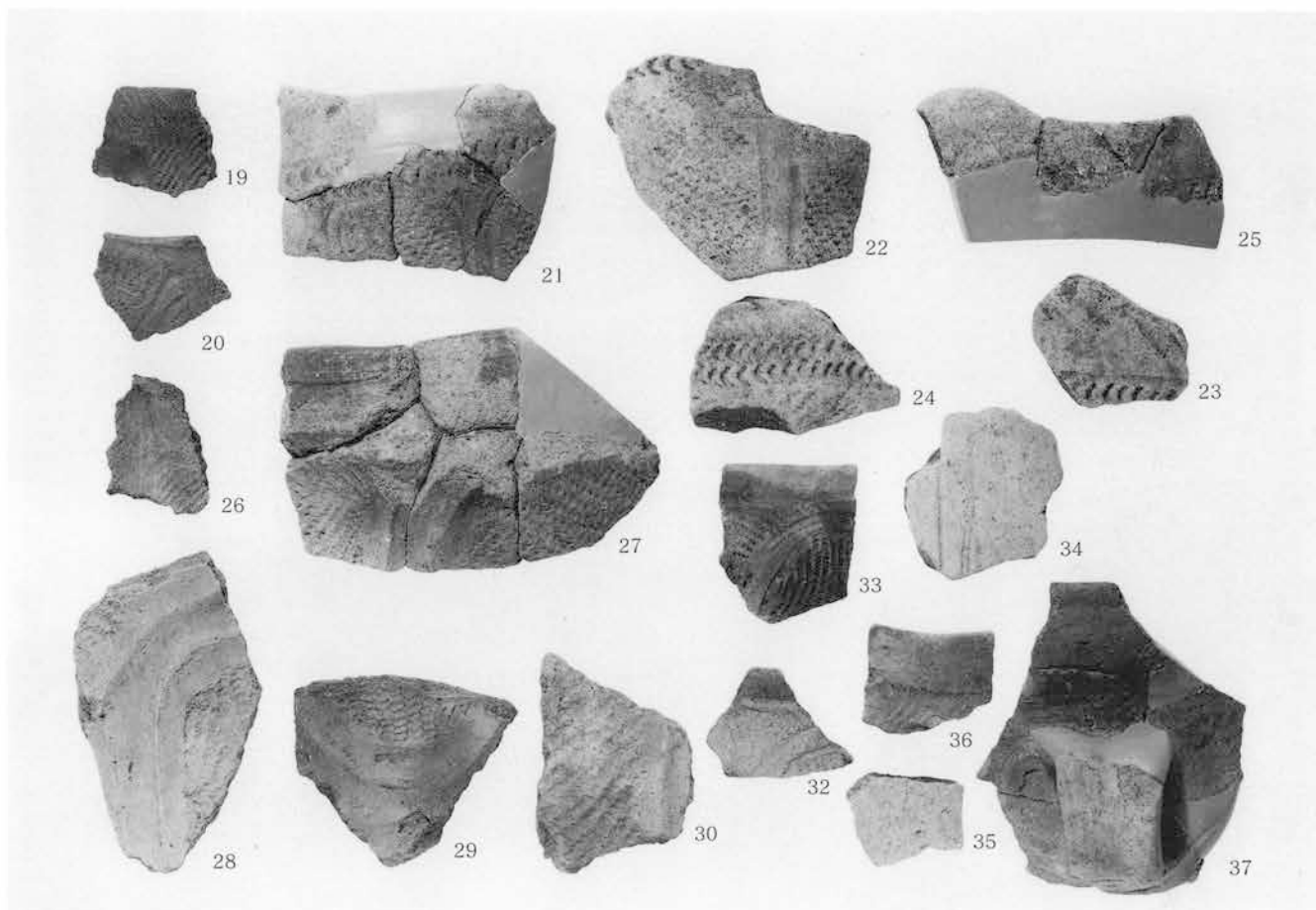
A区8号土器群出土土器 (4)



A区8号土器群出土土器 (5)



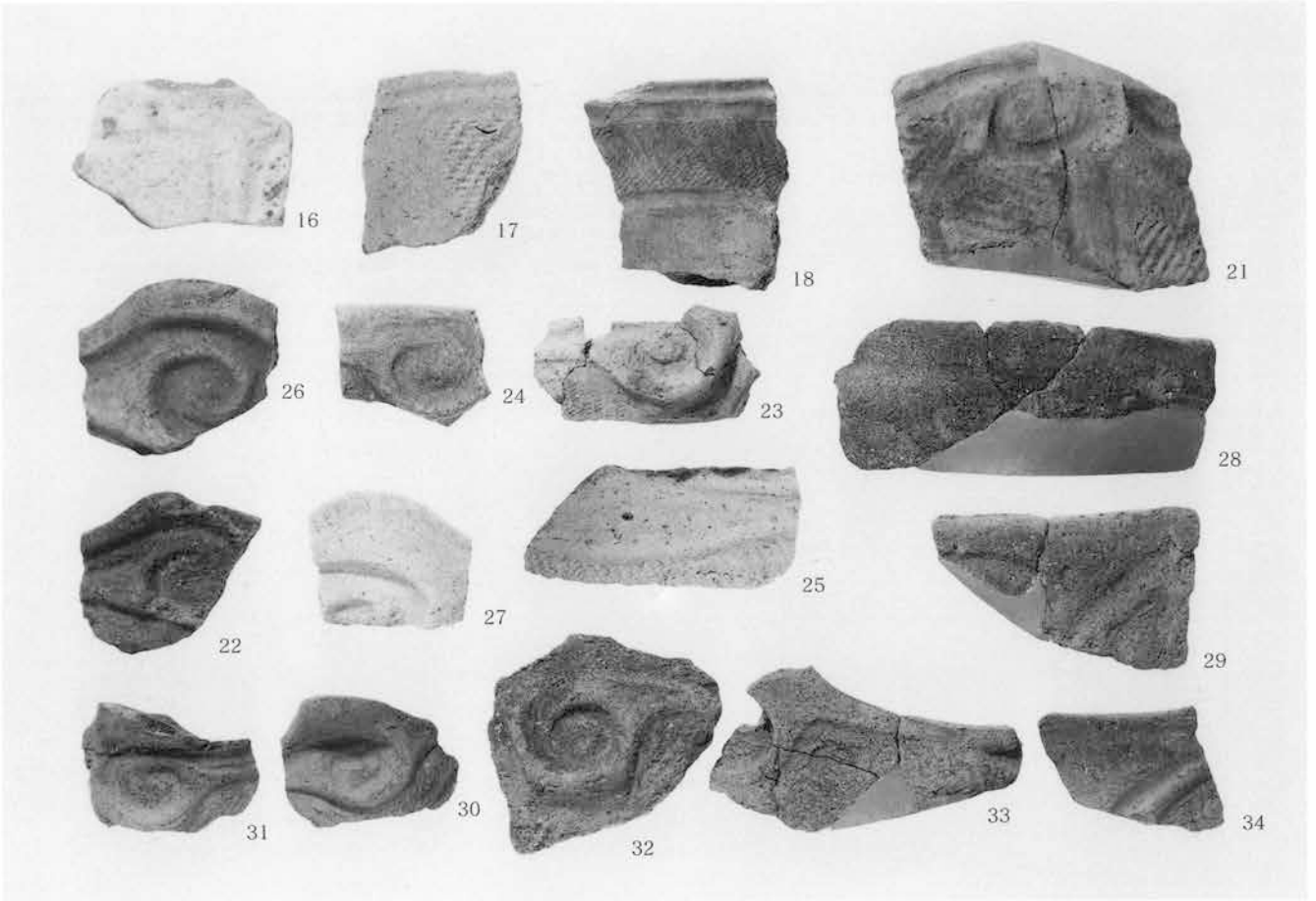
A区9号土器群出土土器 (1)



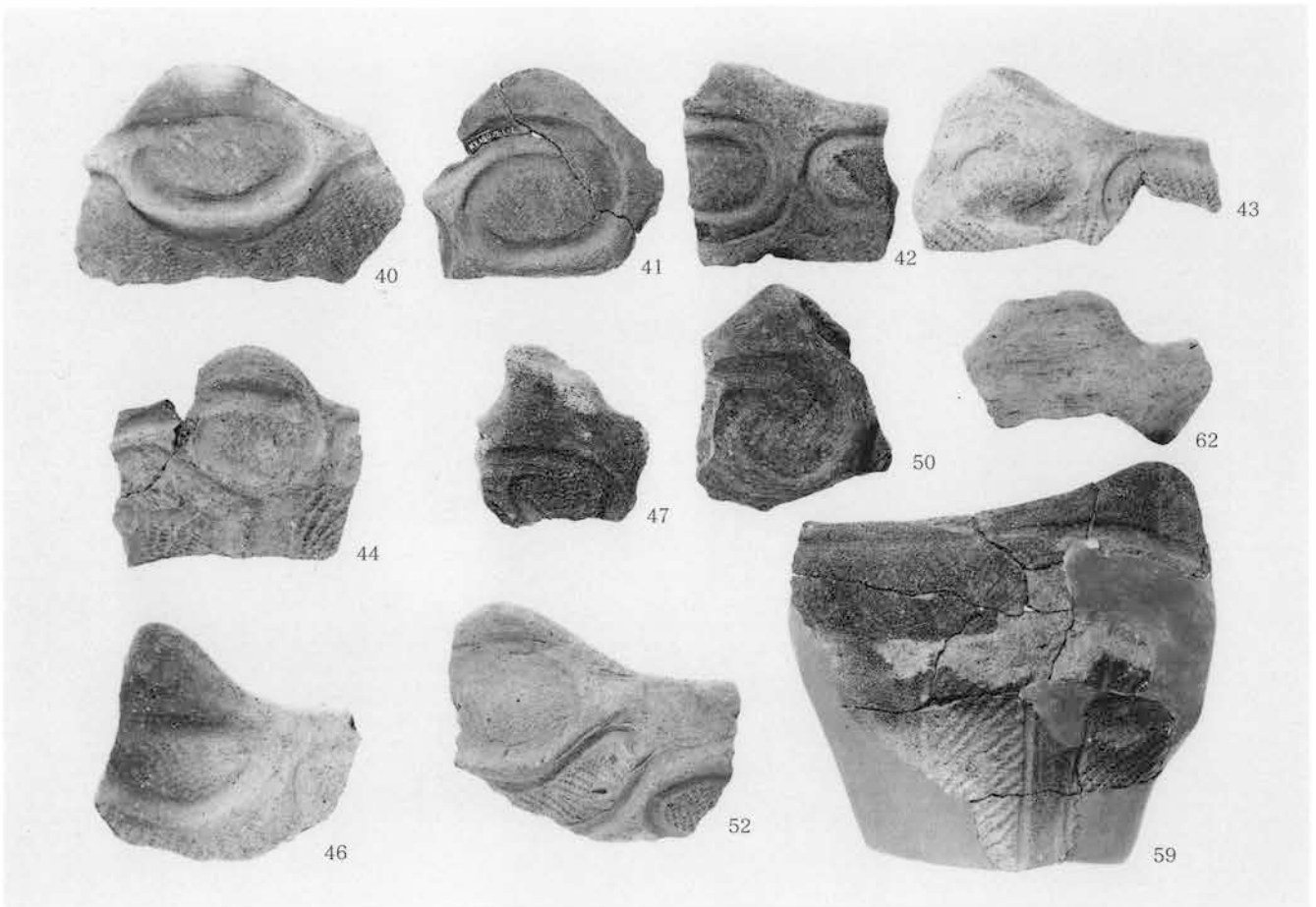
A区9号土器群出土土器 (2)



遺構外出土土器 (第1・2群)



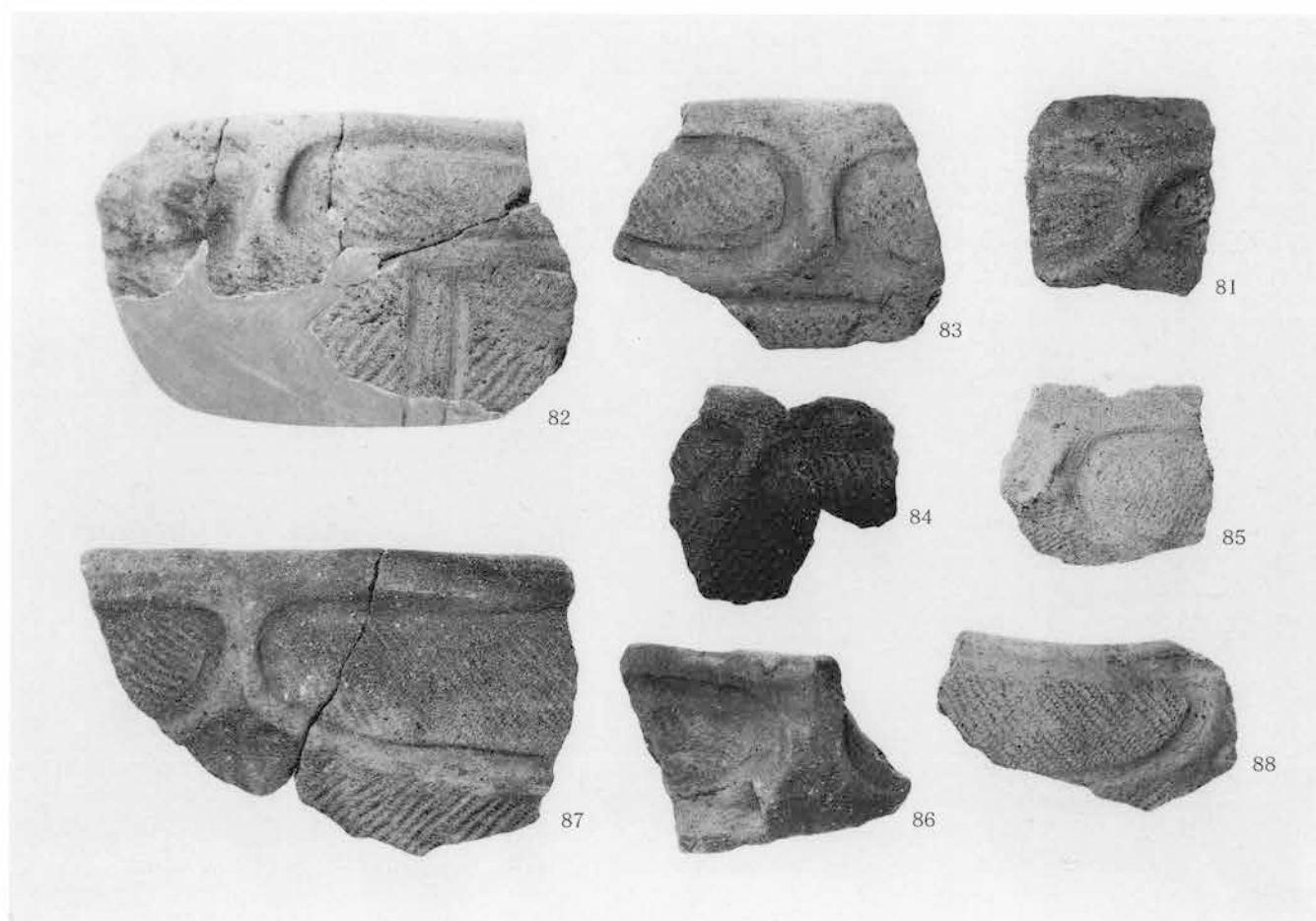
遺構外出土土器 (第3群)



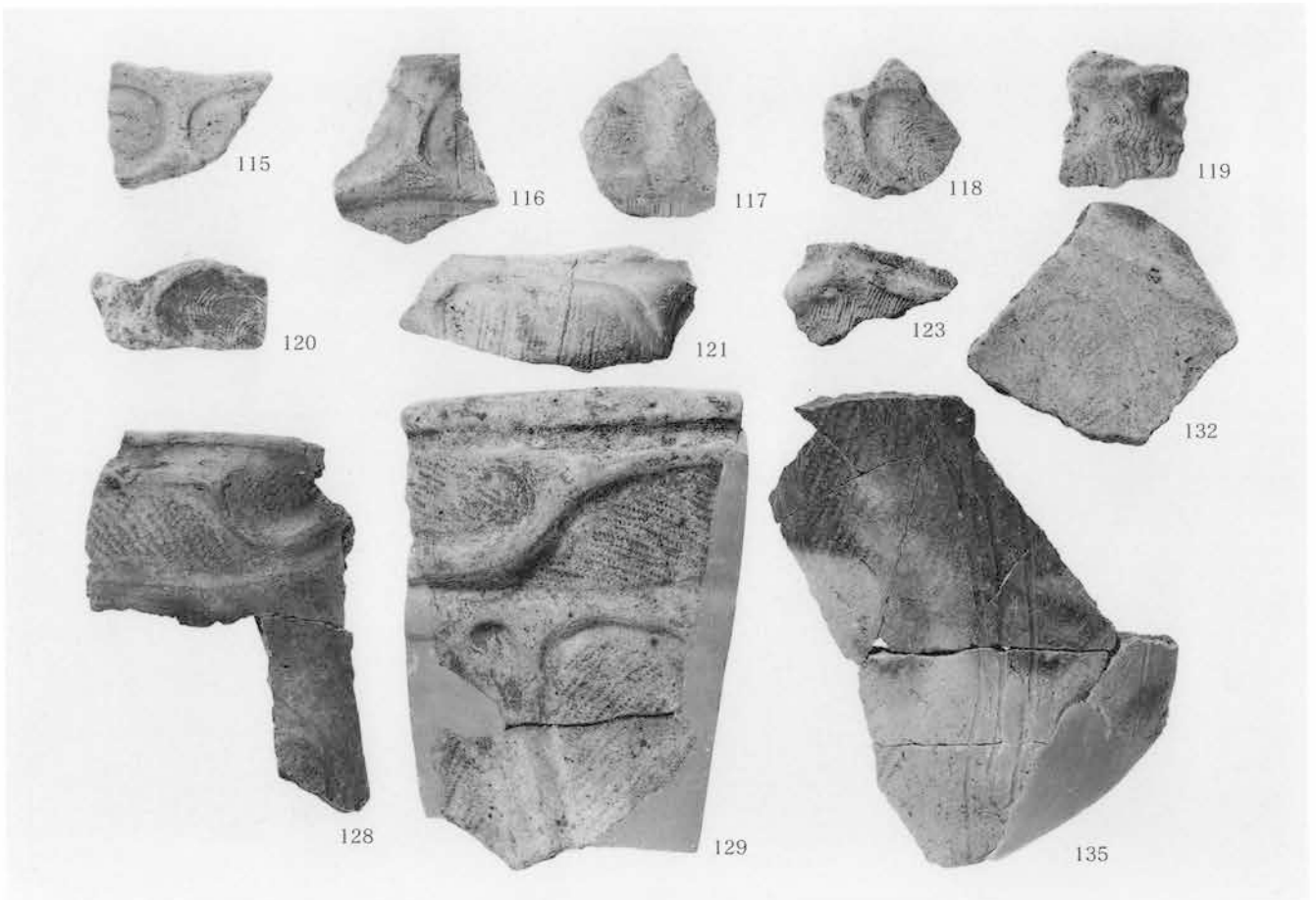
遺構外出土土器 (第3群)



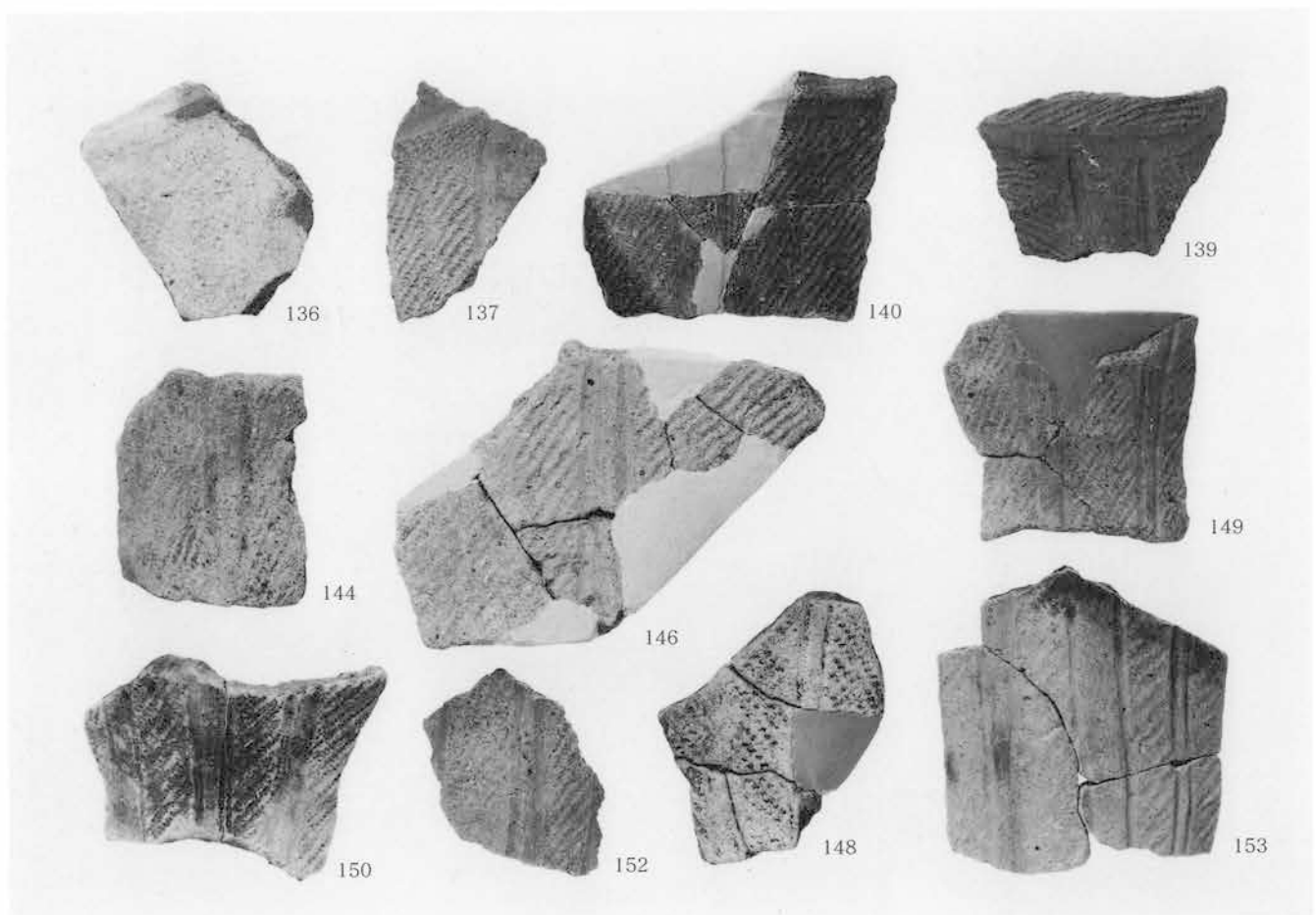
遺構外出土土器 (第3群)



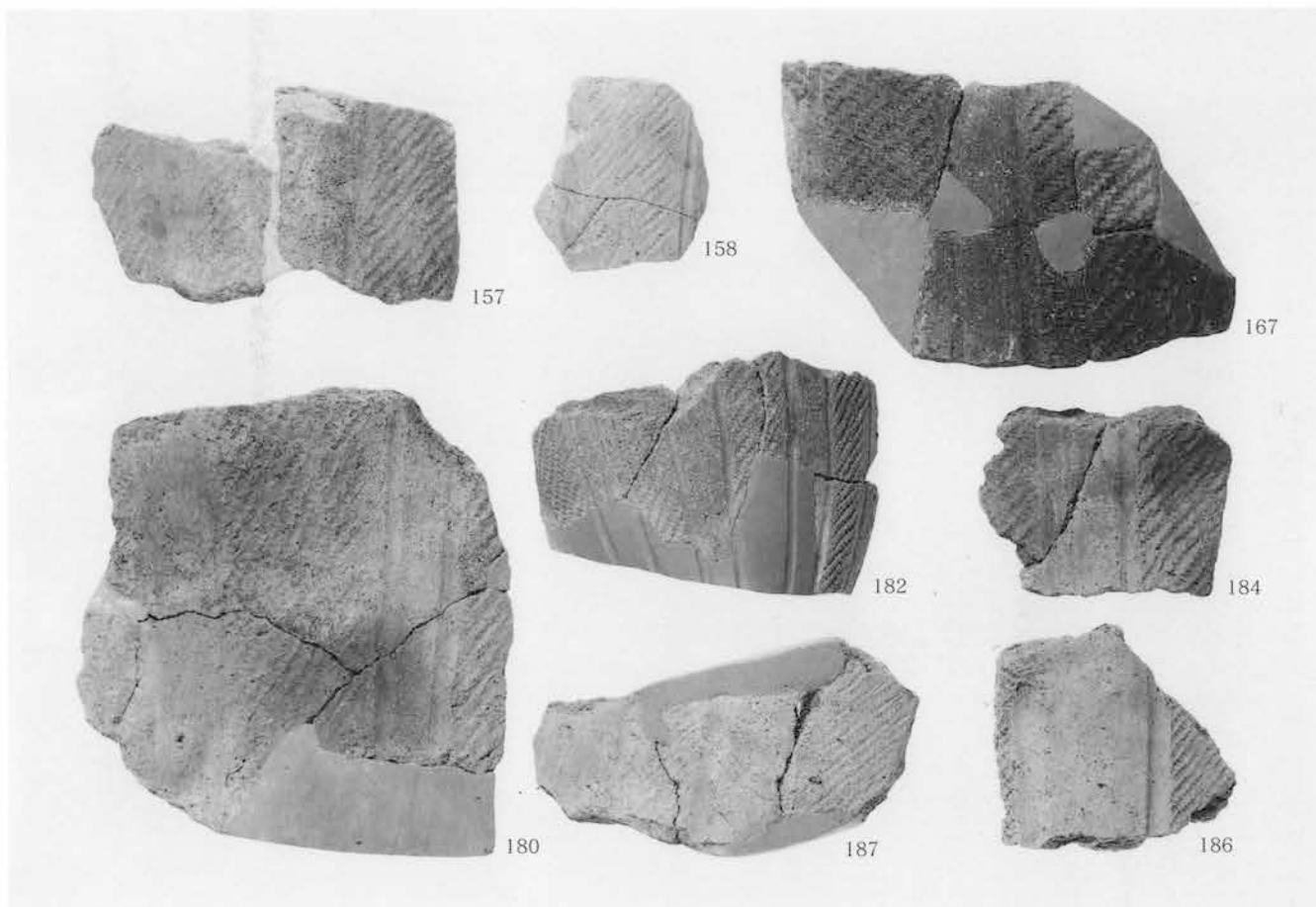
遺構外出土土器 (第3群)



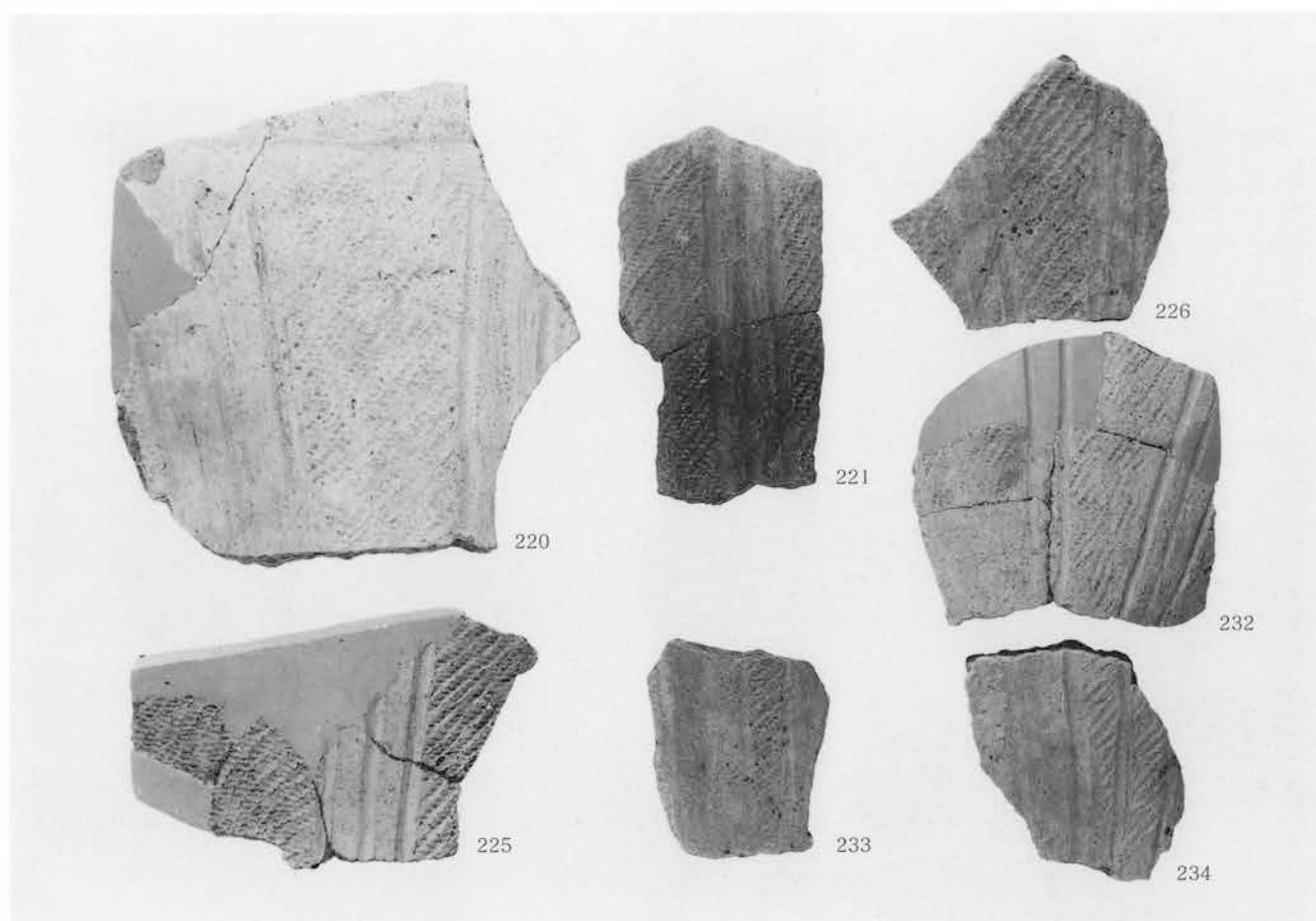
遺構外出土土器 (第3群)



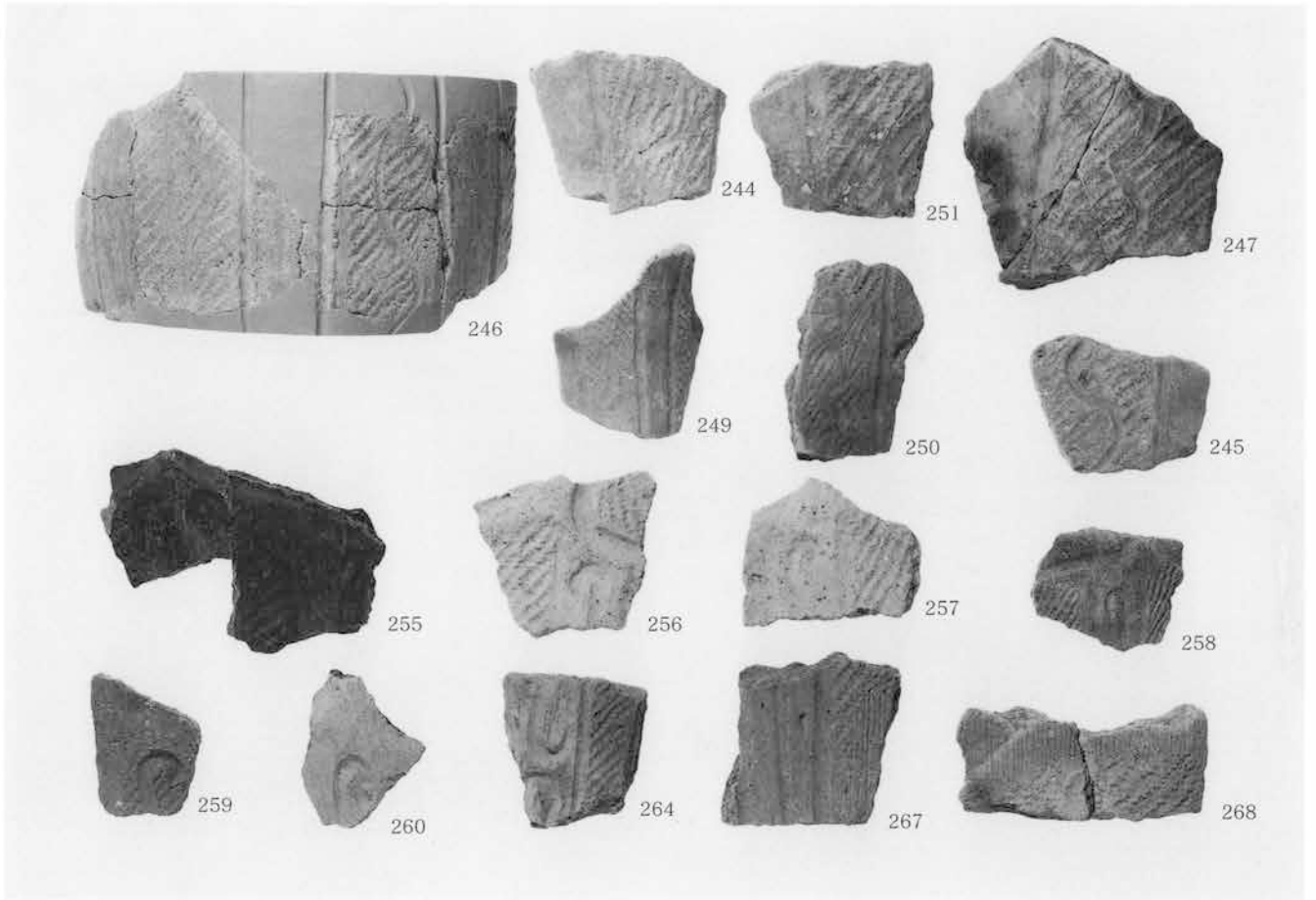
遺構外出土土器 (第3群)



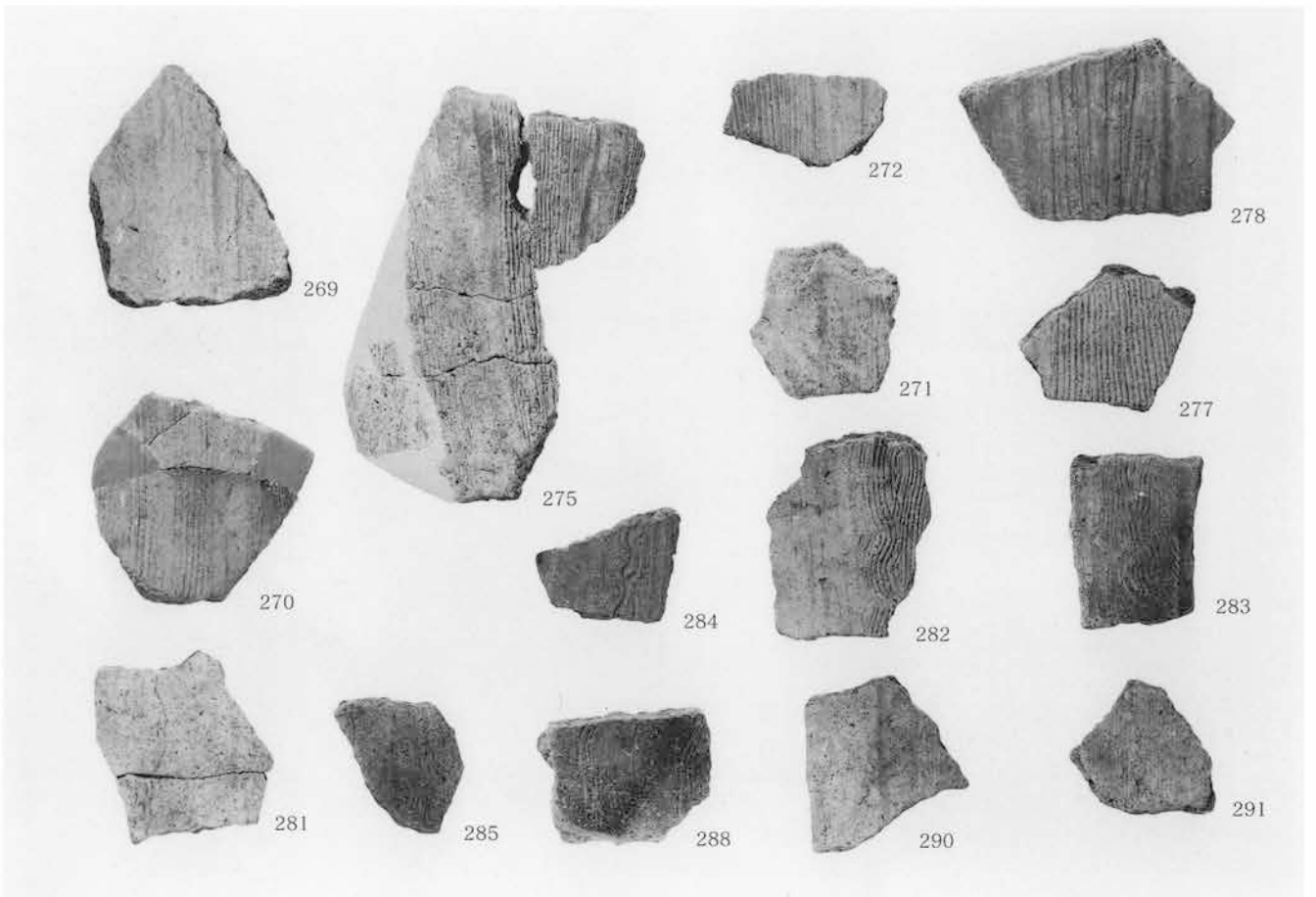
遺構外出土土器 (第3群)



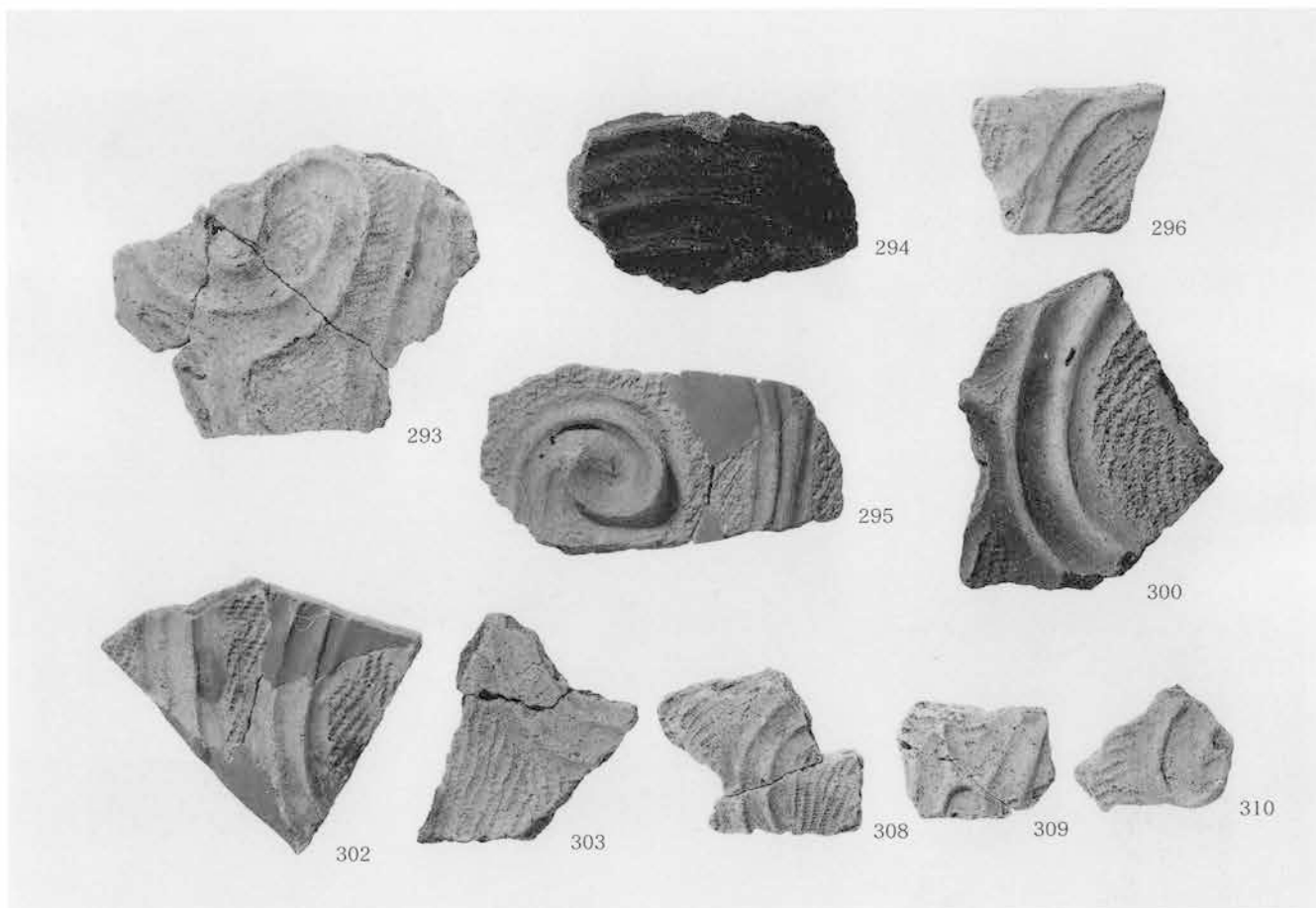
遺構外出土土器 (第3群)



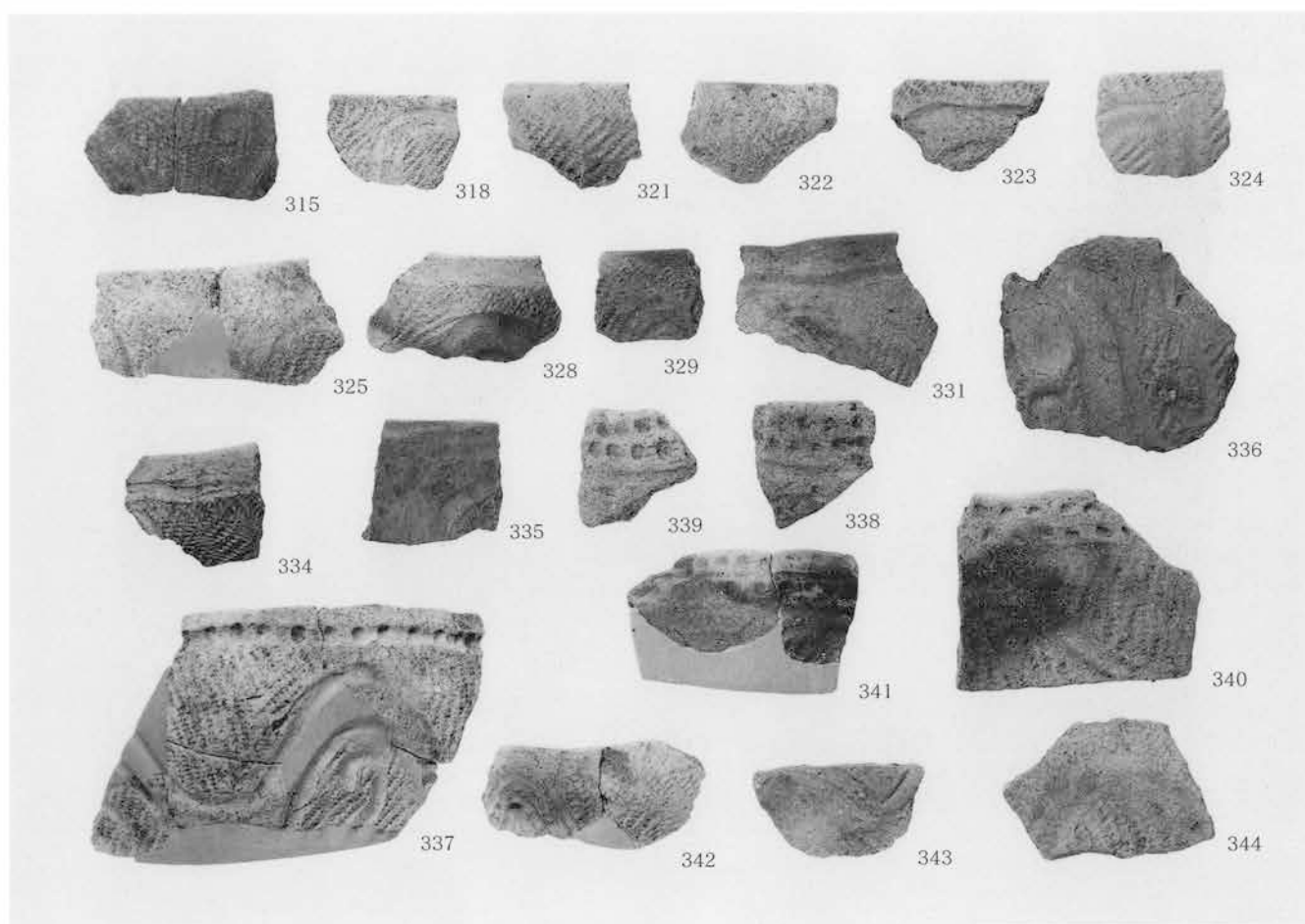
遺構外出土土器 (第3群)



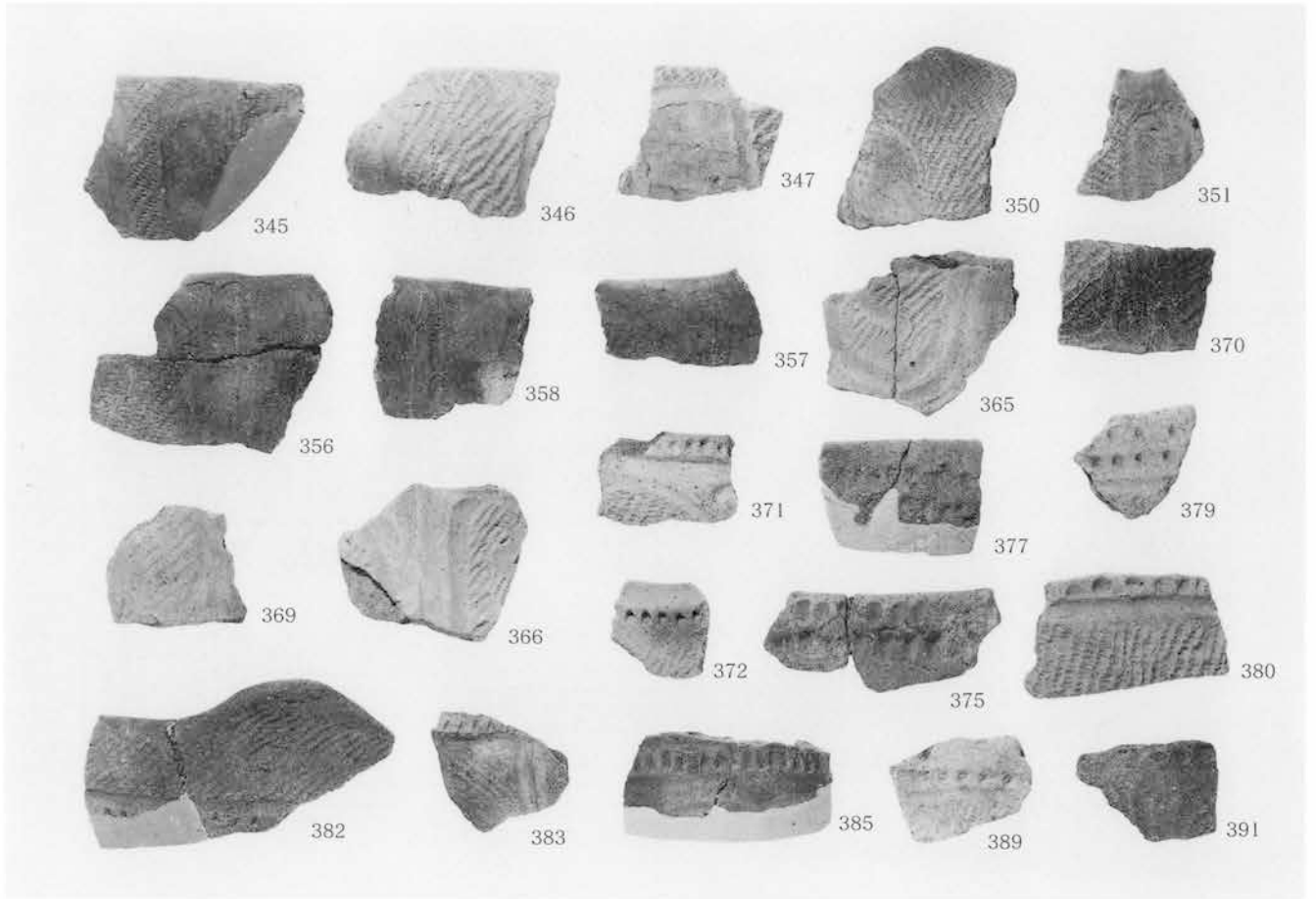
遺構外出土土器 (第3群)



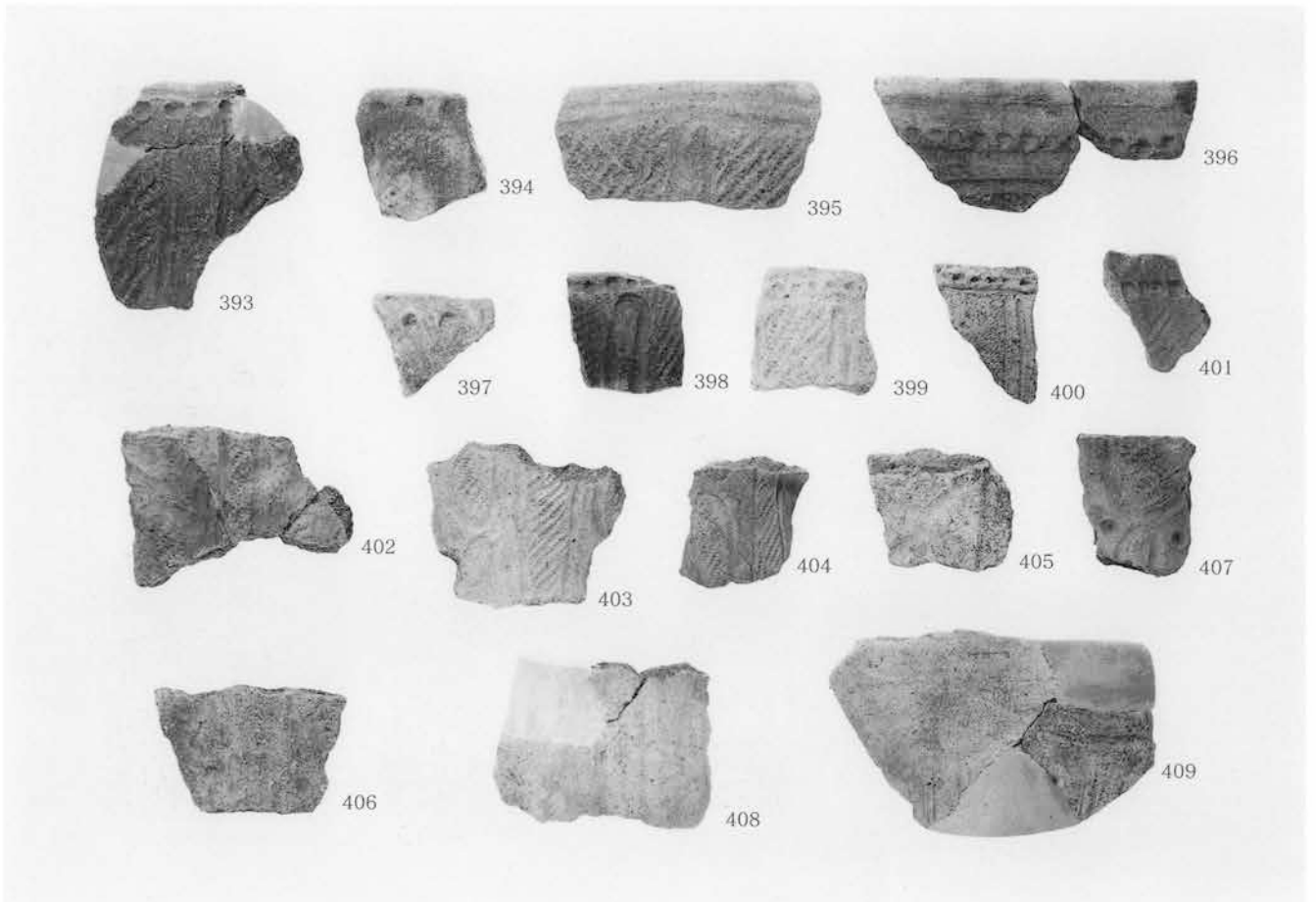
遺構外出土土器 (第3群)



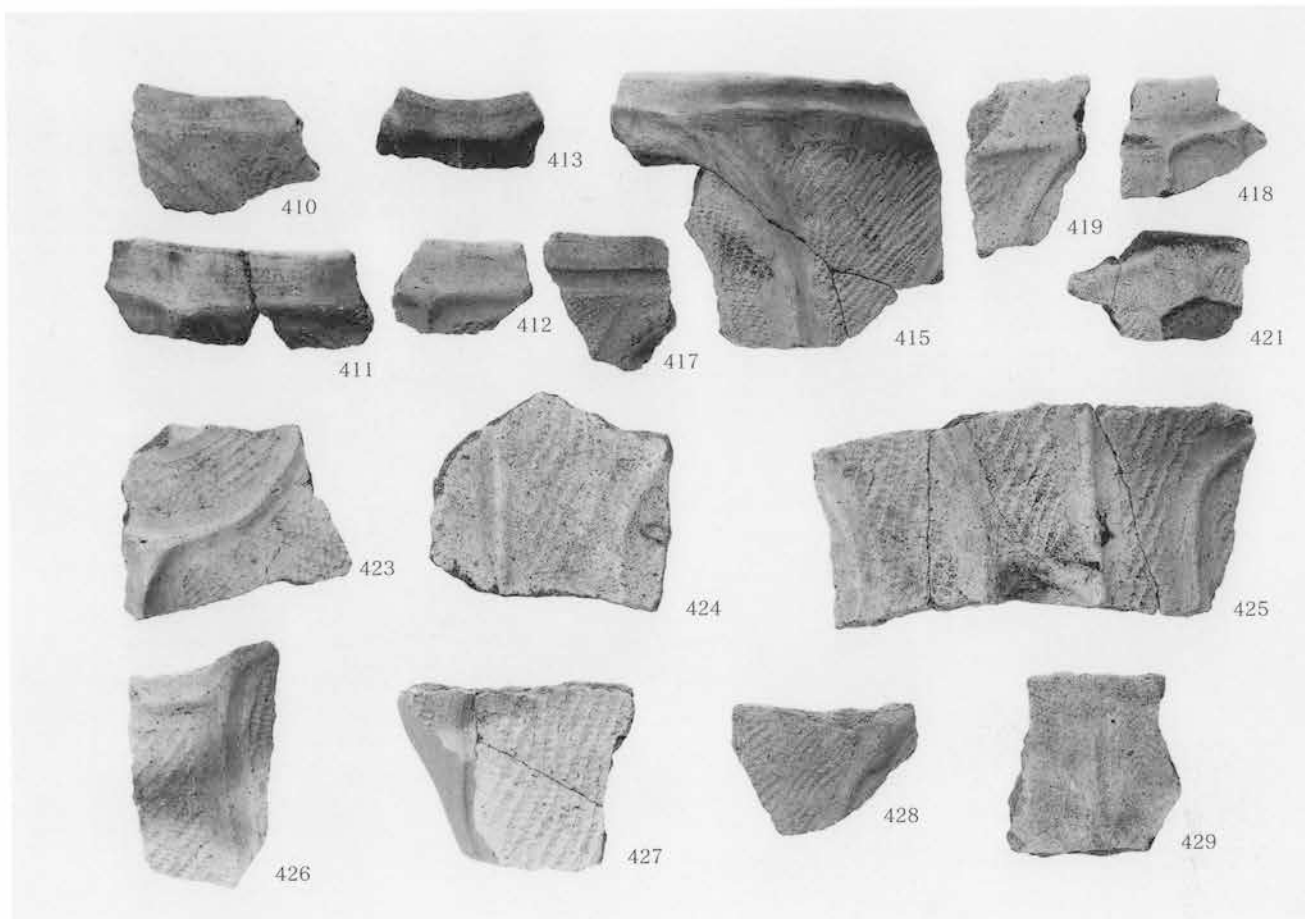
遺構外出土土器 (第3群)



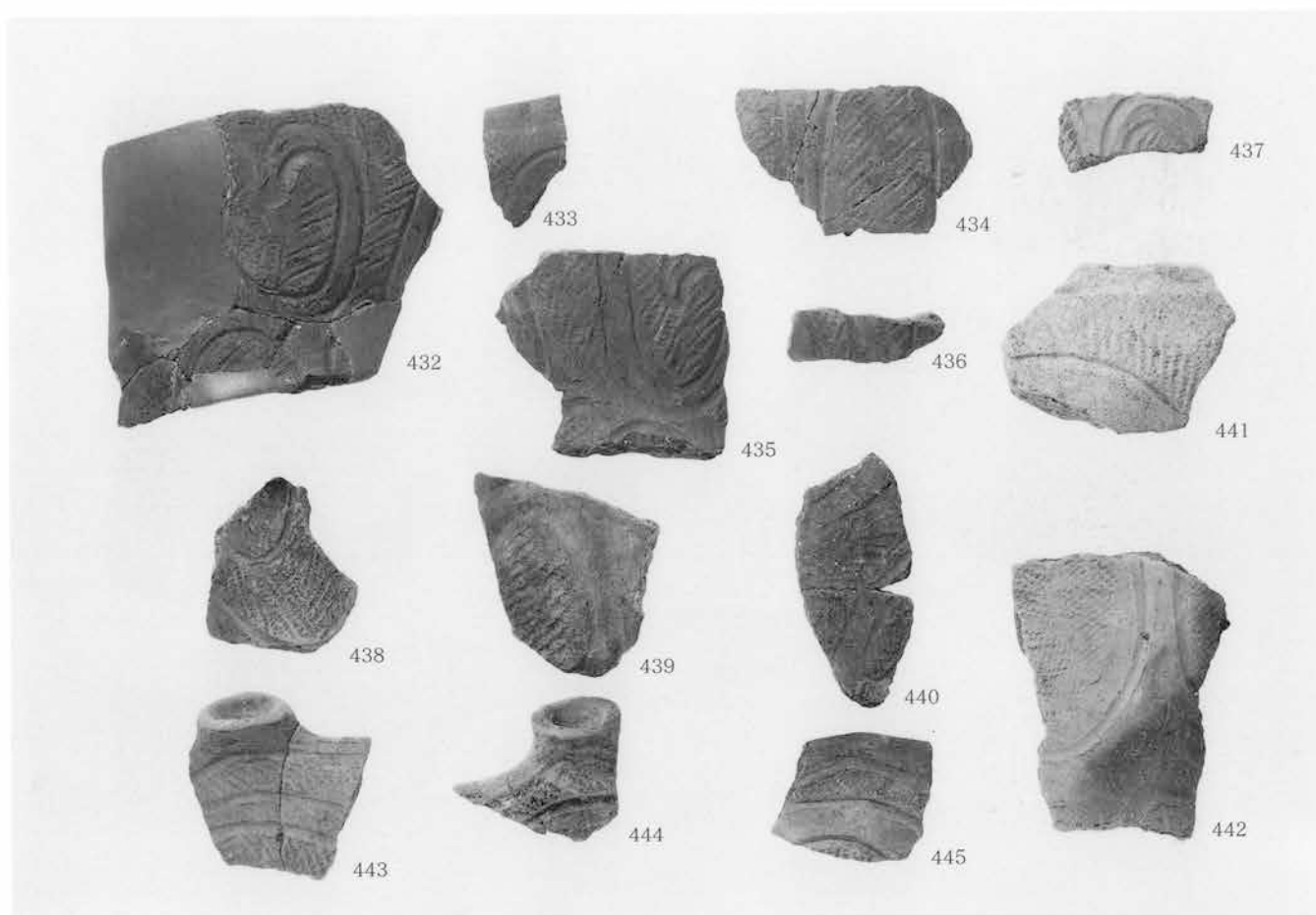
遺構外出土土器 (第3群)



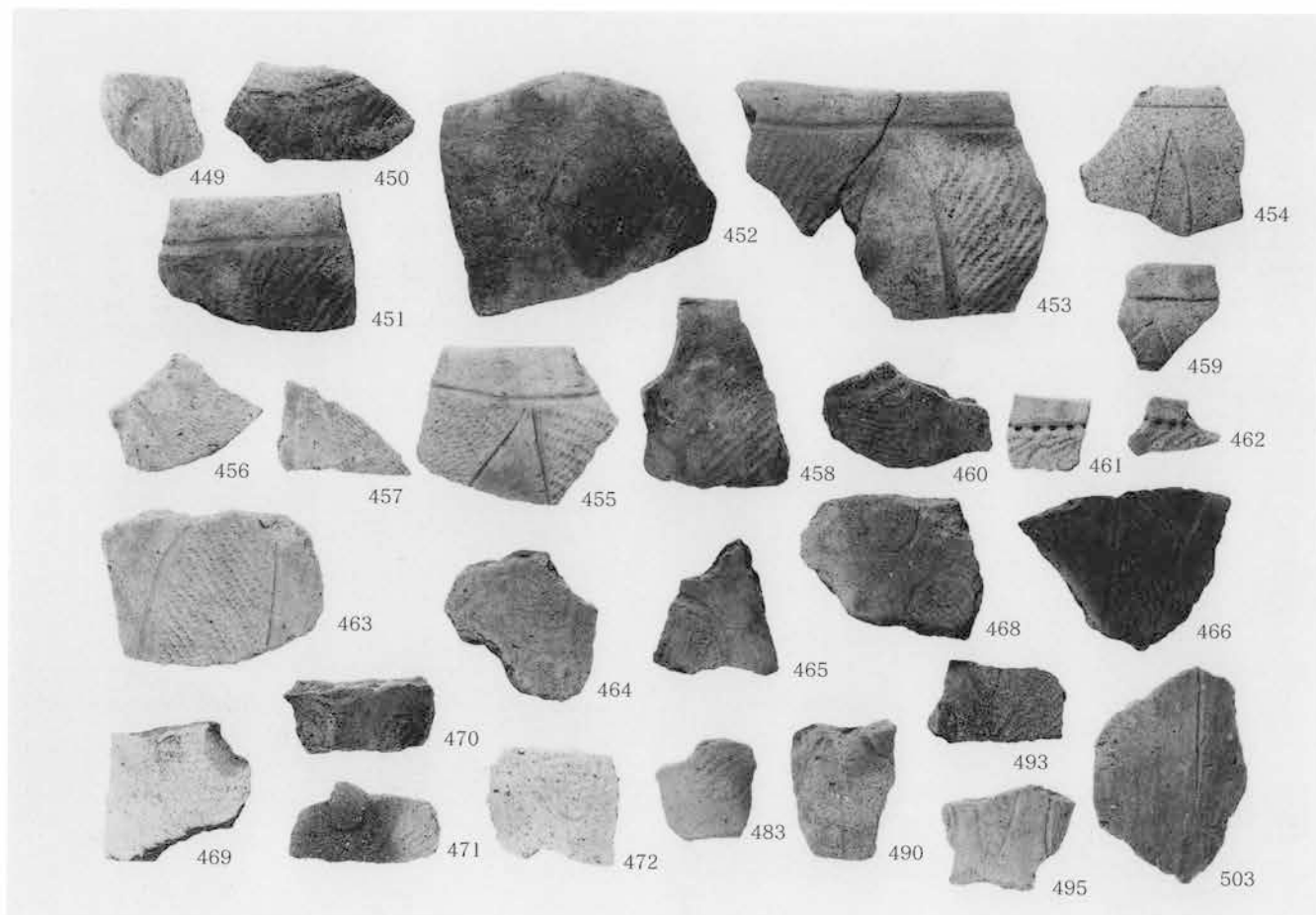
遺構外出土土器 (第3群)



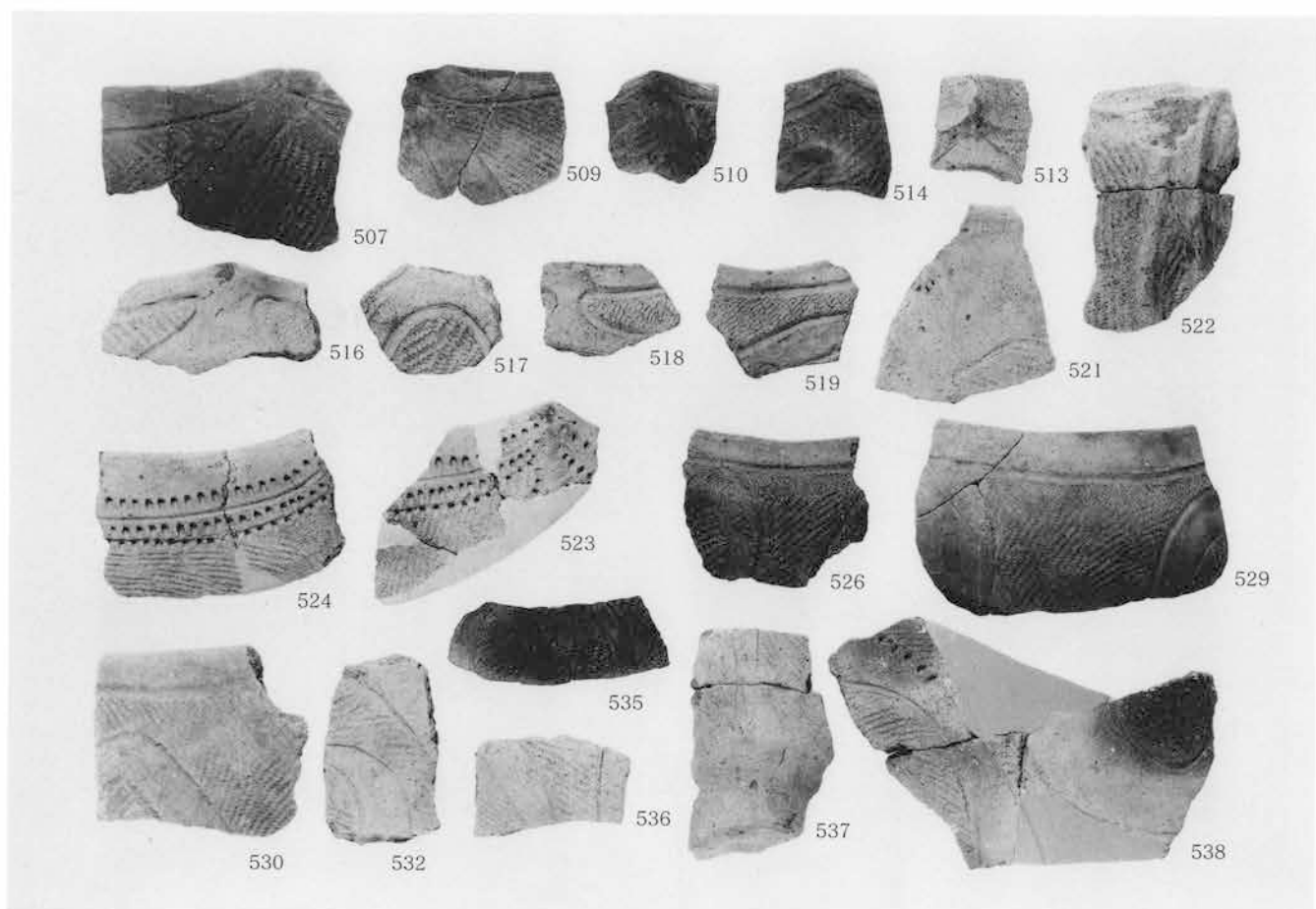
遺構外出土土器 (第3群)



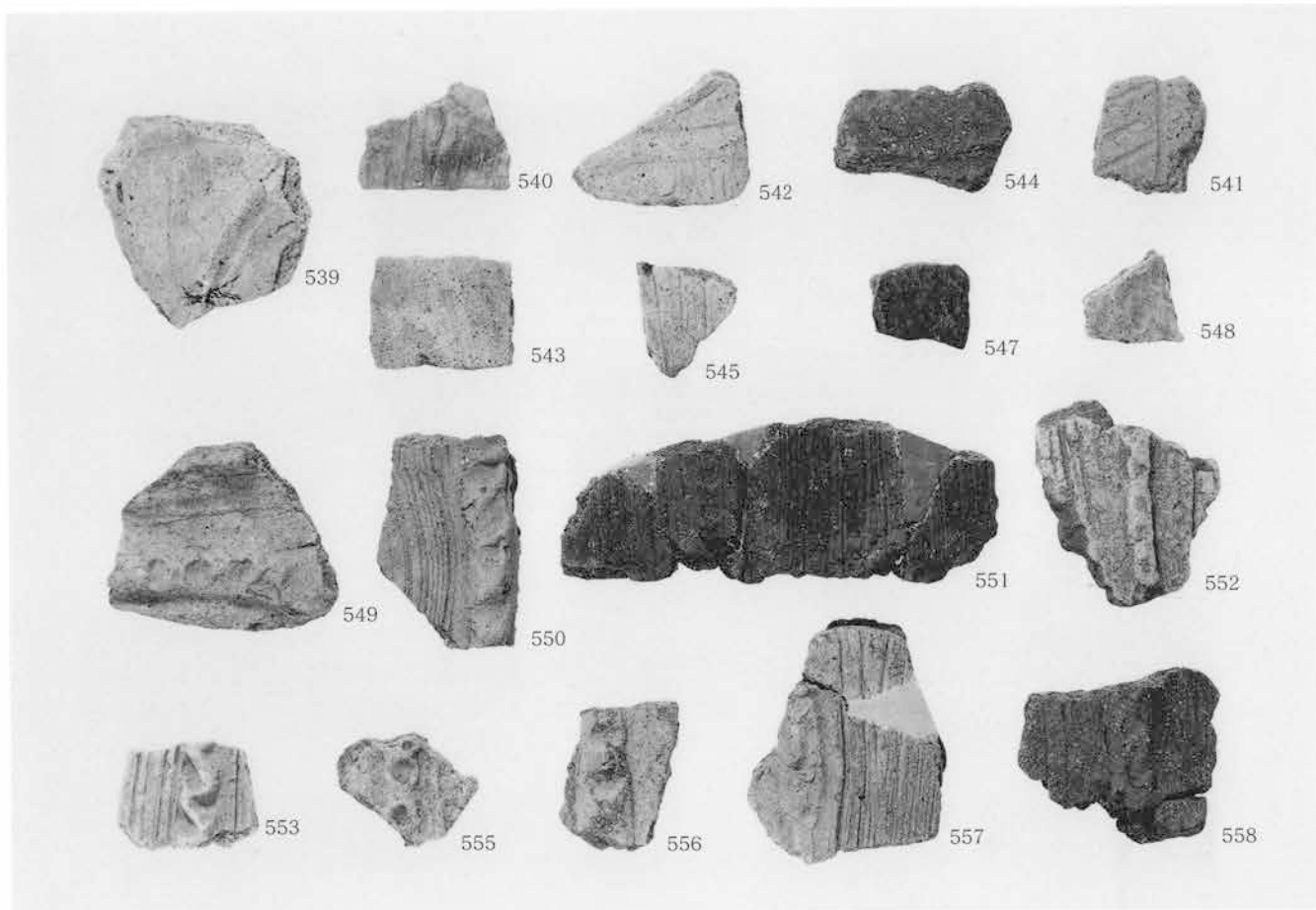
遺構外出土土器 (第3群)



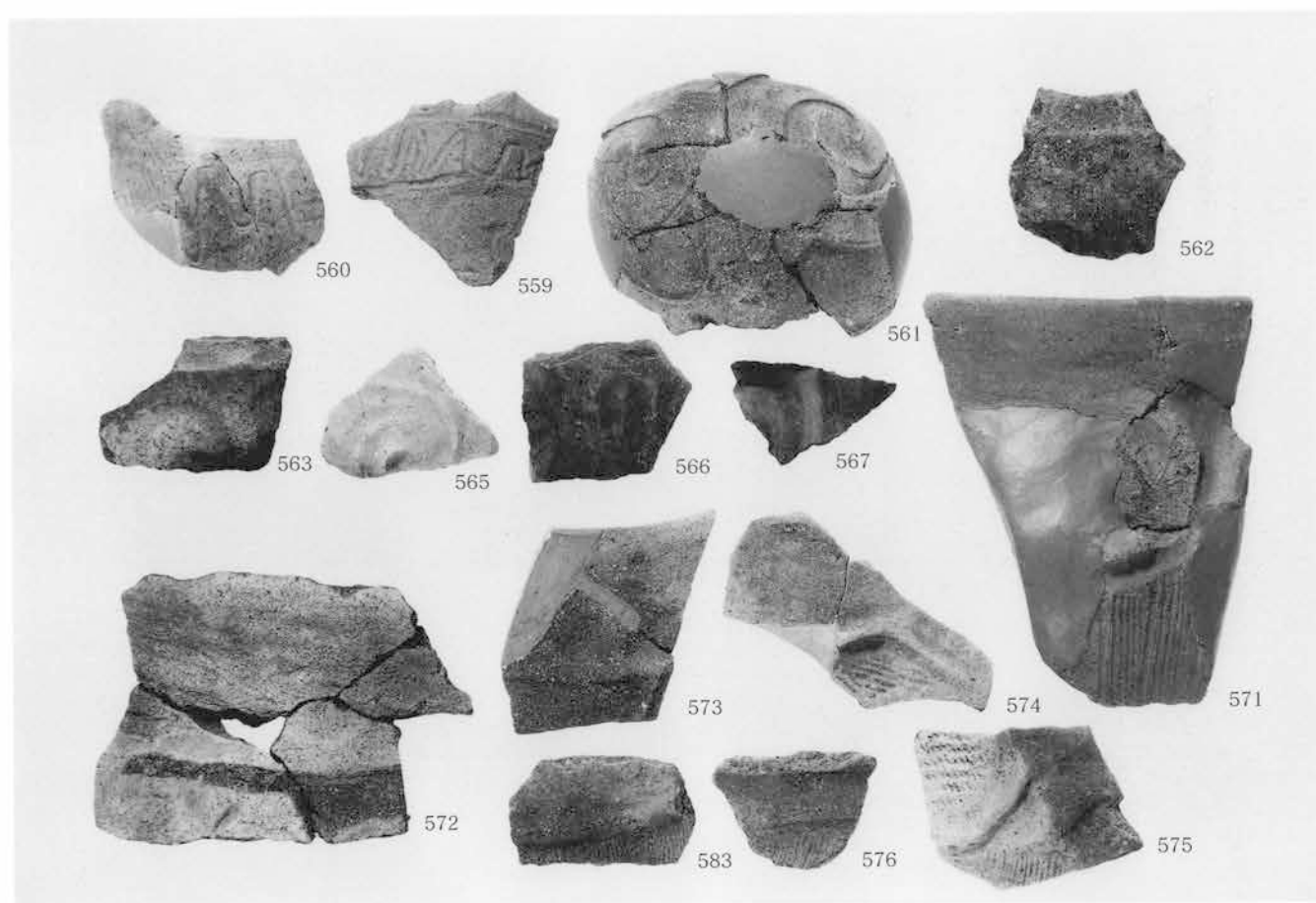
遺構外出土土器 (第3群)



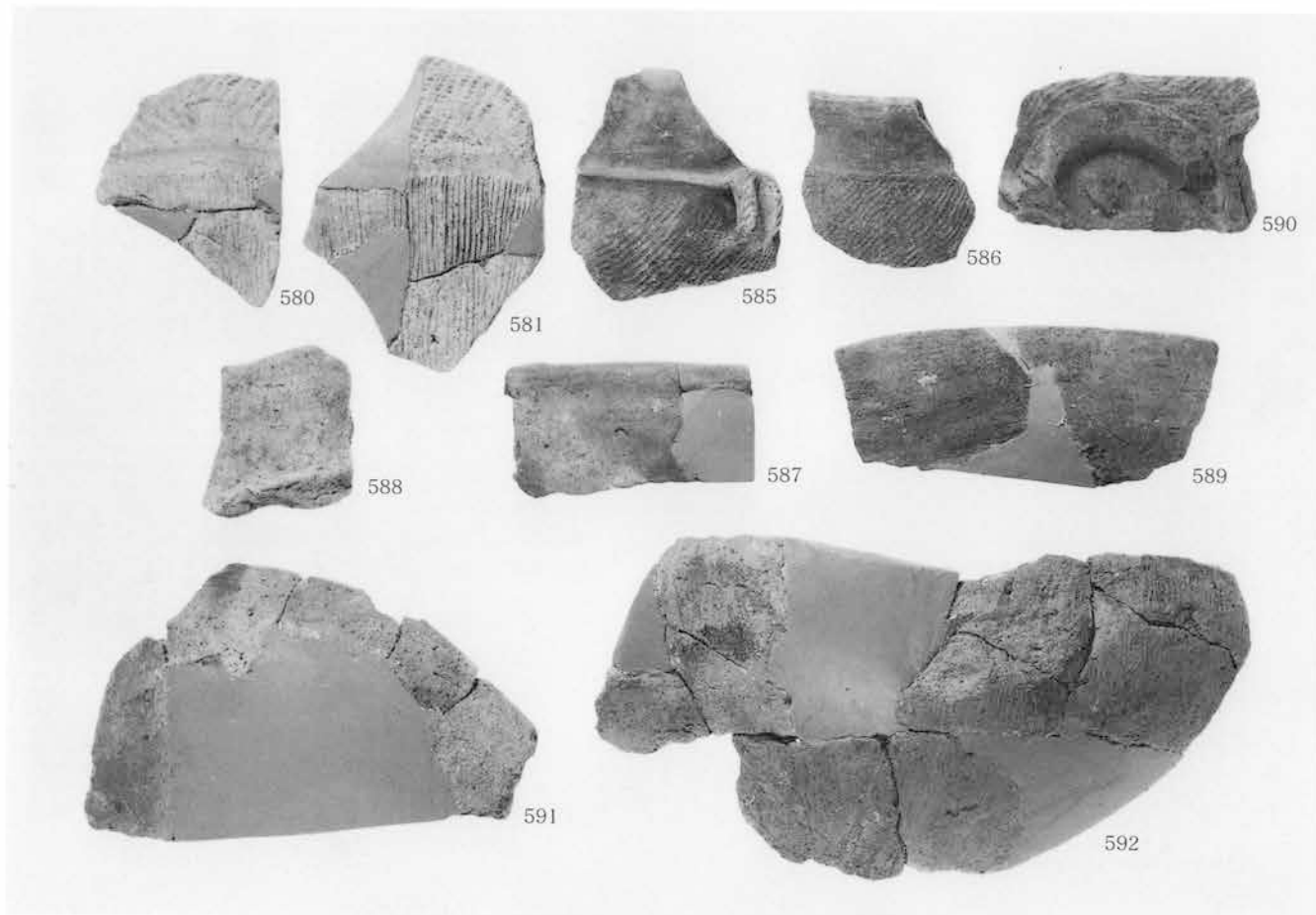
遺構外出土土器 (第3群)



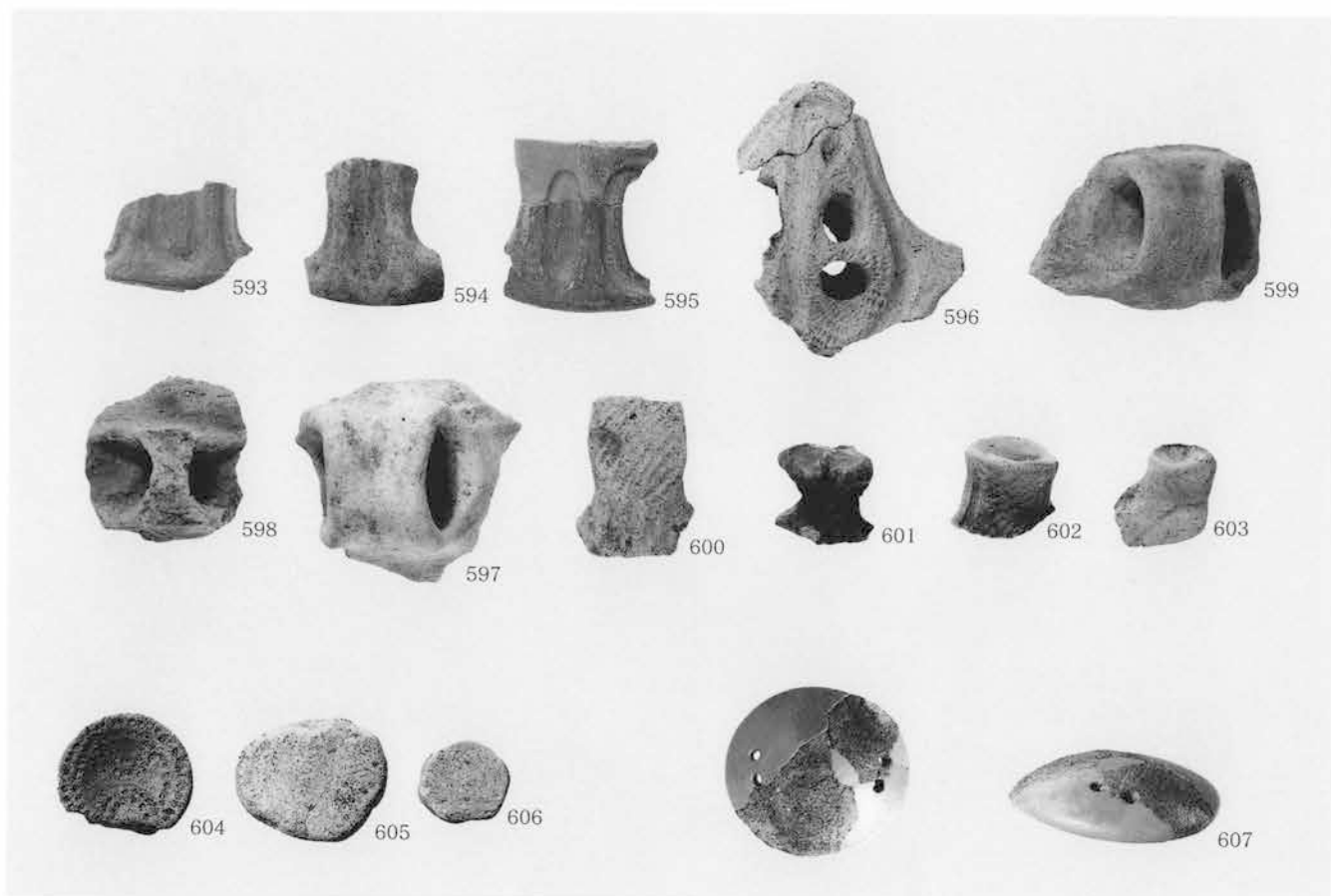
遺構外出土土器 (第3群)



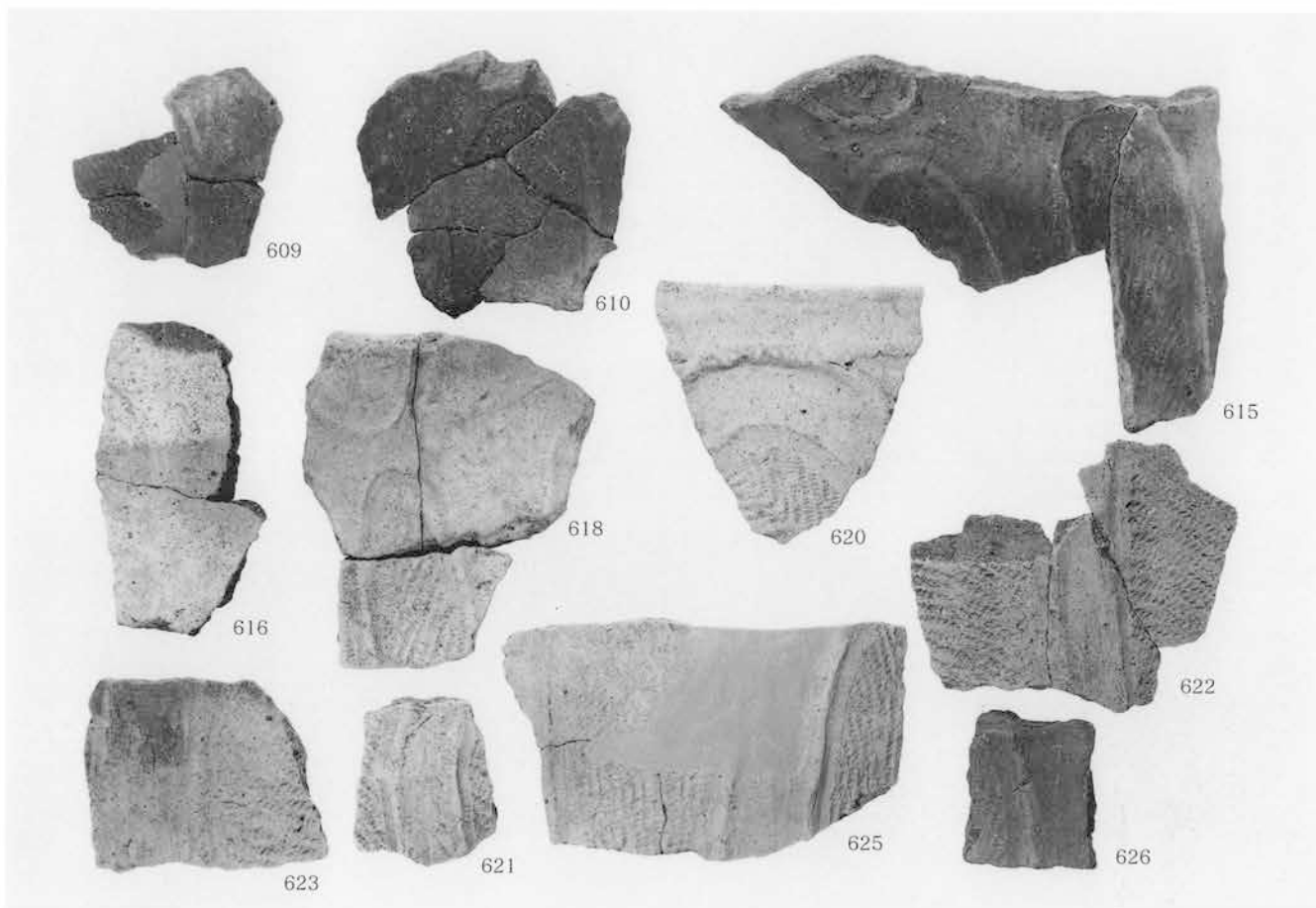
遺構外出土土器 (第3群)



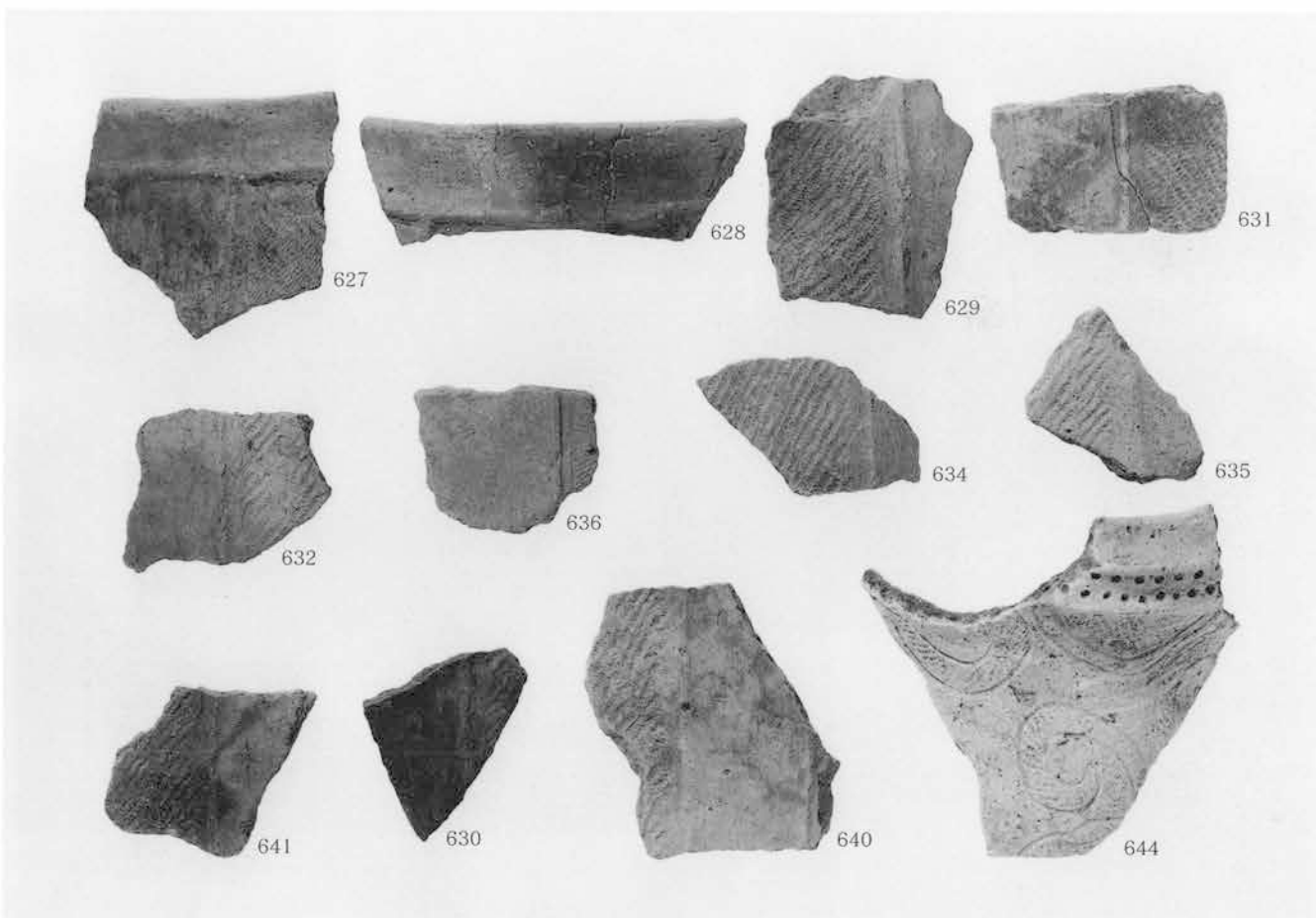
遺構外出土土器 (第3群)



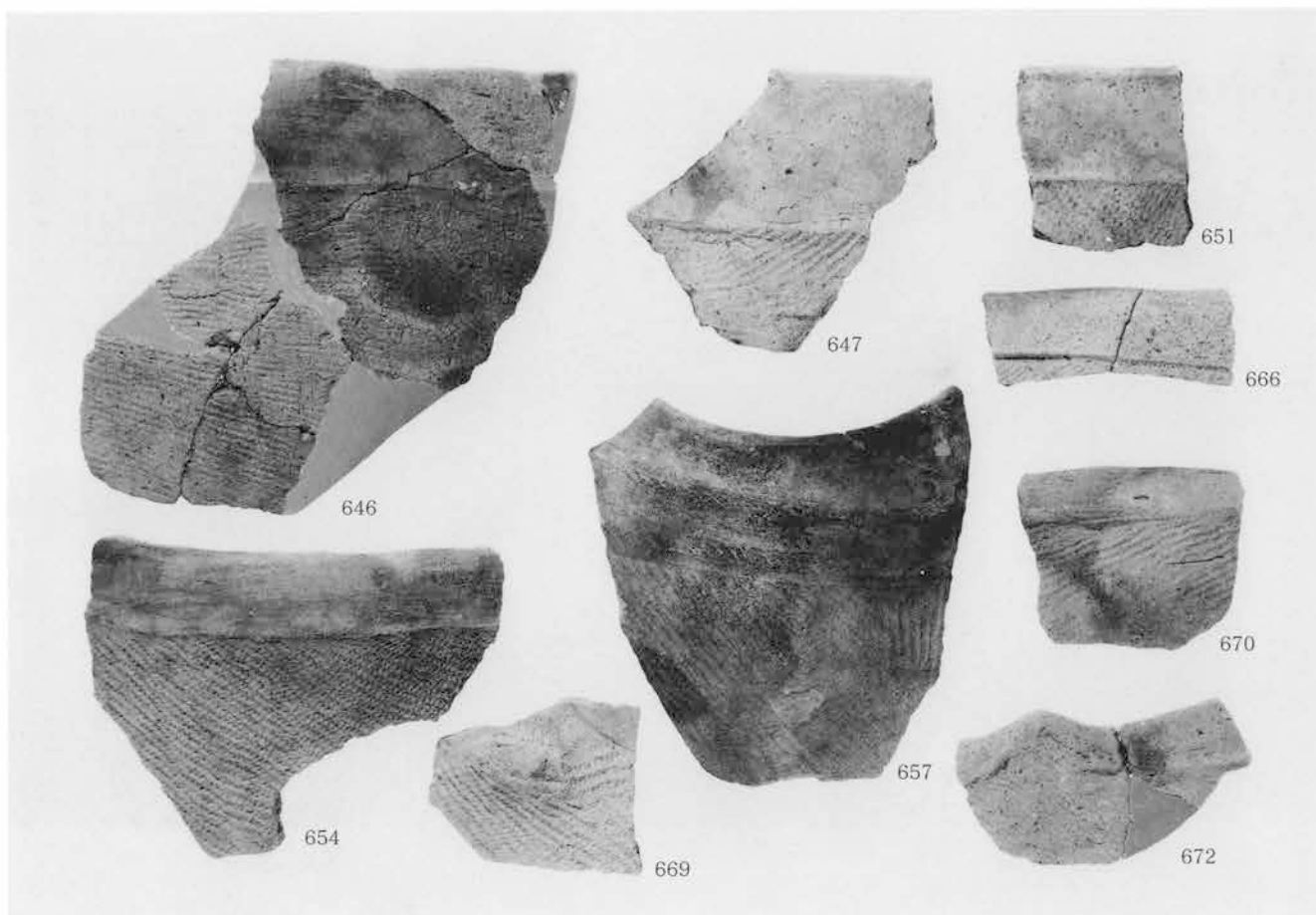
遺構外出土土器 (第3群)



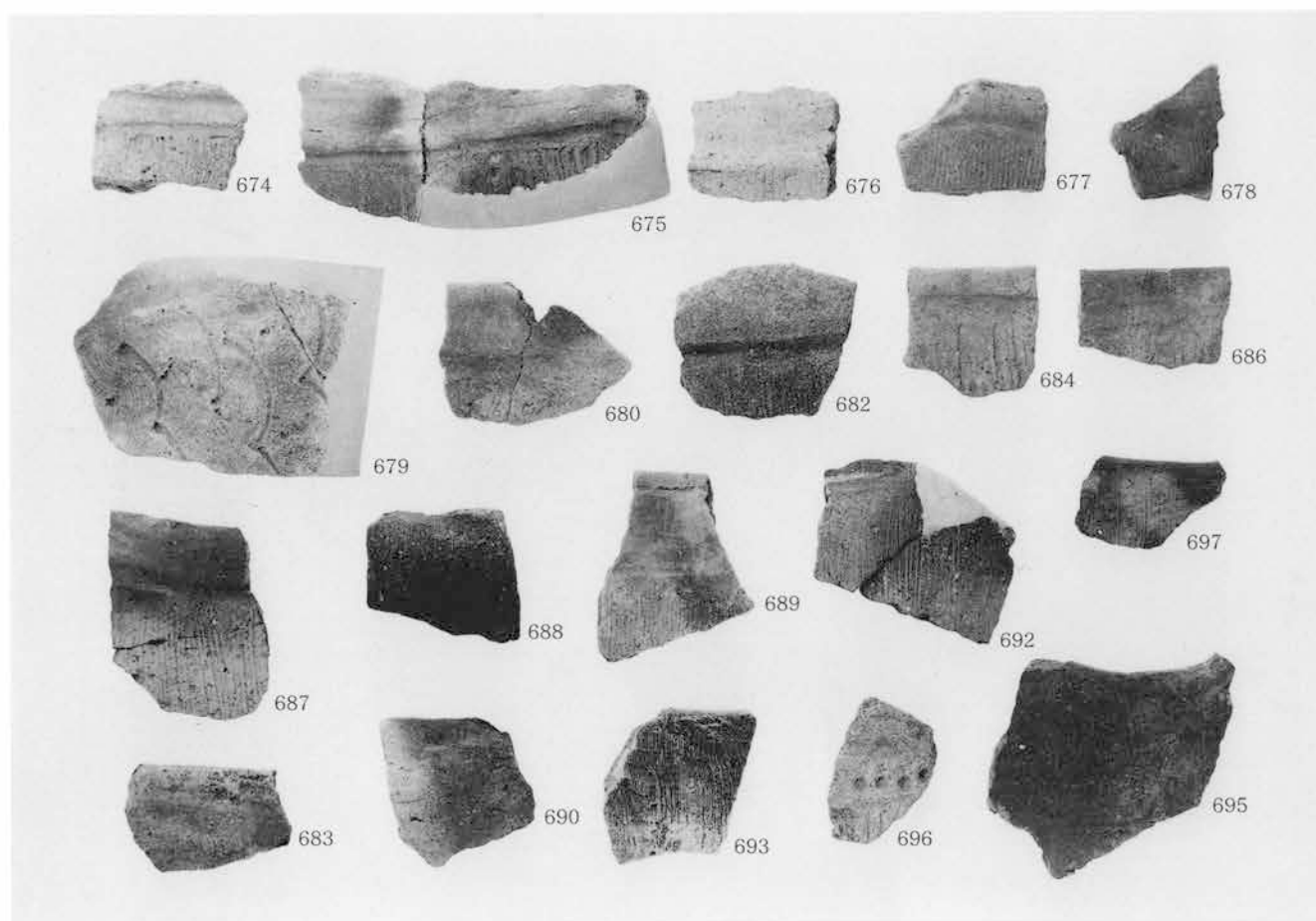
遺構外出土土器 (第4群)



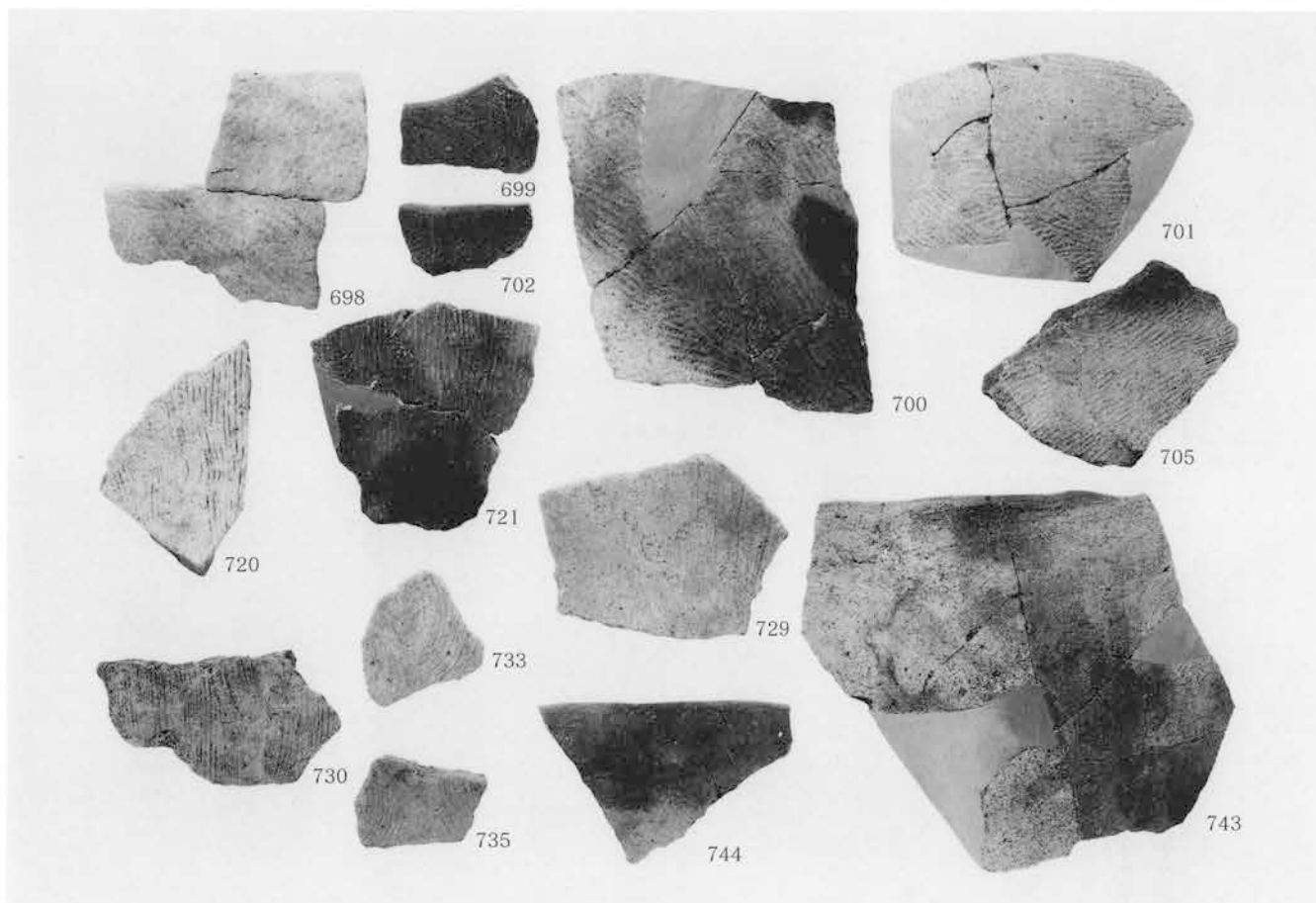
遺構外出土土器 (第4群)



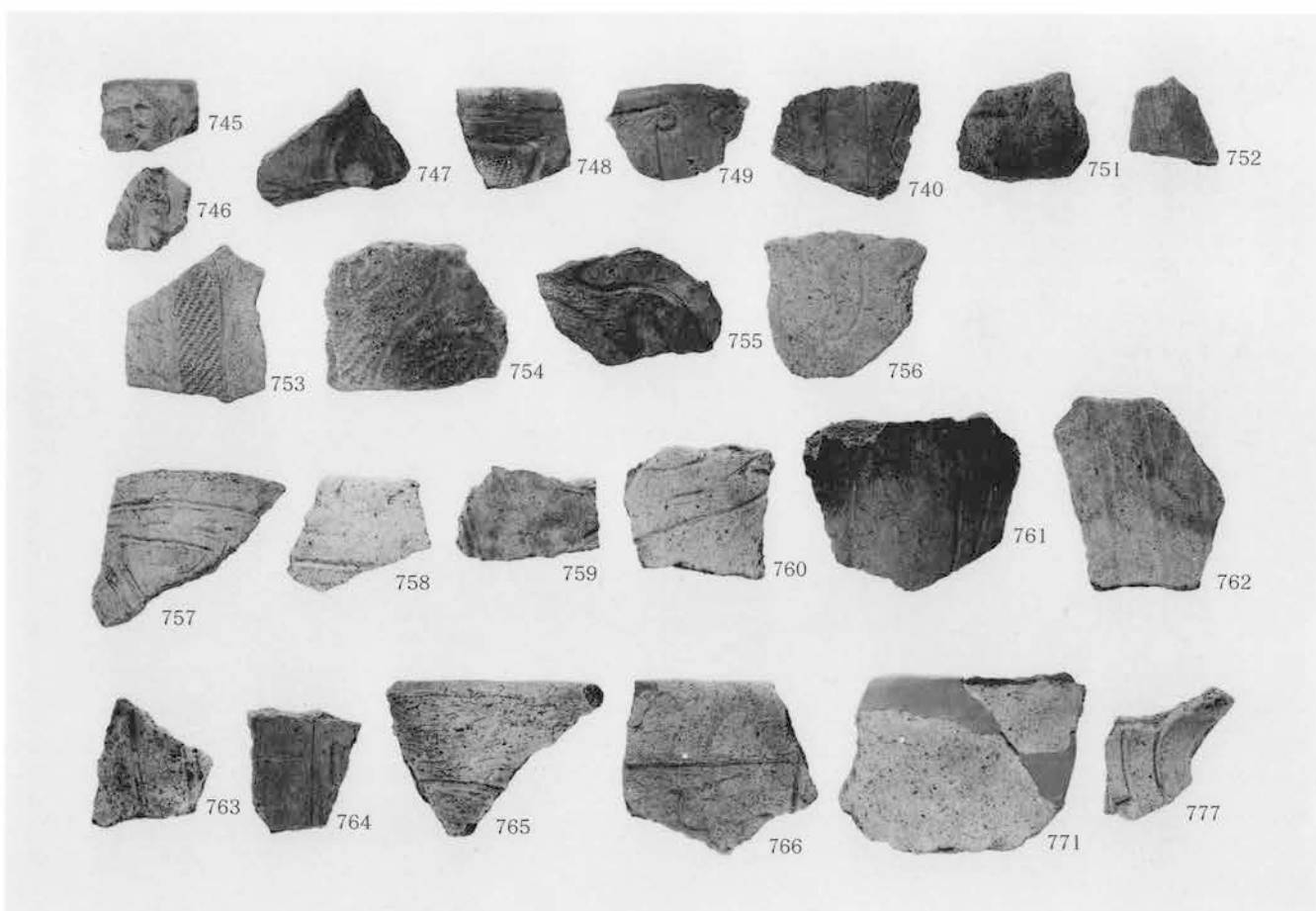
遺構外出土土器 (第4群)



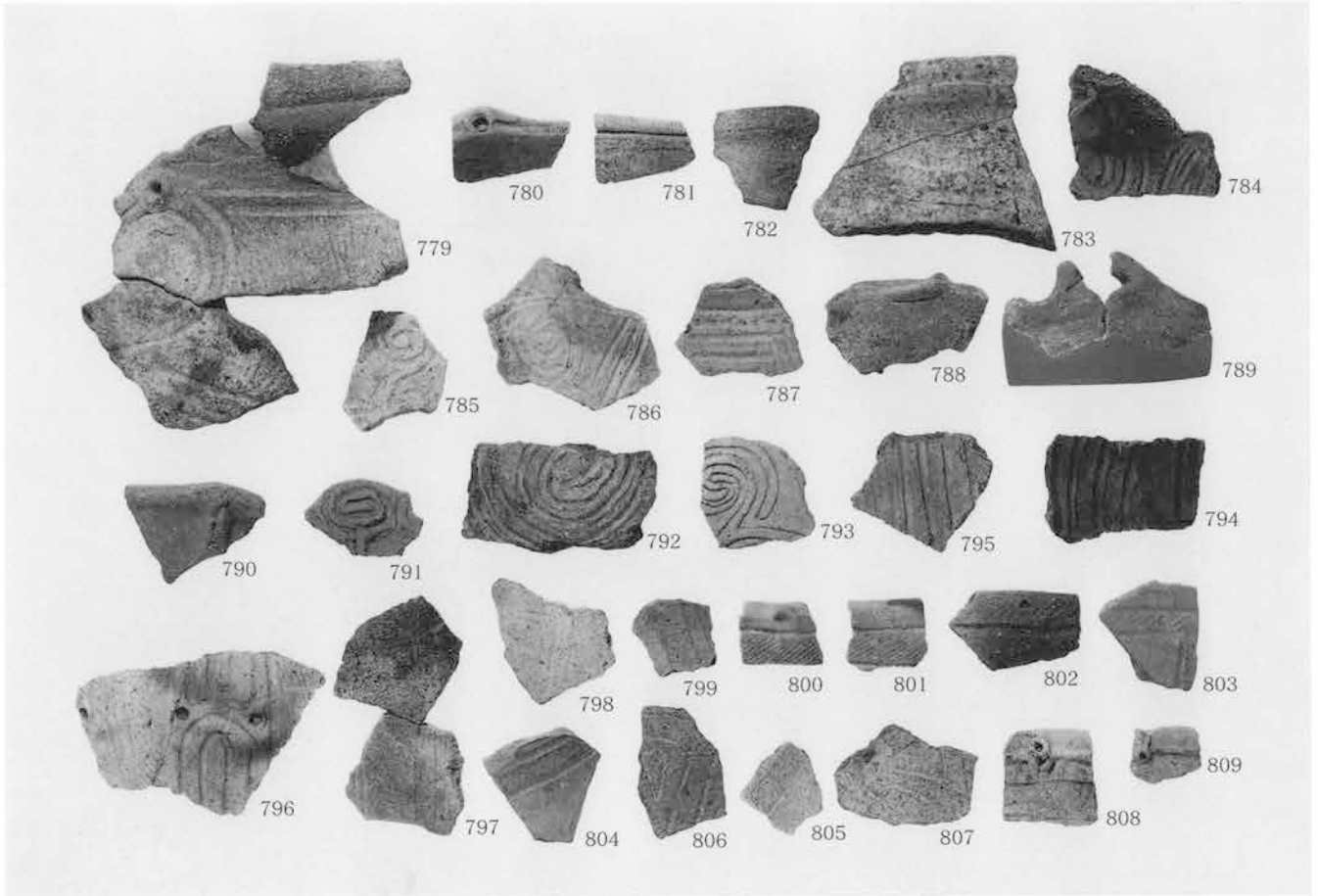
遺構外出土土器 (第4群)



遺構外出土土器 (第4群)



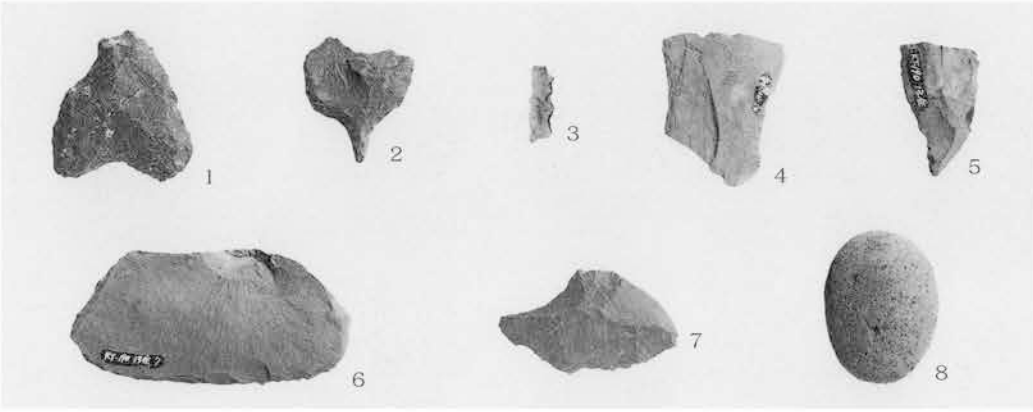
遺構外出土土器 (第5群)



遺構外出土土器 (第6群)



遺構外出土土器 (第6~9群)



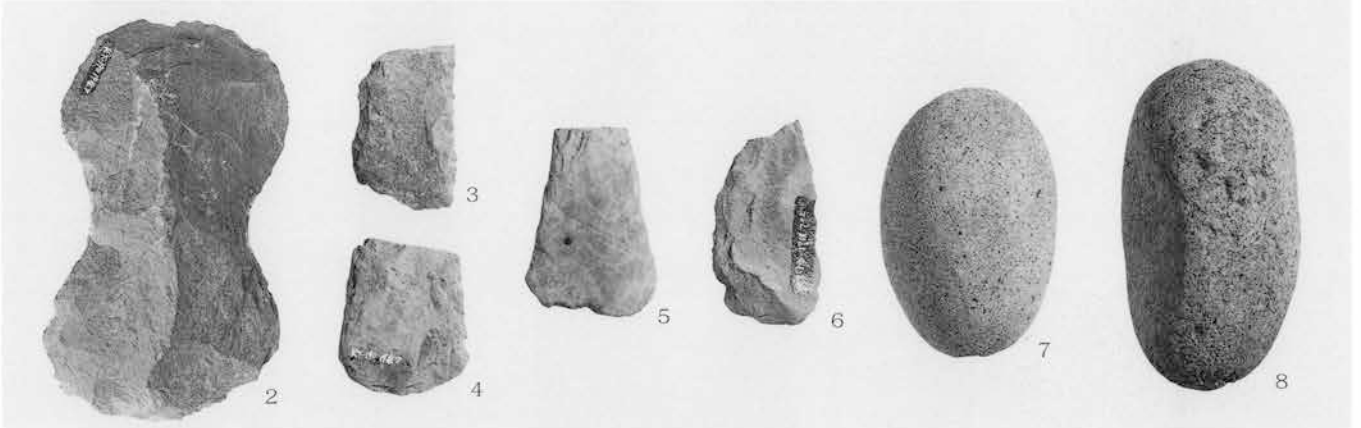
A区13号住居跡出土石器



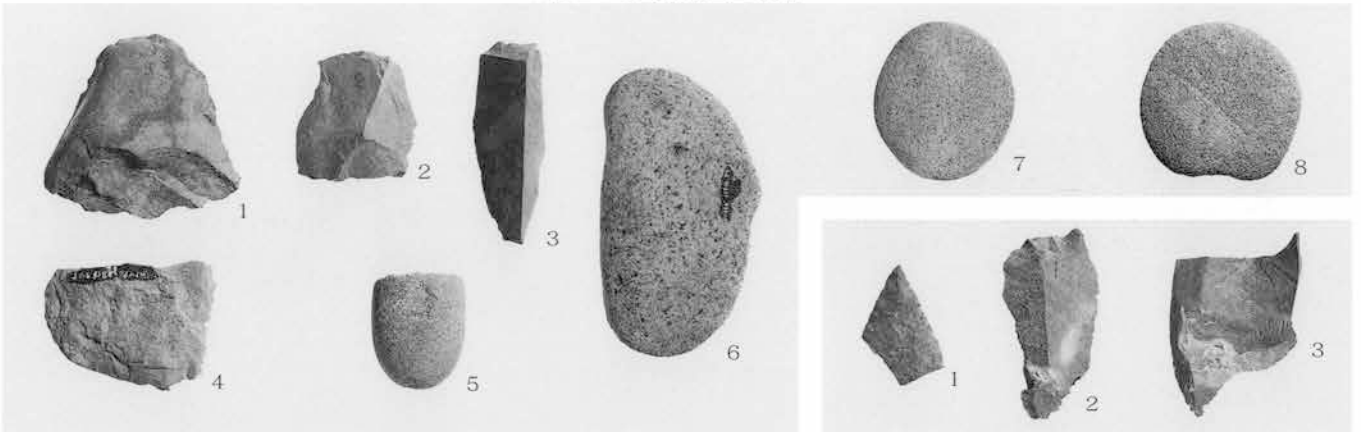
A区15号住居跡出土石器



A区19号住居跡出土石器



A区20号住居跡出土石器

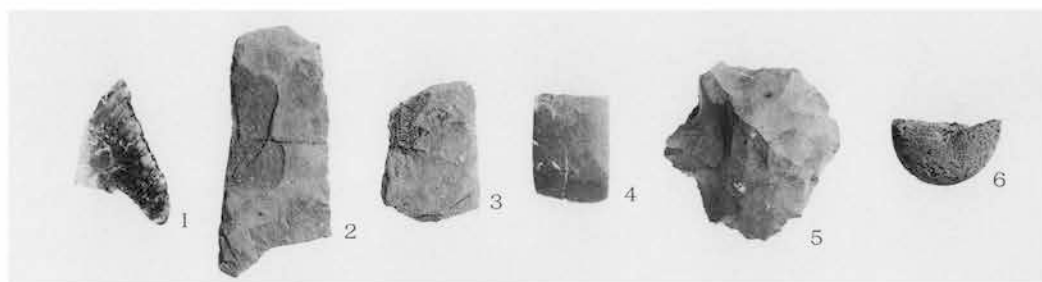


A区28号住居跡出土石器

A区29号住居跡出土石器



A区70号住居跡出土石器



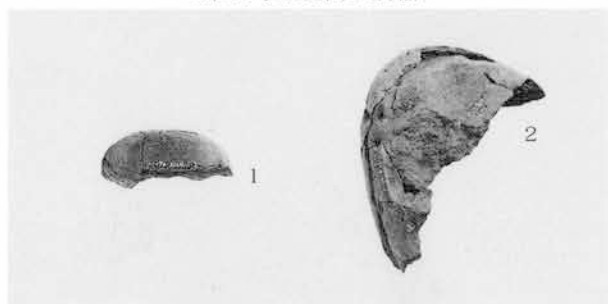
A区71号住居跡出土石器



A区3号土坑出土石器



C区2号埋甕出土石器



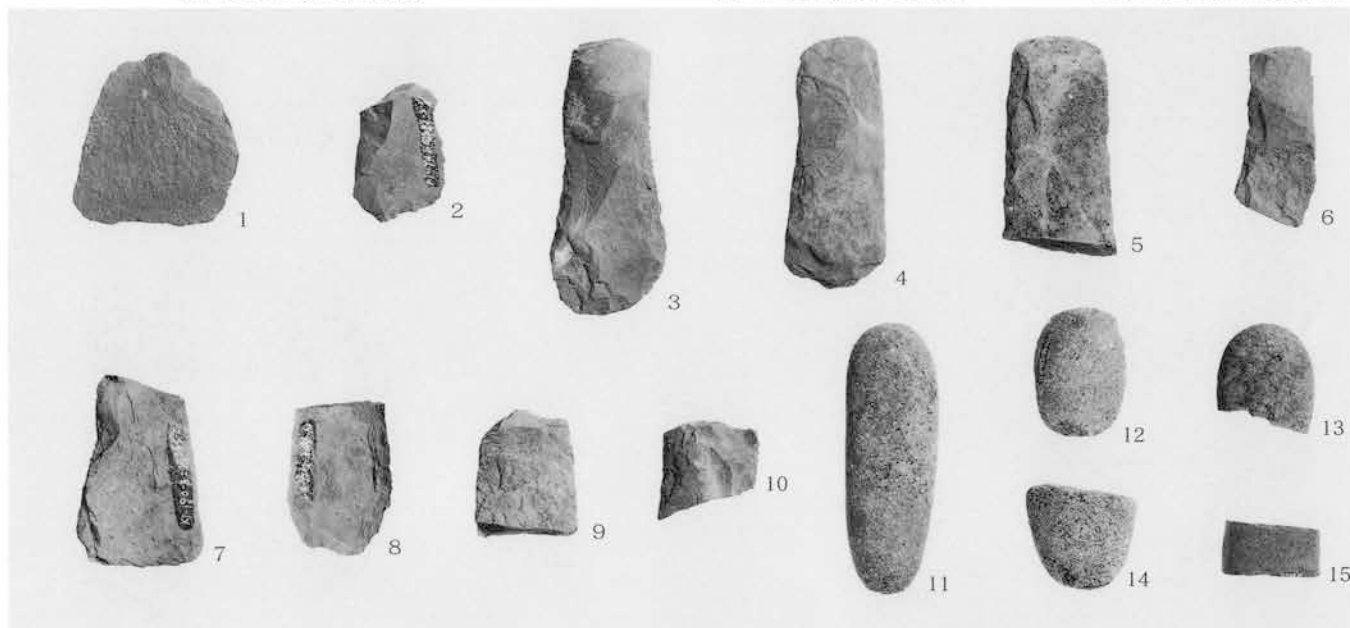
A区86号土坑出土石器



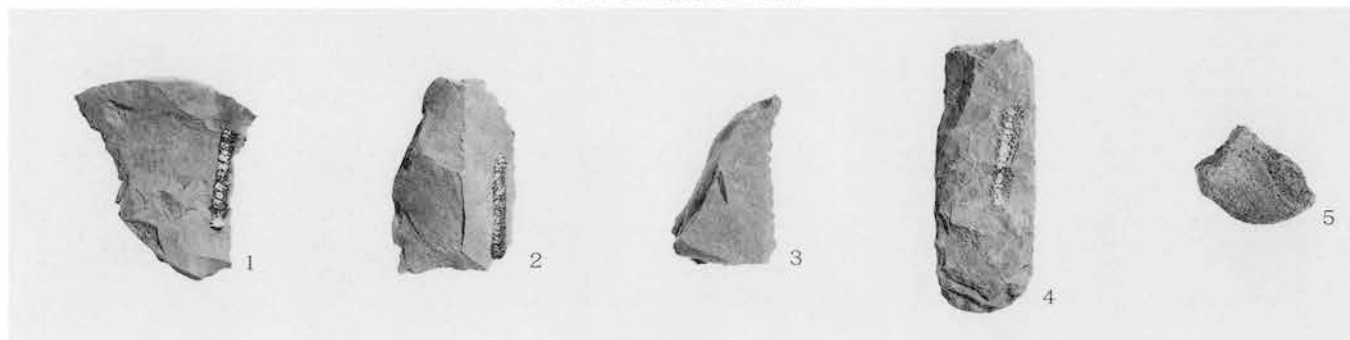
A区3号土器群出土石器



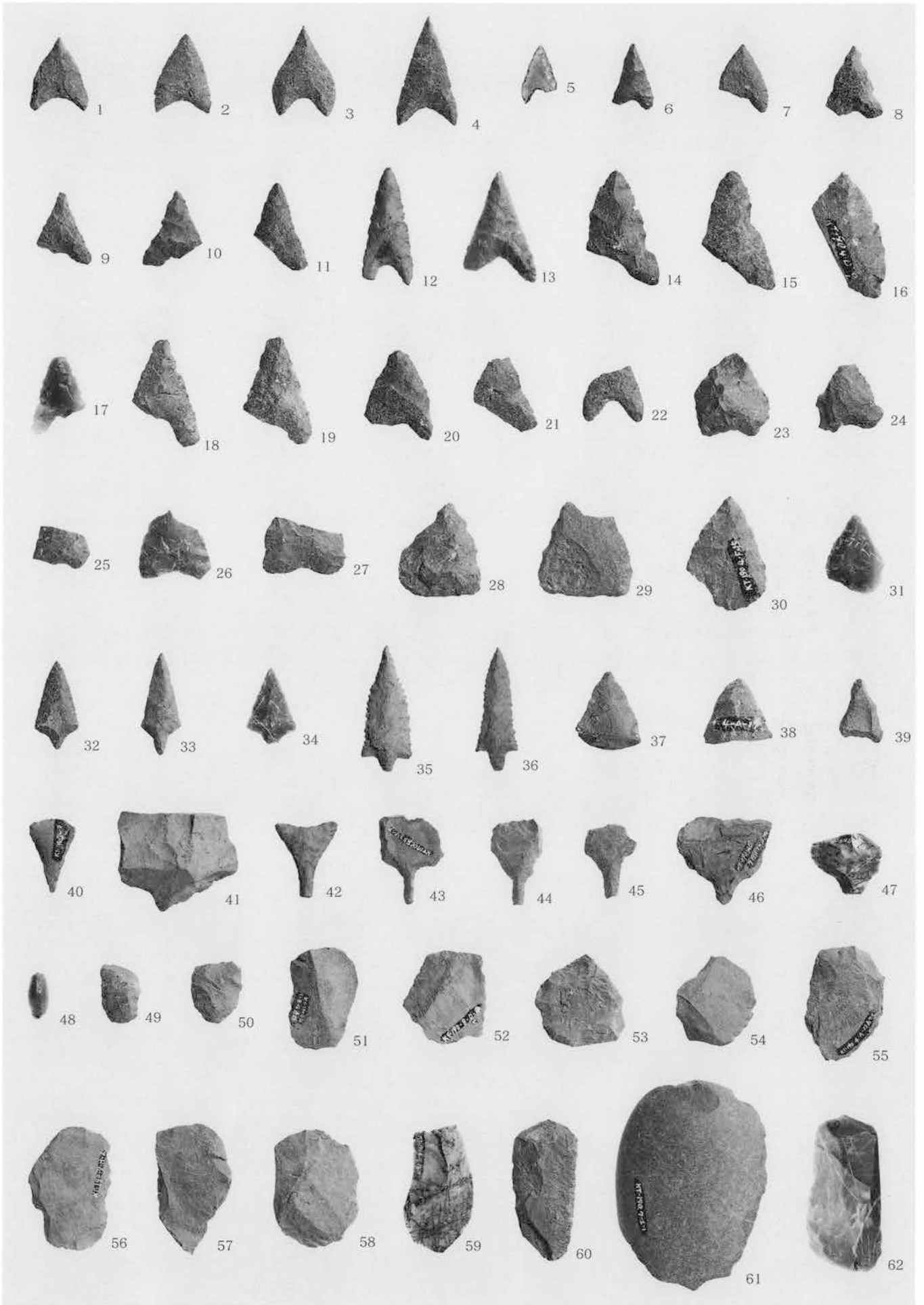
A区4号土器群出土石器



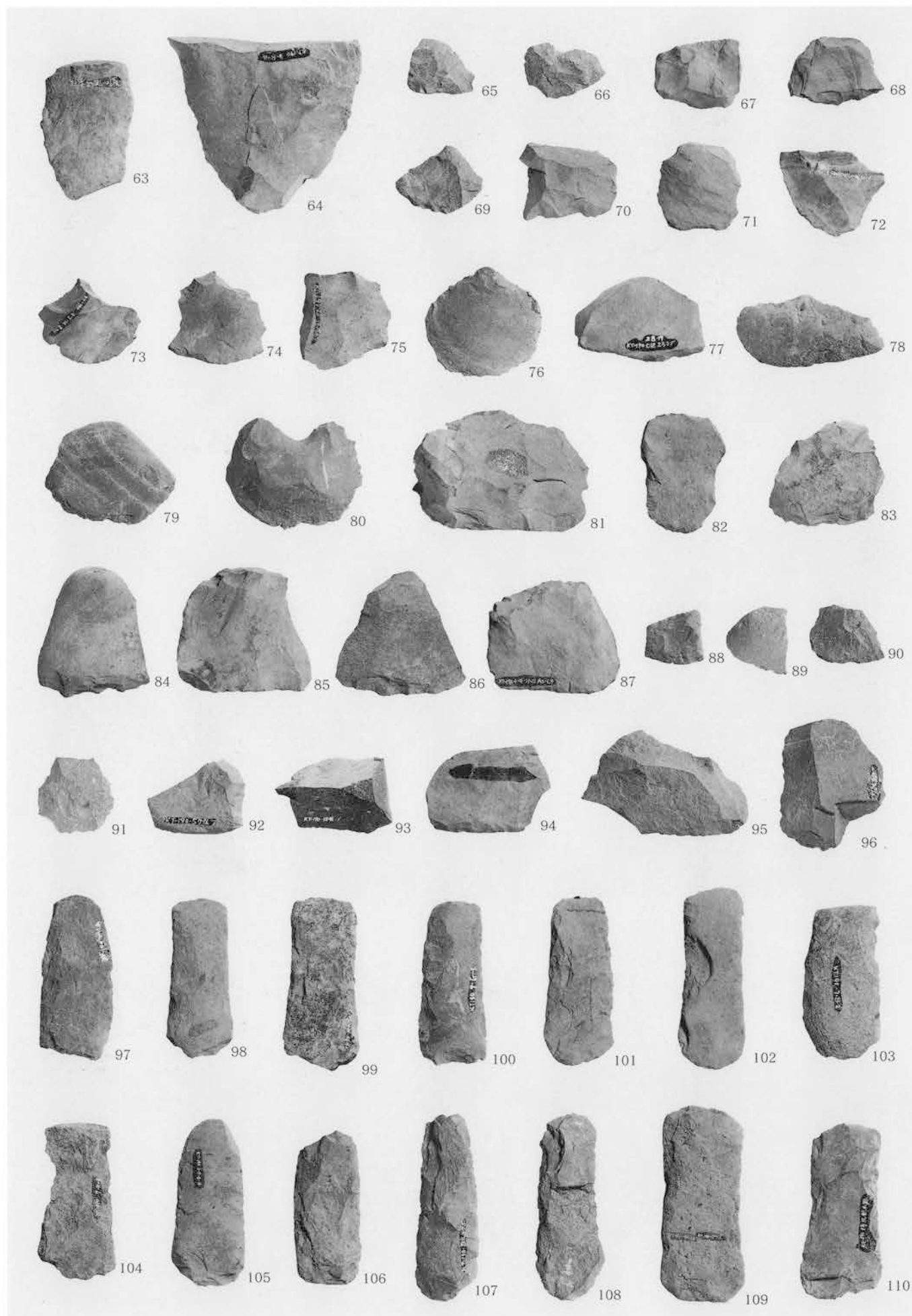
A区8号土器群出土石器



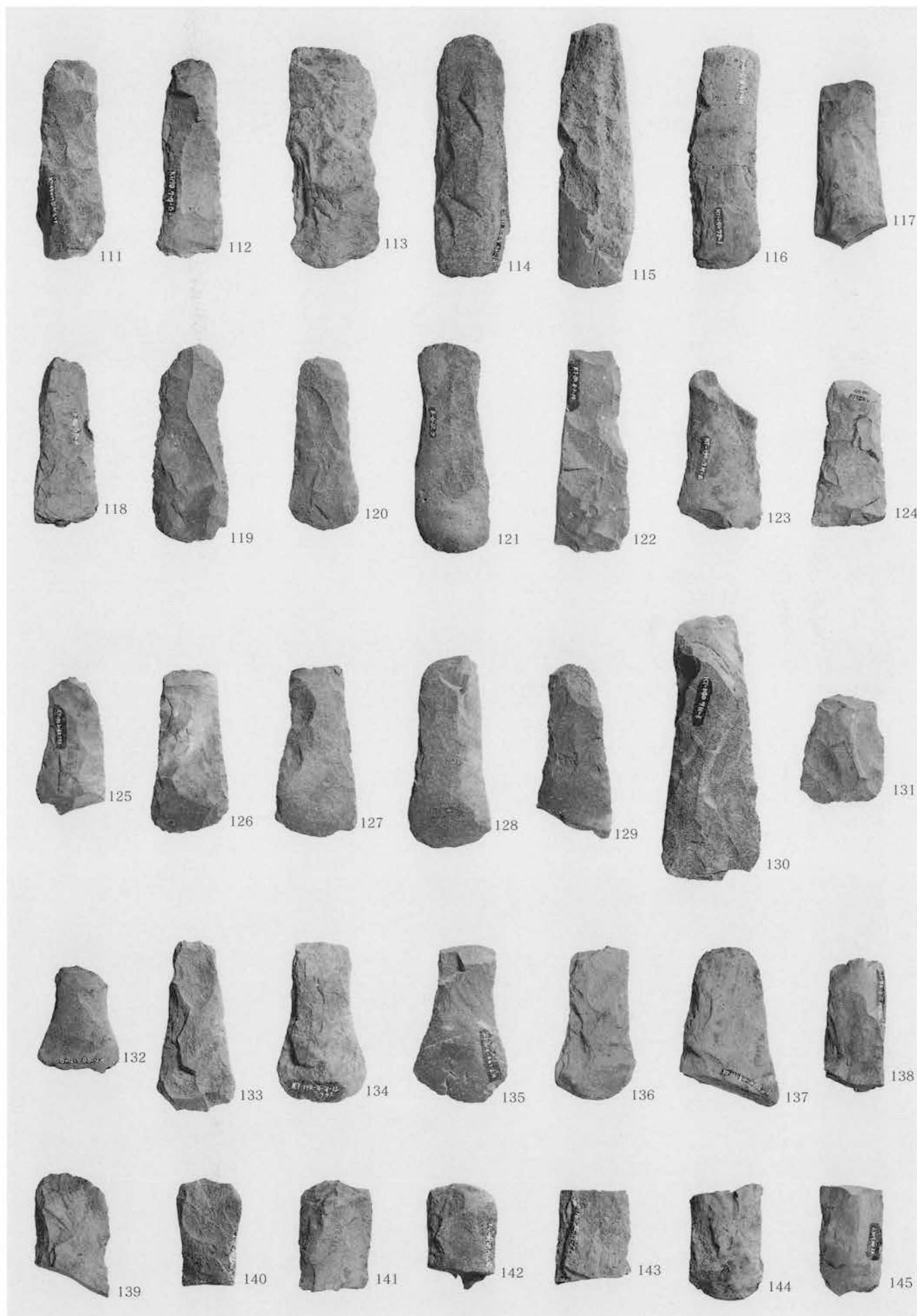
A区9号土器群出土石器



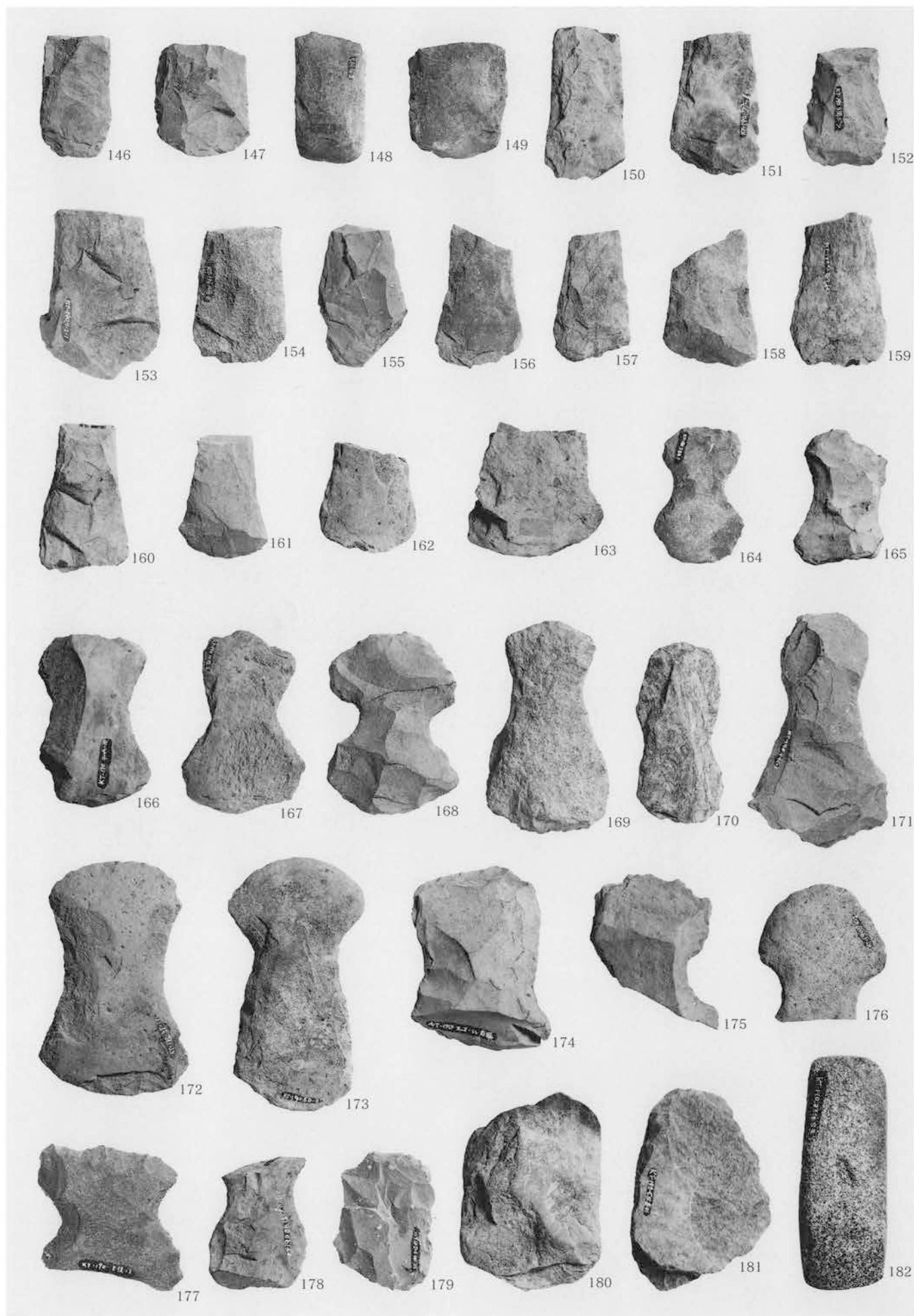
遺構外出土石器 (1)



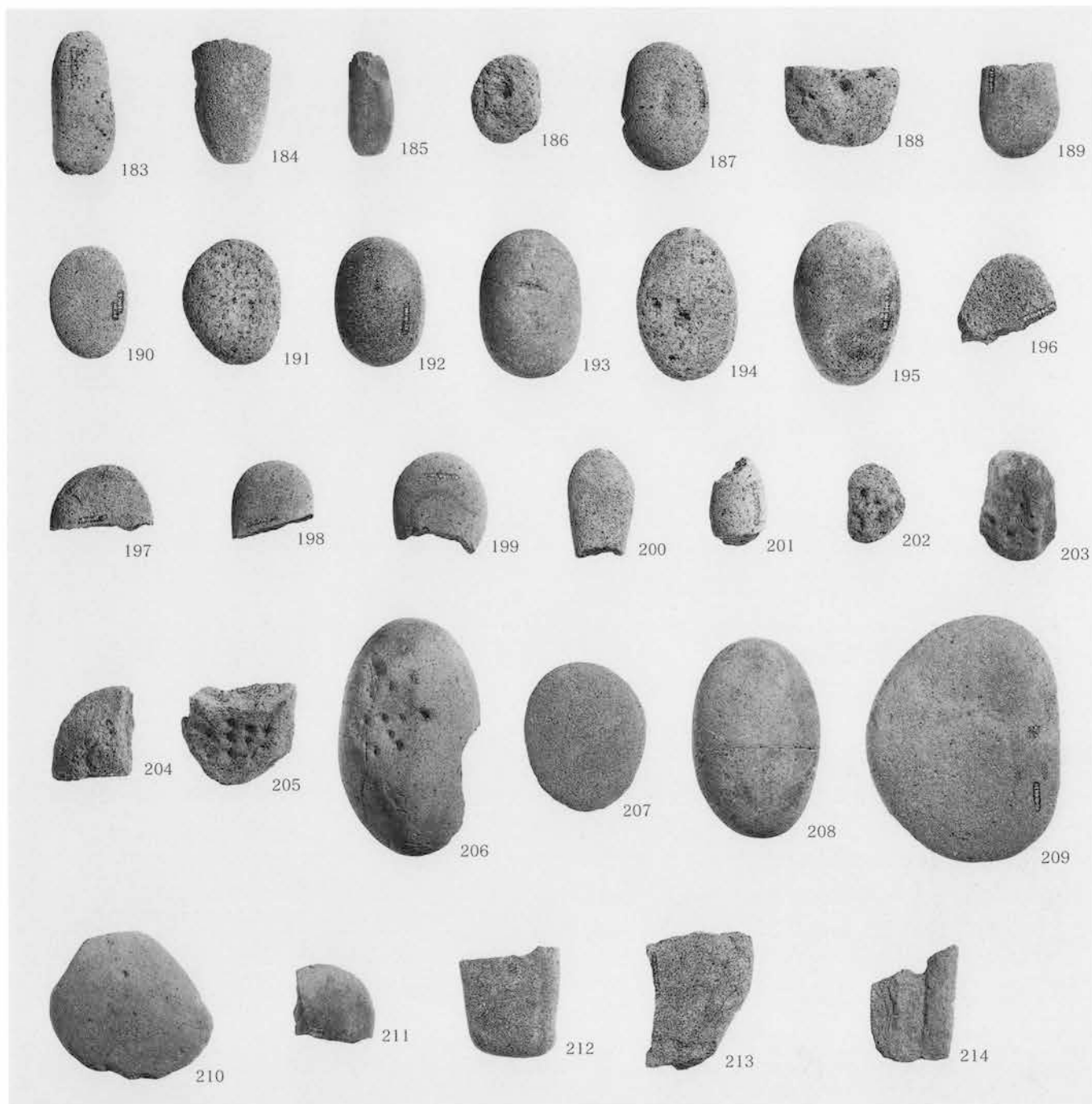
遺構外出土石器 (2)



遺構外出土石器 (3)



遺構外出土石器 (4)



遺構外出土石器 (5)

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第296集

波志江中野面遺跡(2)

—縄文時代編—

北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域
埋蔵文化財発掘調査報告書 第14集

平成14年3月26日印刷

平成14年3月26日発行

編集・発行／財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話 (0279) 52-2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／朝日印刷工業株式会社